

委託：独立行政法人日本芸術文化振興会委託事業「令和6年度文化芸術活動の動向把握に向けた基礎資料収集事業」

二〇三三年版 年鑑代表シナリオ集 目次

W i n n y

岸 松
建 本
太 優
朗 作

7

せかいのおきく

阪 本
本 順
治

41

渇水

及 川
章 太
郎

63

福田村事件

井 佐
上 伯
淳 俊
彦 道

91

ほつれる

加 藤
拓 也

131

さよなら ほやマン

庄 司
輝 秋

155

正欲 港 岳 彦 183

花腐し 荒 井 晴 彦 219

鬼太郎誕生 ゲゲゲの謎 吉 野 弘 幸 249

ほかげ 塚 本 晋 也 301

映画『窓ぎわのトットちゃん』 八 木 新 之 介 323

解説『23年鑑代表シナリオ集』出版委員会を終えて 向井康介 361

二〇一三年日本映画封切作品一覧 378

装丁
塚本友書

Winny

松本優作 岸建太朗

〈脚本家略歴〉

松本優作（まつもと ゆうさく）

1992年生まれ、兵庫県出身。ビジュアルアーツ専門学校大阪に入学し映画制作を始める。19年に自主映画『Noiseノイズ』で長編映画デビューを果たし、多数の海外映画祭に招待される。海外メディアからも高く評価され、ニューヨーク、サンフランシスコで劇場公開される。22年『ぜんぶ、ボクのせい』で満を持して商業映画デビューを果たし、本作は多数の国内映画賞にノミネートされ、主演の白鳥晴都が、第47回報知映画賞にて新人賞を受賞、第29回キネコ国際映画祭ではCIFEJ（国際子ども映画連盟）賞を受賞する。その他にドラマ『連続ドラマW OZU〜小津安二郎が描いた物語〜』（WOWOW）、『フクロウと呼ばれた男』（ディズニープラス）、『湘南純愛組！』（20 / Amazon prime）など多数の作品を手掛ける。最新作の映画『Winny』がロングランヒットを記録。多数の海外映画祭に招待され、主演の東出昌大が第33回日本映画批評家大賞にて主演男優賞を受賞する。



岸建太郎（きし けんたろう）

1973年、東京都生まれ。劇作家で演出家・作家の宮沢章夫氏に師事し、俳優として、演劇やドラマ、映画に出演する傍ら、2003年より映像を撮り始める。その後は脚本・撮影・監督を務めた「未来の記録（2010）」を数年に及ぶワークショップを経て完成させると、スキップDシネマ国際映画祭、トリノ国際映画祭、デンバー国際映画祭などで上映された。同じく脚本・撮影・監督を務めた短編「Hammock（2020）」が、大阪アジア映画祭で芳泉短編賞を受賞。近年では、映画やドラマ、ドキュメンタリーなどの撮影監督、脚本も多く手がけている。また、活動領域は国内だけでなく、ミャンマー（僕の帰る場所／白骨街道）、ベトナム（海辺の彼女たち）、イスラエ

ル・パレスチナ（Hammock）、ネパール（BagmatiRiver）など、国際共同製作映画にも多数参画している。



監督…松本優作

原案…朝日新聞2020年3月8

日記事 記者…渡辺淳基

製作…映画「Winny」製作委員会

制作プロダクション：Libertas

制作協力…and pictures

配給…KDDI ナカチカ

〈スタッフ〉

企画 古橋智史 and pictures

プロデューサー 伊藤主税

藤井宏二

撮影 岸建太郎

照明 玉川直人

録音 伊藤裕規

編集 田巻源太

音楽 Tie

田井千里

〈キャスト〉

金子勇

壇俊光

仙波敏郎

北村文也

秋田真志

金子勇姉

東出昌大

三浦貴大

吉岡秀隆

渡辺いつい

吹越満

吉田羊

黒画面

“This film is based on a true story”
事実をベースにした物語。

2 オープニング

真つ暗な部屋にキーボードのタイプ音が響いている。

T 「2002年4月1日5:35 東京都文京区」

部屋の周囲に雑然と積み上げられた、組み立て途中のPCやモニター、雑誌や本。部屋の中央には電動ベッドが置かれていて、そこに腰かける一人の男、金子勇(33)の背中が次第に見えてくる。

金子「……(一心不乱にタイピングをしている)……」

金子が操作するPC画面の47番目のスレッドには、

『……暇なんです、Frenetみたいだけど2chネラー向きのファイル共有ソフト作ってみるわ。もちろんWindowsネイティブな。少しまちな』の文字がある。

以降、プログラミングに集中する金子の姿に合わせて2ちゃんねる(以降、2ch)のスレッド上にWinyyの開発経過が次々と映し出されていく。

2chの掲示板にWinyy開発者の47氏(金子勇)を神と崇めるコメントが書き込まれると、金子はそれを満足気に眺めている。

Winyyに関する様々なニュース映像が映し出される。

その内容の賛否は多種多様である。

アナウンサーの声「今、大量の映画や音楽、ゲームなどがインターネット上で違法にやり取りされています。使われているのはWinyyと呼ばれるファイル交換ソフトで全国で200万人以上のユーザーがいると言われ(と続く)」

アナウンサーの声に合わせて、多くの人々がWinyyを起動し、映画や音楽などのデータをアップロードやダウンロードしている様子が映し出されていく。

自身が作成したプログラム画面を見つめ、ベッドのスイッチを押す金子。すると電動ベッドの背もたれがゆっくりと下降し、やがて天井に敷き詰められた天体写真が見えてくる。

部屋の天井が壮大な宇宙へ、そして、金子の脳内を表す映像に変化し——(CGで表現)

——メインタイトル『Winyy』

3 弁護士事務所・大会議室・夜

T 「2003年11月26日20:15 大阪府大阪市」

サイバー犯罪についての勉強会が開かれている。

白い壁に投影された資料映像を前に、熱弁を振るう弁護士の壇俊光(32)と数名の弁護士ら。

壇「……今注目を集めているP2P、つまりピアツーピア技術において、ピアはあくまで対等な存在であり、クライアントサーバー方式のように特定のコンピュータに処理が集中することはありません。そのため……」

弁護士の多くは退屈そうな表情を浮かべている。

壇、居眠りをしている桂充弘(55)を見つめ、

壇「桂先生。ちゃんと聞いてくださいよ! P2Pは近い将来、必ず世界を変えるような技術なんです。ほおーっとしとった時代には置いてかれますよ!!」

桂「そうは言うても(資料を見て)何がなんだか」

壇「こんなには必要最低限の知識ですか

ら」

と、見かねた弁護士・浜崎太一(32)が、浜崎「ピアツーピアは対等な立場いう意味なんやろ？ お前が上からどうすんねん」桂「ほんまや。世代の違うものもあるんやから……」

壇「〔無視〕いいですか。P2Pネットワークでは誰がそのデータを手に入れたかを解析することが難しくなり……」

4 南家・部屋・夜

金髪の南恭平(21)が、ゲームソフトをWindyにアップロードしている。

T「2003年11月27日2…15 愛媛県松山市」

南の手元には『ウィニー裏マニユアル完全版』と題された、Windyの悪用方法が紹介されている雑誌。アップロードしたゲームソフト名を掲示板に書き込むと、南を賞賛するコメントが続々と届けられる。

南「……(にやりと笑い)」

その側で南の彼女や友人たちがWindyでダウンロードした映画「自殺サークル」を見ながら騒いでいる。

5 金子家・外観・朝

2台の警察車両が停車し、警察官らが降りて来る。

タバコに火を付け、マンションを覗きように見上げる警部補の北村文也(55)。

6 同・部屋・朝

玄関の呼び鈴が幾度も鳴っている。電動ベッドで眠っていた金子がふと目を覚ます。

7 井田の家・玄関前・朝

チャイムを鳴らす男の手元。

田島了(40)が玄関の扉を開けると、警部補の田端直樹(45)が立っている。

T「8…25 群馬県高崎市」

田端「警察手帳を見せ」井田正弘はどこや？」

田島「……」

井田の声「だれ？」

部屋の奥から井田正弘(41)が現れる。

井田「……(田端の姿を見て) え？」

田端「井田本人やな？ ちょっと聞きたいことが……」

井田、慌てて逃走しベランダから飛び降りるが、待ち構えていた警察官に取り押さえられてしまう。

8 道・朝

路上に停車した一台のパトカー。

T「8…30 愛媛県松山市」

車内には生活安全部地域課の仙波敏郎(55)、部下の山本幸助(22)が座っている。と、無線が入り、

無線「……京都府警ハイタイ1から松山2」

仙波「松山2です、どうぞ」

無線「こちらゲンチャク、ガサ入れ始めますどうぞ」

仙波「松山2、了解。向かいます」

無線「なお、レッツがサンマイいる模様」

山本「なんなんでしょうね急に。まともな説明もないですし」

仙波「京都府警から、愛媛県警の生安に捜査協力要請がきたんやけん、捜一絡みの事件やないのは間違いないな」

山本「なるほど。ホシは大物なんですかね？」

仙波「詳細はわからん。随分前から追ったらしいが、どうも愛媛県警が過去に捜査したことのない事件みたいやな」

と、パトカーから降車する二人。

9 南家・部屋・朝

南たちが雑魚寝している。

と、玄関の呼び鈴で目覚める南。

南「……誰ぞ、こがいな時間に」

玄関のドアを開けると、京都府警の畑中健一(35)を含む数人の警察官と、仙波山本が立っている。

畑中「警察手帳を見せ」南恭平やな?」

南「……ですけど」

畑中「Winnieを使って違法アップロード及び違法でファイルダウンロードしていたな?」

南「……え……おれ、イヤ」

咄嗟に部屋の中へ逃げる南。それを追いつき押さえる畑中ら京都府警の警官。

目覚めた友人が騒乱している。

仙波「……(困惑した表情)」

10 金子家・部屋・朝

呼び鈴が引つ切り無しに鳴っている。

金子、渋々玄関の扉を開けると、警部補の北村と5人の警察官が立っている。

金子「……(驚いて) な、なんでしょう?」

北村「警察手帳を見せ」京都府警ハイテク犯罪対策室や。理由はわかってるな?」

北村、突然部屋に押し入ってくる。

金子「でも(釈然としない)……何の捜査なんですか?」

ガサ入れを始める警察官ら。

部屋には複数のPCが置かれている。

北村「Winnieが入ったパソコンはどれや?」

金子、PCを指差しながら、

金子「これと……これ。あとバックアップはここに。ああ、これにも入ってるか……」

北村「(苛立って) 現在使用してるパソコンは?」

金子「……えっと、それはどのような理由で……」

北村「ええからさつさとどれか答えろ!」

金子「……はあ」

金子、一台のノートパソコンを北村に手渡す。

北村がキーボードに触れると、Winnieの画面が見えてくる。

金子「ええつとこのパソコンには」

北村「(PCを操作し) なんでアップロードでけへんねん」

金子「これはダウンロード専用なので、アップロードは……」

北村「そんなわけないやろ!」

北村、PCを操作しデータをアップロードしようとするが、中々うまくいかない。

それを不安そうに見つめている金子。

11 高層ビルが並ぶ街の空撮・夜

T 「20:30 大阪府大阪市」

12 古びた洋食屋・夜

壇、浜崎、奥田哲也(32)がハンバーグ定食を食べながらビールを飲んでいると、店内のテレビからWinnieに関する報道が流れる。

アナウンサーA「Winnieネットワーク上で違法アップロードをしたとして、愛媛県松山市の無職の男性と群馬県高崎市の自営業の男性の2人を、著作権法違反の容疑で逮捕しました。容疑者らはゲームボーイアドバンス用ソフトなど26本のデータをインターネット上に公開し、不特定多数がダウンロードできる状態にし……(と続く)」

ニュースを見た他の客たちも一喜一憂している。

浜崎「(ニュースに映った犯人の顔を見つめ) どうとうWinnieで逮捕者が出たか……」

壇「ほんまに、どうしようもない奴らやな」

奥田「そのどうしようもない奴らの弁護、手伝つてくれへん?」

壇「え? 奥田先生がやるんですか?」

奥田「昼に連絡来てな。壇、力貸してくれへんかな。サイバー犯罪いうたら壇やろ」

壇「いやですよ。そんな奴らの弁護なんて意味ないです!」

13 本富士署・取り調べ室・夜

疲労した様子の金子がだらっと椅子に腰かけている。

刑事の秋山龍平(33)が、

秋山「なぜWinyを作ろうと思ったんです？」

金子「……Frenetっていう別のソフトウェアの技術が画期的だったので、それに感化されて作ったんです。……さっきから何回も同じこと言ってますけど……」

秋山「著作権侵害の蔓延が目的やったん違うんか？」

金子「ため息。……ですから……」

秋山「どうなんや！」

と、北村警部補が取調室に入ってくる。

北村「金子さん。まず、Winyのホームページを閉鎖してもらわんといけませんね」

金子「……それは別に構いませんが」

北村「ただね、それだけやと根本的な解決にはならへんのよ」

金子「……と言いますと？」

北村、椅子に座って、

北村「誓約書を書いてもらいたいんです」

金子「誓約書ですか」

北村「ええ。Winyの開発を辞めるっていう宣言をね」

金子「……はあ。はい。わかりました。僕に

出来ることはなんでも協力しますので」

北村、金子をじっと見て、

北村「そういうのって、書いたことありますか？」

金子「いや……」

14 古びた洋食屋・夜

奥田「壇、頼むわ。俺サイバー犯罪に詳しいな」

壇「もし開発者が逮捕されたら弁護しますよ。……まあ逮捕は絶対ないですけど」

浜崎「なんで言い切れんの」

壇、肉を切っていたナイフを取り、

壇「俺がこれで浜崎を(実演し)刺殺したとするやろ。誰が捕まる？」

浜崎「壇に決まってるやろ」

壇「せやろ。じゃあこのナイフ作った人に罪を問えるかっちゃう話や(と、ナイフで肉を切る)」

浜崎「確かにな……」

壇「技術に罪はない。結局は個々人の扱い方問題やから。あくまでこれは肉を食べるための道具であって」

奥田「確かアメリカでも話題になっとったな。似たような事件」

壇「ナップスター事件とか、ファイル共有ソフトの裁判がありましたけど、いずれも

開発者は逮捕されてませんね」

奥田「出る杭は打たれるってことか」

壇「出過ぎた杭は打たれないとも言いますよ」

浜崎「そんなすごいん？ Winy作った人って」

壇「ネットやと神のように崇められてる。Winyはまさに未来を先取した技術や……いつか世界を変えるような……」

15 本富士署・取り調べ室・夜

北村、金子に一枚の紙を手渡す。

北村「誓約書の見本ね。これを書き写したら帰ってええから」

金子「わかりました……」

金子、北村の書いた見本の通りに別紙に書き写していく。すると『私が開発し配布したWinyを不特定多数の者が利用して著作権法違反を行うことが出てくることは明確に分かっておりました』という文に差し掛かり、

金子「(手を止めて)……明確に分かってて……これは」

北村「ん？ そのまま書き写したらええだけやから」

金子「はあ。……あとで訂正ってできるんですか？」

北村「もちろん。時間もあれやし、とにかく早く書いて下さい」

金子「……はい」

その途中、「蔓延」を「満えん」と書き間違えるが、金子はそれに気づかない。

16 同・出口・夜

疲れ切った様子の金子がトボトボと出てくる。

金子、ふと立ち止まり、

金子「……」

17 松山東警察署・外観・朝

T 「6ヶ月後」

18 同・会計課エリア・朝

仙波、会議室から出てくると、永田英二(50)が若い警察官たちに領収書を書かせている。

仙波「……」

仙波に気付くと、永田はバツが悪そうな顔をしながら去ろうとする。

仙波「俺にはやれ言わんのか」

永田「……言うても、一度も書いたことないじゃろうが……(去る)」

若い警察官達も続いて去ってゆく。

仙波、一人残った山本に、

仙波「ええか。ニセ領収書を書いたら、私文書偽造で3ヶ月以上5年以下の罪になる。

それをもとに公文書を偽造すると、1年以上10年以下の罪や、詐欺や業務上横領は10年以下。それだけの罪を犯した者が、千円

の物を万引きした人間を捕まえて調書を取れるんか？」

山本「自分もよくないことやとは思うとります。でも皆がやつとることです」

仙波「ほしたらなんのためにするんや？」

山本「組織のためです」

仙波「組織のためやったら何をしてもええんか？」

山本「ほじゃけどどうすればええんです。言

いたいことあっても辛抱して従うのが普通の人やないですか。みんな仙波さんみたいに強くないんです。堪忍してください」

仙波「……」

19 金子家・外観・朝

2台の覆面パトカーが勢いよく家の前に停車する。

北村、勢いよく降車し、金子の部屋へと向かう。

20 同・中・朝

お菓子を食べながらプログラミングに集

中する金子。

と、玄関の扉をガンガンと叩く音が聞こえる。

金子、恐る恐る扉を開けると目の前に逮捕状を手にした北村の姿。

金子「(ハッとして)」

21 駅前・朝

手錠をかけられ北村ら数名の警察官とともに駅へと向かう金子。金子の周りはメディアの記者や野次馬で溢れている。困惑した表情の金子。

22 弁護士事務所・中・朝

事務作業をしている壇。

すると、Winny事件正犯弁護士奥田から電話が鳴る。

壇「(出て)もしもし」

奥田の声「壇、テレビ点けて」

テレビを点けると『ウィニー開発者逮捕』のタイトルと共に、作業用ベストを着た金子が京都府警と共に駅へと向かう姿が映っている。

アナウンサーB「……サイバー犯罪摘発の実績で全国一二を争う京都府警が、Winny開発者の金子勇容疑者を著作権法違反幫助の容疑で逮捕しました……」

壇 「(テレビを見て) まじか……」

奥田の声「言ったよな、開発者の弁護なら引き受けるって」

壇 「……ええ」

23 留置場・独居房・前

独居房の前で直立不動の金子。

警察官Aがドアの鍵を開ける。

金子、指示なく動こうとして、

警察官A「指示なく勝手に動くな!」

びくっと反応する金子。

金子「す、すみません……」

24 弁護士事務所・中(日替わり)

『Winy 開発者逮捕。善悪の彼岸』という見出しの新聞記事が机に置かれている。

壇、桂、浜崎、林良太(35)が、壇の作成した資料を見ている。

壇 「ご存知の通り、昨年11月27日に映画やゲームなどを違法アップロードした2名が逮捕されました。この日、金子さんの自宅

捜査も行われたんですが……」

浜崎「逮捕されなかったと」

桂 「正確には……できなかったんやろな」

桜井「お茶を出しながら」なんでですか?」

桂 「想定してた証拠が出なかった」

浜崎「証拠……なんやろ」

林 「警察は開発意図を問題にしていますよね?」

桂 「著作権侵害の蔓延目的な」

林 「そこはどうなんですか」

壇 「僕はないと思いますが」

林 「でも、そう思われてもおかしいような書き込みをしていますよね」

桂 「(見て) 著作権などの従来の概念が崩れ始めている。誰かがこの壁に穴をあければ……確かにこれは」

壇 「いやいや、資料19ページを開いてくださいよ。金子さんはユーザーに対して違法な使用をやめるようたびたび注意喚起しているじゃないですか」

林 「その二つって、金子さんが書いたことに間違いなんですか?」

壇 「……はい。おそらく」

林 「だとしたら矛盾してるようにも読めますね」

壇 「そこが誤解なんです。前後の文脈の流れもありますから。一部分を恣意的に取り上げて判断するのは……」

25 留置場・独居房・夕方

洗面所の前で顔を洗っている金子。

タオルで顔を拭き、メガネをかける。金子「……」

26 弁護士事務所・中・夜

取材依頼の電話対応をしている壇、浜崎、桂。

壇、電話を切るとすぐさま桜井がやってきて、

桜井「壇先生(電話が来た合図)」

壇、気だるそうに受話器を取る。

壇 「(冷たく) はい。壇ですが」

中島の声「もしもし。私プログラマーの中島と申します。Winy 事件の弁護士の方に相談がありまして」

壇 「……私が弁護を担当しています。失礼ですが、どういったご用件でしょうか?」

中島の声「実は、2ちゃんねるの住民が中心となって、金子さんの弁護費用を集めよう」と声が上がつっており、弁護士さん名義で口座開設した方が安心かと思ひまして……」

壇 「なるほど。ただ、今はそれどころでは……」

中島の声「(遮って) 2ちゃんねるの住民たちは、金子さんの力になりたいんです。是非ともご協力を……」

27 道路・車中

林が運転する車の助手席に座り、事件の

紙資料を見ている壇。

壇の声「……著作権などの従来の概念が崩れ始めている。お上の圧力で規制するののも一つの手だが、技術的に可能であれば誰かがこの壁に穴をあけてしまつて後ろに戻れなくなるはず……」

× × ×

(インサート)

独居房でひとり膝を抱えて座る金子。

× × ×

壇の声「……最終的には崩れるだけで、将来的には今とは別の著作権の概念が必要になると思う……」

資料を見つめる壇。

28 五条警察署・接見室

椅子に座り、金子を待つ壇と林。

するとアクリル板の向こうに、髪がボサボサで、疲労した様子の金子が入ってくる。

壇「はじめまして。弁護士壇です」

林「弁護士の林です」

金子「……金子です。わざわざありがとうございます」

壇「時間がないのでさっと現状を説明します。私たちは今、弁護士団を結成して事件の把握を急いでるところです。見慣れない方が

来てるかと思いますが、報告は受けてますので安心してください」

金子「……はあ」

壇「それと、ご自分が納得のいかない調査には絶対に署名しないでください。裁判で証拠となつてしまいますから」

金子「……」

林「金子さん、何か欲しいものはありますか？」

金子「……欲しいもの」

林「ええ。もしあれば」

金子「……パソコンですかね」

壇「……」

29 道・夕方

警察署付近の道を歩いている壇と林。

林「掴みどころのない感じでしたね。何考えてんのかからんというか」

壇「……林先生はやはり、蔓延目的と言われても仕方ないという見解ですか？」

林「学生時代の友人に政府関係のプログラマーがいますね……Winnie事件はサイバーテロやと言うってんで……」

壇「サイバーテロ？」

林「都市伝説の域を出ないですが、某国のスパイじゃないかという噂もあるらしく……」

壇「……」

30 裁判所・拘留質問室・夕方

裁判官A(45)から拘留質問を受けている金子。

裁判官A「あなたは著作権侵害の蔓延目的でWinnieを作ったのですか？」

金子「そんなこと一度も言つてませんよ」

裁判官A「しかし調査にそう書いてありますよね？」

金子「あれは、無理矢理書かされたんであつて」

困った表情の裁判官A。

31 五条警察署・取調室・夜

伊坂誠司(45)から取り調べを受けている金子。

伊坂、調書を金子の前に差し出し、伊坂「(威圧的に)ここに署名してもらえるか……」

調書には「裁判所での発言は嘘です。弁護士に入れ知恵されました」と書かれている。

その場をじつと動かない金子。

伊坂「どうなんや? おい。……金子!」

金子「……(黙秘)……」

32 弁護士事務所・中・朝

パソコンのモニターで2ちゃんねるのスクリーンショットを見ている壇。と、桜井が来て、
桜井「壇先生……記帳して来たんですけど……一冊じゃ足らなくて……」
壇「……?（通帳を受け取る）」

通帳には大勢の支援者からの振り込みが記帳され、その振り込み名義には『47シガンバレ』『マケルナ47』などのメッセージが書かれている。
振り込み総額は520万円に達している。

壇「額を見て……これは」

と、壇の携帯に浜崎から電話がある。

壇「出て」どうした?」

浜崎の声「壇、今日の接見報告書見た? 金子さん検察の調書に署名してしてるで」
壇「え?」

浜崎の声「弁護士に入れ知恵されたって。裁判所での発言は嘘やって書いてあつて……」

壇「……ったく」

33 五条警察・外観・夕方

34 同・接見室・夕方
アクリル板越しに向かい合う金子と壇。

壇「なんでご自分で署名してしまったんです?」

金子「いや……捜査には協力したほうが良いのかなと思ひまして……」

壇「協力? 出たら目にサインすることがですか?」

金子「でも、それは裁判所で訂正すれば」

壇「(遮って) 裁判所で訂正すれば信用してもらえると?」

金子「……はい」

壇「ため息 この国の裁判所はそんな甘くないですよ。白白調書に署名したら、全部自分が喋ったことになってしまいますから」

金子「でも、サインしても訂正できるんじゃない?」

壇「……」

壇「残念ながら出来ません」

金子「……ではどうすれば」

壇「闘うしかありません!」

壇、通帳を取り出し、アクリル板越しに見せる。

壇「これ見てください」

金子「……」

壇「2ちゃんねるの有志たちが支援金を集めてくれました。みんな金子さんの無罪を信じてます」

金子「……（アクリル板に近づき）」

壇、通帳の記帳ページをアクリル板に密着させ、

壇「……読めますか?」

金子「(じつと見て) はい。……47シガンバレ。マケルナ47。フレール47。47ハムザイ。イキロ47……」

次第に、金子の声が震えてくる。
そんな金子をじつと見つめる壇。

35 検察庁・取調室・朝

伊坂の取り調べを受けている金子。

伊坂「そろそろ、話してくれへんかな」

金子「……」

伊坂「さつさと罪を認めた方がええよ? 認めたらずく保釈されて自由の身や。ずつと閉じ込められるのは嫌やろ?」

金子は下を向いたまま目を逸らしている。

伊坂「おまえには責任感いもうんがないんか!!」

金子「……」

36 弁護士事務所・中・朝

事務所のテレビからWinnie事件の報道番組が流れ、著作権団体の代表が「Winnieは民主主義的な著作権制度を破壊する技術テロ、情報テロである」とコメントしている。それを見ている桂、浜

崎、桜井。

一方、金子の自宅から押収したアダルトビデオを並べ、変態的な性欲のためにWinnyを開発したとの記事を読んでいる壇。

桜井「報道に」まるでテロリスト扱いですね」

壇「(記事に) こっちはエロリストやな」

桜井「エロリスト?」

浜崎「押収したアダルトビデオを並べて撮影させて、これはやりすぎやで」

壇、記事を机に叩きつけて、

壇「……こんな横暴許してたら、日本の技術者は誰も新しいことにチャレンジしなくなってしまうですよ……」

桂「(壇に) いっそ検察に会いに行つた方がええんやないか?」

壇「……」

37 検察庁・外観

38 同・会議室

壇と桂、金子に関する新聞記事や雑誌を見せ、

壇「……捜査に関する情報が様々なメディアに掲載されてますよね。……誰がリークしてるんですか?」

伊坂「それはマスコミが勝手にしたことでしょう。うちには何の関係もありませんよ」

壇「でもこの写真、(金子が駅へ向かう写真) 事前に逮捕を知つてないと撮れないですよね?」

伊坂「私に聞かれなくても」

伊坂、少しも動揺せずに、

伊坂「……捜査機関は司法、行政などのあらゆる権限を有していますからねえ。私にはなんとも」

壇「では権限を有する立場の人間から流れるなら、それは『リーク』には当たらないこう仰るんですね?」

伊坂「もちろんリークではありません。捜査機関には、国家の安全を守る目的がありますので」

壇「もし本当にこの国の将来をお考えなら、金子氏は今すぐ釈放されるべきです」

伊坂「いったい何を根拠にそんなことを仰るんです」

壇「開発者の逮捕はあまりにも不当なことやからですよ」

伊坂「とは言つても、金子氏本人が裁判所での発言は嘘やと署名してるんですから」

壇「それはあなたがたが」

伊坂「遮つて」無理やり書かせたと仰りた

いんですか?」

伊坂、不敵な笑みを浮かべながら、

伊坂「ではしかるべき形で、法廷に証拠を出してください。なにも難しいことはない、正々堂々と争えばいいんです。この国は法治国家なんですから」

壇「……今の言葉、胸を張って言えますか?」

伊坂「……は?」

壇「この国の未来の技術者に、国民に、この逮捕勾留は正しかったと言えるのかと聞いてるんです!」

伊坂「……(時計を見て) すみませんが、次がありますので」

伊坂、その場を去っていく。

39 留置場・独居房・夜

呆然と便器に座っている金子。

そしてふと外を見ると、空には満月が輝いている。

金子「……」

× × ×

(回想)

屋上で星空を見つめる小学生時代の金子

(10) × × ×

本屋で天文雑誌『スカイウォッチャー』

を読んでいる金子。『宇宙を描く』と題したページを読みながら、そのソースコードを暗記している。

× × ×
電気屋に走ってくる金子。マイコン(NEC PC8001)にソースコードを打ち込んでいく。

× × ×
画面に実現した宇宙を眺めている金子。

と、電気屋の店員がやってきて、

店員「君、これ一人でつくったの？ すこいね。これ消さずに置いていてよ」

微笑みながら領く金子。

(回想終わり)

× × ×
月には雲がかかっている。

雲に隠れて行く月を、見つめる金子。

40 五条警察・接見室

金子と壇と林がアクリル板越しに会話をしている。

金子「……起訴されたらどうなるんですか？」

壇「保釈申立をすることになります。しかし現在の刑事司法では、なかなか保釈は認められません」

金子「ため息、僕のせいですね。僕が署名

しちゃったから」

壇「金子さんのせいじゃないです。あっちのやり方がおかしいんですから」

金子「やり方なら、僕にだって問題があります(俯く)」

壇「……金子さん？」
金子「壇さん……(顔を上げて) やっぱりパソコン触るの難しいですよね？」

壇「今は流石に」
金子「Winnyには課題が結構ありまして、その一つが掲示板の同期をとる方法なんです。デジタル認証を組み合わせて、管理者が管理するやり方について考えていたら、どうにもパソコンが欲しくなってますね」

壇「(考えて) なるほど。確かにその辺を整備すれば、著作権者にメリットのある方法が探れるかも知れませんね」

金子「まさに、そこがずっと課題だったんですか」

壇「……例えば金を払った人だけが暗号の鍵をもらうような方法とかはどうです？」

金子「それも考えてました。でも誰かが暗号を解いて、それが流通したら止めれないというデメリットもあって……あとは掲示板のデジタル認証を、ファイル共有に適用して管理する方法を考えたんですが……」

壇「あ。それ面白いですね。どうやるんですか」

すか？」

金子「掲示板の管理者がデジタル認証をつける方法なんですけど、管理者がこのファイルを消せって信号を送れば、みんな信用してファイルを削除してくれるんじゃないかと思う」

壇「……それって無視機能をノードに強制するってこと？ でもハッキングされへんかな」

金子「ハッキングも大丈夫だと思います。いや、……うーん。まてよ(思案を始める)」

林、二人の会話についていけない様子。

壇、そんな金子を微笑ましく見ている。

41 弁護士事務所・会議室

桂、浜崎、桜井が壇の話聞いてる。

壇「……金子さんは、ただそこに山があるから登ったんです」

桜井「……山？」
壇「Winnyは著作権侵害の蔓延なんかじゃなくて、むしろ著作権者の権利を守るために開発されたんですよ。話を聞いて確信しました。絶対に蔓延目的なんかやないです。実際、運用のビジョンもかなり細かく考えられて……」

と、そこに林から浜崎に電話がかかってくる。

浜崎、電話片手に、

浜崎「壇、金子さんが公判請求されたって！」

壇「……」

× × ×

じつと何かを考えている壇。

起訴状を見ている桂、浜崎、林、桜井。

桂「条文には、何が幫助なのかは書かれてないな」

浜崎「幫助か……そもそも判例が少ないからな……」

桜井「幫助ってどういう意味なんですか？」

桂「犯罪の手助けをしたってことや。幫助は刑法の歴史の中でもかなり解釈が難しいとされる分野で……」

壇、身支度を始めている。

桜井「どうしたんですか？」

壇「裁判所に掛け合って来る。なんとしても保釈を取らんと」

桜井「できるんですかそんなこと」

壇「わからんけど……でもとにかくやるだけやらんと」

と、突然桂も身支度を始める。

桜井「桂先生？」

桂「裁判になったら刑事事件のスペシャリストが必要やろ。……秋田先生とこ行ってくる」

林「ほんまですか！ それはすごい！」

壇「……秋田先生って、あの？」

浜崎「刑事事件で起訴された案件は、一生に一度勝てればいいと言われている。その中で秋田先生はなんと10回以上無罪を勝ち取っている。まさに伝説の弁護士や……」

壇「……」

桜井「どんな人やろ……？」

42 喫茶店・中

資料を手にタバコを吸う弁護士の秋田真志(52)。

ノートにはメモが書かれている。

メモ「裁判の要点が明確かつ簡潔でないことが問題」

43 留置所・独房・夕

新聞の夕刊を読んでいる金子。しかし、自分の記事が黒く塗りつぶされている為、何が書かれているか分からない。

と、ドア横の小扉が開き、食事が乗ったトレーが配膳される。

金子、そのトレーを取ると、

警察官A「新聞、見たやろ？」

金子「……ああ、はい」

警察官A「この仕事して随分経つけど、こんな真つ黒いのは初めてやで。他の部屋でも

噂になってんで。どんな大物が来たんやって(笑)」

金子「……」

警察官A「(小声で) 実は俺もWinnyには世話になってな……ほら無修正のエロ画像ダウンロードし放題やろ？」

金子「……はあ」

44 裁判所・会議室・夕方

保釈担当の増田秀樹(45) 裁判官と面談する壇。

壇「裁判官には是非、保釈を認めていただきますたいのですが」

増田「ただ逃亡の恐れもありますから、慎重に検討しないと」

壇「彼は逃げる必要などありません！ 彼を応援するために寄付も集まっています！ もし逃亡の恐れがあるというなら、京都のホテルを1年間借りることも出来ます！」

壇の勢いに圧倒される増田。

45 拘置所・前・夜(日替わり)

車2台で拘置所に入っていく壇、浜崎、桂を撮影用のライトが照らしている。

大勢のマスコミがシャッターチャンスを狙っている。

46 同・ガレージ・夜

ガレージに到着する壇、浜崎、桂。
外から怒号が飛んでくる。

カメラマンAの声「なんで撮らせへんのや！」
浜崎「これやばいな……」

すると、ボロボロのカバンを持った金子
がやってきて空を見上げている。

壇「気が付いて」金子さん？」

金子「……どうも」

壇「なにやってるんですか！ 行きます
よ！ いいですか、私が囃になりますので
……」

× × ×

2台の車が外へ出ると、最初の一台（壇
が運転）をマスコミが取り囲む。

その隙に、金子が乗る2台目の車が出て
いく。

47 京都のホテル・入口・夜

弁護団の車がホテルの駐車場に到着する。

48 同・部屋・夜

ホテルの部屋には金子、壇、桂、浜崎の
姿。

金子「やです！ パソコンに触れないなら、
留置場の中と同じじゃないですか！」

壇「そうじゃなくて、プログラム開発をした

らダメやと言ってるんです」

金子「……プログラミングをやめろだなんて、
僕に死ねっていつてるようなもんですよ
……」

壇「金子さん……」

浜崎「金子さん、これ面談禁止リストなんで
すが……」

金子、リストを受け取り、目を通す。

浜崎「ここに記入されてる人にはくれぐれも
連絡取らないようお願いします」

金子「……姉にもですか？ 心配してると思
うので姉だけには連絡したいのですが」

浜崎「申し訳ありませんが……連絡は控えて
いただけると……」

金子「……」

金子をじつと見つめる壇。

49 和食料理屋・中

食事をしている金子、壇、桂、桜井。

金子「留置場は窓が小さくてですね。ほとん
ど空が見れませんでしたから」

桜井「そんなに飛行機が好きなんですか？」

金子「はい。前に戦闘機のヘッドマウント
ディスプレイを表示するプログラムが作り
たくて、シュミレータを作ったり、F15の
主翼と尾翼をリアルに計算したんですよ。
ネコフライトって言うんですけど……」

桜井「ネコフライト？ かわいい！」

金子「お見せしましょうか？……って、パソ
コンがない（笑）」

桂「金子くん、調子いいねえ」
金子「いや。久々の娯楽なのでつい。ハハ
ハ」

一同、美味しそうに食べる金子を見つめ
る。

50 弁護士事務所・会議室（日替わり）

秋田弁護士を含めた弁護団が会議をして
いる。

壇「検察の言う、犯罪の幫助をしたという
部分をどう弾劾するかですが……秋田先生、
どう思われますか？」

秋田「幫助はただの言葉ですよ」

壇「言葉？」

秋田「問題は、彼らがなぜ金子さんを逮捕し
たかです。その裏の意図を理解しないと
……結局は検察の掌の上で遊ばれるだけにな
ってしまふ」

壇「……裏の意図」

秋田「壇君。そもそも逮捕までの動きが性急
すぎると思いませんか？」

壇「……確かに。……でも、仮に裏の意図
を掴んだとして、どうすれば？」

秋田「性急さは命取りですよ。……待つんで

す。敵が尻尾を見せるまで」
壇「……」

51 東京大学・外観・夕方

52 東京大学・廊下・夕方

歩いている金子。
と、顔見知りの女性職員が向こうから歩いてくる。

金子「笑顔で」あ、お久しぶりです」

女性職員、顔を背けてそのまま歩き去ってしまふ。

金子「……」

53 同・応接室・夕方

職員の男と話をしている金子。

職員の男「……力になれなくて本当に申し訳ない……」

デスクの上には退職届けの用紙が置かれている。

金子「……」

54 金子の家・夜

帰ってくる金子。

部屋は逮捕当時のまま散乱しており、パソコンは全て没収されている。

金子、ふと辺りを見渡すと、古びた段

ボール箱を発見する。その箱を開けてみると、中から子供時代の姉とのツーショット写真や、子供時代に読んでいた雑誌『スカイウォッチャー』、そして古いカメラが入っている。

それぞれを取り出し、懐かしそうに眺める金子。

55 交番・詰所・夜

愛媛県警の裏金が表沙汰となったニュース番組。

元大洲署の会計課長成田浩二（仮名）が話している。

成田「（顔を隠し）実在しない捜査協力者の名前を使ったニセ領収書によって裏金作りが行われてきました。いつか暴露してやろう思つて証拠品を持ち出しました……」
仙波、ニュース番組をじつと見つめている。

56 点描

壇、そのニュースを見ながら、ふと物思ひにふける。

× × ×
コンビニで買い物をしている金子。ふとWinnie事件に関する週刊誌が目に入る。

カメラで夕日を撮影している金子。

× × ×
金子、姉に電話をかけようとするが、途中で思いとどまる。

57 弁護士事務所・会議室

T 「2ヶ月後」

弁護団との打ち合わせが行われている。金子の首にはストラップに繋がったカメラ。

壇 「あれ、金子さんそのカメラどうしたんですか？」

金子「ああこれ、昔姉にもらったカメラを偶然発見しまして。いいでしょう？ 最近散歩しながら夕日を撮影するのにハマってるんです（笑）」

壇 「（呆れ）そうですか……」
金子「見ますか？」

金子、鞆から現像した夕日の写真をデスクに並べ、

金子「雲の動きを計算して、夕陽が出るポイントを探しますが、これがけっこう奥深くですね……」

桜井「なんか楽しそうですね」

金子、新たに鞆から氣象学の本を取り出し力説を始める。

桂 「（壇に耳打ちし）大学を辞職させられ

壇 「……」
たのに、よく呑気でいられるな」

58 和食料理屋・中・夜

秋刀魚定食を食べている壇と金子。
金子「秋刀魚を食べるのに手こずっている。」

金子「秋刀魚の食べ方がわからないんです」

壇 「え？ どういうこと？」

金子「食べにくいものは基本苦手なんですよね(笑)」

壇 「なんですかそれは？」

金子「ご飯3原則ですよ。その1辛くない。その2熱くない。その3食べにくい」

壇 「……金子さんのお嫁さんになる人は大変ですね……」

金子「そうですか？」

壇 「まあでも、肉じゃがとカレーだけ作ればええから楽か」

壇は秋刀魚の頭としっぽを外しガジガジと食らう。

壇 「男は、骨ごと食う！」

金子「はあ……すごい」

金子も壇と同じように骨ごと秋刀魚を食らう。

勢いよく秋刀魚を食べる2人。

壇 「……私は、金子さんのために、自分の

人生の5年間を使うので、金子さんはこれから日本で生まれてくる技術者の為に、残りの人生を使って欲しいです……」

ゆつくりと顔を上げて壇を見つめる金子。

59 弁護士事務所・会議室

スーツ姿の金子が鏡前に立ち、桜井にネクタイを直してもらっている。

桜井「どうです？ シックなほうが似合う気がします」

弁護団、覗きこむように金子を見て、

桂 「うん。いいよ。いい」

緊張気味の金子。

壇 「しかし、顔だけ見るとイケメンやのになあ」

金子「それ、どういう意味ですか？」
笑う一同。

60 京都地裁・前

裁判所へ向かう金子と弁護団。

入り口付近は多くの傍聴希望者で溢れている。

意を決して中へと入って行く金子と弁護団。

61 同・中(※第1回公判)

着席する壇と弁護団。すると公判担当の

検事である宮田良太(33)の横に伊坂が座っている。

壇 「あれ、伊坂検事じゃないですか？」

秋田「起訴検事の公判立会や。普通は来えへんから、有罪への意欲が相当強いんやろう」

法廷は殺気だっている。

書記官「ご起立ください」

一同、起立する。

裁判長の比嘉誠(59)が入って来ると一同礼をする。

比嘉「それでは開廷します。被告人は証言台前に立つてください」

証言台前の前に立つ金子。

比嘉「名前は何と言いますか」

金子「金子勇です」

比嘉「これからあなたに著作権法違反幫助被告事件についての審理を行います。検察官が起訴状の公訴事実を読みますからよく聞いてください」

宮田「公訴事実。被告人は送受信用プログラム機能を有するファイル共有ソフトWindyを制作し、その改良を重ねながら

……」

証言台前の前に立つ金子。

比嘉「検察官が読み上げた公訴事実に間違い

ありますか？」

秋田「処罰意思の内容が不明確です。

Winnyそのものが違法ということですか？ 釈明を求めます！」

宮田「釈明の必要はありません」

秋田「開発行為が違法というならば、これは世界的にも例を見ません。また違法とする規定について一切主張がないですが、その点は如何ですか」

宮田「釈明の必要はありません」

秋田「本件はソフト開発者が逮捕され開発行為が違法かどうか、それが世界的に注目されているというのに、それを明らかにしない検察官の態度はいささか疑問です。重ねて釈明を求めます」

壇「そこが明らかにならないと、プログラマーたちを萎縮させてソフト開発環境が根底から破壊されてしまいます！」

宮田「本日付の釈明書記載第一の通りです」

頑なな宮田の態度にいらっとする壇。

比嘉「検察官が釈明しない以上、当裁判所としてはこのまま審理を進めます。公訴事実についての被告人の意見はいかがですか？」
下を向いていた金子が、ゆっくりと顔を挙げる。

一同が、金子に注目している。

金子「……Winnyの開発公開は技術的な実

験であって、著作権侵害の手助けをするという意図ではありません。Winnyの開発は、日本の為になると思つてやったことですから、社会に迷惑を掛けるためにやったのではないです。私は無罪です。金子勇」

62 弁護士事務所・会議室・夕方
作戦会議をしている弁護士団。

浜崎「検察にあそこまで隠されると……どうしようもないな」

林「確かに。いくら帮助の範囲が難しい言うても……」

桂「いや、実際はよおわかってないだけでも知れんで」

浜崎「しかし、仮にもハイテク犯罪対策室なんですから」

桂「そやからや。馬鹿がバレたら面子が保たれへんやろ。秋田先生はどう思います？」

秋田「……たしか、金子さんの逮捕前に警察のパソコンがウィルスに感染しましたよね」

壇「はい。警察職員にWinnyのユーザーがいたらしく、そのパソコンから警察のネットワークに侵入したんです。詳しい内容はまだ未発表ですが」

秋田「漏洩がリークされてから金子さんが逮捕される2ヶ月間、警察はどうしてたんで

しょうね」

壇「……」

63 電気屋・夕方

スーツ姿で店内を歩く金子。店頭にはお試し用のノートPCが並んでいる。そこには「Winny 使用禁止」と注意書きの張り紙。

金子「……」

64 金子家・部屋・夜

新品のノートPCを見つめている金子。側にはPCの空箱が置いてある。
金子、Winnyのプログラムを開き、手を加えようと思うとどまる。

65 交番・詰所

詰所のテレビではニュースが流れている。それを見ている仙波と山本。

アナウンサーC「先日、元警察官が告発した裏金問題に関して、愛媛県警は『二七領収書を使った捜査協力者への謝礼の支払いはあったが、これは会計処理上のミスで、使途は適正であり私的流用はなかった』と発表し……」

山本「(新聞を手に) 新聞にも同じような記事が書いてありました」

仙波「どう思った？」

山本「……いかなと思います。やけど……正直どうしてええかわからんです。実際、自分もやりよることやし」

仙波「……」

山本「仙波さんは、なんで警察辞めんのですか」

仙波「……山本。（じつと見つめ）辞めるのは簡単なことやぞ」

山本「……」

66 弁護士事務所・会議室・夕方

愛媛県警に関する新聞記事を見つめる弁護士団。

浜崎「……警察内部にもいるってことか。真実を明らかにしたい人が」

桜井「（独り言のように）どうしてるんやろうその人」

一同、桜井を見る。

桜井「だって、怖いじゃないですか。大きなものと……一人で戦ってるんですよ」

壇「……」

事務所に重い空気が流れる。

林「その人が制裁を受けないことを願うばかりですね……」

浜崎「まさに、出る杭は打たれる言うことですね……」

秋田「（浜崎に）杭を叩いたことありますか？」

浜崎「え？……杭って、あの杭ですか？」

秋田「うちの実家がみかん農家やってましてね。鹿対策用の柵を作るために、毎年杭を叩くんですよ」

一同、秋田を見る。

秋田「杭は一人じゃ打ち込めません。打つ人押さえる人、指示する人、各パートが一体になって初めて打ち込まれるんです」

壇「（ふと思いつき）林さん、捜査関係者の名前ってわかりますか？」

林「ああ、ちょっと待ってください。北村文也、畑中健……田畑直樹……」

ホワイトボードに名前を書いていく壇。

壇「……捜査を指示したリーダーは誰やっただですかね」

桂「リーダーな……」

67 京都地裁・中（※第2〜3回公判）

畑中の証人尋問が行われている。

宮田「（証人の近くに寄り）証人は被告人金子勇の家から押収したパソコンの中に入っていた動画や画像ファイルについて詳しく確認し、この報告書にまとめましたね？」

畑中「はい」

宮田「実際にどうやって確認作業をされたん

ですか」

畑中「Winnyでダウンロードしたと思えるものを抽出しました」

宮田「その中にどんなデータがありましたか？」

畑中「『お尻プリンセス』というアダルトゲームでした」

傍聴席から笑い声が聞こえてくる。
恥ずかしそうに俯く金子と、金子を見つめる壇。

× × ×

壇「捜査方針というのは、ハイテク犯罪対策室の会議で決めるんですか」

畑中「当然、事件に関係する捜査員が行います」

壇「誰か中心的なメンバーがおられたのですか？」

畑中「捜査会議には全員が参加し、意見を出し合い方向性を決めます」

壇「ということは、捜査内容の決定権を持つリーダーがいたのではないですか？」

宮田「裁判長。異議があります。主尋問の範囲から外れています！」

秋田「これが不相当な尋問やと言われたら、捜査についての質問はできなくなります」

裁判長「もう捜査についての尋問は打ち切ってください」

俯く金子と壇。

68 弁護士事務所・会議室・夜

反省会をしている弁護士。

秋田は二人、ノートに何か書いている。

壇 「つたく、全部うやむやにしゃがって……」

秋田「そもそもこの事件がおかしいのは、警察が原告になっていることですよ」

林 「ですよ。著作権侵害は基本的に親告罪であって、被害に対する賠償訴訟が通例なのに」

桂 「権力による犯罪行為やな」

浜崎「こんな横暴許したら、絶対いけないですわ」

壇 「まさにジョージ・オーウェルの1984の世界の到来ですね……」

桜井「1984？」

桂 「桜井くん。(咳払い) 1984ってのはね(得意げに)……来るべき監視社会を予言したような小説で……」

壇 「遮って」では次の議題に移りましょうか」

桂 「ほらそこー(壇に) 発言の自由を奪わんといてよー」
一同、笑い。

69 新聞社・応接室スペース

話をしている新聞記者の松山(40)と仙波。

仙波、県警の発表の新聞記事を鞆から取り出し、

仙波「松山さん。県警が出した報告書はデータですから、もつとちゃんと取材してもらえませんか」

松山「(不服そうに) 県警の発表を載せただけですけど。それに、それが正しいとは一言も言っておりません」

仙波「それが真実かどうかを調べるのが記者の仕事やないんですか？」

松山「仙波さん。……いい加減察してください(去る)」

仙波「……」

70 京都地裁・中(※第7回公判)

北村の尋問が行われている。

宮田「北村さんは京都府警の警察官ですね」

北村「はい」

宮田「Winnieのユーザーを検査することになった経緯を教えてください」

北村「著作権保護団体の人たちが、Winnieによって、映画や音楽が自由に共有されるようになり困ると言っておられたので、何とかしないといけないと思いました」

北村をじつと見つめる金子。

× × ×

弁護側の反対尋問が行われている。

壇 「11月27日の捜査の際に、あなたに対して具体的に指示を出した人はいいますか」

北村「田端班長です」

壇 「捜査の手法に関しては、田端警部補があなたに指示をなされたという理解で宜しいですか？」

北村「……捜査の手法に関しては……一任されておりました」

壇 「(驚き) 一任……今回の捜査に関してあなたが方法や方向性を決めていたんですか」

北村「まあ、そういうことになります」

秋田と桂、浜崎が目を含ませる。

壇 「話は変わりますが、当時のあなたは、金子さんを被疑者にするには出来ないという認識やったんですね」

北村「私は、金子君は単純に作ったただけで使った人が悪い人という認識でした」

金子、北村をじつと見つめている。

壇 「しかしあなたは、違法アップロードをした被疑者宅ではなく、金子さんの自宅に行きましたね」

北村「送受信機能があるかを確認するためです。あとWinnieのホームページの閉鎖を

お願いする予定でしたから」

壇 「しかしそれが目的なら、自宅まで行く必要はありますか」

北村 「ですから、ホームページの閉鎖を本人にお願うするために私が直接伺ったんです。そしたら彼が取調べ室で……」

壇 「(遮って) もう結構です。質問にだけ答えてください」

不服そうな北村の表情に疑問を感じる壇。

× × ×

林 「被告人はもとも参考人であり、あなたは搜索をやったときも本人からの質問に関しあくまで参考人であって被疑者ではないと。事情聴取であって取調べではないということを、繰り返し伝えたということですが」

北村 「もちろんです」

林 「その後、被疑者になったわけですね」

北村 「はい」

林 「それはなぜですか？ 捜査会議とかで決まったということですか」

壇 林の質問に呆れた表情。

北村 「いいえ。事情聴取はWinnyの機能やシステムについて聞く予定やったんですが、彼が取調べ室で、著作権侵害を蔓延させて著作権の枠組を変えるんやと言いだめたんで、自分としたら、どうしたらいいのかと

悩みましてね……」

表情が曇る壇ら弁護団。

北村をじっと睨みつける金子。

71 同・入口・夕方

マスコミが殺到している。

弁護士らが金子を守ろうと必死でマスコミを振り払おうとしている。

記者A 「金子被告は著作権侵害を蔓延させてネット社会に革命を起こそうと考えていたのでしょうか！」

記者B 「著作権侵害が目的で被告人はWinnyを作ったというのは本当でしょうか！」

壇 「それは北村警部補の嘘です。著作権侵害蔓延目的でWinnyを作るってそんなアホな方法ありえんでしょ」

記者の発言に対して必死で否定をする壇。困惑した表情の金子。

× × ×

裁判所裏の駐車場。

車の前に集まる弁護団。金子は車の中でその様子を見つめている。

壇 「素人みたいな尋問せんといってくださいよ！」

林 「す、すみません……」

壇 「せっかく北村がリーダーやって突き止

めたのに！」

秋田 「林さん。尋問のポイントを見出して、血肉になるまで繰り返し反芻する。尋問はライブですから。練習が命」

林 「……おっしゃる通りです」

秋田 「例えば恋愛の目的はなんですか？ あなたが誰かを好きだ、その気持ちを伝えることですか？」

林 「……それもあると思いますけど」

秋田 「なら考え方を改めてください。目的は「相手に好きになってもらう」ことです。そのためにはなんにも、自分の気持ちを伝えることだけが答えやない」

林 「……なるほど。相手に好きやと言わせるわけですね」

秋田 「尋問に置き換えれば、嘘をついている人間に、「わたしが嘘をつきました」と言わせるんです」

林 「……しかし、そんなことが……」

秋田、なにかメモしながら一同から離れる。

桂 「(小声で)今メモしてるやろ。あれはマインドマップ言うてな」

壇 「……何が書かれてるんですか？」

桂 「いや……それがさっぱりわからんや」

ノートに何かメモしている秋田。

72 弁護士事務所・会議室・夜

尋問の対策について会議中の弁護士。

秋田のマインドマップには記号や言葉が並んでいる。

壇 「当初の予定に反して、次の尋問が最大の山場になりました。ぜひ、秋田先生に尋問をお願いしたいと思います」

秋田 「……まずは、金子さんに会って詳細を聞きましょうか」

壇 「はい！ さっそく明日会いに行きましょう」

秋田、金子が記入した申述書を目を通す。

秋田 「しかしこれ、本当に金子さん本人が書いたんですかね？」

壇 「え？」

秋田 「申述書を見せ」 普段蔓延って言葉使いますかね？」

壇 「まんえん？」

秋田 「いや、だってメディアの記事はこればかりでしょ？ 彼ら、この言葉が好きやなあと思わしてね」

73 喫茶店・店内

壇と秋田が金子と打ち合わせをしている。秋田、金子が書いた申述書を金子に見せ

て、

秋田 「警察にはなんて言われて取り調べを受けたんですか？」

金子 「警察からWinnyの開発を辞めるっていう誓約書を書けと言われたので、良いですって言ったたら、北村さんが他の書類をもつてきてこれを書き写すように言われたんです」

秋田 「他の書類？」

金子 「北村さんが書いたのを写したんです。でも『著作権法違反を行う者が出てくるのは明確にわかっていた』と書き写したあたりから、さすがにこれは違うって言ったらあとで訂正できるからさっさと書けって言われたんです。私、てっきり誓約書ってそういうもののかなと思って」

壇 「え？ 北村に無理やり作文させられたんですか！」

金子 「は、はい」

壇 「騒然とする一同。」

壇 「なんでそんな大切なことを早く言わないんですか！」

金子 「そう言われましても……」

壇 「呆れて」……金子さん、勘弁してくださいよ」

金子 「ハハハ、すみません」

秋田 「そういうええ、蔓延の【蔓】が、満タン

の【満】になってるんやけど、これも写したの？」

金子 「蔓延？ ああ、蔓延って言葉普段使わないので、よく見ないで書き写していたら漢字間違えちゃって。アハハ」

秋田 「……」

壇 「稀代の天才プログラマー金子さんが漢字書けへんですか」

金子 「そう言われましても……でもそのあと、伊坂検事の取り調べがあつたんですけど、何を話しても無駄だと思ったので黙秘しました」

秋田 「ああ、自分の意思で黙秘を」

金子 「はい……なんとなく」

秋田、金子が書いた申述書をじっと見つめ、

秋田 「あとこれ、誓約書やなくて申述書やね」

金子 「え？ 誓約書じゃないんですか？」

壇 「誓約書という口実で、北村が申述書のフォーマットに書かせたことでしょいうね」

秋田 「……ほう（メモに書き）なるほどねえ……」

壇、秋田のメモを覗くと、乱雑に字が書かれてるのが見える。

壇、不安な表情を浮かべ——

74 京都地裁・中(第8回公判)

北村「あの壇という弁護士が私のことを嘘つき呼ばわりしているのは非常識です!!」
壇を睨みつける北村、それを平然と受け流す壇。

比嘉「静肅にしてください。それでは反対尋問をお願いします」

秋田、ゆっくりと歩きながら北村の前に立つ。

それを緊張して見守る金子と弁護士。

秋田「11月27日のことですけども、この日一斉の強制捜査に乗り出したわけですね」

北村「はい」

秋田「金子さんの自宅の強制捜査の指揮をしたのもあなたである、そういう理解でよろしいですか」

北村「そうです」

秋田「であるなら、金子さんがどういう人物であるか、著作権法上、プログラム開発者に対してどういう問題が生じるか、事前調査されていますよね」

北村「私はしてませんが、他のものがしたと思います」

秋田「あなた自身は、調べようとはしなかった」

北村「はい。特に」

秋田「しかし、金子さんはあなたの捜査対象であるのに、そんなにあいまいな関心だったんですか」

北村「……他の逮捕者のことで頭が一杯だったんだと思います」

秋田「申述書について、お聞きします」

北村「はい」

秋田「申述書を手」これは、全て金子さんが任意で書いたのですか?」

北村「いや……それは違います」

秋田「どこが違うの?」

壇 桂、浜崎は目を合わせる。

北村「本人が、普段字は書かないのでサンプルはありませんかと聞いたわけです。でもサンプルはないので見本を書いてあげようかということで、私が書きました」

金子と壇、北村の反応を食い入るように見る。

検察官がざわつき始める。

秋田「ちなみに、その見本は今でもお持ちでしょうか」

北村「恐らくもう廃棄したと思いますけど」

秋田「金子さんの証言やと、誓約書という名前でしたか」

北村「金子くんはそういうふうに表示してたみたいです」

秋田「申述書という言葉にされたのは、あな

たですよ」

北村「ええ」

秋田「(申述書を見せ) その時のもので間違いないですよ」

北村「はい。間違いありません」

秋田「この書式、供述調書と同じようになっていますね」

北村「(動揺した様子で) そう……かもしれないね……」

検察側がいよいよ焦っている。

宮田「異議があります。先ほど乙号証も示しております」

秋田「これは検証にかかわる質問です。別にこの点に関して検察官が何か嫌なことがあるわけじゃないでしょう」

裁判長「では、できる限りの端的に簡潔に聞いてください」

秋田「1枚目の真ん中を見てください『インターネット上に満えん』という言葉が出てくるの、分かりますか」

北村「はい」

秋田「この表現は金子さんが使った言葉ですか」

北村「これはそうだと思います」

北村をじつと見つめる金子。

秋田「……蔓延というのは非常に珍しい表現であるという認識はお持ちですか」

北村「いえ、そうは思いませんが」

秋田、北村の斜め後ろに回り込み、

秋田「前回の証言で、蔓延という言葉を金子さんが言っていた記憶がある」と仰いました、それはどの場面ですか」

北村「……取調べの最中です。彼の主旨を見極めるために10分ぐらいそこにおりましたので」

秋田「あなたは、2ちゃんねるの金子さんの発言を見たことはあったわけでしょう」

北村「はい」

秋田「その中に蔓延という言葉が一回でも出てきましたか」

動揺する北村を見つめる金子、壇。

北村「……いや、覚えがないですね」

秋田「覚えがないですか」

北村「……はい」

秋田「あなた、11月27日以前に、警察内部で蔓延という言葉を使ったのではないですか」

北村「焦って」それはいいです!!」

秋田「あなたは前回、著作権団体と接触していたことを認めておられますよね」

北村「ええ」

秋田「書類を出し」平成15年11月4日、京都府五条警察で、著作権協会の方の調書が作成されているようですが、ご記憶あ

りますか」

北村「覚えてますよ」

秋田「6ページの上に『著作権侵害が蔓延している状況となったわけです』という記載がありますよね」

北村「はい……ありますね」

秋田、新たな書類を示し、

秋田「平成15年11月11日に作成されたこの調書の5ページ『著作権侵害が蔓延している状況』という記載がありますね」

北村「はい」

秋田「ということ、あなたは著作権侵害が蔓延しているという表現、11月27日以前にも耳にしていたのではないですか？」

北村の顔が青ざめる。検察は観念した様子。

固唾を飲んで北村を見つめる金子と壇。

北村「いや……（焦って）私は……そういうことは聞いておりません！ その調書を見たのも、そういう調べをしたというのも、今、ここで初めて知りました！」

裁判長「（不服そうに）もうこの程度でいいんじゃないかと思えますので、次の質問をしてください」

動揺した北村の表情。

秋田、ふと金子と壇を見て僅かに微笑み

——

75 和食料理屋・中・夜

弁護団の忘年会が開かれている。

桜井「秋田先生すごい！ どうやって北村に作文やつて認めさせたんですか？」

秋田「蔓延という言葉は金子くんの言葉ではないわけやから。実際、捜査報告書とか著作権協会の供述調書を読んでもみると、そんなに著作権侵害の蔓延状態という言葉がしょっちゅう出てきてたんよ。要するに北村は、それをコピーしたことがわかったんです」

桂「蔓延という言葉が、警察内部で蔓延してた」と

浜崎「よくそんなこと気がつきましたね」

秋田「そこを突いて、『蔓延は金子くんの言葉やないし警察の中で使ってませんか』って言ったら、北村は否定したわけです。守りに入る人は嘘をつきますからね。まんまと罠にはまったわけ」

浜崎「ついつい嘘をついてしまうように追いつめていくわけですね」

秋田「そう。わざと嘘つかしてピン止めてそこに矛盾を突き付けるわけ。これが反対

尋問の基本テクニク」

金子「……すごい」

秋田「そういうえWinny って、金子さんに

とつてなんなんですか?」

金子「Winyは……僕の、表現なんです」
壇「……」

秋田「なるほど。表現ですか」

金子「はい。プログラミング以外の方法で、喋る術を知らないのです(笑)」

× × ×

盛り上がっている一同。

桂「それでは最後に締めとして金子さん、一言お願いします」

金子、恥ずかしそうに立ち上がり、
金子「私が有罪になったら多くのプログラマさんに迷惑がかかるので闘うことにしました。私は世の中が良くなって欲しいというのが一番なので、もし私が有罪になって世の中が良くなるならそれを最優先にしてください。遠慮無く有罪にしたらって良いですから」

呆然とする弁護士。沈黙の時間が流れる。
壇「いやいや、みんな金子さん無罪のために集まってんの!」

金子さんらしいと笑い始める弁護士たち。

76 オンブスマン愛媛・会議室

仙波が8人の弁護士の前で話している。

仙波「捜査費の99%は警察職員が書いたニセの領収書による裏金になります。裏金

を作るために多くの冤罪事件も起きとりま
す。裏金を根絶せんと、県警は県民の信頼
を失う一方です。このままではいかんので
す」

想像を超えた裏金の根深さに息を呑む弁
護士たち。

小宮山「仙波さん。今の話を記者会見でして

いただけませんか?」

仙波「……いいですよ」

小宮山「え?」

仙波「?」

小宮山「あ、いや。まさかこんなにあっさり
承諾頂けるとは思ってたので……」

仙波「いつかは、はつきりさせないといけ
んと思うてましたから」

小宮山「ありがとうございます。私たちが全
力でサポートしますけん、お願いいたしま
す!」

仙波「わかりました。私以外の全ての警察官
は、全員裏金作りに関与しとりますから、
私にしかできないことです」

小宮山「(ゆっくり頷いて) それでは記者会
見は20日でどうでしょう。妨害も考えられ
るので、前日の19日に、内容や仙波さんの
名前も伏せた状態で、マスコミ各社に連絡
します。前日は自宅ではなく、ホテルに泊
まってください」

仙波「……わかりました」

小宮山「くれぐれも注意して県警側にさ
られないように。特に盗聴には、気を付けて
ください」

仙波「……」

77 仙波家・部屋・夜

仙波、家に帰ってきてテレビをつけると
「Winyによる京都府警の情報漏洩発
覚」とのニュースが流れている。

アナウンサーD「漏洩した情報の中には事件
の被害者の実名などが記載されていると
のことです……」

ふと窓の外を見ると、黒い車が停車して
いる。

急いでカーテンを閉める仙波。

78 弁護士事務所・会議室・夜

金子と弁護士全員が集い、会議をしてい
る。

頭を抱え、苦しそうに俯く金子。

壇「情報漏洩に関して、Winyが原因や
と言う記事があったりしますが、完全に誤
解なんです。正確にはWinyを通じて
感染したウィルスに問題がある訳で」

桂「まあ、しかしその件は裁判に直接関係
ないやろ」

壇「そうとも言えませんよ、Winnyの悪い印象が作られてしまう訳ですから」

秋田「実際はウィルスが原因なのに、あたかもWinnyが原因であるかの如く論点がすり替わってますね」

壇「はい。まさに金子さんを犯罪者に仕立て上げて……」

金子「遮って。あの……お願いがあります」
一同、金子を見るとその表情に悲壮感が漂っている。

金子「……プログラムの修正をやらせてもらえませんか？」

桂「金子さん、それは無理ですって」

金子「問題はWinnyの脆弱性なんです。あと二行だけコードを書き換えれば情報漏洩を止めることができます。……私は日本が良くなると思ってWinnyを作りました。これ以上社会に迷惑をかけることは……」

壇「……すみません。……今は諦めてください……」

金子「たった2行ですよ？ 5分かかりませんから」

壇「ここで金子さんが逮捕されたら、あなたの無罪を信じて応援してくれた全ての人の思いが水の泡になってしまいます」

金子「……」

壇「裁判が落ち着くまで、辛抱してください」

い……」

金子「俯いて。……」

金子をじっと見つめる壇。

79 道路・車内・夜（日替わり）

車を運転している仙波がホテルへ向かっている。

バックミラーには1台の黒い車が見える。仙波、一方通行の道を低速で走行、信号が黄色になった瞬間にアクセルを踏み黒い車を置き去りにして振り切る。

仙波、ハッハッと細かく息を切っている。

80 金子家・部屋・夜

金子、Winnyを通じて起きた漏洩事件の新聞記事を見つめている。

81 ホテル・室内・夜

仙波、部屋に到着し窓の外を確認する。

仙波「……（尾行がないことを確認、ほっと安堵する）」

母親に電話をかける仙波。

仙波「……（留守電になる）母さん。トシや。正月帰れんかってすまん……連絡できんかったけん。俺は元気じゃ。また連絡するけん、ほしたら、身体気いつけてな……」
電話を切る仙波。その目に涙を浮かべて

いる。

82 弁護士事務所・中・夜

時計の針は午前3時を過ぎている。

机の上には食べ残えたピザやハンバーガーのゴミ。

資料を作成する壇。それを見守る桂、浜崎、桜井。

桂は半分眠っている。

壇「Winnyのそれ自体は、中央にサーバーを必要としないピーツーピー技術の一つとしてさまざまな分野に……桂さん！」

桂「目を開けて。……ん？」

壇「聞いてます？」

桂「すまん。もう限界や。俺帰るわ（立ち上がる）」

桜井「だいぶ分かりやすくなったとは思うんですけど」

壇「（ムツとして）聞く方にも問題はあります……」

桂「何度も言ってるけどな。裁判官の多くは俺と同年代の、ネットに縁がないアナログ人間なんだ。俺の目がカッと覚めるようなものにせんと（欠伸）まあええ……今日はもう寝る」

出ていく桂。

浜崎「壇。どうする？」

壇 「……ごめん。ちょっと一人でやるわ」

83 点描・夜

金子、ベッドで横になり天井を見つめている。

ふと起き上がってパソコンの前に座り、Winnyのプログラムを開こうとするが……突然机を叩く。

× × ×

警察手帳をじつと見つめている仙波。

× × ×

事務所で資料作りをしている壇。なかなかアイディアが浮かばず、資料を放り投げる。

84 弁護士会館・廊下

小宮山、仙波の到着を心配そうに待っている。

と、駆け足で仙波がやってくる。

小宮山「(ため息) 良かった。何かあったんやないかあ思って、心配してましたよ」

仙波「すみません。昨夜から自宅には3名の警察官が張り付いていましたし、松山市内中、私の車を探していましたので、それらを躲しとりました。なんとか無事です」
小宮山「そうでしたか……。でも無事で何よります。それではいきましょか」

仙波「……はい」

85 同・記者会見場

会場には記者やカメラマンでひしめいている。その中にカメラを構えた松山の姿。

仙波「愛媛県警察本部生活安全部地域課、仙波敏郎巡查部長55歳。38年間の警察生活の中で見たこと、聞いたこと、そして自分の体験に基づく真実を話します！」

激しいフラッシュの閃光が仙波に当たる。仙波「捜査費の支払いは、すべて架空。捜査協力者に支払われた事実はありません！」

会場はシーンと静まり返る。

仙波「まず一つだけ言わせてください。人一倍強い正義感を持って警察官になったはずの若者たちが、今日もどこかで裏金作りに加担させられ、警察官としての良心を蝕まれています。私はその現実を前に、これ以上黙つて居るわけにはいきませんでした……現場で一生懸命やつとる若い……若い捜査員やとか……寒い中、昼夜を問わず頑張つとる……そういう現場の若い警察官はたくさんおられるんです……もう一度言います。現場の警官は本当に素晴らしい警察官です。これから志を持って県警に入ってくる人たちのためにも……膿は全部だし切つて再出発するべきやと思うんです！」

一斉にフラッシュが焚かれる。

86 交番・中・詰所

詰所のテレビには仙波の記者会見のニュースが流れている。それをじつと見つめている山本。

87 和食料理屋・中(日替わり)

秋刀魚定食を頼る壇、浜崎、桜井。するとテレビから、仙波による記者会見の様子が映し出される。

アナウンサーE「愛媛県警の仙波敏郎巡查部長の警察組織において裏金づくりが行われていたとの訴えに対し、警察庁は、愛媛県警に会計監査を実施した結果、捜査費の一部に執行手続上の問題等は認められたものの、捜査費が組織ぐるみで使用された事実は認められなかったとし……」

浜崎「警察の情報漏洩については、Winnyも少なからず関係しとるし。人ごとじゃないなこの事件」

桜井「でも仙波さんどうなっちゃうんやろう。せつかく告発したのに……」
浜崎「もうこれを立証するには、実際に書いてるところを見せるしかないかもな」
桜井「警察官を法廷に連れて来て、書かせちゃうとか？」

浜崎「そんなことができたらな(笑)」

壇「じつと秋刀魚を見つめている。」

壇「(遮って)それや……」

壇「勢いよく店を出ていく。」

× × ×

店の前で、金子に電話をかける壇。

壇「もしもし? 金子さん?」

金子の声「はい」

壇「今からパソコン持ってこっちに来てくれませんか?」

金子の声「い、今からですか……」

88 弁護士事務所・中・夜

弁護士事務所一同が集っている。その中心に金子。

金子「自分のパソコンで実演を始め、

金子「これが格闘ゲーム『ネコファイト』です。重力もリアルに計算してるんですよ」

桜井「(画面を見て) 人間にしてはシンプルすぎませんか?」

金子「挙動を楽しむのが目的なんで(笑)。これには人工知能が搭載してるんですよ。リアルに挙動を計算するので、重力を切ったら、空中遊泳してしまうんです」

ゲームのキャラクターが無重力空間で浮いている。

浜崎「これやと格闘出来ないですね(笑)」

金子「そうなんです(笑)。そして、これが『ネコファイト』といって……」

金子「新たにフライトシミュレーションゲームを画面に映し出す。」

金子はプログラムを樂しげにいじっている。

壇「そんな金子をじつと見て、

壇「これですよ……」

桂「え?」

壇「彼の開発意図を言葉で説明するのは無理なんです。やとしたら、彼の生き方を

もつとも表していることに、素直に従えばええんやないかって……」

桂「……?」

壇「プログラムですよ! 法廷で実演するんです!」

桂、壇の提案にひっくり返りそうになる。

桂、壇の提案にひっくり返りそうになる。

桂、壇の提案にひっくり返りそうになる。

桂、壇の提案にひっくり返りそうになる。

桂、壇の提案にひっくり返りそうになる。

桂、壇の提案にひっくり返りそうになる。

桂、壇の提案にひっくり返りそうになる。

桂、壇の提案にひっくり返りそうになる。

桂、壇の提案にひっくり返りそうになる。

桂、壇の提案にひっくり返りそうになる。

桂、壇の提案にひっくり返りそうになる。

桂、壇の提案にひっくり返りそうになる。

桂、壇の提案にひっくり返りそうになる。

桂、壇の提案にひっくり返りそうになる。

桂、壇の提案にひっくり返りそうになる。

桂、壇の提案にひっくり返りそうになる。

桂、壇の提案にひっくり返りそうになる。

小学生のころですね」

金子「はい。子供の頃は電気屋の店頭で置かれたマイコンをいじっていました。本屋でプログラムの入門書を立ち読みして、それを暗記してまた電気屋に行ってみたなことを繰り返していました。店頭でゲームを作ると、逆に店の方から使わせて欲しいとお願ひされたりして」

壇「大学、大学院時代を通じて、あなたは大学の授業として作ったもの以外に作ってきたものはありますか?」

金子「大学の専門とは全然関係ないもので、フリーソフトを作っていました」

壇「その中に代表的なものがありますか?」

金子「ネコファイトというものがあります」

壇「それは今日、動作させることは出来ませんか?」

金子「はい。持ってきてますので」

金子「パソコンを操作し始める金子。」

壇「それはミサイルが出るんですか?」

金子「はい。こんな感じで」

突然パソコンをいじり始める金子。

壇「今は尋問中です。まだパソコンを触らないでください」

金子「はいはいはい」

壇、次の尋問に移ろうとしても、金子は、

パソコンを触りたがっている。

壇 「ちょっと、パソコン触らないでっ！」

金子 「ミサイルの種類も変えることができません！」

壇 「(呆れ) そんなん今はどうでもいいですよ！」

金子 「ちょっと待ってください！」

金子は自分が納得するまでPCをいじり続け、次第に場内から笑い声が聞こえ始める。

裁判長と検察らはその様子を見て青ざめているが、金子は、気にせずプログラムをいじり続けている。

壇、そんな金子をじっと見つめ――

90 弁護士事務所・中・夜(日替わり)

壇と金子、被告人質問の練習をしている。

壇、金子が書いたメモを読んで、

壇 「暗躍というのは、悪いことするときを使う言葉なので大丈夫ですよ」

金子 「ハハ、すみません。私一般常識に疎くで」

壇 「意味を正しく理解して扱わないと、取り返しのつかないことになります」

金子 「まさに今の僕です(笑)」

壇 「金子さん(呆れ) 笑い事じゃないですからね」

金子 「私、普通のこと何かわからないんですよ。それこそ、幼い頃から宇宙の雑誌ばかり見ていましたから。空ばかり見ているから、色んなここにぶつかっちゃうし(笑)」

壇 「ハハハ、宇宙への憧れが金子勇を作ったわけですね」

金子 「宇宙ってあまりにも無限すぎて、個人で囲いこめる範囲超えてるじゃないですか。

それどころか、人類が終わりを迎えるまでに理解できるかすら怪しいわけで。ただコンピュータなら、私ひとりでも宇宙の大部分に触れることができるんじゃないかと思っただけですよ、小学生の頃に。(夢見るように) まだ夢半ばですけどね」

壇 「……金子さん、それ一緒にやりましょう」

壇 「……金子さん、それ一緒にやりましょう」

壇 「……金子さん、それ一緒にやりましょう」

金子 「……え？」

壇 「宇宙に触れることができる、ビジネス！」

金子 「おお。壮大ですね！ でも、儲かるかどうかは(苦笑)」

壇 「お金のことは僕が担当するんで。金子さんは、やりたいことを好きに開発すればいいんです」

金子 「もしそんなことになったら最高ですけど……」

壇 「金子さんなら出来ます！ 絶対に！」

金子 「壇さん(笑) いったいどこからそんな自信が……」

二人、楽しく笑い合っている。

91 仙波家・部屋・夜

仙波、新聞を読んでいる。

『愛媛県警が裏金は実在しないと否定』

『仙波の告発は警察への腹いせ』などと書かれている。

仙波 「……」

突然、石が投げ入れられ窓ガラスが割れる。

仙波、窓外を見ると、男が去っていくのが見える。

92 新聞社・中・夜

パソコンでWindyを使用していると、

ある一つのファイルを発見する松山。

松山 「これって……もしかして……」

ダウンロードすると愛媛県警捜査資料が入っている。

捜査協力者の実名、捜査協力者に渡した謝礼の金額まで書かれている。

松山 「編集長！ この前の会見で仙波が言った裏金の件ですが、Windyで愛媛県警の捜査資料が流出してました！」

編集長 「何？ 県警が全面否定しなかったやつ

やる？」

松山「ここに謝礼金を支払ったとされる捜査協力者の実名が書かれとるんです。ウラがとれるかもしれませんよ」
編集長「……（見て）これが本当やったら大変なことになるぞ……」

93 弁護士事務所・会議室・朝

金子の被告人尋問の練習をしている壇と金子。

裁判官役に桂、桜井、浜崎。

壇「まず目的は、あの二人がわかるように全てを説明すること」

金子「は、はい」

壇「裁判官は完全に一般人レベルやと考えてください」

桂と桜井、金子をニヤツと見る。

金子「……（不安そうに見て）」

壇「ではいきますよ。Winnyの技術に使用されているP2Pとは何ですか？」

金子「ええっと……P2Pに設置される用語としてクライアントサーバ方式がありまして、クライアントサーバ方式はネットワークに接続されたコンピュータに対して……」

壇「ダメダメ！ もっとわかりやすくしないと！」

金子「はあ……」

桂「（小声で）壇があんなことを言うとはな」

桜井「笑って）ですよね」

壇「（原稿を手渡し）それ、読んで見てもらえますか？」

金子、ペラを受け取り目を通す。

壇「では、Winnyの技術に使用されている……」

94 京都地裁・中（※第16回公判）

金子に対する被告人質問が行われている。

壇「……Winnyの技術に使用されているP2Pとは何ですか？」

金子「ピアツーピアの省略ですね。これはピアとピアの間で成り立つソフトウェアで、ピアとは対等な立場という意味を表します。対等な立場にあるPC同士がそれぞれやり取りをするネットワーク世界のことです」

95 弁護士事務所・中・夜

壇「1999年に書かれたJan Clarke氏のFreenetの論文についてです。Freenetは言論弾圧への対策手段……」

※弁護士事務所での練習、裁判所、それを見守る弁護団の姿が音楽に合わせてシーンバックしていく。

96 京都地裁・中（※第16回公判）

壇「……手段として匿名出版システムとして開発されたものです。あなたはこの論文を読んでどう思われましたか」

金子「非常に画期的な技術かつ、画期的な提案だと思いました」

壇「どの辺が画期的だと思ったんですか」

金子「特にFreenetは、匿名性に関して言ってますので、そこに関する主張が非常に新しいと思いました」

壇「どういう点が新しいと思ったんですか」

97 弁護士事務所・中・夜

金子、ペラを見ながら練習している。

金子「ぐ、具体的にはえーと例えば新聞社が」

壇「そこはもっと自信持って、焦らなくていいですから」

金子「具体的には……例えば新聞社がある情報発信者についての情報を明かさないからこそ匿名は成り立ちます……」

金子の様子を見ている桂と桜井。

秋田ら弁護団も背後からそれを見ている。

98 京都地裁・中（※第16回公判）

金子「……でも実際には新聞社は発信者本人を知ってるわけです。ただこのFrenetは『匿名性は技術的に実現できる』と言っていて、それが非常に画期的だと思います」

壇「要するに、あなたが匿名性という意味は、ニュースソースを守る。それは言論、表現、思想の自由を保障する。そういう趣旨だと」

金子「そのとおりです」

それを見守っている弁護士。

法廷での、壇と金子の生き生きとした姿。

× × ×

壇「あなたは警察の取調べの中で、例えば著作権侵害をまん延させて、ネット社会の著作権の枠組みを変えたいと言ったことを、北村さんに言いましたか」

金子「絶対に言ってます！」

壇「調書にそのような記載があるのは、なぜなんですかね」

金子「文があるのは北村さんが勝手に書いた作文だからです！」

傍聴席で金子を睨みつける北村。

99 弁護士事務所・会議室・夕方

弁護士が打ち合わせをしている。と、桜井が来て、

桜井「これ見てください！ 仙波さんが告発した裏金の証拠が流出してみたいです！」

桜井、新聞を壇に手渡すと、『ウィニーで発覚！ 愛媛県警の裏金疑惑』と見出しが書かれている。

浜崎「裁判に直接関係ないとは言え、なんとも感慨深いな」

桂「もしかして（秋田に）これが逮捕の裏の意図？」

秋田「……トカゲの尻尾でしたね」

桂「トカゲ？」

秋田「いくら尻尾を追い回しても、決して本体は姿を見せないでしょ？……いつの世も真実は藪の中から……」

壇「……」

桜井「いずれにしても、Winnieが仙波さんの告発に貢献したってことですよね！（壇を見て）壇先生？」

壇「……うん」

桜井「嬉しくないんですか？」

壇「……いや、良いことやと思うけど……」

100 金子家・部屋・夜

その新聞記事を見ている金子。

金子「……」

姉に電話をかけるが、留守電になってし

まう。

金子「……（明るく）姉さん。勇です。……元氣？……色々迷惑かけてごめんね。……俺は元氣だから心配しないで。裁判が終わったらまた連絡するね。……（何かを言いかげようとするが、辞め）……じゃあまたね……」

と電話を切る金子。

金子の目には涙が溢れている。

101 大坂梅田・駅前

大型ビジョンから、安倍官房長官がWinnieの利用自粛を国民に呼びかけるニュースが流れている。

102 弁護士事務所・中・夕方

金子と壇、飛行機の話で盛り上がっている。

金子「壇さん、アメリカの戦闘機ってFがつかいが多いの知ってます？」

壇「確かにFがつく戦闘機は多いですね」

金子「私、次は絶対にF35ができると予想してて、F35を想像してフライトシミュレーターに追加したんですよ。実物見てないから全然似てないですけどね。あの時点でF35を予想したのってスゴいしょ！」

壇「たしかに（笑）飛行機って伊丹空港か

ら離陸して上昇しながら旋回するときバンク角度傾けすぎて失速しないかビビりません?」

金子「(両手を広げ) いやー私はもつとバンク傾けるって思ってますよ」

壇「落ちたらいやですよ(笑)」

金子「でも飛行機で死んだら本望でしょ!」

壇「金子さん……(笑)」

ふと事務所の窓の外を見つめる金子。

金子「あ!」

窓の外には夕日に重なるように飛行機が飛んでいる。

2人、興奮して窓の外を眺める。

103 仙波の家・部屋・夜

テレビには愛媛県警がマスコミに質問攻めにされている様子が映っている。それを見ている仙波。

と、電話がかかってくる。

仙波「もしもし?」

男「……仙波か」

仙波「ええ。……誰です?」

男「お前、なんで記者会見なんぞしたん

じゃ! 許さんぞ!」

仙波「許さんいんは、警察の犯罪を暴いた私を許さんということか。それとも警察の犯罪を許さんということか!……どつちな

んです?」

男「覚えとれよ(切れる)」

仙波「……」

104 京都地裁・中(※第18・20・22回公判)

金子への尋問が行われている。

宮田「あなた自身 Winnieを開発されてい

るときに、今の日本の社会で言論が脅かさ

れているとか、弾圧されているとか、そう

いう認識はあったんですか」

金子「はい。その認識はずっとありました」

宮田「それは具体的に、どういう点ですか」

金子「世界には、発信することで制限を受け

てしまう情報も多く存在すると思います。

その情報の発信者は攻撃を受けてしまう可

能性があるわけですが、そうならないため

に発信者の匿名性を担保する技術について

考えていました」

宮田「発信することが制限を受けるような情

報というのは、具体的に何を指しているん

ですか」

金子「例えば何かの告発であったり著作物で

もいいです。それを公表することによって

誰から攻撃される可能性がある場合でも

いいです。情報を匿名で発信したい場合に

は、すべて当てはまります」

× × ×

比嘉「被告人は前へ」

金子「はい」

金子、ゆつくりと立ち上がり証言台の前

へと立つ。

比嘉「この事件の審理はこれで終わります。

被告人の方から最後に言いたいことがあれ

ばどうぞ」

金子「はい」

金子、手に持った紙を見つめながら、

金子「私は、科学技術は素晴らしいものだ

という1970年代に生まれ育ちました。

今でも私は、科学技術は素晴らしいものだ

と信じています。そしてこれまで私は、い

ろいろなプログラムを作り、発表して来ま

した。新しい技術を生み、表に出していく

ことこそが、私の技術者としての自己表

現であり、私なりの、社会への貢献の在

り方だと考えているからです。……10年

前にWinnieを作っても検証ができなかつ

たでしょうし、10年後にWinnieを作つて

も、ありふれた技術だとみなされたのでし

う。……Winnieの開発は、早すぎたので

しょうか。それとも遅すぎたのでしょうか

……。最近私は、そんなことも考えます

……。Winnieについていろいろと言われ

ていますが、これらの問題は全て技術的に

解決可能であり、Winnieは将来的には評

価される技術だと信じています」

金子、ポケットからSDカードを取り出し、

金子「今日ここに、いろいろと言われて来たことに対して、対策を施したWinyを持ってきました。しかし今の私には、これを公開することすらできません……。私がWinyの開発中断を余儀なくされてから、すでに2年半以上の時間が経過しました。その間にも世界中では様々な技術が生まれ、私のほうでも、新しいアイデアを思いついています。……ですが今の私にはそれを形にすることができません……。私にはそれが、残念でなりません」

金子、深々と頭を下げる。

壇は、そんな金子を直視することができない。

105 ホテル・ロビー・夜

ホテルに到着する金子と壇。

壇「金子さん、本当にお疲れ様でした。次はいよいよ判決です」

金子「……」

壇「金子さん？」

金子「壇さん……Winyの開発は早すぎたんですかね……それとも遅すぎたんですかね……。最近、そんなことをずっと考え

てしまっています……」

壇「……」

金子「Winyのほかに、アイデアはたくさん思いつくんです。でも今は、それを形にすることが出来ない……それが悔しくて……」

壇「……」

106 同・部屋・夜

ベッドに横たわり天井を見つめている金子。

107 弁護士事務所・中・夜

パソコンの画面を見つめている壇。

画面には『アメリカが世界をリード！』と題され、YouTubeが開始されたというニュース記事。

108 京都地裁・前

入り口付近は、大勢のマスコミと傍聴券を求めて並ぶ人々でこった返している。意を決して、裁判所へと向かう金子、壇、弁護団ら。

109 同・中（※第25回公判・判決）

法廷は緊迫した空気に包まれている。書記官「ご起立ください」

一同、起立する。

裁判長の比嘉が入って来ると一同礼をする。

比嘉「それでは判決を言い渡します。被告人は前へ」

金子「はい」

金子、ゆつくりと立ち上がり証言台の前へと立つ。

比嘉「主文。被告人を罰金150万円に処する」

傍聴席がざわつく。司法記者クラブの記者が慌ただしく立ち去っていく。比嘉は、主文に続いて、判決の理由を述べ始める。比嘉「被告人は、送受信用プログラムの機能を有するファイル共有ソフトWinyを制作、その改良を重ね（と続く）」

喜ぶ北村と検察官、悔しそうに俯く壇。

金子は比嘉をじつと見つめ判決結果を聞いている。

110 同・前・夕方 ※スローモーション

判決理由が流れ続けている。有罪判決に騒ぎ立っているマスコミを掻い潜り、裁判所から出てくる金子と壇と弁護団。

(F・O)

111 空港・前・夕方（日替わり）

キャリーケースを持つ金子を見送る壇。
金子「わざわざお見送りありがとござい
ます」

壇、落ち込んだ様子で下を向いている。
金子「笑って」まだ負けたわけじゃないで
すよ。次頑張らしましょうよ」

壇「……（俯いたまま）申し訳ないです
……」

金子「なんで謝るんですか？」

壇「……日本では一度有罪にされてしま
うと、その後無罪になっても名誉回復はで
きません。それに、裁判を続ければ、金
子さんの開発者としての大切な時間を奪
ってしまうことになります……それを考
える
と……」

金子「……まだまだこれからですよ。（両手
を広げて）もっとバンク傾けましょうよ！
（笑）」

壇、戯ける金子に笑いながら、

壇「金子さん……（笑）」

金子「あ！」

壇「え？」

ふと空を見上げる金子と壇。金子は少年
のように飛行機に夢中になっている。そ
れをじっと見ている壇。
カメラが切り替わると時間が一瞬に過ぎ
去っている。

× × ×
金子の葬儀場入り口。

T「2013年7月」

喪服姿で白髪混じりの壇、その横に金子
の姿ない。

金子の姉「壇さん」

壇、その声にふと振り返ると、金子の姉
の姿。

金子の姉「本日はありがとございました。
弟も喜んでいと思います」

壇「いえ私は何も……（俯く）」

金子の姉「……壇さん？」

壇「……本当にすみません……（何かを言
いかけるが）」

金子の姉「弟は壇さんと出会えて幸せだっ
たと思います。亡くなる直前も壇さんの話ば
かりしていましたから（笑）」

壇「……」

金子の姉「壇さん。これ、持ってもらえな
いですか？」

壇にメガネケースを差し出す金子の姉。

壇、メガネケースを開くと、中には割れ
た金子の眼鏡が入っている。

割れた眼鏡をじっと見つめる壇。

金子の姉「……弟は……この眼鏡をかけたま
ま倒れました。そのまま自分で救急車を呼
んだらしいんですが、到着したところには意

識がなく倒れていたそうです……」

壇「……」

金子の姉「……この眼鏡は弟の生き様そのも
のだと思うんです……最後まで、決して諦
めなかった弟の……」

壇「……（割れた眼鏡をじっと見つめる）」
ふと、上空から飛行機のエンジン音が聞
こえる。

夕日に向かって行く飛行機を見つめなが
ら壇は――

112 黒画面

実際の写真や映像とともに――

T「第一審での有罪判決後、金子勇と
弁護団は7年もの歳月をかけて最高裁で
無罪を勝ち取った。しかし無罪判決から
1年7ヶ月後、金子は急性心筋梗塞のた
め42歳という若さでこの世を去った。7
年もの月日を裁判に費やしたが、再び開
発者として過ごすことが出来たのは僅か
半年だけであった。金子の逮捕をきっかけに、日本の技術者によるP2Pの技
術を利用した開発は相次いで打ち切られ
た。Winny事件から20年が経った今でも、
Winnyの技術はこれからのIOT社会
を支える基盤技術と目されている。金子
勇が残したプログラムは今日もどこかで

動いている――」

金子勇本人の未来の技術者に対するメッセージ動画が流れる（ニコニコ動画緊急記者会見）

（了）

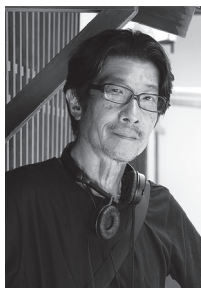
せかいのおきく

阪本順治

〈脚本家略歴〉

阪本順治（さかもと じゅんじ）

1958年10月1日生まれ。大阪府堺市出身。横浜国立大学在学中より、石井聰互（現・岳龍）、井筒和幸、川島透等の各監督の現場へスタッフとして参加をする。89年『どついたるねん』で長編デビュー。その年の国内の各映画賞を総なめにする。00年『顔』では、日本アカデミー賞最優秀監督賞を受賞。その後もジャンルを問わず、コンスタントに作品を撮り続けている。代表作に『KT』（02年）『闇の子供たち』（08年）『大鹿村騷動記』（11年）『北のカナリアたち』（12年）『半世界』（19年）『冬薔薇』（22年）など。最新作に『せかいのおきく』（23年）がある。



監督・阪本順治

製作：FANTASIA inc./YOIHI

PROJECT

制作プロダクション：ACCA

配給：東京テアトル／UNEX

T／リトルモア

〈スタッフ〉

製作

近藤純代

企画・プロデューサー

原田満生

撮影

笠松則通

照明

杉本崇

録音

志満順一

美術

原田満生

編集

早野亮

音楽

安川午朗

〈キャスト〉

おきく

黒木華

中次

寛一郎

矢亮

池松壮亮

源兵衛

佐藤浩市

孝順

眞木蔵人

孫七

石橋蓮司

1 漆黒に『序章 江戸のうんこはいずこへ』の字幕

2 水茶屋

日差しを遮るように、葦簀。
奥で、茶汲み娘がせわしなく働いている。
ここは、ある寺の門前。
縁台で団子を喰らう旅の人。
参拝者の往来。

『安政五年・江戸・晩夏』の字幕。

その葦簀の前を、得度を終えたばかりの、
幼い坊主が通りすぎ、境内の木立の中へ。
そこには、一棟の廁(寺所有の公衆便所)。
その廁の裏に身をかがめ、便壺に溜った
糞尿を柄杓で掬い、肥桶に注いでいるあ
るおとこ、名は矢亮。

と、坊主が、矢亮に、

坊主「ひとり？」

矢亮「へえ、すいやせん。いつもの相方、腹
くだしたと想ったら、そのまま臥せってし
まいやして」

坊主「もってけないの、ぜんぶ」

矢亮「すいやせん、手が足りねえんで、きよ
うは半分でこで」

矢亮、坊主に、銭を渡し、糞尿を買う。

しきりに、坊主にあたまをさげ。

矢亮、江戸で糞尿を買い、肥料として故

郷の農村に持ち帰る下肥買い。

と、にわかに黒雲がたれ込め、地べたに
雨がぼつぼつと、やがて、さーつと降り
注ぐ。

坊主が去ると、入れ替わるように、大き
な籠を背負ったおとこが、わずかな廁の
庇の下に、潜るように来る。

その籠の中には、多種多様な紙屑が。

白紙(墨汚れ少なし)、カラス(墨汚れ
多し)、せんこう紙(煙草の包み紙)等々。
そのおとこ、中次。

矢亮の少し歳下か。

矢亮「中次に」なんだ、紙屑買いか」

中次「矢亮に」そっちこそ、汚穢屋か」

矢亮「なんだよ、その眼」

中次「(肥桶をこなし) 臭せえんだよ」

矢亮「(籠をこなし) 寺の捨て紙か」

中次「濡れたら、商売になんねえ」

矢亮「それ紙屑問屋に売って、幾らになるん
でえ」

中次「……紙によりきりだよ」

矢亮「(察して) へっ、幾らにもなんねえな」

中次「いちいち、うるせえ」

と、「あつ」という声がして。

矢亮、眼を向けると、おんながこちらへ
と。

矢亮「ああ、木挽町の、えつと名は……」

おんのは、松村きく、通称おきく。

矢亮、廁をこなすと、おきくに、

矢亮「(おしつこを) なさるんで？」

おきく「違います」

矢亮「なさるんなら、あたしら、どきやすか
ら」

おきく「寺に参っただけです」

矢亮「……こつちに向かつてこれやしたか
ら、てつきり」

おきく「雨宿りです」

とがんと言い張り、窮屈な庇の下に入っ
て来ると、不意に名を想いだした矢亮が、

矢亮「あ、たしか、おきくさんだ、次郎衛門
長屋の」

おきく「こんなところで、名を呼ばないでく
ださい」

矢亮「(わかるようなわからないような、
が) すいやせん」

と、中次が、

中次「おきくさんて、おっしゃるんですか」
おきく「(中次に) あ、あなた」

矢亮「(中次をこなし) え、こいつ、いま名
を呼びやしたが(こいつはいいの?)」

中次「構わず、おきくに) へい、ときどき、
紙問屋の桔梗屋さんで」

矢亮「なんでえ、知り合いか」

おきく「桔梗屋さんには、たまにお習字用の

半紙をいただきました」

矢亮「そうか、この寺の手習い所（寺子屋）

で読み書き教えていらっしやるんで、おきくさん」

おきく「こんなところで、名を呼ばないで」

矢亮「とりあえず」すいやせん……（話題変えて）ああ、秋の知らせだな、こりや」

と、庇から落ちる雨だれを観て。

中次がかかえる籠の、紙屑も容赦なく濡れ。

中次「暫くは、動けねえな」

と、三人、黙りこくり、と、我慢できなくなつた？おきくが、矢亮たちに、

おきく「ここをどいてくださいまし」

矢亮「え」

おきく「ここをどいてくださいまし」

暫し、意味がわからず、が、しきりに足踏みをしているおきくを観て、察し、矢

亮、中次、揃って去る。

と、中次が、不意に、矢亮が担ぐ肥桶をこなし、

中次「それ、どこまで持つてくんない」

矢亮「舟で、葛西までだよ」

中次「田畠に撒いて、幾らになるんだい」

矢亮「お、なんだ」

中次「おめえが、訊いたから、おいらも、訊いてみただけだ」

矢亮「……（勘が働き）割りが合わねえんだな、紙屑なんてよ」

中次「はっとけ」

矢亮「相方、いなくなつてよ」

中次「はっとけ」

3 あぜ道・幾日か経つて

からつと晴れたそのそら。

『武蔵國葛西領龜有村』の字幕。

その農耕地。

あぜ道を、矢亮が荷車を曳く。

荷台には、糞尿を溜めた大量の肥桶が。

矢亮「背後に」はっとけつて云つたの、どいつだい」

その荷車を、うしろから押しているのは、

中次。

いつのまにか、紙屑買いを辞めて。

矢亮「ついだよ、江戸ひきあげて、こつちへ越してこいよ、中次」

中次「おら、こんな亀有なんて田舎いやだ」

矢亮「へっ、貧乏長屋のくせに」

中次「応えす」まだ、着かねえのかよ」

矢亮「それよか、力ねえな、ふらふら、車がよれてんだろ」

中次「向かい風で、臭せえんだよ、眼に染みて、前向いてらんねえ」

と、ふたり、荒れた地をごろごろと荷車を曳いて。

4 農村

荷車を曳くその向こうに農村が観えてきた。

※ ※

耕した畠に、柄杓から糞尿がぼとぼと撒かれ。

百姓たちが撒いているその先の、農家の土間、ふてぶてしそうな農夫が框で草履を履き、外へ。

その農夫、下肥（肥料用糞尿）の売り捌き差配人の頭取、半兵衛。

各農家に配り終え、空になった肥桶を荷車に戻している矢亮、半兵衛に気づくと、

歩み寄り、半兵衛から買い取り賃の報酬を受け取る。

「ありがとうさまで」と、ぺこぺこ頭を下げる。

矢亮は、地元の水呑み百姓。

半兵衛、背後の、庭に山積み（むしろ）の野菜をこなし、

半兵衛「あれ、本所のヤツチャ場（青物市場）で捌いてこいよ」

矢亮「へえ、持っていきやす」

と、一方、別の農家の裏手の、大きな肥溜め壺に、肥桶から、糞尿を、手荒に、

注いでいる中次。

と、やがて、その裏手に矢亮が来て、

矢亮「なんだ、一杯こぼれてんだろ」

中次「はやく終わらせてえから」

「よこせ」と、矢亮が桶を奪うと、丁寧に底にこびり付いた糞尿も、素手で拭い、肥溜め壺に落とす。

それを観て、中次、ちょっと感嘆し、

中次「……」

矢亮、空になった桶を手に、荷車に戻りながら、

矢亮「もういつべん江戸に行くか、大川も静かだったし、この風じゃ、船足も、速えから」

中次「よせやい、戻るころには、もう日が落ちてっだろ」

矢亮「ああ、そんなときゃ川べりの野壺で一晩寝かせんだよ、二晩でも三晩でも」

中次「……」

矢亮「糞も、味噌とおなじで、しばらく置いといた方がいいんだよ、これがほんとの糞味噌だ」

中次「……」

矢亮「笑うとこだぜ、中次」

中次「……あにい」

矢亮「あにい？」

中次「矢亮のあにい、その手、井戸で洗って

きなよ」

矢亮、糞にまみれた手を観て、「ああ」

と、井戸へ向かい、

矢亮「……秋になって、あらしが来たら、川が暴れて江戸にも行けねえから（だから行くぞ）」

5 中川（葛西領）

その中川を一艘の舟が、江戸へ向けてくだっている。

舟上の中次と、櫓を漕ぐ矢亮のすがたが。

6 永代橋・午後遅く

廻漕問屋が立ち並ぶ船着き場の端の端に、その一艘の舟が停泊している。

矢亮と中次が乗ってきたその舟は、江戸と葛西領を結び、糞尿を運搬する汚穢船

＝通称・葛西舟。

ふたり、その葛西舟から、船艙に積まれた野菜類をせつせと降ろしてゆく。

その船艙、葛西に戻るときは、糞尿を満載し。

棧橋に寄せた大八車に、野菜を載せながら、ふたりとも、握り飯を喰らって。

矢亮「はやいとこしねえと、市場がしまっちゃう」

中次「あにい、どうも合点がいかねえんだ

が」

矢亮「なんだ」

中次「糞積んだところに、青物積むなんて」矢亮「いいんだよ、一旦口にすりゃ、かたしがぐちゃぐちゃつと変わるだけで、廻り廻って、糞も食いもんもおんなじこつたあ」

7 木挽町・次郎衛門長屋・翌早朝

明け六つの鐘が鳴り、ある住まいの障子戸が開くと、大柄な、着流しすがたのおとこが、現れる。

そのおとこ、松村源兵衛。と、あちらこちらの天空を仰ぎ、かしわ手を打つ。

と、続けて、同じ住まいから、鹽たばを手に、

おきくが現れ、井戸端へ。

おきく「（源兵衛に）いつも、なんの願いごと、おとつさま」

源兵衛「なんも、願っちゃ、いねえ、おつかねえから手を合せてるだけだ、想いどおりになんねえだろ、このそらは」

おきく「おとつさま」

源兵衛「なんだ」

おきく「明け六つになると、おとつさまは、なんで、尻をたれるのですか、それもひとつやふたつじゃない」

源兵衛「なんででろな、歳とつたんだ。その

うち、糞がたれそうになる」

おきく「そのおかげで、あたしも、いっしょに眼が覚める」

源兵衛「おきく」

おきく「なに、おとつさま」

源兵衛「そのおとつさまだが、まだ慣れぬ」

おきく「もう、武家でも何でもない、母上もいなくなり、おとつさまは、惚けてばかり」

源兵衛「糞していいか」

と、源兵衛、そそくさと井戸の奥にある
総後架^{そうごうか}Ⅱ 廁へ。

おきく「……」

と、井戸水を盥に汲み、顔を洗うおきく。
その冷たさに、

おきく「ああ、もう秋」

暗転し。

8 漆黒に『第一章 むてきのおきく』の字幕

9 土砂降り

『安政五年・江戸・秋』の字幕。

次郎衛門長屋の夜遅く。

ひとけのない露地に、激しい雨が。

屋根にも、地べたにも、長屋の木戸も風

で揺れて。

隅にある厠にも、大量の雨水が流れ込み。
その便壺に、勢いよく流れ込み、泡沫も

10 翌朝

まだ、雨はやまない。

と、長屋の最高齢の店子^{たなこ}（住人）の爺、

孫七が、障子戸を開けて、

孫七「なんか臭えな。雨漏りもして、粗末なもんだ、まったくよ、粗末なもんだ」

と、呟いて、すぐさま、戸をびしゃりと閉じる。

11 また翌朝

雨はあがつて、長屋のいたるところから

しずくがぼたりぼたり。

と、地べたは水浸し。

ではなく、糞尿まみれ。

厠の便壺から、溢れてた。

おきくや源兵衛、孫七たち店子一同、朝になっても、厠に近づけず。

遠巻きにして、大家も含め、途方に暮れている。

おきく、その臭いに、鼻をつまんだまま。

と、店子の、按摩の座頭、やくざもの、

かみさんたちが、大家に、あれこれと苦言を。

座頭「このままだと、あつしは鼻が潰れてしまいわす」

孫七「わしら、二晩も我慢してんだ、大家の
とこの雪隠、みんなに貸したらどうだ、親子三人分の糞なんだから、まだ溢れるほどじゃねえだろ」

大家「もうすぐ溢れます。しゃがんだら、ナニがケツにあたりそうです」

齢五十代のかみさん「なんで、汚穢屋^{おわい}は来ないの、矢亮さんっていったっけ」

大家「そりゃ、こつちが訊きてえよ」

やくざもの「どうでもいいから、はやいとこ手を打ちなよ」

と、ほかのかみさんたち、傘張り職人や大工や駕籠かきや髪結いなどの店子たちも、一斉に大家を責める。

と、大家、紅潮し、

大家「店賃も払えねえひとに、もの云われたかねえ」

と、一喝すると、一同押し黙り、おきくが源兵衛に、

おきく「おとつさま、うちは払ってます」

源兵衛「え、わしか」

やくざもの「源兵衛に」せんせい、なんか云ってやってよ」

源兵衛「……まあ、乾くの待つか」

孫七「なにを呑気なことを」

源兵衛「こういうときは、辛抱するもんだ、なに、死ぬもんじゃな」

孫七「せんせいみたいに、こっちは侍でもなんでもねえんだ、辛抱のしどおしで、わしのことなんか、誰も構っちゃくれないし、もの掴んだって、すぐに落としてしまつてよ、ケツ拭くのだって、手がとどかねえんだ、背中が凝っちゃまつてよ、せんせいには、わかんねえだろうが、近頃、眼玉の先に、虫みてえなもんが跳んで、もうすぐ、世の中、真つ暗になつちまうんじやないかって」

おきく「そのことは、またあとにして」

源兵衛「(が、孫七に) わしだって、この歳だ、しゃがんだら、膝が笑つて、痺れるってなもんじやない、ケツ拭くときだって、腿がつりそうになつてよ、剣術だつてままならぬ」

おきく「そのはなしは、あとにして」

源兵衛「おい、おきく、あとならいいのか、いま云いてえことを、みんな、あとまわしにするから、いつまでたつても、ちつとも暮らしは、よくなんねえ、不義がはびこる」

おきく「そういうおとさまが、きらいです、いつも、ああ云えば、こう云う、こう云えば、ああ云う、よせばいいのに、ひとの難

事にも立ち入つて、上役の不義を訴えてたり、尽くしたはずが、お役御免で、どれだけ、あたしも、辛抱したことか」

源兵衛「わしは、この國を案じて、訴えてただけだ、勘定方として、あたりめえのことをしただけだ、それを誇りに想わぬおまえがおかしい」

と、やくざものが割つて入り、やくざもの「そのはなしも、あとでいいんじゃないかなあ」

傘張り職人「おきくさんの、云いたいこともわかるけど」

座頭「いまは、うんこのはなしをしているところだ」

おきく「ああ、どなたもこなたも、ひとさまの心も汲めず、あたしだって、いまや、武家育ちの恥も外聞も捨てて、糞とか屁とか平気で云えるようになったのでございます、あれこれ云われるような筋合いはございません」

一同「……(わからずじまい)」

と、「よろしいでしょうか」という遠慮がちの声をして、一同、振り向くと、木戸の向こうにさつきからいたかのように、矢亮と中次が、いて。

ふたりとも、肥桶吊るした天秤棒を担いで。

大家「矢亮に」なんだ、なにやつてたんだ、おめえが来ないから、えれえことだよ、店子も、わけわかんないこと云うし」

と、矢亮、手土産として野菜を大家に手渡し、

矢亮「すいやせん、この長雨で、おらの葛西じゃ、出水で川止め喰らいやして、大川(隅田川)どころか、中川も、で、危うく舟も流されるところで、やつとのことさ(と、あらためて地べたを覗て)こりや、ひでえな」

と、矢亮のうしろに控える中次に、

大家「なんだ、新入りか」

矢亮「へい。まだ慣れないやつですが、中次でものです」

おきく、ふと、その中次と眼が合う。

と、門前の厠を想いだし、恥ずかしそうに会釈を。

孫七「(地べたの糞に) それにしても、貧相な糞だな、目方だけは、いっぱしにあるけどよ、ろくなもん喰つてねえな、わしら(矢亮たちに) はやいとこ、かたづけてくれ」

と、矢亮と中次、柄杓で地べたの糞尿をかき集め始めると、おきく、急に、しおらしくなり、

おきく「そこには、あたくしの、ものの、は

入っておりませんか」

孫七「なんだって」

おきく「そこに、あたくしのものゝはございません。おなじこと、云わせないでくださいまし」

と、そそくさと、住まいへ戻る。

孫七「ものゝつて、糞のことか……」

源兵衛「……ま、そういう子なんだ」

と、木戸の近くにいた傘張り職人が、源兵衛に、

傘張り職人「せんせい、誰か来やしたよ」

と、木戸の向こうをこなすと、ひとりの若い武士が、源兵衛に頭を下げた。

源兵衛「……」

源兵衛、うんざりしたように、その武士に近づいてゆく。

※

※

厠の裏に廻つて、蓋を外し、便壺に溜った糞尿を、柄杓で掬つては、肥桶に入れる矢亮と中次。

尿意便意にはやる店子たちは、順番を待つように、向こうで並んで、待っている。

矢亮、小声で、

矢亮「変な長屋だろ、みんな、おかしいんだよ、はなしが、噛み合つてねえ」

中次「たしかに」

矢亮「おれ、こんなところより、武家廻りがい

いや、(中次に) おめえが、鼻屑にするか、ここ」

中次「……」

汲んでも汲んでも、糞は減らない。暗転し。

12 漆黒に『第二章 むねんのおきく』の字幕

13 次郎衛門長屋・早朝

『安政五年・晩冬』の字幕。

ひとり、次郎衛門長屋を鼻屑とすることになった中次が、木戸を抜けて、厠へと、そこに、源兵衛が脱糞の最中。

戸板の上から、顔だけが現えて、右手に尻拭く藁を、左手に大刀を握り。

中次に気づくと、

源兵衛「なんでえ、わしがしがんでいるときに」

中次「……(終わるまで) 待ちやす」

源兵衛「なんかおもしれえ嘸、ねえか、けさはやけにつうじがわるくてよ、腿が痺れて、だから、なんか気がまぎれるおもしれえ嘸、ねえか」

中次「いえ、おもしろい嘸なんか、矢亮のあのいなら、講釈場でよくあぶらうつてやすから、講談のひとつでも、が、おいらは」

源兵衛「おめえ、身内は？」

中次「……おようという妹がいましたが、労咳で」

源兵衛「そうか、じゃあ、わしの女房どのといっしょだな」

中次「ずっとふたり暮らしでしたから」

源兵衛「すぐに誰かできるさ、そばにいるひとが、いたほうがいいからな、あ、おきくみたいなのは、やつかいだからな、ああいうむすめは、ひとつ癪に障ると、あとは、そっぽ向いたままで、以前は、『明朝、道場へ朝稽古にゆく』と伝えりや、ちゃんと握り飯をこさえてくれたもんだが、わしが塩むすびじゃなくて、たまには味噌ぐれえ入れてくれと云つたら、それっきりだ、飯粒ひとつ、こしらえねえ」

中次「……」

と、源兵衛、うつむくと、

源兵衛「お、やつと(うんちが) でたか」

と、藁で尻を拭いながら、

源兵衛「おめえとはこれでさいごかもしれねえ。これがうんのつきだ」

と、自嘲すると、厠をでて、ひとつ嘆息をもらし、

源兵衛「(不意に) なあ、せかいゝつてことば、知ってるか」

中次「……知りやせん、読み書きもできねえ

んで」

と、源兵衛、そらを仰ぎ、

源兵衛「このそらの涯^{はし}は、どこだか、わかるか、涯^{はし}なんかねえんだ、それが、せかいだ、ここんとこ、國がこたごたしているのは、いまさ、それを知って、まったくよ、井の中の蛙^かって、このことだ」

中次「……」

源兵衛「惚れたおんなができたら、云ってやれ、おれは、せかいでいちばん、おめえがすきだって、それ以上の云い廻しはねえ」

と、源兵衛、大刀を腰に差すと、

源兵衛「なのに、なんだかなあ、腑に落ちねえんだがな、随分むかしのことだから、侍つてのは執念深いね、こんな時勢に、なんの恨みかよ……」

と、裏露地を抜けてゆく。

中次、見送ると、源兵衛を待ち構えていたような複数の武士たちとともに、去ってゆく。

やがて、裏露地の向こうに消えて。

中次、すぐには事態を解釈できず、厠の裏手の蓋を外し、糞尿を汲もうとすると、障子戸の音がして、おきくが表に。

おきく、中次を見つけて、

おきく「おとっさま、見ませんでしたか、

(住まいを振り返り) 刀も無くて」

中次「ええ、いましがた、ここでお逢いしましたが、刀もそのとき、たしかに」

おきく「それに、草履じゃなくて、草鞋を履いて、どこへ」

中次「迎えの方がいらつしやったようで」

と、裏露地の向こうを観る。

おきく「迎え」

中次「お侍さんで、いつしよに東の方へ」

おきく「……」

と、おきく、咄嗟に住まいに戻り、勢いのまま、箆^{へら}の抽き出しから懐剣を取り出し、長屋を駆けでてゆく。

その背を眺めるしかない中次。

と、長屋の奥から、ふたりのやりとりを

聞いていた孫七が、手ぬぐいを手に、

孫七「(中次に) なんて、おめえ、止めなかつた」

中次「え」

孫七「まあ、わしにも止められねえけどな、ただの貧乏人には、侍のしきたりなんぞ、口挟めるもんじゃねえ、いいから、仕事続

けな」

14 竹藪・その後

竹が風に揺れ、葉擦れの音が。

と、日の陰りから悠然と立ち去る複数の

人影。

源兵衛を迎えにきた武士たち。

それぞれ、刀を納め。

と、その奥に、下草に倒れ込み、刀の鞘に手を添えたまま、絶命間近の源兵衛。

源兵衛のばやけた視界の向こうに、おきく、

遠く離れた場所、苔むす岩肌にもたれかかるように坐り、喉元から溢れる血を

てのひらでとどめようとしている、おきく。

ぜいぜいと音をさせていた口元が、次第に、音さえ発しなくなつて。

源兵衛の眼が閉じられ、それきりに。

15 次郎衛門長屋・孫七の住まい・夜

孫七が、火鉢に被さるように暖をとりながら、粗末な夕餉を摂っていると、障子

戸をたたく音が。

孫七、戸を開けると、そこに中次。仕事を終え、手ぶらで。

中次「おい、聞きやした」

孫七「いいから、入れや」

中次「おい……」

孫七「源兵衛さんは残念だった、いのちをたすかるつてよ、おきくちゃん」

※

※

土間に壊れた桶や樽が幾つも。

大工道具も転がり、孫七が修繕の途中か。火鉢の前の孫七が、土間の框に坐る中次に、

孫七「わしは、腕のいい早桶屋^{はやぶけ}だったんだ、

むかしは、棺をこさえてたんだ、だから、いつばい死人^{しびと}を吊ったよ、それがいまや手桶や樽の修繕だ、^ゝたが屋だ、もうろくしてよ、それこそ、あちこち、たがが外れて、もう、近けえつてことよ、わしも」

中次「……」

孫七「だがよ、地べたの下で死人はまた、虫に食われながら土に還るんだよ。ひとつてのは、そうやって、欲もなにも失くしていくんだ、そりやそれで、楽しみつてものよ」

中次「……」

孫七「……おきくちゃんが、養生所から戻ってきたら、ひとことでも声かけてやんな、なに、悔やみなんていらねえから、『きょうのそらは、雲ひとつありやせんね』とかでいいから……」

中次「……」

孫七「まあ、戻るまでは、ふた月も、み月も月もかかるらしいがよ」

火鉢の炭が、ぱちっと、爆ぜた。暗転し。

16 漆黒に『第三章 恋せよおきく』の字幕

17 掘割の水辺

年を越して。

『安政六年・江戸・晩春』の字幕。

水辺にしゃがみ、手を洗っている中次。

そばには、空の肥桶。

と、掘割を跨ぐ小さな太鼓橋の上から、

「中次」と声がかかる。

中次、見上げると、孫七。

孫七「なにやってんだ」

中次「へい、このあたりの舟宿をあちこち廻ってるんでさ、汲んでは永代橋の舟に積みこんで、また、このあたりを」

と、孫七が大きな風呂敷づつみを担いでいるのに気づき、

中次「え、孫七さん、どちらへ」

孫七「まだ働けるうちに、もいちど早桶屋に戻りたくてな、口入れ屋（職斡旋業）に頼み込んだんだよ……おのれの棺くれえは、おのれの手で、こしらえたくてな、それが、寛永寺の近くっていうから、越すんだよ」

中次「……いろいろありがとうございやし」

孫七「あ、おきくちゃん、戻ったよ、でも、うちに籠もったまんまで、もう暫く待つ」

てやんな、いまはまだひとりがいいんだ、じゃあ、達者でな」

と、去ってゆく。

18 次郎衛門長屋・おきくの住まい・その日々

日々

月光だけの暗がり。

用簀箆の上に位牌と、蠟燭立て。

その蠟燭立ての受け口に、溶け落ちた蠟が幾重にもかたまつて。

火をつけては、そのまま汚れを、取り除かないままに。

おきく、蒲団にくるまれ、身を縮めて、

ずっと日々、すごしているよう。

※

※

日がのほり、障子戸をたたく音がすると、かみさんたちが、外から「おきくちゃん、ここに、うちで焼いた鰯を置いとくからね、食べてよ」と、声がかかるが、戸の裏からつつかえ棒がされ、かみさんたちも、そうするしかなく。

おきく、涙をこぼすが、動けずにいる。

※

※

また、別の日。

蠟燭立ての蠟のかたまりが、また嵩を増して。

きょうも、誰かが戸をたたく音がする。

その乱暴にたたくのは、やくざもののよう
うで、それも酔いにまかせ、「よう、お
きくちゃんよ、月命日だろ、いっしょ
に弔い酒呑もうよ、せんせいには、ゼニ
も借りつ放しでよお」。

※

※

と、また別の日。
蠟のかたまりは、用筆筒の天板にまで繫
がつて。

と、また、戸をたたく音が。
とても、穏やかに。

19 同・同・表

障子戸の前にいるのは、寺の住職、孝順
と、孝順の周りに、複数のこどもたち。
こどもたち、口々に住まいの中へ「師
匠」「せんせい」「戻ってきてください」
などと、声をかける。

20 同・同・中

おきく、その声に、耳を塞こうとするが、
それでもこどもたちの声が溢れ聴こえ、
逡巡のち、そばの首巻を手にとった。

21 同・同・元の表

こどもたちのまえに、障子戸を開け、喉
元の疵を首巻きで隠しながら、おきくが、

そろり顔をだす。

孝順「この子たちが、いつ来るんだ、いつ来
るんだって、毎日のように寺の庫裏に集
まってきてね」

と、おきく、手振り身振りで『あたしは、
もう喋ることもできず、教えることなど、
とてもできません』と、懸命に伝えよう
とする。

と、そのように、こどもたちは、ほか
んとするが、

孝順「おきくさんには、役割というのがあつ
てね、読みはできなくても、書くことはで
きる、それで、務まるなら、どうだろうか、
口にだすのも、筆で書くのも、大事なのは、
言の葉そのものですから、不自由な分は、
誰かが、補えばよろしいかと」

おきく「……」

孝順「私だって、恥ずかしいはなし、説法よ
りは、黙って団子喰つてる方が、性に合う

でも、役割があつてね、役割って字は、役
を割るって書きますでしよ、役目をふたつ
に割って、おきくさんは、その一方だけで
もやればいいと、それだけでも、なかなか
できることじゃありません、私も、説法と
団子のふたつがあつてこそ、役割でね、
いえ、甘菓子食べると、いい文言が浮かぶ
んでございます、で、説法しては団子を喰

らい、団子喰つては説法に勤しむ……私自
身、いま、なにを喋っているのか、さっぱ
りわからなくなりまして、どうか、この和
尚が、後生です」

が、おきく、うつむいたままで。

孝順「やはり、私は、ひとの説得、説法と云
うものに、まったく才がない」

と、おきく、相好を崩すと、また手振り
身振りで、

おきく「ありがとうございます。もう少
し時が経てば、必ず、手習い所に、筆を
持つて、参ります」

と、孝順、ぎこちない身振り手振りの解
釈に難航しつつ、

孝順「(喜びのあまり) 団子食べたーい」
と、万歳した。

と、その意表に、こどもたち、飛び散つ
て。

22 武家屋敷の通り・その後

本所深川あたりの、ある武家の下屋敷
(別邸)。

矢亮が、天秤棒を担ぎながら、表門を通
りすぎ、塀外を巡って、裏手の勝手口へ。
その潜り門の前で、「御門番！」と叫ぶ
と、やがて中から、門が開けられて。
矢亮、深々と頭を下げると、戸を開けた

のは、中間ちゆうげんと呼ばれる武家格にも入らぬ奉公人で、つまりはごろつきに近く。

その中間、仁蔵、一瞥するなり、

仁蔵「なんだ、汚穢屋か、場所わかつてんだろ、勝手にしな」

矢亮「いつもの惣一郎さまは」

仁蔵「犬死にしたよ」

※

※

庭先を通り、奥の廁へと向かう矢亮。

仁蔵は、そそくさと去り。

と、すれ違いに廁からでてきた同じく中間の武平、矢亮に、

武平「おめえ、大変だな」

矢亮「いえ……」

武平「だがよ、おれたちより、ましなもんだ」

と、云い捨てて、屋敷の方へ。

矢亮、その武平が入った部屋をちらり窺うと、仁蔵たちと、ばくちに興じ。

※

※

庭地の潜り門の手前、汲み取った肥桶を地に置いて、矢亮が、先の仁蔵に買い取り賃を渡そうとすると、

仁蔵「なんだよ、これっぽっちかよ」

矢亮「いつものとおり、で」

仁蔵「知らねえよ、そんなもの。貧乏長屋と、喰ってるもんが違うんだよ、もつとはずめ

よ」

矢亮「そんなこと云わねえで、いつもどおりで（頼みます）」

仁蔵「……」

※

※

矢亮、潜り門から、殴打されて、表へ転がりでてくる。

肥桶ごと、地べたに。

仁蔵は、潜り門を乱暴に閉め。

伏したまま、暫く動けない矢亮。

と、視線の先に、おんなの下駄と着物の裾。

眼を上げると、おきく。

悲しそうな眼をして、矢亮を観る。

矢亮、眼を合わせられず、溢れた糞尿を桶に戻し、立ち上がる。

おきく、立ち去る矢亮のあとを追ひ。

23 商家の通り

黙って歩くふたり。

往來の人々から、整った装いのおきくと連れ立つ、身分違いの汚穢屋の、矢亮を蔑む視線が。

と、大店のむすめ姉妹が、すれ違いざまに、

姉「おきくに、ねえ、どうかされて？」
おきく「……？」

姉「どうして、こんなひと、連れ歩いてるの」

と、矢亮をこなすと、おきく、不快に。

と、姉の背後にいた妹が、

妹「お姉さま、構わず、行きましょ」

と、姉をうながし、去つてゆく。

矢亮、たまたま、おきくに、

矢亮「おいらのこと、気にしてんなら、氣遣いなんかいらねえ。迷惑だ、同情なんかいらねえ」

と、おきく、左右に首を振る。

身振り手振りで『あたしの方こそ、なにもしてあげられず、口惜しい……』と。

と、矢亮、おきくの手もとを観ると、筆入れに紙の束。

矢亮、後悔して、

矢亮「すまねえ、おきくさん、迷惑かけてんのは、おいらの方だな、手習い所は反対の方角だ、付き合わせてしまつて、すまねえ……それに、おきくさんこそ、大変だったのに、……中次から、聞いてやす」

おきく「……」

矢亮「もう行つてもいいですかい、おいら、たいしたこと、ありやせんから」

と、作り笑ひをして、去る。

おきく、取り残されて。

24 船着き場・その後

いつかの永代橋近くの廻漕間屋が立ち並ぶ船着き場の端の端。

矢亮たちの葛西舟が、いつもの棧橋に。

江戸各所から汲み取った糞尿を、葛西舟の仕切られた船艙へと注ぐ矢亮。

その粗粗しく、いつもと違う矢亮。

あとから遅れて、別の汲取場所から来た中次も加わり、同じく、肥桶から糞尿を注ぎ込む。

が、黙りこくる矢亮が気になり、

中次「なんかあったか、あにい」

矢亮「なんもねえよ」

と、矢亮、一足先に注ぎ終わる、

矢亮「まだ、日が高けえから、いくらか廻ってくらあ」

と、また天秤棒で肥桶を担ぐ。

と、中次、

中次「つらそうだから、もう、終いにしようや、きょうは」

矢亮「なに云ってんだ、いまも、江戸のそこ

いら中で糞たれてんだよ、もったいねえだろ、糞がおれらの、食い扶持だよ、あいつ

らの糞で飯喰ってんだよ、だから、ありがたく、ちょうだいしてくんだよ」

中次「……しみったれたこと、云ねえでくれよ」

矢亮「なにが、しみったれた、おめえ、いいんだよ、やめたってよ、江戸にはいくらでも、食い扶持あるだろ」

と、舟を下りてゆく。

と、振り返り、

矢亮「ああ、さつき、おきくちゃんに逢ったよ、ひでえこと云ったから、いつか、おめえから謝つといてくれよ」

と、云って、市中に消える。

中次、やるせなくなり、竹筒の水を飲むと、舳先に仰向けになる。

中次「……」

中次「……」

25 次郎衛門長屋・おきくの住まい・夜

用筆筒の上の蠟燭立ての、蠟のかたまりは、すっかりきれいになって。

文机で、行灯の灯りを頼りに、半紙に筆を落としているおきく。

『そら』や『うま』や『ふるさと』など、習字の手本を書いて。

と、『こめんやす』という声が、表から。障子戸を遠慮がちにたたく音も。

「中次です、おきくさん」と続けて。

おきく、また喉元に首巻きをすると、土間に下り、つかえ棒を外して、障子戸を開ける。

中次「すいやせん」

と、おきく、身振りで『どうしたの?』。

中次、手にした半紙の束を差し出し、中次「きょう、馬喰町廻ってたもんですから、桔梗屋さんに立ちよって、戴いてきやした手習い所に戻られたって、耳にしたもんですから」

おきく、その束を受け取り、身振りで『ありがとう』と。

中次「おらあ、こんなことぐらいしか、できねえですから」

おきく「……」

中次「こんなことしか」

と、中次、見つめられるままに、戸惑い、

中次「あ、矢亮のあにいが、なんか云ったみたいで、謝つといてくれって」

と、おきく、かぶりを振り、中次の手を掴んで、『あがつて、粗茶でも』と。

中次、そつとおきくの手を除くと、

中次「いえ、またにやす、どうか、おげんきで」

と、あたまをさげ、踵を返す。

と、おきく、障子戸を閉めかけ、と、中次の草鞋が去っていく音を聞き逃さないよう、閉め切らないで、じつと、耳をそばだて続けて。

おきく「……」

その外からの風が抜け、行灯の灯火がそ

ろり揺れて。
暗転し。

26 漆黒に『第四章 ばかとばか』の字幕

27 武蔵國葛西領

『安政六年・葛西領・初夏』の字幕。

いつかのあぜ道。

肥桶を大量に載せた荷車の、車輪のひとつが、壊れている。

しゃがんで、ため息をつく矢亮。

中次「どうすんだ、あにい」

※ ※

あぜ道を、天秤棒に肥桶を吊るして、駆ける矢亮。

ちよっと遅れて、同じく中次。

中次、矢亮に並ぶと、矢亮、速度をあげる。

と、遅れた中次、速度を上げ、また、矢亮に並ぶ。

いつのまにか、ふたりの駆けつこに。

矢亮「おいらの食い扶持、こぼすんじゃないぞ」

中次「あにいこそ」

矢亮「おめえ、糞が跳ねて、鼻に飛び散ってるじゃねえか」

中次「眼が痛てえけど、慣れたよ」

28 いつかの農村

ふたりが駆けてゆくその向こうに点在する農家が。

売り捌き頭取の半兵衛の農家の裏手に到着し、そのまま息を切らして、しゃがみこむふたり。

暫し、喋ることもできず。

が、中次、鼻や頬に付いた糞をぬぐって、笑って、

中次「莫迦だなあ、おいらたち、ほんと、莫迦だ」

矢亮「なにがそんなに、おもしれえんだ、たくさんよ」

と、その裏手に半兵衛が来て、肥桶を一瞥し、

半兵衛「おい、桶の半分、こぼれてんじゃないえか」

矢亮「半兵衛さん、これには訳ってもんが……」

中次「荷車が、壊れちまいやして」

半兵衛「しらねえよ、莫迦やろうが、やり直してこいよ」

と、肥桶の糞尿を、ふたりの頭から浴びせる。

矢亮、感情を抑えきれず、それを観た中次が、代わりに半兵衛に向かっていこう

とすると、察した矢亮が、突然笑いはいじめる。

と、矢亮、口に入った糞をペッペツと吐きだすと、

矢亮「半兵衛に」てめえなんか、糞喰らえて想ってたけどよ、こつちが糞喰らっちゃったよ、あはは、中次、笑うとこだぜ、ここ」

中次「え」

矢亮「だから、笑うとこだつて云つてんだよ」

と、中次も、莫迦莫迦しくなつて、笑い始める。

ふたり、そのまま地べたを転がって、笑い続けて。

と、想ったら、矢亮、いきなり半兵衛に土下座した。

額を地べたに擦り付けるほどに。

矢亮「まつことに、失礼をは、こきました！」

中次、矢亮のそんなさまに落胆し、眼を逸らして。

暗転し。

29 漆黒に『第五章 ばかなおきく』の字幕

30 次郎衛門長屋・おきくの住まい・夜

文机の前のおきく。

おきく、中次に貰った半紙に文鎮を置く
と、なにを書こうかと思案して。
が、思いつかず、ふと眼に入った亡き源
兵衛の書棚から、書物を取り出し、眺め
てみると、ある項に『忠義』という文字
を見つけて。

おきく、筆を取り、『ちゅうぎ』と、平
仮名で書き始めるが、なんと、いつのま
にか、『ちゅうじ』と。

おきく「……………」

自身に呆然として、やがて、□元が、こ
れでもかというほど、緩んで。

『やだー』と、畳に転がる。

その振動で、源兵衛の位牌が、こけた。
暗転し。

31 漆黒に『第六章　そして舟はゆく』の字 幕

32 中川

『安政六年・中川・晩夏』の字幕。

江戸で汲み取った糞尿を積み、葛西舟が
大川（隅田川）から堅川（たかねがわ）を経て、ここ中
川をのぼり、武蔵國葛西領亀有村へと向
かう。

その葛西舟、船艙を覆って一尺巾ほどの
板が敷きつめられ、その平坦な舟上にな

次が坐り、竹筒で水を飲んでゐる。

船尾で櫓を漕ぐのは、矢亮。

ふたりとも、笠を被り。

舟には、ふたりが汲み取りに使った肥桶
が、二荷＝四桶積みまれ。

と、ふたりの声が、溢れきこえて、

矢亮「講談よろしく、ひとつ咳払いをする
と」『そこで鼠小僧・次郎吉は、奪った千

両箱を懐にかかえると、さすが元は鳶人
足で身が軽いときたもんだ、棟瓦のうえを

ひよひよいと跳んでいきやして……………」

中次「あにい、また浅草寺の講釈場であぶら
うったな。汲み取りの最中に、さはんねえ
でくれよ」

矢亮「講談師になりてえんだよ、おれは、
よ」

中次「なら、なんかおもしろえはなし、おい
らに、してみてよ」

矢亮「…………おもしろえことなんか、ねえよ」

と、無然と、櫓を漕ぎ続け。

と、中次、前方を見て、

中次「日の暮れねうちに、着いたな（と、
ひとりごち）」

と、船尾にゆき、櫓を漕ぐ矢亮の足もと
にあった竹筒を取ると、じぶんの竹筒と
いっしょに舟から身を乗り出して川水で
すすぎ、

中次「こう湿めっけがあると、（臭いが）染
みついて、いけねえな」

と、袖や襟の臭いを嗅ぎ。

矢亮「（見て）中次、おめえよ、江戸にほれ
たおんなでも、できたのか」

中次「なんで」

矢亮「いまさら、臭い、気にしやがって、そ
れに」

中次「…………」

矢亮「おれのひいきの木挽町、おめえ、とっ
ちまったじゃねえか」

中次「そりゃ、矢亮のあにいが、武家廻りが
いって云うからさ」

矢亮「…………おきくだろ、木挽町・次郎衛門長
屋の」

中次「…………」

矢亮「おきくちゃんだな、おい」

と、中次、視線の向こうになにかをみつ
け、はぐらかすように、

中次「亀だ」

矢亮「亀なんて毎日見てつだろ…………おめえ、
すけべだな」

中次「…………」

亀頭を延ばして、泳ぐ亀。

矢亮、ぺっとつばを吐きすてた。

33 亀有村の粗末な河岸場

に、葛西舟を着ける矢亮。

と、傘をぬいだ中次が舟を降りて、舳おもむきを結び、「アユビ」と呼ばれる板を舟と岸のあいだに渡す。

矢亮、船艙を塞いでいた板を次々と外し、間仕切りされた舟底にとっぷりと積まれた糞尿を、柄杓で肥桶に注ぐ。

そのふるまい、粗粗しく。

矢亮「かんざしとか、落ちてねえかな」

と、糞尿の底を柄杓でかき混ぜながら、肥桶が糞尿でいっぱいになると、その肥桶を中次が受けとり、岸に設けられた肥溜へりめ野壺に移し替える。

粗末な雨よげがかかった、野壺。

糞尿はいつときその壺に溜め置かれ、発酵を待つて耕作地へと運ばれる。

と、その連携の途中で、矢亮が、

矢亮「もおしてきやがった」

と、舟を急ぎ降り、被つていた傘を放ると雨よけのしに潜り、股引をすりさげ、野壺を跨いでしゃがむ。

矢亮、懷から講談師が使うような張扇はりおきを抜いてバサツと上げ、小蠅を蹴散らしながら、便をたれ。

と、そのさまに、

中次「あきれて、あにい」

矢亮「目方で値が決まるんだ、おめえも、ど

うだ、ひるの飯、そろそろだろ」

中次「肥やしにするために、飯喰つてるわけじゃねえし」

矢亮「百姓、ばかにしやがって。いいよな、おめえは、仲買いの身分で、江戸住まいで」

中次「……」

矢亮「こっちは、田畠持たねえ、水呑み百姓だ」

矢亮、脱糞を済ませると、頬冠りの手ぬぐいであそこを拭い、川水でその手ぬぐいを洗う。

と、そのまま舟上の柄杓を取り、川底の泥をすくつては、野壺に入れ、糞尿の嵩かさを水増しする矢亮。

見ている中次。

矢亮「なんだ、その眼は」

中次「おら、見なかつたことにするから」

矢亮「売り捌さばきの半兵衛が、うるせえからよ、いちいち目方がたらねえって、それに、同じ武家廻りの、半兵衛のせがれがドジばかり踏みやがって、おれがいつも尻拭いだ、あ、これがほんとの尻拭いか、笑うとこだぜ、中次」

中次「……（笑えない）」

矢亮「どうしようもねえ、糞みたいな世の中だ」

中次「……」

ふたり、舟の糞尿を野壺に入れ続け、矢亮「終わったら、飯食ってけよ、おれんとこで」

中次「飯喰つて、糞して、目方にすりゃいいんでしょ」

矢亮「だよ、どいつもこいつも、上からもの入れて下からだす、だれだって、それだけのもんさ。武家も、大店の旦那衆も、吉原の花魁だつて、ケツまくるときはいっしょなんだよ」

中次「……」

矢亮「あ、おきくちゃんも、だぜ」

中次「よせよ」

矢亮「おきくちゃんも、それなりに、目方になるんだよ」

中次「だから、それ云うな」

矢亮「おきくちゃん、どんなもん、喰つてんだろ」

中次「（怒つて）……」

矢亮「（表情見て）図星かよ」

中次「（怒気のまま）飯はいらねえ」

矢亮「あ、そう。糞の役にもたねえ。お、糞の役にもたねえって、笑うとこだぜ、こんどこそ」

中次「……飯いらねえ（と、くりかえして）」
と、矢亮、中次の腹をこなし、

矢亮「さつきからごろごろ鳴ってるのは、え、雷神さまかい」

34 日が傾き

移し替えを終えたふたり、舟を離れて、葦が群生するほとりへとあがつてゆき、そのままぜ道へ。

ふたりの背後に広がる風景は、落日に輝いて。

矢亮「おれもおめえも、身寄りがねえんだ。

てことは、なにやたつていいんだよ。咎める身内もないきや、心中するおんなもないえ。なあ、いつかふたりで盗人でもするか、おれたちや、どこの屋敷もだいたいの間取りがあたまに入つてら、そうだら」

中次「おいらを、巻き込まねえでくれよ……おいらは、まっとうに生きてくんた。いつか、読み書き覚えて」

矢亮「なにが、まっとうだよ。長屋の家主も侍どもも、どんな価値をつり上げやがつて、それで、このさまだ。おめえ、腹たたねえのか、なら、ただのでくの坊かそのへんの案山子といっしょだ」

中次「……(表情変え)」

矢亮「読み書き覚えて、せいぜい頑張つて、刀でも差してみな、へっ、これがいちばんのお笑いぐさだ」

中次「立ち止まって」おらあ、そんなあ

にいが、嫌いだ。むかしから、威勢のいいでかいことばかり云つてつけど、汲み取りに行つちや、べこべこあたまさげて、なじられても、なんにも云いかえさねえで、さつきみてえに目方をこまかすことしかできねえ、口ばかりじゃねえか」

矢亮「……」

中次「おいら、情けねえ、あにいこそ、気持ちちは強えが、こころが弱え、度胸のこれっぽっちもねえくせに、これじゃ世間の鼻つまみもんだ、鼻をつまむつて云つても、糞の臭いじゃねえよ……ここ、笑うとこだぜ、あにい」

矢亮「……」

と、矢亮、ふいにうなだれ、中次に背を向け、落胆のまま離れてゆく。

中次、その背に、後悔したのか、あとを追ひ、

中次「すまねえ、あにい、つい、ついだ、云いすぎちまつた」

と、矢亮、凄いい形相で戻つて来て、一転、

矢亮「あ、さつきの亀だけど」

中次「え」

矢亮「亀」

と、矢亮、じぶんの首を延ばしてふざけると、

中次「(頬を赤らめ)……おら、舟戻る」

と、即座に踵を返す中次。

と、矢亮、慌てて中次を掴まえ、その背に手を廻し、

矢亮「おれ、泣いてねえからな」

中次「意味、わからん」

と、ふたり、とほととあぜ道をゆき、その後ろ姿がどんどん遠のいて……。

と、葦が風に揺れる音にまじり、矢亮の「なあ、中次、いつかおれが世の中ひつくりかえしてやるからよ」と云う声がきこえ、中次が「それでこそ、あにいだ」と気を遣つて応え、矢亮が「おれたちがいなきや、江戸なんて、糞まみれじゃねえか」と相変わらずの強気で、中次が「そうだそうだ」と、てきとうに相づちをうつと、すっかり気をよくした矢亮が「こんど、さぼつてやるか、汲み取り」と云い、中次は「そりゃいいや」とよく考えずに返辞して、なんだかんだ相性のいいふたり。

そらは暮れ落ちてゆく。暗転し。

35 漆黒に『第七章 せかいのおきく』の字

幕

36 明け方

次郎衛門長屋に、明け六つの鐘の音が聞こえてきて。

どんよりとした朝。

『万延元年・江戸・冬』の字幕。

まだひと気のない長屋の一軒の住まいから、おきくが現れ、その手のひらをこすり合わせる、はーっと、息を吹きかける。

と、いつかの源兵衛よろしく、あちらこちらの天空に向かって、ぼんぼんとかしわ手を打ち。

と、木戸の向こうから、頬冠りをした中次が、肥桶を担いで、いつものように、廁へと。

おきく、眼が合う。

中次、「おはようございます」と、か細い声で。

と、おきく、『また、瘦せたね』と、身振り手振りで、伝える。

中次「いいえ、痩せてなんか……」

と、そらを仰ぐと、

中次「これから、ふつてきそうですね。雪になると、静かになって、おらあ、すきです」

と、あたまをさげ、廁の裏に回ると、柄杓で糞尿を掬いはじめる。

37

おきく、まだ手を合わせていなかった方向のそらへ、かしわ手をひとつ、なにを願ったのか。

みんな起きてくる

長屋の、普段どおりの朝の喧噪。

大工が、かみさんに見送られ、でかける。髪結いが、でかける、が、忘れものをして戻ってくる。

駕籠かき兄弟が、揃ってくしゃみをして、でかける。

七輪で魚を焼く座頭、盲目だけどうまく焼く。

日なたに傘を干す、傘張り職人。

やくざものが、あくびをしながら起きてくる。

旦那を送ったかみさんたちが、洗濯ものや水桶を手に井戸端に集まる。

おきく、盥にだいこんを入れ、その井戸端に向かう。

※

おきく、井戸端で、だいこんを洗っている。

ちらり背後の中次を、振り向いて。

と、「大家さん」という声がきこえ、立ち上がる。

満杯にした桶を手に中次が廁から来て、

その大家に、買い取り賃を、わたす。

やくざものが、それを見て、肥桶を示し、

やくざもの「そのナニは、おれたちのナニなんだから、店賃、まけてくれても」

大家「家主と店子は親子も同然。あ、あなた、先月分の店賃を」

中次、そんな中を、そつと、去る。

と、座頭が、

市「それ、百姓に幾らで、さばけるんだい？」

と、中次の背に。

中次、構わず、ゆく。

おきく、ずっとその背を、眼で追って。

と、やくざものの「あいつ（中次）ずいぶん、ちいせくなったな」と云うつぶやきが。

38

おきくの住まい

文机に、筆や硯や半紙が、整然と。

おきく、炊きたての白米を盛った茶碗を、用箋筒の上にある位牌にそつと供えると、

箱膳のままで、お櫃のご飯に味噌を合わせて、握り飯をこしらえはじめる。

そんなおきくの喉元に、いまだ残る刀疵の跡。

と、おきく、いつもの首巻きを装い、握り飯をつつんだ竹の皮のつつみを手に、

障子戸を開け、外へ。
と、ゆつくりと暗転して、なにかがぶつかる鈍い音が。

39 ひるどき

露地を抜けた通りで、その竹の皮のつづみが、雑貨を積んだ荷車の車輪の下敷きになっている。

つづみから溢れた握り飯が形をなくし、ぐしゃりと。しかも、所々、土にまみれて。

その車を曳いていたおとこが、尻餅ついているおきくに、

おとこ「そっちが、うわのそらで歩いてつから、ぶつかったんじゃないか」

と、去る。

おきく、おとこをねめつけると、慌ててつづみを拾う。

40 本所あたりの裏長屋・午後遅く

そろっとやってくるおきく。

屋台を担ぎ、店子の夜鷹そば屋が、でかける。

その夜鷹そば屋に、身振り手振りで、なにか尋ねているおきく。

手のひらに指で「中次」と書いたりして他の店子たちは、夕飯の支度か、誰もい

ない。

おきく、夜鷹そば屋が「中次なら、あすこだよ」と示したある住まいの障子戸を、遠慮がちにたたく。

応答なく。

僅かに開けて、のぞく。

いない。

おきく、帰ろうかどうか、迷う。

下駄の、そのたよりない指さき。

凍えて、もう帰ろうかと。

と、その下駄の向こうに、やってくる中次の影が。

中次、桶もなく、頬冠りを手に、

中次「こんな遠いところまで（どうして？）

……」

近づく中次に、おきく、思わず鼻をつまむが、すぐさま、その手をもう一方の手でぴしゃりと払い、ずずつと下がる

と、懷からよこれた竹の皮のつづみをだし、『おむすびを持って来たんだけど、途中で、荷車にビヤツと、で、おむす

び、ぐしゃーつと……』と、また身振り手振りで、道中を伝えようと。

と、加えて、『ほら、もうすぐ雪ですよ』と、そらを仰ぐ。

中次、応えず、手を延ばし、おきくの唇に触れる。

おきく、戸惑いながら、中次に身をまかせようと。

と、中次の指が、おきくの唇に付いたなにかをつまみ、

中次「……ご飯粒が」

と、そんなご飯粒が、何粒もおきくの口元や頬に。

中次「そんなきたねえ握り飯を……おきくさん（喰ったんですね）」

おきく、恥ずかしさで、背を向けると、なんだかおかしくなってきた、その場でわけのわからないはしやぎかたをする。

暫し眺めていた中次、

中次「ぐあいでもわるいんですかい」

と、おきく、ムカツときて、直立不動にふたりとも、そのまま棒のように立っている。

互いの視線は、結ばれたままで。

と、中次、おきくの心中をたしかめるように、

中次「……おきくさんは、お侍さんのむすめで、おらあ、こんな身分だ、だから……」

と、おきく、これでもかというほど首を左右に振る。

中次「……こんなおいらでも？」

と、おきく、これでもかというほど首を縦に振る。

と、中次、一旦はうつむくと、やがて、顎をあげ、「言葉にや、できねえ」と、おきくよろしく身振り手振りで、おきくになにかを伝えようと、する。

が、あまりに身振りがへたすぎて、おきくに伝わらず、

おきく「……ん？」
と、井戸端に置かれた樽に粉雪が落ちてきて。

きらきらとその結晶がそこから落ちてきて。

その静まりかえった雪景色の中、中次はおきくの周りをせわしなく動きながら、身振り手振りを繰り返し。

さらに円をえがいたり、地べたをたたいたり……と。

そのまま時がすぎて、あたりは白銀のせかいに。

おきく、いまだ延々と繰り返される中次のそれに、ただただきよとん。

中次『せかいでいちばんすきだ』

と、伝えたいのに、なんでか、伝わりきれず。

と、地べたに膝を落として訴え続ける中次に、おきく、切なくなつて、おもわずその背中に手を添えて。

と、中次、その温もりに、「いつか、字、

教えてもらえませんか」と、口にして。と、おきく、うんうん、と頷き、ふたり、そのまま、抱擁しあつて……。

雪は、やまない。暗転し。

41 漆黒に『最終章 おきくのせかい』の字幕

42 いつかの下屋敷

『文久元年・晩春』の字幕。

また、勝手口の潜り門で、いつかの中間、仁蔵に、殴打されている矢亮、しきりにへりくだり、

矢亮「すいやせん、すいやせん、おいら、これ以上値がかさむと、ひどい目にあうんださ」

仁蔵「貧乏人のそういうツラ見ると、胸糞悪

いんだよ」

矢亮「……胸糞」

仁蔵「この糞蠅が」

矢亮「……いま、なんて……」

仁蔵「糞にたかる蠅だよ」

矢亮「糞に蠅……笑えねえな、お侍さん」

と、仁蔵に向かつていくと、

仁蔵「臭せえんだよ、このさんびんが」
と、また、執拗に殴りつけ。

と、矢亮、表情変えると、桶の糞尿を一握りし、仁蔵に浴びせて、

矢亮「これでおめえとは、臭せえ仲だ、笑うとこだぜ、ここ」

と、じぶんで大笑いしながら、一目散に逃げた。

仁蔵のうしろで、いつかの武平も笑つて

43 手習い所

寺の庫裏。

長机が並び、こどもたち、そこに混じつて読み書きを知らないおとなたちが、一斉に墨を摺ると、半紙を整え、上座を向いて、居住まいをただす。

上座に、手習い師匠の、おきく。

そのそばに、いつかの住職、孝順。

孝順「では、きょうのお題を頂戴しましう」

と、おきくを一瞥すると、おきく、住まいで書いてきた手本の半紙を、一同に掲げる。

そこには、『せかい』という平仮名が。

と、最後列の隅にいた中次が、「せ・か・い」と呟き、僅かに開けられた障子

戸の隙間から、それを見上げて、
中次「……」

と、孝順が、あらたまつて、解釈を述べる。

孝順「この『せかい』というのは（右手で右方向を示し）あっちへ向かつてゆけば、やがて（左手で左方向を示し）必ずこっちの方から戻ってくる、そういうものです」
残念な解釈に、おきく、ぽかんとし。
暗転して。

44 スタッフ・キャストクレジット

涯のない道を、おきくが先導して、矢亮、中次がゆく。

天秤棒もなく、ただ、ゆく。

矢亮「どこゆくんだい、おきくちゃん」

と、おきく、歩みをとめず、手振りで、そらに円をえがき、笑う。

と、中次、なにやら悦に入り、

中次「青春だなあ」
と、惚けた。

終わり

渴 水

及川章太郎



〈脚本家略歴〉
及川章太郎（おいかわ しょうたろう）
1967年宮城県生まれ。95年から脚本家、作家など。主な作品に、脚本・映画「東京ゴミ女」「火星のカノン」「せかいのおわり」「ガールフレンド」「ZOO」「チョコリエッタ」、ドラマ「ハリス」「紺野さんと遊ぼう」「中学生日記」「LOVE YOU」アニメ「ステイッチ!」、童話「ボタ桶」、小説「ターターアンドモグワイズ」「グレイテストヒッツ」他多数。仙台市在住。

監督…高橋正弥

原作…河林満「濁水」（角川文庫刊）

製作…「濁水」製作委員会

製作プロダクション…レスパスピ

ジョン

制作協力…レスパスフィルム

配給…KADOKAWA

〈スタッフ〉

企画プロデュース 白石和彌

プロデューサー 長谷川晴彦

ライオンプロデューサー 田坂公章

音楽 ラインプロデューサー 原田耕治

撮影 向井秀徳

照明 袴田竜太郎

美術 中須岳士

録音 小迫智詩

編集 中澤正英

キャスティング 石貝洋

編集 田端利江

助監督 栗谷川純

山下久義

〈キャスト〉

岩切俊作

小出有希

木田拓次

小出恵子

小出久美子

伏見

今西

坂上

佐々木

大林

竹内

石川

細川

加東

岩切和美

生田斗真

門脇麦

磯村勇斗

山崎七海

柚穂

宮藤官九郎

宮世琉弥

吉澤健

池田成志

篠原篤

柴田理恵

森下能幸

田中要次

大鶴義丹

尾野真千子

1 郊外の通り

炎天下、小出恵子（11）と久美子（8）姉妹が、自転車であつていく。

2 市民プール・表

姉妹、柵の金網こしに中をジッと見つめてゐる。

久美子「……プールの匂い、しないね」

誰もいず、プールの水は空っぽだ。

傍らの閉じた門に「給水制限に伴いしばらく休業いたします」の張り紙がある。

恵子「……帰ろうか」

久美子、金網にへばりつくようにプールを見つめて動かない。

恵子「……」

と、傍らの金網の一部が壊れているのに気づき、そこをくぐり抜け、敷地内に入ってしまう。

戸惑う妹の手を取り、恵子は久美子も内側に引つ張り込んでやる。

3 プールサイド

空っぽのプールの縁に佇み、バッグから出した浮き輪を膨らます恵子をきよんと見やり、

久美子「……何してんの？」

恵子「決まってるじゃん、泳ぎに来たんだ」

よ」

と浮き輪を久美子の首に掛け、恵子は水しぶきの擬音を叫びつついきなりプール内にジャンプし、泳ぐふりを始める。

恵子「冷たくて気持ちいいよ、おいで」

久美子「（ボカンと見やり）……」

かまわず恵子は縦横無尽に泳ぐように走り回っているが、突然立ち止まってその場で体操のような妙なポーズを次々と取り始め、

恵子「（シンクロ）」

久美子はその変てこな動きに笑ってしまひ、

久美子「あたしも」

とプールに入っていく、恵子と並んで同じポーズを真似します。

恵子「日本代表の小出姉妹、見事な演技です。出た、必殺技の久美子&恵子スペシャルだ」

二人は笑い合ひつつ、空っぽのプールでいつまでも奇妙なダンスを踊り続ける。

4 古いマンションの一室・玄関

表に佇む岩切（36）が室内から出て来た伏見（49）に、穏やかに淡々と、

岩切「市の水道の者です。料金の件で伺いました」

伏見、申し訳なさげにおどおどと、

伏見「……すいません、今月も余裕がなくて、今、手持ちもなくて……」

岩切「もう四ヶ月の滞納になるんですが」

伏見「……今月こそはちゃんと仕事見つけるし、来月にはまとめて返せるはずなんです、

申し訳ないけど……」

岩切「エアコン、涼しいですね。電気代は払えてるじゃないですか」

伏見「……ほんとこ毎日真夏日だし、体壊すと職探しも出来ないし、電気はお宅さんみたいに待ってくれないで」

岩切「四ヶ月ですからね、ウチだってこれ以上は」

と通路に控えていた木田（27）に、

岩切「停水、お願いします」

木田は頷き、傍らの止水栓の蓋を開け、開栓器を差し込んで作業していく。

伏見「……」

と室内の洗面所に引つ込み、蛇口をひねってみる。

水が出るが、ややあつて、途切れる。

伏見は岩切を寂しく見やり、

伏見「……そりや電気は発電所がゼロから作ってんだから、金払いますよ。けど、あんな達は違うじゃない。雨が降らなきゃお手上げじゃない。水なんて本当は、只でい

いんじゃないの?」

岩切、穏やかに淡々と、

岩切「分納計画の書類、確認のため置いていきます。お支払い、お待ちしております」

と伏見に数枚の書類(分納計画書と停水通知書)を差し出す。

5 住宅街の通り

渴いた郊外の風景の中を、水道部の営業車が走って行く。

6 車内

ラジオから流れる天気予報が、「短かった梅雨が明け、最後に小雨が降った日から、今日で33日目」「県内全域で給水制限が発令中」「一週間後まで降水確率は0%」と伝えている。

運転する木田、助手席の岩切に、

木田「……町じゅうカラッカラだったのに、その上水道閉めちゃって……何か俺ら、悪もんっていうか、弱い者イジメっていうか……」

岩切は平然と、車窓を眺めている。

木田「俺もそろそろ二年目ですけど、未だに停水執行だけは慣れないっすわ……どうすれば好きになれますかね? この仕事」

岩切「俺だって、好きなわけじゃない」

木田「……」

岩切「けど、嫌いでもない」

木田「……難しいっすね……でも、そういうもんすかね、仕事って」

二人、しばし無言で走り続けるが、木田、車内に射し込む太陽をまぶしく見やり、

木田「……今、一瞬、変なこと考えちゃったんすけど……太陽って、只じゃないっすか。幾らお日様浴びても、誰も料金取りに来ないし」

岩切「……」

木田「あと、空気も。(深呼吸して)……只で吸い放題。……だとすると、水だってほんととは、只でいいんじゃないっすかね?」

岩切「……」

木田「……けど、だとすると俺ら食えないですね。ヤバいっすね」

岩切、川沿いを進む車窓を眺め、少し微笑む。

7 小出宅・表

河原の土手下に建つ小さな借家の、庭先の日陰に小出有希(30)が座り込み、ネイルをいじりながら、電池式充電のスマホの画面をチェックしている。

と岩切達がやって来て、

岩切「小出さんですね」

有希「……」

岩切「市の水道の者です」

有希「……ああ」

岩切「滞納分、お支払い願えますか?」

有希「いきなり来られても、困るんで」と再びスマホをいじる。

岩切「いきなりじゃありません、何度も通知させて貰いました」

有希、スマホに見いり、答えない。

岩切「……普通、携帯代より水道が先でしょう」

有希「……(岩切を見すえ)これがなきゃ仕事にならないの。ウチはあたし独りで稼いでるんだから、これがなきゃ水道代も払えないの」

岩切、傍らのポストに貼られた「小出秀作 有希 恵子 久美子」という手書きの表札を見やり、

岩切「ご事情がありなら、差し出がましいようですが、生活保護を申請するということも……」

有希「はいはい、そうすれば公共料金も安くしてくれるってヤツでしょ。前も誰かに言われた」

岩切「そうされる、べきかと」

有希「生活保護は無理。お金出る前に、うちの親とかに連絡いって、そっちで面倒見れ

ないのとか何とか、首つつ込まれるんですよ」

岩切「まあ、手続きですから」

有希「絶対無理。もうとづくに関係終わってるのに、今さらまたあの人達とつながって、またモメたりとかって、マジで耐えられないし」

岩切「……」

有希「てかこんな話、あんたにわかるわけないだろうけど」

岩切「……幾らかでもお支払い願えませんか？ もう四ヶ月分になるんですが」

有希「だから、今日は無理」

岩切「わかりました。(木田に) 停水」

木田は頷き、開栓器を持って家の裏側へ向かう。

有希「……今止めるの？ いきなり来ていきなり止めることないじゃない」

岩切「ですから、いきなりじゃありません」

とそこへ、恵子と、まだシンクロの続きを踊っている久美子がやって来て、

久美子「お母さんただいま。あのね、市民プールでね……」

と姉妹、雰囲気につづいて岩切を緊張気味に見やる。

岩切「……」

有希「お帰り。中、入ってて」

姉妹、従って家の中に入って行く。

岩切、頭上の空をしばし見上げ、

岩切「……プールか。残念でしたね、市内は何処も休業中でしょう……木田、今日は出直し。……(有希に) 一週間後にまた来ます。それまでに入金の方、よろしくお願いします」

有希「……」

岩切「失礼します」

と裏から出て来た木田と共に車に戻って行く。

木田「いんすか？」

岩切「水は只じゃない。停める時は停める」
屋内の開いた窓から、姉妹がジッと岩切達を見送っている。

8 岩切宅・玄關・キッチン・風呂場(夕)

誰もいない中、コンビニ袋を下げた岩切が帰宅して来てキッチンに入り、袋から缶ビールを出して一口あおってから風呂場に向かい、中に入る。

岩切、置いてある子供用のカラフルなじょうろに、湯船に溜まっている水を入れる。

9 岩切宅・庭(夕)

じょうろを持った岩切がリビングから出

て来て、花壇に咲いた幾つものひまわりを水をやっていく。

満開のや、咲きつつあるのや。

岩切、ひまわりを眺めながら煙草を一服。庭のあちこちに、補助付き自転車や玩具がある。

岩切「……」

としばし躊躇った後、携帯を掛ける。

と、留守電メッセージが流れ、

和美の声「岩切です、只今電話に出られません。発信音の後に、メッセージをお願いします」

岩切、何か言おうとするが、

岩切「……」

と結局切り、ひまわりを眺める。

リビングには、男女と小さな男の子の3ショットの、幼児が描いた絵が飾っている。

岩切らしき男だけが、笑っていないようにも見える。

10 小出宅・居間(夜)

真つ暗な中、部屋のあちこちにランダムに並べた大小様々なロウソクに、恵子と久美子が慣れた手つきでライターを使って、火を灯していく。

久美子「お母さん、早く帰って来るかな？」

また朝かな」

恵子「どうか、仕事だからしょうがないよ」

徐々に室内が照らされ、一匹の出目金が泳ぐ金魚鉢や客船の模型や、壁に貼られた世界地図がぼんやりと浮かび上がっていく。

網戸から吹き込む夜風が、灯りをゆらゆらと揺らす。

久美子「じゃあお父さんは？　いつ帰って来る？」

恵子「だから、今頃はスエズ運河の辺りだから、もうしばらくは帰って来れないよ」

久美子「スエズ運河……スエズ運河……」
と世界地図で位置を探す。

恵子「知ってる？　その辺って海賊が出るんだよ」

久美子「嘘だ、海賊なんてアニメのキャラじゃん。いるわけないよ」

恵子「いるの。でもリアル海賊はアニメみたいなヒーローじゃなく、超怖い強盗みたいな奴らなんだよ」

久美子「……ヤバイじゃん、お父さん」

恵子「大丈夫だよ、お父さんのタンカー、最新型だし。海賊の船になんか負けなさい」
久美子「ずっと前、皆で港で見た、超デッカい船みたいなヤツ？」

恵子「あれよりもっとイケてるよ、お父さんの船だもん」

久美子「そっか……すごいよね、お父さん」

恵子「当たり前じゃん」

と久美子、床に仰向けに横たわり、薄灯りに揺らめく室内を見渡す。

久美子「……電気なんか、いらないね」

恵子「アニメ、見なくても？」

久美子「そんな子供じゃないもん。電気より、ロウソクが好き……海の中にいるみたい」

恵子も横たわり、

恵子「だね。海と海で、お父さんが近くにいるみたいだね」

久美子「うん」

11 水道局・料金課フロア（数日後・午前）

デスクにいた岩切が、並べた三万円分の各小銭と紙幣を手際よく数えてケースに収め、滞納整理簿や領収証等の書類と共に、集金鞆に詰め込んでいく。

少し離れたデスクで、料金課長の佐々木

（55）が職員村田（30）に、

佐々木「あの滞納者は悪質だから、確実に停水するように言ったでしょ。……村田君さあ、水は只じゃないんだよ。しかも水不足なんだよ、値上げしたっていい位でしょ」
岩切「聞こえ……」

村田「佐々木に）……こんなこと続けてると、人間変わってっちゃう気がして……」

佐々木「？」

村田「……あの人達、僕らが止水栓閉じるところ必ずジッと見てて、毎回あの目で見られてるうちに、僕が僕じゃなくなっていく気がして……」

佐々木「……村田君、難しいこと言わないでよ……弱ったなあ」

岩切、立ち上がって佐々木に、

岩切「本日第一班、停水予定十三件です。出発します」

佐々木「はい、いつてらっしゃい」

12 水道局・裏の駐車場

木田が営業車に開栓器等の機材を積んでいる。

岩切がやって来て、薄汚れた車のボディに触れ、

岩切「……」

木田「思いっきり洗えたら気持ちいいんですけど。市民に節水を訴える以上、水道局がまずは見本を示せ、とかいうお達しで」

岩切「……」

と、晴れ渡った空を見上げる。

木田も、つられて見上げる。
木田「（見上げたまま）……今日も、カラッ

カラですね」

岩切「見上げたまま」……カラツカラだな」

13 小出宅・有希(夫婦)の部屋

有希、鏡の前で念入りにメイクをしている。
く。

丁寧、髪にブラシを入れる。

14 河原

日よけの帽子を被って、安物の釣り竿とタモ網を持った恵子と久美子が並んで河岸に佇み、水位の低い川面をぼんやり見ている。

恵子「……ひからびちゃって、魚もいないみたい」

露になった中州で干上がっている、数匹の川魚の死骸を見やり、

久美子「あれ、焼いたら食べれるかな? お

しょう油ジュツと掛けて」

恵子「無理、お腹こわすよ」

久美子「お父さんが釣ってくれたお魚、超美味しかったじゃん。おしょう油、ジュツと掛けて」

恵子「あれはピッチピチしてたし、磯釣りだったし」

と、有希がやって来て、二人に寄り添って、

有希「大漁?」

久美子「ゼーんぜん」

有希、ふと二人の髪を撫で、

有希「随分伸びちゃったね……明日は仕事休みにして、切ってあげようか?」

久美子「これからお仕事?」

有希「頷き」行ってくるね」

久美子「いつてらっしゃい」

と、有希は歩き去りかけ、思い出したように立ち止まり、

有希「恵子」

恵子、小走りに有希のところへ。

有希「手持ち、もうないんじゃない?」

恵子、頷く。

有希「遠慮しないですぐに言ってよ」

と財布の中の紙幣を数え、千円札を数枚渡す。

恵子、一枚だけ有希に差し出し、

恵子「これで一週間は余裕だから。千円多い」

有希「いいから」

と押し返すと、恵子はまた差し出し、有希もまた押し返すが、恵子は更に差し出し、

し、

有希「受け取り」……ごめんね」

恵子「何が?」

有希「……あたしだって、あんたの歳には親

のことなんか大体分かってたし……あんなあたしよりずっとバカじゃないし」

恵子「……」

有希「……ちよっと前までは、もつとあたしに何でも話してくれたじゃない……言いたいことあったら、何でも言てよ」

恵子「……髪切ってくれたら、嬉しい。明日じゃなくてもいつでもいいから」

有希「……(微笑み) わかった……いつてきます」

恵子「いつてらっしゃい」

久美子、タモ網を踊るように振り回しながら、

久美子「いつてらっしゃーい」

久美子「いつてらっしゃーい」

久美子「いつてらっしゃーい」

15 シャッター商店街

その片隅に、「坂上洋傘店」という雨具専門店が店を開いている。店先には「全品半額」のビラ。

16 洋傘店・店内

ズラリと並んだ様々な傘に囲まれ佇む岩切と木田に店主・坂上(71)が、

坂上「しょうがねえじゃねえかよ、この天気

で商売上がつたりなんだからよ。水道代なんか、ひっくり返ったって出やしねえよ」

木田「……でも逆に日照り続きだと、日傘売

れちゃったりしません？」

坂上「それがちつとも売れねえから困ってんだよ」

奥の部屋から、妻・節子(73)が現れ、節子「降ろうが照ろうが、どっちにしろお客なんか来ないの。ビニール傘が出て来た時に、きつぱり店畳めばよかったの」

坂上「うるせえよ、ばばあ。ビニールなんか傘じゃねえ。店や金のこととは全部俺がやってんだから、口出しすんなって言ってるだろ」

岩切達は居心地悪いが、節子は平然と座り、煙草を出して一服する。

岩切「それで、滞納金の方は」

坂上「だから払えないって言ってるんだろ」

節子「……お水、止められちゃうんですか？」

岩切「はい、規則ですから」

と節子、手元の煙草入れの巾着の中から小さく折り畳んだ数枚の一万円札を取り出し、伸ばして岩切に差し出す。

坂上「ばばあ、何だその金？」

節子「あんたに内緒でつきあってる、愛人かのお小遣い」

坂上「……」

節子「うそ。年金からほんのちよつとずつ貯めてきた、ヘソクリ。(岩切に)足ります?」

岩切「充分です。釣り銭計算しますんで

……」

坂上「おい、兄ちゃん」

岩切「……はい」

坂上「俺がばばあに頭が上がんないってことは、誰にも言うなよ。口止め料にどれでも好きな傘、持てけ」

岩切「……いやあ、大丈夫です、言いません」

坂上「遠慮すんなよ。その年齢好ならガキの二、三人はいるんだろ? お子様用もとりどりあるし、何本でも持ててけよ」

岩切、カラフルな小児用の傘が並んだ一角を見やり、

岩切「また今度、子供と一緒に買いに来ます」

17 カフェ・店内(夜)

有希が独り窓際の席に座り、コーヒーを啜っている。

と窓の外を若い男(27)がやって来て、窓越しに有希と目が合う。

有希・男「……」

若い男、そのまま歩き去って行く。

有希、慌てて男を追って店外へ。

18 カフェ・表(夜)

有希、若い男に追いつき、

有希「花マル」さんでしょ? メールくれた」

花マル「……ごめん。何か、合わないさうだし、やめとこう」

有希「……ドタキャンなしって、約束したじゃない」

花マル「いやー、マッチングなんて、こんなもんつしよ。他のつかまえばいいじゃん」

有希「……昼間も別口にすっぱかされたし……わかるでしょ? あたしにも生活が……」

花マル「(遮り)聞きたくないって……ひいちゃうんだよな、そういう重い。向いてないんじゃない? こういう稼ぎ方」

有希「……」

花マル「ちゃんと、普通に、働けば?」

有希、男を見すえ、

有希「だったら、中卒のバカで不器用な女でも子供二人養える。普通の仕事、こんなシヨボい田舎で見つけられんなら、見つけてきてよ」

花マル「……怖いよ、あんた」

有希「……」

19 カフェ・店内

有希が独りとほとほと席に戻り、座り込む。

有希「ぼんやりと」……」

徐々に、涙があふれてくる。

と少し離れた席にいた大林（38）が、アイスや果実大盛りのワッフルを持って、有希の隣に座る。

有希「慌てて涙をぬぐい」……？」

大林「たまには甘いものもいいかなって頼んだんだけど、こんなにデッカいのが来ちゃってさ。とつても独りじゃ食いきれないから、手伝ってくんないかな？」

有希「……」

大林「こういう処は家族で来るもんらしいから、分け合って食えばいいんだろうけど、あいにくこっちは独りもんだし。困ったもんだと思つてたら、どうやらあんたも独りらしいし、手伝ってよ」

有希「……」

と、思わず笑つてしまう。

大林「笑わないでよ、困ってるんだからさ」

有希、クリームをスプーンで取り、食べ、有希「……美味しい……こういうの、久しぶり」

大林「……疲れちゃってんじゃないの？ たまには必要だよ、甘いもんも。どんどん手伝つてよ」

ともう一口食べる有希を、大林は微笑んで見る。

有希、ふと大林に寄り添い、首筋辺りの匂いを嗅ぐ。

大林「？」

有希「……ホツとする匂い……ウチの旦那みたいに、水の匂いがしない」

大林「旦那、いるんだ……まあ、いるか、普通」

有希「……いなくなった。一年以上前に」

大林「……」

と大林も、一口食べる。

有希「……」

も、食べる。

二人「……」

と並んで座ったまま、二人は食べ続ける。

20 岩切宅・キッチン（数日後・朝）

下着姿の岩切が、みそ汁の具に茄子を手際よく包丁で切っている。

21 水道局・料金課フロア（午前）

岩切がデスクで、外回りの準備をしている。

村田がやって来て申し訳なさに、

村田「課長からお話あったと思いますが、しばらく外回りから外れます。岩切さんにも

しわ寄せ行っちゃうと思いますが、すみません、よろしくお願いします」

岩切「ま、いいさ……（と整理簿を見やり）御影町の、ええと、小出秀作の入金状況、確認してくれる？」

村田「はい」

とパソコンに向かい、操作していくが、ふと、手を止め、

村田「……岩切さんは、平気なんですか、この仕事」

岩切「……」

村田「岩切さんは本当は、とつくにわかってるって気がして」

岩切「何が？」

村田「また一つ水道閉じてくことに、自分だんだん変わっていつちゃうって、とつくに感じてるはずだつて……」

岩切、村田をしばしジツと見やり、そして、

岩切「いや、別に」

村田「……（と操作に戻り）……小出秀作さん、入金ありません」

岩切「了解。（と立ち上がり）本日第一班、停水予定十九件です。出発します」

村田「……いつてらつしやい」

22 河原の草むら

背の高い雑草群の中、恵子と久美子が離れてそれぞれ、何かを探しつつ、

久美子「お母さん、今日も帰って来ないのかな? 髪の毛切ってくれるって、約束したのにね」

恵子、キッズ携帯を出し登録されている「お母さん」に、電話を掛ける。

「電源が入っておりません」のメッセージ。

恵子、切って、

恵子「……まだ忙しいみたい……代わりにあたしが切ってあげようか?」

久美子「やだ。お姉ちゃん、ヘタだもん」

と草むらから赤い実を摘み取り、

久美子「また見つけた、蛇莓」

23 小出宅・近く

停めた営業車から降りつつ木田、岩切に、

木田「で、今朝は、何作ったんすか?」

岩切「茄子のみそ汁」

木田「……自炊とか、しない方がいいんじゃないすか? 何つうかこう、もつと男独りで困っちゃってる感出した方が、奥さんも

帰って来やすいような」

岩切、苦笑。木田、機材を下ろしつつ、

木田「……最近妙に、そろそろあたし達どうすんの? みたいなオーラ、出してくるん

ですよね……いや、俺の彼女なんすけど……どんなもんなんすかね、結婚って」

岩切「俺に聞くんか」

木田「てか、岩切さんが結婚した切っ掛けって、何だったんですか?」

岩切「……向こうが、妊娠したから」

木田「あー」

岩切「あー、って何だよ?」

木田「……いや、だったら俺もしちゃうかなって。俺だって、そのうち子供は欲しいし。今はまだ、わかんないけど……やっぱり自炊禁止にしましょうよ。息子さんも、帰って来やすいように」

岩切「……」

24 小出宅・表

岩切と木田が玄関に立ち、呼び鈴を押したりノックしたりするが、反応はない。

木田「(内部に聞き耳を立て)……居留守じゃないですね」

岩切「予定通り、停水執行」

と裏側にある水道栓の方に向かいつつ、

木田「ここの世帯主、仕事してないんすかね?」

岩切「体こわして辞めるまでは、船乗りだったらしい」

木田「今は?」

岩切「さあな」

木田が作業を始めようとする、

岩切「……待った」

河原の方から、恵子と久美子がやって来るのが見える。

25 小出宅・玄関

屋内から恵子が両手に所持金を持って来て、上がり框に座った岩切の前に、丁寧に千円札一枚と、大小の小銭を全て並べ、

恵子「全然足りないって知ってます。でも、今はこれだけ」

岩切「……」

と、久美子も奥から出て来て神妙に、小銭の横に蛇莓の実を二つ、並べる。

岩切「……お母さんは、何時ごろ帰るの?」

恵子「……」

岩切「……帰って、来るんだよね?」

恵子「……」

久美子「帰って来るよ、髪切ってくれるんだもん」

岩切「……」

と、札と小銭をまとめて恵子に差し出し、岩切「これは、持ってた方がいい」

が、恵子はそれを押し返す。

岩切「……」

と、有無を言わせず恵子に金を握らせる。

恵子「停めるんですね、水道」

岩切「……規則だから」

恵子「……」

岩切、表で開栓器で素振りをしている木田に、

岩切「木田。水溜めといてやって。家中のありつたけの入れ物に」

木田「ああ、はい。失礼します」

と屋内へ上がっていく。

恵子「岩切を見つめ」……」

岩切、目を逸らして蛇母を見やり、手に取りつつ、

岩切「バスタブとかバケツとか、溜められるだけ溜めとけば、いくらかもつから」

恵子「……わかりました」

と台所へ向かう。

岩切、手のひらの蛇母をジッと眺める。

26 小出宅・風呂場、台所等

台所では恵子がヤカンや鍋に水を溜め、風呂場では木田が、水面に玩具の船が浮かんだバスタブに水を溜めつつ、それをバケツや洗面器に分けていく。

27 小出宅・玄関、台所

座ったままの岩切の前に、久美子が金魚

鉢を抱えて来て、彼の手のひらを見やり、

久美子「あげる、蛇母」

岩切「……ありがとう」

久美子「鉢をさし」お水、取り替えて」

岩切、蛇母をスボンのポケットに入れ、鉢を受け取って台所に向かう。

久美子「船長つていうの」

岩切「？」

久美子「そのコ。お父さんが金魚すくいであつてくれたの」

容器に水を満たしていた恵子が場所を空け、岩切は慎重に鉢の水を半分ほど捨てて、

恵子が差し出すカルキ抜き液を入れ、新たな水を足していく。

久美子「（ニッコリ）ありがとう」

岩切「……」

風呂場から木田が戻って来て、

木田「まあ、こんなもんじゃないすか」

恵子「見ていいですか？ 停めるところ」

岩切「……」

28 小出宅・裏手

岩切が閉めていく止水栓を、姉妹がジッと見つめている。

岩切「閉めつつ」……」

姉妹「見つめ」……」

と、通りを木田が小走りに戻って来て、

持っているコンビニ袋を三人にかざし、

木田「買って来ました、当たりつきすよ」

29 小出宅・庭先

岩切、木田と姉妹がそれぞれあちこちの日陰に座り、アイスクャンディーを食べ

木田「（久美子に）へえ、川によく行くんだ。何して遊ぶの？」

久美子「魚釣ったり、お花とか蛇母とか、探したり」

岩切と恵子は、無言でアイスを食べるばかり。

木田「あの川、魚なんかいるの？」

久美子「いるよ、お父さんはこんなに大きい釣つたし」

恵子、岩切の食べかけのアイスを見やり、

恵子「……当たりました？」

岩切、自らの棒を見やり、苦笑しつつ首を横に振る。

恵子「……あたしも」

久美子「川は海に行くから、川のそばが好きなの。だからお父さんは、このお家にしたの」

木田「海か。いいよね、海。夏はアイスと海だよ」

久美子「(自らの棒を見やり、がっかりと)

……はずれ」

岩切、恵子に書類と名刺を差し出し、

岩切「給水停止通知書と、名刺……お母さんに渡して、すぐに連絡くれるように、必ず伝えて」

恵子、名刺をジッと見つめ、

恵子「……(読み方が分からず) いわ……」

岩切「岩切」

恵子「岩切さん」

木田、自らのアイスの棒を見やり、

木田「出た、当たりもう一本」

とニッコリと、ガッツポーズ。

岩切、足元の小石を木田に軽く投げつける。

木田「……痛……なんすか？」

岩切、もう一発投げつける。

木田「……あ」

とようやく察して、久美子に棒を差し出す。

久美子「(受け取って) ありがとう……(恵

子に) これ、お母さんにとっておこう」

岩切「……」

30 小出宅・表

恵子と久美子、岩切達を見送ろうと佇んでいる。

岩切、恵子に、

岩切「お母さんに、必ず言うんだよ」

恵子、困ったように微笑む。

岩切「……」

31 岩切宅・玄関(夕)

帰宅して来た岩切、ドアの前でスボンのポケットを探り、鍵を取り出す。

と、手が血のように赤く濡れている。

岩切「……」

開いた手の中で、蛇母の実が潰れている。岩切、その実を口に含む。

32 岩切宅・庭(夕)

岩切が、煙草を吸いつつひまわりを眺めている。

煙草を消し、携帯を掛けると、妻・和美

(37) が出て、

和美の声「……はい」

岩切「……ああ、俺だけ……崇、蛇母って

食べたことあったっけ？」

和美の声「……え、何？」

岩切「いや、川があるなら、御影町の方に。

あそこ河原で取れるんだよ、蛇母」

和美の声「……ごめんなさい、ウチのお店

これからかき入れ時なの。急ぎの話じゃなかったら、悪いけど」

岩切「……ちよつと用足しにとって実家戻った

の、まだ梅雨入り前だったよな……そろそろ終わってもいいんじゃないか、用足し」

和美の声「……また、掛け直すから」

岩切「……わかった」

と、切れる。

岩切「……」

33 小出宅・居間(数日後)

手元に金魚鉢を置いてうつ伏せに寝そべった久美子が、画用紙に色鉛筆で金魚の絵を描いている。

開け放ったサッシの向こうの庭では、恵子がバケツの水でTシャツや何かを洗っている。

恵子、久美子が金魚を奇妙な色で塗っているのに気づき、

恵子「船長、そんな色じゃないじゃん」

久美子「赤鉛筆、全部使っちゃった」

恵子「……買ってあげようか、赤鉛筆」

久美子「それよりこれ買って、もうすぐなくなりそう」

と、傍らにある金魚の餌の容器を振る。

恵子「船長のエサなんて、何でもいいんじゃない？ パン屑とか」

久美子「駄目だよ。これじゃないと大きくならないって、お父さんが言ってたじゃん」

恵子「……エサ、幾らだっけ？」

と、近所の主婦・竹内(52)が回覧板で
自らを扇ぎつつ、庭に入つて来て、

竹内「今日も暑いわね、こんなにちは」

恵子「こんにちは」

竹内「はい、回覧板。(と渡し、居間を覗き
込み)……お母さんは？」

恵子「……出掛けてます」

竹内「……(絵日記を見やり)……久美ちゃんには金魚がそんな風に見えるの……かわいそうに」

久美子「……(無視して描き続ける)」

竹内、二人をしみじみ見やり、

竹内「あなた達、本当にかわいそう」

恵子「……何が？」

竹内「……児童相談所って、知ってる？ お
ばさん、その人に電話してあげようか？」

恵子「何で？」

竹内「(躊躇うが)……昨日の夜、街で見掛
けたの、あなた達のお母さん。すごく楽し
そうに笑つてた……男の人と、一緒に」

恵子「(ささげり) もういい」

竹内「……違うのよ、おばさん、あなた達の
味方なのよ。前からずっと心配してたの。

お父さんからも音沙汰ないんでしょ？ あ
るはずないわよね、わたしの聞いたところ
じゃ、随分危なっかしい商売に手を出して

……」

恵子、いきなりバケツの水を竹内にぶち
まける。

竹内「ずぶ濡れになり)……」

恵子「あなたに関係ないじゃん。もう来ない
で」

竹内、顔や髪を拭いつつ、独り言のよう
にぶつぶつ、

竹内「……結局いつもこう……わたしの気持
ちも知らずに、どいつもこいつも恩を仇で
返す奴ばかり……ケンジさんもお義母さん
もシンイチも、コンビニのあの女もシン
イチの担任も、こんな子供にまで……もう
知ったこっちゃない……もう知ったこっ
ちやない……」

姉妹「……」

竹内、急にそよそしく、何事もなかつ
た様に、

竹内「回覧板、来月からはポストに入れとき
ますから。きつちり次に回して下さいよ。
なくして、うちのせいにされると困ります
から……じゃあ」

と、びしよ濡れのまま出て行く。

恵子、地べたに落としてしまった洗濯物
を拾いつつ、

恵子「あの人の話、全部嘘だから」

久美子「……うん、わかつてる」

と金魚を描き続けながら、

久美子「お父さんが帰ってくれば、ゼーんぶ
『元通り』になるよね」

恵子「……うん」

久美子「いつ帰つて来る？」

恵子、カラリと晴れ渡つた空を見上げ、
恵子「……今度、雨が降る頃、かな」

34 岩切宅・キッチン(夜)

相変わらず喝水を知らせる天気予報を聞
きつつ、岩切がビールを飲みながら夕食
を作っている。

予報が終わり、テレビが「運転手が熱中
症で意識を失ったトラックが、小学生の
列に突っ込んだ」というニュースになる。
それを聞きつつ包丁でネギを刻む岩切、
いきなり呻いて包丁を取り落とす。

岩切「……」

と左手の人差し指から血が滲み、垂れて
くる。思いのほかどんどんと血が垂れ続
け、岩切、処置に戸惑い、

岩切「……」

と、びしよ濡れのまま出て行く。

恵子、地べたに落としてしまった洗濯物
を拾いつつ、

恵子「あの人の話、全部嘘だから」

35 小出宅・居間(深夜)

布団に横たわって眠っている恵子、ふと
目覚める。
並べて敷いてある布団が、空っぽだ。

サッシの開いた向こうの庭を見ると、月明かりの下で、傘をさした久美子が囁くように、

久美子「雨、雨、降れ、降れ、父さんが、お船でおむかえ嬉しいな……」

と歌いつつ、空のプールでのシンクロごっこのように、踊っている。

恵子、庭に顔を出し、

恵子「……何してんの？」

久美子「（踊り続け）雨が降れば帰って来るんだよね、お父さん。だから、雨の神様にお願いしてるの」

恵子「……いないよ、神様なんて」

久美子「（聞こえず）何か言った？」

恵子「別に」

と恵子も傘を取って庭に出て、おもむろに傘をさして、久美子と一緒に踊り出しながら、

恵子「どうせなら大雨になっちゃう位、町中が水でいっぱいになっちゃう位、思いつきりおいのりしちゃう」

と二人は、いつまでも踊り続ける。

36 水道局・裏の駐車場（翌日）

営業車の傍らで出発の準備をしつつ、料金課職員・岸本（55）が新人・高岡（30）に、

岸本「だから水代だけじゃなく、日本が誇る高度な浄水システム、完璧な供給システムを維持するために、料金が必要なわけだから」

高岡「ああ、なるほどですね」

岸本「それを優しく、丁寧に先方に説明して、納得して貰って、まあ納得しなくても、きっちり払っていただく。それが俺たちの仕事」

職員・柴田（35）、明らかに、

柴田「最初はきついかも知れないけど、慣れちゃえば何でもなくなるから」

高岡「なるほどですね」

並んで停めてある営業車に、岩切と木田が乗りこみつつ、

木田「あれから連絡あったんすか？ 小出秀作のところから」

岩切「まだ」

木田「……気になんないですか？ あの子達のこと」

岩切「気にしたって、しょうがない」

と、指に巻いた絆創膏を他の指で撫でる。

木田「……それ、奥さんに話した方がいっすよ。結構同情ひけそうじゃないですか、自炊男の情けない話、的な」

岩切「……思いのほか血が止まなくて、慌てて薬の引き出し開けたら、中身が空っぽ

で」

木田「？」

岩切「嫁さん、子供の薬とか、アレルギーがどうとかってこだわって選んでたし、丸ごと実家に持ってたらしい」

木田「いいお母さんっすね」

岩切「……そういうの、わかんなくてさ……俺の親は、俺が怪我なんかしたら薬どころか、面倒掛けんって、怒るだけだったしな」

37 木造アパート・廊下

一室のドアの前に岩切と木田が佇んでいると、閉ざしたドアの向こうから、女のヒステリックな声で、

女の声「帰れよ！」

岩切「……（ドア越しに）井沢芳子さん、ですよね？ 出来れば、出て来ていただけますか？」

井沢の声「帰れよ！」

岩切「ですが、お宅様は未納が続いてますので」

井沢の声「帰れよ！」

岩切「……わかりました。水道、停めさせていただきます」

と木田に頷くと、木田は廊下の水道栓に向かい作業を始める。

38 井沢芳子の室内

薄暗い中、ドアの前に、ワンピース姿で汗ばんだ後姿の井沢が、ジッと佇んでいる。

岩切の声「井沢さん、今後のお支払いに関してですが……」

井沢、素足でドアを強く蹴りはじめる。

39 木造アパート・廊下

井沢の声「帰れ！……帰れ！……帰れ！……帰れ！……」

岩切はその場から動かず、振動するドアをジッと見つめる。

40 小出宅・表

その数件先の物陰に隠れるように佇む希が、小出宅をジッと見ている。

と、恵子と久美子が出て来て、有希に気づくこともなくじゃれ合いつつ、何処かへ歩き去って行く。

有希は動かずその場から姉妹を寂しく見送り、

有希「……」

と、無人の小出宅に向かう。

41 小洒落たワンルーム・マンションの通路

岩切が一室のチャイムを押すが、反応がない。

室内からは、シャワーと男の鼻歌がもれ聞こえるばかり。

岩切、穏便なペースで、チャイムをくり返す。

やつとシャワーが止まり、濡れた体にバスタオルを巻いた今西（21）が、不機嫌にドアを開ける。

今西「……誰？……風呂の邪魔されんの、マジで嫌いなんだけど」

岩切「淡々と」市の水道の者です。今西さんですね。督促の期限を過ぎましたので、停水を執行します」

今西「（岩切を睨み）……テースイ？ 意味わかんねえ」

岩切「お伺いするのは、今日で三回目です。一ヶ月前も、停水予告書を入れさせていたいただきました」

今西「そんなもん、知らねえよ」

岩切「でしたらやむを得ません。停めさせていただきます」

今西「停めんなよ」

岩切「規則ですから」

今西、いきなり岩切の胸ぐらを掴み、今西「何でお前にそんなこと出来んだよ？ お前、何様だよ？」

岩切「私には、何も出来ません。水を停めるのも停めないのも、お宅様次第です。それだけのことです」

言いながら岩切、抗わずに下ろしたままの左手を強く握りしめる。絆創膏から血が滲み、一筋垂れる。

と、中から下着姿の女・さや（22）がペットボトルの水を飲みつつ顔を出し、さや「水道代、幾ら？」

岩切「……四か月で二万六千八百四十一円になります」

さや、財布から三万を出して今西に渡し、また中へ消える。

今西「……」

と三枚の札を手中で乱暴に丸め、岩切の足元に落とし、

今西「拾え」

岩切「……」

廊下で見ていた木田、堪えきれず今西に、木田「あんたさあ、さつきからさあ……」

岩切、木田を制し、ひざまずいて札を拾って伸ばしながら、

岩切「思い出しました。お宅様、確か二年前にも停水しました。その時は、ご実家のお母様がわざわざ水道局までお支払いに来て下さったはずですよ」

今西「……」

岩切「うまくいってるんですね、お母様とも彼女さんとも。……彼女とは、ご結婚されるんですか？」

今西「……あ？」

岩切「どうすればうまくやれるのか、教えて貰えませんか？ 親や嫁さんと」

今西「……何言ってるんだ？ お前」

岩切「さあ、わかりません……」

と伸ばした札を見やると、左手の血がついている。

岩切「……釣り銭計算しますんで、お待ち下さい」

42 熱帯魚専門店・店内

ズラリと並んだ様々な水槽を、久美子が楽しそうに眺めている。

店長の石川、店内を歩き回りつつ携帯にまつたらガチで厳しいですよ。ウチの子（魚）達、皆は維持出来ないから、可哀想だけに安物の子から間引いていくしかないですよ」

恵子は餌類が並んだ棚の前で、自宅にあるのと同じ金魚の餌を見つめている。「特売 498 円」とある。

恵子、握りしめていた手のひらを開く。五百円玉一枚と、数枚の一元と五円玉が

あるのみ。

恵子「……」

その容器を手に取り、持っている手提げ袋を見やる。

恵子「……」

緊張しつつ、容器を手提げに近づける。と、石川が傍らに立っていて、

石川「どうするの？ それ。お買い上げですか？」

恵子「……」

と久美子が寄って来て、久美子「お買い上げだよ。船長の好物だし」

43 川沿いの通り

営業車が走って行く。

44 車内

助手席で左手の絆創膏を貼り替えている

岩切に、

木田「最悪でしたね、あのガキ。やっぱ天気の良いかな」

岩切「……」

木田「幾ら金積まれようと停水して、水の有り難み、分からせてやりたいですよね、クソガキに」

岩切「……水は、只でいいんじゃないかったっ

け？」

木田「あいつは別ですよ。ああいう輩は、お日様も空気も金取んなきゃいけないぐらいでしょ」

木田、運転しつつ車窓を見やり、

木田「ちょうど通りますね、あの子達の処……ついでに寄ってみます？」

岩切、絆創膏を貼り終えるまで黙っていたが、

岩切「寄ってどうする。またアイス買ってるか？」

木田「いいっすね。そうしましょうよ。俺、また当たり付きの買ってくるし」

岩切、しばし応えずに車窓を見ているが、岩切「……腹減らしたら、飯食わせてやるのか？……ついでに水道代も肩代わりするか？ 電気やガスはどうする？……何なら、消えた親父にお前が成り代わるか？」

木田「……いやあ……」

岩切「支払いが滞れば水道を停める。払えば開ける。俺達に出来るのは、それだけだ」

木田「……何か、すいません」

岩切「それだけで、充分だろう」

行く手に、小出宅が見えて来る。

岩切・木田「……」

と車はそのまま小出宅を通り過ぎ掛けるが、木田が急停止する。

岩切「……お前なあ」

と木田、小出宅の方を指す。

ちょうど中から、大きなバッグを抱えた

有希が出て来たところだ。

岩切「（しほし見やり）……」

と独り車を降りる。

45 小出宅・表

ドアに鍵を掛けた有希が振り返ると、岩切が佇んでいる。

有希「（驚くが）……ああ、水道の人」

岩切「ご連絡、お待ちしてたんですが」

有希「……は？」

岩切「私の名刺と停水の書類、娘さんから受け取ってるでしょう？」

有希「……何の話？」

岩切「……今の今まで、帰ってなかったんですか？」

有希「……大きなお世話」

と行こうとするが、岩切は立ちほだかり、岩切「帰る暇もない程商売が繁盛してたんなら、お支払い願えますよね？ きつちり入

れて貰えれば、今すぐ水道開けますよ」

有希「……今はまだ、無理」

岩切、有希が抱えた大きなバッグを見やり、

岩切「……旅行にでも行くんですか？……水

道代も子供達も放り投げて……海ですか？

……それとも、気持ちのいい夕立が降ってくるような町ですか？」

有希「税金で食ってるような奴に、何がわかんよ」

岩切「……」

有希「……そういう奴らとも、何度かしたよ……皆スケベな癖に、ケチで嘘つきばっかりだった」

岩切「……」

有希「……けど、今度の彼は違うの。彼とは、お金じゃないの……タイミングが大

事だから、子供がいるってことはまだ言えてないけど……でも彼なら、きつとわかってくれて、全部受け入れてくれる……」

岩切「……」

有希「……今はまだ無理だけど、水道も、何もかも、きつとうまくいくはずなの」

聞いていた岩切、抑えようとするが、抑えきれず、

岩切「……さつきから何自分の話ばっかしてんだ？……あんた、それでも親か？」

と有希を見据えると、有希も岩切を睨み返す。

岩切・有希「……」

と、有希がいきなり岩切の肩を押さへ、戸惑う彼の首筋の辺りの匂いを嗅ぐ。

岩切「？」

有希は苦笑しつつ岩切を突き放し、

有希「やつぱり。あんたもウチの旦那みたい

に、水の匂いがする」

岩切「……」

有希「そういう男は、まともに家族も守れない。あんた、あたしにとにかく言えるような男なの？ あんたの家族は、幸せなの？」

岩切「……」

有希「今度の彼は、水の匂いなんかしない。鉄と火の匂い……だから、信じてる」

と、バッグを抱えて歩き去って行く。

46 シャッター商店街（夕）

店先のビラが「全品七割引」に貼り替えられて、洋傘店の前を、恵子と久美子が通り過ぎて行く。

姉妹、通りに点在する全ての自動販売機に一つ一つ歩み寄り、釣り銭口に指を突っ込んだり、這いつくばって地面との隙間を覗き込んだりしていく。

恵子、持っていた小枝で隙間から硬貨をかき出し、

恵子「十円みつけ」

久美子「ズルい、あたしも見つける」

と、ちよつと楽しげに次の自販機に駆け寄り、探し続ける。

商店街の外れに置いてある煙草の自販機で、制服姿のギャル系の女子高生・英里菜(17)が、普通にタスポを使ってタバコを買い、傍らの地べたにベタツと座り込み、一服し始める。

やつて来た恵子、彼女をちよつと警戒しつつ釣り銭口を探る。

英里菜、どんよりした顔で恵子を見やり、英里菜「超懐かしー、あたしもあんだ位の頃同じことしてた」

恵子「……」

英里菜「金ないんでしょ? でもそんなじゃ、お握りも買えねーよ」

恵子「……」

英里菜「知り合いに超子供好きのおっさんいるけど、紹介しようか? ちよつと我慢すれば、一晩で軽く十万とか稼げるよ」

恵子「……」

とやつて来た久美子の手を取り、急に走り出してその場から逃げ出す。

英里菜、それを見送り、

英里菜「……うまく逃げきれよ……」終わるなよ」

と少しだけ、微笑む。

47 水道局・裏の駐車場(夕)

営業車から降りた岩切、車から機材を降ろす木田に、

岩切「水の匂いって、どんな匂いだ?」

木田「……は?」

岩切「嫁さんには、煙草臭いって言われてたけど……木田君よろ」

木田「はい」

岩切「さつきから、妙に喉が渴いてさ。つき合うか?」

48 小出宅・居間(夕)

テーブルの上に千円分ほどのスナック菓子と、「ごめんね かならずかみきつてあげるから もうすこしまつてね」と書かれたメモが置いてある。

久美子、お菓子を手に取り、

久美子「お母さん、来てたんだ。お母さんのお土産だ」

と、メモをジツと見つめていた恵子、いきなり久美子からお菓子をとり上げ、残りのお菓子も次々と、庭に乱暴に放り捨てる。

久美子「……」

恵子「……」

久美子は庭に降り、お菓子を全て拾い、戻って来る。

と恵子、また奪い取って床に捨てて踏みつけ、庭に蹴り出す。

久美子「……」

とまた庭に出て、箱の潰れたお菓子を大事に拾い、戻ってくる。

久美子「……食べようよ、お姉ちゃん」

恵子「……」

49 商店街の裏通り(夜)

制服姿の英里菜、スーツの中年男と寄りそい、余裕であいらいながら、歩いていく。

すれ違うように、既に酔った岩切と木田がのらくらと寂れた通りを歩きつつ、

木田「で、何で岩切さんは、この仕事やろうと思つたんすか?」

岩切「たまたま流れついただけ」

木田「だから、それは何度も聞きましたってば。酔った勢いで、もうちょい教えて下さいよ」

岩切「……ガキの頃から親と反りが合わなくて、十代半ばで働き出して、あつちこつち転々として、たまたま試験に中途で受かったってだけ」

木田「流れついたんすか、水みたいに」

岩切「……そんなもんだ。だから仕事も、流れるままにやつてただけだ」

木田「水みたいにな」

岩切「それで、充分だろ」

木田「充分っすか」

岩切「……充分で、いたいんだけどな」

と、いきなり横道から8、9歳の薄汚れた服装の少年が駆け出て来て、岩切とぶつかりそうになる。

岩切「……」

少年、無表情に岩切を見上げる。

岩切「……子供が歩く時間じゃないだろ」

……家は……」

少年、いきなり岩切にリアルな外見の拳銃を突きつける。

岩切・木田「……」

少年が引き金を引くと、銃口から吹き出す水が岩切の顔を濡らす。

岩切「……」

少年、無表情のまま、また横道へ走り去ってしまう。

岩切、顔を拭いしつつ少年を追って横道を覗き込むが、もう何処にもいない。

木田「（も覗き）消えちゃいましたね、座敷童みたいにな」

と岩切、横道に落ちている拳銃に気づき、妙に懐かしげに笑いながら拾い上げ、

岩切「こういうの、俺も欲しかったよ、ガキの頃。見た目が本物そっくりで……でも結

局、買って貰えるわけもなくて」

と岩切は拳銃をかまえ、あちこちに狙いを定めたりしつつ、

岩切「本物みたいだろ？」

木田「まあ、ぼいっすね」

岩切「木田君よ。こいつ使って、テロでも起こすか」

木田「は？」

岩切「ダムを乗っ取って、水道を俺らのものにすんだよ」

木田「……」

岩切「ダムの取水口の警備なんてたかが知れてる。その気になって腹括りや、俺らでもやれるだろ。で、大元から水を停めるんだ」

木田「はあ」

岩切「で、政府と取引する」

木田「取引って？」

岩切「決まってるだろ。水を只にするんだよ」

木田、一瞬ボカンとするが、すぐに嬉しそうに微笑む。

岩切も微笑み、二人はしばし静かに、笑い合う。

木田「どうせならついでに、ビールも只にして貰いましょうよ。発泡酒で妥協してもいいけど」

岩切「駄目だ、水だけ」

木田「水だけか。水だけでも無理っぽいすけどね、その取引」

岩切「無理か」

木田「まあ、ぼいっすね」

岩切「だったら向こうが渴ききるまで、根比べするさ」

木田「向こうって？」

岩切「政府とか、上の奴らだよ」

木田「……よくわかんないけど、そういう奴らは、高つかいミネラルウォーター買って、がぶがぶ飲んで、超余裕なんじゃないっすか？」

岩切「……」

木田「で、普通の人達が先に、皆渴いて、死んじゃうんじゃないすか？……よくわかんないけど」

岩切「……じゃあ、水が必要な世帯が俺を選んで、水道を開けていく、只で。……最初に開けるとすれば……何処かな？」

木田「とりあえずはやつぱ、奥さんたちの処でしょ。そしたら、帰って来てくれるんじゃないすか？」

岩切「……」

と岩切、拳銃を木田に放り渡す。

その一角にある水場で、恵子と久美子がバケツや鍋やヤカンに水を溜めている。溜め終え、二人でその全てを持つととするが、持ちきれず、

久美子「水って、重いね」

51 岩切宅・玄関／風呂場（深夜）

酔った岩切が帰宅して来て、風呂場に入ってバスタブに溜めた水で顔を洗う。

岩切「……」

酔いが冷めないのか、更にじゃぶじゃぶ顔を洗う。

52 岩切宅・庭（深夜）

岩切がリビングから出て来て、ひまわりにじょうろで水をやっていく。

岩切、じょうろを放り捨ててその場に座り込み、煙草をくわえて火を灯す。

と夜風が吹き渡り、ひまわり群がザワザワと揺れる。

岩切「……」

と気配を感じて振り返ると、リビングには下着姿の岩切自身が、ソファに横たわって煙草を燻らせている。一年程前の記憶の風景。

岩切は庭に座り込んだまま、それをぼんやり眺める。

と真つ暗だった隣の寝室に薄明かりが灯り、パジャマ姿の和美が布団から起き上がり、傍らで眠っている崇（6）をおいてリビングに出て来て、

和美「……また、独りで寝るの？」

岩切「……ずっとお前似だと思つてただけで、最近、俺に似てきたろ、崇」

和美「……当たり前じゃない、あなたの子でしょ」

岩切「寝顔見ると、眠れなくてさ」

和美「……似てきたら……可愛く、なくなってきた？」

岩切「……逆だよ……だから、どうすりゃいいのかわかんなくて」

和美「……」

岩切「……俺の親が俺にしてきたこと、繰り返したくなくて……けど俺、それしか知らないから、あの子にどう触ればいいのか、わかんなくて……」

和美「……」

と岩切に寄り添い、

和美「……わかんなかったら、私達と崇と三人で一緒に探して、三人で一緒に見つければいいじゃない……三人で寝ようよ」

と岩切から煙草を取り、もみ消す。

岩切「……だいたい煙草臭いし、今夜は、独りで寝るわ」

和美、更に何か岩切に言おうとするが、言葉が出ず、

和美「……そう……おやすみ……」

と寝室へ戻つて崇に寄り添つて横たわり、灯りを消す。

岩切はソファに横たわったまま、新たな煙草に火を灯す。

庭に座り込んで見ていた岩切、じょうろに残った水を自らの頭に掛ける。

岩切「……」

と濡れた顔を拭い、もう誰もいないリビングに戻つた岩切はキッチンの方へ消え、ややあつて、包丁を持つて再び庭に出て来る。

岩切、満開のひまわりを数本まとめて掴み、茎に刃を入れる。

53 岩切宅・表（翌日）

小ぎれいな服装の岩切が乗った車が、駐車スペースから通りに出ていく。

54 小出宅・風呂場

底の方にわずかに水が溜まっているバスタブの中で、玩具の船が座礁するように転がっている。

55 小出宅・有希の部屋

クローゼットに残され、吊るされたままの有希のワンピースに久美子がくるまり、
久美子「……お母さんの匂い」

久美子、鏡の前に置きっぱなしのヘアブラシを取り、顔に近づけ、
久美子「……お母さんの匂い」
と、自らの髪をすいてみる。

56 スーパーマーケット・店内

棚の前で恵子が菓子パンを手に、佇んでいる。

恵子が周囲を見回すと、誰もいない。

恵子「……」

と手提げ袋に不器用に、パンを突っ込む。客が通り掛り、恵子は別の棚に移動しつつペットボトルを取り、また手提げに入れる。

恵子、周囲を気にしつつ、それを繰り返す。

徐々に手際がスムーズになっていく。

57 山間部の道路を走る、岩切の車・車内

前方に大きなトンネルが近づいて来て、車はトンネルに入る。

トンネルは何処までも続き、行く手に出口の外光はまだ見えない。

58 木田の彼女・秋穂のワンルーム

木田がフロアリングに仰向けに横たわって、腹筋運動をしている。

トイレから秋穂(27)が出て来て、いきなり木田の腹の上に座り込み、神妙な顔で見つめる。

木田「……こことこ、ずっとそんな顔してるけど……言いたいことあったら言ってくれよ」

秋穂「マジでさあ、言わなきゃわかんない男だよな、木田拓次は……こことこ、ずっと遅れてたからこんな顔なの……これ何だ？」

と持っている検査薬を見せる。

木田「……何だろ？……」

秋穂「妊娠検査薬。……で、陽性出ました」

木田「……(徐々に、理解して)……」

秋穂、検査薬をひよいとゴミ箱に放り、秋穂「まだ百パーじゃない。あなたは妊娠している可能性が、超高いです。ってこと明日、病院行ってくる」

明日、病院行ってくる」

木田「……」

秋穂「どうする？ そうだったら」

木田「……」

と秋穂、傍らに転がっていた昨夜の水鉄砲を手に取り、銃口を木田の眉間に押し付ける。

秋穂「……どうする？ 木田拓次君」
木田「……」

と木田、ようやく覚悟を決めたように、ニツコリと微笑む。

59 郊外の通り(別の県内)

岩切の車が走っていく。

60 車内

車窓の風景が徐々に町並みへと変わり、水遊びをする子供達の姿が、車窓を通り過ぎていく。

皆、にこやかに笑っている。

岩切「(見やり)……」

61 食堂・表

表の駐車スペースで崇が独り、玩具で遊んでいる。

片隅に停車した車から岩切が降り立ち、

岩切「よお」

崇、その場でジッと岩切を見やり、ようやく少し、微笑む。

岩切、車内から大きなひまわりの花束を取って歩み寄り、しゃがんで崇に見せ、

岩切「ほら、ひまわり」

崇「知ってるよ」

岩切「おいで」

崇「知ってるよ」

岩切「おいで」

と抱きしめようと両手を伸ばすが、崇は
もじもじと照れ臭そうに佇むばかりだ。

岩切「……暑いもんな……涼しくなりに、海
にでも行くか？」

と、食堂からエプロン姿の和美が出て来
て、

和美「来るんなら、連絡ぐらいしてよ」

岩切、花束を和美に差し出し、

岩切「今年のひまわり」

和美は苦笑しつつ受け取り、

和美「……ありがと。お店に飾っとく……花
束くれるためだけに、わざわざ来たんじゃ
ないんでしょ？」

岩切「迎えに来た。帰って来て欲しい」

和美「……」

62 ひまわり畑

岩切と和美が少し距離を置いて、見事に
咲き誇った花畑の中をブラブラと歩きつ
つ、

和美「崇と、よくここに来るの」

岩切「……やめときゃよかったな、花束なん
て」

和美「そんなことないよ、初めてだもの、花
束なんて貰うの」

岩切「……」

和美「けど、出来れば、もっとずっと前に、

貰いたかったかな」

岩切「……」

和美、ふと、岩切に寄り添って匂いを嗅
ぐ。

岩切「戸惑い）……わかるのか？……水の
匂い」

和美「……何それ？」

岩切「……」

和美「……煙草、増えたんじゃない？ 前よ
り匂うよ」

岩切「……」

と二人、歩きつつ、

岩切「……もう絶対に、崇には手を上げない。
約束するよ」

和美「……うん、それは信じたい。あれは、
勢いでそうなっちゃっただけだし……」

岩切、しばし無言で歩いているが、

岩切「……いつか言ってくれたら、俺達と崇
と、三人で探して、三人で見つければ、っ
て」

和美「……何度もそう言ったけど、その気に
なってくれなかったじゃない」

岩切「……独りで起きて飯食って、独りでひ
まわりに水やって、また独りで寝て……ガ
キの頃からそれが性に合ってたはずなんだ
けど」

和美「……」

岩切「……お前達がいらないとどうにも……寂
しくてさ」

和美「寂しいなんて、言わないでよ……三人
でいたって、いつも寂しそうな顔してた
じゃない」

岩切「……」

和美「いつの間にか、崇まで同じ顔するよう
になってたし」

岩切「……」

和美「でもこっちに來たら、だんだん変わっ
てきたの、あの子」

岩切「……」

和美「ウチ、食堂だからいつも賑やかでしょ
……昔はそれが鬱陶しくて逃げ出したんだ
けど……結局ここが、あたしの居場所なの
かも」

岩切「……」

和美「……もうしばらくここで、これからの
こと、考えさせて」

岩切「……わかった」

と二人、車の方に戻りつつ、

岩切「……帰って来いとは言わない。けど、
海なんかどうかな、今から皆で。今、崇に
何かしてやりたくて」

和美「……今は、やめとこうよ」

岩切「……」

吹き渡る風が穏やかに、ひまわりを揺ら

す。

63 山間部の道路

帰路を走る岩切の車が、路肩に停車する。くわえ煙草の岩切が降り立ち、遠くに見える滝を見やる。

岩切「……」

大量の水が途切れることもなく、ただ、上から下へと流れ落ち続けている。

岩切は不意に、ガードレールを乗り越え、滝の方へと続く斜面を降りはじめた。

64 滝壺

岩切が斜面を降りて来て、目の前に広がる水面と、頭上から降り注ぐ大量の水を眺める。

岩切「……」

と水底に、二つの小さな人影がゆらゆらと、物のように漂っている。

岩切「！」

と思わず滝壺に飛び込み、必死に水中を這い回るが、何処かへ流れ去ったのか、人影はもう、辺りには見当たらない。

岩切、ただ水中に立ち尽くす。

吹き渡る風に木々がざわめき、水面に映る陽射しがキラキラと揺らめく。

岩切「……」

65 公園（夜）

バケツやヤカンを持った恵子と久美子が、水場の蛇口をひねるが、水が出ない。水場には、「給水制限に伴い停水中」と貼ってある。

姉妹「……」

66 近隣宅の庭（夜）

手入れされた花壇や陶器の動物等が飾られた庭の、片隅にある水道の辺りに恵子と久美子が押し黙り、身を潜めている。家の窓のカーテン越しに動く人影が消え、姉妹は水道の水をバケツとヤカンに溜めていく。

と、いきなり窓が開き、住人が庭を見回し、

住人「……誰だ？……警察呼ぶぞ！」

67 路地（夜）

恵子と久美子がバケツとヤカンを抱え、全力疾走で逃げて行く。

と恵子が転び、バケツの水がぶちまけられる。

久美子「……お姉ちゃん」

恵子「……」

と横たわったままの恵子の目に、じわり

と涙が浮かび、こぼれる。

久美子も徐々につられ、涙が溢れてくる。

恵子「……」

とようやく立ち上がり、しゃくり上げる久美子を見すえ、自らの涙をゴシゴシと拭い、無理矢理ニツと笑って見せる。

久美子「……」

恵子、久美子の涙を優しく拭つてやり、恵子「これだつて水だよ。勿体ないじゃん」

68 小出宅・居間（深夜）

久美子、熟睡している。

片すみで恵子、キッズ携帯の電源を入れると、バッテリー残量わずか。

「お父さん」に発信してみるが、「現在使われておりません」のメッセージ。

恵子「ずっとそうなので、わかっていたが」……

と「お母さん」宛に、「帰つてきてお願い、もう……」とメールを打つが、電源が落ちてしまふ。

恵子「……」

69 岩切宅・庭（翌朝）

下着姿の岩切がひまわりの前に佇み、朝からきつい陽射しを眩しげに見上げる。リビングから聞こえる天気予報が、「本

日も猛暑日、降水確率0%」と告げている。

岩切はふと、ひまわりの前にしゃがみ込む。

花壇の土に、種が幾つも落ちて散らばっている。

岩切はそれを幾つかつまみ、花壇の隙間に放る。

そして更に両手に拾えるだけ拾い、庭じゅうのあちこちに振りまいていく。

70 住宅街の通り

営業車が走っていく。

71 コンビニ・表

営業車から、木田と岩切が降りつつ、

木田「……あの、相談っていうか、飯食いがらちよつと話聞いて貰っても、いいですか？」

岩切「……ああ」

木田「……今朝から、具合でも悪いんすか？」

何か、いつもと違うっていうか」

岩切「……」

と木田、スマホを出し、

木田「……電話入っちゃったんで、彼女から」

とその場で留まり、電話に出る。

72 コンビニ・店内

入って来た岩切、奥に佇む恵子の姿に気づく。

岩切「……」

恵子、さりげなくペットボトルの水を二つ取り、手提げに入れる。

岩切「……」

と棚の陰から店長・細川が恵子に歩み寄り、

細川「今の、見たよ」

恵子「（立ち尽くし）……」

細川「ちよつと、こつち来て」

と恵子の手を掴んで奥へ向かおうとする。

と、岩切がいきなり割って入り、細川に千円札を押しつけ、

岩切「俺が払います……問題ないでしょう」

細川「問題ありますよ、払えばいいってもんじゃないでしょう」

恵子、二人を置いて店を出て行く。

岩切、細川に札を掴ませ後を追う。

73 コンビニ・表

出て来てそのまま行こうとする恵子の腕を、岩切が掴んで押さえる。

木田は離れた処で電話に夢中で、まだ気づかない。

木田、心から嬉しそうに、微笑んでいる。

岩切、抗う恵子を押さえたまま、懷を探って財布ごと恵子に差し出し、

岩切「家族で海に行く予定の金、浮いちゃって。持っててくれ」

恵子「……」

と、岩切の手を払って財布を打ち捨て、

恵子「そんなこと頼んでない……お父さんもお母さんも町じゅうの大人も、皆大嫌いだ……あたし達は、二人だけでやってくから」

岩切「……」

木田も気づき、ボカンと二人を見やるばかり。

立ち尽くす恵子の目に徐々に涙が溢れてくるが、恵子はそれを必死に堪えながら、

岩切を見する。

岩切「……」

とようやく、静かに、

岩切「……初めて、流れを変えたくなくなった……変えさせてくれ」

といきなり恵子を引き張って営業車に向かい、助手席に押し込み、自らは運転席に乗り込む。

木田「（立ち尽くし）……岩切さん……何してんすか……」

営業車が発進し、通りに飛び出して行く。

74 小出宅・風呂場

久美子、空っぽのバスタブを覗き込み、置いてあるバケツや洗面器を引っくり返すが、一滴の水もない。

久美子、額の汗を拭い、紙めてみる。

久美子「……」

と表で、車が停まる音が聞こえる。

76 公園

く、雨降りみたいに町じゅう水でいっぱいになれば、ぜーんぶ「元通り」になるよ」

岩切「……」

暑く渴いた公園には、遊ぶ子供の姿もない。

75 小出宅・裏手

開栓器で止水栓を開けていく岩切を、恵子と久美子が見つめている。

恵子「……どうして？」

岩切「太陽と空気と、水は、ただいいんだ。太陽も空気も水も、君達から奪えるわけがないんだ」

と、開けっ放しだった台所や風呂場の蛇口から、一斉に水が流れ出す。

久美子は微笑み、傍らに置いていた金魚鉢を持ち上げ、岩切に、

久美子「お水、取り替えて」

岩切も微笑んで受け取るが、恵子の顔はくもったままで、

恵子「こんなんじゃ、何も変わらないよ……どうせまた、同じことだよ」

岩切「……」

久美子「そんなことないよ。ウチだけじゃな

路肩に停めた営業車から久美子が水場に向かって駆け出し、恵子と、開栓器とホースを二本抱えた岩切もついていく。

岩切、水場の足元の鉄蓋を開けて止水栓を開け、複数の蛇口にホースをねじ込んだり、蛇口自体を上向きにしたりし、

岩切「大雨降らせてやろうな、カラッカラの町に」

恵子は離れてジッと見ているだけだが、久美子はホースを掴み、ニッコリと頷く。

岩切、全ての蛇口を一斉にひねり、掴んだホースの先を天に向けて突き上げる。

幾筋もの水流が吹き上がり、陽射しに輝きながら、岩切と久美子に雨のように降り注いでくる。

水を浴びて微笑む二人を、恵子はジッと見ている。

久美子は大はしゃぎし、ホースで岩切に水を掛ける。

岩切も笑い、久美子に反撃したり、ホー

スを器用に操って水流を様々な形に変えて見せたり。

降水の中で笑い合う二人を見ているうちに、恵子の顔も徐々に和らいでいく。

と、恵子の目に、降水に射し込む陽射しを作り出す虹が、見える。

恵子「（ようやく）微笑み……」

と恵子もゆつくりと降水の中に歩み出し、心地よく水を浴びる。

岩切、そんな恵子を見やり、微笑む。

恵子は久美子に水を掛けられ、自らも岩切のホースを奪って二人に掛け、三人は降水の中を駆け回る。

と、路肩に別の営業車が急停止し、木田と岸本、柴田、高岡が駆け込んで来て、

木田「……岩切さん、どうしちゃったんすか……」

岩切、答えず姉妹と水を掛け合う。

岸本は真つすぐ水場に向かい、止水栓を閉じる。

水流が弱まり、すぐに水が停まる。

岩切、岸本に駆け寄り、開栓器を奪おうと、

岩切「これからどうが」

岸本「（奪われまいと）岩切、大問題だぞ」

姉妹は、立ち尽くすばかり。

通り掛った人々も、何事かと足を止めて

見ている。

木田、慌てて背後から岩切を抑えようと
して、

木田「岩切さん、やり過ぎっす！　まずいっ
す！」

岩切、思わず木田を肘打ちして振りほど
き、岸本を殴りつけ、開栓器を奪い取る。
岸本が押さえた鼻から、血が滴り落ちる。

岩切、周囲の町並みを見回し、

岩切「まだまだカラッカラだ。こんなんじゃ、
足りないんだ」

と木田、岩切を押さえようとするが、岩
切は振り払い、思わず木田に開栓器を振
りかざす。

岩切「……お前は、わかってくれるだろ」

木田「……すいません、ついさっき、俺にも
守るのが出来ちゃって」

岩切「……」

と柴田と高岡が不意をついて背後から岩
切を押し倒して押さえ込み、

木田「（も押さえ込み）……すいません」

岸本、それでも抗う岩切を見やり、鼻血
を拭いつつ、

岸本「手に負えねえ、通報するわ」

と携帯を掛ける。

久美子は怯えて恵子に寄り添う。

恵子、地べたに押しつけられて無様にも

がくばかりの岩切をジッと見つめている
が、いきなり叫び声を上げながら一同に
飛びつき、木田達を岩切から引き離そう
とする。

久美子も後に続き、木田達を何度も叩く。
木田は戸惑いつつも岩切を柴田達に任せ、
姉妹を何とか引き離そうとする。

岩切「……」

と押さえ込まれたまま、抗う姉妹を見や
る。

と、ゆつくりと、公園の一同を照らす陽
射しが陰っていく。

姉妹、空を見上げる。

岩切の眼前の地べたに、一滴、そして数
滴の水粒が落ちてくる。

岩切「……」

と、一気に公園じゅうに、雨が降り注い
でくる。

岩切も姉妹も木田達も、遠巻きに見てい
た通行人達も、その場に立ち尽くしたま
ま、空を見上げる。

雨に濡れるままの一同それぞれの顔に、
微かに安堵が浮かぶ。

押さえ込まれたままの岩切が再び姉妹を
見やると、二人もこつちを見ている。

岩切と姉妹、微笑み合う。

77 警察署・留置場（翌日）

窓のない密室で、岩切が壁際に座り込ん
でいる。

岩切が壁に片耳を押しつけると、向こう
から微かに雨音が聞こえる。

と、加東刑事（50）が制服警官と共に
やって来て、片隅に置かれた手つかずの
弁当を見やり、

加東「食わないの？」

岩切「……犯罪者にさえた飯食わせるのに、
何で水はただじゃないんですかね」

加東「……面会来てるよ。はい立って」

岩切「……」

78 警察署・面会室

岩切が警官に伴われて入って来ると、
佐々木課長が座っていて、

佐々木「元氣そうだね」

岩切「（座り）……」

佐々木「もうわかってると思うけど、辞表書
いて下さい。そうしてくれば、ウチから
の訴えは取り下げます。退職金も、多分満
額出るはずだから」

岩切「……わかりました」

佐々木「それが一番お互いの為だから。じゃ、
私はこれで」

と立ち上がり、行こうとするが思い出し

たように、

佐々木「そうそう、一ついい知らせがあったんだ」

岩切「……」

佐々木「この雨のお陰で、今日には給水制限が解除される予定だから。それじゃ」

出て行く佐々木、スラックスのすそが防水ブーツにたくし込まれている。

79 警察署・玄関（翌日）

加東に見送られ、岩切が表に向かいつつ、岩切「……あの子達、何処でどうしてるんですかね」

加東「だから、それは教えられないんだって。児童連れ回しの方も不起訴で済んだんだから、それで充分じゃないの」

岩切「……充分か」

岩切、雨上がりの表に出て、周囲を見回す。

あちこちに、水たまりがある。

加東「姉妹の家にも近づかないように。行っても、もういないけど」

岩切、息を深く吸いこむ。

岩切「……やんでも雨の匂い、まだしますね……これが水の匂い、なのかな？……だとしたら、悪くないか……」

と、歩き出す。

80 水道局・裏の駐車場

岩切がやって来ると職員達は、遠巻きに見たり、目を逸らしたり。

と木田が今まで通りの笑顔で歩み寄って来て、

木田「お務め、ご苦労さんでした」

とアイスキャンディーを差し出し、

木田「とりあえずの出所祝い。当たり付き」

岩切も笑ってしまいがち、受け取る。

× × ×

岩切と木田、営業車のボンネットに座り込んでアイスを食べつつ、

岩切「悪かったな、面倒掛けて」

木田「（微笑み）普通にビビりましたけど」

ガチでテロやつちゃうし」

岩切「しょばいテロだったけどな」

二人、アイスを食べつつ苦笑し合う。

岩切「……結婚するんだろ、彼女と」

木田「はい、岩切さんと同じアレで」

岩切「うまくやれるよ、お前なら」

木田「……どうしても、辞めなきゃなんないんすか？ 頑張れば、残れるんじゃないんですか？……寂しいっすよ」

岩切「……」

木田「こんなのどうすか？ もしまた俺が当たったら、辞めないで下さいよ」

岩切「……」

と木田、残りのアイスを頬張って棒を見るが、

木田「……はずれかよ」

と岩切も食べ終えた棒を見やって、微笑み、

岩切「……当たり、もう一本」

と木田に差し出して渡し、

岩切「とりあえずの、結婚祝い。嫁さんと子供によろしく。……じゃあ」

と歩き出して所内に向かう。

木田「（見送り）……」

81 水道局・料金課フロア

岩切、佐々木課長の座ったデスクに辞表を置く。

佐々木「八年間、ご苦勞様でした」

岩切「……お世話になりました」

佐々木「あ、私物はきっちり持ち帰って下さい。置いてかれると、掃除のおばちゃんうるさいから」

岩切、自らのデスクに向かうと、出目金の泳ぐ金魚鉢が置いてある。

岩切「……」

と、傍らの女子事務員・木村が、

木村「昨日、女の子が二人来て、置いてったんです。この町を出るから、岩切さんに世

話して欲しいって」

岩切「……」

と岩切、鉢の下に置かれた可愛い封筒に
気づき、手に取る。

「いわきりさんへ」とある。

岩切「……」

82 児童相談所・控室

リュックと傘を持つて座っている恵子と
久美子に、相談員・江口（33）が穏やか
な笑顔で、

江口「もう、大丈夫。何の心配もないか
らね」

恵子、ジッと見返す。

江口、気圧されつつも微笑み、

江口「今日から暮らす施設のお迎えが、もう
すぐ来るから。今のうちにおトイレとか、
済ませておいてね」

と出て行く。

恵子、言いくそに、

恵子「……あのね、お父さんと、お母さんの
ことだけど……」

となかなか言葉が出ない恵子に、

久美子「大丈夫だよ。わたしには、お姉ちゃ
んがいてくれるもん」

恵子「……」

と久美子、何かを感じたように窓際に歩

みより、背のびしてわずかに開いた窓を
全開にする。

恵子「？」

久美子、嬉しそうに息を吸い、

久美子「プールの匂いだ」

83 近隣のプール（冒頭とは別・表

恵子と久美子が走つて来て、微笑む。

営業再開を前に満たされたばかりだろう、
プールの水面が、キラキラと輝いている。
清掃を終えた作業員が奥に引込み、誰
もいなくなる。

姉妹、顔を見合わせる。

84 プールサイド

姉妹、水面を前のびのびと楽しく、シ
ンクロダンスを踊っている。

久美子「（舞いっつ）冷たくて気持ちよさそ
う」

恵子「このまま、入っちゃおうか」

久美子「えー、水着も浮き輪もないのに？」
恵子「大丈夫、お姉ちゃんがいつしよだから
雨だって、降らせちゃったんだよ。あたし
たちには、何だつて出来るんだから」

恵子の手が、久美子の手をぎゅっと握る。

久美子、微笑む。

姉妹「せーの！」

と二人、思いっきりジャンプする。

85 岩切宅・リビング・庭

テーブルに金魚鉢が置かれている。

サッシの開いた窓辺に座った岩切、封筒
を開いて畳まれた紙片を出し、ひろげる。
それは久美子の画用紙貼のページを切り
取ったもので、岩切らしき男と姉妹が、
雨の中で笑っている絵が描かれている。

岩切「（ジッと見つめ）……」

岩切、崇の絵のかたわらにそれを飾り、
庭に出て、ひまわりに水をやっていく。
そしてふとしゃがみ込み、地べたを見つ
める。

携帯が鳴り始めるが、出ない。

花壇の枠から少し外れた土上にひまわり
の新芽が顔を出し、双葉を開いている。
岩切、新芽にそつと、水を掛けてやる。
それから携帯を出すと、「和美」からの
着信。

岩切「……（と、出ると）」

崇の声「お父さん」

岩切「……崇か」

崇の声「僕、海に行きたいな」
岩切「……」

おわり

福田村事件

佐伯俊道
井上淳一
荒井晴彦

〈脚本家略歴〉

佐伯俊道（さえき としみち）

1949年東京・神田生まれ。IAEA研究職員だった父親の仕事の關係で小学五年から中学一年までオーストリアのウィーンで過ごす。学習院初等科・中等科・高等科を経て学習院大学文学部哲学科中退。大学時代は映画研究部に所属。中退後の、暗黒舞踏の土方翼の地方巡業のスタッフなどを経て、71年、アニメ製作会社・東京ムービー（現トムス・エンタテインメント）に入社。『新オバケのQ太郎』の助監督に携わる。72年、東映東京撮影所に契約助監督として入社。内藤誠、野田幸男、舩田利雄、長谷部安春、鈴木則文、石井輝男監督作品などに就く。80年、獅子プロ作品『若妻二十四時間暴行』で脚本家デビュー。84年、12年間務めた東映を退社。フリーの脚本家としてこれまで映画・テレビドラマなど約400本の作品を執筆。2019年から日本シナリオ作家協会理事長を務める。主な作品、映画『悪魔の部屋』『連続殺人鬼・冷血』『夕ぐれ族』『でべそ』『スクールウォーズ』

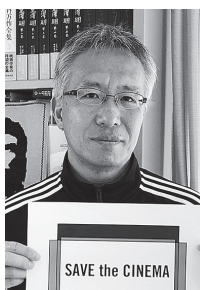
HERO。テレビ『美空ひばり物語』『実録・小野田少尉 遅すぎた帰還』『白旗の少女』など。



井上淳一（いのうえ じゅんいち）

1965年愛知県生まれ。早稲田大学卒。大学在学中より若松孝二監督に師事し、若松プロダクションにて助監督を勤める。90年『パンツの穴・ムケそでムケないイチゴたち』で監督デビュー。その後、荒井晴彦氏に師事し、脚本家に。2013年、『戦争と一人の女』で監督再デビュー。数多くの海外映画祭に招待される。16年、福島で苦悩する農家のドキュメンタリー『大地を受け継ぐ』を監督。フィクション、ノンフィクション、監督、脚本に関わらず、幅広い活動を続けている。19年、『誰がために憲法はある』で第25回平

和・協同ジャーナリスト基金賞奨励賞を受賞。23年、『福田村事件』を脚本・プロデュース。24年、脚本・監督作『青春ジャック』止められるか、俺たちを2』が公開される。主な脚本作品、『男たちの大和』（05）『アジアの純真』（11）『あいつときぼうのまち』（14）『止められるか、俺たちを』（18）『REVOLUTION+』（23）ほか。主な監督作品、『いきものさくら』（14）ほか。



荒井晴彦（あらい はるひこ）

1947年1月26日生まれ、東京都出身。若松プロダクションの助監督を経て、1977年、日活ロマンポルノ『新宿乱れ街』いくまで待つて（曽根中生監督）で脚本家デビュー。キネマ旬報脚本賞を『Wの悲劇』（84年・澤井信一

郎監督）、『リボルバー』（88年・藤田敏八監督）、『ヴァイブレーション』（2003年・廣木隆一監督）、『大鹿村騒動記』（11年・阪本順治監督）、『共喰い』（13年・青山真治監督）で受賞。橋本忍に並んで最多受賞となる。その他、『赫い髪の女』（79年・神代辰巳監督）、『神様のくれた赤ん坊』（79年・前田陽一監督）、『遠雷』（81年・根岸吉太郎監督）、『キャバレー日記』（82年・根岸吉太郎監督）、『ダブルベッド』（83年・藤田敏八監督）など。97年に『身も心も』を初監督し、以降『この国の空』（15年）、キネマ旬報ベスト・テン第1位に輝いた『火口のふたり』（19年）、『花腐し』（23年）と、4本の監督作がある。企画・共同脚本を手がけた『福田村事件』も話題になり、ミニシアターのヒット作となった。



監督・森達也

製作・福田村事件」プロジェクト

製作プロダクション・ドッグシュ

ガー

配給・太秦

〈スタッフ〉

企画

統括プロデューサー

プロデューサー

撮影

照明

録音

美術

荒井晴彦

小林三四郎

井上淳一

片嶋一貴

桑原正

豊見山明長

白井勝

須坂文昭

編集

音楽

〈キャスト〉

澤田智一

澤田静子

沼部新助

田中倉蔵

島村咲江

洲崎千恵子

鈴木慶一

井浦新

田中麗奈

永山瑛太

東出昌大

コムアイ

井草茂次

井草マス

藤岡敏一

平澤計七

恩田楓

砂田伸次朗

長谷川秀吉

田向龍一

井草貞次

松浦祐也

向里祐香

杉田雷麟

カトウシンスケ

木竜麻生

ビエール瀧

水道橋博士

豊原功補

柄本明

○ 汽車が下総台地を走っていく

T 「1923（大正12）年」

○ 走る汽車・車内

洋装の夫婦が乗っている。

ロイド眼鏡をかけた澤田智一（47）とモ

ガ風の静子（41）。

汽車が揺れる。

前の席に座った喪服の女・島村咲江

（25）の膝の上で骨箱が揺れる。

静子「あ」

と、咄嗟に手を伸ばし抑える。

咲江「すみません」

骨箱を包む白布に『陸軍上等兵 島村幸

彌之英霊』の文字。

静子「……シベリアですか」

咲江「撤退が始まったというから待ってたん

ですが……これで帰ってきました」

静子「寒かったでしょうね」

咲江「涙も、おしっこも凍るって手紙に

……」

静子「……」

咲江「骨箱を撫で」どうして、そんなとこ

ろで戦争を……」

智一「金持ちも貧乏人もいない国を作ろうと

したロシアを潰そうとしたんだ」

咲江「……いけない戦争だったんですか」

智一「戦争にいい戦争なんてないんですよ」

咲江「でも、名誉の戦死なんですよね」

智一「……」

静子「そっですよ。名誉の戦死ですよ」

骨箱に掌を合わせる。

汽笛が鳴る。

○ 野田町駅

駅舎から咲江、遅れて智一と静子が出て

くる。

軍服を着た男が敬礼で骨箱を迎える。

福田村在郷軍人会分会長・長谷川秀吉

（47）。

その隣で、福田村村長・田向龍一（47）

と村役場兵事係・川本（27）が手を合わ

せている。

そして、咲江の夫の年老いた両親・幸定

とフネ。

幸定は立ち尽くし、フネは涙をこらえている。

カメラマン（香原大輔・31）を従えた恩田楓（26）が進み出て、

楓（「咲江に」）千葉日日の恩田と申します。本日はよろしくお願ひ致します」

咲江「？」

長谷川「お国のために戦った名誉ある英霊だ。新聞に載つけてくれるそうだ」

咲江「……」

と突然、フネがワツと骨箱に縋りつく。

フネ「幸彌、幸彌あ、なんで死んだ。なんでこんなちつちえ箱に入ってるだ。幸彌、

幸彌ア」

泣き崩れる。

幸定は口を真一文字に結び、じっと堪えている。

離れて見ている智一と静子。

田向、智一に気づき、

田向「澤田か」

智一「……田向」

田向「二十年ぶりだな。おまえもこの汽車だったのか」

智一「（頷き）村長おめでとう」

田向「世襲だよ。本音を言えば、俺だって師範学校に行きたかった」

「撮るなっ」と長谷川の声をする。

智一と田向が振り返ると、フネを撮ろうとした香原を長谷川が遮っている。

幸定（「小声」）英霊の母親らしく胸張って迎える

長谷川「写真は落ちていてからにしろ」
香原、仕方なくカメラを下ろす。

智一「……あれは長谷川か？」

田向「あいつは今、在郷軍人会の分会長だ」

智一「適材適所だな」

田向「お前の適材適所は教師だろ」

智一「教師はもうやらない。俺は百姓になる」

長谷川が智一に近づいてくる。

長谷川「久しぶりだな。おまえ、朝鮮に骨埋めるんじゃないのか」

智一「……」

長谷川、「ふん」と小馬鹿にする。

静子「まぶしい」

静子、思い出したように日傘を開く。

真っ白なパラソル。

○ 香川・長い橋の上

行商に旅立つ一行が歩いていく。

先頭に支配人の沼部新助（29）。隣に年期の入った三味線を背負った妻のユキノ（26）。

その後ろに番頭格の坂下彌市（28）と妻

で妊婦のイシ（23）。

さらに西村厚（24）と息子の則カズ

（1）を抱いた妻のソデ（22）、足が悪く杖をついた高畑朝明（21）と妻のサダ

（20）、ユキノの弟の池端喜之助（22）が続く。

大八車を曳くのは、仕入係の藤岡敬一（18）。

荷物満載の大八車には、新助の息子の晴康（6）と娘のき多江（4）、彌市の息子の照松（2）。

しんがりを行くのは、初行商旅の谷前信義（13）。

総勢15人の「大家族」である。

少し離れて、川島ミヨ（15）がついてくる。

信義、振り返る。

ミヨ、ついてくる。

新助「しゃーんとお別れしたんとちがうんか」

信義、顔を赤くして俯く。

彌市「半年も離れ離れになるんやきん。そりゃあ、寂しいわなあ」

イシ「ちゃんと、指切りしとちゃんと、商^{シコタ}行つとる間に、ミヨちゃん、よその男に盗られてしまつてエ」

ユキノ「ノブちゃん、ほれ、行つてこい」

信義「首を振る」

ソデ「ほれえ」

サダ「ほれほれ」

イシ「ほれほれほれ」

信義、新助をちらり窺う。

新助、「行つてこい」と顎をしゃくる。

信義、仏頂面で走り出す。

男も女も子どもたちも囁し立てる。

ミヨの前で立ち止まる信義。

二人、しばし見つめ合う。

ミヨ、手を突き出す。

その手に、小さなお守り。

信義「きの（昨日）もうた」

ミヨ「別のお守り」

信義の首に掛けようとする。

信義、照れて、避ける。

ミヨ「じつとしとり」

信義、素直にじつとする。

ミヨ、お守りを掛ける。

ミヨ「きつと……あんたを、守ってくれる日が来る」

それだけ言い、踵を返す。

信義「……」

○ 福田村近くの往還道

咲江と幸定とフネを乗せた荷馬車が行く。

智一と静子の旅行鞆も積んである。

馬車を曳くのは、馬丁の井草茂次（29）。

その後ろに、田向、長谷川、川本。

さらに後ろに、智一と日傘の静子。

老馬アオの脚が停まる。

茂次、掛け声かけて尻を打つ。

だが、アオは動かない。

茂次「アオ、こんなところで立ち止まんじゃねよオ」

静子、ツツツと前へ出ると、

静子「アオつていうんだ。アオ、大丈夫？」

日傘を差し掛ける。

咲江「あたし、降ります」

降りる。

茂次「歳だからよオ、わりいな」

長谷川、智一に並び、

長谷川「（静子をコナし）あつちで一緒になったんか」

智一「ああ」

長谷川「鮮人か」

智一「……」

長谷川「あつちの具合がいいつつんじゃねえか」

智一「（睨み）日本人だ」

アオがゆっくり動き出す。

アオがゆっくり動き出す。

○ 利根川を渡し舟がいく

權をとるのは、禪一丁の岡持倉蔵（30）。

三ツ堀の渡し場に舟が着く。

倉蔵、舳い縄を結び、数人の乗客を降ろす。

客が待っている。

倉蔵「すんません。ちつと待ってくれつけ」

駆け出す。

○ 福田村の村境

倉蔵が駆けてくる。

大勢の村人が集まっている。

最前列に軍服を着込んだ在郷軍人分会の

石原、岩田、大橋。

その後ろに茂次の妻のマス（25）と父

の貞次（60）、女衆総領格の矢島ツネ

（52）と息子の正吾（20）、長谷川の妻で

副総領格の稲子（46）、赤ん坊を背負った下条トミ（22）。

倉蔵、手拭いの鉢巻きを外し、最後列に

並ぶ。

ツネ（小声で）倉蔵

倉蔵「？」

ツネ「幸彌が死んでどんな気分だ」

倉蔵「……」

ツネ「まさか喜んでるんじゃないだろうな」

稲子「これでコソコソしねえでベッチョできるもん」

マスとトミが含み笑い。

マスとトミが含み笑い。

ツネ「シッ……」

道の向こうに、咲江一行が見えてくる。

倉蔵「……」

在郷軍人分会の三人が姿勢を止す。

村人たちも做う。

× × ×

茂次、荷馬車を止める。

幸定、降りる。

フネ、骨箱に顔を埋めたまま動かない。

幸定「着いたぞ。みんな出迎えに出とる」

フネ、キツと顔を上げると、咲江に骨箱

を渡し、シャンと降り立つ。

長谷川、楓に頷く。

楓、香原に出迎えの村民を撮るように手

で指示を出す。

香原、小走りで前へ出て、三脚を立てる。

× × ×

村民の前に立った咲江、深々と頭を下げ

る。

出迎えた村民たちも低頭。

倉蔵はそのまま、じつと咲江を見ている。

咲江、顔を上げる。

凜として美しい。

咲江と倉蔵の目が合う。

周囲を気にして、倉蔵、思わず目を逸ら

す。

智一と静子は仕方なく馬車の後ろに突っ

立っている。

トミ「あのハイカラなふたりは誰かね」

ツネ「澤田の智一だ」

稲子「帰ってきたんか」

マス「隣は嫁さんかね」

稲子「雨でもねえのに傘なんかさして。何人^{ナニジン}だ」

静子、我関せず、周囲の緑を見ている。

○ 関西地方・ある村の広場

花簪を刺したユキノが三味線で『金比羅

船々』を弾き、唄っている。

新助、金剛杖片手に怪しげな山伏のいで

たちで朗々と口上を述べ始める。

新助「わしは御覽の通りの山伏！ これらの

葉、万能に利く特効薬じゃ。生姜の絞り汁

に黒砂糖を入れ熱い湯を注げば、たいがい

の風邪は治りよる。咳で苦しい時にゃア、

乾燥させた大葉子を煎じればええ。だけん

ど扁桃腺が腫れたら困るじゃろ。ヒョウソ

に羅つたらどうじゃ。さアてお立合い。泥

鰯・鈍豆・枇杷の葉・松葉・蜜柑・林檎・

万作の葉。すぐには手に入らんもんをまと

めて放り込んだよく効く薬じゃ。さあ、

売り切れん内に買いより買ひより」

集まった村人たちにことは巧みに商品を

売る行商団。

正露丸・千金丹などの薬類、鉛筆・墨・草履、諸々。

その中で、信義だけがオタオタ。葉を出

そうとして箱をひっくり返す。彌市に草

履を渡そうとして「こつちじゃない」と叱責される。

見かねた喜之助、手取り足取り指導。

信義、なんとか做つて必死。

○ 粗末な商人宿・自炊用の台所（夜）

ユキノ、イシ、サダ、ソデが油かすを

作っている。

魚を持った宿泊客の女（56）がやって来

て、七輪に火を起す。

宿泊女「ええ匂いやね。なに作とりやつせ

る」

サダ「うちの田舎料理です」

宿泊女「田舎はどこね」

ソデ「讃岐です」

流しの上に、干した牛豚の腸が置かれて

いる。

宿泊女「うちの亭主も讃岐じゃが、見たこと

ねえなあ。なんなん、これ」

ユキノ「すみません、男衆、腹空かせとりま

すんで」

鍋を持って、逃げるように出ていく。

○ 同・大部屋（夜）

行商団が油かすをおかずに食るように飯を喰らっている。

信義ひとりだけ、手を付けない。

彌市「どしたんど、食わんのか」

朝明「何ちゃ出来んかったゆうて、落ち込んだる」

ユキノ「気にせんでもええ。初めはみんなあそうなんじゃ」

新助「ええがええが、働かざる者^{もん}食うべからずじゃ」

イシ「ほんだら、ウチが」と、手を伸ばす。

彌市「その手を押さへやめとけ」

イシ「払いのけ」やつとツワリが済んで食べれるようになったんじゃ」

サダ「二人分やけん、なんぼ食うても腹減るやろ」

喜之助「わしが後で要領教えてやるきん、早う食え」

敬一「読んでいた『新青年』から顔も上げず、

敬一「ノブは読み書きが出来るきん、じきに覚えるやろ」

厚「あなたの事言われよるよ」
ソデ「ホンマにのう、わしや読み書きがでけんきん、口上やかしも半分も覚えとらへ

ん」

ソデ「開き直って、どうすんな。あは」
彌市「敬一もメシ食う時やかし、本読むやめまへ」

敬一「この貸本屋で借りたもんはここで返さんといかん」

貸本に目を戻した敬一、読み続けながら器用に飯を食う。

ユキノ「（信義に）ほれ、食べ」

油かすを信義の井に掛けてやる。
サダ「世話がやるのう。ミヨちゃんと乳繰りおうとつてもまだネンネじゃが」

信義「わしや、ミヨちゃんとやかし何ちゃでない」

ユキノ「ムキになつりよるが」

信義に強引に箸を持たせる。
信義、我慢出来ず一気にかつ込む。

新助「今日はようけ売れた。誰か酒買うて来い。わしの奢りじゃ」

ユキノ「あゝら、珍しい」
厚「ほんだら、わしが行って来ます」

勢いよく立ち上がる。
ソデ「酒になると一番に手エあげてからに」

厚の尻をピシヤリ叩く。

○ 島村家・台所（朝）

咲江が豆腐を作っている。

茶の間では、フネが幸彌の遺影を拜んでいる。

○ 田んぼ道

歩いてきた日傘の静子、野良着のツネ、マス、トミとすれ違つ。

静子、会釈する。
が、三人はソツポ。

マス「日本人に見えつけどね」
ツネ「誰か話しかけてみい」

トミ「あの傘、おらも欲しいなア」
ツネ「百姓がどこでさすんだッ」

静子、聞こえているのだろう、日傘をクルクル回し、歩いていく。

○ 澤田家の畑

智一がひとり鋤を振るっている。
田向と長谷川がやつてくる。

田向は孫娘のスエ（6）の手を引いている。
田向「今日もひとりか」

長谷川「日傘さして、野良仕事できねえかな」
智一、長谷川を睨む。

長谷川「ダメだダメだ、貸してみろ」
智一「から鋤を奪い取り、振り下ろす。」

長谷川「腰入れろ、腰をよ。土と喧嘩すな。」

女房扱うように腰入れろ」

田向「智一の手を取る。」

マメが潰れて皮が剥けている。

長谷川「（覗き込んで）こんなヤワな手じゃ百姓は無理だな」

田向「なあ澤田、もう一度頼む。先生やってくれないか」

智一「……」

長谷川「良い民が良い兵隊になる。良民良兵の世の中だ。それにはまず教育だ」

田向「東京じゃ自由教育運動というのが始まつてる。軍人とか役人育てるためじゃなく、こどもはこどもらしく自由に生きてくつて」

智一「こどもの時自由でも、大人になって自由に生きられるのか。結局兵隊に引つ張られて戦争で殺されるんじゃない」

長谷川「お前、アカか」

田向「戦争しないで済む世の中にするために教育が必要なんだ。海外出兵を止めさせて普通選挙を実施して、言論・集会・結社の自由があるのがデモクラシイなんだ」

長谷川「そんなもん、食うに困らねえ庄屋の息子の戯れ言だ」

田向「……」

智一「俺にはもう教師は出来ない」

田向「なんで……やつと話が分かる仲間が

帰つてきたと思つたのに」

智一「……」

長谷川「もういい。兵隊でも何でもこういう目をしたヤツは使いモノにならん」

長谷川、とっと立ち去る。

スエ（田向の袖を引き）行こ」

田向「向こうで何かあったのか」

智一、答えず、鍬を取り振り下ろす。

○ 利根川・三ツ堀の渡し場

座り込み煙管をふかしていた倉蔵、顔を上げる。

豆腐桶を肩から提げた咲江が立っている。倉蔵「こんなところ見られたら、またなに言われるかわかんねえぞ」

辺りを気にするが、誰もいない。

咲江「豆腐、売れ残ったから、お昼に食べてもらお思つて」

倉蔵「……」

咲江「捨てっちゃうだけだから。もったいないし」

豆腐桶を下ろして、持つてきた弁当箱を出し、蓋に豆腐を入れる。

弁当箱の中には、白飯と煮物。

咲江「何言われてもかまねんだ。あたし、もう、やめなんだよ」

倉蔵、弁当箱を受け取り、

倉蔵「幸彌が化けて出てくんだよ」

咲江「嘘だあ」

倉蔵「ホントだ」

咲江「ばか」

倉蔵、人の気配に振り返る。

逆光の中、日傘の静子が立っている。

○ 渡し舟の上

乗っている静子。

倉蔵、舟を出す。

静子「邪魔だった、かしら」

倉蔵「……」

静子「邪魔に決まつてるか」

倉蔵「今日はどちらへ？」

静子、櫓が作り出す波紋を見ている。

静子「どこ行つたらいいか……わからない」

倉蔵、櫓を休める。

静子「向こう岸に着いたら、また戻つて」

倉蔵「そんなもつたいねえこと」

静子「いいの」

倉蔵「……」

櫓を漕ぎ出す。

薬指の指輪が陽を跳ねる。

倉蔵「ダイヤモンドですか」

静子「？」

倉蔵「指輪」

静子「ダイヤモンドに目が眩み 乗つてなら

ぬ 玉の輿」

倉蔵「？」

静子「金色夜叉。知らないか」

ケラケラ笑う。

静子「これは白磁。朝鮮にしかない白」

倉蔵「朝鮮はいいところなんですか」

静子「日本人にとつてはね」

倉蔵「奥さんが鮮人じゃねえかって噂、あんだだけど」

静子「もしも朝鮮人ならどうする」

倉蔵「俺は朝鮮人、嫌いだ」

静子「どうして？」

倉蔵「野田萬の醤油工場でも流山の工事現場でも、ストライキつうと鮮人が暴れやがる」

静子「日本人が安く働かせてるからじゃないのかな」

倉蔵「食いつぶされて日本来て、メシ食えるだけでもありがたいえつうの」

静子、波紋に左手を浸す。

静子「東洋拓殖って聞いたことないかしら？」

倉蔵「いえ」

静子「朝鮮にある日本の国策会社。朝鮮人を騙して土地を取り上げたの。私はその会社の重役の娘だった」

静子、水の中で揺れる白磁の白を見ている。

る。

倉蔵「どうして帰ってきたんですか？」

静子「……あんみつ」

倉蔵「は？」

静子「銀座の若松、知ってる？」

倉蔵「銀座どころか浅草にも行ったことねえ」

静子「あそこのおあんみつがもう一度食べたかったの。……銀座にいつ行けるかしら」

倉蔵「……よかった」

静子「なにが」

倉蔵「奥さんが日本人で」

静子「チョンジャ」

倉蔵「？」

静子「静子の朝鮮読み」

倉蔵「……静子、さん」

静子、倉蔵に水を掬って掛ける。

倉蔵、目を開いたまま、掛けられる。

静子、フツと笑って目を閉じ、寝転がる。

静子「舟頭さんも目を閉じてみて」

倉蔵「田中倉蔵です」

静子「倉蔵さん、目、閉じて」

倉蔵「目閉じちまつたら、どこ流されちまうか」

静子「流されちゃってもいいじゃない。どうせ行く先ないんだし」

倉蔵「……」

静子「気持ちいいよ」

しばし静子を見つめた倉蔵、再び櫓を漕ぎ出す。

○ 井草家・馬小屋

貞次がアオの手入れしている。

撫でる、拭く、撫でる。

藁を抱えたマスが入ってくる。

貞次「気づくが、アオに 競争じゃ、おめえとわし、どっちが先に逝くか」

マス「そんなこと言うんじゃないよオ」

貞次、マスを見る。

マス「（見返し）なあ、父っさま。（藁を下ろし）まだまだ生きてけれ」

子供（高男・7）が駆けてくる。

それを追って、茂次。

茂次とマス、目が合う。

マス「（何か言おうとするが）」

茂次「（高男に）行くべ」

と、逃げるように消える。

マス「……」

○ 千葉日日新聞

楓が原稿を書いている。

「モガ」と部長の砂田伸次朗（49）が呼ぶ。

楓「……（無視）」

砂田「恩田」

楓「(砂田を見ず) 何ですか」

砂田「ケツ、書き直せ」

楓「(顔を向け) はい?」

砂田「いずれは社会主義者か鮮人か、はたまた不逞の輩の仕業か。犯人不詳の強盗や殺人には、必ずそう書け。何度言ったら分かる」

楓「いやです」

砂田「なに?」

楓「新聞は凶悪事件を何でも不逞鮮人の仕業のように書く。毎日こういう記事を読む読者はどう思いますか」

香原がチラチラ見ている。

楓「(こういうのって朝鮮で独立萬歳運動が起こつてからですよ。朝鮮人は極悪非道の犯罪者で社会の敵だ。そう思わせてどうしたいんですか」

砂田「(吐息) どうして鮮人の味方する?」

楓「事実を書きたいだけです。朝鮮人にはいい人いれば悪い人もいます。それは日本人も同じです。いい人もいれば悪い人もいます」

砂田「……」

楓「新聞は、人々の暗い足下を照らす明かりのような存在としてあらねばならない。入社した時にそうおっしゃったのは部長で

す」

香原「それ、俺も聞きました」

砂田「分かった分かった。いいよ、俺が書くから」

楓「ダメです」

砂田「決めるのは俺だ」

楓、バンと机を叩くと出ていく。

○ 海沿いの道を行商団が歩いていく

○ 橋の下

信義を従えた新助、手慣れた口上。聞いているのは、片腕の者、松葉杖、失明者、口や鼻が歪んだ者、顔面が爛れている人たち。

新助「讃岐と言ったら四国、四国言ったらお遍路さん。お遍路さんのほとんどがあんたらとおんなし不治の病。神さんにすがりたい仏さんにすがりたい。ほんだけれど、あんらは行きどうでもお遍路する銭がない」

浮浪者たち「……」

新助「ほんで、わしらが讃岐から出向いてきたんじゃ。弘法大師さんが見つけてくれたこの丸薬が、世にもおとろしいあんたらの病を救ってくれる」

お茶の美くらしいの黒い丸薬を高々と見せびらかす。

新助「なしななった手エや足は生えてはこんけど、腫れは引く、爛れは治る。曲がった鼻や口は元に戻る、目エが見えるようになったもんもおるぞ」

失明者「ほ、ほんとうか」

新助「ワシは、嘘は言わん。おう信義、あとなんば残つとるぞ」

信義、わざとらしく包みの中を確かめて、信義「ありやあ、こりや大変じゃ。三つだけじゃが」

新助「三つじゃ。後三つ。ええか、今度わしらがこへ来るんは一年も先の事じゃ。あんたらそれまで待てるんな。寒い寒い冬を越せるんな。非業なようじゃが、わしあん中から三人の命しか救えへん。誰じゃ、さあ誰じゃ。死にとうないもんは誰じゃ。さあ、買いまへ買いまへ」

我先にとなけなしの銭を握りしめ、新助に命乞いする群れ。

○ 宿への帰り道(夕)

二人が軽くなった荷物を背に飄々と歩いている。

新助「な、あれが商いのコツじゃ。三つしかないと言つて、我先争わせる。取り合いになる。あ、まだあつたー 言つて次を出す。こつちの包みにもあつたんをわつせとつた

言うて、また出す」

信義「しきりに頷く。

信義「なるほどのう」

新助「相見互いで身を寄せおうとするけれど、誰やってしまいいは、我だけが助かりたいんや」

信義「あの人ら、早う良うなつたらええなあ」

新助「あんな葉がライに効くか。あんなもんがホンマに効くんやつたら、誰ちゃ遍路やかしせえへんが」

信義「ほんなら……あの人らをだましたんか」

新助「病は氣からじゃ。無いよりやマシじや」

信義「……」

新助「わしらみたいなモンはのう、もつと弱いモンから錢とりあげんと生きて行けんのじゃが。悲しいのう」

拝鈴の音と共に二人連れの巡礼がやってくる。

新助「せめてもの罪滅ぼしじゃ」

衣囊から笹の葉に入った（麦飯の）握り飯を取り出し、恭しく差し出す。

受け取った『同行二人』の指は、くつついて曲がっていた。

巡礼の二人、一礼し、拝鈴を打ち鳴らす。

新助、深く頭を下げる。

信義、真似て深く頭を下げる。

信義、頭を上げると、まだ新助は下げている。

新助、目を閉じて、真剣に折っているよう。

信義、慌ててより深く頭を下げる。

○ 福田村・若勢宿（夜）

一定年齢に達した若衆たちが集う集会場。村の男衆が三々五々集まってくる。

その中、軍服の三人組が歩いてくる。

隣の田中村の在郷軍人分会（栗原会長・

鈴木・鵜飼）の三人だ。

○ 同・入口（夜）

村人A「駆け込んできて」田中村のお三方が」

栗原ら三人が入ってくる。

○ 同・炊事場（夜）

ツネや稲子、マスやトミら女衆が料理を作ったり、瓶酒を徳利に注いだり、戦場のよう。

稲子「ツネに」息子が甲種合格したつづのに、何浮かねえ顔してんだい」

ツネ「お国にひとり息子取られて嬉しいわけ

ねえべ」

稲子「そんなこと言うもんじゃねえよ」

ツネ「子供のいねえあんたに何が分かんない」

稲子、徳利についていた日本酒を呷る。
トミ（背中の赤子に）ヨチヨチ、おめえは女子で良かつたなあ」

その横を咲江が何事もないように盆を

持つて通っていく。

○ 同・座敷（夜）

壁に嘉仁天皇と並んで明治大帝・睦仁の『御真影』。

田向、倉蔵、茂次、貞次ら村の男衆が勢揃い。

長谷川らに在郷軍人分会や青年団、消防組の真ん中で正吾が祝われている。

徳利を運んできた咲江、村人に尻を触られる。

やり過ぎした咲江、酩酊した倉蔵を見る。目が合うが、倉蔵、目を逸らす。

栗原、田向の盃に酒をつぎながら、
栗原「村長、あんた、二言目にはデモ……なんつたつけ」

鈴木「デモクラシイじゃ」

栗原「あーそれだ。二言目にはデモクラシイデモクラシイ言うらしいが、そいつをちつ

と聞かしてくんねえか。福田村におけるデモクラシイというヤツをよう」

田向「デモクラシイの要のひとは男女同権で……」

長谷川「(遮り)デモクラシイの演説なんぞ聞き飽きた。ここは一番、旅順の勇士じゃ。貞さん、田中村の皆さんに武勇伝聞かせてやつてけれ。若いもんに忠君の精神叩きこんでけれ」

貞次、手を振って拒む。

栗原「また貞さんけ。(正吾に)はじめて聞いた時は驚いたあ。旅順いうから、日露の二百三高地じゃ思うたら、日清の方だつていうからよお」

鈴木と鵜飼が笑う。

長谷川「(苦く)……」

岩田「貞爺い、ほれ」

貞次、顔を背け、盃を呷る。

茂次「みんながそう言ってたんだから。立つてくつちやべつたらいいべ」

と、貞次の両脇に手を入れ、強引に立たせる。

貞次「(立ち上がるが)……」

石原「貞さん、あれだ、ほれ、支那人を銃剣で次から次へとぶつ刺した話」

岩田「チャンコロの死体で道が埋まって、歩けなかったって言ってたべよ」

貞次「……」

マス、料理の盆を置いて、駆け寄ろうとする。

茂次、マスを制する。

貞次「(絞り出す)……死なねえこつた……生きて帰つてくこつた」

座が静まり返る。

貞次「(正吾を見て)死んだらだめだ、死んちつたらだめだ、死んちつたら……」

フツと栗原が軽蔑の笑いを漏らす。

長谷川、きまりが悪い。

マス「……父つさま」

茂次を払いのけて貞次に駆け寄つたマス、貞次を座らせ、背中をさする。

マス「すみません。最近ちつとボケちつて」

茂次「(苦々しく)……」

と、正吾が突然立ち上がる。

正吾「わしはお国のためなら、この命捨てても構ねえ!」

ツネ「ガキがナマ言つてんじゃねえ!」

長谷川「いやいや。立派な心掛けだ。さすが甲種合格。なあ、田中村の衆」

栗原、肯定したのか否定したのか、曖昧に笑う。

倉蔵「……兵隊なつちまったら、甲種も丙種も関係ねえかんな」

座が一瞬静まる。

大橋「いま何つったんだ」

倉蔵「軍隊じゃ毎日殴られた。味方に殴れるために行つたみてえだつた」

大橋「それが軍隊だつてべ」

倉蔵「何のための軍隊だ。わしらなんて弾避けに使われるのがオチだ」

長谷川「国を守るためだ」

倉蔵「国を守るためにわしら死なすんか。そんな戦争に意味あんか」

栗原「たまげつちやあな。立派な非国民だつてよ」

倉蔵、長谷川と栗原らが郷軍人会を睨め直す。

倉蔵「何が在郷軍人会じゃ。兵隊辞めてまで軍服着てえんか。そんなに軍隊がお好きですか。軍隊の銀シヤリが忘れられませんか」

マスはまだ貞次の背中をさすっている。

茂次、マスと貞次への怒りを倉蔵へ向ける。

茂次「よく言うな。亭主が兵隊にとられとる隙に女房に手エ出した間男がよオ。(咲江に)なあ咲江」

咲江「……(こらえる)」

倉蔵、茂次に殴りかかる。

が、あつさり躲され、飲んでいる青年団の中に倒れ込む。

徳利が倒れ、料理が飛び散る。

顔を上げた倉蔵に茂次の蹴りが入る。

茂次「倒れた倉蔵に馬乗りになると殴る。

田向「間男！ 盗ッ人！ 非国民！」

栗原「止めんな。大日本帝国陸軍や在郷軍人

会を馬鹿にするヤツはやっちめえ」

鶴飼「富国強兵あつてのお国だべ。弱いモン

はやられて当り前だ」

やんやの喝采。

トミ「子供には見せらんね。先帰つかんね」

倉蔵、防戦一方。

咲江「叫ぶ」やめろ！ やめてくれ！」

茂次の拳が止まる。

咲江「誰がこの人んこと、笑える？ ウチの

こと、馬鹿にできる？」

一同「……」

咲江「ウチ、寂しかったんよ。亭主、兵隊に

とられて、淋しくなったらいけないの」

茂次「何言ってるんだ。残してきた女房が間

男してると思ったら、兵隊なんかやつてら

れつか！」

と、ちらり貞次に寄り添うマスを見る。

マス「……」

フネがスツと咲江に近づき、いきなり頬

を張る。

フネ「幸彌が生きて帰ってきたら、おめえな

んか姦通罪で牢屋だど」

咲江「……」

フネ「出てけ。さっさと家出てけっ！」

しばしフネを見つめた咲江、フネに「礼

し、黙って出ていく。

血だらけの倉蔵、その背中を見ている。

○ 澤田家・中（夜）

蒲団を離して寝ている静子と智一。

風に乗って若勢宿の喧噪が微かに聴こえ

ている。

静子「……あなた、なんで村の人たちを遠ざ

けるの」

智一「……」

静子「田舎は何をするにも力を合わせてなの

に」

身を起こし、智一の蒲団に潜り込む。

智一「寝返りを打って背を向ける。

静子「……なにそれ」

智一「……」

静子「私はあなたの何？ 妻じゃない」

智一「……」

静子「嫌いになったんですか。飽きたんです

か」

智一「……できないんだ」

静子「……なぜ」

智一「……」

静子「四年前からよ。ねえ、四年前に何か

あったの？」

智一「……」

静子「なぜ何も言ってくれないの」

上半身を起こす。

静子「別れましょうか」

智一も上半身起こし、静子を見る。

智一「……別れてどうする」

静子「わからない……けれど」

智一「もう少し待ってくれ」

静子、立ち上がり、

静子「もう……」

自分の蒲団に戻る。

静子「遅いよ」

布団に入り、背を向ける。

智一、静子の小さな背中を見ている。

○ 三ツ堀の渡し場（夜）

疵だらけの倉蔵が渡し舟に寝転がり、夜

の川を見るときもなしに見ている。

倉蔵の腫れた頬に、スツと濡れ手拭いが

当てられる。

見ると、咲江が立っている。

咲江「痛かった？」

倉蔵、首振り、濡れ手拭いを咲江の腫れ

た頬に当てて。

倉蔵「痛かったか」

咲江、倉蔵の唇に唇を押しつける。

倉蔵「まだ喪が明けてねえんじや」

咲江「化けて出てきてもらうべ、会いてえし」

倉蔵「咲江の面倒は俺が見るって言つてやつから」

咲江「ホントかい？」

倉蔵を押し倒す。

○ 千葉真境の道

入道雲。

あちこちから蟬の声。

道祖神があり、『コレヨリ 千葉県』の古びた看板。

行商団が炎天下の陽炎の中を行く。

だいぶ腹がせり出したイシ、玉のような汗を拭く。

イシ「あ」

彌市「どしたんな？」

イシ「動いた」

サダ「元氣やなあ」

ソデ「また、男の子と違やうんな」

彌市「無事に育ったら、男でもおなごでもええわあ」

朝明「どっちみち、あのムラじゃ、死ぬまで

幸せやかしなれんわなあ」

厚「死んだら、お浄土に行けるが」

喜之助「そこでも戒名でエタとバレル」

新助「エタは死んでもエタじや」

信義「……」

ユキノ「そななほっこげな事があるもんな。

幸せになるために、みんなこうやって汗流しとんやろがい」

全員、無言。それぞれの想いを囁みしめている。

「ちようせんあめ、ちようせんあめ」

朝鮮飴売りの少女がやってくる。

晴康ら子供たちが飴売りにまとりつき、

晴康「父ちゃん、買ってくれ」

き多江「朝鮮アメ、買ってくれ」

ユキノ「やめとけ。このケチンボが買うてくれる訳ないやろが」

サダ「うちもたまには舐めたいなあ」

朝明「ワシが買うてやる、言いたいけど、

稼ぎはムラに帰^{かえ}ってからしか貰えんけんのう。ごめんのウ」

彌市「やめとけ」

サダ「なんで」

彌市「鮮人が売つとるもんやかし、何が入つとるか分からんぞ」

ソデ「ほうじゃほうじゃ」

飴売り「ソシナコトナイ」

飴売り、自分で飴を舐めてみせる。

飴売り「タイチヨブ、タイチヨブ。ワルイモ

ノ、ハイッテナイ」

必死に訴える。

新助、やにわ立ち止まり、

新助「なんぼど」

一同、意外で新助に注目。

新助「懐から財布を出し、箱でなんぼど」

飴売り「アrikatoコサイマス。チュウコセン

(15銭) テス」

新助「十五銭か。二袋くれ」

飴売り、驚く。一同も驚く。

飴売り「サ、サンチュッセンテス」

厚「ようけ買うたんじや、まけてくれんかの」

飴売り「オヤカタニシカラレマス」

新助「ええ」

と、三十銭差し出す。

○ 別の道

笑顔で朝鮮飴を舐めながら歩く一同。

イシ「珍^{めづ}つざしい事もあるもんじや。雨でも

降るんとちゃうんな」

ユキノ「あんた、どしたん」

新助「彌市があななこ言うきんじや」

彌市「わし、何と言つたな？」

新助「言われた事あるんじや。あいつらが売

りよる菓やか、何が入つとるか分からんいうて」

一同「……」

信義「敬一に」わし、鮮人初めて見たが」

敬一「鮮人言うな、朝鮮人て言え」

信義「なあ、わしらと朝鮮人、どっちが下な
んな」

敬一「どっちが上も下もない」

信義「ほんだら、なんでわしらも朝鮮人も
……」

彌市「アホ、鮮人よりわしらの方が上に決
まつとるやろが」

信義「……」

「スミマセン」と鮎売りが小走りに来る。

一同「？」

鮎売り、棒のようなものを差し出す。

新助「……」

鮎売り、棒を開く。

朝鮮の扇子だ。

鮎売り、扇子で新助を扇ぐ。

そして、また閉じて差し出す。

鮎売り「センス。チョウセンノセンス」

新助「くれるんか」

鮎売り「（頷く）」

新助「ほんだら」

と、受け取る。

新助「ありがと」

鮎売り「（頭下げ）アリカトコサイマス」

信義、そんな一人を見ている。

○ 福田村・炎天下の道

茂次がアオを曳いて歩いていく。

茂次、立ち止まるアオを急ぎ立てる。

○ 井草家・表

茂次が帰ってくる。

マスが飛び出してきて、殴りかかる。

マス「このでれすけが！ アオをどこやつ
た！」

マス、茂次を引つ張り、中へ連れて行く。

○ 同・中

マス、肩を落とした貞次の前に茂次を連
れてくる。

マス「父さまにちゃんと話してみろ！」

ようやく耳を離す。

茂次、しどろもどろ。

マス「売つちたな」

茂次「あんな役立たずの老いばれ馬、食つち
まうしか使い道ねえべ」

貞次、いきなり茂次の頬を張る。

貞次「（興奮で言葉にならないが）……アオ
は……アオが……とんだけワシらに尽くし
てきた思ってたんだ」

茂次「あんたはいつもアオばっかだ」

貞次「何だと」

茂次「出来損ねえの息子より馬が可愛い
だ」

貞次「……」

マス「なにバカなこと言ってたんだ！」

茂次「旅順の勇士様にとつちや、さぞ出来の
悪い息子が恥ずかしかったんだんべ」

貞次「……嘘なんだ」

茂次「？」

貞次「わしは兵隊じゃねえ。軍馬係のただの
軍夫だア」

茂次「……」

貞次「兵隊は見境なく女、こども、年寄りを
殺してた。わしはその死体を片づけさせら
れただけだア」

茂次「……」

貞次「おめえにえええって思われたくつて、
兵隊から聞いた話喋ったら、それがいつ
間にか村中に広がっちゃまつて」

茂次「……」

貞次「……」

貞次「……もうひとつ隠してることねえか」

貞次「……」

茂次「……」

貞次「……」

貞次「……」

貞次「……」

貞次「……」

茂次「マス、この子、外に連れてけ」

マス「あんた、何するつもりだ」

茂次「わかつてるべ」

マス「わかんねえ」

茂次、子供の耳を押さえ、

茂次「この子の親父はあんただつべ」

マス「な、何をあんた、馬鹿なこと」

茂次「わしが兵隊に行つて時のことだ」

しばし黙っていた貞次、ヨロヨロと立ち上がる。

茂次「どこ行く」

貞次「アオの供養じゃ。酒、買ってくる」

茂次「待てよ。言い訳くらいしたらいいべよ」

貞次、土間に降りようとして、膝から崩れ落ちる。

マス「父っさま、父っさま！」

○長谷川家・座敷(夕)

マスを除く村の女衆が肅々と白い四花(死花)を作っている。

その中に、珍しく静子。

ツネ、黙って死花を静子の前に差し出す。

ツネ「奥さん、わりいんだけど、あんたのゼエんぶ出来損ないじゃ。やり直してくれつけ」

静子、他の女衆を見る。

トミ「ウチ、もう終わつから、半分」

稲子「余計なことせんなつーの」

静子、ツネの手から死花を取ると、やり直す。

と、横から咲江が手を伸ばし、静子の死

花を取ると、一緒にやり直す。

稲子「奥さん、倉蔵の舟にしょっちゅう乗ってるみてえだけど、何してるんだい」

静子「……」

咲江「行つたり来たり……ですよ？ いいお客さんだつて、倉蔵さんが」

一同「納得しない沈黙」

静子と咲江、作業を続ける。

○井草家・中(夕)

胸に守り刀を置かれ、安置されている貞次の亡骸。

その前に、茂次とマス。

マス「あの子、あんたにそっくりじゃねえかい」

茂次「つてことは親父に似てるつてことだべよ」

マス「……」

茂次、立ち上がる。

マス「どこ行くの」

茂次「どっちに似てつか見てくつから」

マス「……ばか」

茂次、土間に降りる。

マス「あんた、湯灌」

茂次「おめえがやつたらいいべ」

振り返らずに出ていく。

× × ×

マス、裸にした貞次の湯灌をしている。

マス「父っさま……」

貞次の手を自分の胸に持つてこようとする。

しかし、死後硬直で動かない。

涙が出てくる。

マス、前をはだけると、貞次の隣に横たわる。

マス、乳房で貞次の顔を包む。

マス「ごめんね……ごめん」

誰に謝っているのか――

○炎天下の道を

行商団が歩いてくる。

朝明「ムラ出てから、もうすぐ半年か」

サタ「野田から利根川渡つたら、この旅も終わりじゃ」

厚「利根川渡るんは初めてやな」

ユキノ「知らんとこやけど、ようけ売れるらしいで」

イシ「この子みたいに、ノブちゃんも成長したかのう」

お腹の子を撫でながら言う。

彌市「野田は醬油で栄えとる町じゃ。ようけ売つてようけ稼ごぞ。頼むぞ、ノブ」

新助「朝鮮扇子で扇ぎながら」よし信義、

景気つけにジコタの心得、唱えてみい」

信義「よっしゃ、『苦しい峠の向こうには、
楽な下りが待っている』」

新助「総員、復唱!」

一同「唱和」

信義「楽は苦の種 苦は楽の種」

一同、唱和しようとする、チーンと鉦
の音。

野辺送りの列が歩いてくる。

貞次の葬列だ。

信義がさらに唱和しようとするのをユキ
ノが止める。

鉦を携えた田向を先頭に、四ツ持ち（棺
ぎ）、天蓋持ち、続いて茂次・マス一家、
長谷川、稲子、ツネ、正吾、倉蔵、咲江、
トミ、フネ、幸定ら村人が続く。

一番うしろから、智一と静子。

新助、深く頭を下げる。

信義も慌てて頭を下げる。

陽炎の中、すれ違う行商団と葬列。

○ 野田町の繁華街

行商団がやってくる。

道の真ん中を線路が走り、醤油樽を乗せ
たトロッコが行き交う。すぐ横には運河。
醤油樽には『野田萬』の文字。

晴康「しょうゆのにおいじゃ」

き多江「しょうゆのにおい、しょうゆのにお

い」

子供たちがはしゃぐ。

行く手から革命歌が聞こえてくる。

○ 野田萬醤油工場・表

赤旗黒旗立ち並び、『ストライキ決行
中』の立看板や貼紙。

徒党を組む労働者たちが革命歌を歌って
いる。

「あ あ 革命は近づけり ああ 革命
は近づけり

起てよ 白屋檻樓の子 醒めよ 市井の貧
窮児

見よ わが自由の樂園を 蹂躪したるは何
者ぞ」

その横を行商団が通り過ぎていく。
敬一「信義に」 ストライキや」

信義、怖さ半分好奇心半分で何度も何度
も振り返る。

○ 澤田家・土間（夜）

静子が胡瓜を刻んでいる。

刻んだ胡瓜を塩であえて、しんなりさせ
る。

静子、吊したニンニクを取ると、みじん
切りにする。

○ 同・座敷（夜）

食卓に胡瓜のナムルともやしスープが並
んでいる。

智一「ナムルとコンナムルクッパか」
静子「豆もやしじゃくて、日本のもやしだけ
ど」

智一、食べる。

智一「懐かしいな。……なんで今日、朝鮮料
理なんだ」

静子、箸を置く。

静子「明日、出ていきます」
智一「……行くところはあのか」
静子「……」

雨が降ってくる。
いきなりの激しい雨だ。

智一「……雨だな」
静子「……雨ね」

ふたり、雨を見ている。

○ 暗闇 T 「9月1日」

○ 木賃宿「野田旅館」・表

ギラつく太陽が水たまりに陽を跳ねてい
る。

晩夏の蟬がけたたましく鳴いている。
風が強い。

行商団が出てくる。

イシと子供たちが見送る。

行商団、歩いていく。

『用心に被害なし』と書かれた貼紙が塀に貼られている。

絵入りの『家庭』を中心に据え、『押売』『浮浪人』『不正行商人』に対する注意喚起を示す図柄。

一同、その横を通り過ぎていく。

新助「ノブ、旅も終わりやきん、やってみまへ。朝明、お前面倒見てやれ」

朝明「そなな。わし、人に教えるやかし」

新助「お前のびっこは武器じゃ。人の情けの買ひ方、ノブに教えてやれ」

○ 澤田家の畑

智一がひとり耕している。

小休止し、腰を叩く。

○ 澤田家・智一の部屋・縁側

静子、柳行李に荷物を詰めている。

視線を感じ、ふと顔を上げる。

信義と朝明が家を覗き込んでいる。

静子「なにか御用？」

朝明、大仰に杖をついてビッコで歩み寄り、

朝明「讃岐から商いに来たもんです。エエ薬

が選り取り見取り。ちょっと見てやってつか」

○ 同・座敷

信義と朝明の前にお茶と煎餅が置かれる。

静子「こんなものしかなくて」

信義、珍しいものを見るように凝視。

静子「冷たいお水の方がよかったかしら」

朝明「いえ、そなな」

信義「い、いただきます」

茶碗を丁寧な様子で、堰を切ったように飲む。

朝明、渋面。

静子「あら、湯呑み拝む人、はじめて見た」

信義「で、でも、田舎じゃわしらにお茶出す

家、あらへんです。あ、有難いです」

静子「讃岐の人たちって、お客さんにお茶も

出さないの？」

信義「ああ、いや……」

朝明「いや、わしら客じゃないですから」

静子「何か察するが」……」

話題が続かぬように、朝明、品々をサツと広げて、

朝明「さあさ、富山にも負けん讃岐の特効薬

の数々、とくとご覧あれ」

静子「富山の薬とどう違うのかしら」

朝明、信義をつつき、促す。

信義「と、富山は、た、タダで薬置いて帰る。

で、一年経つたら、使った分、お金とって、

か、替え薬を置いていっきやる。で、でも、

でも……（つかえる）」

静子、やさしく微笑み、待つ。

信義「わしら、す、すぐにお金貰わんと、暮らしていけないのです。富山の人みたいに、

も、元手はないし、身ぎれいでもない。ほん

んでも、薬は富山のモンにはひとつも負け

とらん」

静子「いただこうかしら……」

信義「！（バツと笑顔）」

静子「でも、何をいたたいたらいいのか」

静子、薬を見ていく。

信義「ほ、ほんま、し、品物は、どれも、

じ、自信が」

静子「……あの人の……」

静子、「あの人」と口にした自分が信じ

られず、押し黙る。

信義「沈黙を埋めようと」ほ、ほ、ほんま

に、じ、じ……」

静子「（頷き）あの人、いつまで経っても野

良仕事に慣れなくて、牀の節々が痛い痛

いつて」

信義、すかさず『湯の花』を取り出し、

信義「ほんなら、これが効つきよります。夏

目漱石センセの『坊ちゃん』で名高い、道

後温泉にポツカリ浮かんだ湯の花湯の花」
静子、やさしく聞いている。

○ 田んぼ道

信義、跳びはねんばかりに歩いている。

信義「売れた、売れたッ」

朝明「ノブ！」

信義「？」

朝明「生まれ育ちが分かってしまうような真似、すな」

信義「……」

朝明「わしらに茶やかし出す家やかない言うたら、西の方じゃ一発で部落の出や言うて分かってしまうが。ほんたら誰ちゃあわしらの売るもんやかし、買わへん。分かるな」

信義、コクンと頷く。

○ 東京府江東区大島町

楓が住所を書いた紙を片手に歩いている。
『平澤』『純労働組合』と書かれた表札の家で立ち止まる。

少し離れた路地で、じっと楓を観察している二人の男（亀戸署の蜂須賀と宮田）。

○ 澤田家・座敷

和服の静子、畳の上に大の字になって、

虚空を仰いでいる。

静子、意を決したように起き上がると、

三面鏡の前に座る。

口紅をひく。

胸元に右手を忍ばせる。

静かに息を吐く。

×

×

×

洋装の静子、文机に手紙を置く。

『落着き先が決まったらお知らせします。荷物を送って下さい』

静子、『湯の花』を重石代わりに載せる
と出ていく。

○ 利根川の渡し場

倉蔵、煙管を吸っている。

旅行鞆を提げ日傘をさした静子が来る。

けたたましい蝉時雨。

静子、立ち上がった倉蔵にドサッと鞆を渡す。

静子「この舟、どこまで漕いでいけるかしら」

倉蔵「どうだんべ、こんな小舟じゃなア」

静子「ともかく行って」

倉蔵「行くって、どこまで」

静子「行けるところまで」

倉蔵、ボンと煙管の灰を捨てる。

倉蔵「行けるとこまで、か」

静子、小舟に乗る。

静子「忘れてた」

倉蔵「？」

静子「結婚指輪。あの人に返すの」

倉蔵「返すって……」

静子「家、出てきたの」

倉蔵「このまま帰えんねのけ」

静子「指輪、どうしよう」

倉蔵「奥さん送った後、届けとつけ？」

静子「そうね」

倉蔵「質入れしつちゃうかしんないよ」

静子「ダイヤモンドじゃないけど目が眩み、ね」

指輪を外そうとする。

なかなか外れない。

静子、指を倉蔵に預ける。

倉蔵、強引に引つ張る。

静子「痛ッ」

指輪が抜ける。

静子、倉蔵を見る。

倉蔵も静子を見ている。

静子「……欲しい？」

倉蔵「指輪？」

静子「あたし」

倉蔵「……」

静子「あたしのこと、欲しい？」

倉蔵「強く頷き」いいんですか」

静子「(も頷く)」

静子、身をまかせろ。

倉蔵、押し倒す。

静子「ちよっと待って」

静子、スカートの中から下着を取る。

○ 澤田家の畑

智一ひとり、握り飯を食べている。

○ 東京・平澤家・座敷

楓が平澤計七(34)の取材をしている。

そのまわりを和嘉子(3)が駆け回っている。

平澤「僕は鉄道の車両ばっか作ってきた労働者上がりだから、経営者との間で落としか

ころばっか探ってた。だから大学出のイン

テリたちから追放されて、こんなところで

ちんまりと小さな組合やっているだけで」

楓「でも平澤先生は、プロレタリア演劇を始めた方です」

平澤「満更でもなく」まア、ちつとばかし

小山内薫さんに誉められたっただけで、世

間の人なんか知らないヨ、僕の芝居なんて

取材なんておこがましいヨ」

妻・ヨシ「(笑い)いつも俺が俺がつて人が、

どうしちゃったの。わざわざ東京まで来て

くれたんだから、ちゃんと話してあげな

いよ」

平澤「ああ、うん。きみ、アドリブって知っ

てますか」

楓「？」

平澤「役者が客に直接話しかける話法でね。

日本じゃ僕がいつとう最初に……」

床が小刻みに震えていることに気づく。

楓、畳を見下ろす。

その瞬間、ドンと衝撃上げられる。

続いて、大きな揺れ。

ヨシ「え、地震」

と、和嘉子を抱き上げ、しゃがみ込む。

立ち上がろうとして足を取られる。

楓、必死に這って柱に掴まる。

平澤、なんとかヨシと和嘉子の上に覆い

被さる。

T
「11時58分」

○ 福田村・道

昼飯で合流した行商団が揺られている。

信義、咄嗟に近くの壁に縋り付こうとす

るが、その壁が音立てて倒れる。

新助、咄嗟に信義を庇う。

○ 野田旅館

激しい揺れの中、イシ、必死に子供たち

に這っていく。

○ 澤田家の畑

智一も揺られている。

○ 利根川も揺れて、川面が波打っている

跡を重ねていた静子と倉蔵、互いにすがりつく。

○ 土手の道

蹲っている咲江。

桶から豆腐が散乱し、砕け散る。

咲江、眼下の利根川を見る。

荒くうねっている。

咲江、なんとか立ち上がり、走り出す。

何度もうろめきながら、必死に走ってい

く。

○ 福田村全体が凄まじく揺れている

それぞれの場所で、茂次が、マスが、ツ

ネと正吾が、田向とスエが、長谷川が、

揺られている。

○ 若勢宿

『御真影』が落ちて、割れる。

○ 利根川の渡し場

ようやく天地が治まっていく。

蟬時雨も止んでいる。

渡し舟は浸水し、静子と倉蔵も抱き合ったまま、半分水に浸かっている。

二人、身を起こし、辺りを窺う。

倉蔵「舟出してたら、どうなっちゃったか」

静子「死んでもよかったのに……」

倉蔵、静子を見る。

静子の顔に小さな笑みが張り付いている。終末を悦んでいるのか――

× × ×

水神様のところ――

走ってきた咲江、倉蔵と静子の姿を認める。

立ち止まり、見下ろす。

咲江「……」

人の気配に視線を向ける。

離れて、智一もふたりを見下ろしていた。

智一、咲江の視線に気づく。

智一、目を逸らすと、足早に歩み去る。

○ 千葉日日新聞

落下した書籍や資料、書類が散乱している。

香原「電話から顔を上げ」どこにも通じません！

砂田「モガから連絡は!?」

香原「だから、電話は通じません!」

記者Aが飛び込んできて、

記者A「地割れ、倒壊家屋、夥しい数です!」

砂田「火事は?」

記者A「炎があちこちから」

記者B「警察はまだ被害状況を何も把握していないと」

記者C「役所も同様です。とりあえず被災者の避難所を各町村の尋常小学校に作るように指示を出すそうです」

砂田「とにかくひとつでも多くの正確な情報を集める。今まで何度も言ってきたが、今日こそ声を大にして言うぞ。地元紙は……」

香原「暗い足下を照らす明かりのような存在としてあらねばならない」

砂田「なんで被せるんだよ」

香原「今日ほど、この言葉を実感した日はありません」

記者A「印刷所、見えます」

飛び出していく。

砂田「輪転機が回らなければ手書きでもいい、壁新聞を貼って回ろう。自分の家族が心配な者もいるだろう。しかし、今こそジャーナリズムが力を発揮するべき時だ」

記者A「印刷所、見えます」

飛び出していく。

砂田「輪転機が回らなければ手書きでもいい、壁新聞を貼って回ろう。自分の家族が心配な者もいるだろう。しかし、今こそジャーナリズムが力を発揮するべき時だ」

記者A「印刷所、見えます」

○ 東京・大島町(夕)

楓と平澤、和嘉子を抱いたヨシが歩いて

くる。

瓦礫の山。

空は舞い上がる炎で紅蓮に染まっている。

ヨシ「どこかしら」

平澤「おそらく本所あたりだ」

楓「では、私はここで」

ヨシ「まだ余震があるかもしれません。電車も動いていないそうです」

楓「被害の様子を取材しながら、千葉まで歩きます」

と、近所の町民がドヤドヤと来て、

大島町民A「平澤さん、富士山が噴火したそうですねですよ」

大島町民B「あたしや、大津波がやってくるって」

大島町民C「まさかと思うけど、山本権兵衛首相が暗殺されたって話も」

ドヨメキが起きる。

平澤「落ち着いて下さい。こういう時は得てして流言飛語が飛び交います。デマや噂に惑わされず、冷静に冷静に」

「でもよ、あいつらならやりかねねえぜ」とハッピー姿で自転車に乗った男。

ハッピー男「鮮人や主義者よ。強盗強姦どこかあちこちで火つけて回ってるヤツもいれば、井戸に毒投げ込んでるヤツもいるって話だ。地震に乗じて、日頃の恨みを晴らそうって

話だ。地震に乗じて、日頃の恨みを晴らそうって

話だ。地震に乗じて、日頃の恨みを晴らそうって

魂胆だ」

平澤「……ありえない」

ハッピー男「なんだい、あんた、鮮人や主義者を庇うのかい」

平澤「ありえないと言ってるだけだ。あんたこそ、そんな噂を無責任に広め……」

平澤、男をマジマジと見て、

平澤「(ハッピー男に) あんた、どこかで会ったこと……」

ハッピー男、みなまで聞かずに走り去る。

ヨシ「どうしたの？」

平澤「今の男……亀戸署の刑事では……」

楓、走り去るハッピー男を見ている。

ハッピーを着た男たちがさらに数人、自転車で走っていく。

大島町民C「強盗とか強姦とか井戸に毒とか

……怖い」

大島町民A「鮮人が襲ってきたらどうしたら……」

大島町民B「こりゃ、自警団作って、見回った方がいいかもしれねえな」

平澤「……」

楓「取材してきます」

一礼し、駆け出す。

○ 福田村・澤田家近くの道(夕)

砂利道を裸足の白い足が行く。

少し血が滲んでいる。

旅行鞆に日傘を結わえ、濡れた靴を持った静子だ。

静子、顔を上げる。

速く人影。

智一だ。

智一、無言で背を向け、腰を落とす。

静子、無言でおぶさると、智一の首に手を回す。

智一、立ち上がり、歩き出す。

智一、静子の指に指輪がないことに気づくが、

智一「……湯の花入れて、風呂に入ろう」

静子、智一の首筋に頬を寄せる。

○ 若勢宿・表(夕)

倉蔵や茂次、正吾や若い男たちが米俵や

保存食料を運び込んでいる。

長谷川「家潰れた者もおる。女衆に声掛けて

炊き出した」

田向「東京から逃げてくる者もおるかもしれない。親類縁者に拘わらず、受け入れるんだ」

スエが田向の足にしがみ付いて離れない。

○ 同・中(夕)

ツネ、稲子、咲江、マス、トミら女衆が

炊き出しに天手古舞。

トミ、心ここにあらずで、持っていた盆を落としてしまう。

ツネ「どうした？」

稲子「亭主の出稼ぎ先、東京か」

トミ「暗く領く」

稲子「連絡は……あるワケねえか」

マス「その内、何食わぬ顔で帰ってくからだいじ(大丈夫)だ」

ツネ「(咲江に) おめえも心配事か」

マス「さっき舟見たぞ。あいつ、無事だったんだべ」

咲江、強張った笑みを浮かべ、頷く。

○ 共同井戸(夜)

咲江がひとり帰ってくる。

「咲江」と声がする。

倉蔵「無事で良かった」

咲江「(凝視)」

倉蔵「利根川の水がよお、こう、パタンパタン波打つてよ、舟が木の葉のように揺れただよ。あぶねえところだった」

と、いきなり井戸の水が浴びせられる。

倉蔵「なにすんだ！」

咲江、まだ水をかけようと、つるべを必死に引き上げている。

その目に微かに涙が滲んでいる。

倉蔵「……」

短衣を脱ぐと、咲江の手からつるべを取り、自ら水をかぶる。

脱ぎ捨てた短衣の傍らに、白磁の指輪が落ちている。

咲江、指輪を拾うと、きつく握りしめる。

○ 澤田家・風呂場（夜）

静子が湯の花を入れた五右衛門風呂に入っている。

智一は表で薪をくべている。

「気持ちいい」と静子の声がする。

智一「え？ なに？」

静子「気持ちいいって言ったの」

智一「ああ」

静子「地震でお家なくした人がいる時に、申し訳ないけど」

智一「……銀座の若松、大丈夫だったかな」

静子「……あんみつ、食べたかったな」

智一「……すまなかった」

静子「何が？ 何がすまなかったの」

智一「あ、燃える薪を見ている」

静子「熱い」

智一「あ、すまん」

薪を出す。

静子「笑い」今のすまんはわかった」

智一「（も笑おうとするが）……」

静子「ねえ……」

智一、顔を上げると、静子が格子の小窓から覗いている。

智一「ん」

静子、智一を見下ろしているが、

静子「ううん、何でもない」

静子、湯舟にザブンと入った。

○ 同・座敷（夜）

蚊帳がふたつ。

それぞれの床で虚空を見つめ、まんじり

ともしないふたり。

○ 福田村・××神社・境内（早朝）

赤ん坊をおぶったトミがお百度参りをしている。

トミ「父ちゃん無事に帰ってくるよう、一緒にお願いすつべな」

T 「9月2日」

○ 往還道（朝）

女衆がモッコに入れた土で陥没した道を埋めている。

ツネ「手を止め」来た」

陽炎の中——東京からの避難民たちが大勢歩いてくる。

家財道具を載せた大八車を曳く者はまた

いい方で、大半が薄汚れ、身ひとつで焼け出されている。

○ 若勢宿・表

泥だらけ・煤だらけのシャツ一枚だけの男、襦袢に兵児帯だけの男、浴衣姿に手拭いを姉さんかぶりの女たち避難民。

ツネ、稲子たちの年長組が茶や握り飯の接待。

田向と長谷川らが郷軍人会、避難民たちの話を聞いている。

避難民A「横浜で土木工事やとった朝鮮人が数百人襲ってきた」

避難民B「近所の娘さんなんて、よってたかって姦られちゃったとよ」

長谷川「それも鮮人が……」

稲子「ひでエ」

田向「（何か言おうとするが）……」

避難民C「片っ端から井戸に毒放り込んでるって話も聞いたぞ」

赤ん坊をおぶったトミが飛び込んできて、

トミ「いねえかい？ 誰か本所から来た人いねか」

避難民D「本所はゼエんぶ燃えちゃったらしいぞ」

トミ「（声にならぬ悲鳴）」

避難民B「鮮人が火付けたさうだ」

避難民D「日本人はみんな颯り殺しされた
ちゅうぞ」

トミ「口に手を当てる」

避難民A「あんた、本所に誰か知り合いが
おるのか」

トミ「答えられない」

稲子「代わりに」亭主が、飯場に」

避難民D「鮮人にやられとらんといいが」

トミ、赤ん坊抱きしめ、すすり泣く。

ツネ「大丈夫だ大丈夫だ。きつと帰って
くる」

田向「鮮人が襲つてくるとか井戸に毒投げ入
れてるとか、あんたら、その目で見たん
か？」

避難民B「いや。だけどみんな、そう言っ
たからなあ」

田向「……」

○ 野田旅館・大部屋

身動き取れず、押し黙ったままの行商団
一行。

厚が帰ってきて、

厚「町の薬屋、一軒は押し潰れとったし、
もう一軒は薬が回って来んで店閉めと
ります」

新助、苦渋の表情で立ち上がる。

新助「行っか」

ユキノ「行くゆうて まさか……」
ソデ「ほんだけど、まだ余震も……」

新助「自分に言い聞かせるように」こなな
時に商売せんでどうする？ わしら、そう
やって生きて来たんやろが」

彌市、立ち上がると、荷物を背負う。
敬一も喜之助も無表情で立ち上がる。

新助「あぶねつから女衆は残れ。行くぞ」
信義、立ち上がる。

○ 同・表

品物を背負った男衆七人が出てくる。
目の前を避難民が列をなして歩いている。
あちこちで火がくすぶり、崩れ落ちた
家々が散乱、トロッコは横転、人々の間
では罵声が飛び、小競り合い。

朝明「こなな時に商いしたら殺されるかわか
らん……」

彌市「なに甘ちよろいこと言よんや」

新助「……（さすがに迷っている）」

敬一「親方、損して得取れ、言うやないです
か」

新助「町を、人々を、見ているが……」

無言で踵を返す。

一同、ホツとしたように後に続く。

やはり被害を見ていた信義、慌てて続く。

○ 福田村役場・会議室

田向や助役、長谷川らが郷軍人会の面々、
有力者たちが鳩首会議。

長谷川「鮮人が暴れ回っている言っているのは

一人や二人じゃない。村に何か起きてから
では遅い。いまずぐ自警団を結成すべ
きじゃねえのか」

ほとんどが同調。

岩田「内務省も警視庁も焼け落ちたという
しな。てめえの村はてめえで守らにやなん
ねえ」

助役「『千葉日日新聞』を出し」新聞もわし
らが知ってることその他は何も書いてねえ。
避難民の言うことを信じるしかねえ」

さらなる同調。

石原「頼む、村長。ことが起きてからじゃ、
遅い」

田向「まあ待て。待つてくれ。ここはひとつ
落ち着いて」

長谷川「田向」

田向「村長だ」

長谷川「村長、デモクラシイってのは多数決
じゃないのか」

田向「詰ま……」

川本が慌ただしく入ってくる。

川本「内務省から通達が届きました」

長谷川「みんなの前で読め」

川本「読む」『不逞鮮人暴動に関する件。在郷軍人会、消防隊、青年団等は一致協力して、その警戒に任じ、一朝有事の場合には速かに適當の方策を講ずる』

長谷川「そういうことだ、村長サン」

田向「……（頷くしかない）」

○ 同・階段

長谷川と在郷軍人会の面々、早足で駆け降りていく。

○ 同・玄関

長谷川、扉を開け放つ。

外には村人が大勢待つてゐる。

倉蔵も茂次も正吾もいる。

長谷川「たつたいま内務省から通達があつた。

自警団を組織する」

顔を見合わせる一同。

長谷川「諸君、在郷軍人会・青年団・消防組を総動員して、命を、家族を、村を、守るべし」

一瞬の沈黙。

正吾「（自分に言い聞かせるように）準備だ、準備すつて。すぐに竹を切り出せ！」

呼応するように声がかかる。

躊躇っていた茂次、まわりに合わせて声を出す。

倉蔵、ひとり声を出せない。

茂次、ちらり倉蔵を見る。

目が合う。

茂次、慌てて目を逸らす。

○ 共同井戸（夕）

夕陽を浴び、軍服姿の長谷川、旭日の帝国在郷軍人会旗を持った石原、ラッパを抱えた大橋ら十数名が集結。

簡易点呼を終え、軍務規律を反復している。

その光景を離れて智一が見ている。

「澤田」と声。

いつの間にか、田向が後ろに立っている。

岩田たち、井戸を封鎖し、貼紙を貼る。

——『飲ムナ 毒ニチュウイ』

田向「こうなると、もう俺には止められん」

智一「……」

田向「智一、お前、止められないか」

智一「……」

どこか不安そうに自警団を見守っていた

長谷川が、智一と田向に気づく。

長谷川、先祖伝来の日本刀を抜くと、ふ

たりに切つ先を向ける。

智一、無言で踵を返す。

早足で歩いていく。

○ 澤田家・土間（夕々夜）

静子が帰ってくる。

薄闇の中、智一がボツンと座っている。

小さく沈んだような、その背中。

静子「……朝鮮人が襲つてくると、村の人たちが……」

智一「……この地震に乗じて、朝鮮人がそんなことするとは思えない。だけど……やるかもしれない……」

静子「並川市場事件では、独立を求めた群衆に無差別に発砲したんですよね」

智一「韓国を併合してから、日本人は朝鮮人をずつと苛めてきた」

静子「（頷く）」

智一「だから、いつかやり返されるんじゃないかという恐怖心があつたんだ」

静子「同じようなことになりませんか。また軍隊や憲兵が朝鮮の人を……」

智一「……堤岩里事件であつたらう」

静子「教会が焼けた……」

智一「……焼けたんじゃない、焼いたんだ

……四年前、あそこにいんだ。堤岩里、

チェアムリに」

静子「……四年前……」

智一「……俺は……憲兵隊に呼ばれて、集められた二十九人の朝鮮人に通訳した」

静子「……なんて？」

智一「……(苦しい)」

静子「ねえ、なんて」

智一「3. 1 운동 때 일본이 조선사람들에
게 잔인한 처벌을 했어요. 그에 대한 사
죄입니다. 자 교회 안에 들어가십시오(日
本語訳…三月一日の萬歳事件で、我が国は
あなたたちの国にあまりにも酷いことをし
てしまった。それを謝罪しに来た。だから
教会の中に入って欲しい)」

静子「……」

智一「二十九人が教会の中に入ると、憲兵が
戸や窓に板を打ちつけて……一斉射撃を始
めた。何十発も何百発も……最後には火を
かけて……全員、焼け死んだ」

静子「……」

智一「周囲には彼らの家族がいた」

静子「……」

智一「泣きながら走ってきた女が訴えた。夫
はただ朝鮮独立のために闘っているだけで
す。決して日本人を憎んでいるものではありません。俺は必死に訳した。訳し終わると
同時に、指揮官の有田中尉が軍刀で女の首
を刎ねた」

静子「……」

智一「日本人は朝鮮語を学ぶ必要はなかった。
朝鮮人に強制的に日本語を喋らせるから。
でも俺は朝鮮語を学んだ。彼らの国で暮ら

す以上、学ぶべきだと思った」

静子「……」

智一「……俺はそのことばを、朝鮮人を殺す
ために、使ったんだ」

陽はすっかり落ち、暗くなっている。

静子「……酷いことをしたのね」

智一「ああ。酷いことをした」

静子「私にも」

と、背を向ける。

ふたり、暗闇に沈み込むように佇んでい
る。

○ 東京から千葉への道(夜)

薄汚れた服で楓が歩いていく。

道の先、橋のもとに自警団の高張提灯

が見える。

ふいに少女が並びかける。

和服を着ているが、朝鮮飴売りの少女だ。

少女「……イッショニアルイテクタサイ」

楓「？」

少女「(小声だが、必死) オネカイ。オネカ

イシマス」

楓「……」

少女の手を取ると、自警団に向かってい
く。

自警団A「どこへ行く？」

楓「千葉に帰ります」

自警団B「千葉？ 東京にはなんで来た」

楓「取材です」

自警団B「取材？」

楓「私は新聞記者です」

自警団A「女のくせに。怪しいぞ」

楓「女が記者やっちゃいけないんですか」

自警団B「十五円五十銭って言ってみろ」

楓「どうしてですか？」

自警団A「鮮人はガキゲゴやバビブベボが

言えんからな」

楓「……」

自警団B「……鮮人じゃないなら言えるだ
ろ」

楓「十五円五十銭」

淀みない言い方に自警団、顔を見合わせ
る。

楓「十五円五十銭十五円五十銭十五円五十

銭」

何度も繰り返す。

自警団A「もういい。お前もだ」

少女「……」

自警団B「どうした、言わんか」

楓「この子、口がきけないんです」

少女、楓を見る。

楓「妹なんです。生まれつき口が」

自警団A「……行け」

楓「ありがとうございます」

楓と少女、行こうとする。

自警団C「ちよつと待て」

自警団A「どうした？」

自警団C「こいつ、見覚えが」

少女「……」

自警団C「おまえ、いつも朝鮮館売ってないか」

自警団B「なに！」

少女、走り出す。

自警団A「待て！」

自警団D、足を出して引っかける。

転ぶ少女。

その胸元から朝鮮館がこぼれ落ちる。

少女、立ち上がり、ゆっくりと自警団を見つめる。

少女「アタシノナマエハ、キム・ソンリヨ」

その凜とした佇まいに、気圧される自警

団。

少女「強く」キム・ソンリヨ」

自警団D「こいつ、やっぱり鮮人だ」

言うと同時に竹槍を突き出す。

楓の顔に返り血が飛ぶ。

○ 千葉日日新聞(朝)

出勤してきた砂田、ギョツとなる。

楓が壁に凭れ、ペタンと座っている。

顔に血の痕、口には朝鮮館。

楓「私の目の前で朝鮮人の女の子が自警団に殺されました。書かせて下さい」

砂田「……昨日の夕方、船橋送信所に伝令が

通達を届けにきた」

楓「……」

砂田「通達には、朝鮮人が放火したり、爆弾

を所持していると書いてあったそうだ」

楓「嘘です」

香原が入ってくる。

砂田「内務省からの通達だぞ」

楓をじつと見つめる。

楓「記者が目撃した事実より内務省の電文

を信じるんですか。それを紙面に載せるん

ですか。その結果、何が起きているか。部

長はその責任を取れるんですか」

砂田「俺は書かないで起きることの方が怖い」

楓「分らないなら書くべきじゃない」

楓、ポケットから朝鮮館を出して、差し

出す。

楓「殺された女の子が持っていた朝鮮館です。甘いですよ。血と砂が付いているけど」

楓、朝鮮館を押しつけると、出ていく。

香原「記者を信じないで何を信じるんですか」

砂田「……(朝鮮館を見ている)」

と、楓が小走りに戻ってくる。

楓「私たち新聞は何のために存在している

んですか。読者を喜ばせるためですか。それ

だけですか。権力の言うことはすべて正しいのですか」

砂田「……」

楓「取材してきます」

再び出ていく。

香原、カメラを持つと、追う。

砂田、血と砂のついた朝鮮館を口に放り

込もうとして——やめる。

○ 澤田家・玄関(夕)

豆腐の入った木桶がポツンと置かれてい

る。

○ 澤田家・座敷(夜)

智一と静子、黙々と夕食を食べている。

智一、豆腐を食べる。

歯に固い物が当たると。

智一、出してみる。

白磁の指輪だ。

智一、静子を見る。

静子「……」

智一、十間に降りると、甕の水を柄杓で掬い、指輪を洗い始める。

静子「(その背に)……私、船頭さんと……」

智一「背を向けたまま」……見てたよ」

静子「……どんな気持ちで見てたの?」

智一「……」

静子「どうして大きな声でやめろって叫んでくれなかったの?」

指輪を洗う智一の手が止まる。

静子「いつもあなたは見てるだけなのね」

智一、再び指輪を洗い出す。

○ 若勢宿・表(夜)

篝火。

日本刀や竹槍、鎌・鍬・鳶口・やつとなどを携えた面々が次々に入っていく。

血走ったその表情。

茂次、竹槍を抱きかかえ、座り込んでいる。

というより、へたり込んでいるように見える。

マスが来る。

マス、ボンと袋を放り投げる。

茂次、受け取り、中を見る。金が入っている。

マス「(小声) こんな馬鹿騒ぎが終わったら、

(普通の声に戻り) これで新しい馬ツ子買うべ。汽車も当分動かん。馬だ、馬」

茂次「おめ、こんな錢、どこに」

マス、ドヤ顔で笑う。

○ 平澤家・中(夜)

平澤、和嘉子とあやとりしている。

ヨシが顔面蒼白で帰ってくる。

ヨシ「あ、荒川土手で……(荒い息)」

平澤「?」

ヨシ「数珠つなぎにされた朝鮮人が、習志野連隊に機関銃で撃たれてます」

平澤、あやとりを放り出し、立ち上がる。

○ 同・表(夜)

平澤が出てくる。

その前に人影が立ち塞がる。

蜂須賀、宮田と制服巡查、兵隊二人。

平澤「蜂須賀君、兵隊まで連れて、今日は何だ」

蜂須賀「戒厳令が出ています。万が一のことがあるといけないので、あなたを亀戸署で保護します」

平澤「デマを触れ回っているのは君たちじゃないのか」

蜂須賀「(冷たく笑う)」

兵隊二人がスッと平澤の背後に回り込む。

平澤「……」

○ 千葉日日新聞(朝)

楓が「千葉日日」を見つめている。

T 「9月4日」

見出しと記事——『野獣の如き鮮人暴動／魔手帝都から地方へ／強盗強姦略奪殺人が彼等の目的』
楓、怒りで手が震える。

○ 福田村・若勢宿・表

武装して集結している倉蔵、茂次、正吾、在郷軍人会、青年団、消防組たち。

女たちは、握り飯を配っている。

長谷川、『千葉日日新聞』を読んでいる。

石原「ついに新聞も書いたなア」

長谷川「(重く)……ああ」

大橋「鮮人の野郎、好き勝手やりやがって」

茂次、握り飯を食べながら、
茂次「(思わず) 鮮人、来ねえといいなあ」

倉蔵「(茂次を見る)」

茂次「なんだよ」

倉蔵「いや」

茂次「おめえは怖くないのけ」

倉蔵「怖えよ。満州で偉い人が朝鮮人にピストルで撃たれたじゃねえか」

茂次「いつもいじめられてっから、本気で暴

れ出したら、竹槍なんかじゃ勝てねえよなあ」

田向が来て、勢いよく『戒厳令』を広げる。

田向「明るく」千葉にも戒厳令が出たぞ」

長谷川「緊張」

岩田「よし、これで、天下晴れての人殺しだ」

田向「早まるな。ほれ、軍隊、憲兵、警察官の許可なく通行人を誰何してはならん。許可なく一般人民は武器または凶器を携帯してはならん。そう書いてある」

石原「ほんな馬鹿な」

と引ったくつて読み、がっくりと肩を落とす。

田向「解散だ」

長谷川「(内心ホッとしているが) じゃあ、どうやってこの村を守れば……」

田向「(上機嫌) 何かあれば半鐘を鳴らせばいい。その時はみな、また駆け付けてくれ」

長谷川「……」

一同、どうしていいか分からない。

と、ツネが正吾の耳を引っ張る。

ツネ「いつまで戦争ごっこやってんだ。早く帰って百姓しろ」

マス「茂次に、すぐに新しい馬つ子、買う

てこい」

倉蔵、嬉しそうに咲江を見る。

咲江、静かに豆腐桶を持つ。

○ 澤田家の畑

智一が鍬を振るっている。

と、豆腐桶提げた咲江が通りかかる。

智一「まだありますか」

咲江「頷く」

智一、弁当箱の蓋を渡す。

咲江、豆腐を入れる。

智一、お金を出す。

智一「これ、昨日のと二分」

しばし見つめ合う。

咲江「……ありがと(う)ございます」

歩き始める。

○ 亀戸署・中庭(深夜)

痣だらけの平澤が全裸で引きずられてくる。

まわりには全裸の死体がいくつも転がっている。

時おり銃声が響く。そして、「アイゴー

アイゴー」という悲痛な叫び。

平澤「どんなに朝鮮人や主義者を殺しても、

世界は資本主義から社会主義に変わる。差別と貧困がなくなるんだ」

制服警官が平澤の体を起こす。

平澤「革命を見ずして死ぬのは残念だ」

蜂須賀、笑う。

平澤「社会主義萬歳! 労働者萬歳!」

気合いと共に背後から宮田が日本刀を振り下ろす。

○ ××神社・境内(早朝)

今日もまたトミがお百度。

T 「9月5日」

○ 野田市の街角

新助と彌市が偵察にくる。

自警団が検問所を片付けている。

彌市「自警団も店じまいしよる」

新助「そりゃそうやろう。いつまでも生業ほんぎょうはつたらかしには出来んやろ」

彌市「わしらもそろそろやなあ」

新助「売り上げも無いのに、毎日毎日十五人分の宿代飯代。地震はとんだ商人殺しじゃ」

彌市「もともと、わしら鮮人じゃないきんなあ」

あ」

新助「(何か言いかけるが)……」

○ 澤田家近くの道(夕)

静子が歩いてくる。

竹槍や刀を模した武器を持った子供たちが『自警団』っこ』をしている。

「あのおばさん、鮮人かもしれねえってさ」

ひとりが進み出る。

「（静子に）おいっ、バビブベボっていつか」

静子「……」

「言えねえのか」

静子「バ、バ、バ、ピ、プペボ」

「おめ、鮮人だべえ！」

「やっちめええ！」

静子「やっちめえって、どうするの」

子供たち「……」

静子「殺すの？」

子供たち、一瞬引くが、武器を構え直す。

「やめろっ！」と声がする。

智一だ。

子供たち、あまりの剣幕に凍りつく。

智一「朝鮮人も日本人も同じ人間だ！」

と、足早に歩き去る。

静子「ごめんね」

と、智一を追う。

静子「あなた」

智一、やっと立ち止まる。

智一「背を向けたまま」この国がああに何をやったか、誰も知らない」

静子の顔がスツと醒めていく。

静子「……知らないのは、誰のせい？」

智一、思わず振り返る。

静子、じつと智一の目を見てる。

智一「……」

○ 野田旅館・大部屋（夜）

行商団一同、明日の出立に備え支度をしている。

新助は少し離れて帳簿付け。

信義「（小声）敬一さん」

敬一「なんや」

信義「前におじゅつさんが言うておいでたんやけど、わしらのご先祖様は朝鮮から渡って来た云うて、ホンマなんな」

敬一「ああ、わしはホンマやと思う」

信義「え！ ほんだら、天皇陛下様も朝鮮人なんか？」

彌市「アホげな事言うな。天皇陛下は神さんぞ」

サダ「わしらにはなんちゃしてくれへん、神さんじゃが」

イシ「いた。ホンマによう動つきよる」

喜之助「名前前は決めとんか」

彌市「敬一に考えてもろたんじゃ」

イシ「ボウじゃ」

朝明「ボウ？」

厚「変わった名前やなあ」

イシ「困り敬一を見る」

敬一「漢字で書くと、望。希望の望」

と、板の間に「望」と大きく書く。

彌市「この一字で、男でも女ごでも、エエ名前になるんや」

イシ「男の子やったら、のぞむ。女の子やたら、のぞみ」

ユキノ「男やったらのぞむ、女やったらのぞみ。ええ名じゃ」

厚「ああ、ええ名じゃ」

朝明「ええ名じゃええ名じゃ」

敬一「みんな、二言目には、わしら死ぬまで幸せになれん言うけど、そなた事絶対ありやせん。いつの日か、誰からも差別されん日がきつと来る」

喜之助「ノブ、水平社宣言は読んだか」

信義「……（首を振る）」

敬一「去年、水平社言う部落解放運動団体が出したんじゃ。その時に出された宣言文じゃ」

サダ「人間に光あれ、じゃ」

サダ、首から提げたお守りを出して、見せる。

信義、胸元からお守りを出してみる。

サダ「（頷く）」

信義、立ち上がる。

○ 同・表（夜）

信義、ひとり出てくる。

ミヨから貰ったお守り袋を開けてみる。小さく折り畳んだ紙片が入っている。

開くと——『水平社宣言』という手書きの文字。

信義、月光にかざして読む。

ミヨの声「……吾々エタである事を誇り得る時が来たのだ。吾々は、必ず卑屈なる言葉と怯懦なる行為によって……」

○ 同・表（朝）

旅支度をした行商団一行が出立しようとしている。

T 「9月6日」

行商団、歩き出す。

ミヨの声「……勳はる事が何んであるかをよく知つてゐる吾々は、心から人生の熱と光を願求禮讃するものである」

○ 野田萬醬油工場・表

一行が来る。

ミヨの声「水平社は、かくして生れた。人の世に熱あれ、人間に光あれ」

一行、立ち止まる。

ストライキの貼紙は剥がされ、立看板は

打ち壊され、赤旗・黒旗は無残に引き裂かれてゐる。

新助「お上にたてつくと、あよになるげな」

門では、壮士然とした集団が見張り番に立っている。

○ 往還（通称・守谷みち）

行商団が来る。

○ 福田村の村境

行商団が行く。

自警団はもういない。

○ 樹木に——蟬の抜け殻

長い間張り付いていたが、強風に煽られカサカサと落下する。

行商団の足がその抜け殻を踏みしめる。

○ 福田村・木立の中の道（香取神社前の茶店）

行商団が来る。

イシが腹を押さえて蹲る。

彌市「どしたんど？」

イシ「首振り」なんちゃでない」

立ち上がろうとするが、ウツと呻いてまた蹲る。

目の前に茶店がある。

新助「もうじき利根川の渡し場じゃ。わしが行つて、渡し賃の交渉してくるきん、ここで待つとけ」

彌市「ええんか」

新助「ええええ。ここまで無事に来れたんじゃ、団子でも食べちよれ。もうちよつとの辛抱じゃ」

ユキノ「（財布を弄びながら）もつぺん、地震来んやつたらええけど」

安堵感も手伝つて、一際大きな笑いがはじける。

新助「何とかしまへ。地震で商売あがつたりなんじゃ。あんたもそうじゃろが」

○ 三ツ堀の渡し場

新助が来る。

ばんやりと利根川を眺めていた倉蔵が振り返る。

新助「舟出して貰えんかなう」

倉蔵「あんたひとりか」

新助「行商なんじゃ。十五人」

倉蔵「行商じゃ荷物もあるべ。そりゃあ三度に分けにや渡れねえべ」

新助「三度……なんとか二度で頼めんかの」

倉蔵「地震のせいで増水しちまって、流れが急なんだ。普段なら乗れつかもしんねけど」

新助「何とかしまへ。地震で商売あがつたりなんじゃ。あんたもそうじゃろが」

倉蔵「荷物がなきやギリギリいけつかしんねえけど……」

○ 香取神社

木陰の石鳥居の下に、信義・厚・サダ・ソデ・則カズ・喜之助の6人が腰を下ろしている。

新助と倉蔵が来る。

新助「どしたと、こなんとこで」

サダ「茶店は八人でいっぱい」

ソデ「ジヤン（ジャンケン）で負けたんじゃ」

新助「そりや残念なこった」

と、先の茶店に向かう。

○ 茶店

床几にユキノ・晴康・き多江・彌市・イシ・照松・敬一・朝明の8人が座っている。

新助と倉蔵が来る。

倉蔵「荷物見て」こら無理だ。やつば三度に分けねえと舟は出せねえ」

新助「そんなこと言わんと。わしらヨソもんじゃろ。あとに残してくんが不安なんじゃ。大八車は後で宿のもんが取りにくるき、荷物だけじゃし。なア、なんとかしいませ」

倉蔵、ソッポ向く。

新助「なあ、なんとかせえよ！」

倉蔵「なんだその口の利き方」

と、大八車を曳いた茂次が通りかかる。

茂次「なんだ、どうした」

倉蔵「こいつが無理言うんだよ」

新助「オドレの仕事ちゃんとやれえ、言うところだけやが、ほっこまい（愚か者め）！」

茂次「おめえ、それ、どこの言葉だア」

新助「讃岐じゃが」

茂次「讃岐つてどこだ」

新助「知らんのか。四国じゃ」

茂次「鮮人じゃねえんか」

新助「オドレこそ、鮮人じゃろが」

茂次「俺はおめえ、正真正銘の日本男児だっ

べよ」

新助「わしもそうじゃが」

茂次「んなら、証し見せてみろつつうんだ

よ」

新助「待つとれ。すぐ見せてやるわ」

行商人鑑札を取り出そうと、懷に手を突つ込む。

茂次「あぶねえ！ こいつ、び、ピストル！」

ビビって、尻餅ついてしまふ。

新助「こじゃ（デタラメ）いうな！ ほれ、ほれ」

焦れば焦るほど手に付かず、なかなか出

てこない。

茂次「立ち上がり」半鐘だ半鐘だ！ みんな、呼べ！」

倉蔵「茂、落ち着けて。ちつと落ち着けよ」

茂次「てめえはそんなノロマだから、みんなからバカにされんだよ。手が早いのは女にだけか」

倉蔵、思わず茂次の頭をはたく。

茂次、新助を見る。

新助、軽蔑したような笑みを浮かべている。

茂次、倉蔵を突き飛ばすと、走り出す。

倉蔵「……」

新助「……」

行商団一行も呆然と見ている。

○ 圓福寺・境内

走り込んできた茂次、駆け上り、半鐘を打ち鳴らす。

カンカンカン、カンカンカン。

村中に響き渡る鐘の音。

○ それぞれの家や畑、畦道で――

田向が、長谷川が、稲子が、マスが、子供を背負ったトミが、豆腐桶提げた咲江が、田中村でも栗原が、半鐘の音を聴く。

○ 若勢宿

被災者救護にあたっていた青年団が、「圓福寺の半鐘じゃ」「鮮人おったんじゃ」と武器を手に走り出す。

○ 矢島家の煙

正吾、行こうとする。

ツネがその腕を掴む。

正吾「行かなきゃ村八分になんぞ！」

ツネ、思わず手を離す。

正吾、駆け出す。

○ 澤田家

蚊帳の繕いをしていた静子、鳴り響く半鐘に体を硬くする。

○ 澤田家の煙

鎌を握る手を休める智一。

智一、半鐘に誘われるように歩き出す。

○ なおも打ち鳴らされる半鐘

キィキィキィ、音が軋んで車輪が回転全速力で走る自転車。

必死に漕いでいるのは、村の駐在。

○ 香取神社

信義たちの前を、武器を手に村人が走っていく。

どんどん走っていく。

鉄砲を持っている者もいる。

すでに茶店の人だかりで見えない。

信義、茶店の方に行こうと立ち上がる。

岩田が茶店の人だかりから来て、

岩田「こいつらもあいつらの仲間だべ！ 見張つとけ！」

近くにいた男たちが逃げられないように

サツと壁を作る。

サダとソデ、恐怖に震えている。

厚、ソデの手を握りしめる。

○ 茶店

床几の九人を取り囲むように、田向、倉蔵、茂次、正吾、長谷川たち、女衆、駐在、村の衆。

ただならぬ緊迫感。

子供たちは泣くこともできない。

田向、新助が差し出した鑑札を点検し終える。

田向「どうやら本当の薬売りらしい」

石原「こんなもん、いくらでも偽物が出来つぺよ」

新助、無言で周囲を睨めつけている。

彌市「代わりに」ごじや言うな！ 偽物で

ないど！ 役所のハンコ捺してあるさん！」

稲子「今、なんて言うた？」

ツネ「さっぱりわからん」

田向「駐在さん、野田署に行つて鑑札、確かめてくれませんか」

駐在「判つた。（鑑札を取り上げ）これが本物ならこの人たちは日本人だ。確かめて戻ってくるまで誰も手を出しちゃだめだかんな！」

駐在、自転車漕ぎ出す。

ホツとする新助たち、石鳥居の信義たち。

長谷川や村人たちも、どことなく安堵。

田向「さあ、ここはひとまず帰つて、昼飯でも食べてから戻つてきてくれ。分会長、いいだろ、それで」

長谷川が領こうとしたその時、男たちが駆けてくる。

栗原を先頭にした田中村の一団だ。

栗原「鮮人はどこにいった！」

田向「朝鮮人などおりません」

栗原「こいつら、違ふんか」

田向「持っていた薬売りの鑑札を今、駐在が

野田署に確認に」

栗原「そうか」

鵜飼「分会長、そうかじゃねえべ！」

栗原「（氣を取り直し）そうかじゃねえ！」

正吾「ここのだ、不逞鮮人はここにいつと！」
栗原「やっぱおめえらかア」

栗原、歩み寄ろうとする。

田向「いやいや、彼らは讃岐から来た行商人で」

鈴木「行商になりすまして、隙窺つて火付けでもするつもりじゃねんか、こいつら。なあ、分会長さんよ」

長谷川「……」

栗原「どうした福田村分会長。いざという時に腰抜けたか」

長谷川、キツと栗原たちを睨む。

田向「落ち着け！ 頼むから落ち着いてくれ！」

長谷川「(突如豹変) 徴兵忌避者はッ、黙っとれッ！」

田向「！」

長谷川「おまえ、徴兵逃れのために上の学校に行つたんじゃろが」

田向「そりや違うぞ。わしは村のため思つて」

長谷川「平時ならいざ知らず、いまは戦争だ。紙の上で数字や文章書いてるやつなんぞ何の役にも立たん。すつ込んでろッ！」

冷めた目で見えていた新助、無意識に懷から扇子を出し、扇ぐ。

茂次「なに余裕ぶっこいてんだ」

新助「また冷笑」
茂次「なんだ、そりや」

取り上げて、見る。

石原「こりや、朝鮮のもんだ」

石原、広げた扇子を高く掲げる。

石原「こいつら、鮮人だ」

新助「……」

なぜか弁解しない。

長谷川「おめえら、いつまで偉そうに座つてる！ 立たんか！」

新助、立たない。

長谷川「立て！ 立たんか！」

村人たちの中からも「立て」という声がいくつも上がり、昂揚していく。

新助、行商団に目で立てと合図し、立つ。ユキノも彌市もイシも朝明も敬一も仕方なく立つ。

ユキノ、子供たちも立たせる。

栗原「おいおめえ、十五円五十銭と言つてみる！」

彌市「(反抗的な目を向ける)」

長谷川「なんだその目は！ 言えねんか！ 言つてみる！」

彌市「目を背けず」十五円五十銭

長谷川「次！ (敬一と朝明に) 天皇陛下萬歳、唱えろ」

敬一・朝明「やはり鋭い眼差し」

石原「天皇陛下、萬歳ッ！ 萬歳ッ！」
大橋「唱えろ！ 唱えねえとぶつ殺す！」

朝明「天皇陛下、萬歳」

しかし、敬一は言わない。

鈴木「貴様、何で言わねんだ！」

朝明、敬一をつつく。

敬一「(小さく) 天皇陛下、萬歳」

長谷川「(叫ぶ) 声が小さい！ そんなでも日本人か！」

敬一を殴りつける。

堪える敬一。

田向「やめろ！ やめてくれ！」

長谷川、田向を払いのける。

長谷川「(新助をねめ回して小突き) おいおまえッ、歴代天皇陛下様のお名前を述べてみるッ！」

新助「……(怒気)」

長谷川「言えんのか！」

朝明が横から

朝明「ねんごけな(はかにするな)！ 言うてみせりよる！ 神武・じんむ綏靖・すいせい安寧・あんねい懿徳・いとく孝昭・こうしょう孝安……」

立て板に水の朝明に、ひるむ一同。

鶴飼「なぜおめえは言わん」

新助、一点を見つめたまま答えない。
長谷川「こいつらは行商の香具師だ、口上で覚えてただけだ。さつきから言葉遣いがお

かしい。やっぱり鮮人だ！」

田向「長谷川」

長谷川「分会長大」

田向「分会長、駐在が戻ってくるまで、待て。待て」

長谷川「瞬間、冷静に戻り」……」

が 群衆の中から声が上がると。

「鮮人じゃあ！」

「やられつちやうぞ！」

「やつちめえ！」

と、どんだん声が大きくなる。

○ 香取神社への道

静子が歩いてくる。

前を智一が歩いている。

静子、小走りに智一を追う。

○ 香取神社

智一と静子が歩いてくる。

ふたり、石鳥居に座らされた信義の前に

差し掛かる。

信義「！」

立ち上がる。

こちらの群衆は冷静だが、それでもたち

まち武器が突きつけられる。

信義「おばさん、わしじゃ！」

静子、気づかない。

信義「おばさん！ おばさん！ わしじゃ、

わしじゃよ！」

静子、振り返る。

信義「地震のあった日、おばさんに、く、薬

売ったじやろ」

静子「……」

信義「わしじゃ。お茶ご馳走になった、あ、

あん時のわしじゃ」

制止を振り切り、必死に静子に近づこう

とする。

岩田「うるせい！ 静かにしろ！」

信義、青年団に連れ戻される。

岩田「逃げんよう縛っておけ」

青年団、針金で信義の両手首を縛る。

信義「おばさん！ おばさん！」

静子、智一を見る。

智一も静子を見ている。

静子、信義から目を逸らし、歩き始める。

智一「静子、あの子の言っていること、本当

なのか」

静子「ふたり来たのよ。もうひとりとは……」

静子、茶店へ急ぐ。

静子、人々の肩越しに朝明を見る。

静子「あの人よ」

智一「……」

静子「どうしたらいい？」

智一「……（言葉を探す）」

群衆の興奮は頂点に達しつつある。

田向「落ち着け！ 頼む、落ち着いてくれ！

鑑札さえ、鑑札さえ確認すれば、この人た

ちが日本人か朝鮮人か分かる」

栗原「いつまで同じことを言うとする！ 鮮人

に決まっとうが！」

長谷川「田向、そんな弱腰で守れるのか、鮮

人から大事な孫娘を！」

田向、ハッと押し黙る。

静子「……私があの人たち知ってるって言

う」

静子、前へ出ようとする。

智一、静子の手を掴む。

静子、智一を見る。

静子「言っちゃダメなの」

智一「……」

静子「あなたはまた何もしないつもり？」

智一「……」

静子、智一の手を振り払おうとする。

と――

智一「（叫ぶ）この人たちを知っています！」

静子「！」

一斉に智一に視線が注がれる。

智一、行商団を指さす。

智一「この人たちから湯の花を買いました。

夏目漱石の『坊ちゃん』で有名な道後温泉

の湯の花です。この人たちは日本人です。」

他にもこの人たちから買った人がいるはずだ」

長谷川「澤田、おめえなぜ鮮人をかばう。なんで嘘つく」

智一「嘘じゃない。この人たちは日本人だ」
長谷川「おめえは朝鮮に住んでたから、鮮人の味方してるんだ」

静子、智一の前に進み出る。

静子「この人の言っていることは本当です。買ったんです、本当にこの人たちから湯の花を」

稲子「おめえも鮮人じゃねエのか」
鶴飼「この女も一緒にやつちめえ」

同調の声、声、声。

静子の前に迫る一団。

智一も囲まれ、動けない。

と、静子の前に咲江が立ち塞がる。

咲江「みんな、どうかしてっと！ ちっと冷静になれ！」

フネが咲江に掴みかかる。

フネ「おめえは幸彌だけでなく村も裏切んのかっ！ この石女の色気狂い！」

倉蔵、フネを咲江から引きはがす。

倉蔵「智一指さし」この人はこん村の生まれじゃろ？ 奥さんも、静子さんも日本人だ。あの人たちだって」

茂次「おめえ、鮮人にも夜這いしたんか」

倉蔵「ホントにあの人たちが日本人だったかどうかすんだよ！ おめえら、日本人殺すことになんだぞ！」

茂次、さすがに躊躇う。

その空気が伝搬する。

しばし静寂――

新助がゆつくりと口を開く。

新助「……鮮人なら殺してええんか」

智一と静子、新助を見る。

二人だけではない、その場にいる全員が新助を見る。

新助、悲しく笑っている。

ユキノも敬一もその笑いの意味が分かっている。

新助「朝鮮人なら殺してええんか」

智一「……」

静子「……」

と、智一と静子の横を人影がスーッと通り過ぎる。

赤ん坊背負ったままのトミだ。

トミ、新助の前に立つと、手を上げる。

その手に、鳶口。

トミ、鳶口をいきなり新助の脳天に振り下ろす。

新助、血しぶきを上げながら、崩れ落ちる。

ユキノ「きゃアアアッ！ あんた！ あん

たっ！」

小刻みに痙攣する新助にしがみつく。

ユキノ「あんたあんたあんた……」

顔を上げトミを見たユキノ、呆然と立ち

尽くすトミの裾を掴む。

ユキノ「人殺し人殺し人殺し！」

トミの赤ん坊が火のついたように泣き出す。

茂次、まわりを見る。

誰も茫然と動けない。

茂次、マスを見る。

マス、首振る。

茂次「……」

茂次、竹槍をユキノに突き刺す。

「おつとちやまー」「おつかちやまー」

新助に折り重なるように崩れ落ちたユキノに、晴康とき多江が縋りつく。

正吾、ツカツカと歩み寄ると、無表情で晴康を竹槍で貫く。

ツネ「正吾！」

しかし、その声は正吾の耳には届かない。

正吾、き多江にも竹槍を突き刺す。

ツネ、その場に崩れ落ちる。

正吾、表情の抜けた顔で竹槍を突き上げる。

それを合図に、群衆が声を上げながら、行商団に殺到する。

彌市、群衆に割り入り、血路を開こうとする。

その彌市に四方八方から竹槍。

彌市、蜂の巣になりながら、

彌市「イシ、逃げるっ！」

イシ、照松を抱え、走り出す。

続く敬一、朝明。

栗原「追え！ 逃げたやつらを追えっ！」

走り出す男衆。

長谷川、日本刀片手に、追う。

石鳥居から、

岩田「叫ぶ」こいつらは」

栗原「逃げたやつらが先だ！」

○ 圓福寺・周辺

瀕死の彌市が逃げてくる。

彌市「……イシ、照松……のぞむ、のぞみ……」

追ってきた石原と大橋が獵銃を構える。

必死に逃げる彌市。

二人、獵銃を発射。

○ 利根川へ通じる葦原

敬一、なんとか追っ手を振り払ったかみえる。

と、行く手を遮る葦が左右に割れたかと思つと、別の一団が姿を現わす。

前後を挟まれ、逃げ場を失う敬一。
敬一「……俺はこんなところで殺されるんか……」

その眩きは興奮した村人には届かない。

村人たち、互いにぶつかりながら、敬一をブツ刺す。

敬一、全身串刺しにされながら、それでも這って逃げようとする。

村人たち、寄つてたかつて敬一を蹴りつける。

村人の輪がほどけると、血反吐を吐いて絶命した敬一。

その頬を涙が一条伝っていく。

○ 香取神社

縛られた六人は、茫然と成り行きを看視するのみ。

目を覆うにも、胴体はおろか手足までグルグル巻き。

その前を、悄然と田向が歩いていく

○ 木立のところ

田向が歩いてくる。

叢の中から朝明が現れる。

朝明「あ、あんた、村長さんなんじゃ。た、助けてくれ。た、頼む」

田向「……」

と、後ろの叢から長谷川が出てくる。

朝明、気づく。

長谷川、朝明ではなく、血走った目で田向を見ている。

朝明「助けてくれ。お願いじゃ。なんでもするきん。なんでもします」

朝明、跪き、田向の靴に顔をくつつけんばかりに懇願。

朝明「お願いじゃお願いじゃお願いじゃ」

長谷川、朝明の髪を掴み、その顔を田向に向ける。

長谷川「（田向に）俺を止めねえんか、村長」

田向「……」

長谷川「お前はデモクラシイに見捨てられたんだ」

朝明に言つたのか、田向に言つたのか。

田向「……」

長谷川、朝明の後ろの首筋に日本刀を突き立てる。

田向の足下に血の海が広がっていく。

○ 木立の中

石原と大橋、まるで獲物のように彌市の両足をそれぞれ持って引きずっている。

銃弾を二発受けたにも関わらず、彌市にはまだ微かに息がある。

彌市の口が微かに動いている。

まだ妻や子供の名前を呼んでいるのか。
石原と大橋、まだ息のある彌市を利根川
に流す。

○ 利根川

照松を抱きかかえたイシが逃げてくる。
目の前は、坂東太郎。

振り向けば、目を異様に爛々と輝かせた
狂徒の群れ。

鈴木と鵜飼もいる。

渦を巻いて流れる利根川。

決意したイシ、照松を抱いたまま飛び込
む。

たちまち濁流に呑み込まれる二人。

追ってきた集団、立ちすくみ、川を見つ
める。と——

目と鼻の先から、イシと照松が浮かび上
がった。

「浮かび出たぞっ！」

もはや逃げ切れぬと悟ったイシ、両手で
照松を抱え上げ、声の限りを尽くして懇
願する。

イシ「お願いですっ。どうか、この子は、こ
の子だけはッ！」

鈴木も鵜飼も竹槍を持つ手が震えている。
ふたりだけではない、他の村人も臨月の
妊婦と幼子を前に躊躇っている。

鈴木、突然叫ぶと、イシの腹に竹槍を突
き立てる。

イシ、照松を落としてしまふ。

流されていく照松。

イシ「照松！ 照松ッ！」

照松はあつという間に見えなくなつてし
まふ。

イシ「鬼ッ！ おまえらみんな、鬼だッ！」

村人たち、逆上し、一斉に竹槍を突き出
す。

イシ、利根川に没していく。

妊婦と幼子を呑み込んだ大河は、変わら
ずに流れている。

○ 香取神社

石鳥居のところ——

引き上げてきた村人たちが続々と集まっ
てくる。

長谷川が人をかき分け戻ってくる。

長谷川「後はこいつらか」

栗原「皆殺しにしねえと後が面倒だ」

人垣の後ろにいる田向はもう何も言わな
い。

岩田が日本刀を抜く。

それに合わせ、十数人が改めて武器を握
り直す。

信義「死を覚悟する」

と、喜之助が震える声で何か唱え始めた。
小さな声だ。

しかし、それが経文であることは分かる。

その声がふたつになる。

ソデも唱え出したのだ。

厚も続く。

ツネ「これ、浄土真宗のお経じゃねんか」

マス「ほんじゃ、やつぱ、この人ら……」

信義も口を開く。

しかし、お経ではない。

信義「ケモノの皮剥ぐ報酬として、生々しき

人間の皮を剥取られ……」

サダ、ハツと信義を見る。

『水平社宣言』の一節だ。

サダ、続く。

信義・サダ「ケモノの心臓を裂く代価として、

暖い人間の心臓を引裂かれ……」

喜之助も続く。

信義・サダ・喜之助「そこへ下らない嘲笑の

唾まで吐きかけられた呪はれの夜の悪夢の

うちにも、なほ誇り得る人間の血は、涸れ

ずにあつた」

三人、水平社宣言を暗唱していく。

浄土真宗のお経と水平社宣言が交錯する。

長谷川や村人たち、茫然と立ち尽くす。

少し離れたところで、智一と静子も——

と、クラクションを鳴らしながら、車が

来る。

車から駐在と野田署の巡査部長（三浦）が降りてくる。

続いて、楓。

駐在「待て、待て」

三浦「鑑札を手に」この人たちは確かに日本人だ。早まつてはなんねえ」

駐在「村長さん、残りの人たちは？」

田向「……」

血痕が付着した武器類。

三浦「あんたたち……まさか……」

田向「……（項垂れる）」

三浦「すべてを察し）みなさんは、その……もう九人をも処置しているわけです。

これ以上の殺戮は許されない。残りのその六人の針金をほどきなさい」

動揺し、顔を見合わせる一同。

と——長谷川が声を限りに叫ぶ。

長谷川「今更なに言ってるんだ！ 自警団ささえて対処しろつったのは警察だつてよ、お上だつて。ちがアか、お国だべよ？ んだからわしらはこの村、この国を守るため……」

鉢が震え、それ以上は言葉にならない。

稲子「……あなた、もういいいっぺ。あなたは十分力を尽くしたよ」

静子、智一の許を離れる。

智一「静子？」

静子、信義に近づき、針金の戒めを解き始める。

ツネもマスも駆け寄り、喜之助とサダの戒めを解き始める。

針金が絡み、手が血だらけになる。

信義「……おばさん」

静子「……」

信義「なんで、なんでなんで、俺たち、なんで、なんでなんで……」

嗚咽し、声にならない。

静子「ごめん……ごめんね、ごめんね、ごめんね」

静子の頬にも涙。

智一「（見据えて）……」

× × ×

楓、茶店の前に来る。

惚けたように突っ立ったままの茂次と正吾。

新助とユキノに折り重なるように死んでいる晴康とき多江。

楓、思わず口を押さえ、後ずさる。

しかし、手帳とペンを出す、悄然と佇む田向に歩み寄る。

楓「千葉日です。お話を聞かせてもらえませんか」

田向「……待てと言ったんだ。私は待てと

……」

楓「……」

田向「書くのか、新聞に」

楓「書きます」

田向「判るだろ？ 俺たちはずっとこの村で生きてかなきゃなんねえんだ。だから、書かないでくれ」

楓「書きます。……新聞が……私が、朝鮮

人の暴動をデマだつて書かなかつたから、朝鮮人がいっぱい殺されたんです。この人たちまで。だから、せめて書かないと。書いて、償わないと」

田向の、キツく噛みしめた唇から血が滲む。

× × ×

駐在が保護した生き残り6人を連れて行く。

トミ、呆然と見ている。

すれ違いに男がひとり歩いてくる。

トミ「……あなた」

トミの夫「トミ」

トミ「あなた、無事だったんか……」

トミの夫「（振り返り）何かあったんか」

トミ「……」

○ 村境の道
咲江が歩いていく。

倉蔵が小走りに追ってくる。
倉蔵、咲江に並ぶ。

ふたり、どちらからともかく手を握る。

○ 野田署・一室

信義と三浦が向かい合って座っている。

三浦「殺された九人とは家族同然だったんだろ」

信義「……」

三浦「辛いよなあ」

信義「……十人です」

三浦「？」

信義「もうすぐ産まれたんです。男の子やったら、のぞむ。女の子やったら、のぞみ。漢字は同じで、違う読み方で」

三浦「……」

信義「九人にもちゃんと名前があるんです」

三浦「……」

信義「沼部新助、沼部ユキノ、沼部晴康、沼部き多江、坂下彌市、坂下イシ、坂下照松、高畑朝明、藤岡敬二」

信義、真っ直ぐに前を見ながら言う。

じっと前を見ながら、ひとりひとりの名前を刻んでいく。

○ 三ツ堀の渡し場（早暁）

智一と静子が歩いてくる。

渡し舟が見える。

智一、乗る。

智一、静子に手を貸す。

その手を掴み、静子も乗る。

智一、舳いを解く。

舟がゆっくりと動き出す。

静子「どこへ行くの？」

智一「教えてくれないか」

静子「静かに笑って、頷く」

静子、日傘を開く。

朝靄の中、小舟は川を静かに下っていく。

○ 唐突な暗闇

T 「関東大震災に乗じて虐殺された、朝鮮人、中国人、社会主義者は、6000人

以上と言われている。

日本人が殺された福田村事件では、8人が逮捕され、懲役3～10年の判決を受けたが、大正天皇死去の恩赦で、すべて釈放された。

行商団の遺体は、利根川に遺棄されたという。

虐殺をまぬがれて故郷に帰った6人と殺された9人の遺族は、その後も、この事件の詳細を語ることはなかった——」

○ 香川・長い橋の上

信義たちが帰ってくる。

橋の袂にミヨが立っている。

サダ、信義の肩を叩き、ミヨがいることを報せる。

信義、遠いミヨを見る。

ミヨも信義を見ている。

しかし、信義は動かない。

ただ立ち尽くしている。

※配信、DVD化に際し、関係各団体と協議の上、本編終了後に下記の字幕を入れました。

「本作は歴史的事実に基づいて創作された劇映画です。一部に現代では許されない差別的な表現、脚色がありますが、当時の時代状況、社会意識を考慮し使用しています。特定の民族、団体、個人に対する偏見、差別の助長並びに名誉を傷つける目的ではありません。」

尚、行商団の詐欺行為の描写については脚色であり、事実ではありません。当該行商団は正規の鑑札をもち、正しく商いをされていたことを当該行商団の名誉のために申し添えておきます。」

ほつれる

加藤拓也

〈脚本家略歴〉

加藤拓也（かとう たくや）

1993年12月26日生まれ。大阪府出身。17歳で構成作家として活動開始。イタリヤで映像制作に携わり、帰国後20歳で『劇団た組』を立ち上げ。近年の作・演出舞台に『ドローが落下する』（岸田國士戯曲賞受賞）『綿子はもつれる』（国内・台湾公演）『いつぞやは』『ザ・ウェルキン』（読売演劇大賞優秀演出家賞受賞）『カラカラ天気と五人の紳士』を手がける。映像でも活躍し、ドラマ脚本・監督『きれいのくに』『滅相も無い』『監督・脚本映画』『わたし達はおとな』『日仏合作映画』『ほつれる』（ナント三大陸映画祭 DISTRIBUTION SUPPORT AWARD受賞／バレンシア国際映画祭長編映画部門 Luna de Valencia「グランプリ」受賞）など。



撮影：浦田大作

監督・加藤拓也

製作・映画『ほつれる』製作委員

会 コム・デ・シネマ

製作幹事・メイテレ ビターズ・

エンド

制作プロダクション・フィルムメ

イカーズ

配給・ビターズ・エンド

〈スタッフ〉

エグゼクティブプロデューサー

松岡雄浩

チーフプロデューサー

服部保彦

プロデューサー

松岡達矢

コ・プロデューサー

宮崎慎也

撮影

澤田正道

照明

中島唱太

録音

高井大樹

美術

加藤大和

編集

宮守由衣

音楽

日下部元孝

シルヴィー・ラジェ

石橋英子

〈キャスト〉

綿子

文則

木村

英梨

哲也

依子

中田

原田

笹井

救急センター（声）

門脇麦

田村健太郎

染谷将太

黒木華

古館寛治

安藤聖

佐藤ケイ

金子岳憲

秋元龍太郎

安川まり

1 マンション・寝室・早朝

都内、田園都市線沿いや外苑前から神宮前辺りにあるような場所の落ち着いた場所にある3〜4LDK程度の広さのマンション。

綿子（三十三歳）がキャンプへ行くには少し身軽な格好で、ベッドの前で立ちながらコンビニで買える軽食を食べている。食べながら、荷物を確認している。

2 マンション・リビング・早朝

ソファで布団をかぶり寝ている夫・文則（三十五歳）。

綿子が文則を起こさない為に音を立てないよう、寝室からリビングに入ってきて、そして冷蔵庫まで行き、水を飲む。

すると気配で起きる文則。

綿子「文則が起きた事に気付き」おはよう」文則「やや起き上がり」そろそろ布団厚いのに変えてもいいかな」

綿子「そうだね。こっち持つてきとく」文則「ありがとう」

リビングから出て行く綿子。

3 マンション・外

綿子がマンションからやや強張った面持ちが解けきれない様子で出てくる。

そして歩いていく。

4 駅・改札とホーム

綿子が駅構内に入ってきて、改札を通り抜ける。

そして停車している特急列車の車両番号を確認しながら歩いていく。

しばらく歩き、目的の車両に着くと乗り込む。

5 特急列車・車内

車両間で乗車券をポケットから出す綿子。確認しながら自動ドアをくぐると、顔を上げ席番号を確認し、歩いていく。

すると何かを見つけ、徐々に綿子の顔が明るくなっていく。

綿子「嬉しそうである」

木村（三十四歳）が指輪をした左手を軽くあげている。

綿子は席まで移動し、座る。

木村が左手を差し出すと手を握る綿子。

6 キャンプ場（グランピングリゾート）・昼

バドミントンやBBQをしたり、遊びに来ている人がちらほらいて、真ん中にキャンプファイヤができる囲いのある、

とても見晴らしの良いキャンプ（グランピングリゾート）場で綿子がセットを取りにレセプションへ向かっている。

そしてレセプションに入っていく、綿子は珈琲セットを取り、出て行く。

しばらく歩き、椅子に座って待っている木村の居るドームテント前に着く。

それぞれのドームテント前には、BBQスペースがあり、ハンモックも吊るされていて、山が見える。

木村「ごめんね、ありがとう」

綿子「ううん」

二人のやり取りはまるで夫婦のように見える。

木村「山見ながら挽こうよ」

綿子「良い感じに挽けそう」

木村がケトルとコップ、水のペットボトルを手にとると、BBQスペースの机の上に道具を置く。

綿子「（豆、右）」

木村「右」

綿子は外にあるコンセントにケトルを差すなど、お湯の準備をし、豆を挽きながら、

綿子「なんかシエフがバーベキュー焼いてくれたのキャンプしてるっていうかホテルかと思った」

木村「別にそれくらいして欲しいでしょ」

綿子「エアコンも付いてるの凄くない？

何？ テントっていうか部屋ふふ、初めて
なんだけどころいうところ」

木村「一か月振りかな俺は旅行。はまりそっ
だわキャンプ」

綿子「グランピングだからでしょ。全部やつ
てもらってるから」

7 キャンプ場・夕方

テントや照明の明かりがぼつぼつと幻想
的に点いており、家族が遊んでいる中で、
木村と綿子は散歩している。

歩きながら家族連れを見る綿子。

自分達が偽物だと脳裏をよぎらないよう、
綿子は木村と徐々に腕を組む。

8 キャンプ場・キャンプファイヤーの場 所・夜

キャンプファイヤーが実施されていて、
火の周りには一、二組の家族と一組の
カップルが集まっている。

綿子と木村は近くで酒の入っているグラ
スを持っている。

木村は眠そうに見える。

綿子「テントに戻る？」

木村「んー……そうしよかな」

木村がグラスを置いて立ち上がる。

× × ×

木村がテントの中へ、綿子も追って中へ
と行く。

中に入ると、ベッドへ向かい寝転ぶ木村。
綿子はそのベッドに座る。

すると木村はベッドから起き上がり自分
のカバンからリングケースを取り出し、

木村「差し出す」はい」

綿子「何これ」

綿子は受け取り、開けるとペアリングが
入っている。

ケースからリングを取り出した綿子は、
笑っている木村の右手薬指に指輪をはめ
る。

木村も同様に綿子の右手薬指へ指輪をは
める。

二人とも左手には結婚指輪をしている。

木村「サイズ大丈夫？ 大丈夫そうだね」

綿子「大丈夫だと思うけど全然」

木村「買ってから知ったんだよね、左右で指
のサイズ違うって」

綿子「大丈夫びったり（携帯電話を取り出
し）手出して」

二人は右手を出し合い、

綿子「あ、これ左手で撮るのが難しいすこい、
震えるなんか。押して」

木村がシャッターボタンを押す。

綿子「ぶれてる」

木村「良いじゃんこのままアップしちゃえ
ば？」

綿子「やだちゃんと撮るよ」
もう一度綿子が構え、木村がもう一度
シャッターボタンを押す。

綿子「確認して」まあこれだったらいいか
な。誕生日のお返しハードル上がったな」

木村「渡さない方が良かった？」

綿子「お返しはあんまり期待しないでほしい
かもしれない」

木村「全然物じゃなくていいけど。文則さん
にあげたことのあるプレゼントのネタ使い
回していいよ」

綿子「昔、文則が前のパートナーにあげた
プレゼントと同じのを私に使い回してたの
思い出した、今」

木村「うわ、信じらんない」

綿子「ね。でもそれしていいって言ったんだ
よ今」

木村「（軽く笑う）」

9 キャンプ場・ドームテント内・時間経過

別々のベッドで寝ている綿子と木村。

10 キャンプ場・ドームテント内・日替わり

片付けをしている綿子と木村。

やがて、木村が荷物をまとめ終えると、

木村「出よっか。大丈夫?」

綿子「うん。(残りの荷物をカバンに入れて) はい大丈夫」

木村がテントから出て行く。

綿子は名残惜しい空気を醸し出しながら出て行く。

11 キャンプ場

ドームテントから出てきた二人がレセプションの方向へ歩いていく。

12 特急列車

走る電車の窓から見えていた木々は建物へと変わっている。

綿子「田舎的な風景から都会へと向かう風景に終わりを感じている」

綿子と眠っている木村が並んで手を繋ぎながら座っている。

すると木村の携帯電話が震える。

木村「起き出しそつな気配」

綿子「鳴ってるよ」

木村「ん」

綿子「出ないの? 依子さん?」

木村「作家だ。大丈夫、多分原稿の赤字まだ戻してないからだと思う」

綿子「出た方が良いんじゃないのそれは」

木村「それは働き過ぎ、日本人過ぎる。まだ旅行中だからこれ」

綿子「まだここ旅行中なんだ。粘るね」

木村「お腹空いたな」

綿子「もう? 早くない?」

木村「何時着だっけ。着いたらどつかでお昼食べてく?」

綿子「(万が一見られたりしないか) 誰も会わないかな」

木村「大丈夫でしょ」

綿子「(嬉しそうである) じゃあどっか寄る?」

13 特急列車・時間経過

列車は到着している。

寝ている木村を起こす綿子。

手を離す綿子と木村。

木村「(まだ少しほーつとしている)」

そして立ち上がりながら、綿子は木村から貰った指輪を外し、電車から降りる二人。

14 レストラン・店内

綿子と木村が食事をしている。

木村「なんも連絡無いの?」

綿子「うん、昨日は一緒にご飯食べた後にヒ

ロム君預かるって言ってたし、そっちで忙しいんじゃないかな」

木村「全然あれだね。前妻の人、全然落ち着かないね仕事。もし綿子が預かるのやめてほしいってタイプだったらどうしたんだろうね」

綿子「んー、シングルだからしょうがないよね。ほっとけばとか言えないでしょ。思わないけど。もし私が、もしだけど、シングルだったらやっぱ前のパートナーとかその人の親とかも頼るよなあとか思うし。文則のお母さんは、文則が見れない時に全然喜んで協力してるし」

木村「それでも言いたくなるもんだと思うけど。その回数は。俺だとね」

綿子「考え始めたらそうなるよ。てか仕事来週から木曜日になるらしいんだけど今度から木曜日にしない?」

木村「子供預かるのが?」

綿子「そう」

木村「木曜日か。いいよ。俺は全部取材つてなるからどこでも。依子も仕事してるし」

15 道・昼過ぎ(道幅の広い) (神宮前ぐら

いのイメージ)

店(店に入っているビル)から綿子と木村が出てくる。

綿子の携帯電話に夫・文則から着信がある。

綿子が表示を確認する。

綿子「丁度」

木村「お、そか。じゃ俺タクシーあつちで拾つてくから」

綿子「うん、木曜日ね」

木村「来週木曜ね。予約しとくいつもの所」

綿子「うん。じゃあ」

木村が手を挙げ、綿子も手を振り、二人は別れていく。

すると着信が切れるが、綿子から折り返す。

綿子「もしもし……あそうなんだわかった

……うん。わかった……大丈夫だよ、別に気にしてない……それはだつてしょう

がないし……何時になるのかな……あそう。お義母さんも居るんだ。……私はもう

あと二、三時間くらいあれば家着くと思う。……まあ大体それくらいには着く……話？

話つて……ああ……うん——」

遠くからクラクションと衝撃音が聞こえてくる。

綿子が音の方へ振り向き、立ち止まる。

木村が倒れており、車は歩道に乗り上げていて、その周りに人が集まっている。

綿子「木村が車に轢かれている事を認識し

て）——……ちよつと、待つてね。うん、ちよつとごめん……ごめんちよつと折り返す……うん。話ね、わかった。うん。わ

かったはい。……はい（電話を切る）」

綿子は119番に電話をかける。

気になった通行人が綿子の後ろを通り過ぎたり、気にしない通行人が通つたりしている。

綿子「あ、もしもし、あの救急車お願いします、交通事故です、車と人です、車と人……場所は……あはい、あ、いや、私はあのあれなんですけど……他に通報つてありますか？ 今……あ他に通報はありますか？ 事故の。今……（電話を突然切る）……」

綿子は現実を見ないようにして帰宅する為の方向へ歩いていく。

歩くスピードは現実には追いつかれそうになる度に変化する。

やがて道が分かれ、カーブしている所を通り過ぎ、事故現場が見えなくなるような場所に行くとき々とスピードが遅くなり、立ち止まる。

綿子「（息切れしている）」

タイトル

16 マンション・リビング・夜

文則がチャーハンを食べている。

綿子は帰宅してくると、カバンから着替えるの入っているビニール袋やビタミン剤、スキンケア道具を取り出しながら、

綿子「あれ今日もご飯食べに行つてたんじゃないの」

文則「いや、今日は結局綿子意外と早めに帰ってくるからって思つて、でも思ったより遅かつたんだけど、はは。ご飯は食べずに帰つたんだよね」

綿子「あ、そうそう、ごめん」

文則「や大丈夫。食べてないんでしょ、夜、作つたけどいる？」

綿子「ううん大丈夫ありがとう。食べてないけど。ぼーつとしてた、カフェ行つて」

文則「英梨ちゃんと一緒に？」

綿子「いや、英梨は一人先帰つた（放置されたお菓子のゴミを見つ）これ中入ってるけど捨てていいのかな」

文則「ああごめん大丈夫、ヒロムのだ」

綿子「（捨てる）まだ無くなつてない？ ああ？ 買い足しとく？」

文則「少ないかも」

綿子はキッチンへ行き、ヒロム用のお菓子の量を調べる。

綿子「うん、ちよつと買い足しとこうかな」

文則「話したい事あるって言ったでしょ電話で。飯食い終わったらどう？ あワインとかも買ってきてるんだけど」

綿子「あ、ちょっと、後でもいい？ ごめん」

文則「ん」

綿子が寝室に向かう。

× × ×

廊下、綿子は寝室に向かう途中で洗面所に寄って服を洗濯機に入れ、寝室に向かう。

17 マンション・寝室

綿子はベッドに座っていたり、またはうついたり、落ち着かない様子。

木村に連絡をしようかと悩み、携帯電話を手にとっては見るものの、できない。

綿子「不安がこみあげてくる」

そして綿子は事故には触れない、お礼のメッセージを打ち始める。

18 マンション・寝室・日替わり・朝

目が覚める綿子。

19 マンション・リビング

綿子が寝室から出てくると、文則が一人で酒を飲んでいた形跡（白ワイン）があ

る。

冷蔵庫に向かい、水を取り出し飲む綿子。

20 マンション・寝室・時間経過

クローゼットから文則に渡す分厚い毛布を取り出し、リビングへ運んで行く。

21 マンション・リビング・時間経過

木村に電話を掛けるかどうか迷っている綿子。

やがて電話を掛ける。

すると依子が電話に出る。

依子声「もしもし」

慌てて電話を切る綿子。

そして立ち上がり、自分を落ち着ける。

そして財布やカバンを取り、出かける準備を出かけて行く綿子。

22 スーパー

綿子はヒロム用のお菓子を見ている。

すると英梨（三十三歳）から着信が入る。

電話に出る綿子。

綿子「……もしもし……今見てないよ、うん。

うん……（事故の結果が死亡である事を初めて知る）……死んだ、ああ。……ああ。

うん。そうなんだ……うん。うん。そっか……一人でキャンプ行ってたんだ……そっ

なんだ……えああ大丈夫。ありがとう……

大丈夫だよ私は。最近はそんなに会ってなかったかな。……そっか、じゃあどうする？ それは英梨に任せる。そのまま葬儀終わってから行くでも……じゃあそうしよう……ううん。はい」

電話が切れると、綿子は棚からお菓子を

取りかごに入れ、歩いていく。

綿子に罪悪感がこみ上げる。

23 マンション・寝室・午前・日替わり

綿子がクローゼットで服を数着選んで、

喪服を手取るが、やめて別の服を手取る。

24 カフェ

綿子が座っている席に店員がカフェラテを持ってくる。

綿子は受け取り、時間を潰している。

25 道にある駐車場・時間経過

綿子が歩いて停まっている英梨の車へ向かって行く。

運転席で英梨は葬儀で泣き、よれたメイクを直して、目は泣いた後の目である。

綿子は後部座席に乗り込む。

英梨「え、姫なの？ ふふ」

綿子「安全で速くお願い」

英梨「姫ちゃん」

綿子「うそうそ」

綿子は荷物を置いて、後部座席から出て、助手席の扉を開け、椅子に置かれていた子供向けの漫画と絵本を三冊手に取る。

英梨「後ろ適当に置いて」といって

綿子は後部座席に手を伸ばして置く。

英梨はまだメイクを直している。

綿子「英梨の泣いた後の目を見ている」

……。どっだった？」

英梨「え？ ご覧の通り（泣いた）」

26 道（車内・横から）

走っている車に乗っている綿子と英梨。

27 ショッピングモール・外にある駐車場

綿子達の車が空き場所へ走ってゆき駐車される。

そして車から綿子と英梨が降りてくる。

ショッピングモールに向かって歩き出す

二人。

綿子「迷子になるかも。あれまだあんなかな、あれ英梨が昔よくわかんないハマってた変な匂いの店」

英梨「え何それ」

綿子「あったじゃん高校のクラス、誰のでも、もう全部の誕プレそこで買ってたところ」

英梨「あった甘い匂いのするお店ね。もう無いでしょ」

……

28 ショッピングモール

施設内を移動している綿子と英梨の背中。

× × ×

昔通っていたお店を見つけ、

英梨「あ。あったあれでしょ」

店の前まで行き、

英梨「ほら（※）うわこの匂いだ、やつぱこ

こだ」

綿子「※から被せて」 あこれだ」

英梨「ね、この匂いだ、甘い匂いのこの、何

個か混ざってるよね」

綿子「まだ売ってるじゃん、これ。看板（商品）なんだ」

英梨「何かしら記憶が呼び起こされるね」

綿子「匂いが特にね」

英梨「なんで私このお店好きだったんだろ。

てか私その時前髪だけ染めてたの思い出し

てきた」

綿子「そうだよ、こっだけ染めてた」

英梨「どこ染めてても良いでしょ別に」

29 ショッピングモール・広場

英梨の買い物を通り終えて、英梨の側には買い物袋が沢山ある。

そして広場のようところで、ドリンクを飲みながら休憩している綿子と英梨。

英梨「結局なんで来なかったの？」

綿子「なんでって難しいな」

英梨「家族と会いたくなかったの？」

綿子「そうじゃないよ、全然そうじゃない、ふふ。なんだろ。（嘘の為の間が少し）実

感無いからかもしれない。だから失礼かなって」

英梨「それはーでも見てないからでしょそれは。実感、私も棺の中見て、ああそうだよ

なあってなったよ」

綿子「そうなのかな」

英梨「そうだよ。なんか（木村が）一人でキャンブするイメージ無かったから、キャンブとか嫌いそうだし。意外だったな」

綿子「（事実を隠して）私もそう思う」

英梨「最近ハマってるって言ってたらしいけど」

綿子「知らない」

30 マンション・寝室・夜

綿子が風呂上りで鏡前に座り、木村の事が頭によぎり、

綿子「（再び罪悪感がこみ上げている）」

そしてドライヤーを当て始める。

するとドアがノックされる。

ドライヤーを止めて、ドアを少し開くと

文則が立っている。

綿子がドアから少し出た所で、

文則「今日は話せるかな」

綿子「乗り気ではない」ああ。そっかそっ

か。大丈夫（木村の事がバレたのかとよ

ぎっている）

文則「家買おうと思ってるんだよね、って話

ここ賃貸に回しちゃって」

綿子「あそなんだ、最近考えたの？」

文則「いや結構考えてただけど、会社のプ

ランドがリニューアルするんだけど、今度

ね。社割もきくし。内緒だけど」

綿子「詳しい人に任せるよ」

文則「でも見に行かないとじゃなか

綿子「わかった、見に行く日決まったら教え

て」

綿子が寝室に戻ろうとすると、

文則「どこか泊まりで行きたい所ない？」

綿子が寝室から廊下に出る。

綿子「え何？」

文則「泊まりでどこか行きたいところないか

なってるって」

綿子「ええ、そういう事？」

文則「まあ別に泊まりじゃなくてもいいんだ

けど昔行ったところでもいいし、無い？」

綿子「私どこか行きたいアピールしてた？

気を付ける」

文則「いやそうじゃなくて、そうじゃなくて

俺がアピールしてる。こういう空気のまま

あともう何十年も一緒に生活していくのき

つくない？」

綿子「軽い沈黙」

文則「って俺は思うんだけど」

綿子「ん……」

文則「いやわかってるでしょ。この空気をお

互い続けてきた訳なんだから。このまんな

だと子供だって難しいよね。難しいってか

無理だよ」

綿子「うん」

文則「それはどう思うの？」

綿子「それって？」

文則「空気。とか子供とか。うんだけじゃな

くて」

綿子「別に私も良いとは思ってないよ」

文則「今のタイミングしかないと思ってるの

ね。やり直していく」

綿子「沈黙」

文則「まあそもその原因があるのは俺側な

んだけど。それはわかってるつもりだけど。

でも母さんも子供できたら俺らの見え方が

変わると思うんだよね。引越したら家の

鍵も渡さないつもりだし」

綿子「そしたらお義母さんはヒロムの面倒ど

こで見るの？」

文則「それはだから色々考えてる」

綿子「色々って？」

文則「俺も向こうも面倒見れない時に、俺の

母さんだけに頼むんじゃないかって、向こうの

両親はどうなのかとか」

綿子「わかった。（話題を戻して）どこに行

くつもりなの？」

文則「行きたいところないんだったら俺考え

るよ。いきなり聞いた俺も悪いし」

31 バス車内・日替わり

空港へと向かうバスが停まっており、乗

り込んでくる綿子と文則。

× × ×

バスから外（空港が見えている）を見て

いる綿子。

綿子「（外を見ている）」

文則「もう昔工事してた所とか完成してるの

かな」

綿子「してるだろうね。なんか、ニュースで

読んだ気がする」

文則「あれ何になったの？」

綿子「普通に買い物とかできる場所じゃな

い？ 多分」

文則「そこも寄れたら寄ってみようよ」

バスに揺られる綿子。

綿子「うん（懐かしんでいる）」

× × ×（フラッシュ）

と、木村が綿子の横に座っている。

× × ×（フラッシュ）

シユ終わり

綿子は横に座っている気がし、横を確認

すると文則が座っている。

綿子「……（動揺を隠そうとしている）」

× × ×（時間経過）

バスが停まる。

と、綿子の横には文則ではなく木村が座っている。

木村と綿子は、他の人が出て行くのを待つ。

座席から出てバスから降りて行く。

32 羽田イノベーション・シヨップのある外フロア・過去

綿子と木村がデッキを目指して歩いている。

木村「ここだと誰も会わないでしょ。文則さんとも」

綿子「無いね。うち旅行とか何年も行ってた

いし。もう飛行機とか何年も乗ってない」

木村「最後いつ行つた？」

綿子「でもー、結婚する前かな」

木村「じゃあハネムーン行つてなかったんだ？」

綿子「行きたい気持ちはあったんだけどね。子供の都合が」

33 展望デッキ・過去

誰も居ない展望デッキに上がってきた綿子と木村。

展望デッキから飛行機が見えている。

木村「二人で子供作ろうって話にはなんなかつた？」

綿子「お義母さんはそうしてほしそうですけど。文則も二人面倒見るのは難しいんじゃない。それに、向こうの子供が中学生とかになった時にどう思うんだとか、そういうのも気にしてるかな私。だからベツトでも飼おうかな、犬とか」

木村「犬？ 犬か、俺犬嫌いなんだよな」

綿子「犬じゃなくてもいいんだけど」

木村が手を繋ぐ。

綿子がやんわりほじき、

木村「どこだったら持っていきたいの？」

綿子「私持てる所無いし」

木村「お腹？」

綿子「それは持てるかもしれない」

お腹をつまもうとする木村。

綿子「本当に持とうとしたらダメじゃん。持つよ？」

木村「どうぞ、良いよ。持てそう？」

綿子がお腹を持つ。

綿子「皮しかない」

お腹をつまむ綿子の手を持つ木村。

綿子「抵抗せず、そして飛行機を見る」

34 羽田空港内・カフェ・夕方

離着陸の見えるカフェ。

お茶をしている綿子。

綿子の背中で飛行機が離陸し、飛んでいく。

綿子の前には文則が座っている。

会話の無い時間が流れている。

文則「（携帯電話を持つている）内見の地図と住所送つといいたけど、駅まで迎え行くこうと思つたら行けるけど」

綿子「ん？」

文則「いや内見」

綿子「うんありがとう大丈夫」

文則「こーやって昔行つたところ回つてくのいいかもね」

綿子「不思議な気分。飛行機ずっと立って見てたからふくらはぎが」

文則「疲れるよね」

綿子「うん」

文則「じゃあどうするこの後。ご飯こころ辺で食べる?」

綿子「どうする? まだそんな時間遅くないし家で作れる時間だけど」

文則「本当はあんまり来たくなかったんでしょ」

綿子「なんでよ、行きたくなかったら行きたくないって言ってるよ私」

文則「いや早く帰りたいのになって思つて」

綿子「そんな事は言つてないよ。文則も疲れ

たつて言つたじゃん」

文則「少しの間」とりあえずお会計してくる」

文則が立ち上がり、レジへと向かう。

35 ホテル・受付・日替わり

ホテルに一人で入ってくる綿子。

受付まで行き、

綿子「予約してた木村です」

36 ホテル・部屋

部屋に入って行く綿子。

そしてカバンを置き、ベッドに寝転ぶ。

綿子は左手の指輪を外し、木村から貰つ

た指輪を財布から取り出して右手にはめる。

綿子「(うとうととしている)」

× × ×

木村がフラッシュバックして目が覚める綿子。

時計を見ると少し時間が進んでいる。

37 ホテル近くの広い道

英梨の車が停まっている。

と、そこへやってくる綿子。

綿子「ごめんありがとうー」

英梨「どこ行きたいとか決めてんの?」

綿子「ん? うん。山梨とか」

英梨「山梨? え山梨行くの? 今から?」

ちよつと待つてよふふ」

綿子「ごめんごめん、ふふ」

英梨「急に山梨旅したくなつたの?」

綿子「うん」

38 ホテル近くの広い道・車内・時間経過

英梨の車が動き出す瞬間である。

綿子と英梨(背中から)。

39 都内・道

走っている車の中、助手席に座っている綿子と運転している英梨(フロントガラ

スから)。

綿子「息子大丈夫だった?」

英梨「日帰りするから別に」

綿子「途中でお墓寄つていい?」

英梨「誰の?」

綿子「木村くん」

英梨「あそつか。でもまだ四十九日経つてないけど」

綿子「それでも一応、私ほら告別式も参加し

なかつたから。行くべきかなって」

40 道の駅・駐車場

道の駅に停まっている車達。

綿子声「なんか食べる? お腹空いた?」

× × ×

英梨の車から綿子と英梨が降りる。

英梨「んー。いいや。今はねお腹空いてるん

だけど、向こう着いてから良い感じのもの

の食べる」

綿子「あじゃあ飲み物は?」

英梨「とりあえず見よっかな」

テイクアウト屋を目指して歩く綿子と英

梨。

英梨「(右手にしている指輪を見て) あれ、

右手のどしたの」

綿子「ああ、これこの間言つてなかつたんだ

けど、指輪貰つたんだよね」

英梨「何で急に惚気始めてるの」

綿子「いや惚気っていうか——」

英梨「惚気でしょ」

綿子「いや、うん——」

英梨「あじゃあこれ私も聞いてほしいんだけど、旦那がお風呂の時に指輪を外すタイプで、この間お風呂上がりにはめようとしたらはまらなくて、抜けないは聞くけどはまらないってなんだよってなるじゃん、で指に油を塗ってはめようとしてただけで、丁度油が切れてて無かったから代わりにバターを塗ってなんとか指輪はめれたんだけどその後指についたバター舐めだしてめちゃキモかったんだけどでもこれは惚気とかじゃないか」

綿子「うん」

英梨「ね。旦那バター大好きなんだよね」

テイクアウト屋の前に着き、作業を止めた店員の中田が、

中田「ご注文はお決まりですか？」

綿子「ホットください」

英梨「二つで」

中田「660円です」

綿子「まとめて払います」

英梨「私払うよ」

綿子「ううん、いい。旦那のお金です」

綿子がクレジットカードで支払う。

木村から貰った指輪をはめている右手から指輪を外して見せる綿子。

綿子「これ木村くんに貰ったやつなんだよね、右手につて、ほら（彫っている文字を見せる）」

英梨「あ、文則じゃなくてそっち？」

綿子「そう」

二人は珈琲を受け取り、店から離れて行く。

英梨「文則くんは？」

綿子「文則くんは最近私と仲直りしようとしてる」

41 道の駅

建物から出てきた二人は車を目指して歩いていく。

42 霊園

区、番、種などが書かれた霊園案内図を持っており、木村の墓の場所が記されている紙を片手に墓に向かって歩いている綿子と英梨。

× × ×

綿子「そういえばお花とか何かね、持ってくればよかった」

手を合わせていた綿子が立ちあがる。

英梨は立ったまま手を合わせていた。

哲也「こんにちは」

木村の父・哲也（六十歳）が墓参りにやってきている。

会釈をし挨拶を返す綿子と英梨。

哲也「ここまだ妻しか入ってないよ」

綿子「あ、知ってます、私がお葬式とも出れてなくて、ちょっと来ないかなと思ってたので先にちよっと」

哲也「直樹の知り合い？」

綿子「はいまあそうですね」

英梨「私は元々同僚だったんですけど」

哲也「そうかそうかうん。昨日依子さんが、骨をうちまで届けに来てたけど」

綿子「あ、そうなんです」

43 霊園にある休憩場

椅子と机がある休憩場所です座っている綿子と哲也。

哲也「僕ももつと話しておけば良かったんだろうけど。いやねもうずっと中学生、くらいかな、僕はもう喋ってないんだけど彼と時々返事はしたりしてたけどお互いに、そういうんじゃない会話はどうね、はは」

英梨「でも正直そこまで私も、木村さんの事をよく知ってる訳ではないんです、というのが正直あります。そうですね」

綿子「なんで話さなくなっちゃったんです

か」

哲也「いやまあくだらない、家族のものだから。面白くないんだけど。全然もう良いんだけど……だから小学生かなあ。あいつが。もう結構前なんだけどうちで犬を飼っててね、時々散歩一緒にしてたんだけど、時々って言うてもー、あいつが散歩しないから無理やり俺と一緒に来いって連れてつてたんだけど、俺と一緒に散歩してる時に、俺がリードを持てて、まあ犬が道の角から飛び出しちゃったんだなあ。そして車が出てきてぼんって、そのまま車はどつか走って行っちゃったんだけど。まあそれで、あいつはずっと救急車を呼んでって俺に言ってたんだけど、でも犬で救急車はねえ呼べないじゃない。すごい血が出てたんだけど、もう犬は助からない状態だったし、骨も飛び出ちゃってるしさ。だから一応抱っこして家に連れて帰って、家族で逝くのを待つことにしたんだけど、犬がすごい苦しうにしてたんだよね。だから俺が逝かせてあげないと可哀想だなって思ってたんだよ。もう息も途切れ途切れなんだけど。痛かったと思うんだよ。車に引き摺られて、俺の腕もその時、引っ張られて痛かったんだけど。だから医者でもそうしたと思うんだ。一番楽に逝かせてやれるって

も、殴ったりするのは可哀想だろ。だから首を絞めたんだけど」

綿子「ああ」

哲也「それから段々かなあ口きかなくなつて、ほとんど、中学生の時にはもうほとんど話さなくなつてー、そうだなあ。高校生の時はもう、全くもう。どこかで仲直りできると良いけど、って思ってたんだけどね。結婚式にも行かなかつたんだよね、俺が。うちの場合は俺の方が避けちゃってたんだよね。歳取って何を話せばいいのかわかんなくなつちゃったんだよね。息子っていうよりもう一人の人間になつてるだろうからさ」

綿子に文則から電話が掛かつてくる。

綿子「ちよつとすいません」

綿子が立ち上がり、少し離れた場所へ移動する。

動する。

綿子「移動しながら」もしもし」

文則声「えどこにいのの？」

綿子「え？」

文則声「何してんの？ 今」

綿子「ああ、今は英梨と一緒に居て、ちよつと出掛けてるんだけど、遊びつか半分お墓参りみたいな事なんだけど」

文則声「えああ。なんで？」

綿子「なんでって？」

文則声「お墓つてのはその、今日のの？ 今日行くって言ってた？ 内見は？ 今日見に行くって言ってたじゃんか」

綿子「あ」

文則声「えー……忘れてた？」

綿子「ごめんちよつと、完全に」

文則声「どこいるの？」

綿子「えと山梨」

文則声「え山梨？ 山梨なの？」

綿子「そう車出してもらって」

文則声「それ今日帰ってくる？」

綿子「帰るよ勿論」

文則声「ちよつと一旦英梨ちゃんと代わつてくれない？」

綿子「なんで？」

文則声「いやえと、代わってくれたら別にそれでいいから」

綿子は英梨と哲也の居る場所へ戻っていく。

英梨「なんだった？」

綿子「英梨ごめんちよつと、代わってって」

英梨「え何が？」

綿子「ふみが。代わって欲しいんだって」

英梨「私？ 今？」

綿子「今」

英梨「なんで？」

綿子「いや……？」

英梨が綿子から携帯電話を受け取り、場所から離れながら、

英梨「もしもし。英梨ですお久しぶりですー今そう、ちよっとお墓参りに一緒に来ててー」

綿子「小学生の時とかってどんな感じだったんですか」

哲也「うんー……ちよっと内気だったかなあ。友達と遊んでも後ろに居るようなタイプだったね」

綿子「逆なんだ。私社交的なイメージあります」

哲也「何があったか知らないんだけど母親が金と黒の二個、半分ずつの色に髪を染めた事があって、それから学校でもちよっと前の方に出て行ったみたいだけ」

綿子「ツーローンにしてたんですか、見てみたい」

哲也「卒業アルバムにはあるのかなあ」

綿子「それで撮るの許してもらえたんだ」

哲也「確か撮ってたと思う。校長、ちよっと変わってたからね。家族の事情とかかなり大事にしてた人だったからー」

すると英梨が戻ってきて、

英梨「すいません、あの電話代わって欲しいって」

哲也「……僕？」

英梨「あそうですね、代わって欲しいって、あこれ今この人のパートナーなんですけどー」

——」
哲也「僕に？」

英梨「あのさうですね、状況を話したらちよっと一応？ 代わって欲しいって、それはさすがに一回断ったは断ったんですけど結構どうしてもって」

哲也「僕？」

英梨「押しが強くて」

哲也「何を話すの？」

英梨「いや……」

44 哲也の家・物置になっっているような部屋

誰の部屋でもなく物置のようになっっている部屋。

哲也と綿子と英梨が部屋に向かってくる。

そして哲也が卒業アルバムを探す。

待っている綿子と英梨。

哲也「（見つけ）これかな。これだ。あでもこれ中学生の時のだなあ」

綿子「あでもありがとうございます」

哲也「髪の色は普通の黒色だよ。何組だったかな」

哲也がアルバムをめくっている。

哲也「ああ、これだな」

綿子「（写真を見ている）（髪が）短い」

英梨「若い時ってなんで変な髪形なんだろうね」

綿子は一人写真を見ている。

哲也「流行ってたんだろうね」

英梨「流行りですか？」

哲也「これは誰かの写真を見せて切ってもらったんじゃないかな」

英梨「え誰だろう（誰の写真を参考にしたか考える）私達世代大体一緒だから」

哲也「妻に写真を頼んでた気がする」

45 眺めの良いバーベキュー場

暖房器具などが沢山置かれている。

食材を持って席へ向かう綿子と英梨。

× × ×

綿子と英梨は食材を焼いている。

綿子「行った事無い。でも行ってみたいとは思ってるよ」

英梨「どうしよっかなあ」

綿子「連れてってあげればいいじゃん」

英梨「もうちよっと不便なキャンプから始めた方が良くない？ グランピングとか楽な形から入ると後々面倒くさいことできなくならない？」

綿子「まあ頑張った方が良さもあるんだけどキャンプくらいいいじゃん」

英梨「てか頑張った方が良さ事って難しくな

46

マンション・リビング・夜

綿子は立つており、文則は座っている。

い？ 伝えるの。なんかうちにはさ何個かね、運動の習い事やってただけで、なんか、どこまで頑張れって言っているのかもわかんなくて、結局全部辞めちゃったんだよね。続けさせた方が良かったんだと思うんだけど。そういう練習ツライってどれくらいしんどいのかともさ、わかんないじゃんこっちは。そもそも本人がサッカーやりたいって言い出してる訳だし。でも習い事チームの人達皆がプロなろうとしてる訳じゃないし、なりたいたい人も居るんだろうけど、でもそんなに言うなら逃げてもいいよって言うしかないとか、だからその練習の量とか？ もわかんないし私。コーチにも言えないじゃん恥ずかしくて。うちの子はプロになりたい訳じゃないから練習の量って減らせますか？ とか」

綿子「それは言えないね。私も自分の子供がやめたいって言ってきたらどうするんだろ」

英梨「どうするんだろうね」

綿子「んー……」

文則声「じゃあ今日は命日とかじゃないのね」

綿子「違うね」

文則「だったら、今日じゃなくてもよかったんだよね」

綿子「そう」

文則「いや、忘れるかなあ」

綿子「ごめん」

文則「誰のお墓参りなの？」

綿子「友達の」

文則「間があつて」まあでもしょうがないか。しょうがないね。そういうこともある。そういう用事だったらそれはもうしょうがない。忘れることもある……疲れた？ 墓参り。山梨だもんね」

綿子「ああ、うん、疲れたかも」

文則「座って」

綿子が座る。

文則「これはお互いだと思うけど。正直離婚を考えたことはあるよ。でも今一緒に居るのってやっぱりその都度さ、離婚以外の事を思い浮かべてきたってことなんだと思うんだよね。そういう時に他の選択肢をどれくらい思い浮かべられるんだってことっていつか。離婚考えた事あるでしょ。そういうもんだと思ってるから全然言っているよ。俺あるんだから」

綿子「短い沈黙。無くはないと思う」

文則「どの夫婦もそうだと思うんだけど皆一

回は考えるのは考えるんだと思う。離婚したらどうなるんだろう、とか、うち子供居ないしね。ただそういう事がよぎった時、考えちゃった時にどうするかって事だから一応今のところお互いそうじゃない選択をしてきた訳じゃないか。何が言いたいかでも無いんだけど。電話で嫌な感じ出してごめんね」

47

住宅展示場・日替わり・昼

内見の為、住宅展示場を歩く文則と綿子。

48

モデルハウス

綿子と文則が階段を上がってくる。

文則「俺業務戻るから十分くらいしか見れないんだけど」

綿子「うん大丈夫」

文則「ここキツチン」

綿子が後を追いかける。

49

モデルハウス・時間経過

文則が部屋を見ている。

その文則を見て、新しい家での自分達を想像している綿子。

文則「今日ちよつと急遽子供の面倒見なきゃいけないって、遅くなるかもしれないんだけど」

綿子「わかった（ややしんどそうである）」
文則「どした？」

綿子「あ、ううん、なんか熱っぽいんだよね
昨日から」

文則「大丈夫？」

綿子「うん」

文則「じゃ俺あれだな、ヒロムの面倒断つ
ちゃうわ」

綿子「え、いやそれはダメでしょ、誰が見る
のそしたら」

文則「いや、いいよ、俺のお母さんに頼むか
ら」

綿子「それはそれで申し訳ないんだけど」

文則「いや理由は言わないようにしとくし、
仕事も早く帰るようにするよ」

50 靴屋

綿子が靴を見ている。

そして一つ選び、レジへと持っていく。

レジで会計中に店員の笹井に、スマホ
ケースからクレジットカードを取り渡す。

笹井「ご一括でよろしいですか」

綿子「はい。ラッピングもお願います」

笹井「ラッピング表を見せながら」どちら
になさいますか？」

51 マンション・女関・夕方

プレゼントを持った綿子が帰宅してくる
と、文則の母親の靴とヒロムの靴が置いて
あることを発見する。

一度、出て行こうかと迷うが、止めて靴
を脱ぎ上がり、寝室へと向かう。

廊下にヒロムと文則の母親の「こっちお
いでー」と言った声がつすら聞こえて
いる。

綿子が寝室に入ると、反動で扉が閉まっ
てゆき、寝室に居る綿子は見えなくなっ
ていく。

52 マンション・寝室・夜

綿子が目を覚ます。

体調が回復した様子で起き上がる。

リビングへと向かう。

53 マンション・リビング・夜

文則が母親と電話をしており、最中に綿
子がリビングに入ってくる。

文則「俺達もう引越すのね……いや、うん。

詳しい時期はまだ決めてなくてでもとりあ
えず引越すのね。……いや、新しい所の

鍵は渡さないつもりなのね。今日の事もだ
けど、やっぱり勝手にうちに入られたりす

るとちょっと気を遣うから。……いやそう
いうことじゃなくて。綿子が言っていると

じゃない。……いやヒロムを、見てくれた
りするのはいすく助かっているけど、それと
は別の話。……面倒見るのはうちじゃなく

てもできるじゃない？……わかった。それ
はまた話そう……うんでも今日の事がきつ

かけじゃなくて、前から本当に言おうと思
つてたことだから。だから、うん、それは
俺も悪いから。わかった。わかった。そ

こはちゃんと話そう。体調が悪いのは俺も
気を使ってるじゃんか。ちゃんとそっち
顔出してると。……うん。……そうね。はい。

会って話そう。うん。……はい、わかった。
気を付けてね。はい」

電話が切れる。

文則「ごめん、（うつろさくて）起こしたね」

綿子「ううん」

文則「鍵すぐに回収出来たらいいんだけど」

綿子「まあでもヒロム君見ても良かったりもし
てるからしょうがないよね」

文則「それとこれとは別だし。まあこんだけ

言ったら流石に入ってこないと思うんだけ
ど。もっと早く言えればよかったんだけど
ど俺が」

綿子「変な感じになるよねごめん」

文則「いやもう全然気にしなくていいよ。記
念日と同じ年生まれのワイン買ってきてる

んだけど、でもやめといった方がいいか」

綿子「全然寝たら体調大丈夫になったから大丈夫」

文則「じゃあ開けよっか」

綿子「よく見つけたね」

文則「あの年代のならわりとあるんだよね。じゃあちよつと取ってくる。冷やしてるから。赤だけど。あとそれで」

文則がプレゼントを取り、綿子に渡す。

文則「どうぞ」

綿子「ありがとう。私も（プレゼントを寝室へ取りに行く）」

文則「（ついていく）え、なんだろ」

綿子がプレゼントを取り、文則に渡す。

文則は寝室に入る前に一瞬の戸惑いがあるが、綿子には気付かれない程度である。

文則「（開けようとしながら）開けていい？」

綿子「うん。開けるね私も」

文則が開けると、

綿子「先の方きつくないかなって丸いのにしちゃった」

文則が靴を履こうとする。

その間に綿子はプレゼントを開けており、財布を手持っている。

54 マンション・リビング・時間経過

テーブルには手料理など、少々見栄を

張った料理が出ていた跡がある。

酒を飲みながらそれなりに酔い、楽しそうである綿子と文則。

綿子「床傷ついちゃうよ靴脱ぎなよ」

文則は綿子から貰った革靴を履いている。

文則「大丈夫。これ大丈夫にできてるやつだから」

綿子「この部屋賃貸に出すんでしょ」

文則「じゃあ手で履いちゃお」

文則が手で靴を履く。

綿子「似合う」

文則「本当に？ ハンドムーンウォーク（手でムーンウォーク）」

綿子は笑い、

綿子「あうまい」

文則「（続けながら）うまい？ ちよつと手に汗かいてきた」

綿子「ちよつと手匂わせて」

文則が手の靴を片方だけ脱いで、

綿子「あ臭い（※）臭いよこれ」

文則「（※から）ウソでしょ、まだ買ったばかりの靴の匂いでしょこれ」

綿子「手靴下履いて」

文則「余計汗かいて臭くなっちゃうでしょ」

綿子「私今日歩いたけど臭くなってるない」

文則「本当に？」

文則が綿子の足を嗅ぐ。

文則「くさ」

笑う綿子は自分の足を嗅ぐ。

文則「どう？」

綿子「最悪。ちよつと手臭いから靴脱がないで」

文則「待って（頭を押さえる）回ってきた」

綿子「白にすればよかったのに」

文則「これしかなかったんだもん」

綿子「水飲む？」

文則「オッケーもう大丈夫、ちよつと待って、服も靴に合わせてシヨウするね」

出て行く文則。

綿子も遅れて追いかけて行く。

文則はトイレに入って行く。

トイレの前に立つ綿子。

綿子「絶対吐いてるじゃん」

文則「違ふよ。うんこだよ」

綿子「（ファッション）シヨウは？」

文則「うんこしてからね」

綿子「いつも長いんだよね。何してんの？」

文則「うんこだよ」

綿子「なんでうんこ長いんだよ」

文則「長い人だからだよ」

綿子は笑ってリビングへ向かい、そしてソファに座り、段々とうとうとしてくる。

一度目を瞑るが、目を開ける。

そしてプレゼントの財布を持ち、少し見

てから自分の財布から中身を移し替えて行く。

札やカード、小銭等を出し、移そうとすると、小銭やカードが数枚落ちる。

綿子「あー……」

拾い、移してゆくが、財布の中に入れていたはずの木村から貰った指輪が見当たらない。

落ちた辺りを探す、全て拾っている。

「もしかして山梨で」と考える綿子。

すると文則が服装を変えて戻ってくる。

文則「どう？」

綿子「良いと思う」

文則が、少し綿子を見つめながら寄ってくる。

く。

そして綿子の膝の上に乗る。

綿子「どうしたの？」

文則「目瞑って」

綿子「なんで？」

文則「いいから」

綿子「何よ、ふふ」

文則「いいからはい。瞑って」

綿子「トイレ行きたい」

文則「口はゆすいでるから」

文則は手に靴を履いたまま綿子にキスをする。

綿子「漏れちゃうから」

綿子が立ち上がりトイレに行く。

55

マンション・リビング・翌日・午前

綿子は普段着になっていて、木村から貰った指輪を小物置きになっているシェルフから探している。

しかし見つからない。

× × ×

カバンの中身を外に出し、中身をばらばらと仕分けのように触りながら指輪を探している綿子。

段々とストレスが見えてきている。

そして財布の中身も出す。

× × ×

綿子は最後にどこへ置いたのかを思い出そうと、立ちながら、記憶を探っている。

× × ×

寝室でクローゼットを開けて、服のポケットを調べ始める綿子。

× × ×

リビングで、

綿子「英梨に電話をかけて」ごめん、指輪見なかった？ 指輪。英梨の車に落ちてないか見てくれない？」

× × ×
一度ソファに座り、思い出そうとする綿子。

が、立ち上がり部屋をそのままに出て行く。

56

マンション・駐車場

駐車場に入ってきた綿子。

自車に乗り込み、運転席に座った綿子。

そしてエンジンをかけて、アクセルを踏むが、「ががが」と音が鳴るだけで進まない。

綿子は運転手順を確認すると、サイドブレーキがかかったままである。

サイドブレーキを外す綿子。

そして車が動き出していく。

57

街中・車内

綿子が緊張した面持ちで運転している。

58

道の駅・駐車場・車内

綿子の車が駐車場に入ってくる。

空いている場所を探している綿子の背中。やがて見つけ、バックで駐車を始めると踏み込み過ぎてしまいブロックを乗り越え、何かがぶつかった気配がある。

綿子「……(鼻息のようなため息)」

駐車を完了させ、車を降りて綿子はぶつかったかもしれない後部を見に行く。

59 道の駅・テイクアウト屋の辺り

綿子が店員・中田に携帯電話を見せて、綿子「最近こういう落とし物って届いてたりしませんか？」

中田は携帯電話を見て、落とし物ボックスの方へと行く。

60 道の駅・駐車場

車に戻って来た綿子は傷を見る。

車× 傷を油性ペンで塗っている綿子。

車に乗って、アクセルを踏み、ブロックを乗り越えて出発する綿子。

61 道（山の方向へと向かう道）

綿子の運転する車が走っている。（客観・後ろから）

車の向かう先には大きな山がある。

62 霊園

綿子が歩きながら墓地の中で指輪を探している。

木村家の墓前でも指輪を探しているが、やはり見つからない。

立ち上がり、腰を伸ばす綿子。

立ったまま、暗くなってきたことを実感する。

63 田舎・道・車内・夜

綿子が運転している。（助手席から）

64 旅館・玄関・夜

綿子の車が駐車場に駐車され、綿子が車から降りてきて旅館に入ってくる。

スタッフの原田が玄関まで迎えに来る。原田「ご予約されていますか？」

綿子「あ、いや、今日って空いていますか？」原田「確認致しますので少々お待ちください。一名様でよろしかったですか？」

綿子「はい」

原田「何泊のご予定ですか？」綿子「一泊で」

原田が予約名簿を確認しに行く。待っている綿子。

原田「戻ってきて」お待たせ致しました。二つ空きがございましたのでこちらへ」

原田について行く綿子。

65 旅館・温泉

湯に浸かる綿子。

探し物を経て木村が頭をよぎり、顔を沈め、しばらく潜り、顔を上げる。

66 旅館・部屋

そして温泉から上がってきた綿子が部屋に戻ってくる。

携帯電話を確認する。

綿子「（文則からの着信履歴を見ている）」文則に伝えるのを忘れていた事を思い出している。

そしてかけ直す。

綿子「もしもし……だよねびっくりしたよねごめんね。……言おうとは思ってたんだけど……今、今は山梨。……そう。……英梨は居ないよ……え？ いや別に誰も一緒に居ないけど。……本当に一人だよ。うん。本当だつて……帰るから大丈夫。はい。……ごめんね。はい（電話が切れる）」

67 旅館・食事処

一人で食事をしている綿子。

68 旅館・受付・待合処・朝・日替わり

綿子が受付で精算の為にクレジットカードを渡した後、座って待つように言われていて、椅子へ歩いて向かっている。

待合処には数名が座って待っていて、ある客の会計が済んでスタッフがカードを返している様子がある。

そして綿子が座る。

待っていると、原田がカードをキャッシュトレーに乗せて持ってきて、

原田「申し訳ございません、こちらのお預かりしたカードが現在お使いいただけないようなんですけれども」

綿子「え？ あエラーですか？ 使えないって事？」

原田「お使いいただけないようですね」

綿子「ああ、あー（財布を見る）……この辺ってコンビニとかおろせるところってありますか？」

原田「コンビニは車でなら」

綿子「あ、じゃあ私おろしに行っても大丈夫ですか？ 手持ちが無くなっちゃって今、あ荷物置いていきます」

原田「ああ、えっと、確認します」

原田が奥へと引込む。

やがて原田が戻って来て、

原田「あのお車も置いて行かれるなら大丈夫との事で、はい」

綿子「歩いて行ける距離ですか？」

69 旅館・ロータリー

綿子が旅館から出てきて停まっているタクシーへと歩いていき、

綿子「（乗り込みながら）一番近いコンビニ

までお願いします」

運転手「大貫さん？」

綿子「大貫です」

70 コンビニの前

ATMでお金をおろしている綿子。

コンビニの外にはタクシーが待っている。お金を財布に入れ、コンビニの外に出てくる綿子。

71 旅館・受付

他の客もちらほらと出て行ったりしている中、現金で支払っている綿子。

72 旅館・駐車場

旅館から出てきて、車に乗り込む綿子。車が動き出す。

73 バーベキュー場

綿子が指輪を探している。しかし見つからず、綿子には諦めの様子が漂ってくる。

74 哲也の家・部屋

綿子が哲也に待つように言われ、部屋に入ってきて待つとする。

手に指輪を持った哲也が戻ってくる。

哲也「これかな」

哲也の手にある指輪を見る。

綿子「ありがとうございます。どこで落としたんだろう（手に取ると自分のものではない事に気が付く）」

哲也「事故の時、に知らない指輪を持ってたつて骨と一緒に届けてくれてたんだ、依子さんがね」

綿子「（少しの沈黙があつて）ああ」

哲也「やっぱりこれは同じ物を探してるのかな」

綿子「（沈黙）」

哲也「いや、特に僕はだからどうしたいって事も思っていないんだけどね」

綿子「すいません」

哲也「君が謝る話じゃないよ。二人の事だし、だからこの事はどうしたいとも思っていないんだけど、どう、その、どうすればいいんだろうか」

綿子「どう、そうですね、どうというのは」

哲也「探すのにここまで来るくらい大切なものなんでしょう」

綿子「えっと」

哲也「つまり僕はだからそれがどういう指輪か知ってるのに知らないふりをしておくのが気持ちが悪いのかな、依子さんに対して。だから、黙っておくというの、

変な話なのかなと思っていて、勘違いしないでほしいのは君を罰したいとかではないんだけど、でも僕だけがね、この事を抱えてたくはないのかな」

沈黙。

哲也「(依子に)連絡をさせてもらうね」

75 田舎・駐車場

綿子が車へと向かって歩いて来る。
車へと乗り込むと、気が重い様子であるが、やがてエンジンをかける。

76 田舎・道・車内

運転する綿子(サイドから)。

77 田舎・都会へ向かう道(長い道)

綿子が運転する車が走っている。

78 都内・カフェ・テラス席

綿子はカウンターでドリンクを受け取って、席に座る依子を探し、きよろきよろとしている。

そして見つけ、気まずいながらも近付いていく。

そして依子と同じテーブルに座る綿子。何を話すのかわからない、長い沈黙が流れる。

依子「お呼びたてしてすみません、すぐにこ
こわかりました?」

綿子「はい」

また沈黙が流れる。

依子のどうしようかといった笑い。

と、綿子も合わせる。

依子「結婚してる事知ってましたか」

綿子「はい」

依子「ああ。ご結婚はされてますか」

綿子「はい」

依子「仕事は」

綿子「いえ」

沈黙。

依子「何が最初だったんですか」

綿子「(少し沈黙して) 初めは友達に誘われ

た集まりで会いました」

依子「それから」

綿子「それから。それから、(少しの間)

そうですね、悩んだ事があったんですけど私、初めて会った時に長く付き合っ

て結婚した事を聞いて、それでも途中で別れたり戻ったりした事も聞いていて、なんで

よりを戻したんですかって聞いたら、楽しかった時を思い出すからって言って、それ

が私の悩んだ事と共通の状況で、それ

から話すようになりました」

綿子「二年前、くらいです」

依子「そっかじゃあ一年前から出掛けてたど
れかは、会いに行ってたんだ」

少しの沈黙。

依子「逆に何か聞きたい事は無いですか」

綿子「無いです」

依子「そうですか。大学生から私は付き合っ

てたんですけど。彼が二つ下で彼から声を

かけてきたのが最初だったんですよ。同じ

学年だと思ったらいいんですけど。途中

ちよつと別れたりもしたけどでも、だから

もう十五年かな、一緒に居たんですね。だ

から長い時間一緒に居て、一途で理想的だ

とか言うんですけど皆。でも実際それって

理想的なのかなって思いますよね」

再び少しの沈黙が流れる。

依子「それは理想的というか、良い事って思

いますか?」

綿子「(考えながら) 良い事、良い事?(聞)

依子「あんまり沢山は、他の人を知らないま

ま私達年を取ったと思ってたんですけどね
結婚するとお互い一人としかセックスし

ちゃダメじゃないですか」

綿子「そうですね」

依子「なんでそんな事したのってあの人に聞

けたら良かったんですけど」

長い沈黙。

互いに木村の事を思い出している。

79 マンション・駐車場

綿子の車が入ってくる。
そして何度か切り返ししながら、駐車をする綿子。

80 マンション・廊下・夕方

玄関から入って来て、リビングへ向かう綿子。

81 マンション・リビング

扉を開ける綿子。
文則が座っている。
綿子はカバンを置いて、座る。

文則「とりあえず謝ろうか」

綿子「ごめんなさい」

文則「うん何が？ 何について？」

綿子「何がって言うのはだから私が黙ってどっか行つた事」

文則「なんでまた山梨なの？」

綿子「沈黙」

文則「黙るんだつたら話し合いにならないんだけど。納得いくまで話そうよって、まっね。思うんだけど」

綿子「沈黙」

文則「山梨に何かあるの？ この、貴方の

取つた行動は、俺に何か問題はある？」

綿子「沈黙」

文則「こんな事でやり直せるって思う？ 黙ってるっていうのは一つの返事になっちゃうんですけど」

綿子「やや被つて」そういうつもりじゃなく考えてるだけ。黙ってるって別に返事じゃない」

文則「あそう、待ててて事ね？ わかった」

綿子「私は……」

文則「待ってるよ今。待ってる」

文則は指輪を綿子にみせる。

文則「こんなの持ってたっけ？」

綿子「どこにあったの？」

文則「山梨に関係あるんだ？」

綿子「どこにあった？」

文則「どこにあったかは俺の聞きたい事と関係あんの？」

綿子「沈黙」

文則「これさ、嫌だけど不倫疑われても仕方ないよ正直。いや、疑うの嫌だけどね」

綿子は返して欲しいそぶりを見せて、

綿子「あなたがそれを言う？」

文則「してたんだ？」

綿子「してない」

文則「じゃあ山梨へ何しに行つたかちゃんと答えられるよね」

綿子「不倫はしてないよ」

文則「俺は何をしてたか聞いてるんだけど」

綿子「いや——」

文則「そこを答えないでしてないって言われても信じられないでしょ？ 黙ってるならもうアウトって事だからね？」

綿子「私がじゃあ例えば何不倫してたらどうすんの」

文則「え、えごめん何が言いたいんだろ」

綿子「先にしたのは文則でしょ」

文則「その話はしてないだろ今」

綿子「子供の面倒見るって言いながらしたのは何、もう許されたと思つてんの？」

文則「少し間」いや。とりあえず不倫は認めるよね

綿子「山梨でなんもしてないよ」

文則「無理があるだろこれ——」

綿子「してないからしてない（※）って言うてるんだけど」

文則「（※から）ウソウソウソ、無理あるってそれは」

綿子「やや被せて」じゃあ子供の面倒見るって言いながらあなたはどっへ行つた？」

文則「被せて」その話はしてないでしょって今

綿子「被せながら」ばれた後にも何回も預かつて——

文則「(被せて)それは子供なんだからしよ

うがないでしよってじゃあ何はとくの」

綿子「(被せながら)違う、違う、面倒見るのはしよがないかなって思ってたから、だつて子供なんだから、父親に会えた方が良いでしょうなって思ってたし、だから

ずつと我慢してたけど、色々。貴方が子供に会うつて言つて、それでやつてきた事と、言つてきた事と同じじゃない? 違う?」

文則「その話はしてないつて言つてんじやん今。そんなに言うのは、だから、認めるつて事でしよ不倫を」

綿子「ううんしてない」

文則「じゃあこれは何なの? つて答えよう

よ」

綿子「好きな人から貰つた」

文則「え何?」

綿子「最近死んだけど」

文則「は? 死んだ?」

綿子「だから墓参りつて言つてた通り、墓が

山梨にあるんだつてこと」

文則「死んでんの?」

綿子「死んだ」

文則「誰が信じるのよそんな話」

綿子「信じるとか信じないとかじゃなくて。

死んじやつたから……(泣き始める)あの

人……死んじやつたから」

文則「本気で言つてんの?」

綿子「死んじやつたんだつて」

文則「(何も言えない時間があつて)泣くなよ……不倫相手にそんな気持ちになられてもね」

綿子「ちよつと休憩する」

綿子は立ち上がり部屋から出て行く。

文則「どこ行くの?」

綿子「休憩」

82 マンション・外

マンションから出てきた綿子。

目の前の大きな道を一目散に歩いていく。

83 大きな道

綿子は歩くスピードが上がつたり下がつたり、時には数歩駆け足になつたりしていく。

× × ×

段々とスピードが落ちてきてやがて止まる綿子。

立ちながら泣きたい気持ちを堪えている。

84 マンション・リビング・夜

綿子が帰宅してくると、文則はソファに居る。

文則「どこ行つてたの」

綿子「ごめんぶらつと」

少しの沈黙。

綿子「別れたい」

文則「わかつた」

綿子「うん」

文則「好きな人とどこで会つてたの?」

綿子「色々な」

文則「どこ?」

綿子「普通にご飯食べたたり、二人きりになれる場所探していつたり、神社行つたりしたよ。遠くにも出かけたし。レンタカーだけど」

文則「だから例えばどこ」

綿子「足湯入りに行つたり」

文則「他は?」

綿子「空港とか」

文則「空港で何したの」

綿子「私らと同じだよ。昔の」

文則「何」

綿子「同じ様に飛行機見たりお茶したりとか」

文則「そう。楽しかつた?」

綿子「私も結局不倫から始まつてゐるでしょ。不倫関係だつた時の方が良い人でいれるし。前の人と不倫関係だからうまくやれてゐるんじゃないの。今」

少しの沈黙がある。

文則「本当に死んでんの？」

綿子「うん。私はお葬式とか遠慮して参加しなかったんだけど」

沈黙。

綿子「私の見える所で事故にあって、そう

大変だった事はわかる事故で、近くに居た私、救急車呼べばよかったんだけど、誰か他に呼ぶって思ってたで、それで電話はかけたんだけど、途中で切った。その時にどうなったかあんまり覚えてないんだけどでも（沈黙）知らんふりした」

文則「それが原因って事？」

綿子「わかんない。でも私がそもそもそういう関係になんなかったら事故はなかったのかなとか」

沈黙。

文則「そ」

文則は手を伸ばし、手だけ握る。

綿子「何」

文則は少ししっかりと握る

綿子「離して」

しかし離さない。

綿子「離してって」

文則「本当は別れたくないよ俺は」

綿子「離してって」

文則「別れたくない」

綿子「離してって」

文則は綿子に抱き着きに行く。

綿子「向き合えない（状態）っていうのは怖いでしょ。これは私も悪いから。ずっとほんとの問題を無視してきた私も悪い」

文則「泣きだしそうである」母さんも話つけたよ」

綿子「うん」

文則「子供の事も」

綿子「文則は元の家族に戻るでしょ。絶対うまくいくから。子供も一緒に見てあげて、誰かに任せるんじゃないくて」

文則「別れたいの？」

綿子「別に別れたくないよ（間）でも（間）

木村くんに会いたい」

互いに泣いている。

綿子は文則を剥がす。

剥がれた文則。

85 マンション・寝室→リビング・朝・数週間後

間後

段ボールに服を入れる綿子。

荷物を入れ終わると、リビングへ向かう。

リビングには誰もおらず、段ボールが幾つか積みあがっている。

リビングを見渡している綿子。

86 マンション・駐車場

段ボールをレンタカーに積んでいる綿子。積み終えると、運転席に乗り込み、エンジンをかけ、車が動き出す。

87 道

綿子が運転している車（外観・後ろから）がしばらく道を走っている。車の後部には積まれている段ボールが見えている。

終わり。

さよなら ほやマン

庄司輝秋

〈脚本家略歴〉

庄司輝秋（しょうじ てるあき）

1980年宮城県石巻市生まれ。東京造形大学彫刻専攻卒。大学卒業後、フリーターを経て、Routon入社。TVCM等の企画演出の仕事に就く。2011年の東日本大震災後、被災した故郷を物語の地にしたシナリオを書き始める。2013年、初短編『んで、全部、海さ流した。』（ndc2012）を発表。2023年、オリジナル脚本『さよならほやマン』で長編監督デビュー。



©Sayo Shindo

監督…庄司輝秋

製作…シグロ オフィス・シロウ

ス Routon ロングライド

制作プロダクション…シグロ オ

フィス・シロウズ

配給…ロングライド シグロ

〈スタッフ〉

企画

山上徹二郎

押田興将

製作プロデューサー

山上徹二郎

押田興将

小田桐団

波多野文郎

辻智彦

撮影・照明

小川武

録音・整音

澤野五月

美術・装飾

鯉渕幹生

編集・カラスト

大友良英

〈キャスト〉

阿部アキラ アフロ（MOROH A）

高橋美晴

呉城久美

阿部シゲル

黒崎煌代

タツオ

津田寛治

春子

松金よね子

1 古ぼけたVHS映像・多部島・浜辺（過去）

画質の悪い古ぼけたVHS映像。素人の撮影。

父・栄二（30）が扮しているらしき「ほやマン」。

砂浜に立ちヒーローポーズでカメラにしゃべる。

ほやマン「私は、ほやマン！ 多部島生まれ、多部島育ち、ほやマンだ！ なんと、こう見えて私は貝ではない。今日は特別に私の秘密を教えよう！」

× × ×

多部小学校の教室に貼ってある、大きな模造紙に「ほやの一生」を説明した手描きの自由研究の図。

子供が描いたほやのイラスト。卵から幼生になり、成体になっていく過程をカメラパンして映し出す。

ほやマンN「石巻の特産・ほや！ 実はほやは卵から生まれるのです。そしてなんと！ 小さい頃はオタマジャクシのように海を泳ぐ！ そして、いい岩場を見つけ住むと決める……。背骨がなくなり、次に脳みそがなくなり……その後はずっと同じ所に住み続けるのだ！」

図の端に「5年1組 阿部明」と見える。

× × ×
砂浜のほやマンに戻って、

ほやマン「キミの脳みそはなくなっていないかい？ ワハハ！」

『ほやマン1995』と昔のスーパーインポーズ。

VHSを見ている幼いアキラとシゲルの声「これって父ちゃん？」「すっげえ！」

「絶対父ちゃんの声だ」

2 多部島に向かうフェリー（現在）

海をゆくフェリーの舳先。

美しい多部島、揺れながら近づく。

3 砂浜

透明度の高い、青く美しい海。

東北・宮城とは思えない白浜。

夏が終わりかけ、ビーチに人影はない。

4 漁港・船着場

『東北のハワイ 多部島へようこそ』の看板。

フェリーから大荷物で下りてくる女・美晴（34）。

島の漁師数人、肘で小突き合いながら女を目で追う。

5 集落の点描

海辺の集落、人の住まなくなった家。

年季の入った船道具、伸びた雑草。

小さな商店の店先には「がんばろう！」

石巻「絆」の色褪せたポスター。

ウェットスーツ姿の漁師アキラ（30）が自宅に帰っていく。坊主頭、手提げ網には真っ赤なほや。

6 阿部家・門前の道―庭

アキラ、道向かいの春子の家の門扉にほやの入った網を下げ、一声かけて自宅へ入る。

アキラの自宅は見晴らしのいい古民家。

だが雑草が伸びて、手入れは行き届いていない。

庭先の原付バイク、錆びて鳥が絡んでいる。

7 同・和室

和室の棚、家族や仲間の思い出の写真が並ぶ。

漫画を夢中で読んでいるシゲル（22）。

アキラ「シゲルーっ！ オイ、シゲルーっ！」

アキラの声が玄関から響くが、シゲルは気づかない。

アキラ、シゲルのボサボサ頭をチョップ

して部屋に入ってくる。Tシャツに着替
えながらアキラ、

アキラ「シゲル、おめえ内職さぼってんじゃ
ねえぞ。ったく」

アキラ、神棚にパンツと手を合わせる。

シゲル「アキラ兄……」

アキラ「なにすや?」

シゲル、スツと立って、黙ってアキラを
見る。

シゲル「……(グウーつと腹が鳴る)」

アキラ「(呆れて) おめえグーグー腹にしや
べらせてどうすんだよ。欲しいモンちゃん
と口で言え」

茶箆筒の脇に乱雑に積まれたカップ麺を
ひとつ取り、シゲルに放り投げるアキラ。
シゲル「ハハツ」

不器用にキャッチし、ニンマリするシゲ
ル、楽しくなつてしまい、カップ麺をア
キラに投げ返す。

アキラ「バカ、そういう遊びでねえって」

言われても笑顔のまま楽しそうなシゲル。
アキラ「お湯沸かすぞ」

8 集落の路地・郵便局前

路地の中、大きな荷物を引いて歩く美晴。
ノースリーブ。携帯で、大声で、
美晴「だから週刊連載打ち切ったのは忘れる

からさ、描いてやるって言ってんじゃん
……電波悪い、もーしもーし」

電波探しながら集落の中をゆく。

ちよつとおしゃれな麦わら帽子を首にか

けた春子(80)、郵便局から出てきて、

春子「あらーこんなにちわあ。どこから? 東
京?」

美晴、一瞥して舌打ち。

春子、肩をすくめて先へゆく。

美晴「……検討しますって……原稿できたら
……オイッ!」

美晴、電話をつづけるがまた通話途切れ
る。

美晴、春子の背中にイラつきながらたず
ねる。

美晴「あのーすいません! 電波いい場所教
えて欲しいんですけど。分かります?」

麦わらの春子、振り向かず小さな声で
春子「わかりません」

とつぶやぐが、その声に気づかない美晴
美晴「なんだよ。シカトかよ、麦わらババ
ア」

春子の背に悪態をついた美晴、再び電波
探しに歩く。

庭先で軽トラに漁具を積みながら様子を
見ていた漁師のタツオ(55) つぶやぐ。

タツオ「年寄りが電波のこと分かる訳ねえ

べ」

つぶやきつつ美晴の身体を舐め回すよう

に見るタツオ、美晴が持つ手提げ袋に目
を留める。

そこには「新談社マガジン」の文字。

タツオ「(怪訝そうに) ん、新談社マガジ
ン?」

真つ黒に焼けたタツオ、美晴に鋭い目を
向ける。

9 阿部家・居間

空になったカップ麺、冷えている。
その脇には督促状の山、生活保護の案内
閲覧板など。

家の電話に出ているアキラ、頭を掻きな
がら、

アキラ「いやあ船は漁師の命なんで……はい、
それは分かってます。んでも船取られてしま
うと……船だけはなんとか……今月は必
ず、はい。必ず、はい。はい。はい」

電話切つて振り返りながら、
アキラ「何が差押えだつ。島まで来てみろつ
つうの」

カップ麺のわずかな汁をあおつて飲み干
すアキラ。

内職で漁協の発泡スチロール容器にシー
ル貼りをしていたシゲル、反射的に気づ

いて、

シゲル「うあーっ！ オイの汁ウー！ 残してたのにっ！」

アキラ「情けねえなあ……（シゲルのボサボサ頭を見て）なんだその頭、美容室行くど！」

10 同・庭／門前の道

ゴミ袋をかぶせた半裸のシゲルを椅子に座らせ、しかも面のままシゲルの後頭部を刈り上げるアキラ。

ウィーンと電動バリカンの音が響く。

シゲル、ザンバラに刈られながら家庭菜園のきゅうりを食べるが、髪が口に入って「ベッベッ」。

アキラ「しっかしさあ、きゅうりみてえにカネも畑で育たねえもんかねエ。十円種まきしたら千円札になるとかさア」

シゲル「兄ちゃん、カネは野菜でねえっちゃ（笑）」

アキラ「わかってるつうの。今月の返済の話だ」

門前の道、イライラしながら電波を探す美晴の姿。

美晴、塀の向こうのアキラたちに気づく。

アキラ「右向け。あは逆だ（パシッと頭を叩く）」

シゲル「イデっ」

2人のやりとりをししばし眺める美晴。

観察するように無表情でアキラたちを見ていた美晴だが、心の奥が動いたのか、瞳がゆれる。

一瞬、考えを巡らせたのち、美晴、八百屋で買物するような調子で声を掛ける。

美晴「ねえ、ここあんたらの家？」

アキラ「え」

美晴「ふたりで暮らしてんの？」

アキラ「（こくりと頷く）」

美晴「そしたらさ、この家、私に売ってくれない？」

アキラ「え。うあつ!!」

アキラ、驚きのあまりバリカンで余計なところまで刈ってしまう。シゲル、とてもない髪型に。

シゲル「（頭を触りながら）え？ なに？ 兄ちゃん？」

美晴、数年ぶりに笑ったかのようにダハッと笑う。

アキラ、笑う美晴に視線を移し、アキラ「え、何すか？」

美晴「だからさ、この家、売ってくれない？」

アキラ「……い、家売るって、不動産屋？」

美晴「いや、漫画家。漫画を描く人」

アキラ「ん……いや、つっても、うち、売り

もんでねえし」

美晴「あ、大丈夫。10000万。現金で」

美晴、新談社マガジンの手提げ袋から、パンパンの紙袋を取り出して掲げ、笑顔を見せる。

目をバチクリさせるアキラ。

押しの一手で美晴、紙袋から1万円の札束をつかみ出して見せつける。

大金を見て、シゲルがきゅうりを吹き出す。

シゲル「ブッ！ おお、カネ！ おお」

アキラ「（つぶやくように）ぜってえ怪しいやつだろ……」

美晴「……あつそ。じゃあ隣でいいわ」

札束をしまい、隣の家に向かう美晴。

シゲル「ああ！ カネー！ 兄ちゃん！ カネ！」

アキラ、叫ぶシゲルを制しつつ、あせつて、

アキラ「ちよ、隣はもう誰もいねえって！」
美晴「私、住む場所探してんだけど、締め切り近いんで急いでんだよね、どうする」

美晴、札束をアキラに向かって挑発的に振る。

アキラ、周囲を気にしつつ冷静ぶって、

アキラ「……ま、困ってんなら、話だけ聞いてやつてもいいけど」

美晴「ハハ、田舎もんには現金が効くってマジなんだね」

カラカラと笑う美晴。

ムツとして鼻穴を膨らますアキラ。

「ちわー」美晴、勝手に裏門から入ってくる。

アキラ、あわてて裏門まで駆けて、

アキラ「ま、まだ入ってくんなくて！」

美晴、札束の封を雑に切り、ざっくり半分に金を分けてアキラに突きつける。

美晴「はい、頭金の50万。一旦これで」

アキラ「いや、いらねって」

と言いつつ、札束を受け取ってしまおうアキラ。

その際に美晴、玄関へと向かう。

美晴「ちよつと、キミ、荷物運んで」

とんでもない髪型のままシゲル、ペタペタと近づき、荷物を運ぶ。シゲル、金の入った袋にゆつと手を伸ばすが、美晴自然にかわす。

「名前は？」「マイネームイズシゲル」

「何それ」

追い剥ぎに遭ったように、アキラ呆然。

右手にバリカン。左手に現金50万。

アキラ、50万をこそと脇の下へ隠して腕を組む。

11 阿部家・門前の道（夕）

道向かいに住む春子、掃き掃除をしている。

12 阿部家・居間（夜）

チラシ裏に書かれた『50万円を頭金とする』の覚書きが、壁にドンと貼られている。

『阿部明』『高橋美晴』、両者の署名捺印。「てかここほんとに電波最強じゃん」スマホでユーチューブを見ながらカップラーメンをすする美晴。結局、丸刈りになったシゲルも隣で見ている。美晴はすでに風呂上がりの様子でTシャツ姿である。

アキラ「勝手に食わねえでくれる」

美晴「この家の50万円分はもう私のものなんだから、これだって私のものでしょ」

アキラ「いや、家売るなんてまだ決めてねえって」

美晴「ハハ。私くらいでしょ。宮崎のクソ古い島の家買うの。脳みそあんなら一択じゃん」

アキラ「宮崎じゃねえよ、宮城だよ」

美晴「発泡酒開けて」来月の半ばくらいまでにさ、売るかどうか決めて。とりあえず締め切り近いから私、50万円分、下見がて

らここ住むから」

アキラ「住むつ?!」

美晴「下見。でも、もし売らないときは、頭金50万返して」

アキラ「……返してつて、そんなときは、そっちだって返せよ、カップラーメン。あとビール」

シゲル「なんだんだ」

美晴「てか、島なら海のもん食べたらいじゃん。牡蠣とかはやとかさ。なんで漁師がレトルトばっか」

部屋の中には袋麺や缶詰ばかり。

アキラ「るつせえな、いきなり人んちさ住みついて、ラーメン食つくつろいでよ、普通に考えて迷惑だべや」

美晴「迷惑？ 大チャンスでしょ。違うの？」

美晴の視線の先には督促状の山。目を泳がせたアキラ、督促状の山をこそつと机の端に寄せるが、美晴はもちろん気づいてる。

美晴「（あきれて）……寝る。シゲル、布団かなんか敷いて」

シゲルに指示して、席を立つ美晴。

去り際、部屋に転がるボロボロの漫画を拾い上げ、

美晴「これ面白い！」

タイトルは『アブナイ！ねーちゃん』

美晴「ハハ、めちやくちゃ読み込んでんじやん」

美晴、アキラに漫画をばいっと投げる。
表紙に『高橋ミハル』と作者名。内表紙を開くと若い美晴の写真。

アキラ「高橋ミハル!」

美晴「擦り切れるほど読んでくれてありがと」

写真と同じポーズで笑って美晴、部屋を出る。

アキラ、カッときて漫画を投げつけようとするが、躊躇して、ハッと短くため息。
一方、シゲル、尊敬の眼差し。

13 同・台所(夜)

流して美晴の食べ残したカップ麺を洗うアキラ。

アキラ「何がチャンスだよ……チャンスかあ」

13 A 同・居間(同刻)

美晴「シゲル、私の荷物持ってきて」

シゲル「ふあい」

シゲル、素直に返事して、美晴の荷物を奥の間に運んでいく。その際、荷物の中の金の入った紙袋が目に入り、一瞬足を止めるシゲル。美晴の急かす声が聞こえ

シゲル慌てて外観へ。

13 B 同・奥の間(同刻)

阿部家を街灯が照らし、島の夜が暮れていく。

14 同・庭／門前の道(翌朝)

シゲルが読む漫画のアップ。丸刈り兄弟がアブナイねーちゃんに痛めつけられているギャグ漫画。

ウェット姿のアキラ、隣に住む春子と塀越しに会話。

アキラ「家売らねえがって、あのバカ女」

春子「ほえー!」

アキラ「ったく、んでも締め切りどうの言っ
てっし。可哀想だから、しばらく『田舎に
泊まろう』させてやっかなって」

庭を振り返ると、語気荒く電話をする美晴の姿。

勝手にきゅうりをもいで食べている。

アキラ「漫画家とかって、金あっても頭おか

しいんかな」

春子「小声で」アッキー。こんなチャンス
ないよ。気まぐれの気が変わんねえうちに
早く売ってしまえって」

アキラ「そんな。父ちゃんにも母ちゃんにも
申し訳立たねって」

春子「んだってエ、この先、島さ居たって、
アンタちゃんとちゃーんとやっていけん
の?」

アキラ「……」

春子「動くなら若いうちだ」

アキラ「んでもシゲルは島から出られねえし
……」

庭のシゲル、しゃがんで漫画を読んでいる。

春子「あ、あら、あんた白髪……」

「え、どこ?」と、アキラがあたふたし
ていると、軽トラのクラクションが鋭く
鳴る。

運転席、ウェット姿のタツオが短く叫ぶ。

タツオ「早く乗れっ」

アキラ「あ、春子ちゃん、家の話これね(口
に人差し指)」

アキラ、軽トラの助手席へ。

アキラ「シゲルっ」

シゲル「ふあいっ」

シゲル、荷台へひよこひよこ駆け乗る。

美晴、男たちが漁に出るのに気づいて、
美晴「あつちよつと! ほやお願い。天然

の」

アキラ「舌打ち」

美晴「大っきいやつね!」

タツオ「なんであの女こさ居んだ」

アキラ「いや、結構有名な漫画家だつつかうら。あの『アブナイー! ねーちゃん』の」
タツオ「ああー新談社(合点して) あんま変なことすんなよ」

アキラ「変なことつてまだ何も」

タツオ「(一拍置いてスケベな感じで) まだ?」

アキラ「いやそう言う意味でなくて」
タツオ「ま、おめえさその気があんなら悪くねえと思うけど」

心外な表情のアキラ。

軽トラ、港に向かって走り出す。

小さくなっていく荷台のシゲル、春子に大きく手を振る。春子、心配気な笑顔で手を振り返す。

15 海・漁場

沖に出て漁場に着いたタツオの船、昌佳丸。

濡れたウェット姿のタツオ、はやの入ったカゴを移動させながらアキラに「オイサツ(行けの意)」。

家の売却問題で心ここに在らずのアキラだが、声に促され海へ飛び込む。

16 海中

素潜りで海に沈むアキラ、岩場のほやを

むしりとろうとする。が、手が滑り、ほや遠くへ転がる。

あわててバランスを崩すアキラ。

「◎×△%*¥●」口からボコボコと漏れる空気。

その時、必死で掴んだほやが喋り出す。

はや「(うみそなくなるまえにうごけえ」

アキラ「(字幕) え!」

はや「(うみそなくなるまえにうごけえ」

アキラ「(字幕) ひい! ほやがしゃべった!」

アキラ、溺れていく。

F・O

17 漁港・堤防

頬を叩かれて目覚めるアキラ、

アキラ「ほやがしゃべった!」

アキラにまたがついていたタツオ、

タツオ「バカこのオメエ、夢でも見てんのか」

アキラ「えっ、はや、あつ」

アキラ正気に戻る。

手にはほやが握りしめられている。

シゲル「ア:キラ兄、死んでね:かったア!」
過呼吸気味のシゲル。涙と鼻水でズルズル。

タツオ「アキラ、漫画家女さ夢中になる前に、まずは一人前の漁師さなれ。本家の跡取り

だろ」

アキラ、上体を起こし、首を垂れる。

シゲル「でも兄ちゃん、美晴さんすげえよね?」

といった指でカネ輪っかをつくる。

タツオ、「ん?」と怪訝な顔。

タツオの意識を逸らすようにアキラ、

アキラ「おんちゃん、オイは海で生きるって決めてっから」

本当かと首を傾げるタツオ。

アキラ、手にしたほやをシゲルに押し付け、そのまま集落へ帰ろうとする。

が、ウェットスーツの尻、べろりと大きく破れて、半ケツ状態。

シゲル「アキラ兄、穴! ケツに穴!」

アキラ「うあ!」

18 集落の路地

アキラ「ぴったし後ろ歩けよ。自然な感じで」

アキラ、シゲルに尻穴を隠させて歩く。

すれ違う島民の挨拶に応えるも、前後にくっついた2人はどうにも不自然。

不思議そうにみんな見る。

アキラ「シゲル、金のことは人さ言うな。んで、あの金にはぜってえ手エつけんなよ」
シゲル「オイ、兄ちゃんの言うことは絶対え

聞くよ。(大声で)金には手エつけねえ!」
アキラ「(小声で) オイっ!」

19 阿部家・門前の道―庭

「ドウイーン! ドガガ!」ものすごい音が響く。

驚いたアキラとシゲル、尻も忘れて駆け出す。

すると、庭には汗だくの美晴。

納屋でみつけたドリルで家の壁に穴を開けている。

美晴「(息切らして) ああ、ほやは? 獲れた?」

アキラ「獲れるも獲れねえも……何やってんだッ!」

美晴「ここ、ちょっとリフオーム。窓ほしくて、窓」

シゲル「リホームって何?」

アキラ「(シゲルに) オメエはしゃべんねくていい」

外壁にソフトボール大の穴が空き、屋内が見える。

壁の穴を見留めたアキラ、拳を握りしめて、

アキラ「勝手に窓とか作んじゃないよ」

美晴「昨日も言ったけど、50万円分はもう私の家なんだから別にいいでしょ」

アキラ「……そういうものと違うだろ頭金つて……おそらく」

美晴「おそらくって(笑)。あんたウジウジして全然、漁師っぽくないよね」

アキラ、坊主頭をなで付け美晴を睨む。
アキラ「つか、なんでウチなんだよ、ったく」

美晴「まあ電波いいし。あとはアンタら……漫画のネタになりそうだし」

アキラ「ネタだ? アホか。もし本当に島に住みてえならよ、人の家さ穴を開けんよ。」

人の家さ開けんよ、穴を」
すこむアキラだがウェットスーツの尻に

開いた穴、ピラピラしている。
気づいた美晴「ん?」と訝しがる。

アキラ「と、とにかくそれがルールだ。分かったか!」

美晴からドリルを取り上げたアキラ、半ケツで威厳を保ち、カニ歩きで尻が見えないように家の中に向かう。

シゲル、壁の穴に面白そうにひよこひよこ近づき、

シゲル「今日は色んなとこさ穴あくなあ」

美晴、それを聞いて「ふへっ」と笑う。

20 同・庭

母屋と同じ敷地内にある古い納屋の軒下。

アキラ、ウェットスーツの修理をしている。ゴムボンドで器用に尻の穴を塞いでいく。独りこちて、

アキラ「金だよな。金」

視線の先、壁の穴はガムテープで補修されている。

母屋の縁側に座る美晴とシゲル。美晴はアキラの獲ってきた天然ほやを食べながら、ユーチューブを爆音で見て笑っている。

アキラ「金がねえから変な女さ足元見られんだ」

ウェットスーツ、よく見ればボロボロ。お尻部分だけでなく、擦り切れほつれ。腕部分に『寄贈2017復興プロジェクト』の文字。

ボロいスーツを手を大きくため息。
アキラ「これ一着で出稼ぎ10日分だもんな。10日……」

顔を上げたアキラ、縁側の2人を苦々しく見て、

アキラ「シゲル! 変なもん見んな!」

シゲル「変なもんねえよ。美清さん見てんのはユーチューブ!」

アキラ「うっせ! ちゃんと内職やれ! 稼げ!」

シゲル、心残しながら立ち上がる。

アキラ「漫画の締め切りあんじゃねえのかよ」

つぶやいたアキラ、美晴のスマホとほかを交互にみて何か思いつく。

アキラ、興奮を抑えきれず立ち上がる。

21 同・納屋の中

納屋の中のガラクタをあさっていくアキラ。

シゲル「兄ちゃん何してんのや」と不思議そう。

奥から目当てのモノを見つけたアキラ、にんまり。

手にしたのはボロついたはやマンの被り物。

22 同・アキラの部屋

アキラ、畳の上に50万円を並べて勘定。数万円ごとに使い道で分けていく。

アキラの声「シゲル、オイは家売る気はねえ。んでも、いま売らねえっていったらさ」

23 同・執筆部屋

美晴、漫画のネームを切っている。頭をかきむしり、没頭。

アキラの声「あの女は居ねくなる。んでもそ

れだと、ただ50万返すだけだ。家の穴もそのまんまだ」

壁の穴と漫画を描く美晴を交互に睨むアキラ。

督促状の山、カップ麺のアップ。

アキラの声「流された船ば買い直した借金もそのまんま」

シゲルの声「うん」

アキラの声「カップ麺もずうっと1日1個かもしんねえ」

シゲルの声「えっ！」

24 同・庭

アキラの声「やんだべ？ んだからさ、運用すんだよ、頭金を」

シゲルの声「ウンヨ……？」

アキラの声「始めんだよ！ ユーチューブ！」

アキラ、発掘したはやマンの被り物を頭上に掲げる。

隣のシゲルも笑顔で興奮。

25 同・玄関

(#25→30、音楽に乗せた点描。アキラとシゲルの会話が重なる) 宅急便の荷物がいくつも届く。

アキラ、小躍りで受け取り、着払いで金を払う。

シゲルと昼めしを食べながらそれを見ている美晴。

アキラの声「んで、この50万ば、100万、200万、それ以上に育てるわけよ」

シゲルの声「……カネは育たねえでしょ(笑) 野菜でねえもの」

26 同・アキラの部屋

パソコン、カメラ、三脚、マイク、手袋、撮影機材やらが部屋に山積み。

笑みを浮かべるアキラ。

アキラの声「兄ちゃん、少しでも借金減らしてや。家売ったり、島出なくてもいいようにすっから」

27 漁場・船の上

自分の船でワタリガニ漁に出ているアキラ。漁師仲間が引き上げたカゴを開けていく。見事なワタリガニ。

27 A 漁港・堤防

堤防から海を眺めているシゲルの横顔。

シゲルの声「んでも、オ、オイ、島は出たら過呼吸で……過呼吸で……」

シゲル、過呼吸になり、そのまま卒倒する。

アキラの声「大丈夫だ。おめえのパニックわ

かつてっから。シゲルは島から出させね」
シゲルの声「うん、島から出ねえよ絶対エ」

28 阿部家・アキラの部屋（夜）

音楽、OFF。

夜、スケッチしながら寝てしまったアキラ。

美晴、スケッチを勝手に見る。

美晴「なにこれ」

そこには頭がほやの『ほや人間』が描かれている。

29 同・執筆部屋

音楽、ON。

アキラの声「美晴さ、作戦バレねえように言うこと聞いてけよ」

シゲルの声「うん、マンガ手伝う」

美晴、シゲルに漫画のベタ塗りを仕込んでいる。

シゲルに合わせた分かりやすい指示。

笑顔も見え、シゲルも今までにない充実感を覚えている。それに対し複雑な顔のアキラ。

30 同・庭

アキラ、ほやの被り物に色を塗る。その傍ら、あの錆びついていた原付もヒー

ロー風に蘇っている。

その様子を塀向こうから見ている、春子とタツオ。

タツオ、被り物を見て、戸惑いの表情を見せて去る。

（以上で音楽シーン終わり）

× × ×

仕上がる、ほやのマスクとヒーロー衣装。

「よし！ いい感じ！」アキラ顔を上げ

ると、シゲルが庭で洗濯物を干しているいつのまにか、美晴の下着も当たり前のように干している。

アキラ「混ぜんじゃねえよ」

F・O

31 墓地

『阿部家代々乃墓』古い墓。

彼岸の墓参り、Tシャツ姿のアキラ、シゲル。

タツオはワイシャツで、手桶下げて。線香の束を燃して、手を合わせる3人。

タツオ「12年か」

アキラ「12年半だべ」

タツオ「そろそろ出してもいいんじゃないか、兄貴たちの死亡届。見舞金入ったら、船の借金もなんも全部返せっぺや」

不満げに横目でタツオを睨むアキラ。

タツオ「兄貴の真似してほやマン始めるより、

安心すつぺよ」

タツオの妻、周りの墓にも線香を手向けている。

立ち上がるタツオ、妻と一緒に他の墓の手入れを始める。

32 阿部家・風呂（夜）

湯船のフチに空いた発泡酒が並ぶ。

湯に浸かる美晴。

睡魔に襲われ、湯に没しては起きるを繰り返す。

33 タツオの家・居間（夜）

赤い顔で晩酌しているタツオ、発泡酒を飲み干し、

タツオ「ほやマンか……おい、ビール！ あるう？」

妻の声「（台所から）石島商店、品切れだつてよお」

タツオ「まったく誰だ買い占めてんの。島の資源は限りあんだぞ」

首を鳴らしながらタツオ「目星はついてっけだよお」。

タツオ、おもむろにハズクルーペをかけ、タブレットで『高橋ミハル』と検索する。

『人気漫画家・高橋ミハル、アシスタントをバワハラ暴行』の記事がヒット。

スクロールしていくタツオ。

タツオ「なんだこれ。な・ん・だ・これは」
下世話に興奮。発泡酒のしづくまで飲み
ほす。

34 阿部家・脱衣所―居間（夜）

ドタドタドタドタ。

アキラとシゲル、のぼせた美晴を運ぶ。
意識もうろう、裸にバスタオルをかけら
れた美晴。

アキラは上半身、シゲルは足を持つて

シゲル「兄ちゃん！」

アキラ「大丈夫だ死なね！ のぼせただけ
だっ」

シゲル「兄ちゃん」

アキラ「何っ」

シゲル「……おっぱいが見えています」

アキラ「見んって！ 失礼だぞ」

と言いながら、アキラもチラチラ。

35 同・和室（同刻）

美晴、和室の縁側近くに寝かされて、裸
の上に浴衣を掛けられ、シゲルにうちわ
であおがれている。

アキラ「カンベンしてくれよ」

座卓で頭を振るアキラ。

シゲル、うちわで浴衣をめくり、裸を見

ようとしている。やけに真剣な顔。

アキラ「シゲルやめろ！」

努めて横向くアキラ。

美晴、うつすらと目を開け、そんなアキ
ラを見る。

36 春子の家・居間

ミシン針の下、大漁旗の布地が滑る。

爪にマニキュアの塗られたシワシワの手
が器用に動く。

春子、ミシンの前に上機嫌で座っている。

アキラ、その後ろに上半身裸で立つて、

アキラ「春子ちゃんに服作ってもらうの何年
振りだべ」

春子「昔はここの子供の服、ぜんぶ
作ってたもんねえ」

アキラ「全部ってことないでしょ（笑）」

春子笑いながら、机の上のほやマンのス
ケッチをみる。

春子「んでも、これ懐かしいねえ、ほやマン。
島おこしで昔もみんなで手伝ったんだよ」

アキラ「オイ、こういうクリエイティブな映
像とかさ、元々やってみたかったんだよ
ナア」

春子、つぶやくアキラを優しく見る。

春子「あなたの父ちゃんもそったなこと言っ
てたっけ」

アキラ「やっぱそう？ 変な親父だもんな
……（笑）」

庭からタツオの声。

タツオ「アキラ！ アキラいつか！」

声とともに縁側から乗り込んできたタツ
オ、開口一番。

タツオ「アキラ、あの女は人間のクズだぞ」

アキラ、春子、驚いて。

タツオ「高橋ミハル」

アキラ「ああ、んだよ昨日も風呂でのぼせ
て」

タツオ「そういうレベルでねえ」

春子「……どういうレベルなのよ」

タツオ「執行猶予中だ。締め切りどうのなん
て嘘だぞアレ」

沈黙する部屋。

アキラ「……どういうレベルなのよ」

タツオ「……どういうレベルなのよ」

沈黙する部屋。

アキラ「……どういうレベルなのよ」

タツオ「……どういうレベルなのよ」

タツオ「……どういうレベルなのよ」

美晴、執筆机で漫画を描いている。

その後ろ、ちやぶ台でベタ塗りを手伝う
シゲル。

シゲルの丁寧な作業に満足する美晴。

美晴、背を伸ばし一息ついて、ダーツの
矢を手に取り、

美晴「私さ、日本地図にダーツ投げて、刺
さったのが島だったんだよね。東北の
ハワイって（笑）」

美晴「私さ、日本地図にダーツ投げて、刺
さったのが島だったんだよね。東北の
ハワイって（笑）」

美晴「私さ、日本地図にダーツ投げて、刺
さったのが島だったんだよね。東北の
ハワイって（笑）」

美晴「私さ、日本地図にダーツ投げて、刺
さったのが島だったんだよね。東北の
ハワイって（笑）」

美晴「私さ、日本地図にダーツ投げて、刺
さったのが島だったんだよね。東北の
ハワイって（笑）」

美晴、椅子を反転させてダーツを投げようとしてやめる。シゲルの背中に足を乗つけて話を続ける。

美晴「……でも結局、漫画しかないんだ私。今はどこの雑誌にも無視されてるけど」

それでもシゲル、集中したまま。

美晴、棚に積まれた『アブナイ! ねーちゃん』をちりとみて、話し続ける。

美晴「……このさ記念すべき初連載が、震災の年でさ。あの時みんな『絆』とか言って家族とか仲間とか。でも私、そういうの知らないんだ。知ってるのはグーで殴られるかパーで殴られるかぐらいのもんでさ」

美晴、椅子の上でくるくる回って。

壁に貼ったダーツの的に矢を投げる「ヨッ」。

シゲル「イデッ!」

飛んで行った矢、壁に跳ねてシゲルに刺さる。

美晴、大笑いしてシゲルに飛びついて、美晴「ごめんごめん、わざとじゃない。ははっ! 血が(笑) なんだあんなに刺さるかねえ。シゲルは面白いねえ」

シゲル、はじめは痛がっていたが、美晴に抱かれ、頭さすられ、甘えた顔に。

美晴「最初あんなに見た時、私の漫画の実写かと思ったわ。これのモデル、私の弟た

ち」

『帰ってきた! アブナイ! ねーちゃん』の表紙原稿に丸坊主の兄弟の絵。

美晴、シゲルの坊主頭を抱きかかえ振り回す。

38 漁港・船置き場

アキラの声「よいスタート!」

素人ビデオ映像、カチンコがなる。

怪人役のシゲル「フハハハハ!」

島民たち、大根演技で

ヒロイン役のおばちゃん「キヤータスケテー」島のおじさん「たすけてほやマーン!」

アキラの声「カット! おんちゃん、もっと本気が怖がって!」

39 浜辺近くの坂道

シゲルの声「兄ちゃん! ボタン押したよ」

ヒーロー風の原付に乗ったほやマン、マントをはためかせ坂道を下ってくる。全身真っ赤、頭はほやの仮面。

40 浜辺

ほやマンの全身ショット、ポーズ決める。ほやマンのアキラと怪人役のシゲルが戦っている。

蹴り当たる。

シゲル「イデッ!」

シゲル鼻に血が滲み、アキラ声を掛ける。

アキラ「ワリ、大丈夫か」

41 浜辺の防波堤

わちゃわちゃとしたふたりの撮影。

その様子を防波堤から見ている麦わら帽の春子。

少し離れて、美晴も発泡酒を飲みながら見ている。

春子「ああいう被り物? わたしも一回被ってみたいわねえ」

美晴「……麦わらババアにもやりたいことあんのかよ」

春子、一拍間を置いて。

春子「あんた、東京さ居られなくなったのね」

美晴「……(固まる)」

春子「裁判のニュース? 読んだけど、あんたがしてきた苦労は普通じゃねえでは」

美晴、手の甲を噛みはじめる。

春子「金あんなら家はぜひ買ってあげてほしい。んでも、あの子たち、バカ正直で優しいんだから。傷つけたら許さね」

美晴「……親でもないくせに」

美晴、うつむいてつぶやき、噛み跡を見

ている。

そのとき、背後から太い声、

タツオ「いや、金なんてどうでもいいから、出て行ってくれ。島がよこれるわ」

タツオだった。

届いた発泡酒のケースを抱えている。

キレながらゆっくり振り返る美晴。

負けじと睨み、言葉を重ねるタツオ、

タツオ「あなたの育ちじゃワカンねえだろうけど、家族とか愛情って、金じゃ買えねえんですよ先生。あ、元先生か」

美晴「何買おうが、どこ住もうが、私の勝手だろが。脳みそあんのかお前」

タツオ「迷惑だよ。ビール買い占めやがって何が締め切りだ」

美晴「締め切りって、オメエに何がわかんないよー」

キレル美晴、タツオの胸倉をつかむ。

タツオ「オ、オメ、執行猶予中だろっ（怯えて）いいのかよっ」

美晴、発泡酒の缶を振り上げ殴ろうとする。

が、浜辺のシゲル達が目に入り、握った拳を震わせながら躊躇する。

なんとか抑えた美晴、振り上げた発泡酒をタツオのビールケースの上に叩きつける。

バランス崩し、よろよろと座り込むタツオ。

美晴、据わった目でニヤリとタツオを見下し、

美晴「ビールビールって、これ発泡酒だから」

その様子を見ていた春子、美晴に一言、春子「殴ったっていいんだよ。この島、警察いないんだから」

意外な春子の言葉を受け、美晴の瞳に光が差す。

春子「タツオ、言い過ぎだア」

タツオ「んだって……俺だってアイツらのこと」

何も知らないシゲルとアキラ、撮影を続けていた。

42 阿部家・アキラの部屋（夜）

アキラ、カップ麺を食べつつ動画を編集中。

パソコンの編集画面。

「ほやマン！ 変身！」変身ベルト、ピカッと光る。

瞬間的にアキラの頭、同ボジでポンとほやの仮面が変わる。原始的な編集トリック。

アキラ「おもしれえ。いい感じ」

アキラ、「頭↓ほや」のシーンを何度も繰り返し見てひとり興奮している。

ティッシュを鼻に詰めた隣のシゲル、神妙な顔で正座してみている。

背後から美晴の声、蒸しほやを食べながら、

美晴「これって本気？ 冗談？」

アキラ「え。あつ、いや、その……あいだを狙ってる感じ、せ、戦略的に……」

アキラ、しどろもどろ。

美晴「（しみじみと）これ、なんか面白いじゃん。面白い」

アキラ、思いがけず褒められて嬉しさを隠せず。

アキラ「え、あ、ほんと？ なんかさ、あの、なんかクリエイティブ的なアドバイスとかあったら……」

美晴「クリエイティブなアドバイス？（笑）」

いいけど。これは何なの？ 村おこし？ くまモンのなやつ？」

アキラ「くまモンつつうか元々は親父のつくったキャラク……」

美晴の視線を感じ「これ一冊でユーチューバー」という本を、さつとひっくり返すアキラ。

シゲル「うん。オイたち、ユーチューバーさなんだ」

アキラ、シゲルの足を蹴る。

美晴「へえ……」

シゲル「んで、金いっぺえ育てんだ（満面の笑み）」

美晴、状況を反芻して理解して、

美晴「あー、金稼いでー、私追い出すつもりか」

パソコンの編集画面「ほやの一生」のイラストが映し出され「ほやは脳みそがなくなり、ずっとそこに住み続けるのだ！」とアキラのナレーションが繰り返される。

それを聞きながら美晴、ギロリと笑って、美晴「いまさら田舎のカップメン漁師がユーチューバーって何周遅れだよ。脳みそなくなつて島にしがみついてんのは、ほやじゃなくてアンタじゃん」

般若のように歪んだ顔で笑う美晴。

アキラ「オメエさ何がわかんんだよ。この島で生きていこうと思つたら、オイにはこれしかねえんだよ。このバカは島出ねえし、オイが一生面倒みねえいけねえんだ」

シゲルの顔には笑顔が張付いている。

美晴「意味わかんない。てか、あんた50万使い切つたでしょ」

アキラ「……」

美晴「家族の絆ってスッゴイデスネー」

去っていく美晴、と思いきや、反転。

アキラの座っている椅子を思い切り蹴り飛ばす。

吹っ飛ぶアキラ。ガシャーン！

43 漁港〈実景〉

島の日常。

スクールボートに乗り込む、島の子供たち2、3人。

44 阿部家・居間

家にひとり残る美晴、飾り棚の前。

アキラたち家族の写真立てを手に取る。ちよつとおちゃらけた父・栄一（47）、優しそうな母・英恵（47）。幼いアキラ（12）シゲル（4）写真立てを裏返すと、古い新聞記事の切り抜きが金具に挟まっている。

開いてみると「沖出しで行方不明」多部島の夫婦▽5年まだ見つからず」との見出し。

無言で新聞を見つめる美晴。

45 海底〈イメージ〉

海底を進んでいくカメラ。

天然のほやがゴロゴロと自生している。たくさんさんの数。

衣類の切れ端も漂っている。

被災者のインタビュ音声为重なる。

女性M「震災後しばらくは海のもんは食えなくてねえ。やつぱまだ、見つかつてねえ人もいたし」

男性M「海の底の貝類とか、天然のホヤとかね。よく育つたって聞くと辛かつたよ」

春子M「あの子たちは、両親ともまだ見つからないから。バカ正直っていうか優しいから、未だに海のもんは食えねって」

46 阿部家・居間〈回想〉

シゲルとアキラ、笑顔でカップ麺をすすっている。

47 同・居間

#44に戻つて。

棚の前の美晴、無言で写真を元の場所に戻す。

48 同・アキラの部屋

興奮したアキラとシゲルの顔。

アキラとシゲル「3、2、1！ 公開！」

アキラ、マウスをクリックする。

ピコッと音がして、ユーチューブに動画

『多部島！ ほやマン誕生』が公開される。

アキラ「はい、公開されました」

もつとすごいことが起こると思っていた

シゲル、拍子抜けして、

シゲル「あ、あとは？」

アキラ「あとは、待つ」

シゲル「うん……（数秒待つて）……もういい？」

アキラ「いや（笑）1週間くれえはかかると思うよ」

シゲル「……うん。すげえ」

シゲル、PCの前に座り続ける。

増えていくカップラーメンの空き容器。

じつと再生回数の表示を見続ける。

× × ×

シゲル「アキラ兄！ 1になった！」

アキラ「おお！ よっし！（ガッツポーズ）」

T 翌日

シゲル「アキラ兄！ 3！」

アキラ「うん、まずはこんなもんだ！（腕組み）」

T 3日目

シゲル「アキラ兄！ 6！」

アキラ「あゝまだ6回か（カップ麺食べながら）」

T 4日目

シゲル「アキラ兄！ 10！」

アキラ「……おお（変身ベルトを持ちなが

ら）」

T 5日目

シゲル「アキラ兄！ 11！」

アキラ「……うん（背中を向けてうなだれて）」

T 6日目

シゲル「13！」

アキラ「シゲル……もういいよ、ありがとな」

アキラ、シゲルの肩に手を置いてうなだれる。

その様子を見ていた美晴、スマホを取り出して操作し始め、逡巡したのち心を決めて、タップする。

T 7日目

シゲル「アキラ兄！」

アキラ「シゲル、もういいって。仕事いくぞ」

シゲル「7382！」

アキラ「え!？」

シゲル「7395！」

アキラ「え!!」

シゲル「7452！」

アキラ「うお！ スゲエどんどん伸びてる」

シゲル「7749！ 7811！

8081！」

抱き合うアキラとシゲル。

不機嫌を装う美晴だが、口元に笑みが浮かぶ。

手元のスマホには美晴のツイッター画面『これおもしろい』美晴がつぶやいた、ほやマン動画の紹介ツイート、ファン達が数千リツイートしている。

49 阿部家・門前の道

何も知らないアキラ、シゲル、集落の中を飛び跳ねて、みんなに大声で報告する。

50 春子の家・太広間（夜）

春子の家・太広間で祝勝会。

ウニ、アワビ、ワタリガニ、刺身など海の幸が並ぶ。

アキラ、シゲルはもちろん、春子、タツオ、ビデオの出演者、島氏。みんな集まって、14、5名。

なぜかタツオが皆の前でマイクを握りスピーチ。

その隣に、仮面を脇に抱えた、ほやマン姿のアキラ。

タツオ「えーこのたび、私の甥である、このアキラ君がユーチューバーとして10万再生達成いたしました。震災から12年、苦労ばかりでしたが、私の兄・栄二が島おこしのために生み出したほやマンをこのように魅ら

せ、多部島の魅力を、せ、世界に伝えられ、
ば、万感の思いであります」

感極まって、マイクをアキラに突き渡す
タツオ。

島民たち「ガンバレ」

アキラ「ここからが大事なんで！ 撮りため
てある、第2弾、第3弾、どんどん出して
ほやマンちゃんねる、育てていきます！
で、あのバカ漫画家、追い出します！」

島民たち「さすが栄二の息子だ！」

やんやの大喝采。

アキラ「父ちゃんに乾杯！」

アキラの威勢のいい掛け声に盛り上がる
宴会。

注がれたビールを飲み干すアキラ。

大騒ぎの中、海の幸を見て生唾を飲み込
むシゲル。

50 A 春子の家・外観（同刻）

暗闇に浮かんだ春子の家の大広間、煌々
としている。

島の夜、にぎやかな宴の音が響いて。

51 漁港・堤防（同刻）

宴の騒ぎを嫌った美晴、ひとり夜の堤防
で発泡酒の缶を飲み干す。

美晴「影響力、まだあるんだね私。あゝあ」

自嘲気味に笑った美晴、寝つ転がりスマ
ホを眺める。

「ん？」画面を見た美晴、異変に気づく。
美晴「つたく、クソアンチが」

52 阿部家・アキラの部屋（数日後）

PCの前のアキラとシゲル。

アキラ、狼狽している。

アキラ「何やこれ……！ どうやって消せば
いいのや？」

53 集落の路地1

漁協帰りのアキラ、カゴで頭を隠して、
なぜかコソコソ歩く。が、道端で島の人

に声かけられ、

島民A「ほやマン！ ユーチューブどうだ？」
アキラ「ひきつった笑顔」バツチグー！」

54 集落の路地2

誰にも見つからないよう、堀沿いに歩い
ても、

島民B「ほやマン！ 人気出てつか？」

アキラ「ひきつって」おかげさんで！」

55 阿部家・門前の道

家の前までようやく帰ってこられたと
思ったら、「おい、アキラ」と太い声。

ビクツと振り返るとタツオ。
タツオ「島の恥さらすんでねえ！ 動画さつ
さと消せ！」

アキラ「……え？ おんちゃん何？」

タツオ「シラきんな！ 俺らのほやマンが大
炎上じゃねえか！」

タツオ、アキラの鼻先にタブレットを突
きつける。

するとそこには「暴力漫画家・高橋ミハ
ルがリツイート！ 障害者いじめのユー
チューバー大炎上」の文字とともに、怪
人に扮したシゲルを蹴り飛ばすほやマン
の画像。

アキラ「こ、これ違うんだって！ オイのせ
いでねえんだって。たぶん、あのバカ漫画
家のせいで……」
タツオ「そのバカ漫画家にもらった頭金オ
メエいくら突っ込んだ」

アキラ「……つかシゲルは障害者とかじゃ
ねえし」

タツオ「カアッ！ 島の外ではそうは取ら
ねえよ。シゲル、石巻の避難所で騒ぎま
くってぶつ倒れてよ。あれ以来、船にも乗
れねえでねえか」

アキラ「……んだからオイがユーチューブで
……」

タツオ「ユーチューバーさなる前に一丁前の

漁師になるのが先だろが！ ほでなすが！」
頭を振り、立ち去るタツオ。

アキラ「炎上ってバカした……動画なんか作ってバカした……」

その一部始終を見ていた美晴、家の中から顔を覗かせる。後悔の滲んだ、冷めた目で。

56 灯台・東屋（夕）

夕方の灯台、島の突端。東屋がある。海が眼下に広がって。繰り返し打ち付ける波。

あたりはにわかには暗くなる。

東屋の脇に、ヒーロー風原付。

アキラ、目を開けたままベンチに横たわり、呼吸を震わせている。波の音に混じり、震災時の冲出しの際の混乱の音が幻聴として聞こえる。

アキラ、頭を振り大きく息をついて起き上がり、

アキラ「ケジメの付けどきだな……」

日没。雨が原付を濡らし始める。

57 阿部家・執筆部屋（夜）

窓の外、母屋の軒下にぶら下がったままの『ほやマン』の衣装が風雨にさらさぶ。

美晴、完成間近の原稿を眺めながら、

美晴「傑作だろ。ふざけた奴らみんな、全員後悔させてやる」

そう言つて、真っ赤なほやにむしゃぶりとく。

さらに激しくなる雨の音。

美晴のスマホから音楽が流れている。

美晴「ベタ塗りかなり上手くなってんねシゲル」

付箋のついた原稿、美晴の指示が入っている。

シゲル、いつものように正座している。

その視線の先には美晴の食べるほや。

美晴「……シゲルさあ、ほやマン炎上しちゃったけどさ、私のアシスタントやれよ。一緒に島残つてさ」

シゲル、思い詰めた表情で黙っている。

美晴「不安げに」なんか言つてよ」

シゲル、すくくと立ち上がる。

美晴「いや、あれはアンチが勝手にウン書いて」

シゲル、なにか言いかけて言い淀む。

美晴「シゲル……どうした」

シゲル、恐る恐る、

シゲル「……オイ……オイ、もう我慢すんのやんだ。食いてえよ。オイだつて海のもの食いてえ」

美晴「……兄ちゃんにいいか聞かなくていい

の？」

シゲル「聞かぬ。聞かぬ」

過呼吸気味のシゲルに、美晴が近づいていく。

美晴、シゲルを抱きしめ、背をさする。

一緒にゆつくりと呼吸をし、徐々に息を抑えていく。

美晴、シゲルの顔を見つめて、

美晴「欲しいもんはどんなに怖くても、言葉にしないと手に入らんんだよね」

音楽、大きくなる。

窓の外では、ほやマンの衣装、雨に打たれている。

雨が屋根を猛打する。

ドドドドドド。

58 灯台からの帰り道（同刻）

ドドドドドド。

夜道、原付が爆音で土砂降りの雨を割って疾走する。

運転するアキラ、必死。

口元を見ると、何かつぶやいている。

アキラM「美晴さんすみませんでした50万は借金して返します。美晴さんすみませんでした50万は借金して返します。シゲルは島から出れません。この話はなかつたことに。シゲルは島から出れません。この話は

……」

59 阿部家・裏門―庭（同刻）

土砂降りの中、家にたどり着いたアキラ。近くまで来て、家の異変に気付く。庭に回って、中を覗く。暗い部屋、人の影が動いているがよく見えない。

アキラ、外壁に近づく。外壁に貼られたガムテープをめくる。すると出てくる、例の壁の穴。穴から中をのぞくアキラ。

60 同・執筆部屋（同刻）

穴の向こう。薄暗い部屋の中。大きく口を開けてうまさうにはやを食べるシゲル。その様子を優しい眼差しで見ている美晴。

61 同・庭（同刻）

アキラの顔が、驚いたのち苦悶に歪む。アキラ「アイツ……なんで食って……食ってんだよ」

雨に打たれながら立ち尽くすアキラ。

61 A 同・門前の街灯

雨止んで。街灯のフードから、雨の滴が

落ちる。

62 同・和室（少し経って）

縁側の美晴とシゲル、外を見ながら。美晴「あなたの兄ちゃん、バカだよ。家守とか、シゲル守るとか、人のことばつか言って」

シゲル「……うん……でもオイのせいかな」
美晴「……」

シゲル「オイ、アタマ足りてねえんだ。マジで。みんなと同じにできねんだ。何したってメイワクさなつから、海さも出らいねえ（笑）オイだって一人前になってえよ」

美晴、ダーツの矢を見つめて、

美晴「何したいのか分かってないのは私だ」

63 同・庭（翌・早朝）

朝もやがたれ込める島の早朝。

阿部家の庭から、煙が立ちのぼる。

アキラが写真や書類を燃やしている。

ドラム缶から炎が上がる。

段ボール箱には仲間たちの写真。家族の写真。

30年分の思い出たち。

アキラ、無表情で燃やし続ける。

64 同・和室（同刻）

美晴、庭の様子に気づいて目覚める。シゲルも燃えた臭いで目が覚める。

65 同・庭（同刻）

庭先に出て言葉をなくす、美晴とシゲル。背を向けたアキラ、ふたりを見ずにつぶやく、

アキラ「オイ、あんたに家売るわ。島出てさ、1000万で新しい人生はじめるわ。おめえらふたりで暮らせ。許す」

アキラ、炎の向こうで揺らめいている。

美晴、動揺しつつ、

美晴「いや許すって、なんなの」

アキラ「炎上させたことも。シゲルさ、海のもん食わせたことも許すわ」

美晴、外壁のガムテープが剥がれて、穴が露わになっていることに気づく。

美晴「……」

アキラ「つうか、あんた家族が欲しいんでしょ。やるよ。マジで大変だよ」

美晴「は？（怒り沸騰して）はあつ!？」

シゲル、場違いに明るく、

シゲル「アキラ兄ちゃん!」

アキラ「あ?」

シゲル「オイ、実は兄ちゃんのためにや、海のもん食うの、ずっとガマンしてたんだ!」

アキラ、目の色が変わる。

アキラ「なにがガマンだ。オイはオメエのためこの12年半、いや、オメエが生まれた時からずっとガマンしてんだよ！」

困って、つい手の匂いを嗅ぐシゲル。

アキラ「なんだその顔。何もできねえガキが」

アキラ、段ボール箱を逆さにして、まるごとドラム缶に突っ込む。

美晴、何も言えず、シゲルも言葉がない。アキラ「こんな島で終わりたくなかったんだ。忘れてたわ」

去っていくアキラ。

燃え続けるドラム缶から落ちた阿部家の家族写真。

父、母、アキラ、頭を傾けた幼いシゲル。美晴「なんでこうなつかなあ……またバラバラだよ」

美晴、写真を拾い上げ、じっと見る。

66 小さな涙

アキラの筋肉質な背中。

全裸で岩の上に立つアキラ。

子供のように海へ飛び込む。

跳ねた海水がキラキラと輝く。

67 春子の家・台所―客間（夜）

春子の握ったおにぎり、塩むすび。

もぐもぐと食らうアキラ、いくぶん明るい顔。

春子、客間に布団を敷いている。

春子「アッキー、いよいよ島出るのかあ」

アキラ「あ、布団、オイやっから」

アキラ、おにぎり片手に立ち上がり、客間へ。

空いた手で春子を手伝い、布団敷く。

春子「シゲルが懐くってエ、えらいよ。美晴ちゃんもそう悪い人でないよ。心配なら週末帰ってきたらいいんだし」

思うところあるアキラだが、スルーして「うおーっ」と叫んで、布団にでんぐり返して寝転ぶ。

春子も笑って、布団に横になる。

薄暗い客間に、居間のあかりが差しこむ。並んで天井見ながら、

アキラ「島出るって決めたなら、なんか急に気持ち軽くなつてさ」

春子「わかるウ。私もサア、若い頃、ずっと外で暮らしてみたかったもの」

春子の戸棚には、ミセスファッション誌が並ぶ。

春子「……暮らしたかったなあ」

と言って春子、手をかざし自分の赤い爪を見る。

その向こう、長押に並ぶ無表情の古い遺

影たち。

アキラ、大の字になって目をつぶる。

春子、秘密を打ち明けて、

春子「他の人さはい言えない話だけど」

アキラ「うん」

春子「震災が来てね。ダメになった時にね。やつと島から出られるって。ようやく出られるって私、思ったの」

アキラ「……うん」

アキラ、目をつぶったままで。

暗がりの中、春子の話、つづいて、

春子「んでも出ちゃいけねえって思った。んだって、あんたの父ちゃん、栄一。昔、あの子に『島出たいんだ』って相談された時

おもしろいし反対したんだ私。許せなかった。自分ばっかずるいって思ってしまった」

× × ×
〈インサート・＃1と同じ古いVHSの映像〉

ほやマンの仮面を脱ぐ栄一（30）の笑顔。

× × ×
春子、目をつぶって、震えるように呼吸する。

そして、認めたくないことを言う。

春子「私の人生失敗なんだ。やりてえことやんねかった」

暗がりの中の春子の麦わら帽。

アキラ、そつと隣の春子の手を握る。

アキラ「オイは、オイ達は、春子ちゃんいてくれて助かったよ」

68 黒い画面（12年半前の震災時）

映像はなく、黒い画面。

音声・効果音のみで表現。

ゴゴゴと地鳴り。家財が割れ、崩れる音。

栄二「アキラ、冲出しすつぞ！ 急げ！」

アキラ「父ちゃん！ いま船でしたら死んでしまふ！」

栄二「時間ねえぞ！ 逃げんじゃねえ！ アキラ行くぞ！」

アキラ「ダメだ！ 父ちゃん！ 死ぬつて！」

栄二「バカつこの！ ビビんな！ 家も取られて、船もなくなつたら島で暮らしていけねえべ！」

アキラ「ダメだ！ オイ、オイ、怖えよ！」

栄二「アキラ！ それでも阿部家の男か！」

英恵「アンタ！ わたし、行くから！ アキラ！ オメエはシゲルば連れて山さ行け！ 絶対エ助かれ！」

アキラ「母ちゃん?!」

英恵「シゲルだけは頼んだよ、最後まで頼んだよ」

アキラ「母ちゃん?!」

栄二「英恵！ 時間ねえ！ 急げ！」

両親がドタドタと外へ飛び出していく音。幼いシゲル、激しく泣いて。

シゲル「とうちゃんかあちゃん。行かないでーダメーあー！」（急に声が低くなって、別人のような声で）父ちゃん母ちゃん死んだらアキラ兄ちゃんのせいだからな」

数フレーム、津波の映像がちらつく。

大勢の死者の声「お前が引き留めたせいだからな」

緊急津波警報、サイレンが鳴り響く。

69 春子の家・客間（夜）

布団の上のアキラ、激しい呼吸がとまらない。

アキラ「こつたな夢も、島出るまでだ……」

上体を起こして、ひとり息を整える。

70 阿部家・執筆部屋（同刻）

美晴、壁に寄りかかつて。

ダーツの矢をいじりながら。

アキラ同様、ひとり眠れずにいる。

71 同・玄関（数日後）

「こんにちは〜」

玄関ドアをノックするスーツの男。

その様子を遠くから伺っている島の住人2、3人。

72 同・居間

居間の座卓に、アキラ、美晴、シゲル。そして不動産仲介業者・中田。

机の上に広げられたチラシ裏の覚書き。中田「こちら、だいぶラフですが、覚書きの要件満たしておりますので、効力ありますね。ただ次回からは、私どもプロにお任せくださいね」

美晴「本題入って」

下を向いたまま、トゲのある美晴。

アキラ、無理に心の整理をつけてフラットに会話。

アキラ「わざわざ島まで来てもらつて（頭下げる）。今日はもうサインと実印だけつすよね」

美晴の隣のシゲルは正座。

美晴、酒に焼けた声でアキラに、

美晴「あんたさ、本当にこれでいいの？」

アキラ「……もう石巻で仕事も探してつから」

シゲル「兄ちゃん」

美晴「私さ、考えたんだけど、あんたもさ、あんたも島出ないで一緒に暮らしてみたらどうかと思つて……」

センチメンタルな雰囲気。

中田が軽い調子で割って入って、

中田「あのくちよっと、取り込み中すみません。物件のことなんです」

美晴「わかってるって！」

中田「いや、そうじゃなくて、あの、今日、契約書つくってないんですよ」

アキラ「え」

美晴「……なんで」

中田「正確には、つくれないんです」

一同、ぼかんとして。

中田、面白い秘密を打ち明けるように、

中田「あの実はこちらの土地の権利者、調べましたら、アキラさん、阿部アキラさんではなかったんですよ」

アキラ「ああ。それは……まだ親父の死亡届出してないから、相続できてな……」

中田「いやいや、そういうことでもなくて、

お父様の名義でもないんですよ」

アキラ「(狼狽) え? どういうこと」

中田「現在、こちらの土地は、仙台市にお住まいの方の名義になってます。実はこの物件、2011年の2月に抵当権行使されて競売に出されてるんですよ。いわゆる借金のカタですね。それで仙台の方が落札されたんですが、まあその後すぐ震災で。それでか、なぜか(笑) 今そのまま、みなさ

ん住んでらして」

アキラ、豆鉄砲食らった顔で。

アキラ「……じゃあ家売ってもオイに金は入らないって事ですか」

中田「ま、ざっくり言えばそうですね」

アキラ、あきれて、

アキラ「あんたも人悪いよ、それわかった時に電話でもなんでもくれたらいいべや」

中田、ひょうひょうと、

中田「あ、でも。先生。高橋先生、どうします? 実は権利者にはもう連絡とれてまして、この金額でぜひ売りたいと言ったんですよ……(笑顔)」

美晴「ハハ、それが狙いかよ、千三つ屋が悪いくけど、今日は一旦帰って(立ち上がる)」

中田「あ、でも私せっかく島まで来たので!」

美晴「帰れつつってんだろ」

美晴、座草をガツンと蹴り飛ばす。

麦茶こぼれ、空気凍る。

中田、慌てて荷物を抱えて立ち上がり、

中田「きよ、今日は一旦帰りますけど、っていうか、ここ住んでちゃ普通にまずいですからね」

73 同・玄関

中田「不法占拠つつうんだよ、バカども」

捨て台詞を吐いて玄関から飛び出ていく中田。

その様子を伺っていた島の住人2、3人。『不法占拠』という言葉に反応している。

74 同・居間

お茶や書類が散乱した部屋。

アキラ、美晴、所在無く立っている。

美晴、「あのさ」と口を開こうとするとアキラ、

アキラ「ちよっと何も言わねえで、まだ整理できてねえから」

しばらく間をとって、なんども1人でうなずいて、

アキラ「なるほどな。なるほど。うん、わかった」

美晴「(食い気味に) わかってないから」

シゲル、困って頭をかく。

美晴「わたし今、心の中で大爆笑してるから

だって、あんたが今まで大事にしてきたもの、全っ然、自分のものじゃなかったじゃん」

意外にも美晴、目に光るもの。

アキラ「出直すわ、シゲル、またな」

肩を落として玄関へ向かうアキラの背中に美晴、

美晴「……私さ、多分どっか終わってんだ

よ」

玄関のアキラ、立ち止まり、背中で聞いている。

美晴、言葉を続けて、

美晴「うまくいかないのも、もうよく分かっている。だけど、だけどさ。私、あんだ達と暮らして、はじめてもう少しだけ人ちゃんと関われる人間になりたいって、思ったんだ」

玄関の飾り棚の上に、焼け残った家族写真が置かれている。あの日の朝の写真である。

美晴「だって誰かをこんな、12年、半も……」

飾られた家族写真に気づき、心が揺れるアキラ。

だが、怒りはとめられず、

アキラ「（振り返って） んだからそれをオメエが無茶苦茶にぶっ壊したんだろが、何言ってるんだよ、マジで」

アキラ、写真をグシャッと握り、玄関を出る。

美晴、アキラを追って外に出る。

75 道

美晴「ちよっと、ちよっと待ってよ。待ってー！」

先をゆくアキラに追いつく美晴。

並んで急足のふたり。行くあてもないが先を急ぐ。

美晴「もう十分だよ。毎晩うなされて。カップ麺ばっか食って。いい加減認めなよ、あんだの父ちゃんと母ちゃんは……」

アキラ「それ以上言うな、オメエが言っていることじゃねえ」

美晴「いや言うよ、あんだこのままじゃダメになる」

アキラ「ダメになって何が悪いんだ」

美晴「あんだがダメになること誰も望んでないから。タツオさんも、春子さんも、シゲルも、島の誰も望んでないから」

アキラ「島出たらもう関係ねえ」

美晴「だったら死んだ人も、帰ってこない人も関係ないっていうの」

足を止めてアキラ、美晴の胸ぐらを掴む。

美晴「殴んなよ、グーでもパーでも、全部ぶつくなよ！」

アキラ、左手を振りかぶり美晴を殴ろうとするが、殴れず、自分の頬を強く打つ。

それを見た美晴、同じように自分の頬を打つ。

美晴「あんだの痛みは、あんだのもんだけじゃないんだよ」

しばし見つめあった後、アキラ去る。

美晴、荒い息でその場に残る。

76 阿部家・庭（夕）

ほやマンの仮面が転がっている。

77 同・和室（夕）

家に1人残されたシゲル、床の間の前に座る。

床の間に置かれた金の入った紙袋を見つめる。

78 灯台までの道（夕）

ドタドタと紙袋を抱えて走るシゲル。汗が飛ぶ。

シゲル「オイだつて！ オイだつて！ できんだ！ 一人前だ！」

79 灯台（夕）

息せきながら灯台まできたシゲル。シゲル「アキラ兄ちゃん！ 金エーっ！」

しかし、そこには誰もいない。

当てが外れたシゲル。混乱しつつも、踵を返して駆けていく。金がひと束、袋から落ちる。

80

阿部家・門前の道（夕）

とぼとと歩く美晴。

その時「兄ちゃん」と遠くにシゲルの叫ぶ声が聞こえる。気になって振り返ると、そこには掃き掃除に出ていた春子の姿があった。

美晴「……シゲル、どっちに行つた？」

春子、浜の方を見やる。

美晴も、春子の視線を追つて浜の方を見る。

シゲルの駆けていく後ろ姿が、かすかに見える。

春子、口をひらく、

春子「あんたは確かに無茶苦茶だ。理屈に合わねえ。んでも、シゲルのあんな必死な顔はじめて見たよ私」

美晴、遠くを見ながら春子の言葉を聞いている。

春子、美晴をちらと見て、

春子「あんたさ言つておきたいんだけど」

美晴「……（春子を見る）」

春子「私、この秋にね、やろつこ達の住んでる石巻さ越すんだ。ホームさ入るんだと」

美晴「それって……」

春子「ふたりさはまだ言つてねえの」

しばしの沈黙、美晴、思い切つて聞く。

美晴「……春子……さんつてさ、この島に生まれてよかつた？」

春子「笑顔で睨んで」あんたみたいに強い

人はさ、居場所探すより、誰かの居場所に
なるほうが性に合つてんのさ」

美晴「……」

春子「私はどっちでもねえから、ここで生まれてよかつたつて思い込むしかねえの」

そう言つて春子、手にした箒で美晴の尻を叩く。

美晴「いったつ！」

春子「ババアだつて悩みながら生きてんだ。そつたなこゝと聞くもんでね」

美晴「……（悪かつたね）……」

春子「ほら、もうバトントッチ！ 行けつて」

美晴、言葉を噛みしめ、浜に向かって歩き出す。

81 浜辺（日没）

日の暮れた浜辺。

砂浜にはんやりと座り込むアキラ。

息も絶え絶えに駆けてきたシゲル、浜を見渡しアキラを見つめる。

シゲル「兄ちゃん！ アキラ兄ちゃん！」

よたよたとアキラの背に近づくシゲル。

アキラ、胸拔けた顔で振り返る。

シゲル「アキラ兄イ、金だよ。育てなくても金いっぺえある」

アキラ、力なく立ち上がる。

シゲル、紙袋から札束を出しアキラに押し付ける。

アキラ、困惑して、

アキラ「シゲルやめろ。やめろつて！」

アキラが身をかわすと、シゲル、バランスを失う。

が、すぐに再びアキラに札束を押し付ける。

シゲル「好きに暮らしてける、本当のハワイさ行けつべ」

アキラ「やめろつて！」

アキラ、シゲルを突き飛ばす。

吹き飛び、散らばる札束。

アキラ「もうオイ、振り回されたくねえんだつて」

シゲル「……んだから兄ちゃん、金」

アキラ「島だとか、津波だとか、借金だとか、家族だとか、振り回されんの……疲れたわ。オイはもう、自分のやりてえことだけやるよ」

それでもシゲル、立ち上がつて金を突きつける。

札束はもみくちゃになっている。

シゲル「やりてえこと？ 何すや？ 何すや？」

兄ちゃんのやりてえことつて何なの？ ほやマンは違げえの？」

答えられないアキラ。

シゲル「兄ちゃんっ……?」

暗闇の浜辺、絶望した目のアキラ、焦点を失って。

その時……。

ぐらりと地面が揺れ、地震が起きる。

激しい揺れに立てなくなるアキラ。

津波警報のサイレンが島中に響き渡る。

アキラ「シゲル、デカイぞ! 地震だッ!」

アキラ、パニックになる。

一方、シゲル、状況を掴めない。

シゲル「地震ってなにや? 何も揺れてねえよ」

アキラ「アホ! サイレンなってるべ!」

シゲル「……あ、冗談?(笑) え?」

アキラ「(狂乱して) 避難するぞ! シゲル!」

シゲル「兄ちゃん! 兄ちゃん!」

地震は、アキラの幻想の地震である。

シゲルを引きずり、避難しようとするアキラ。

その時、父・栄二の声がアキラの脳裏に響く。

栄二の声「アキラ、逃げ、船出さぞ! 沖出しするぞ! 逃げんじゃねえ!」

アキラ「(自分の頬を張り) ——もう逃げねえ」

アキラ、決意してシゲルの肩を掴む。

アキラ「シゲル、兄ちゃんは沖出しする。船守んなきゃ、家族は生きていけねえ」

シゲル「何や? ダメだ兄ちゃん! お…沖出し…ダメだ……」

シゲル「沖出し」という言葉に瞬間的に反応する。

過呼吸の発作がはじまる。

アキラ「シゲル! 美晴は連れて山さ行け! 絶対エ助かれ!」

あの日の父や母のように叫ぶアキラ。

それでも止めるシゲル。

シゲル「沖出しダメだ…父ちゃんも母ち…やんも、みんなも、帰って来…ねかった……」

激しい過呼吸。アキラに組みつき懇願するシゲル。

その時、浜まで追ってきた美晴の声。

美晴「シゲル離せ! 止めんな! アキラには必要なんだ!」

アキラ「……! (美晴に気づく)」

美晴、二歩、三歩近づきながら言葉を続ける。

美晴「いいんだって。理屈に合わなくたって! 無茶苦茶だって、そういうことが必要なんだから、ウチらには」

美晴、シゲルをアキラから引き剥がす。

美晴「行け、アキラ。誰がなんと言おうと、

今があの日だ!」

アキラ「美晴、シゲル、絶対エ、助かれよ」

アキラ、堤防へ駆け出し、闇に消えていく。

美晴、シゲルを抱きとめながら、金の入っていた紙袋をシゲルの口に当て、過呼吸の手当てをする。

81 A 漁港・堤防(夜)

アキラ、船に乗り込み、救命胴衣を素早く羽織る。

暗闇の中、船は沖へ向けて走り出す。

82 海・沖へ向かう船(夜)

漆黒の海を沖へ走る船。

猛烈なエンジン音を響かせて疾走していく。

アキラは本当の津波が来ていると信じ込んでいる。

走って、走って、走って。

鳥影もはるか闇に消えたころ。

サイレンは聞こえなくなり、波音もエンジン音も聞こえなくなる。

無音の中を突き進むアキラの船。

× × ×

(擬似夜景▽一部、アニメーションで表現▽)

幻想の色が濃くなる。

その時、一艘の船が音もなく近づき、アキラの船に並走する。

操縦しているのは、あの日、海に消えた父と母。

父は、津波に向かって突き進んでいく。

父の声「いいかアキラ！ 津波にはまっすぐにまっすぐに向かわねえとやられんだ。横腹に喰らわねえよう、まっすぐ行け」

アキラ、両親に声の限り叫ぶ。

アキラ「父ちゃん！ 母ちゃん！ どこにいのや？ オイのせいで、オイがビビったせいで、冲出し、遅れさせてしまった！ 父ちゃん母ちゃん死なせたのオイのせいだ！ 悪かったア——」

父と母は、アキラを見ず、船を走らせ続ける。

アキラ「父ちゃん！ 母ちゃん！」

両親の船が闇の中へと消えていく。

しかし最後、母だけが振りかえり、目で訴える。

母の声「ずっと海で生きてきたんだもの私たち……海さ還ることもあるべっちゃ」

両親の船が闇に消えていく。

アキラ「父ちゃん、母ちゃん、みんな！ オイはどこさも行きたくねえよ！ オイは、またみんな、ここで暮らしてがっただけ

だ！」

思いの丈を叫んだアキラに生きる力が湧いてくる。

腹を決めたアキラ、さらにエンジンをふかし、そり立つ巨大な黒い壁のような津波に立ち向かう。

波に対してあまりにも小さな船。

しかし、船はひるむことなく、まっすぐ進む。

アキラの白い船影、真正面から黒い壁を駆け上がり、そして波の頂上へ。

瞬間、波頭が崩れ、黒い壁は轟きながら、全体を崩壊させていく。

砕けた黒い波、迫り来て、画面を覆いつくす。

はげしい波の音が響き渡る。

のち、静寂。

84 海・沖（夜明け）

明けていく空。

船の上で、胎児のように眠るアキラ。

ふと目を覚まし、眩しそうに日の出を見る。

視線の先、遙か遠く。

朝日の中、クジラが勢いよく潮を吹いている。

キラキラと輝く潮、クジラの息吹が響き

わたる。

その時、ひとつのほやが船に流れ着く。アキラ、ほやを拾い上げる。

じっとほやを見つめる。

船のナイフでほやをさばいて、身をむき出す。

緊張の面持ちでひとくち食べる。

ゆっくりと噛みしめて、

字幕「食ったら、全部、忘れてしまうと思つてた」

夢中でほやにむしゃぶりつくアキラ。

船の周りには、流されてきた大小様々な無数のほやが、いつのまにかフカフカと浮かんでいる。

字幕「みんな、ずっとここさ居たのに。氣づ

かなくて、悪イかったなや」

ほやに囲まれた船の上で、アキラ、肩を震わす。

85 同・沖（数十分後）

ドドドドドド。

波をかき分け、一艘の漁船がくる。

顔を上げ、立ち上がるアキラ。

船はアキラの船の隣にピタリとつける。

運転席から姿を現したのはタツオ。

タツオ「アキラ！（言葉が続かない）」

アキラの船に飛び移るタツオ。

船が揺れるのにもかまわず、無言のまま、のしのしとアキラに近づく。

身構えるアキラ。

タツオ、気持ちを抑えきれず、そのままアキラを力強く抱きしめる。

タツオ「バカこの、何が津波だ。夢でも見てんのか」

タツオ、むせび泣く。

アキラ、無言で抱かれている。

87 浜辺―堤防 朝

浜に座る美晴とシゲル。

泣き明かしたシゲル、美晴に抱かれ眠っている。

ドッドドッド

船外機の音に気づき、美晴、顔を上げる。アキラとタツオの船が港に戻ってくる。

シゲルも目を覚まし、船を見つけて起き上がる。

シゲル「ハハッ！ 兄ちゃん！ 兄ちゃん！ 帰ってきた！ 一人前だ一人前だー！」

船が接岸し、たくさんのほやを網袋にぶら下げて、アキラが堤防に下りる。

シゲル、子犬のようにアキラに駆け寄る。アキラ、美晴に近づき、照れたような笑顔を见せる。

そしてはやのつまった網袋を美晴に差し出して、

アキラ「これ、さつき沖で」

だまってアキラを見つめる美晴。

アキラ「最近、海さ潜るとさ、あんたのことが頭に浮かぶんだ……あ、でつけえホヤだ。美晴さん喜ぶべなとか」

美晴「……」

アキラ「んでも、それでみんなさ申し訳ねえような気持ちには、なんねんだ……分かったな」

朝日を受けた美晴、決意した顔で、

美晴「……私、家買うの、やめた。頭金も忘れるから」

アキラ「……美晴さん、炎上したのアンタのせいじゃねえって、おんちゃんさ聞いた」

タツオ、知らんぷりして海を見ている。

アキラ「だから島出んなよ。一緒に暮らさべ」

困ったような美晴、ふと視線を堤防に送る。

アキラもつられて振り返る。

視線の先にはアキラの船。

何かひらめいた美晴、明るい眼差しで。

美晴「……あの船、いくら？ あんたの船」
アキラ「え？」

美晴「私さ、この金で、あんたの船買うわ

（紙袋みせる）

美晴の顔に満ち足りた気持ちが滲み出て
美晴「それで、あんたと！ シゲルと！ 私
の船にするわ！」

アキラ「え？ な、何、なんでそうなの」

美晴「だってそれが私の今一番やりたいことだから」

美晴、てらいもなく正直で明るい顔をみせる。

啞然としたアキラの顔。
そこにシゲル、口を開く、

シゲル「……兄ちゃん……オイ……オイ……」

シゲルのお腹がグウーっつと鳴る。
シゲル「腹へった。ハハッ！ 腹へったわ！」

アキラ「何すや、おめえ（笑）……悪いかったな。おめえにはかなわねえわ」

その時、「オー……ーイ！」浜辺の先から呼ぶ声。

振り向くと、なんと「ほやマン」が手を振っている。

みんな、ぽかんと驚いて。

でも、よくみると体はやけに小さい。
ほやマンがよっこらせと被り物を取ると、

春子の頭が出てくる。
春子「これ一回かぶってみたかったんだー！」

みんな笑う。アキラもさすがに呆れて笑

う。

離れて見ていたタツオも鼻をかいて。
そんな春子を遠くに見る美晴の笑顔。
それでもどこか孤独で。

88 多部島・点描

音楽と共に、島の情景が点描で映し出される。

人の住まなくなった家。
使われなくなった井戸。

まだまだ現役の漁の道具。

銀ジャケ養殖の筏で汗を流す漁師たちの
遠景。

タツオはいつもどおり黙々と港で作業している。

アキラM「それで、んなことがあって。島は
変わらず静かです。風いい海みてえに静か
です」

古ぼけた墓。阿部家の家庭菜園。

89 春子の家・門前

アキラM「春子ちゃんは、ホームさは絶対え
入んねえって言い張って、鳥さ残った」
秋帽子の春子が、門前で落ち葉掃きをして
いる。

漫画の作業机、誰も座っていない。
白紙の原稿が風に揺れて。

アキラM「んだけど、美晴さんは、しばらく
して島を去った。朝起きたら、夢みてえに
消えてた」
音楽終わる。

91 同・門前の道（冬）

冬服の配達員、阿部家の郵便受けに荷物を
入れようとすると、シゲルが声をかけ、
シゲル「崇ちゃん、オイたち、春子ちゃん家
ちだよ。そっち住めなくなった」

配達員「あ、んだったね。ほれ、おめえたち
宛」

「へへへ」と荷物を受け取り、家に入る
シゲル。

シゲル「アキラ兄ちゃん、春子ちゃん、何
か届いたよワー！」

玄関。『荒井』の立派な表札の隣に『荒
井春子』『阿部明』『阿部繁』のカマボコ
板の表札が並ぶ。

92 メインタイトル

メインタイトル『ほやマン（仮）』

エンディング・海上↓空撮（イメージ
ショット）

エンディングソング。

疾走する船に飾られたほやの図案の大漁
旗がはためく。

『美晴丸』と船名が大きく描かれている。
そのままカメラが引いていくと、疾走す
る美晴丸に乗っているアキラとシゲルが
映し出される。

操船するアキラは笑顔。

シゲルも笑顔でワーツと叫んでいる。

海原を疾走する美晴丸。

カメラ、美晴丸から引いてそのまま空撮
になる。

美しく晴れた空。

やがて多部島の全景が映し出される。

スタップロール流れ始める。

（了）

正 欲

港 岳 彦

〈脚本家略歴〉

港岳彦（みなと たけひこ）

1974年生まれ。日本映画学校（現・日本映画大学）7期卒業。1998年『僕がこの街で死んだことなんかあの人は知らない』で、シナリオ作家協会主催・大伴昌司賞受賞。2024年『正欲』でおおさかシネマフェスティバル脚本賞受賞。脚本を手掛けた主な映画作品は、『ぼくが生きてる、ふたつの世界』『正欲』『アナログ』『あゝ、荒野』『ゴールド・ボーイ』『宮本から君へ』『とんび』など。TVドラマ作品に『仮想儀礼』『前科者―新米保護司・阿川佳代―』。



監督・岸善幸

原作・朝井リョウ『正欲』（新潮文庫刊）

製作・『正欲』製作委員会

企画・製作幹事・munna

制作プロダクション・テレビマン

ユニオン

配給・ビタース・エンド

〈スタッフ〉

企画・プロデュース

プロデューサー

撮影

照明

DIT

録音

美術

編集

音楽

〈キャスト〉

寺井啓喜

桐生夏月

佐々木佳道

諸橋大也

神戸八重子

寺井由美

高見優芽

越川秀己

西山修

那須沙保里

矢田部陽平

担任教師（回想）

右近一将

稲垣吾郎

新垣結衣

磯村勇斗

佐藤寛太

東野絢香

山田真歩

坂東希

宇野祥平

渡辺大知

徳永えり

岩瀬亮

山本浩司

鈴木康介

岩代太郎

社員食堂

つめたく冷えた水が紙コップに注がれ——やがて溢れ出す。

ウォーターサーバーの前に佐々木佳道(30)。

チラシのスタンドにさまざまな広告、佳道、チラシ。

食事を終えた上司が数名の部下とやってきて、

上司「佐々木」

佳道、水を止め、紙コップを手にして顔を上げる。

上司「明日さ、こいつらと草野球するんだけどこない？」

佳道、愛想笑いでやり過ごす。

上司「……行かない、よな」

上司、苦笑して、笑う部下たちと去る。

佳道、水とパンを持ってまっすぐ窓際の席へ向かう。

若い社員がスマホでECサイトを見ながら食べている。

年嵩の社員は保険のパンフを熱心に眺めながら食べている。

佳道の声「街歩くとさ、色んな情報が飛び込んでいる。あれってさ、みんな明日死にたくない人。っていうか、死なない人。のためのものじゃない？」

佳道、窓辺の人気のない席に座る。

無造作にパンを食べる。

見知らぬ番号から携帯に着信。

佳道「怪訝そうに出て」もしもし……」

警官の声「わたくし広島県警福山南署交通課の児嶋と申します。事故に遭った方の端末からお電話しているのですが、佐々木忠道さんをご存じですか？」

佳道「はい」

警官の声「忠道さんですね、同乗していた美子さんがですね、交通事故に遭いまして……ともに意識不明の状態です……救急搬送されました」

佳道「……」

2 街(日替わりの午後)

喪服の佳道、タクシーに運ばれている。

隣に二つの骨董座席の前、モニターから英会話の動画の広告が流れる。

目を逸らす佳道。

車窓から派手なデザイン看板や広告が飛び込んでくる。

ダイエット食品。期間限定割引セール

……。

佳道の声「明日生きていたくない人とか死んでもいい人のためのものってないよね。あ、そういう流れに乗るのが社会の一員ってことだよ。それが安全なんだよね。ほっとかれるには、それが一番なんだよね」

3 広島県福山市・バイパス沿いの回転寿司店(夜)

回らないタイプの大型チェーン店。閉店間近で閑散としている。

隅にあるおひとり様用のカウンター席にぼつんと座り、タッチパネルで淡々とオーダーしている桐生夏月(30)。

隣席の若いカップルはカウンターにスマホを立て掛け、ユーチューバーを真似て食レポしている。

夏月、安そうな寿司を受け取る。

夏月、スマホの天気予報を見ながら、黙々と寿司を頬張る。浮ついたカップルが嬌声を上げる。

夏月、席を立つ。

4 同・駐車場(夜)

店から出てきた夏月、親のお古の軽自動車にキーを挿しこみ、車に乗り込む。車内をラジオが満ちた。

デカデカと、T——「2018」

5 夏月の実家・外観(夜)

郊外の住宅街に建つ平凡な戸建。
夏月の運転する車が駐車場に収まり、エンジンが切られる。

6 同・リビング(夜)

夏月が入ってくると、電気は落ちている。
一階の両親の寝室から軽いいびきが響いてくる。

夏月、二階への階段をのぼる。

7 同・夏月の部屋(夜)

夏月、電気をつけたまま布団に倒れこむ。
視線の先に小さな鏡。

夏月、束の間、鏡に映る自分の顔を見るが、すぐに目をそらし、スマホで動画サイトを始める。

いくつかのチャンネルをダラ見する中で、コメント欄に「SATORU FUJIWARA」の名を横目で見える。

夏月「……」

そのチャンネルを見つめる夏月。

——見ているうちに、体が静かになってゆく。

スマホを握ったまま、青虫のような動き

で頭まですっぱり布団に潜ると、毛布の中でふっと息を吐き、秘めやかに何かが高まる。

息が漏れる。

毛布が微かに動く。

水滴の音が響く。一滴、二滴、三滴……

やがて。

水が出てくる。

ポリウム豊かな水が部屋を満たしていく。

水は本棚の本を浮かし、ベッドを飲み込み、やがて夏月は水に浸かる。

穏やかな表情で眠る夏月。

ふっと目が開いて——、

メインタイトル「正欲」

8 スマホ内・動画サイトモニタージュ

不登校児インフルエンサーのミワ(10)

が、

ミワ「私たちは一人一人違うのに、同じ格好

で同じ授業！ バカみたい！」

ミワ「学校つてもう古くないですか？ 自分が興味あることを勉強した方が絶対にいいよ！」

ミワ「学校の勉強って社会に出て役に立つの？ これからは個人の時代だよ！」

9 横浜・啓喜の家・リビング(キッチン)

寺井啓喜(45)、息子の泰希(10)が差し出すスマホの動画を乾いた表情で眺めている。

食卓に並ぶ焼き鮭と丁寧なだし巻き卵。

それとは別におかゆが見える。

啓喜「……で？」

泰希「僕もこの子みたいに学校行かないで、やりたいことやってみよう」

台所から心配そうに見つめている、妻の寺井由美(40)。

啓喜「やりたいことって、なに？」

泰希「それは」

由美、啓喜の前に具沢山の味噌汁を置くと、優しい口調で、

由美「泰希、おかゆ食べちゃえよ？」

泰希「今、大事な話、してるから」

啓喜「この子、いくつ」

泰希「十歳。ほんと同じだよ」

啓喜「じゃ子供だよな」

泰希、頷く。

啓喜「子供は社会のことなんか何も知らないんじゃないかな」

泰希「ミワちゃんはずごくいっぱい考えて、勉強とかも自分でしてるから、社会のこと

をいっぱい知ってると思う」

啓喜「知ってるんだ、ミワちゃんは」

泰希、次第に顔が死んでいく。

啓喜「泰希、世間ではこういうの詐欺師って

いうんだ。嘘、まやかし、耳ざわりのいい

ことばかり言ってる人からお金を巻き上げ

る。この子もだいたいぶ稼いでるよ。課金とか

広告収入で」

泰希「……」

啓喜「お父さん、詐欺師はいっぱい見てきた

からね。わかるんだよ」

泰希、黙って亡霊のように二階へ向かう。

由美「おかゆ食べないの？」

啓喜、味噌汁を吸りながら、

啓喜「ちゃんと白飯食わせた方がいいよ」

由美「お腹下しちゃうのよ」

と、食洗機のスイッチを押し、激しい洗

浄音をあげる。

10 住宅街・走る車内（朝）

由美が運転し、助手席には啓喜。

重苦しい空気が漂っている。

由美「ああいう感じなの？」

啓喜「え？」

由美「取調べ」

啓喜「何で」

由美「ちょっと怖かった」

啓喜「あの年で道から外れた生き方させられ

ないよ。普通でなきゃ」

由美「普通っていうのは、無理やり学校に行

かせるってこと？」

啓喜「うん。まあ」

由美「あの子、公園で砂場遊びするときね、

男の子が乱暴に壊した山をさ、かわいそう

だって作り直すんだよ。そういうの知らない

でしょ。ユーチューバーの子のさ、学校

が全てじゃないよって言葉に励まされたん

だよ」

車が駅のロータリーに着き、啓喜、降り

る。

由美「今日例のNPOの人たちに会ってみる

から。もし感触が良かったら、日曜日あな

たもきてね」

啓喜、ドアを閉める。車が発車する。

啓喜「……」

啓喜、通勤ラッシュの人混みに飲み込ま

れていく。

11 通勤電車・中

ラッシュを過ぎた車内、人目を避けるよ

うに体をこわばらせている神戸八重子

(21)。手が小刻みに震えている。

駅に電車が停まり、そばの男性客が降り

ようととして、八重子が逃げるように先に

降り、押されて倒れる。

バッグから大学祭の企画書が溢れる。

八重子「……」

八重子、企画書を拾い上げようとし、同

時に拾おうとした親切な若いサラリーマ

ンの手に触れ、さっと手を引き怯える。

サラリーマン「？」

サラリーマンは不機嫌になり立ち去り、

八重子はようやく企画書を拾って立ち上

がり、俯いたまま改札へ向かう。

12 習志野の大学

八重子、トボトボと構内へ入っていく。

13 同・大教室

席に着く八重子。

女子学生に明るく「おはよう」と肩を叩

かれ、

八重子「おはよう」

と明るく返す。

14 夏月の実家・リビング（朝）

朝の情報番組を見ながら、納豆ご飯を

吸っている夏月の両親。

テレビの中の女子アナが「LGBTQ」

について話しているのを、ぼんやり見て

いる。

その横で黙々と朝食をかきこむ夏月。

母「今は結婚して子供を産むってだけじゃないからねえ……ようわからんね」

夏月「……」

母「子どもはますます減るはっかりじゃね」

父、ティッシュに痰を吐く。

母、手のひらを差し出す。父が申し訳なさそうに、ティッシュを乗せる。エプロンのポケットにしまい、流しに向かう。

15 同・車庫(朝)

出勤姿の夏月、車に乗り込み、発車する。

16 イオンモール・外観

街の中心部にある大型ショッピングモールの。

17 同・寢具店

夏月、高齢者夫婦にマットレスの説明をしている。

夏月「CMでもご覧になっていただけかと思いますが、△△△の特徴は、就寝時の体圧による負荷、例えば腰への負担とかですね、それが分散されるところです。寝返りを打ってどんな姿勢になっても、血行が妨げられませんし、疲労が溜まりにくいんで

すね」

淡々とした口調で説明を続ける夏月。

× × ×
「検討します」と言いながら手ぶらで帰る高齢者夫婦に、

夏月「またお待ちしております」

と頭を下げて見送ると、向かいの雑貨店店員・那須沙保里(35)がやってくる。

沙保里は妊婦だ。

沙保里「うちも金出して最高のマットレス買ったやろうかな」

と腰を揉みながら、

沙保里「いやもう疲れるけんさ。若い子入って来てもすぐ辞めるけんさ、うち、こがーなお腹しとるのに働かされとるんよ」

夏月、愛想笑いでやり過ごそうとする。

沙保里「夏月ちゃんもクレームの対応とかし

よーたらストレス溜まらん？」

夏月「ほうですね」

沙保里「どうしとるん、そういう時」

夏月「さあ……」

沙保里「夏月ちゃん、彼氏は？」

夏月「? いないです」

沙保里「なんで？」

夏月「……」

沙保里「何でおらんのん? 欲しいないん? っていうかいつからおらんのん?」

夏月「特別欲しいないですね」

沙保里「嘘じゃろ」

夏月、布団をいじったりして会話の終わりをうつすら促す。

沙保里、カチンときた様子で、

沙保里「言うとかけど、30過ぎたら出産ぶち大変じゃけえ。そつから更に育てにやいけんのんよ。ひとりで気楽なんかも知れんけど、そのまんまじゃあとがきつうなる一方じゃけ」

沙保里、苛立ちを抱えて店へ戻っていく。そこへ「やっぱ桐生じゃ」の声。

振り返ると、ベビーカーを押した西山修(30)と西山亜衣子(30)がぐいぐい迫ってくる。

亜衣子「ほんまじゃー!」

修「めつちやタイムリー!」

夏月「……」

亜衣子「桐生さんここで働いとるん? セトヤマ運送に就職したらんかったつけ? 転職したん?」

夏月「うん、結構前に……」

修「タイムリーじゃあ。あんねえ、穂波と桂が今度結婚式やるんじゃけど、あの人らいまだつちも南中の教師なんよ。じゃけ結婚式ついでに同窓会もしたらええって話になつとんよ」

亜衣子「うちらが幹事なんよ。桐生さん、携帯変えたん?」

夏月「うん」

修「よし、これで連絡取れとれんのあと一人じゃ」

ベビーカーの中で、赤ん坊が泣き出す。

修「あーほら起きたじやろうが」

亜衣子「おはよう莉々亜ちゃん。もう修の声が大きいわ……」

亜衣子、赤ん坊を抱え上げおしゃぶりをふくませる。

修「はいじゃあ番号教えて」

夏月「……080」

スマホに打ち込む修を死んだ目で見ている夏月。

修「あと佐々木が帰ってきたのは聞いてる?」

夏月の顔色が変わる。

修「三年の途中で転校した佐々木佳道。桐生さん、佐々木と仲良くなかったけ?」

亜衣子「え、そんなイメージ全然ないんじゃない?」

けど」

夏月「なんで帰ってきたん、佐々木くん」

修「知らん。昔住んどった家に戻ってひとりで住んどると」

夏月「……」

× × ×

フラッシュ。

中学校の校舎裏の水飲み場。

夏月(15)と佳道(15)が水を最大出力にし、派手な水の軌道を作り出していて……。

× × ×
—夏月。

18 横浜地方検察庁・外観

背後に横浜港の見える荘厳な建物。

19 同・執務室

啓喜、部下の越川秀己(32)と、常習累犯窃盗罪の女・佐藤(43)から聞き取りをしている。

啓喜「佐藤さん、過去二年で三度目ですよ。今回、間違いなく実刑だよ。店長さんはたまたまバレたのが三回っただけで、他に何度もやってるって言うてたよ」

佐藤、項垂れて何も言えない。

啓喜「いい人なんだよね、店長。個人商店が軒並み潰れてくでしょ。そんな中で踏ん張ってさ。朝早くから夜遅くまで家族総出でさ……」

佐藤「……すいません……すいません……」

20 同・廊下

警官に連れられた佐藤に続き、啓喜と越川が遅れて出てくる。

21 同・一室

スマホを眺めながら、由美の手作り弁当を食べる啓喜。

越川はカレーパンをかじっている。

啓喜「越川さ、不登校インフルエンサーって知ってる?」

越川「あー、いますね」

啓喜「泰希がああなりたいうて言い出しちゃってさ」

越川「なるほどねー。泰希くん、響くものがあつたんだろうな」

越川、啓喜が黙っているのに気づく。

越川「?」

啓喜「何、わかったように。あんなのさばらせてたら日本やバイだろって話でしょ」

越川「すいません」

越川、パン袋をゴミ箱に放ると、出て行く。

啓喜、スマホの音量を上げる。動画サイトの中からミワが、

ミワ「みんな違っていいんだよ! 私たちは自由だ!」

苦々しい顔の啓喜。

ダンスサークル「スピード」のメンバー男女が踊っている。入り口の陰に身を潜めながら、八重子が、ダンスサークルの一員、諸橋大也(21)に重たい視線を向けている。

外から久留米よし香(22)がくる。

よし香「八重子ごめん！ 遅れちゃった」

八重子「ううん」

よし香の後ろについて、八重子が男性メンバーを避けながら中に入っていく。一際大きな声で指示をしている代表の高見優芽(22)に近づく二人。

よし香「学祭実行委員の者です。よろしくお願います」

×

×

×

隅っこの簡易テーブルに対座し、優芽と大也、八重子とよし香が打ち合わせをしている。

八重子、大也に資料を渡す際に大也の指が触れる。

八重子、触れたのに気にならない。

八重子「……」

噴き出す汗をタオルで拭いながら資料に視線を落とす大也。

八重子、そんな大也を盗み見してしまっ

よし香「私たちって、言葉だけで何かをわかった気になりがちじゃないですか。今回のダイバーシティフェスも、ダイバーシティって言葉がちゃんと理解されないまま、簡単に消費されてる気がするんですよ。だから私たちもちゃんと考えたくて。ね」

と八重子に振る。八重子、何度も頷く。

優芽、企画書を見ながら、

優芽「わかるわかる。すっごくいいと思うよ。うちの大学も、去年まで平気でミスコンやってたよね」

よし香「やってましたよねー」

優芽「ねー。こういうアップデート、大賛成だな。と言いつつ、隣にいる諸橋は去年ミスターコン出てるんですけどね。ねー」

大也「ぶっくらばうに」無理やり出させられただけです」

優芽「でも準ミスターだからすごいよ」

と大也の肩をポンポンと叩く。

優芽「そういえばどなたかがうちの自主公演見にきてくれたって聞いたんですけど」

よし香に肘で突かれた八重子、低い声で、八重子「あ。去年の夏の文化ホール、観に行きました」

優芽「いかがでした？」

八重子「あの……すごく良くて。あー、ダン

スって、本当に、言葉とか性別とか色んなものを超えて届くなって。なので今回出演していただけたら嬉しくて」

優芽「多様性とダンスね。うん、いい着眼点だよ」

というと、パッと立ち上がり、振りを交えながら、

優芽「例えばワックってジャンルがあるんですけど(とワックの振りをつける)、もともと70年代のゲイカルチャーから生まれた文化って言われているのね。ゲイのダンサーたちが当時のスター女優の写真とかを真似て、こんなふうに、こうとか、あとこういうのとかバンバンポーズをとっていく。パフォーマンスで」

よし香「めっちゃカッコいい！」

優芽「はい、ありがと。そこから始まったらしいんだよね。ね、大也」

大也、顔を向ける。

優芽「大也は普段クランプっていうジャンルをやってるんだけど、こんなふうに筋肉をこっぴどくさせるっていうのかな、動きの多いダンスだから、わりと男っぽいステージングになりがちなんだよね。例えば大也がさっき言ったワックをやるとか(とスター女優のボーjing)、もつと別の女性的な文化を持つジャンルを踊るとか」

よし香「多様性だー！ パンフにちゃんと解説載せたりしたらあんまりダンス知らない人でも学べそうですよね」

大也「意味ないですよ」

一同、さっと大也を見る。

大也「それって文化の背景だけを利用した、むしろずるいやり方じゃないですか」

優芽「そう？」

大也「企画に沿うために特にやりたくないジャンル踊らされるって、それこそダイバーシティ？ じゃないと思いますけどね」

大也から目が離せない八重子。

× × ×

キレキレのクランプを踊っている大也。

八重子「瞳が鈍く輝く……」

24 寢具店・バックヤード（夜）

仕事を終えた夏月、私物の入った透明のバッグを提げ、売り場から出ていく。

25 イオンの駐車場（夜）

出てきた夏月、車に乗り込み、走り出す。

26 郊外の道・走る車内（夜）

夏月、少し前のめりにハンドルを握っている。

いつもの無表情に、抑えた興奮が見られる。
スピードがぐいぐいと上がる。

27 山裾（夜）

田畑の中に、民家が点在している。
夏月の車が通り過ぎる。

28 佳道の実家・近くの道（夜）

夏月の車が遠慮がちな距離で停まる。
夏月「……」

29 中学校・校舎裏の水飲み場（夏月の回想）

放課後。
夏月（15）と佳道（15）が水を最大出力にし、派手な水の軌道を作り出している。

制服をびしょびしょに濡らしながら、顔を火照らせて、水しぶきを浴び、あるいは一緒に観賞し……。
あたかも清涼飲料水のCMのようなコマ。

30 佳道の実家・表（現在・夜）

古びた木造の平屋。
表札には「佐々木」と見える。
薄ぼんやりと家の明かりが漏れている。

夏月、息を吞むと、ガラス越しにじっと明かりを見つめる。
夏月「……」

と、玄関口の明かりが急に灯る。

誰かがだらしない部屋着のまま出てくる。
周章狼狽する夏月、猛スピードで家の前から走り去る。

誰かのシルエットがあつという間に遠ざかる。

31 バイパス（夜）

汗びっしょりの夏月、蒼白な顔のまま車を飛ばす。

夏月「……」

32 横浜・日曜日の公園（午後）

激しい日差しが照りつけている。
不登校児に運動を教えるNPO団体「らいおんキッズ」の男性職員二名と子供八人が、輪になりバドミントンをしている。

その中には、泰希の姿も見える。
子供達はみないかにも運動不足で、シャトルを打ち返せず、ラリーも続かないが、ジャージ姿の職員たちは笑顔でオッケーなどと盛り上げている。

遠巻きに見ている啓喜ら保護者たち。
由美は祈るように見つめている。

由美「あ！ 打ち返した！」

泰希、富吉彰良（10）と嬉しそうにハイタッチをする。

由美、並んで見ていた彰良の母・富吉奈々江に、

由美「あ！ ほら彰良くん打ち返した！」

奈々江、誇らしげに振り返った彰良に笑顔で手を振る。

奈々江「……嬉しいなあ……」

いいながら、必死に涙を堪える奈々江。

由美「（涙を浮かべ）わかりますよ」

と奈々江の背中を優しくさする由美。

啓喜「（ワンテンポ遅れて）うん、わかるわかる」

奈々江「ごめんなさい……彰良、最近、学校はもう古い、行くほうがバカだなんて言い始めて、心配してたから」

由美「え、びっくり、うちも同じ。もしかして同じ……？」

奈々江「不登校の？」

由美「やっぱり！ みなさん見てるんですね、YouTube」

啓喜「うわ……」

奈々江「親からするとどうしても、これから進学して就職して、って考えるじゃないですか。世間体とかじゃなくて、子供の人生のために」

啓喜「はいはいはい。それが普通ですからね。

そもそもインフルエンサーだか何だか知らないですけど、親の金で暮らしてる奴が何言ってるんだって話で」

そこに水を飲みに来た職員の右近一将

（26）が近づいてくる。

真っ黒に黒光りした肌、やけに白い歯を光らせ、

右近「でもねお父さん、今の子供たちって新世代なんですよ」

啓喜「はあ」

右近「中学生で独学でブログ立ち上げてアフィリエイト収入とか、親の稼ぎ抜いちやう子とか全然いますし」

奈々江「え、そういうこともあるんですか」

右近「動画配信系は編集ができるようになれば手に職で結果オーライですもん」

奈々江「それぞれ。彰良も動画配信したいってずっと」

由美「うちもそう」

啓喜「でも個人情報流出とか、色々危険性もありますよね。そういうことをきちんと学校で学んでからでも」

泰希と彰良が全員分のラケットを重たそうに抱えてやってきて、

泰希「右近くん持って来た」

右近「おお、ありがとう！」

由美と奈々江がさっと出てきて受け取ると、右近の足元に跪きラケットを束ね始める。

右近「学校に行けてない時って何より自分のこととどんどん嫌いになっちゃうんですよ。

僕も一時期不登校だったからわかるんですけど、世界のことともつながっていないような感覚っていうかな……。そんなとき大切な

のつて結局人との繋がりなんですよ。動画配信、いいと思いますよ」

啓喜「……」

啓喜「……」

33 啓喜の家・リビング／キッチン（二週間後）

後

泰希と彰良がサンングラスをかけ、テーブルの上に置いた定点カメラに向かって、身振り手振りで精一杯演説している。

泰希「僕たちは今、学校に通っていません！ だけどそれは本当に良くないことなんですよ。うか？」

彰良「子どもは全員学校に通うべき？ そんな考えはもう古い！」

泰希「もう常識とかも変わっているんだと思います！」

キッチンの陰で聞き入っている由美。そばに微笑む右近、会釈し、出ていく。

× × ×

× × ×

× × ×

泰希と彰良、由美でケータイを覗き込んでいる。

泰希「すごい！ 32人になった！」

彰良「すごい、あ、35人」

右近「本当に？ ヤバイね」

由美「すごいねえ、頑張った、頑張った」

とハイタッチをする二人の頭を交互に撫で、家の電話から奈々江に電話をかける

由美。

由美「もしもし奈々江さん？ 今ねチャンネル登録者数35人になったって！」

泰希「いま36になったよ」

由美「36人！」

× × ×

夜。

疲れ切った表情で帰宅した啓喜。

床に散らばったバットやグローブ、縄跳

びを見て、

啓喜「……」

そこに由美が顔に美容パックをつけながらやってきて、

由美「ちょうど良かった、これ膨らませられる？」

と風船を差し出す。

啓喜「何これ」

由美「明日使うの。今日もね本当は風船使って動画撮るつもりだったんだけど、あの子

たち肺活量が足りなくて無理だったの。私そんなに苦手のね」

啓喜、ため息交じりに椅子に座り、ネック

タイを緩めながら、

啓喜「とりあえず飯ちょうだい」

由美「ああ、ごめん」

とキッチンに立ち、皿にレトルトカレーを入れレンジへ。

由美「視聴者さんから風船早割対決して下さいってコメント欄にリクエストきてて、泰希張り切ってるのよ」

啓喜「視聴者……？」

由美「変な人きたらやだと思ってたけどみんなフレンドリーで」

啓喜「風船割りって。学校にはもつと楽しい遊びがいっぱいあるでしょ」

由美「泰希、ちょっと顔が引き締まったと思わない？」

チーンと電子レンジが鳴る。

由美、レトルトカレーを準備しながら、由美「私もユーチューバーになって欲しいわけじゃないよ。でも今までより明らかに楽しそうなの。部屋に引きこもられるより

ずっとマシ」

啓喜が差し出されたレトルトカレーを食

べようとしたとき、由美が風船を置いて、由美「風船、いけそう？」

啓喜「だから飯食ったあとやるって」とスプーンを口に運ぼうとする。

そこに泰希が階段を駆け下りてきて、

泰希「お父さん！ 風船できた？」

啓喜「カレー食べたらやるよ」

泰希「ええ、カレー臭くなるの嫌だな、先にやって」

啓喜、グツと堪え、スプーンをおくと、

床にどかっと座り、人差し指と親指で風船をつまみながら、

啓喜「こんなの自分でできなきゃ恥ずかしいぞ。コツさえ掴めば簡単なんだから。見てろ」

啓喜、一気に息を吹き込む。

ちつとも膨らまない風船。

泰希「……」

啓喜、何度かチャレンジした後、

啓喜「これ100均のでしょ。安いのは膨らみづらいんだよ」

啓喜、首肩をぐるぐると回し、力を抜いた後、再チャレンジ。

唇がプヒューと間拔けな音を出す、風船は膨らまない。

徐々に萎えてく泰希の顔面。

啓喜「あーこれ、室内の気温の問題だな」

と風船を手で擦って温める。

再度、息を吹き込むが、膨らまない。

由美「……泰希、もう寝る時間かな？」

泰希「お父さんおやすみなさい」

と二階へ去っていく。

啓喜、テーブルに戻り、ムシヤクシヤした様子で食べ始める。

34 習志野の大学・練習スペース

スピードのメンバーが踊っている。

八重子とよし香、優芽や大也を見ている。メンバーがスマホを置いて、練習の撮影をしている。

優芽「そっちは自由にフォーメーション組んでもらって、みゆきが合わせる感じにしようか。大也もそっちに入ってもらって」

大也「なんで僕はこっちなんですか！」

大也の怒声がとぶ。

優芽「ん？ 何か引つかかる？」

大也「いつも僕だけ女の子の子の中で踊らせるのはなんですか」

優芽「今回のテーマは多様性だから」

大也「ミキヤでもヨシローでもいいですよ、ね。なんで僕なんですか」

八重子「あの、私も少し気になってました」

大也、八重子のいる方をチラリと見る。

優芽、腕組みして八重子を見る。

八重子「なんか……記号っぽいかなって。諸橋くんらしさが殺されちゃうっていうか。

なんか、ごめんなさい……素人なのに」

優芽「わかった。じゃここ大也ソロにしよう」

うん、それがいいかも」

再び踊りだす大也。

八重子、気持ちいを落ち着かせながら、大也をちらちら見る。

大也「視線を感じている」……」

35 同・敷地内

八重子とよし香、体育館から出てきて歩きながら、

よし香「見直したよ。勇気あるな、八重子」

八重子「ずっと引つかかってたから……心臓まだドキドキしてる」

よし香「でもさ大也くんて、他の男子とはちよつと違うよね？」

八重子「……違うって？」

よし香「えー。要はそういうことじゃん」

八重子「……そういう話、私はちよつと」

八重子、微妙に俯き加減で歩いていく。

36 夏月の部屋（夜）

夏月、ベッドで電気あんまで悶絶する泰希の動画を見ている。

そのコメント欄。

【室内プールで水中息止め対決はどうでしょうか】

【サランラップをぐるぐる巻きにされてから脱出するまでの時間を測る対決はいかが？】

【水を使った企画はどうでしょうか。ホースの水をどこまで飛ばせるか対決など、見てみたいですね！】

SATORU FUJIWARA】

夏月「……」

と、夏月のスマホに修からLINEが届く。

「結婚式のメッセージ動画早よ」

夏月、うんざりするが、

「明日、送ります」

「佐々木も来るし、全員分撮りたいけん、絶対送れよ！」

夏月、思わず二度見する。

「佐々木くんも来るん？」

「びつくりじゃろ。ヤスがスーパーでばったり会って穂波らの結婚式の話したら」

夏月、続きをウズウズと待つ。

「それ桐生さん来るのって聞いたらしいで。桐生さん来るなら行くって」

夏月「ー」

「なんなんお前らできとん」

夏月、何度も何度もその文面を読む。

37 結婚式場・披露宴会場

花と光に囲まれキラキラしている新郎の穂波辰郎(30)と新婦の桂真央(30)。

夏月のテーブルからほど近いテーブルに佳道。

礼服を纏ってはいいるが、どことなく世捨て人の雰囲気漂う。

プロジェクトには佳道による新郎新婦へのビデオレターが流れている。

ビデオの佳道「佐々木です。辰郎くん、真央さん、おめでとう。うーん、二人のことは正直あんま記憶にないけど、修から最近の写真見せてもらって、なんか感じがいいカップルだなんて思ってます。家族……幸せな家族を作ってください」

佳道、ビデオを投げやりに眺めている。

夏月、プロジェクトの佳道を見て、それからテーブルの佳道を見る。

他の人のメッセージが流れ始める。

佳道、ちらと夏月の方を見る。ちょうど夏月は隣の席の参加者に話しかけられていて、気づかない。

直後、二人の目があう。

夏月は目を逸らす。

画面が変わり、夏月のコメント。部屋の中での自撮りだ。

ビデオの夏月「辰郎くん、真央ちゃん、ご結

婚おめでとう。辰郎くんとは一時期お掃除当番が一緒で、放課後たまに話をしましたね」

などつまらない内容のメッセージ。

佳道、ビデオの夏月を見つめる。

夏月はそんな佳道を見つめる。

ビデオの夏月「辰郎くんと真央ちゃんは、たぶんかけがえのない出会いをしたんだと思います。末長く幸せになつてください」

ビデオの夏月、手を振って、どことなくカメラを切る。

夏月「……」

× × ×

新郎新婦はお色直しではない。

同級生の吉澤かおる(30)や門脇龍一

(30)、佳道を囲み賑やかに話している。

龍一「変わってないのう。お前空気が同じなんじゃ、中学ん時と。見ると変な気分になるわ」

佳道「変わんないよ」

かおる「佐々木くん謎キャラじゃったけ」

佳道「そっなの？」

かおる「うちら女子は佐々木星人じゃて盛り

上がとつたんよ」

佳道「知らなかったな」

龍一「なんでこっちに戻ってきたん」

佳道「前の会社のパワハラ、てか超ブラック

だったから。ずっと横浜だったんだけど、やっぱ田舎が落ち着くかなって」

かおる「今ひとり？ 付き合つてる子とかお

らんの人？」

佳道「いいい」

門脇「佐々木、男が好きなん？」

佳道「そっういふんでもないねー」

夏月「……」

水滴の音が響いてくる。

38 中学校・校舎裏(15年前)

校舎裏の水飲み場。

錆びついていて、水が漏れている。

そこに中学生たちの準備体操の音が聞こえてくる。

39 同・プール(15年前)

水浴びをする生徒たち。

夏月(15)、制服姿でプールサイドのベンチに座り、蛇口から轟音を立てて噴き

出す太い水流に見惚れている。

夏月「……」

40 同・教室(15年前)

ホームルーム。

夏月と佳道(15)、修(15)と亜衣子(15)も居る。

壇上に立つ担任が、

担任「じゃあ今学期最後かの？ 新聞から社会を見て学ぼうの日じゃ。今朝の朝刊から何か気になったニュースはあったか？ 広田、どうじゃ？」

亜衣子、指名を予想していなかったらしく、まごつく。

ウズウズしていた修が、

修「先生、わしが発表してもええ？」

担任「おお、修、前のめつとるのお。どうぞ」

修、切り抜いた新聞記事を手に起立し、

修「はい！ 警察施設に侵入し、水を出しっぱなしにして蛇口を盗んだとして、警視庁田成警察署は21日、青梅市の西東京新聞配達員の藤原悟（45）を窃盗と建造物侵入容疑で逮捕した」

興味なさそうに窓の外を眺めていた夏月、ふと聞き入る。

修「容疑者は、水を出しっぱなしにするのが嬉しかったと供述しています。水を出しっぱなしにするのが嬉しかった、言うてなんじゃそれ？ 藤原悟ぶちやばいけえ」

クラス中が笑い声に包まれる。

夏月のノートに水飛沫の絵。

夏月、顔を赤らめ、ノートを閉じ、太もも辺りを強張らせる。

夏月「……」

修「やばいけえ、こんな動機コナンでもありえんじやろう」

担任「そんな変な記事あったか？」

「意味わからん」「藤原悟ぶちうける」「キチガイは迷惑じゃ」

ひとしきり盛り上がった後、

担任「そういえば、校舎裏のもう使っていない水飲み場があるじやろ。あそこ今日から立ち入り禁止。工事であの辺のものを全部取っ払うけえじや。わかったのお」

41 同・女子トイレの個室（15年前）

夏月、個室の便座の上に座り込む。

放送部員による下校を促すアナウンスが流れる。

夏月「……」

42 同・校舎裏（15年前）

放課後。

足を忍ばせ、水飲み場にやってくる夏月。先客がいる——佳道だ。

佳道が気付き、夏月を刺すような目で見える。

夏月、思わず逃げ出そうとする。

だが佳道の表情は落ち着き払っている。

夏月、佳道の意図を探るようにじっと見つめる。

奥、練習を終えた野球部の修たちが通り過ぎていく。

佳道の視線が蛇口へ向かう。

夏月「……」

夏月、目的が同じだと気づく。

二人、通じ合ってしまふ。

佳道、それに勇気を得たように、いきなり力強く踏み出すと、錆びた蛇口を思い切り踏みつける。

何度蹴つてもびくともしない蛇口。

佳道、助走をつけ、錆びた蛇口を思い切り蹴つ飛ばす。

蛇口がパーンとどこかに飛んでいくと、茶色く変色した水が乱暴にうねりながら噴き出す。

視界を覆う水飛沫の向こうで柔らかく微笑む佳道。

夏月もパツと微笑み返す。

二人の水遊びが始まる。

水道の栓を塞いで水しぶきの形を変えていく。

水をビームのように一直線に噴き出させ、

力強く伸びゆく軌道に心を奪われる。

水しぶきに大きな虹が浮かび上がる。

気づくと夏服の白シャツはびちよびちよに濡れ、夏月の下着や佳道の肌が露わになるが互いに見向きもせず、無心になっ

て遊び続ける。

奇跡のような時間。

突然、校舎の窓から、

担任「コラ！ お前たち！」

ちりぢりに逃げてゆく二人。

走る夏月、ふと空を見上げる。

青くて広い夏の空。

夏月「何とも言えない青春の眼差し」……」

43 同・玄関前（15年前）

夏月、通りかかって、ふと足を止める。

荷物を提げた佳道と母親が、担任教師に

挨拶をしている。

母「大変お世話になりました」

担任「佳道くんはどこいっても世話ないです

よ。のお、元気でやるんで」

俯いていた佳道が顔を上げると、物陰の

夏月と目が合う。

夏月、さっと目を逸らし、逃げるように

去る。

夏月、廊下を体を硬らせて歩きながら、

悲しげな顔になる。

夏月「……」

44 結婚式場に戻って

かおる他、同級生の女性たちに囲まれて
いる佳道。

かおる「働いた方がええよ。引きこもつとる

より」

佳道「じゃ仕事紹介して」

かおる「さくらんとこ募集しとったよね？」

さくら「ほうなんよ。でも適性見てからじゃ

ね」

かおる「適性」。じゃ今度佐々木くんちでタ

コパしようや！ 佐々木くんの人間性見極

めよう」

夏月、不本意な表情で聞き耳を立ててい

る。

そこに新郎新婦が新たな衣装でやってく

る。

一同、拍手で迎える。

夏月、佳道を見る。佳道は周囲に合わせて

て拍手している。

夏月「……」

裏切られたような表情で顔を戻す夏月。

45 習志野の大学・フェス会場・舞台袖

八重子、進行表をペンライトで照らして

いる。

スピードの面々、音楽とともにステージ

上でダンスを繰り返している。

八重子、舞台袖の暗がりからその様子を

見守る。

多様性を意識したコンセプトリアルなバ

フォーマンズが繰り返され、最後に、

大也がソロダンスを決める。

ダンスが終わる。

歓声と拍手が飛び交う。

八重子、汗まみれで立ち尽くす大也を見

つめ、泣きそう。

46 レストラン・バー（夜）

学祭のアフターパーティー。

酒を飲みながら騒いでいる学生たち。い

い感じで男たちと盛り上がるよし香。

グラスを手にした八重子、所在なくいる。

優芽が八重子に気付き、近づいてくる。

八重子、それとなく目で大也を探してい

る。

グラスを手にした優芽がきて、

優芽「もしかして大也探してる？」

八重子「！ やつ、まつ、そうですね。お礼

言ってるので」

優芽「ごめん、なんか顔だけ出して帰っ

ちやったみたい」

八重子「あ、そうなんですか」

八重子のそばで男たちの野太い笑い声が

どっと上がる。

ピクツとした八重子、男たちから離れる。

優芽「もしかして男の人のこと苦手だった
りする？」

八重子「……」

優芽「いや、深い意味はないんだけど」

八重子「(妙に早口で) 苦手っていうより、あんまり男友達とかいるタイプじゃなかったから慣れなくて。彼氏とかもできなかったことないから」

優芽「そうなんだ」

八重子、躊躇っていたが、

八重子「……高校生の頃、お兄ちゃんがトイレ行ってる間にパソコンふっと見たら、素人JKの妹がなんとかつてエッチな動画見えて」

優芽「えー? 最悪……」

八重子「ただそれだけなんですけど、なんか……ずっと」

優芽「ううん。それは傷つくよ。男の人嫌いになっちゃうよ」

優芽、他のスピードの男たちの賑やかな爆笑を指し示す。

優芽「大也もね、ああいう中にいられないの」

八重子「……」

優芽「八重子ちゃんさ、大也をよろしくね」

八重子「え」

優芽「余計なお世話かもしれないけど、大也には歩み寄ってくれる人が必要だと思うのね。八重子ちゃん、大也と同じ商学部だよ」

ね、よろしく」

と、八重子の手を握る。

八重子「……」

47 啓喜の家・リビング(夜)

仕事から帰ったばかりの啓喜、俯いている泰希に、

啓喜「……今度は、何」

由美「ほら、自分で説明して」

泰希「……一緒に公園に連れてってほしくて

……彰良と」

啓喜、ため息交じりに、オムライスにかかったラップを外すと湯気が立ち昇る。

電子レンジでチンしたばかりなのだ。

泰希「……水飲み場で遊んでるところを見て、でも彰良のお父さんは忙しくて無理だから、お父さんに連れて行ってほしくて」

啓喜「リクエスト……」

泰希「水鉄砲で対決してくださいとか、そういうリクエストが視聴者さんからいっぱいあつて」

啓喜「お母さんに頼みなさい」

由美、泰希の肩を優しく揺らし、再度促す。

泰希「お父さんに、僕がやってるのを見てもらって、理解してもらいたい」

由美をちらつと見る啓喜。頷く由美。

泰希「お父さんは早く学校に戻ってほしいと思ってると思う、から、僕らがどれだけ真剣に動画を撮ってるかとか、僕らにも動画を撮ってほしいって思ってくれる人がいて、僕らはその人たちに喜んで欲しいと思うってこと、知って欲しい」

啓喜「お前たちが動画を撮ってる場所に立ち会ったとしても、俺の気持ちは変わらない」

泰希・由美「……」

啓喜「泰希。逃げ癖のついた人間は生きづらいままだ。早く寝なさい」

ぐつたりと二階へ去っていく泰希。

由美に背を向け黙々とオムライスを食べる啓喜。

由美「ちよつとは泰希の話も聞いてやってよ」

啓喜「……」

由美「誰かに喜んでもらいたいかあの子が言うの、初めてでしょ。もうちよつと温かい目で見れないの?」

啓喜「動画の内容って、お前や向こうの親もチェックしてんだよね? 著作権とかプライバシーの保護とか」

由美、無言でスマホを叩くように置く。動画サイトでは、サン格拉斯の泰希と彰

良が、

泰希・彰良「新時代を生きる皆さんこんにちは！今日はリクエスト企画！風船早割対決！」

青い風船を、楽しそうにパンパン割っていく2人。

由美「今のところ一番再生されているのはこれ」

啓喜「これ音楽ついてるけど」

由美「だから大丈夫だって、フリー音源だよ」

啓喜「いや、音とか編集とか誰がやってんの？」

由美「……ああ、まあ、右近さん」

啓喜「？」

由美「はら、らいおんキッズの」

啓喜「あいつ、うちに来てるの」

由美「……うん」

啓喜、しばらく咀嚼していたが、

啓喜「俺が仕事してる間にここに上がり込んでるんだ」

由美「！そんな言い方ないでしょ。私も富吉さんもこういうの疎いからすごく助かってるの」

啓喜「じゃこの風船もあいつが膨らませたの」

由美「ムツとして」そうだよ」

彰良「はい、泰希の負け！罰ゲームはリクエストの通り、電気あんま30秒です！」

泰希「うわ！最悪だ！」

大げさに頭を抱え込む泰希。

電気あんまをされ悶絶している泰希。

啓喜「風呂」

由美「あなた」

啓喜、無視して風呂へ向かう。

48 いつもの回転寿司店・店内（夜）

いつものカウンター席で黙々と寿司をつまんでいる夏月。

ふと聞き覚えのある声。夏月、声の聞こえた方を見る。

テーブル席に佳道とかおるが座って、パネルを見ている。

夏月「……」

二人は親密そうに笑い合いながら、

かおる「光り物苦手なんよ」

佳道「じゃあエンガワは」

かおる「食べるー」

夏月、傷ついた顔になると、こそこそと

席から離れる。

49 同・駐車場・停まった車内（夜）

夏月が身を潜めて待っていると、店から佳道とかおるが出てくる。

佳道、かおるの運転する車の助手席に乗り込む。

発車する車。

夏月の車が後を追って走り出す。

50 郊外の道（夜）

夏月、かおるの車に視線を張り付かせて尾行する。

無表情だが、粘り気のある情念が瞳に浮かんでいる。

対向車のライトが目に入り、夏月が眩しそうになると……

51 中学校のプールサイド（午後）

水の中でもがいている夏月。顔を出すと、そこはプール。

夏月が誰かの気配に気づく。

夏月「……」

少年の佳道（背中）

佳道に近づいていくと、姿は消えている。

夏月、一人オフィリアのように浮かんで空を見上げる。

夏月「……佐々木くん。いなくならないで」

佳道は答えない。

52 佳道の実家・表（夜）

かおるの車が停まっている。

佳道とかおるが、家に入る。
家の中の明かりがつく。

離れた場所で車を停めた夏月、車から降り、家の近くへ。

夏月、突っ立って、家を見つめている。

時々、かおるの笑い声が聞こえる。

佳道の低い話し声も聞こえる。

夏月「……」

——ややあつて、明かりが消える。

夏月、悄然と真つ暗な家を見つめていたが、嫉妬に顔が歪む。

夏月、視界に入った、玄関前に置かれためだか鉢を抱えあげると、力いっぱい、窓に投げつける。

53 破裂するガラス

と同時に、水しぶきが爆発する。

画面いっぱい水しぶきが宙を舞う。

鮮烈なしぶき。

美しいラインを描くしぶき。

爆発的な迫力で噴出するしぶき。

ホースから放たれるあらゆる形のしぶきが画面を埋め尽くす。

やがてそれがシャワーの放水へ

54 大也の部屋・シャワールーム

勢いよく進むシャワー。

大也がシャワーを浴びている。

55 同・リビング

全裸の大也、床に仰向けになり、スマホを見始める。

——それは男性も女性も関係なく、あらゆる水しぶきが画面を彩るものばかり。

全裸の大也、水を見ながら一心不乱に性器をしごく。

突然、動きが止まる。

息を吐き出し、床に倒れ込む。

荒い息をつきながら、うつろな目で虚空を見つめている。

56 習志野の大学・校舎脇

雨が降っている。大也が傘を差して一人立っている。

大也「……」

しばらくして、傘を放り、踊り始める。

黙々と踊り続ける。

57 同・キャンパス

八重子、隅のベンチに座り、バターサンドを食べながら食い入るようにスマホを見ています。

建物の階段を降りてきた大也、ベンチ脇を通り、八重子に気づく。

八重子がスマホにイヤホンをつけて体を揺らしている。

大也、気配を消し、八重子の背後から覗き見る。

八重子が見ていたのはスピードのインスタで、大也が映っている動画を画面録画している。

大也「……」

八重子、写真アプリに保存してある画像をスクロールする。そこには夥しい量の

大也に寄った画像が保存されている。
大也、不快そうな顔になると、足音を忍ばせてその場を去る。

58 横浜地方検察庁・一室（午後）

啓喜、鼻で笑って、

啓喜「水？　なんだそれ」

越川「公園の蛇口盗んで黙秘続けるやついたでしょ」

啓喜「ああ」

越川「転売以外に何かないかと思って、管轄外のものも含め、過去の類似事件を調べてみたんです。そしたらこんなケースが出てきて」

と新聞記事のコピーを差し出す。

そのコピーを少し遠ざけ声に出し読み上げていく啓喜。

啓喜「2003年7月21日。警察施設に侵

入し、水を出しっぱなしにして蛇口を盗んだとして、警視庁田成警察署は、青梅市の

西東京新聞配達員、藤原悟（45）を窃盗と建造物侵入容疑で逮捕した。調べによると

警察部機動警察隊分駐所の事務ガラスを割って侵入。浴室の水道を開けた状態にした

上で、蛇口（時価500円相当）を取り外し盗んだ疑い。一般市民からの通報に

より同署員が浴室内を確認したところ、浴槽の水道から激しく水が噴き出していたと

いう。藤原容疑者は、水を出しっぱなしにするのがうれしかった、と供述している。

馬鹿なの？」

越川「と僕も思ってたんですけど。

藤原悟の、最後うれしかったという表現になってますけど、これって多分、もつと

こう、興奮するというか」

とさらに別の用紙を差し出す。

越川「世の中には、小児性愛どころじゃない異常性愛の人って沢山いるみたいなんです

例えば風船を割ることに興奮するとか、そういう感じの。今回の被疑者ももしかしたら」

啓喜「風船……？」

啓喜、妄念を振り払うように、

啓喜「たとえその理由だったにしろ、公共物

を窃盗したって事実是不変ならないよ。俺たちの仕事は被疑事実に当てはまる罪名を正しく見極めることだろ？」

越川「……ですね」

啓喜「水って……冗談きついな」

と、手元のペットボトルを見つめる。

59 夏月の職場・寢具店

「大切な人へのプレゼントに！」「ご家族

や仲間たちとの団欒に！」などのキャン

ペーン音源が繰り返して流されている。

青白い顔で、クリスマスからお正月へと

店内チラシを模様替えている夏月。

顔色が悪く、仕事にも力が入らない。

沙保里の声が聞こえ、振り返る。

沙保里「いや〜重い重い。うち誕生日2月8

日なんじゃけど、この子もその日ドンピ

シャの可能性あるって言われたんよ。親子

で誕生日同じってお金からんけええじゃ

ろ」

とせり出したお腹を撫でながら話しかけ

てくる。

夏月、無言で作業に戻る。

沙保里「え、なんなん？」

夏月、仕方なく会釈して作業に戻る。

沙保里「それなんなんまで。ねえ」

夏月、もう取り合わない。

沙保里「ちよとあなた。いつもひとりぼっちじゃけ話しかけてやっとするのに……それなんなん、その態度」

夏月「（思わず）うっさい」

沙保里「何て言った？ ねえ、今なんて？」

夏月「話しかけんで」

沙保里「!!……あなたうちのこと嫉んだるんじゃろ」

夏月「……」

沙保里「あなたがどんな人か知らんけど、かわいそうじゃけ気い使つとんよ、こっちは

うちに気い使わせるのもハラスメントと違うん？ は、何、その目！ 怖っ。（お

腹に）ごめんね〜あっち行こうねえ〜」

と店へ戻っていく沙保里。

歳末の賑わいの中、亡霊のように立ち尽くす夏月。

60 ホットドッグ売店

大也、ホットブレートの上でソーセージ

を転がしている。

視線を感じて、店の外を見る。

八重子がこっそり覗いている。

八重子、目が合うとハツとした顔になる。

大也、うんざりしながら仕事をしている

と、予想通り、八重子が店に入ってくる。

八重子、会釈する。大也、仕方なく会釈

する。

八重子「ひとつお願いします」

と金を置く。

大也、黙々とホットドッグを作り始める。

八重子「諸橋くん、スピード、どうしてやめちゃったの？」

大也「……」

八重子「あんなに、イベントもいい感じだったからさ。どうしてかなって」

大也、無言でぶつきらぼうにホットドッグを差し出す。

八重子、ホットドッグを齧る。大也は

じっと睨んでいる。

八重子「おいしい」

大也「あんだだよね」

八重子「？」

大也「スピードのインスタに捨てアカ使って俺の写真もって載せるとかコメントしてきただの。そういうのうんざりなんだけど」

八重子「……」

大也「もう帰ってもらえますか」

61 同・近くの通り

八重子が急足で歩いてきて立ち止まる。動揺を隠せない。

八重子「……」

八重子、服についたケチャップを指に取

りじっと見つめる。

62 横浜の大通り

大晦日の風景。

63 啓喜の家・リビング

大晦日の午後。

泰希と彰良が、配信のリハーサルをしている。

その横でキレイに化粧した由美が補助し、右近はパソコンを広げ慣れた手つきで生

配信の準備を進めている。

泰希と彰良、生き生きとパソコンに向

かって、

泰希「新時代を生きる皆さまこんにちは、泰希です」

彰良「彰良です」

出来上がったチームワーク。

啓喜、所在なさに壁際に立ち、それらを見つめている。

右近「あ、いけたっばい！」

泰希「え、ほんと？」

彰良「わーい」

由美「さすがねえ、右近さん」

右近「いえいえ」

啓喜「……」

64 同・玄関(夕)

右近を送りにきた啓喜。

右近、振り返り、

右近「あの……不安を煽るつもりはありませんけど、コメント欄は気をつけてくださいね」

啓喜「？　と言いますと？」

右近「いつもコメントをくれる人が三人いて、今のところ危険性は低いとは思ってますが」

啓喜「危険性？」

右近「子供のユーチューバー見てる人にはいろんなのがいますからね。あんまり親しげに振舞ったり、プライバシーに踏み込むようなことがあれば注意した方がいいかと」

啓喜「はあ」

右近「あ、ご連絡いただければ僕が対処しますから」

そこに由美が慌ててやってきて、

由美「右近くんごめん！　なんか子供だけの夜中の配信はダメとかコメントきたんだけどどうしたらいい？」

右近「あー！　なんか禁止されてたかもです！」

右近、再び家上がり、由美とリビングへ駆けていく。

すぐにパソコンの前でのワイワイが聞こ

啓喜「……」
えてくる。

65 夏月の実家・リビング(夕)

年越し蕎麦をすすりながら、のんびりテレビを見ている両親。

夏月、きて、蕎麦を無言で食べ始める。

テレビ番組ではなんとかおつかいを成功させた一家の宝物らしい幼児が家族の祝福を受けており、夏月の両親の微笑みを誘う。

母 「思わず」かわええねえ」

夏月、リモコンでチャンネルを変える。

母 「夏月。見とるじゃろ」

母、チャンネルを戻す。

父 「ええ、ええ。夏月が好きな見ればええよ」

夏月、再びチャンネルを変える。

母が再びチャンネルを戻す。

夏月、イラツとして、またチャンネルを変える。

母、勢いよくチャンネルを戻し、

母 「うちは見たいものを見る」

テレビに映る、絵に描いたように幸せな3世代の家庭の姿。

夏月「……」

夏月、弾かれたように立ち上がり、その

まま玄関へ向かう。
「どこいくんや。紅白始まるで」

66 同・車庫・車内(夕)

夏月、きて、イライラしながら乗り込み、キーを挿そうとしたが、慌てて足元に落としてしまう。

必死に手を伸ばし探るが、見つからない。

夏月、窮屈な姿勢のまま急に固まる。

——ゆっくり上体を起こす。

指先にはキーが引っかかっている。

夏月「……」

夏月、動画サイトでエアバッグの外し方を見る。

夏月「……」

夏月、一度降りるとトランクを開け、常備の工具箱からドライバーを取り出し、運転席に戻ってくる。ドライバーでハンドルのガワを外しエアバッグを外す夏月。助手席にそれらを置くと、エンジンをかける。

67 市街地・走る車内(夜)

大晦日の車列が日の沈んだバイパスを静かに走っている。

夏月、青白い顔で車を走らせる。

68 佳道の家(夜)

夏月の車が徐行しながら近づく。

家の中は真っ暗で人の気配はない。

夏月「……」

夏月、つぶやく。

夏月「ふざけんなよ、マジで……死ね……」

夏月、アクセルを踏むと、家の前を走り去る。

69 郊外の暗い道(夜)

夏月、車を走らせながら、腹立たしげに、

夏月「死ね、死んじやえ……なんでこんななんよ」

ハンドルを握りながら、涙を流す。

溢れる涙を拭い、

夏月「こんな人間、もう、ええよ」

夏月、やおらシートベルトを外す。

アクセルを踏み込んだまま、目を閉じる。

一直線に走る車。

夏月が目を開けた瞬間、ドン・キホーテの袋を抱えて歩道を歩く佳道が見える。

夏月「……」

思わずブレーキを踏む夏月。

瞬間、車は軋み音を上げて横腹を電信柱にぶつけ、激しくスピンして田んぼに突っ込む。

驚いた佳道が呆然と立ち尽くす。

佳道「……」

車に近づくと、ドアがガラリと開き、脇腹を押さえた夏月が出てくる。

佳道、さらに驚くが、手を差し出す。

夏月、痛そうだが、意地つばりの顔で、手で制する。

夏月・佳道「……」

70 ビジネスホテル・室内（夜）

ベッドの上で膝を抱え、テレビをぼんやり見ている夏月。

「ゆく年くる年」が流れている。

夏月、佳道のドンキの袋を覗く。

トイレ用洗剤、入浴剤、ビニール袋とガムテープ。

夏月「すくに察して」……」

さりげなく袋を移動させようとした佳道に、

夏月「そのガムテープ、ガス漏れしやすいよ」

佳道「……詳しいな」

薄ら笑いの夏月。

佳道「実家、広すぎて無理でさ。あとのこと考えたら、こういうところ借りた方がまだ最低限の迷惑で済むかなって」

夏月「硫化水素発生中って書く？」

佳道「今日はいいや」

× × ×

夏月はベッド、佳道はソファに寝転がり、年越し番組を垂れ流しにしている。

佳道「修のこと苦手だったな……あいつさ、みんな自分と同じような人間だと思ってるんだよ。何も疑いなく。修学旅行あったじゃん？ おれ部屋一緒でさ。あいつコン

ビニで買ってきたジャムパン、真ん中に苺のジャムが入ってる普通の。突然それ差し出してきてさ、興奮せんか？ 無修正じゃ、って」

夏月「……ごめんわからん」

佳道「パンの見た目が女性器に似てるって……みんなリアルだとかエロいとかジャム舐めたいとか言い出してさ。それから旅行中ずっとそのノリ。おれがどういう世界を

生きてるのか嫌でも思い知らされたわ」

夏月「嫌だなんて思っても、無理してエロいこと言っとる子もいたかも」

佳道「なんのために？」

夏月「自分も修と同じ普通の男子じゃって証明するために」

佳道「あー」

夏月「普通の人にも苦労はあるじゃろ」

佳道「桐生さんは優しいね」

夏月、帰省者たちのインタビュ어가流れるテレビをぼんやり見ながら、

夏月「大晦日とか正月って、人生の通知表みたいな感じがする」

佳道「……」

夏月「誰にも踏み込まれんよーに生きてきたくせに、こおいうときはちゃっかり寂しくなったりするんよ、ほんま面倒くさい」

佳道「……親が交通事故で死んでさ」

夏月「そっか」

佳道「電話受けた時、おれ、よかつたって思ったんだよね。悲しいより先に、おれがこういう人間だって気づかないうちに死んでくれた、これで辻褄が合ったって」

夏月「そんな風に思いたいわけじゃないんよね」

佳道「そう。誰にもバレないように、無事に死ぬために生きてるって感じ……。なんだろうな、この人生」

夏月「でも同窓会でもみんなと上手く話せとつたし、吉澤さんと回転寿司屋さんにいたよね」

佳道「あー」

夏月「じゃけ、佐々木くんは普通に生きとるんだと思つとつた」

佳道「あれねえ」

佳道、苦笑いして、

佳道「えちよつとまて、じゃうちの窓ガラス」

夏月「あ」

佳道「まじか。え、まじか」

夏月、上体を起こして、

夏月「……これぶちはずいね。修理代払います」

佳道「いいよ。そっか。あれ桐生さんかあ」

夏月「ごめん」

佳道「こっち帰ってきて、もう一回だけ頑張ってみようかなって思ってたんだよね、吉澤さんには悪いけど。でも無理だった。人間とはつき合えない」

夏月「命のかけがいが間違つとるんよ」

夏月が天井を見る。

佳道「……さっきさ。この世界との摩擦が何もなくなつて、もうつるつと滑り出るだけだった。でも……」

夏月「……」

佳道「呼び止められた」

夏月、佳道をじつと見る。

佳道「……」

夏月がかすかに微笑む。

夏月「地球に留学してみたいな感覚なんよね、ずっと」

佳道「……」

夏月「自然に生きられる人からしたら、この世界はすつごく楽しい場所なんだと思う。私が傷つく一つ一つが楽しくて……私もそ

ういう目線で世の中を歩いてみたかった。一生に一度でいいから」

佳道、じつと夏月を見ていたが、

佳道「いま、自分が話してるのかと思つて、びつくりした」

夏月の片方の目から涙が一筋こぼれる。

71 峠道・バス車内（早朝）

暗い道を走るバス。夏月と佳道が揺られている。

しばらくすると、夜が明けてくる。

佳道の声「街歩くとさ、いろんな情報が飛び込んでくるじゃん」

夏月の声「うん」

佳道の声「あれってさ、みんな、明日死にたくない人、っていうか、死なない人のためのものじゃない？」

72 山の中（朝）

夏月が先に立つて歩き、佳道がついていく。

佳道の声「明日生きていたくない人とか、死んでもいい人のためのものってないよね。ああいふ流れに乗るのが社会の一員ってことだよな」

夏月が佳道を振り返る。

夏月「こっち」

ダム之音が近づいてくる。

73 ダム（朝）

石畳のような壁面を落ちる大量の水。ダムの前にかかる橋を夏月が先に歩いていく。

ついていく佳道は、言葉もなく高揚している。

夏月、立ち止まり、振り返る。

夏月「……」

佳道「……」

二人、中学生の時のように、見つめ合う。ダムの放水が白い水飛沫を飛ばす。二人は濡れながら、高揚した顔で見つめあっている。

74 福山市・ジェラート店

夏月が座ってジェラートを食べていると、佳道が入ってくる。

微笑む夏月。

佳道「……俺、横浜に行くことにした」

夏月、凍りついた表情になる。

佳道「向こうに仕事のあてもあつてさ。実家は処分しようと思ってる」

夏月「……」

佳道「なんだかんだ田舎はつれえわ。……来る？」

夏月「？」

すぐには言葉が出ない夏月。

佳道「きこなく指輪の入った小箱を置く。」

夏月「……えっ？」

佳道「俺、桐生さんみたいな人にはもう出会えないと思うから」

夏月、小箱を開けて、指輪を取り出す。

夏月「……」

佳道「それっぽいでしょ？ これで擬態できないかな。世間並みに」

夏月、じっと佳道を見つめる。

佳道「この世界で生きていくために手を組みませんか」

夏月「……ええねそれ」

75 習志野の大学・教室（春）

消費行動論ゼミ。コの字型に並んだ机、講義を受ける学生たちの中に八重子と大也。

八重子は大也を意識している。

八重子「……」

大也は熱心に授業を聞いている。

大也「……」

× × ×

講義が終わって、学生の一人が飲み会を提案し、学生たちが出ていく。大也も八

重子も輪に入らない。

大也は席に座ったまま、ノートを整理している。八重子は先に教室を出る。

大也「……」

76 同・教室前廊下

大也が出てきて、歩いていく。その後ろから八重子が現れ、声を掛ける。

八重子「諸橋くん」

大也、声で八重子とわかり、見もしない。八重子「行かないの、飲み会」

大也「……」

八重子「今日もバイト？」

大也、疎ましそうに立ち止まり、

大也「何」

八重子「優芽さんがね、学祭の打ち上げで言ってきたんだよ。学部が同じだから、諸橋くんをよろしくって。だから」

大也は呆れた様子で少し離れる。

八重子は離れない。

八重子「……もうすぐ、令和になるんだよね」

大也「……」

八重子「元号が変わる頃には色々アップデートされてるはずって、学祭の仲間と話してたの」

大也が呆れ顔で歩き始め、八重子は慌て

てついでいく。

八重子「あの、諸橋くん？」

大也「……」

八重子「ゼミ、なんで消費行動論にしたの？」

大也「物欲には裏切られないから」

八重子「……」

77 横浜の実景（夏）

夏の朝日が町並みを美しく照らす。

78 夏月と佳道のマンション（朝）

ダイニングキッチンを挟む形で個室が二つ設けられている2LDKタイプ。それぞれの部屋の壁紙もラグも食器もカレンダーも違う。

夏月、結婚指輪をはめた手で卵焼きを焼いている。

佳道は先に、百均の食パンにマヨネーズ挟んで、パソコンを開きながら食べている。

焼き終えた夏月、皿に卵焼きを移し、テーブルに移動して座る。

夏月「そうやってパソコン見ながら食べるん

難しくない？」

佳道「え？別に？」

夏月「私、無理かも」

佳道「でも、お父さんとか新聞見ながら食べ

てなかった？」

夏月「あー、まあねー、あれか。(手を合わ
せて) いただきます」

卯焼きを食べる夏月。

夏月「ちよっと卯焼き作りすぎちゃったけん
食べる？」

佳道「ありがと。あ、お金は払うよ」

夏月「ええよ、そのくらい(笑)」

卯焼きを食べる佳道。

夏月「なんか、人と暮らしとる感じするわ
……」

佳道「うん、そんな感じかも……」

なんとなく笑顔になりながら、佳道のバ
ソコンをのぞく夏月。

夏月「あ、これ知ってる」

それは泰希たちのチャンネル。

【水を使った企画はどうでしょうか】

【水風船を割れないまま何度投げあえる
か対決など見てみたいです】などのコメ
ントが踊っている。

常連が数名おり、彼らは時折、コメント
欄で延々と雑談を繰り広げたりしている
ふっと笑う夏月。

佳道「なに」

夏月「ねえ、この SATORU
FUJIWARA って人、佐々木くんじゃろ」

佳道「え？ 違うよ。実はさ、おれ、これは

桐生さんかと思ってた」

夏月「違うよ。私じゃない」

佳道「じゃ、誰」

夏月「わからんけど、私が見とるサイトに必
ずいるんよ。佐々木くんしかいないと思っ
とった」

佳道「フジワラサトルに心奪われちゃった人
が、おれら以外にもいるんだらうね」

夏月「そういうこと？」

佳道「フジワラサトルチルドレンなんだ俺た
ち」

夏月「その人、ひとりではないとええね」

佳道「誰もひとりではないといいよ」

と、その時、急に画面がブラックアウト。

【この動画に関連づけられていたアカウ
ントが停止されたため、この動画は再生
できません】

佳道「え？」

夏月「？ どしたんじゃろお」

佳道は何度かクリックするが、表示は変
わらない。

佳道「え、これバンされてる」

啓喜の声「小児性愛者のネットワークが
YouTube のコメント欄で情報交換してた
んだわ」

79 啓喜の家・リビング(夜)

啓喜、由美にコピーした書類を読ませて
いる。

啓喜「それで有名企業が広告出稿を取りやめ
にし始めたもんだから、慌てた YouTube
が規制を実施したんだね。その時、未成年
が出てるチャンネルを一律、機械的に停止
しちゃって」

由美「泰希のチャンネルは巻き込まれたって
こと？」

啓喜「だね。まあ、これからチャンネルが復
活するとしても、コメント欄は閉鎖してお
いた方がいいかもね」

由美「でもコメント欄があの子たちのモチ
ベーションになってたから……」

啓喜「これを機に、YouTube をやめるの
は？」

由美「右近くんが新しいチャンネル作って
くれるから！」

啓喜「去年うちに送検されてきたやつにもい
たし、おれも何件か担当したけど、性犯罪
者って再犯率が異常に高いんだよ。当事者
たちもヤバイって自覚があつてさ、町から
隔離されたって言ってる奴もいたよ。ど
んなシステムにもバグっていうのはあるけ
どさ、そういう普通に生きていけない人間
は刑期経たなくてもどうせ」

由美「(遮り) 普通に生きてない人間って

言つてたよね、泰希のこと」

啓喜「え？」

由美「あなたからすると泰希が学校に行つてないこともこの世のバグなんだろうね」

啓喜「そうは言っていないだろ」

由美「私、最近の泰希見て、よく笑うようになったし、よく話すようになったし、本当にYouTubeやり始めてよかったと思つてるよ。それにね、私も始める前より毎日が楽しいの。確かに普通じゃないかもしれないけど、こういう育ちかたもあるのかもしれないなと思つてる。だから異常者は隔離しろとか、私は思えない」

啓喜「お前は知らないんだよ。社会のバグは本当にいる。悪魔みたいな奴がいるんだって！それが現実なんだよ」

由美「ちょっと、右近くんに電話して聞いてみる」

と、スマホを耳に当てる。

啓喜「何をだよ」

由美「配信の仕方だよ！泰希のチャンネルを直すの」

啓喜「だからそんなもんやめちまえよ！」

由美「どうして私たちの邪魔するの！（声色を変え）あ、右近くん？」

啓喜、スマホを奪つて、

啓喜「あいつはうちに関係ない！」

と床に投げつける。

画面が碎けるスマホ。

由美「どうして、わからないの……どうして……」

突然、由美、絶叫する。

啓喜、びっくりして、のけぞる。

由美、蹲み込んで、何度も何度も声の限りに絶叫する。

泰希が階段を駆け下りてきて、啓喜から由美を守る。

由美、床に突つ伏してわーっと大声で泣き出す。

泰希、恐ろしい顔で啓喜を睨む。

啓喜「……」

80 駅前の道(朝)

夏月と佳道が歩いてきて、

夏月「じゃあ、仕事頑張つて」

佳道「そっちょ」

それは啓喜が使っている駅と同じである。

夏月は改札に向かい、佳道はバス乗り場に向かう。

81 通勤のバス車内(朝)

佳道、スマホを覗いている。

水ぶきのチャンネルが現れる。

コメント欄に SATORU FUJIWARA

の名前。

じつと見つめていた佳道、やおら SATORU FUJIWARA をタップし、DM 画面を開く。

佳道「……」

佳道が文字を打ち込んでいく。

【SATORU FUJIWARA さま。はじめまして。いつも色々な動画で貴兄のコメント楽しく拝見しています。関東在住の三十代男、水フェチです。】

82 通りく佳道の会社

佳道が歩いている。普通の人と紛れるように会社に向かう。

自分の席に座り、パソコンを開き、作業を始める。

佳道の声「水風船が破裂したり、蛇口から水が噴出しているような、自然な形から捻じ曲げられている水の姿そのものに魅力を感じます。同じ指向を持つ方とのつながりを作るべく、やがては実際に会って話したり、動画を撮りあったり出来ればと思っています」

す」

83 夏月と佳道のマンション・佳道の部屋

(夜)

佳道のパソコンに DM がくる。

【はじめまして。SATORU FUJIWARAです。ご連絡ありがとうございます。今、これを書きながら、手が震えています。貴兄のメッセージを読んで、ひとりじゃないと言われている感じがしました。生まれて初めての感覚でした。鬱陶しかったらごめんなさい。でも興奮しちゃって、他のことに手がつきません……】

前のめりでチャットの会話を弾ませていく佳道。

84 習志野の大学・大教室（昼）

八重子とゼミ仲間の女子が、電気を消した教室で備付けのプロジェクトの動作を確認している。

隅に大也、スマホで誰かに返信している。八重子がUSB（論文データ）を差し込み、プロジェクトスクリーンに投影する。

八重子「こここここのボタンを同じ番号に合わせて……あ、できた！」

八重子が女子に礼を言う。

八重子「ありがとう」

女子が先に教室を出ていく。大也と二人きりになり、

八重子「……お待たせ、諸橋くんも論文の投

影、試してみる？」

大也がスマホをしまい、近づく。

八重子がプロジェクトの動作を示そうとする、

大也「いや、いい自分でやる」

面倒そうに確認する大也。

八重子「……諸橋くん、ゼミ合宿くるんだよね？」

大也「行かないかも」

八重子「……」

大也、八重子が固まっているのを一瞥するが、無視して作業に戻る。

八重子「気持ち、わかるよ。私も合宿とかすごく苦手だから。よく知らない人と一泊するなんて、ほんとには行きたくない……でも一緒に一歩踏み出そうよって伝えたくて」

大也、ため息をつく、八重子に背中を向ける。

八重子「お節介かもしれないけど、私たち、いまが変わるチャンスのような気がしてさ。自分の気持ちに正直に生きてみようよ」

八重子、意を決したように、大也の真正面に回り込み、

八重子「私ね、男の人が苦手なの。ちよっとトラウマがあって。男の人が女の人を性的に見てるっていうこと自体、無理で。でも不思議なんだけど、私、諸橋くんと話して

る時は男の人が苦手な気持ちがなくなるの」

大也「……」

八重子「今二人きりでしょ。普通はそれだけで過呼吸になる。でもあなたとなら自然に息ができる。それって奇跡なんだよ、私にとっては」

大也、真つ直ぐに言う。

大也「同情してもらえてわかつてる過去明かしてさ、生きづらかったね、辛かったねって。そんなやり方におれを巻き込むなよ」

八重子「！ そんなつもりないよ」

大也「なんで自分はあくまで理解する側だっと思ってるんだよ」

八重子「……」

大也「あんたらが理解したつてしなくったつて、おれは変わらずここにいて。あんたが想像もできないような人間はこの世界にいっぱいいる。おれはあんたが思ってるような人間じゃないんだよ」

八重子「……」

大也「寝る前に、毎日思う」

八重子「？」

大也「朝起きたら、自分以外の人間になれていますようにって」

八重子「……」

大也「自分に正直とか言われてもその正直な部分が終わってる。おれは根幹がおかしいだから近づくなよ」

八重子「……それでも私は理解したいって思う」

大也「人の話全然聞いてねえな」

八重子「聞いたよ。あなたが大事だからちゃんと聞いたよ。そしたら自分で閉ざして不幸ぶってるだけじゃん」

大也「ああ!？」

八重子「大きな声出さないで!」

八重子、涙目になる。

八重子「教えてよ。話してよ。何なの? わかんないよ。わかんないからもっと話そうとしてるんじゃない」

大也「……」

八重子「私だってそれくらい塞ぎ込んだじゃないよ。閉ざして拒んで一人になりたいよ。こんな私を愛してくれる誰かと生きたいなんて思うのやめたい。性欲とか恋愛とか結婚とかそういうの全部関わらずに生きていけるんならそうしたい。だけど人を好きになっちゃうの。男の人もお兄ちゃんもめちゃくちゃ気持ち悪いのに、それでも男の人を好きになっちゃうの」

大也「……」

八重子「……ごめんなさい。嫌な思いさせて

ごめんなさい。気持ち悪いな、私がいちばん」

大也「……誰が何を思うかなんて自由なんだよな。あつちやいけない感情なんてこの世にはないんだよな」

八重子「……」

大也「……今、初めてそう思えたわ」

二人、力が抜けてゆく。

大也「おれこれからやつと繋がれそうなんだ。そういう人がやつとできそう。神戸さんには想像もつかないようなつながりだけど、やつと……。だから大丈夫」

八重子「……そっか。私、嬉しいな。諸橋くんがひとりじゃなくて」

大也「……そう」

85 夏月と佳道のマンション・佳道の部屋

(夕)

佳道が部屋のパソコンでチャット中。相手は、SATORU FUJIWARA。

佳道の声「動画、撮りたいですね。あとやっぱり同じ状況の人と繋がりたいですね」

SATORU FUJIWARA「もう一人、来てくれそうなアカウントを見たことがあって……」

佳道の目が輝く。

佳道「……」

86 物業屋(夕)

仕事帰りの夏月、主婦にまじり行列に並んでいる。

夏月「カニクリームコロッケ、二つください」

87 夏月と佳道のマンション・佳道の部屋

(夕方)

もう一人【KOBASE】が加わったチャット。

【KOBASE】「皆さんと動画を撮り合う日が楽しみです」

SATORU FUJIWARA「今更ですが、不安も感じています……自分の性癖を他人に明かしたことがなくて、情報が漏れるのは心配です」

佳道の声「SATORU FUJIWARAさん、動画を撮り合う3人の約束事を決めませんか」

【KOBASE】「確かに、秘密の掟は必要ですね」

佳道の声「撮影した画像や動画は、関わりのない第三者に渡さない。共有するときは可能な限り直接会って行う。それが難しい場合は、メールなどでやり取りしてもいいが、履歴はすぐに削除する」

少し間があつて、

SATORU FUJIMARA「安心しました」

【KOBASE】「そうしましょう、会える日が待ち遠しいです」

SATORU FUJIMARA「最初のパーティーですね」

佳道の声「パーティー」

佳道、トークグループ名を「パーティー」にする。

88 商店街(夕)

夏月、歩いていると、後方から高校生が乗った自転車が一組飛ばしてくる。

夏月、とっさのことでオタオタし、転んでしまう。

啓喜「おい！ 気をつけろ！」

仕事帰りの啓喜、高校生に叫ぶ。

慌ただしく走り去る高校生たち。

啓喜「大丈夫ですか」

夏月「大丈夫です」

夏月、立ち上がるうとして、

夏月「あ、痛」

と尻餅をつき、片足の足首を押さえる夏月。

啓喜「救急車呼びましょうか」

夏月「いえ軽い捻挫です。立てます」

啓喜、夏月に腕を貸す。

夏月、すがって、立ち上がる。

夏月「歩けるみたいです。ありがとうございます」

啓喜「ひどいな、最近の子は。いやね、この辺で接触事故が多発しているから役所に要望書出したばかりなんですよ」

夏月「……そうなんですね」

二人、歩き出す。

啓喜、足を軽く引きずる夏月を気遣ってゆつくり歩く。

夏月「もう大丈夫ですよ。お先にどうぞ」

啓喜「あそこを抜けて向こうなんで、そこまで一緒に歩きます」

夏月「すいません」

物置屋の袋が破れ、一つが潰れて外にはみ出している。

夏月「あ……」

啓喜「あー。ダメでしたか」

夏月「一個は無事です」

啓喜「じゃきれいなのは奥さんが頂くといいですよ。ご主人には黙って」

夏月「……」

啓喜「あー、ごめんなさい。余計なことを」

夏月「どうして結婚してと思われたんですか？」

啓喜「指輪してるから……。あと、なんとなく

く、雰囲気です」

夏月「雰囲気……」

店のショウウィンドウに夏月の姿が映っている。

夏月、立ち止まり、自分の姿を見つめる。夏月「……生まれて初めてです、そんなこと言われたの」

啓喜「？」

夏月、それからちよつと嬉しそうに、

夏月「分かり合える人と一緒に暮らしています」

啓喜「……それが一番ですね」

夏月は初々しく頷くと、啓喜の結婚指輪をさりげなく見て、

夏月「そちらは……」

啓喜「あ、ぼくは……今はちよつと家が広くて」

夏月「？」

啓喜「女房が子供連れて実家帰ってるから」

夏月、啓喜をじつと見て、

夏月「さびしいですね」

啓喜「……そうですね」

夏月「私、こつちなので」

啓喜「じゃあ」

夏月「あの。ありがとうございます」

啓喜「え？」

夏月「のろけを聞いていただきました」

啓喜は笑って手を振って去っていく。
二人は夕日の射す丁字路で別れていく。

89 公園・水飲み場(夕方)

ベンチに座っている夏月と佳道。親子連れが家路について、人氣がなくなり、二人、示し合わせたように水飲み場に立つと蛇口を指で押さえ、いろいろな形の水しぶきを堪能する。
夏月、水しぶきをスマホで撮り始める。
佳道も撮り始める。

あの時のように、水飛沫の向こうで微笑みかけてくる佳道。

声を張り上げる夏月。

夏月「私たち、よくここまでたどり着いたよ」

佳道も明るく声を張る。

佳道「ほんと、よく生き延びた」

90 夏月と佳道のマンション(夕)

二人、濡れた髪を拭きながらソファにいます。

夏月「そう言えばあの人がどうだった？」

佳道「SATORU FUJIWARA だ」

夏月「そっ」

佳道「あー、うん。今度、動画の撮りっこしませんでした。そしたら会ってみたいって

さ。会うタイミング探ってるどころ」

夏月「え、そこまで話が進んだら」

佳道「チャットで色々話したんだけどさ、ハドルネーム、やっぱりあの事件からだった」

夏月「やっぱりね。年齢同じくらいかな」

佳道「もっと若そう。学生じゃないかな？もう一人会いたがってる人がいて、この人は服が水に濡れてるのが好きなんだって。だからいつそ三人で会おうかってなってる」

夏月「え、私も行きたい」

佳道「大丈夫な人たちかわかったらね」

夏月「うん、そーじゃね。……私ね、今日、デートってこういうことなんかもって思った」

佳道「……」

夏月「お互いに恋愛感情がないって時点でそもそも違うんかもしれんけど、社会の中にいるっていうか……地球の真ん中にちゃんという感じがした」

佳道「ああ」

夏月「性欲って誰にとっても基本後ろめたいもんだと思う。それでも私が、私たちが抱えてる欲望はあっていいもんだと思いたい。この星で生きていいんだって思いたい」

佳道は静かな目で頷く。

夏月「私、危なかったと思う。佐々木くんいなかったら」

しばしの穏やかな沈黙。

夏月「ねえ、すごい変なこと頼んでええ？」

佳道「何を今さら、この生活以上に変なことないでしょ」

夏月「はいじゃあ、お願いしちゃおうかな。一回経験してみたくて」

佳道「何」

夏月「セックス」

91 同・夏月の部屋(夜)

二人は薄明かりの夏月の寝室に入る。

服を着たままベッドに腰を下ろす。

距離が近い。

佳道「嫌だったら言ってる」

夏月「今ところ大丈夫」

佳道「電気消しとくのが正解なのかな」

夏月「これくらいでええんじゃない？」

佳道「そっか」

夏月「ほんまにしたいわけじゃなくて、その状況を体感してみたいってだけなんよ」

佳道「わかった。いやよくわかんないけどわかった」

と三つと、立ち上がって、

佳道「桐生さんが仰向けに寝転んで、俺が覆

い被さるんだと思う。多分」

夏月、寝転ぶ。

夏月「で？」

佳道「えーっと多分、桐生さんは思いつきり脚開くんじゃないかな」

夏月「は？　こう？　うわーM字開脚ってこういう意味だったんじゃ、うわー変態じゃん」

佳道「変態だよ、みんな」

佳道、ゆっくり跪くと、掌で体重を支えて前傾姿勢になる。

佳道「これで合ってるかな？」

と夏月に覆いかぶさる。――顔が近い。

佳道「桐生さん、ちょっと手回して、首に」

夏月、手を回す。

佳道「この状態が、正常位かな」

二人の衣服越しに互いの性器あたりが触れ合う。

夏月「私いま、死んだカエルみたいじゃない？」

佳道「これが、皆のしてることなの？」

夏月「好きな人と出会って、連絡先交換して、駆け引きとかして、おしゃれして、デートして、その最終ゴールがこれ？」

佳道「しかも皆さんは裸になってこの状態で性器を出し入れするらしいですよ」

夏月「やば。ちょっとその動作やってみてや」

佳道が腰を動かす。

佳道「ん？　こう？　合ってるのかな、これ」

ギシギシとベッドのスプリングが軋む。

夏月も佳道も自分の思いの中に沈む……。

ややあつて、佳道は動きを止める。

夏月「疲れた？」

佳道「なんか。普段使わない筋肉使ったって感じ。あした筋肉痛になりそう。普通の人でも大変だな」

夏月「あんさ」

佳道「何？」

夏月「どんって、私の上に落ちてきて欲しい」

佳道「え？」

夏月「前の職場で、セックスそのものより、終わった後、くたくたになった相手が覆いかぶさってくるのが好きだった人がいたんですよ」

佳道「なんで？」

夏月「愛おしいんだって」

佳道「俺最近太ったけど大丈夫？」

夏月「大丈夫。現実にはできるだけ近い感じだよ」

佳道「現実知らないんだけど」

夏月「そっか、そうよね」

佳道「じゃあ、いくよ、いくからね」

佳道は遠慮なくどんと夏月の上に落ちる。

夏月は「うつ」とうめいた後、佳道の背中に腕を回す。

佳道も夏月の頭を抱きしめる。

しばしの沈黙。

夏月「ここにいていいって言ってもらえとるみたい」

佳道「……うん」

夏月「どうしよう」

佳道「ん」

夏月「私もう、ひとりで生きてた時間に戻れんかも」

佳道「うん」

夏月「いなくならないで」

佳道「いなくならないで」

二人は抱擁したままじっと動かない。

――溶暗。

92 ある広い公園（休日の午後）

佳道、大也、矢田部陽平（32）、楽しそうに水で戯れている。

親子連れの児童も参加して、水鉄砲で撃ち合う。

大人も子供も水浸しになって、その姿をカメラで撮り合う。

佳道の童心に返ったような笑顔。

大也の心からの笑顔。
矢田部の善良そうな笑顔。

93 千葉県内・小学校の教室（公園の日から2ヶ月後）

矢田部、朗らかに授業をしている。

94 同・小学校前の通り（夕）

帰宅する矢田部、児童たちに手を振って歩いていく。

95 矢田部のアパート・前（夕）

帰宅した矢田部。

ドアノブを回した瞬間、どこに潜んでいたのか捜査員数名が現れて令状を示し、捜査員「矢田部陽平だな？ 児童買春容疑で逮捕する」

捜査員、無言で十代半ばの少年の写真を突きつける。

捜査員「2019年4月1日池袋駅北口のホテルでこの少年を買ったな」

矢田部、何も言えない。

捜査員、そのまま部屋にドカドカ入っていく。

96 同・室内（夕）

捜査員らがパソコンを押収し、部屋中を

漁っている。

97 横浜地方検察庁・一室（日替わり）

啓喜、矢田部のパソコンに入っていた大量の動画と画像を見る。

最初のフォルダには水飛沫が映った画像や動画と、公園で大人が男児たちと水遊びをしている画像。

水鉄砲を持つ佳道と大也、矢田部の姿。啓喜は興味なさげにそれらを弾いていく。ある動画にくる。矢田部の囁き声が響いてくる。

男児に対する性行為の動画であることがわかる。

啓喜、見る見るうちに陰しい表情になっていく。

98 同・執務室

啓喜、越川、矢田部を取り調べている。

啓喜「資料見ながら」この子なんて、まだ自分が受けた被害がなんなのかわかっていないんだろ？」

矢田部「……」

啓喜「矢田部。7月21日に撮影されたデータ、二人の人物に送信したよな？」

矢田部、俯く。

啓喜「「パーティー」というグループ、小児

性愛者の仲間だな？」

矢田部「……」

啓喜「お前は KOBAN を名乗っていた7月21日、仲間の二人も一緒にいた、だよな」

矢田部、否定とも、肯定ともとれる目をして顔を上げる。しかし、何も言わない。

矢田部「……」

啓喜が業を煮やして、

啓喜「もううんざりなんだよ。どんな世の中がおかしくなっていく。お前らみたいな奴がいるとおちおち子育てできないよ！」

矢田部「すいません」

啓喜「お前らの欲望は人の人生を変えるんだよ。お前らは絶対悪なんだよ！ わかってんのか！」

啓喜、机を拳で叩きつける。

矢田部、うなだれる。

99 夏月と佳道のマンション・前（夕）

総業の入った袋を下げて軽い足取りで帰ってくる夏月。

警察車両と野次馬が集まり、騒然となっている。

夏月、不安そうな顔で立ち尽くす。

自宅から佳道が捜査員に連行されていくの見える。

佳道と夏月の目が合う。

佳道、静かな目で首を振る。

夏月、茫然としたまま、警察車両に乗せられる佳道を見送る。

夏月「……」

100 横浜地方検察庁・執務室

啓喜、越川、大也を取り調べている。

啓喜が無言の大也をじっと見て、

啓喜「SATORU FUJIWARAかあ」

大也「……」

啓喜「何やってんだよ、学生が。親泣いてたらしいな」

大也「……」

啓喜「いつから子どもに興味持つようになったの」

大也、顔を上げると、

大也「子どもには興味ありません。ぼくは……水が好きなんです」

啓喜と越川、一瞬、視線を交わし合う。

啓喜「面白いこと言うね。誰の入れ知恵？」

大也「本当です……」

啓喜「水遊びの子どもじゃなく、水。（薄笑い）……面白すぎるね」

大也「……僕は……水が好きなんです……」

越川「……」

啓喜、机を叩く。

啓喜「そんなふざけた言い訳通用するかよ。水？ いい加減にしろ」

大也、それでも顔を上げる。

啓喜「子どもを騙して何やってんだお前ら。バレバレなんだよ」

顔を上げて啓喜を見つめ、大也が話し出す。

大也「……ぼく、ずっと、あんな日がなくて……同じことをわちあえるなんて……全然、なくて……それが罪なんですか？」

啓喜、苛立つたため息をつく。

啓喜「……」

× × ×

佳道、無言で座っている。

啓喜、腕組みして佳道を見つめている。

佳道が顔をあげる。

佳道「子どもを傷つけたことはありません」

啓喜「矢田部はみんな吐いたよ。お前と諸橋の口裏あわせの言い訳さ、あれもつとましい嘘を考えなよ。時間の無駄」

佳道、俯いたままおもむろに、

佳道「検事さんは明日生きていたい人ですか」

啓喜「？」

佳道「僕はみなさんの世界で、怪しまれないように、自分がどんな人間かバレないように、明日生きたい人のフリをして生きてき

ました」

啓喜「何言ってるんだ？」

佳道「僕がもし、明日死にたくないって気持ちになったら、歩き慣れた世界はどう見えるのかな……ずっと知りたかった」

啓喜「……」

佳道はそれ以上、答えず、黙る。

佳道「……」

101 同・一室

啓喜、貧乏ゆすりしながらコンビニ弁当を食べている。

手には以前越川にもらった藤原悟の新聞記事。

越川、手元のカップ焼きそばを佯しく見つめながら、

越川「明日か……明日……」

啓喜の目の前に、ペットボトルの水。

啓喜「……」

102 同・廊下

夏月が職員に連れられてやってくる。

103 同・執務室

啓喜と越川が待っている。

夏月が入ってくる。

啓喜「あつ」

4

夏月も啓喜を思い出すが、

夏月「よろしくお願いします」

と静かに頭を下げる。

越川、不思議そうな顔をする。

啓喜「お疲れのところすみません。はじめに伝えておきますが、たとえ被疑者のご家族の方であつても事件について詳しいことはお話しできないんです。こちらの質問に答えていただくのみになります」

夏月「はい」

啓喜「単刀直入にいきます。奥さんの視点から、佳道さんが幼い子どもに興味を持っているといったそぶりはなかったですか」

夏月「ありません」

啓喜「でも実際そうだった動画や画像が押収されてるんですよ」

越川、証拠の動画や画像を次々と並べていく。

夏月、動じることなくそれらの証拠品を見つめている。

啓喜「一緒に街を歩いている時、公園で遊んでいる時、テレビを見ている時、彼が子どもを見る目に特別なものはありませんでしたか」

夏月「ありません」

啓喜「わかりますよ。卑劣な犯罪ですからね。起訴されたらご家族にも会社にも顔向けで

きません。でも被害者のことを考えてください。彼の犯罪で深い傷を負った子どもたちがいるんですよ」

夏月「夫は加害をしたと話しましたか？」

啓喜「被疑者の供述内容については、教えられません」

夏月「夫は加害者ではありません」

啓喜「……」

夏月「誰かの手で被害にあつた子どもがいるとしたら、夫も私もひどく悲しいです」

啓喜、しばし黙っていたが、

啓喜「押収した画像には、奥さんと公園で水遊びをしているものも見つかりました」

夏月「……彼はなんと言っていますか」

啓喜「それはお答えできません」

夏月「では私も答えません」

啓喜、藤原悟の新聞記事の切り抜きを差し出す。

啓喜「藤原悟をご存知ですか？」

夏月、記事を見て、目が一瞬、輝く。

夏月「これは彼が？」

啓喜「あなたが夫婦は、水に何か特別な思いでもあるんですか？ 水に性的な関心があるとか」

夏月「……」

啓喜「……ま、ありえないですけど」

夏月、沈黙していたが——おもむろに顔を

を上げ、

夏月「自分がどんな人間か人に説明できなくて、息ができなくなったこととてありましか」

啓喜「はい？」

夏月「生きていくために必死だった道のりを、ありえないって簡単に片付けられたこと、ありますか」

啓喜「……」

夏月「誰に説明したってわかってもらえないもの同士、どうにか繋がりがあって生きてるんです」

啓喜「……」

夏月「そんな生活を、誰に説明したってわかるように作られた法律が壊すの？」

啓喜「……」

夏月「あなたが信じなくても、私たちはここにいます」

啓喜「……」

越川「……」

啓喜、固まる。

夏月、しばらく黙っていたが、

夏月「戻ってこられましたか？ ご家族は」

啓喜「今、私の話はしていません」

夏月「そうですね、失礼しました」

ややあつて、

啓喜「……調停中です」

越川、啓喜をチラ見する。

啓喜、続けて何かを言おうとするが……やめる。

夏月の、啓喜を見る目が、少しだけ軟らかくなる。

夏月「あの」

啓喜「はい」

夏月「彼に伝言をお願いしますか」

啓喜「できません。それは弁護士を通してください」

夏月「わかりました」

啓喜、黙っていたが、

啓喜「……参考までに、何を伝えようとしたんですか」

夏月「普通のことです」

啓喜「普通？」

夏月「いなくならないから、って」

啓喜「……」

夏月「……」

（了）

花腐し

荒井晴彦 中野太

〈脚本家略歴〉

荒井晴彦（あらい はるひこ）

1947年1月26日生まれ、東京都出身。若松プロダクションの助監督を経て、1977年、日活ロマンポルノ『新宿乱れ街』いくまで待って（曽根中生監督）で脚本家デビュー。キネマ旬報脚本賞を『Wの悲劇』（84年・澤井信一郎監督）、『リボルバー』（88年・藤田敏八監督）、『ヴァイブレータ』（2003年・廣木隆一監督）、『大鹿村騒動記』（11年・阪本順治監督）、『共喰い』（13年・青山真治監督）で受賞。橋本忍に並んで最多受賞となる。その他、『赫い髪の子』（79年・神代辰巳監督）、『神様のくれた赤ん坊』（79年・前田陽一監督）、『遠雷』（81年・根岸吉太郎監督）、『キャバレー日記』（82年・根岸吉太郎監督）、『ダブルベッド』（83年・藤田敏八監督）など。97年に『身も心も』を初監督し、以降『この国の空』（15年）、キネマ旬報ベスト・テン第1位に輝いた『火口のふたり』（19年）、『花腐し』（23年）と、4本の監督作がある。企画・共同脚本を手がけた『福田村事件』も話題になり、ミニシアターのヒット作となった。



中野太（なかの ふとし）

1968年生まれ。新潟県新潟市出身。中央大学文学部哲学科卒業。日本シナリオ作家協会シナリオ講座修了後、荒井晴彦に師事。1998年ピンク映画『黒と黒』（98／新里猛作）で脚本家デビュー。主な作品に『愛妻日記より／饗宴』（06／緒方明）、『薔薇』（08／坂本礼）、『さよなら歌舞伎町』（14／廣木隆一）（荒井晴彦と共同脚本）、『夢の女 ユメノヒト』（16／坂本礼）、『甲州街道から愛を込めて』（22／いまおかしんじ）、『終末の探偵』（22／井川広太郎）（木田紀生と共同脚本）、『LONESOME VACATION』（23／下社敦郎）（下社敦郎と共同脚本）、『二人静か』（23／坂本礼）、『蒲団』（24／山崎晋平）、『つゆのあとさき』（24／山崎晋平）（鈴木理恵と共同脚本）などがある。



監督・荒井晴彦
原作・松浦寿輝「花腐し」（講談社文庫）

製作委員会・東映ビデオ バップ

アークエンタテインメント

製作幹事・東映ビデオ

制作プロダクション・アークエン

タテインメント

配給・東映ビデオ

〈スタッフ〉
プロデューサー

共同プロデューサー

撮影

照明

録音

美術

編集

音楽

佐藤現

田辺隆史

永田博康

末吉大平

川上皓市

新家子美穂

佐藤宗史

川井稔

深田晃

原田恭明

洲崎千恵子

柴田奈穂

太宰百合

〈キャスト〉

羽谷修一

伊関貴久

桐岡祥子

桑山篤

寺本龍彦

リンリン

ハン・ユジョン

金昌勇

韓国スナックのママ

小倉多喜子

沢井誠二

綾野剛

柄本佑

さとうほなみ

吉岡睦雄

川瀬陽太

M I N A M O

N i a

マキタスポーツ

山崎ハコ

赤座美代子

奥田瑛二

○ 入り江に雪が舞っている

T・2012年12月。

波打際に桐岡祥子(32)と桑山篤(41)の水死体が打ち上げられている。
互いの手首がホテルの浴衣帯で結ばれている。

○ 桐岡家・玄関

時々、雪が降り込んでいる。

喪服姿の栩谷修一(41)がコートを持ち、立っている。

花が届いたりしている。

祥子の父・賢三(64)と母・波江(60)が来る。

栩谷「栩谷といえます。東京で一緒に仕事をしました」

波江「仕事って」

栩谷「映画やってました」

賢三「……なにに来了た」

栩谷「……祥子の、祥子さんの顔を見たくて来了ました」

賢三「……断る。おまえたちが悪いんだ」

波江、ハンカチで涙を拭う。

賢三「女優になりたいって、高校出たら、東京へ行って。俺はなれるわけないって反対したのに、言うことも聞かずに……」

波江「あの娘は女優になれたんですか」

栩谷「……女優でした」

賢三「テレビで見たことなかったぞ」

栩谷「……」

波江「一緒に死んだ人は、監督だっていうじゃないですか」

栩谷「いい監督といい女優でした」

賢三「それがなんで心中なんかするんだ。死んだ男は結婚してて、子供でもいたのか」

栩谷「独身でした」

賢三「じゃ、どうして。心中なんかしないで、結婚すればいいじゃないか」

栩谷「……俺たちにも分からないんです」

賢三「死にたいのなら、ひとりで死ねばいいだろ。祥子を殺さなくたっていいだろう」

栩谷「……」

○ 二本木駅・ホーム

栩谷、コートのポケットに手を入れ、ベンチに座っている。

雪の中、列車が近づいてくる。

○ 栩谷が多摩モノレール高架下を歩いていく

○ 斎場・通夜会場

栩谷、入ってくる。

棺の見えるテーブル席で、桑山の親族

に混じり、新映社長・小倉多喜子(75)、

監督・サトウトシキ、監督・いまおかし

んじ、監督・女池充、監督・坂本礼、助

監督・小西拓海、女優・伊藤清美らが飲んでる。

栩谷、桑山の両親・宏(75)と信子

(72)に歩み寄り、

栩谷「この度は、ご愁傷様です。突然のこと

で驚いてます」

信子「栩谷君、ごめんなさいね。篤と死んだ子、栩谷君と同棲してたんでしょ。ごめんなさい……」

宏「篤と祥子さんという方は付き合ってたんですか」

栩谷「僕も何が分からなくて……」

小倉「私が映画を撮らせてあげることができなかったのがいけなかったんですよ。ピンク映画も厳しい状況が続いてて、うちの会社も、もう5年、製作できてないんです。

私が撮らせてあげてれば、あの子死ななかつたかも……」

栩谷「桑山の顔見てくる」

栩谷、棺に向かう。

開いた棺の窓から桑山の顔を見る。

栩谷「桑山、どうして……」

寺本龍彦が瓶ビールとコップ二つを持ち、栩谷の傍に来る。

棚谷「みんな、来てるの」

寺本「田尻は現場で来れないって」

棚谷「そっか」

寺本、コップを棺に置いて、ビールを注ぐ。

寺本、コップを取り、置いてあるコップにカチンと合わせると飲む。

棚谷「これ、桑山の？」

寺本「いいよ、あいつ、もう飲めないんだから」

棚谷、コップを取ると飲む。

寺本「どうだった、祥子の葬式」

棚谷「祥子の顔見せてもらえなかったよ」

寺本「ひでえな」

棚谷「一緒に暮らしてたって言えなかった」

寺本「言ったら、顔見せてくれたんじゃないの」

棚谷「祥子の親、同棲相手は桑山だと思ってる」

寺本「……同棲して何年だった」

棚谷「6年」

寺本「長いな」

棚谷、領いて、ビールを飲む。

寺本「みんなと飲もう」

領く棚谷、寺本と通夜ぶるまいの席の方へ行く。

坂本「フィルム上映じゃなくなるし、これか

らはピンクもデジタルか」

小倉「フィルムで、ピンク専門の映画館でかかるのが、ピンク映画だって、あの子」

坂本「新宿国際も浅草シネマ、世界館も、9月に閉じちゃったし」

寺本「桑山はピンクにこだわってたよな」

女池「あいつ、清美さんが大好きで、必ず出てもらってたよな」

清美「桑山くん、穏やかな監督だったよな。現場で怒ったの見たことないし……優し

きたのかもね」

いまおか「仕事がないわけじゃなかったんだ。あいつ、青春日の監督、断ったし」

寺本「あれは仕事じゃねえよ。スタッフにまともにギャラ払えない予算なんだから」

坂本「50万じゃ、みんな、タダつすよ」

いまおか「俺、タダでも撮りたい」

女池「俺、タダでも撮れない」

小倉「笑って」女池、何年、撮ってないの？」

女池「10年」

寺本「監督はタダでもしょうがないよ。スタッフや役者はどうすんだよ。映画作りたいって俺たちの気持ちを利用して、50万で作らせて、DVDで儲けるんだろ、製作会社が。いまおか、どうなんだよ、お前、撮ってるだろ」

いまおか「映画、撮れるなら、俺は手を汚すよ」

坂本「それ若松孝二でしょ」

小倉「若ちゃん、本当に手汚したからね」

寺本「手を汚して、いいモン撮ってんのかよ。おまえは、ただ手汚して、映画汚してるだけなんだよ。映画を貧しくしてるだけなんだよ」

いまおか「俺たちは撮ってなんぼだ。撮れないからって、ひがむなよ」

寺本「バカヤロー！ 監督にとつて大事なのは、何を撮るかじゃなくて、何を撮らないかなんだよ」

いまおか「女働かせて、釣りばかりやってよく言うよ。久美ちゃん、子供できたらしいじゃないか。どうすんだよ、久美ちゃん、働けないよ。新しい女作って貰がせるのか」

寺本「うるせえ！」

寺本、いまおかに食ってかかり、もみ合う。

坂本が割って入る。

助監督の小西が泣き出す。

小西「みんな悲しくないんですか。桑山さんが死んじゃったんですよ。喧嘩なんかしちゃって。桑山さんの通夜なんだよ」

清美「小西くんは、桑山くんの助監ずっと

やつてたもんね」

小西「お前が撮る時は仕切ってやるからなつて……」

と、手酌で日本酒を飲んでいたサトウがテーブルを叩く。

一瞬、座がシーンとなる。

サトウ「榎谷 なんて様子が見えなくて心の中なんだ。なんで死ななきゃならなかったんだよ」

榎谷「……ザリガニが死んだからかも」

サトウ「ザリガニ？」

榎谷「ああ……」

○ 高円寺・ガード下飲み屋街

まだ開いている飲み屋もある。

歩いて行く榎谷。

○ 高円寺ハイツ・部屋

榎谷、コートを脱ぎ、携帯メールを確認する。

薬缶に水を入れ、火にかける。

冷蔵庫から缶ビールと冷凍したご飯を出し、電子レンジに入れる。

缶ビールを一口飲み、水切りかごから、

ご飯茶碗を取る。

箸スタンドに青い箸と赤い箸。

榎谷「……（青い箸を手取る）」

榎谷、缶ビールを持ったまま、ロフトの梯子を上り、灯りをつける。

フローリングの部屋に、マットレスと鏡台と洋服掛けにタンス。

榎谷、鏡台の引き出しを開ける。

化粧品が無造作に置いてあるだけ。

電子レンジがチンとなる。

榎谷、引き出しを閉め、梯子を下りると、

永谷園のお茶漬け海苔をご飯にかけ、お湯を注ぐ。

榎谷、テレビのリモコンを押す。

テレビからニュースアナウンサーの声。

アナウンサーの声「2012年の暮れも押し

し迫った昨日12月16日、第46回衆議院選挙

が投票され、自民党が294議席を得

て圧勝、野田佳彦首相率いる民主党政権に

代わり、3年3ヶ月ぶりに政権を奪還しま

した」

榎谷、テレビを消し、お茶漬けを啜る。

○ 榎谷が歩いてくる

どこから流れてくる山下達郎の『クリ

スマス・イブ』のメロディ。

○ 新映事務所・内

榎谷が預金通帳を小倉に見せて、

榎谷「三日に分けて、振込み限度額の100

万が桑山の口座に振り込まれてる」

小倉「桑山がいなくなる、ちょっと前にカード貸したんだ。何に使うのって訊いたら、

今、手伝ってる現場でどうしても現金がいるからって。いつものことだから、気にし

なかったんだけど」

榎谷「300万も何に使う気だったんだろ

う」

小倉「二本撮れるね」

小倉、本棚から台本を取り出し、榎谷に

渡す。

『くちびる』とタイトルされた製本前の

台本。

小倉「ずいぶん前に、桑山が様子主演で、ど

うしても撮りたいって、渡されて。整理し

かれてないから、ホンヤ、入れて、練り直

しなさいって。あんたも読んでるでしょ」

榎谷「（頷き）これ、撮るつもりで金を？」

小倉「それなら心中なんてしないでしょ」

榎谷、台本を捲る。

小倉「榎谷は何年、撮ってないんだっけ」

榎谷「もうすぐ5年かな」

小倉「みんなには黙っていたけど、うちの会

社、もう厳しいの」

榎谷「うん……」

小倉「もうこれ以上、続ける体力はないん

だ」

栩谷「うん……」

小倉「最近、上野のこと、よく考えるの。子供ができて、映画じゃ、食えないからって、奥さんの実家の気仙沼に行つて……あの時私が引き止めてれば、あの子は津波に流されずに済んだ」

栩谷「オネエのせいじゃないよ」

小倉「せめて、遺体が見つかったくれればよかったんだけど……上野も桑山も幽霊でいいから、私に会いに来ないかな。あつちで、ピンク、撮つてんのかねえ」

栩谷「ここに来て、いいですか。アパートの家賃、払えなくて」

小倉「うん」

○ 高円寺ハイツ・部屋

栩谷「引越しの荷造りをしている。

食器棚から、食器を取り出し、ゴミ袋に捨てる。

○ 同・ロフト

栩谷、桑山と祥子、三人で撮った土手でのロケスナップと祥子がスナックで、カラオケを歌うスナップ写真を見る。

写真をポケットに入れる。

栩谷、タンスから、祥子の下着を出し、ゴミ袋に捨てる。

○ 同・ゴミ集積所

栩谷、両手に持ったゴミ袋を捨てる。

赤い箸がゴミ袋を突き破る。

○ 青年（渡辺）がスマホのグーグルマップ

を見ながら、キヨロキヨロしている

マンションに入つて行く。

○ 新映事務所・内

ベランダに藤の鉢植え。栩谷の下着が干してある。

部屋の中に段ボール箱が積まれている。

玄関のチャイムが鳴っている。

ソファで、毛布に包まり、眠っていた栩谷が起き、玄関を開ける。

渡辺研（21）が立っている。

渡辺、髪はぼさぼさで、無精髭を生やした栩谷のTシャツ、トランクス姿に驚く。

栩谷「（眠い目を擦りながら）なに？」

渡辺「ここで働かせてもらえないでしようか」

栩谷「ん？」

渡辺「あ、僕、渡辺と言います」

栩谷「……まあ、どうぞ」

と部屋に入る。

栩谷、冷蔵庫から缶ビールを出し、

栩谷「飲む？」

渡辺「あ、いえ、結構です」

栩谷、缶ビールを飲み、

栩谷「座りなよ」

渡辺「失礼します」

とソファに座る。

栩谷、毛布をどかし、座る。

栩谷「将棋できる？」

渡辺「……一応」

栩谷、折りたたみの将棋盤と駒を取り出し、駒を並べながら、

栩谷「何でピンクなんかやりたいの」

渡辺「僕、宮島監督に憧れて。宮島監督、若い頃、新映でいっぱい傑作撮つてるじゃないですか。それでメジャー行つて。僕もピンクで修業したいんです」

栩谷、顎で駒を指し示す。

渡辺「あ、はい」

と駒を並べる。

渡辺「徹夜明けですか」

栩谷「アパートの家賃、払えなくて、ここで寝泊まりしてる」

渡辺「……」

栩谷「俺も、宮島さんに憧れて、ここに来たんだよね」

渡辺「いいですよ、宮島監督」

栩谷「もう、うちで製作することはないよ」

渡辺「え？」

棚谷「金なくて、もうつくれないんだ。今日も、これからこの家賃の滞納で、大家んとこに頭を下げに行く。4ヶ月、滞納してんだ。一緒に行く？」

渡辺「あ、いえ……」

渡辺、駒を並べる棚谷を見て、

渡辺「……僕、帰っていいですか」

棚谷「指してけよ」

渡辺「……やっぱり帰ります」

渡辺、出て行く。

棚谷、缶ビールを飲む。

○ サンシャイン興業・事務所

棚谷が入ってくると、金昌勇(52)がギターを弾きながら「君は天然色」を歌っている。

金「へ過ぎ去った過去しゃくだけけど今より眩しい想い出はモノクローム色を点けてくれ」

金が歌い終わると、棚谷、拍手して

棚谷「新映の棚谷です。家賃、もうちょっと待ってもらえませんか」

金「まあ、おたくとは長い付き合いだし、大目に見てあげたいけどね」

棚谷「……お願いします」

金「今さ、俺の持つてる古いアパート、取

り壊して、マンションにしようと思ってる。居住者には相応の手当てをやってもう疾うに出ていってもらったんだけど、一人だけどうしても立ち退かずに頑張ってる男がいるんだよ。棚谷さん、そいつを何とかしてもらえないかな。若いのを何人か遣ったんだが、もう半年も埒があかないまんまで、実際、ちよつと困っちゃってね」

棚谷「でも、俺なんか行つたつて」

金「男のマントをどうやって脱がせるかというお伽噺があるだろ。北風でびゅうびゅう吹きまくるやりかたもあるし、お日様でぼかぼかあっためて自然に脱ぐように仕向けるというやりかたもあるし。コワモテで行くか、オダテで行くかっていうわけだね。その辺はあなたの判断に任せるから、ちよつとひと肌脱いでくれないもんな。もしその伊関っていうやつを何とかしてくれたら、家賃のほうは、多少は色をつけて考えようじゃないか。まあ、必要経費ということだね」

金、メモ用紙に住所を書く。

金「できたら室内の様子も見てきてよ」

棚谷「キムさんは、在日コリアンですか。チャイニーズ？」

金「中国ならキン、朝鮮ならキム、俺は日本人。偽朝鮮人」

棚谷「……!？」

○ サンシャイン興業のあるビルから出てくる棚谷

○ 棚谷、歩いている

○ 梯子坂を上る棚谷が立ち止まる目の前に雨の切れ目。

棚谷の足元の階段が上から流れてくる雨で濡れている。

棚谷、雨の中に入って行く。

○ 棚谷、アパートを探しながら、雨の中を歩いていく

○ 棚谷、軒下で雨宿りしながら、金から受け取ったメモを見ている

棚谷、鉛色の空を見上げる。

祥子の声「どうして、そんなに濡れるの、肩も背中もずぶ濡れじゃないの」

○ 高円寺ハイツ・部屋(2009年)

祥子(29)、棚谷(38)が脱いで放り出したジャケットとシャツを拾い上げ、鼻を近づけると、眉間にかすかな縦皺が寄る。

祥子「変なひとねえ、ずっと傘差してたのに、
どうして、こんなにぐしょぐしょになるの。
傘の差し方、知らないの」

祥子、正座して、棚谷のジャケットをタ
オルで押さえる。

祥子「クリーニングから戻ってきたばかりな
のに」

祥子の髪は湿り、こめかみにはかすかな
雨滴交じりの汗が滲み、剥き出しになっ
た膝小僧が白く光っている。

祥子、ジャケットをハンガーに掛ける。

棚谷、祥子の肩に手を掛けて引き寄せる。
祥子、頬を紅潮させて棚谷の脇の下に顔
を埋めてくる。

○ 築60年の木造二階建てのアパート・あま
や荘

棚谷、玄関前の立ち入り禁止の鎖を跨ぎ、
ガラス戸を開け、玄関に入り、郵便受け
と下駄箱の19番を探す。

宅配ピザの出前の案内のチラシが投げこ
まれている中、19番の『伊関』という小
さな下手な字の名札をセロハンテープで
貼り付けたボックスだけは空っぽになっ
ている。

棚谷、靴を脱ごうか迷うが脱がずに上が
る。

棚谷、階段を昇ってゆく。

階段の踊り場に、丈の長い古ぼけた鏡が
掛かっている。

棚谷、鏡の前に足を止めて、自分の顔を
覗きこむ。

無精髭の伸びた棚谷の顔。

二階の廊下を歩く棚谷、19号室の前で立
ち止まる。

息を殺して、耳を澄ますが、中から何の
音も聞こえない。

棚谷、拳でドアを叩く。

棚谷「伊関さん、ちょっと話がしたいんだけ
ど」

何の反応もない。

ノブを回し、押したり引いたりするが、
鍵が掛かっている。

と、部屋の中で、「フツツ」という女の
含み笑いが聞えたような気がした。

棚谷、「ガン、ガン、ガン」と大きく叩
き、四発目が触れる直前にドアが外側に
開く。

伊関貴久(37)がのっそりと現れ、
伊関「ドア、壊すつもりか」

棚谷「伊関さんですか」

伊関、じつと棚谷の顔を見ている。

棚谷「用件はわかると思うけど——」
伊関「わかんねえな」

棚谷「出てってくれてことなの」

伊関「あんた、何よ」

棚谷「家主の代理だよ」

伊関「代理って何よ」

棚谷「頼まれて来たんだよ。ちょっと入れて
くれる」

伊関「困るな」

棚谷「ここじゃ話、できないから」

伊関「できないことはないでしょ。言いたい
ことだけ言って、帰ってくれよ」

棚谷「まあ、中で」

と部屋に入ろうとする。
立ちふさがる伊関、後ろ手にドアを閉め
る。

棚谷「あんたはもうここに住む権利はない。
出てってほしい。そういうことなんだよ」

伊関「家賃は毎月払ってる」

棚谷「払われても困るわけ。契約はとづくに
切れてるんだろ」

伊関「あんた、お名前は」

棚谷「こんな電気も止められちゃったほろア
パートに居座っても馬鹿馬鹿しいだけで
しょ。立退き料もつと釣り上げようってい
う魂胆なら——」

伊関「お名前は」

棚谷「……棚谷」

伊関「クタニってどういう字？」

栩谷「どうでもいいでしょ。あのねえ、わかつてるの——」

伊関「ククッ」と声を洩らし、

伊関「クタニさん、わりと、お優しい性格みたいだね」

栩谷「何だ、おまえ」

伊関「おまえ呼ばわりはやめてよ。いや、あのね……（せせら笑い）いきなり手が出るとか、もつとヤバイ方の人が来るかなって思ってたんだけど、意外に紳士的なんで驚いたわけ」

栩谷「舐めんなよ、この野郎」

と言ってみるが、迫力は乏しい。

伊関が掌で栩谷の胸を突き、栩谷は後ろへよろめく。

栩谷、伊関の両肩を思い切り突く。

伊関、ドアに頭をぶつけ、ずるずるとしゃがみこむ。

伊関「痛え……」

栩谷「とにかく明日にでも出てけよな。じゃ、ま、俺はそれを言いにくただけだから」と踵を返す。

伊関「まあ、ちよつと入っていかない？」

栩谷、振り返る。

伊関、立ち上がり、ドアを開け、

伊関「部屋の中、見てこいつて、言われなかった？」

栩谷「……」

○アパート・伊関の部屋

栩谷と伊関が入ってくる。

伊関、壁に手を伸ばし、部屋の明かりを点ける。

栩谷「電気、点くのか」

伊関「この部屋の電気代はメーターが別でちゃんと払ってるから。水も出るけど、ガスだけは元のところで止められちゃったんだよね」

栩谷、靴を脱いで、畳敷きの六畳間に上がりこむ。

伊関「湯も沸かせなくなったから、しょうがなくてカセットコンロ、買っちゃった」

と頭の後ろをさすりながら、サンダルを脱ぎ、框に上がる。

レコードプレイヤーを納めたラックが一つ、ぎつしり本の詰まった丈の高い本棚が二つ、窓際のデスクに閉じたノートパソコンと金魚鉢がある。

伊関、タオルを渡し、

伊関「まあ、ちよつと飲もうじゃないの」

栩谷「遠慮しとく」

伊関「そう言わないで、なんか俺、あんたのこと好きだよ」

栩谷「別に好かれたくないから」

と卓袱台の前に座って胡坐をかく。

伊関「とにかくビールでも飲んでつてよ」と冷蔵庫から缶ビールを二個出し、栩谷に一個を放る。

栩谷、思わず、キャッチする。

伊関「ここ何ヶ月、入れ代わり立ち代わり若いのが来たけどさ、あんた、感じが違うね。金昌勇の何なんですか」

栩谷「……（缶ビール開けて）俺の後は今度こそ本当に顔に傷のあるような連中が押しかけてくるぞ」

伊関「まあ、ねえ……」

栩谷「キムっていうのはあ見えて、けっこう怖いところあるし」

伊関「そうなの？」

栩谷「いろんなかがわしい繋がりがあるみたい。いつまでも調子に乗ってこねてると……まあ、俺の知ったことじゃないけど」

伊関「居心地良いからさ、もうちよつと居させてよ」

栩谷「キムはこのアパート、早く取り壊してマンション建てたいんだろ」

伊関「みたいだね。このアパート、韓国、中国人が多かったんだけど、震災があったり、在特会のデモなんかで、みんな、出てったんだよね」

栩谷「さっき女の声が聞こえたけど」

伊関「気のせいでしょ」

栩谷「いや、確かに聞こえた」

伊関「誰もいないよ。女とは一緒に暮らしてないし」

栩谷「仕事はしてないのか」

伊関「昔はシナリオ書いてたんだ。AVでど仕事もしたことある」

栩谷「会社、どこ」

伊関「アタックっていうレーベルの下請けやってる小さな制作会社から仕事もらってた」

栩谷「アタックってレイプ専門だろ」

伊関「あんたも好きだね」

栩谷「若い時、一度、手伝いに行ったことがある」

伊関「そっち系の人？」

栩谷「いや」

伊関「じゃあ、なに。なによ」

栩谷「……ピンクの監督」

伊関「へえ。そっちの景気はどうなの」

栩谷、首を振る。

伊関「だろうな。今の若い奴、AVも見ないって言うから。リア充でもないだろうに」

栩谷「セックスに幻想がなくなったんだろ」

伊関「童貞の頃はよかったな。女に幻想持てたし」

栩谷「どうしたら、女に幻想なんか持てんかねえ」

伊関「いい女だったんだよ。初めて付き合った女」

栩谷「どんな女」

伊関「女優を目指してたんだ」

伊関、窓を見る。

雨が窓を叩いている。

伊関の声「今はどうしてんのかな。名前、聞かないし、女優、やめて、結婚してんだろうな」

○ 居酒屋・男子トイレ（2000年）

「さよなら1999!」

「3、2、1、ハッピーニューイヤー!」

「2000年にがんばーい!」

と客の喧噪。

伊関（24）、モップを持って入ってくる。

小便器に顔を突っ込み、吐いている女がいる。

伊関、舌打ちして、吐しゃ物で汚れた床

をモップで拭く。

女・桐岡祥子（20）、吐き終え、手洗いで口をゆすぐ。

伊関、祥子がいた小便器の床を拭く。

祥子「汚してすみません」

伊関、答えない。

祥子「飲めないお酒、飲まされちゃって」

伊関「ここ、男子トイレだけど」

祥子「あ、ごめんなさい」と慌てて出て行く。

○ 同・店内

伊関、皿を洗っている。

「あの……あのう」

と声。

伊関、顔を上げると、祥子がカウンターの前に立っている。

祥子、チケットとチラシを差し出し、

祥子「みんなとお芝居やってるんで、よかったら」

伊関「ちよつと待って」

と手を拭きながら、厨房から出てくる。

祥子「お金はいいです。迷惑かけたから」

とチケットを渡す。

伊関「……ノルマ、あるんじゃないの」

祥子「あるけど、いいです」

「祥子、行くぞ」

と仲間の声。

祥子「それじゃ」と店を出て行く。

○ アパート・伊関の部屋

伊関「芝居、観に行ったけど、彼女は通行人

A。セリフもなかった。それで、チケツト代の代わりに、飯でもどうって」

栩谷「女優、目指してた女か、いっぱいいたよな」

伊関「監督なら、ヤリ放題だろ」

栩谷「……あいつ、酒は強かったな」
雨が窓を叩いている。

○ 新宿ゴールデン街・『雀』（2006年）

栩谷（35）がカウンターで、焼酎の水割り飲んでる。

マスターと客の話し声が聞こえる。

客「秋田のあれ、やっとな捕まったね」

マスター「畠山鈴香？」

客「娘と近所のガキ殺して、よく平気でテレビ出てたよな」

マスター「ワイドショー、そればつかったもんね」

桑山（35）が祥子（26）と入ってくる。

桑山、「よ」と栩谷の隣に座る。

祥子、桑山の隣に座る。

桑山「栩谷のボトルを手に取り」飲んでいい？」

栩谷「金ねえのに、来るなよな」

桑山「まあ、いいじゃない」

とマスターからグラスを受け取る。

祥子「作ります」

と焼酎のボトルを取る。

桑山「桐岡、覚えてるだろ」

栩谷「あ？」

桑山「こないだ、お前のに出てただろ」

栩谷「あれ、評判、悪いんだ」

祥子「私のせいですか」

栩谷「チョイ役のせいな訳ないだろ」

祥子「じゃあ、演出か」

栩谷「なんで連れてきたの」

桑山「今度、俺のにも出てもらおうと思って」

栩谷「へえ。大丈夫か。芝居できないのに」

祥子「桑山監督には、ちゃんと芝居つけてもらいますから」

栩谷「『には』だつて」

祥子「いただきます」

祥子、ぐいと飲む。

× × ×

桑山、カウンターの隅で、突つ伏し、眠っている。

栩谷と祥子、隣同士で、焼酎のロックを飲んでる。

栩谷「強えな」

祥子「普通です」

栩谷「酔わない女はつまんねえ」

祥子「お持ち帰りでできないから？」

栩谷「桑山のこと、好きなの」

祥子「何で、そういう話になるんですか」

栩谷「こいつ、彼女いないよ」

祥子「栩谷さんはいるんですか」

栩谷「女、嫌いだから」

祥子「女嫌いが、ピンク撮れるんですか」

栩谷「女のイヤなところは撮れる」

祥子「マニアには受けてるみたいですよんね」

栩谷「怒るよ」

祥子「まあまあ」

と栩谷と自分のグラスに目一杯焼酎を入れる。

祥子、飲み干す。

栩谷、負けじと飲む。

○ 同・表

どしゃぶりの雨。

ふらふらと栩谷と祥子が階段を降りてくる。

祥子「桑山さん、置いてつていいの」

栩谷、傘を広げる。

祥子、傘を奪い、放り投げる。

栩谷「何やってんだよ」

祥子、ずぶ濡れになりながら、栩谷に微笑みかける。

栩谷、抱き寄せる。

かわす祥子、ふらつき、栩谷とともに倒れ込む。

栩谷、キスをする。

祥子、栩谷の上になり、栩谷の顔を見る。

祥子「女、嫌いなんじゃないの？」

栩谷「たったいま、好きになった」

祥子「笑う」

祥子、栩谷にキスしようとして、ふっと横を見る。

赤い物体が動いている。

ザリガニだ。

栩谷「!?」

祥子、ザリガニを掴む。

栩谷「平気なの」

祥子「子供の頃、いっぱい捕まえた」

祥子、ザリガニの背を撫でながら、

祥子「こんなところ歩いてたら、酔っ払いに踏まれちゃうよ」

○歌舞伎町・ラブホテル・一室

ベッドの上、全裸の栩谷が祥子の乳房を掴んだまま、眠っている。

部屋の電話が鳴る。

栩谷、寝ぼけ眼で電話を取る。

栩谷「あ、はい……出ます」

と切る。

祥子、目を覚ます。

栩谷「昨日、やった？」

祥子、布団の中で、股間に手をやり、

祥子「……してないと思います」

栩谷「あと10分で出ろって」

栩谷、床の上のトランクスを取る。

びしょ濡れのトランクス。

栩谷「……延長しようか」

祥子、床の上の自分の濡れた服を見て、頷く。

栩谷、受話器を取り、

栩谷「延長してください」

祥子、バスタオルを巻いて、浴室に入る。

祥子の声「キャッ!」

栩谷、浴室に行く。

浴槽にザリガニがいる。

祥子「なんで、こんなところに？」

栩谷「昨日、あんたが拾ったんだよ。憶えてないの」

祥子「頷く」

栩谷、祥子の裸を見る。

栩谷、キスする。

祥子「寒い」

栩谷、シャワーをひねる。

二人、シャワーを浴びながら、抱き合う。

○アパート・伊関の部屋

伊関「酒乱のヤリマンか」

栩谷「最初の男と別れた後、やりまくってたって言った」

伊関「ザリガニはどうしたの」

栩谷「ジョニーって名前つけて、飼った」

伊関「オスなんだ。なんでジョニー？」

栩谷「二人で『バイレーツ・オブ・カリビアン』の二作目、観に行つて」

伊関「ジョニー・デップか」

栩谷「そっちは、最初の女はどうだったんだよ」

伊関「処女と童貞だった」

栩谷「幾つの時だよ」

伊関「俺が24で彼女が20」

栩谷「24って遅くないか」

伊関「大学出てからだから。女とやるのが怖かったから、半年ぐらい手を出せなかった」

雨が窓を叩いている。

○アパート・祥子の部屋（2000年）

伊関、祥子の本棚を眺め、上野千鶴子の『性愛論』を手取る。パラパラめくつて、

伊関「セックスが好きだって、いつたいた人なんだろう。セックスのなかのながが好きなんだろうって考えるんです。それはつまり、自分がただの肉体に還元されていく喜びなんです。ただの肉体に還元されてただの動物であることがうれしいんです」

ね』だって。分かる?」

祥子「首振る」

伊関「自分を動物にしてくれる他者、自分を動物にしても構わないと思わせるような他者との関係』だって」

祥子「……」

伊関「自分が動物であることの快感』って

どんなんだろう?」

祥子「セックスすると人間から動物になっちゃうの?」

伊関「動物にならずにちや、あんなことできないんじゃないの?」

祥子「伊関君、セックスしたことあるの?」

伊関「……」

祥子「動物になってみたい」

伊関「……それって俺にはハードル高いと思う」

祥子「いつも映画や本の話ばかりじゃ……つまらない」

伊関「たまには話をしませんか、芸術とか、いつも会々とベッドへ直行だから。つて、『卒業』ではダスティン・ホフマンがミセス・ロビンソンに言うんだけど……」

伊関、震える唇で、キスする。

○ アパート・伊関の部屋

栩谷「(笑い) それで童貞喪失したのかよ」

伊関「いや、緊張して勃たなかった。1ヶ月

くらい、まともにできなかったな。あまりにできないんで、俺はゲイなんじゃないかと思った」

栩谷「好きな女の子とセックスをすぐできないのはフツウのことだ。悪党になって、相手の好きでない部分を見つけて、やっと性交をしかけることができる。自分とは別の悪党の人格になって、性交に成功するって小川徹という映画評論家が言ってた。セックスに愛は要らないんだよ、邪魔なんだよ」

伊関「そうか」

栩谷「それで、できたのかよ」

○ アパート・祥子の部屋(2000年)

布団の中の伊関(24)と祥子(20)。

伊関の声「眼をつぶったんだ」

眼を閉じている伊関、ぎこちない手つきで、祥子につなげると、恐る恐る腰を動かす。

祥子「……奥まで入れて」

伊関「痛くないの」

祥子「痛いけど……伊関君ともっとつながりたいから」

伊関、深く入れる。

○ アパート・伊関の部屋

栩谷「ほんとに処女だったのか」

伊関「それは……わかんないな」

栩谷「大体、あなたが二人目って言うんだよ、処女じゃない女は」

伊関「なるほどね。で、そっちのやった後とは?」

栩谷「家賃滞納でアパート追い出されて、彼女の家に押しかけた」

雨が窓を叩いている。

○ 多摩川土手(2007年)

撮影現場。

清美と祥子が土手の上で、

祥子「お母さん、あたしの彼氏ってわかってて誘ったんでしょ」

清美「知らなかったのよ」

祥子「嘘つかないで」

清美「あの子、私の体のほうがよかったって言うってたわよ」

祥子「最低!」

と清美の頬を張る。

寺本「はい、カット。そのまま殴り合って、掴みあって、土手を転がる。じゃ、本番行こうか」

カメラマンが35ミリで撮影している。傍に監督の寺本。

寺本の後ろで待機している棚谷(36)と

桑山(36)が、

桑山「寺本さん、気合い入ってるな」

棚谷「このままいけば、これ、寺本さんの代表作になるだろ」

桑山「……祥子と暮らしてるのか」

棚谷「……ああ」

桑山「結婚してとか言わないのか」

棚谷「言わない」

桑山「厭きたらボイカ」

棚谷「どっちが先に厭きるかだろ」

「よいい、スタート!」

と寺本の声。

棚谷と桑山、祥子の芝居を見ながら、

桑山「祥子って、芝居、下手だよな」

棚谷「うん……」

桑山「でも、一生懸命だよな」

棚谷「それだけじゃ、どうしようもないさ」

桑山「今度のヤツ、祥子、主演で撮ろうと

思ってるんだけど、いいか」

棚谷「俺に許可取る必要ないだろ」

桑山「一応な」

棚谷「ホン、誰?」

桑山「自分で書いてる。俺もそろそろ代表作

作らないといけないんで」

棚谷「主演なんて、祥子に務まるかな」

桑山「俺がどうにかするよ」

掴みあう祥子と清美が、

祥子「どうして私のモノばかり奪るのよ。

いつつもそうじゃない。そんなに私が憎いの!」

祥子と清美、土手を転がる。

寺本「カット!」

棚谷と桑山が土手を駆け下り、祥子と清美に手を貸す。

○ スナック・店内

打ち上げ。

ボックス席で、寺本、小西、清美らが飲んでいる。

泥酔の寺本、清美に抱きつき、甘えて、

寺本「清美さん、大好き」

カウンター席で、棚谷、祥子、桑山が水

割りを飲んでいる。

桑山、祥子にコピー紙に印刷された台本

を渡す。

台本の表紙に『くちびる』とタイトル。

桑山「準備稿の準備稿みたいなものだけど。

読んでみてよ?」

祥子「私に?」

桑山「当てる書いた」

祥子「!……主役!?」

祥子、棚谷を気にする。

棚谷、目を逸らし、水割りを飲む。

祥子「やらせてください」

棚谷「やるやらないはホン読んでからにしたほうがいいんじゃないの」

祥子「……読んでから、また改めてお返事します」

桑山「桐岡、何か歌えよ」

祥子、カラオケ楽曲検索機を受け取り、曲を入れる。

祥子、マイクを手にし、歌う。

桑山、歌う祥子を見つめている。

棚谷「そんな桑山を見て」……」

○ アパート・伊関の部屋

伊関「諦めなければ、何とかなるって言うけど、あれは嘘だね。どうしようもない奴は、

死ぬまでどうしようもない。俺はシナリオなんかやめて正解だったよ」

棚谷「何で、シナリオ始めたんだよ」

伊関「大学出たけど、就職もしないで、フラフラして。何者でもない自分が不安で、

何者かになろうとしただけだったんだよな」

棚谷「映画じゃなくてもよかった?」

伊関「今、思うとね」

雨が窓を叩いている。

○ アパート・祥子の部屋(2001年)

伊関(26)、何も書かれていないノート

パソコンの前で、ひっくり返っている。

祥子(21)、傍で、別冊宝島の『シナリオ入門』を読んでいる。

伊関「祥子がそんなの読んだって意味ないだろ」

祥子「役者もシナリオちゃんと読めないと」

伊関「セリフのある役、もらってから言えよな、そういうことは」

祥子「こないだのコンクールはどうだったの？ 結果、もう出てるんでしょ」

伊関、「月刊シナリオ」を放る。

祥子、「月刊シナリオ」を捲る。

伊関「一次で落ちてた」

祥子「コンクールがすべてじゃないよ。現場行ったら」

伊関「ツテないじゃん」

祥子「自分の足、使って動かなきゃ、出会いはないよ。伊関君、甘えてるよ」

伊関「いちいちうるせえな。早くバイト行つて来いよ」

祥子「今日は休み」

伊関「だいたいな、俺が祥子と付き合ってるのは、シナリオ書くためなんだよ。ちよつとはいいセリフ言つて、俺に使わせてくれよ」

祥子「そんなんだからダメなんだよ。これ、

読んでみな」

と『シナリオ入門』を開いて、見せる。

沢井誠二のインタビュー記事。

祥子「失態して、今まで観てきた映画、読んできた小説、みようみまねで書いてきたシナリオが虚しく思えた。ひとりの女が去ることの方が大きい」って言ってる。だから、いいホンが書けるんだよ。その人、有名なシナリオライターでしょ」

伊関「……」

○ シナリオ作家協会会館・教室(2001年)

沢井誠二(66)が講座生に語りかけている。

沢井「シナリオライターになりたいとか監督になりたいとか言う前に、映画を観て、シナリオを読め。君らが思いついたり、考えてることなんか、もうとっくの昔に誰かが考えてる。映画ができて100年だよ」

生徒「リュミエール兄弟の『工場の出口』から106年です」

沢井「ああ、分ってるよ、106年だ。だけど、昔の巨匠、名監督、名脚本家も、2001年の日本、21世紀の世界を描けない。今、生きてないからだ。2001年の宇宙を撮った人はいたけど。君たち

は、今、生きてる。それが君たちの武器だ。今の時代を生きている人間を書くんだよ」

伊関(25)、隅の席で、聴いている。

○ アパート・伊関の部屋

伊関「学校嫌いだったのに、また学校行つてた」

棚谷「先生って誰？」

伊関「沢井誠二」

棚谷「ああ。たまにゴールデン街で会うけど」

雨が窓を叩いている。

○ 新宿ゴールデン街・雀(2007年)

棚谷(36)と祥子(27)、沢井(72)が飲んでる。

沢井「なんだ、こないだのやつ。やっぱ、棚谷は演出、できねえんだな」

棚谷「すんません」

沢井「あれじゃ、シナリオライターが浮かばれない。監督なんかやめて、プロデューサーになったほうがいいんじゃないの」

棚谷「はあ」

祥子「ちよつと、何で、そこまで言われなくちゃいけないんですか」

棚谷「よせよ」

祥子「沢井さんのこと、尊敬してたのに、

ちよつとシヨックです」

沢井「何、おまえの女？」

羽谷「女優です」

沢井「だから、女？」

羽谷「一応」

祥子「一応!? 私の部屋に住んでるのに、一応って何よッ」

沢井「一応の監督と一応の女優が同棲してるのか」

羽谷「一応」

沢井「ごっこだね」

羽谷「ごっこって!？」

沢井「映画も、同棲も、おまえら、全部、ごっこなんだよ」

祥子、酒を沢井にかける。

羽谷「おい!」

沢井、笑って、酒を飲んでいる。

羽谷「すいません」

とハンカチ出して、沢井を拭く。

○アパート・伊関の部屋

伊関「笑い」こっこ、か」

羽谷「俺、沢井さんの書いたシナリオの最初の一行、全部、覚えてる。海は目を撥ねている……虹を含んだビニールの汗が流れ落ちてゆく……熱気をはらんだ風、カーテンのようにぶら下がっている洗濯物を微かに

揺らし、部屋の中をかきまわす」

伊関「オタクかよ……講座修了した後に、飲み屋で、沢井さんと飲んでたら、たまたまAVやってる人と一緒にあって、それで、仕事もらったんだ」

雨が窓を叩いている。

○アパート・祥子の部屋（2002年）

伊関（26）、ノートパソコンでシナリオを書いてる。

祥子（22）、「3穴アナル」とタイトルされたAVのパッケージを見ている。

祥子（「パッケージを読み」『いやあああ、アナルは許してえええ!』……こんなの観て、男の人って、興奮するの」

伊関「するから売れるんだろ。レイプされてるうちに女が感じ始めるってパターン」

祥子「そんなのありえない」

伊関「ファンタジーなんだよ、モテない男の」

祥子「伊関君、フェミニストじゃなかったの?」

伊関「フェミニストを装った男根主義者ですよ、僕は」

祥子「小さい男根主義者、ね」

伊関「誰と比べてんだよ」

祥子「お父さんと伊関君のしか見たことない

よ。お父さんのほうが大きかった」

伊関「アホか。子供の時、一緒にお風呂に入って見ただけだろ。子供の目には大きく見えるんだよ。俺も親父の大きいなと思ったもん」

とひっくり返る。

祥子「また書けないの?」

伊関「アナルレイプものなんだよ。アナルなんてやったことないし、わかんねえよ」

伊関、祥子の尻を触る。

祥子「いや」

伊関、祥子のスウェットパンツを脱がせ、ショーツの中に手を入れる。

祥子「あん」

伊関、祥子をうつ伏せにし、ペニスをお尻に押し当てる。

伊関「お尻、あげて。もっと足、開けよ」

祥子「イヤ!」

伊関、挿入しようとするが、入らない。

祥子「入るわけないよ」

伊関「小さいって言ったじゃないか。小さいんだから痛くないって」

伊関、冷蔵庫を開け、マーガリンを手に取り。

伊関「ラストタンゴ・イン・パリ」はバター、

『ベッド・イン』はマーガリン」

伊関、ペニスにマーガリンを塗り、うつ

伏せの祥子のお尻に挿入しようとする。

祥子「どうして、こんなことするのよ。ひどいよ……（挿入）痛いッ」

伊関「ああ、キツッ！」

○アパート・伊関の部屋

栩谷「馬鹿だな」

伊関「ああ、馬鹿だ」

栩谷「彼女、いろんなオーデイション受けたけど、全部ダメで。あの日も、すげえ落ち込んでた……」

雨が窓を叩いている。

○高円寺ハイツ・ロフト（2008年）

マットレスの祥子（28）と栩谷（37）。

祥子「吐息を洩らし」あなたのきれいな指で触られてるのね」

栩谷「どこを」

祥子「言わなきゃいけないの」

栩谷「うん」

祥子「恥ずかしい」

栩谷「言わなきゃ、触らない」

祥子「……クリトリス」

栩谷「おつきくなってる」

祥子「濡れてる？」

栩谷「お尻のほうまで垂れてる」

祥子「指入れて……お尻に……」

栩谷、指を入れる。

祥子「動かして……もっ……」

栩谷が指を動かすと、祥子が声を洩らす。

祥子「入れて」

栩谷「入れたことないよ」

栩谷、祥子に重なり、優しくつなげる。

祥子、苦痛で眉間に皺を寄せる。

栩谷、腰を動かすのをやめる。

祥子「やめないで……メチャクチャにして」

栩谷、激しく腰を動かしていく。

祥子と栩谷、果てる。

祥子「お尻でイクなんて、最低だね」

栩谷「ほんとにイッたの？」

祥子「サービス」

栩谷「芝居上手じゃない」

祥子の笑顔が消える。

祥子「……」

下の部屋の水槽の中で、ザリガニが動いている。

○アパート・伊関の部屋

栩谷、ガラス鉢の中の金魚を見る。

金魚は死んだようにじっとしている。

栩谷「俺たちみたいだな、ただ生きてるだけ」

伊関「水の中じゃないけどな」

栩谷「江戸も東京も川の町だった。アムステ

ルダムのように運河がある美しい水の都市だった。ロンドンにもパリにもソウルにもバンコックにも川が流れている。空襲で東京の町は焼かれたけど、川は残った。でも焼け跡のガレキで川や運河を埋めてしまった。東京オリンピックでは、残った川の上に高速道路を作って……東京を壊してしまった」

伊関「また壊すんだよ、オリンピックで」

栩谷「2020年のオリンピック、東京に決まるかな」

伊関「金ばら撒いてるし、決まるんじゃないの」

栩谷「いつそ、直下地震か富士山の噴火で壊れればいいんだよ」

伊関「新宿も渋谷も池袋も銀座も島なんだよ」

栩谷「そうか、繁華街が一つ一つ島になって、海に浮かんでいるのが東京なのか」

伊関「千何百万人の人間の欲望や記憶や喜怒哀楽の海に浮かんでる島なんだよ」

栩谷「文学的だな。なんでシナリオ駄目だったんだ」

伊関「映画は文学じゃない」

栩谷「その金魚、動かないけど生きてるの」

伊関「え、ああ、生きてるだろう。ここんこ、あんまり餌やってないけど」

と、「ウウツ」という声が襖の後ろから聞こえる。

栩谷、ギョツとする。

伊関、襖を開ける。

ベッドの上に自分の膝を抱えこみ、丸くなっている、短い髪をシルバーに脱色した素裸の女。

リンリン（20）、両目を瞑り、ヘッドフォンをつけた頭を苦しそうに左右に振っている。

伊関、リンリンに毛布を掛ける。

ベッド脇の二つのラックに、蛍光灯に照らされたガラス水槽が天井まで積み上げられている。

栩谷、ガラス水槽に近寄る。

ステンレス容器に敷いた培地から白っぽいキノコが群生している。

栩谷「何だ、これ」

伊関「どうした、気分悪いか。水持ってきてやるうか」

リンリン、ヘッドフォンを耄り取り、それで壁をバンバンと叩く。

栩谷「これ、何なんだよ」

伊関「キノコだよ。ちよつとやばい種類の」

栩谷「マジック・マッシュルーム？」

伊関「そう。ところどころ黴が生えたみたいに青くなってるだろ。その青いところに含

まれているシロシビンっていう成分が脳に働くんだ」

リンリン「（中国語）ああ、もうっ」

と毛布をはぎ、ヘッドフォンを伊関に投げつけ、とろんとした目で、伊関と栩谷を見比べる。

リンリン「このオジサンだあれ」

伊関「友達だよ」

リンリン、指をぴんと広げた両の掌をじつと見つめ、裏返して手の甲を見つめ、手首、二の腕に視線を走らし、

リンリン「厭だあ。皮が剥がれていくう」

伊関「まずいな」

リンリン「（中国語）厭あ、つるつる、剥げてくう、剥けてくう、なんでえ。厭あ、厭あ」

伊関「悪いけど外に出ててくれる」

栩谷、六畳間に戻る。

伊関、襖を後ろ手で閉める。

栩谷、靴を履くと立てかけてあるビニール傘を手取る。

○ 同・廊下

栩谷、真つ暗な廊下を歩くとセンサーライトが反応し、ほんやりと点灯する。

階段を下りる。

踊り場で立ち止まり、鏡を覗きこむ。

生命力の尽きかけた男の顔。

○ 雨の中、栩谷が路地から出てくる

と、「ネー、アソビスル」

と女の声。

振り返ると、軒下で雨宿りをしている立ちんぼ。

そこはラブホテル街。

女たちがぼつりぼつりと軒下で雨宿りをして立っている。

「イイコト、シヨー」

「サイゴマデ、ニマンエン」

次々と女たちに声をかけられる。

栩谷、目の前にあるスナックに逃げ込む。

○ 韓国スナック・内

真つ赤な口紅のママ（65）が、「いらっしやい」と愛想なく言う。

カウンター席のみの狭い店内。

客は中年男だけ。

栩谷、スツールに腰を下ろし、棚に並んでいる酒を見る。

栩谷「韓国の酒だけ？」

ママ「そう」

栩谷「マッコリ」

ママ「はいよ」

ママ、突出しのホッケと葉巻に入った

マッコリをマッコリカップに注ぐ。

栩谷「これは？」

とホッケを指さす。

ママ「マッコリにはホッケが合うんだよ」

栩谷、ホッケを食べ、マッコリを飲む。
と、ガラス戸が開き、ぐしょ濡れの伊関
が入ってくる。

栩谷「つけてきたのか」

伊関「いやいや、ちよっとその辺に立ってる
お嬢さんたちに訊いたらすぐわかった」
と栩谷の隣に座る。

伊関「マッコリのカップ」

ママ、カップを差し出す。

伊関、栩谷が薬缶から注ぐマッコリを、
一息で飲み干す。

栩谷が煙草を出して、火を点けると、伊
関は箱から一本取って、栩谷のライター
で火を点ける。

栩谷「さっきの娘、大丈夫？」

伊関「大丈夫、大丈夫。ちよっとバッドな方
へ行っちゃったけど、すぐ戻ってきたか
ら」

栩谷「あれがあんたの資金源か」

伊関「中国の留学生。映画大学に通ってる。

親は杭州市で偽ブランド品作ってる会社の
社長で大金持ち。マジックマッシュルーム
も家族でヨーロッパ旅行に行った時に仕入

れて、お土産だって持ってきたんだ」

栩谷「どこで知り合った？」

伊関「俺の知り合いのA.V.の制作会社。去年
リンリンがモザイク入れのバイトにきたん
だ。俺も小銭稼ぎで、たまにやってたか
ら」

栩谷「親が金持ってんなら、バイトする必要
ないだろ」

伊関「A.V.監督になるのが夢なんだよ。その
為に現場でいろいろ勉強したいって。あ
んた、ずいぶん濡れてるぜ」

栩谷「それはおまえの方だろう」

栩谷、上着を脱いで丸め、隣のスツール
の上にのせる。

栩谷「中国女のA.V.監督か」

伊関「ちよっといいだろ」

栩谷「うん」

○アパート・祥子の部屋（2003年）

伊関の声「A.V.の仕事、何本か書いたけど、
すぐネタが尽きちまって、仕事、来なく
なってるさ」

交通警備員の制服を着た伊関（27）が
帰ってくる。

祥子（23）、飛びついてくる。

祥子「見て、次の公演で、大事な役、もらっ
たよ。ほら、写真もこんなにおっきい」

とチラシを見せる。

祥子「あ、どうしたの」

伊関の目のまわりが赤く腫れている。
祥子、タオルを水で濡らし、腫れた部分
に当てる。

祥子「誰に殴られたの」

伊関「……俺と同年ぐらいのベントに乗っ
た野郎」

伊関、チラシを手に取り、

伊関「よかったじゃん」

祥子「うん……」

伊関「売れて、俺、食わしてくれよ」

祥子「なに言ってるの」

伊関「だいたい、そんなしょうもない劇団で、
役もらって、はしゃいでんじゃねえよ。誰
も観やしねえよ」

祥子「そう、だよ」

と悲しく微笑む。

伊関「……」

伊関、部屋を出て行く。

○韓国スナック

栩谷「おまえ、最低だな」

伊関「うん……」

○高円寺ハイツ・部屋（2008年）

キムチを刻んでいる栩谷。

祥子、たらこの皮をはいでいる。

棚谷「鍋にごま油を入れて、キムチをいため、醤油、おろしにんにくを加え、煮干しのだし汁を注ぐ。

沸騰したら、たらこをほぐし入れる。

祥子「いい?」

棚谷「ああ」

祥子、チンしたパックごはんを入れる。

× × ×

棚谷(37)と祥子(28)がたらくことキムチのおじやを食べている。

祥子「撮影、いつから」

棚谷「来週」

祥子「シナリオ、読んだよ」

棚谷「どう?」

祥子「面白い。私、やりたい」

棚谷「うん」

祥子「……どうして、私を出してくれないの」

棚谷「おまえさ、俺の映画に出るために、俺といふの」

祥子「女優として認めてないってこと?」

棚谷「次はおまえ向きのホン、書くよ」

祥子「……」

○ 韓国スナック

伊関「……次のホン、書いたのか」

棚谷「それが最後のピンクだった。それ以来、作れてない」

伊関「次はおまえのために書くって言って、次はなかったわけか……」

棚谷「領く」

伊関「ソジュとキュウリの千切り」

ママ、焼酎のボトルを取り、

ママ「これでいい?」

伊関「領く」

ママ、ボトルと氷を置く。

キュウリを千切りにしながら、

ママ「韓国の飲み方、知ってるのね」

伊関「領く」

ママ「焼酎吸ったキュウリ食べると悪酔いするよ」

伊関、焼酎のロックにキュウリを入れる。

○ アパート・祥子の部屋(2003年)

伊関(27)、窓を開け、煙草を吸っている。

伊関、洗った物をしている祥子(23)の背中を見る。

伊関、煙草を消し、祥子の隣に来て、食器を拭きながら、

伊関「なんとかなるんじゃないか」

祥子「ん?」

伊関「子供。うちの親、まだ元気だし、いろ

いろ助けてもらってさ」

祥子「シナリオはどうするの」

伊関「どっか適当に就職して、時間ある時に書くとか」

祥子「無理よ」

伊関「無理かどうか、やってみないと」

祥子「……堕ろしたいの」

伊関「!?」

祥子「女優、諦めたくないの」

伊関「……」

祥子「ごめん」

伊関「……」

○ 韓国スナック

伊関「カタギになるキツカケにしようと思っただよ、俺、子供を」

伊関、キュウリ焼酎を飲み干す。

棚谷、伊関のグラスに焼酎を注ぐ。

○ 高円寺ハイッ・バスルーム(2012年)

棚谷(41)、湯船に浸かっている。

浴室の開いたドアから、しゃがんだ祥子

(32)が棚谷を見ている。

棚谷「今日の現場、なんでもOK出すヤツで

さ。チョー楽だった」

祥子「いいの、それ?」

栩谷「知らね。鎌田さんに手伝ってくれって呼ばれた現場だし、名前も聞いた事ない自主の監督」

祥子「……今日、病院、行ってきた。3ヶ月だつて……産みたい」

栩谷「育てられないだろ。今の生活じゃ」

祥子「なんとかなるよ。私、働くし」

栩谷「役者の仕事はどうすんの」

祥子「仕事なんて、こないし。私、32だよ。子供だつて、これ逃したら……」

栩谷「俺、父親になる自信ない」

祥子「そんなの、みんな、そうだつて」

栩谷「俺、厭なんだよ、家族が」

祥子「!?」

栩谷「家族なんて、つくりたくない」

祥子「私とも」

栩谷「誰とも」

祥子「……」

栩谷、風呂からあがる。

祥子、入れかわるように服を脱ぐと風呂に入る。

× × ×
栩谷と祥子、豚のしゃぶしゃぶを食べている。

ゆず胡椒、白ネギを加えた温かいそばつゆで肉とほうれん草を食べる。

× × ×

栩谷、締めそばを一本摘み、水槽のザリガニに垂らす。

ザリガニ、動かない。

栩谷、ザリガニを掴む。

ザリガニ、死んでいる。

栩谷「死んでる」

祥子「家族なんて作りたくないって言ったからよ」

栩谷「……」

○ 韓国スナック

伊関「墮ろしたの?」

栩谷「流産した。昔、一度だけ、墮胎したところから、それが原因じゃないかって、本人はノイローゼみたいになつてた」

伊関「そんな一度くらいで、くせにならないだろ」

栩谷「俺だつて、そう言つたさ」

と、「ハハハ!」と客と話すママの嬌声。

伊関「人間なんて、元はただの蛋白質の分子の塊から始まつたんだろ。俺らの精液の1しずくだよ。どうせ、またばらけて、塵に

帰っていくだけ」

栩谷「生き物がばらけてくつていうのは、腐

るつていうことだろ。腐敗、腐爛。猫の屍骸に蛆虫がたかつて……いやらしいにおい

が充満して……」

伊関「俺なんて、キノコと黴にまみれて生きてるんだ。腐るつていうことについて、あんた、いったい何を知つてるの」

栩谷「40過ぎて、腐りかけてない男なんていないさ。俺は腐つたね。すっかり腐つちまつた」

栩谷と伊関、煙草に火を点ける。

伊関「卯の花腐し……」

栩谷「何?」

伊関「ウツギの花も腐らせるつてね。今日みたいな雨のことを言うんだらう。春されば卯の花腐し……つて、万葉集にさ」

栩谷「妙なこと知つてるな」

伊関「万葉集は面白い。何しろ新宿が、いや

東京全体がただの野っばらだつた頃の色恋

沙汰の話だからな。のどかなもんだよ。でかい面した役人もいない、映画監督なんて

のでもない、そういう時代のなあ、まあ、

その頃だつてホームレスはいたらう、体を

売る女だつていたたらう。でも、こういう巨大お化けみたいな町はまだなかつた」

と両手を肩の上まで上げて、指をひらひらさせる。

伊関「うらうらに照れる春日にひばり上がり

……春されば卯の花腐しわが越えし……腐るつて言つたつてみやびなものよ。あの頃はね。でも、こういう巨大お化けが腐つて

いくつていうのはね、凄いことになるよ」

栩谷「凄いかね。地震や噴火で壊れるより凄
いかね」

伊関「ああ、凄い、凄い、もの凄い悪臭が出
る。鼻がひん曲がるようなにおいを立てて
ぼろぼろ崩れていくんだよ。面白いじゃな
いか」

○アパート・祥子の部屋（2003年）

開いている窓から、桜の花びらが舞い込
んでくる。

祥子（23）、舞台の台本を声を出して、
読んでいる。

伊関（27）は寝転がって、テレビを観て
いる。

伊関、テレビのボリュームを上げる。

祥子、リモコン取って、テレビを消す。

伊関、リモコン取って、テレビを点ける。

祥子「なにやってんの、毎日毎日。なんでシ
ナリオ書かないの。仕事ないんだったら、
コンクールでも習作でも書けばいいじゃな
い。なんで書かないのよ」

伊関「書きたくない」

祥子「なんでよ」

伊関「初めから、どうしても書きたいことな
んで、なかったんだよ」

祥子「映画、好きじゃないの？」

伊関「……うん」

祥子「馬鹿！」

と伊関を叩く。思い切り叩く。

祥子「私は芝居が好き。売れようが売れまい
が、死ぬまで続けるから」

伊関「俺、才能ないんだよ。でも、父親には
なれたかもしれない。普通の奴が普通に
やつてるんだから……なんで堕ろしたんだ
よ」

祥子「……」

○韓国スナック

黙って、キュウリ焼酎を飲む伊関と栩谷。

○高円寺ハイツ・ロフト（2012年11月）

白々と夜が明け始めている。

栩谷（41）、マットレスのベッドで眠っ
ている。

雨の音が聞こえる。

玄関のドアの開く音。

栩谷、目を開ける。

祥子（32）、ロフトに上ってくる。

栩谷、目を閉じる。

祥子、服を脱ぎ、下着姿で、栩谷の隣に
滑り込む。

栩谷は寝たフリをしている。

祥子の軽い鼾が聞こえてくる。

栩谷、目を開ける。

× × ×

栩谷、目を覚ます。

羽毛布団から出て、煙草を吸う。

と、祥子が布団の端からわずかに顔を覗
かせ、

祥子「あ、昨日は里美と飲んで遅くなっ
ちゃった。あたし、ちょっと気分悪いから
今日は休んじやおっと。朝ご飯、悪いけど
適当に食べてね」

祥子の顔は血の気がなく、ひたすら硬く、
何の表情もなかった。

祥子、布団に潜りこんで、顔を隠す。

栩谷「大丈夫？」

祥子「（生返事）」

○同・部屋

栩谷の声「それから一週間ぐらい経ってから
かな……」

栩谷、ゴミ箱の中から、豆腐パックを取
り出し、

栩谷「これ、資源ゴミだからさ」

祥子「ああ」

栩谷「ああ、じゃなくて。いっつもそうだ
よ」

祥子「気づいてたなら、言ってくればいい

のに」

祥子「豆腐パックを奪い取り、資源ゴミ袋に入れようとする。」

栩谷「洗ってから捨てようよ」

祥子「きれいじゃない。豆腐のパックだよ」

栩谷「そういうがさつなところ、直したほうがいいよ」

栩谷「豆腐パックを洗いながら、」

栩谷「あと、残ったマヨネーズとかフライパンの油とか、そのまま排水溝に流すだろ。あれもやめてよ。紙に吸わせてゴミ箱に捨てるとかさ」

祥子「それぐらいいいじゃない」

栩谷「気になるんだよ」

祥子「あなたの方が、気にし過ぎなのよ」

栩谷「だいたい、洗濯物の干し方だって気に入らないんだ。伸ばして干さないから、いつもシワができてるし」

祥子「だったら、自分でやればいいじゃない」

栩谷「俺だってやってるよ。時間ある時は」

祥子「やってない!」

栩谷「オーブントースター使ったら『ふっう』に戻しておけよな。焼き始めてから、『うすい』になっているのに気づいて、アタマにくる」

祥子「トイレの便座あげたら、戻しておいて

よね」

栩谷「……」

祥子「座ってすればいいのよ」

栩谷「いやだ」

栩谷と祥子、沈黙し、見合う。

栩谷、祥子を見つめる。

祥子「(俯き)……ごめんね」

栩谷「……誰なんだ」

祥子「……桑山さん」

栩谷「そうか」

○ 韓国スナック

栩谷「あの時、俺は『そうか』としか言わなかった」

伊関「殴らなかったのか」

栩谷「黙りこくって、彼女はロフトに、俺は下に毛布を持って、寝た。なじったり、批難がましいことを言わずに済ませたのは、我ながら大人だと思った」

伊関「大人ねえ」

栩谷「でも、それは間違いだった」

伊関「殴ってやればよかった?」

栩谷「怒鳴って、逆上して、あいつを張り倒すべきだった」

伊関「……」

栩谷「あの『そうか』をきっかけに俺たちの関係は腐りはじめたんだ」

伊関「男と女の関係なんて、いつまでも、新鮮なままじゃいられない。腐って、腐って、そして、お別れさ……」

○ 小劇場(2003年)

伊関の声「最後に私の舞台を観に来てって言われて、観に行った。小さなコヤでさ」

祥子(23)が舞台に立っている。

懸命に芝居をする祥子の姿。

伊関、客席で観ている。

伊関の声「もう、どんなセリフを喋ったのかも忘れた。でも、なんか泣けてきた。あいつの芝居に感動したとか、そんなんじゃないんだ。ただ、涙が出てきた」

栩谷の声「それが最後か」

伊関の声「セント・エルモス・ファイアー」
みたいに、CDを、これ、俺の、これ、私のと分けて、さよならのセックスをした」

○ アパート・祥子の部屋(2003年)

引越しの荷物を運び出した何もない部屋で、裸で抱き合う伊関(27)と祥子(23)。

○ 韓国スナック

伊関「それで、エンドマーク」

栩谷「……」

伊関「思い出し笑いして」あいつ、陰唇にほくろがあつてさ、助平ボクロだつて言つたら、すごい恥ずかしがつて」

栩谷「!?……名前は？」

伊関「祥子。桐岡祥子」

栩谷「!?」

伊関「何してんのかな」

栩谷「……桐岡祥子は死んだよ」

伊関「!?」

栩谷「半年前に、心中した」

伊関「誰と」

栩谷「俺の親友と」

伊関「どうして」

栩谷「……そのことをずっと考えてる」

伊関「一緒に住んでた女つて？」

栩谷「ああ……」

○ 新映事務所（2012年11月）

栩谷（41）がパソコンを打っている。

桑山（41）が入ってくる。

桑山「まだいたのか」

栩谷「ああ。香盤表 作つてた」

桑山「誰の現場？」

栩谷「榎本さんが、パラダイスで撮るんだつて。低予算のロードムービー」

桑山「へえ」

とソファに座る。

栩谷「……ビール、飲む？」

桑山「あるの？」

栩谷「お蔵暮でもらつたヤツがあるんだ」

栩谷、冷蔵庫から缶ビールを二本出し、

桑山に一本渡す。

二人、黙つて飲む。

栩谷「ホン、直してゐるのか」

桑山「うん。心中話にした」

栩谷「できたら、読ませてくれよ」

桑山「うん」

栩谷「……祥子、好きなのか」

桑山「……好きだよ」

栩谷「……」

桑山「でも、一度きりだと言われた」

栩谷「……」

○ 韓国スナック

伊関「また、殴らなかつたのか」

栩谷「結局、俺は自分の女を寝取られても、

恋愛よりは友情を取るつて、自分に言い聞

かせて済ませてしまふ、そういう人間なん

だ」

伊関「心中話、撮れなかつたから、ほんとに

心中したのか」

栩谷「……」

○ 高円寺ハイツ・部屋（2012年12月）

栩谷（41）が帰ってくる。

祥子（32）が大きなバッグを持って、ロ

フトの梯子を下りようとしている。

栩谷「危ないぞ、バッグ放れよ」

祥子、バッグを落とす。

栩谷「どこ行くの」

祥子「ちよつと田舎に帰つて、親の顔、見て

こようと思つて」

栩谷「帰るつて、もう何年も帰つてないだ

ろ」

祥子「上京してから、初めて。女優になるつ

て、家、飛び出してきたから」

栩谷「なんで、今なの」

祥子「流産してから、体調も悪いし、ちよつ

と疲れたの」

栩谷「……」

祥子「帰ってくるから」

と弱々しく微笑む。

○ 韓国スナック

栩谷「それから3日後、実家には姿を現さず

に、近くの海で桑山と心中した」

伊関「……」

栩谷、片方の靴が脱げている。

栩谷「酔つたな」

伊関「ああ、酔つ払つちまつた」

棚谷「帰るよ」

伊関「もう少し飲もうよ」

棚谷、ふらふらと立ち、脱げた靴を履く。

○ ぼつりぼつりと間遠に街灯が灯っている

だけの暗い路地を歩く棚谷と伊関

棚谷「もうさっきの娘と結婚して中国にでも行っちゃえよ。キムから立退き料貰って、二人で暮らせればいいだろ」

伊関「厭だね。もうあそこって、ほとんど幽霊屋敷だろ。ってことはだな、俺が幽霊だつてこと。俺があそこに居ついて、それで化け物屋敷を作り上げてるわけだ。一心同体だ。だから出て行かない。いや、出て行けない」

棚谷「あんた、足があるじゃない。ほら、俺にもあるぜ」

棚谷、片足を上げると、ふらふらと倒れそうになる。

伊関が支える。

棚谷「参った。俺は、よれよれになってる」

伊関「まあいいじゃないの」

棚谷「帰らないとなあ」

伊関「泊まっていてもいいんだよ。空いてる部屋だったら、たくさんあるし」

棚谷「俺はあんたを追いつに來たんだぞ。それじゃあ、みいら探りがみいらになるっ

てことだろ」

伊関「あんたがあそこに住み着いちゃったりして。キムがどんな顔するか。ま、もう少し飲もうよ」

棚谷「もう飲めない」

伊関「じゃあ、キノコ、食ってみる？」

棚谷「食うとどうなる？」

伊関「地下牢から出されたカスパー・ハウザーが初めて世界を見た時のような感じ」

棚谷「ヘルツォークか」

伊関「みんな、キノコ食えばいいんだよ。我慢して我慢して、小銭、稼いで、せいぜいホルモン焼き食って、チュウハイ飲んで憂さを晴らしてるだけでしょ。震災があつたつて、何にも変わらない」

棚谷「変わったよ。民主党から自民党に変わった」

伊関「福島第一原発の事故で、ドイツは脱原発に舵を切ったけど、日本は逆だ。原発を失くしたくない連中が自民党を政権に戻した。東京じゃ東北の津波も放射能もまるで他人事だ」

棚谷「沖縄の基地も他人事だ」

伊関「基地も原発も東京に持ってくればいいんだ」

棚谷「どうせなら、俺は東京と一緒に滅亡したい。みんな追連れにして」

伊関「いいね」

棚谷、自分の服の臭いを嗅ぐ。

伊関「あの部屋の黴臭さがうつった？」

棚谷「卯の花腐し、か……俺もどうやら腐りかけてきたみたいだ……いや、俺は、とっくの昔に、腐つてたのかも。5年、映画が撮れなかった。だけど、撮ろうと思うなら借金でも何でもして、撮れたはずだ……俺は、桑山みたいに貪欲じゃなかったんだ。映画に対して、祥子に対しても……俺の腐臭を祥子は、嗅ぎとっていたのかもしれない」

○ 路地を曲がる棚谷と伊関

伊関「……いい女だったな」

棚谷「ああ」

伊関「俺たちが悪いんだろうか」

棚谷「幸せにできなかった？」

伊関「俺たちは幸せだろうか」

棚谷「幸せじゃない男が女を幸せにできるわけがない」

伊関「できたかもしれない」

雨が降ってくる。

棚谷「……映画のことしか考えてなかった」

伊関「一緒に考えられなかったのか。女優と監督だろ。同じ夢を見られなかったのか」

棚谷「映画はもう夢じゃなかった。ただ映画

にしがみついていたんだ」

伊関「だったら様子を棄てないで、映画を棄ててればよかったんだ」

栩谷、伊関のアパート前で立ち止まる。

栩谷「……棄ててない」

伊関「あんたに棄てられたから、様子は死んだんだ。桑山って奴は、単なる道連れだ」

栩谷、伊関の胸ぐらを掴む。

伊関「!?」

栩谷「……俺は、映画にも様子にも棄てられたんだ……」

伊関「結構、降ってきたから、まあ、ちよつと、どう……」

と伊関がアパートの中に入っていく。

栩谷、玄関に吸いこまれていく。

○ アパート・階段

センサライトが点く。

栩谷「電気止められてるんじゃないのか」

伊関「電池だ。俺が付けたんだよ。暗いと危ないだろ」

栩谷、階段を上ってゆく伊関についてゆく。

踊り場の鏡に伊関と栩谷の姿が映る。

栩谷、鏡を見ることなく、階段を上っていく。

○ 同・伊関の部屋

栩谷と伊関、六畳間に入ってくる。

と、開け放たれた襖の向こう、六畳間のベッドの上で、リンリンとハン・ユジョン(20)が裸で絡み合っている。

蛍光灯が二人を照らしている。

栩谷「そっちなのか」

伊関「両方だとは聞いてたけど」

リンリンとユジョン、舌を絡ませ、互いの乳房を揉みしだく。

伊関「リンリン、誰、それ?」

リンリン「大学の友だち。ユジョンちゃん。伊関さん、いなくなっちゃったから呼んだの」

栩谷と伊関、六畳間にあぐらをかいて、二人の抱き合う姿を見る。

リンリン、ユジョンを押し倒し、乳房、へそ、股間へと舌を這わす。

ベッドの上にはパイプ、ローター、アナリストティックがある。

リンリン、ローターをユジョンのクリトリスに当てたり、口で吸ったりする。

ユジョン(韓国語) ああ、すごくいい。もつと吸って……」

リンリン、ヴァギナを舐めながら、体の向きを変え、ユジョンの顔を跨ぎ、ヴァギナをユジョンの顔に押し付ける。

ユジョン、リンリンのヴァギナにパイプを挿入し、クリトリスを舐める。

リンリン「(中国語) あ、いい。(日本語) もつと激しく動かして……」

ユジョン、パイプを激しく動かす。

リンリン「ああ!」

リンリンの体が痙攣し、イク。

ユジョン「(伊関に) あたしをイカせて」

伊関「え」

栩谷、笑う。

伊関、服を脱ぎ、ベッドへ。ユジョン、フェラチオする。

伊関「(感じて) ……」

ユジョン「後ろからして」

伊関、後背位で挿入し、腰を振る。

ユジョン「入ってるの?」

リンリン、覗いて、

ユジョン「入ってるけど」

ユジョン「何か硬くない。抜けそう」

リンリン、アナリストティックを伊関のアナルに挿入する。

伊関「ギャッ」

リンリン「おつきくなーれ」

とアナリストティックを激しく動かす。

伊関「やめる。やめろって。あ……」

ユジョン「おつきくなってきた」

リンリン「お尻もいけるじゃん」

ユジョン「ああ」

と感じ始めて――。

酔眼の栩谷が微笑む。

目が虚ろになり、そのまま六畳間に寝転がる。

栩谷「目を閉じて」……」

○ 栩谷の夢

撮影現場。

台本を読んでいる栩谷(35)の元に、祥子(26)が駆けてくる。

祥子「はじめまして。桐岡祥子です。よろしくお願いします」

祥子、緊張しながらも精一杯の笑顔を見せる。

栩谷「祥子の笑顔に見惚れて……」

○ 元の伊関の部屋

栩谷、酸素を求めて喘ぐようにして、不意に目醒める。

全裸のリンリンが栩谷の唇に唇を重ねている。

顔をそむける栩谷の唇をリンリンの唇が追いつき、張りついてくる。

リンリンの両手が栩谷の顔の上を滑り、髪の中に入ってきて、十本の指が絡みつくようにして栩谷の頭を抱えこむ。

リンリンの唇が栩谷の唇を貪り、濡れた音とともに離れ、栩谷の鼻孔近くにとどまったまま、かすかに喘ぐ。

リンリンの唇の間から舌が出て、ちろりちろりと栩谷の唇や歯茎を舐めまわす。

栩谷、手を上げて、リンリンの肉をまさぐる。

リンリンの背中を滑らせていった栩谷の掌が尻のむっちりした丸みにまで行き当たる。

栩谷の舌も動き出し、リンリンの舌と絡み合う。

リンリン、上半身を起こし、栩谷の上着を捲り上げ、脱がすと、栩谷の乳首をちろちろと舐める。

リンリン、トランクスを脱がし、フェラチオする。

栩谷「感じて」……」

リンリン、上になって、自分の中に導く。騎乗位のリンリン、腰を前後に振り、陰部を擦りつける。

リンリン「(中国語) ああ、いい……」

栩谷、感じて、目を閉じる。

リンリンの腰の動きがとまる。

栩谷「? (と目を開ける) ……!?」

リンリン、腰を動かしながら、栩谷を撮影する。

栩谷「――」

栩谷、顔を手で隠す。

リンリン、その手を振り払い、栩谷の表情を撮る。

リンリン「オジサン、もっと感じて。オジサン、もっといい顔しなよ」

○ デジタルビデオカメラの映像
栩谷の顔、乳首、腹筋、繋がった部分が映し出される。

○ 元の伊関の部屋
リンリン、腰動かしながら、

リンリン「イキそう」

栩谷「……まだだ」

栩谷、上半身を起こし、リンリンを押し倒すと、正常位で、激しく腰を突き上げる。

下になったリンリン、栩谷を撮り続ける。

栩谷のペニスがリンリンの肉の中を掻き回す。

リンリン「やばい、(中国語) やばいよ、イキそう!」

栩谷、デジタルビデオカメラを奪い、腰を突きながら、リンリンにレンズを向け

る。

○ デジタルビデオカメラの映像

リンリンがイク瞬間の表情が映し出される。

○ 元の伊関の部屋

栩谷、リンリンの中で果てる。

栩谷、乳房に顔を埋めて、

栩谷「死のう……」

リンリン「え」

栩谷「一緒に死のう」

リンリン「オジサン、なに言ってるの。今、

一緒に死んだばっかじゃん」

とケラケラと笑う。

栩谷の目が閉じていく。

× × ×

栩谷、大きくくしゃみを一つして目が醒める。

リンリンの姿はない。

栩谷、トランクスを穿き、襖を開ける。

空のベッド、誰もいない。

栩谷、ぬるい缶ビールを飲む。

雨は降り続けている。

デスクの上のノートパソコンが開かれ、

スクリーンセーバーになっている。

ガラス鉢の中で、金魚が勢いよく泳ぎ

回っている。

栩谷、ガラス鉢を指で、弾く。

と、マウスが感知し、スクリーンセイ

バーから、ワード画面に切り替わる。

ワードには、シナリオが書かれている。

タイトルは『花腐し』。

栩谷「!?」

○ パソコン画面

入り江に雪が舞っている。

波打際に桐岡祥子(32)と桑山篤(41)

の水死体が打ち上げられている。

互いの手首がホテルの浴衣帯で結ばれて

いる。

画面がスクロールし、とまる。

伊関「卯の花腐し……」

栩谷「何？」

伊関「ウツギの花も腐らせるってね。今日み

たいな雨のことを言うんだろう。春されば

卯の花腐し……って、万葉集にさ」

栩谷「妙なこと知ってるな」

画面がスクロールし、とまる。

栩谷と祥子、沈黙し、見合う。

祥子「俯き……ごめんね」

栩谷「……誰なんだ」

祥子「……桑山さん」

栩谷「……そうか」

○ パソコン画面を見つめる栩谷

○ パソコン画面

『栩谷「……そうか」の文字が消えて、

『栩谷、祥子を殴る。』と書き換えられる。

『栩谷、祥子を殴る。』の後に、『祥子「顔

ぶたないで。私、女優なんだから』と

書き換えられる。

『祥子「顔、ぶたないで。私、女優なん

だから』が消され、『栩谷、祥子を殴

る。』も消され、『栩谷、祥子を抱き締め、

唇を重ねる。』と書き換えられる。

○ 同・廊下

栩谷、部屋から出てくる。

踊り場の鏡の中を覗きこむ。

くたびれた顔の中年男が、そこにいる。

と、栩谷の背後の、わずかに離れた階段の

あたりに小さな白っぽい女の顔が浮かび

上がる。

ぼんやり照らし出された俯き加減の横顔

は祥子だった。

栩谷「……」

祥子、棚谷の視界をゆっくりと掠めて階上へ消えてゆく。

階段を軋ませる軽い足音もかすかに響き、背後を遠ざかつてゆく。

棚谷、祥子を追って、階段を上る。

祥子の白っぽい後ろ姿が二階の廊下を歩く。

棚谷「……」

祥子、伊関の部屋のドアを開け、中に入っていく。

棚谷「……!」

棚谷、廊下を歩いていく。

センサーライトが歩く棚谷に反応し、ぼんやりと点灯する。

棚谷、伊関の部屋のドアを開ける。

部屋の中を見ている棚谷。

棚谷の眼から一筋の涙が流れ落ちた。

終わり

(引用)

上野千鶴子(1994)『性愛論 対話篇』河出書房新社

『シナリオ入門』(1991)宝島社

JASRAC 出 2404225-401

鬼太郎誕生 ゲゲゲの謎

吉野弘幸

〈脚本家略歴〉

吉野弘幸（よしの ひろゆき）

1970年6月2日生。早稲田大学第一文学部卒。出版社勤務、高等学校非常勤講師、雑誌『アニメージュ』ライター等を経て、2000年『GEAR戦士電童』にて脚本家デビュー。以後『機動戦士ガンダムSEED』（脚本）、『舞-HiME』『舞-HiME』（シリーズ構成・脚本）、『マクロスF』（シリーズ構成・脚本）、『ソ・ラ・ノ・ヲ・ト』（シリーズ構成・脚本）、『コードギアス（副シリーズ構成・脚本）』、『ギルティクラウン』（シリーズ構成・脚本）『ストライク・ザ・ブラッド』（シリーズ構成・脚本）、『ワールドトリガー』（シリーズ構成・脚本）、『黒執事（第3期・第4期）』（シリーズ構成・脚本）等に参加。『ゲゲゲの鬼太郎（第6期）』への参加を切っ掛けに、『鬼太郎誕生〜ゲゲゲの謎〜』の執筆に至る。漫画原作も手がけており、代表作は『聖痕のクェイサー』『神呪のネクタール』『機動戦士ガンダムラストホライズン』等。



原作…水木しげる

監督…古賀豪

製作…映画「鬼太郎誕生 ゲゲゲ

の謎」製作委員会

制作…東映アニメーション

配給…東映

〈スタッフ〉

キャラクターデザイン 谷田部透湖

美術監督

市岡茉衣

色彩設計

横山さよ子

撮影監督

石山智之

音楽

川井憲次

製作担当

澤守洗

堀越圭文

〈キャスト（声の出演）〉

鬼太郎の父

関俊彦

水木

木内秀信

龍賀沙代

種崎敦美

長田時弥

小林由美子

龍賀時貞

白鳥哲

龍賀時磨

飛田展男

龍賀孝三

中井和哉

目玉おやじ

野沢雅子

○ 廃村(哭倉村)・夜

闇——。

——の中に、響く下駄の音。

(SE) カラーン、コローン……

しとしとと降る雨の中——。

ふつ……と浮かびあがる灯火。

その灯火に照らされるシルエットは、番

傘を差した二人の人影。

一人はちゃんちゃんこに下駄の少年。

その姿を照らす炎は、空中に浮かんだ釣

瓶火であり——。

鬼太郎「父さん。今日はあいにくの天気になつてしまいましたね」

所々崩落し、もはや車などは入れそうにない谷間の道を、人影はまったく危うさもなく歩いて行く。

目玉親父「そうじゃのう。じゃが僕は嫌いではないよ。傘を打つ雨の音は、不思議と心を落ち着かせてくれるからのう……」

猫娘は黙って傍らを歩いており——。

そんな一行の姿を、物陰に潜みながら追っている、アウトドアジャケットを着て傘をささずにいる男性——雑誌記者山田。

目玉親父「気付いておるか?」

鬼太郎「はい。とうとうこんな所まで……」
振り向きもせず、言う鬼太郎。

目玉親父「困ったものじゃのう」

——と、釣瓶火が、やがて正面にそびえる何かを照らし出す。

それは御札を貼られた太岩であり。

目玉親父、岩に飛び移り御札に触れる。

——と、札に書かれた文字がふうつと浮かび上がる。

目玉親父「むう……これは……!」

唸る親父。

目玉親父「あれから七十年……降り積もった時間の果てに、この時が来たか」

鬼太郎「……では、ついに?」

目玉親父「ああ。ついにじゃ」

鬼太郎、目玉親父に手をさしのべ、自分の掌に乗せ、見つめ——。

鬼太郎「——(促すように) 父さん」

目玉親父「行こう、鬼太郎」

カランコロんと、再び下駄の音と共に、村の中に入って行く鬼太郎たち。

隠れていた山田も、追って歩き出し——。
編集長(OFF先)「ゲゲゲの鬼太郎……?」

○ 週刊誌編集部(回想)

足の爪を切りつつの編集長に、山田。

山田「ええ。彼はただの都市伝説じゃない、もう半世紀以上も子供達の噂に登場し続ける、謎の少年なんですよ!」

勢い込んでまくしたてる。

山田「調べれば調べるほど興味深くて。ぜひ彼に聞いてみたいことがあるんです。ですからその……」

編集長、ペラを一枚だけおさなりにめくつてのぞき。

編集長「オカルトねえ。……ま、いーんじやないの、山田チャンの好きにしなよ」

また爪切りに戻る。

山田「い……いいんですか!」

編集長「もう誰も紙の週刊誌なんか読んじやいねえ。部数は低迷、いよいよ廃刊待ったなし、だ。——何やったつて一緒さ」

山田「だからこそ! 僕はこの記事で、新たな読者をすねえ——」

編集長「わかったわかった。だから好きにしろって言ってるだろ?」

投げやりな言動に、少しムツ……として。山田「では、好きにさせていただきます!」

○ 廃村(哭倉村)

山田「……」

雨の中、入り口の岩の脇を通つて村に入りこむ山田。

見渡すと、崩れた廃屋が点々と見え、灯りも人氣も全く無い。

山田「廃村……? こんなところに……?」

スマホを取り出し地図を開く。

山田「麓の温泉街跡は有名な廃墟だけど、こんな村の話は——」

データがじわりと落ちてきて地図が表示される——と、荒い地図データの中に一瞬『哭倉村』と名前が表示され——。

山田「なぐら……むら……？」

が、すぐにその文字も消えて、地図は真っ白になって固まってしまふ。

山田「……え？」

見れば、アンテナが消え圏外表示。

——と、不意に、下を向いてスマホを見つめる視界を何かが通り過ぎる。

山田「……!？」

だが、はっきり見たわけではないので、気のせいかとスマホに目を戻す——と、スマホ画面が消灯、ブラックアウトした画面には、山田の顔と——。

怖ろしい顔が写り込み。

山田「ひっ!？」

バツと振り向く——が、何もない。

山田「きつ、気のせい……だよな」

すると背後から。

鬼太郎（OFF）「この先は——」

びつくう、と振り向くと、鬼太郎がいて

鬼太郎「何が起こるか分かりません。すぐに引き返して下さい」

山田「……じゃ、じゃあ五分でいいんだ！

僕にインタビュの時間を——」

だが鬼太郎は聞かず。

鬼太郎「警告はしましたよ」

言う、カランコロンと去って行く。

山田「まっ……待ってくれ！」

バチャバチャと水たまりを踏みながら立ち上がった追いかける山田だが、すぐに鬼太郎を見失ってしまふ。

山田「あきらめるもんか……！」

山田、菌を食いしほりそのまま歩く。

視界に広がるのは、薄闇の中、朽ちた廃屋や、なぜか大穴の開いた田んぼの跡地、また崩れた土塀など。

山田「ここであつた……何が……？」

と、少し大きな家（旧長田家）。

まるで、何か大きな力で叩きつぶされたかのように、半分が潰されている。

山田「……………」

写真を撮ろうと、スマホを構える山田。

——と、その画面に突如——。

バツ！と現れる怖ろしい顔。

山田「ひっ!」

慌てて手放す山田。

地面にぴちゃん、と落ちるスマホ。

山田、拾おうとするが——。

背後から、ぴちゃ……ぴちゃ……ぴちゃ……と、

背後からの湿っぽい足音に気付く。

山田（「ヅクリ」）

そつ……と横目で振り向くが、何もない。

——だが、ぴちゃ、ぴちゃ、と地面の水を、何かが確実に踏んでいる。

山田「あ、あは……」

乾いた笑みを浮かべる山田。

その背後にいくつかの、不気味な顔や影がふうつ……浮かびはじめ、その一体が山田の肩に、ぴちゃり、と手を置く。

山田「ひいひい……!!」

声にならない悲鳴を上げて、なんとかスマホを拾ってその場を駆けて逃げ出す。

——と、彼方に灯りを発見。

それは、鬼太郎たち一行らしく。

山田「（あいで）きつ、鬼太郎くん……！」

鬼太郎たちが向かうのは、村の奥の一番大きな屋敷の廃屋——龍質屋敷跡。

そびえるその存在は、夜の雨であるにも関わらず、禍々しいオーラを放っているかのように——。

山田「……（目を放せない）」

——と、そのとき、山田の足許の地面が、

フツと消え。

山田「うわああ——っ!」

陥没した崖の斜面を、ゴロゴロと転がって、落ちて行く山田。

山田「う……………いてて……………」

底まで転がり落ちた山田、あちこち痛む部分を触りながら身を起こす。

山田「……………?」

すると、目の前にスマホが落ちていた。

山田、バツ、と、それが命綱であるかのように取り上げ握り、ライトを点ける。すると、そこが地下につくられたホールのような空間であり、一部は崩落しているが天井の大部分はまだ残っており、照らし出されるホールは、病室のような手術室のような、工場のような——奇妙な空間であることがわかる。

山田「……………?」

少し落ち着いた山田、雨の当たらない、天井のある空間部分へ歩を進める。ライトに映し出されるのは、怖気を振るような禍々しい器具など。

山田「……………?」

山田「……………?」

だがベッドはカラであり。しかし、さらに奥に進むと——。地面に、朽ちた布……包帯らしきものに巻かれた人型がよこたわる。そして、その布の隙間からは、人骨らしきものが覗いて——。

山田「……………?」

山田「……………?」

山田「……………?」

○ **【過去編】龍賀屋敷・奥の座敷**

白目を剥いて倒れている龍賀時貞。その形相は、あきらかに生者のそれではなく、発見して悲鳴を上げた女中——菊は、そのまま尻餅で後退ると。

菊「だっ……………だれかつ!」

菊「……………」

菊「……………」

菊「……………」

菊「……………」

菊「……………」

菊「……………」

菊「……………」

○ **東京**

昭和三十一年の東京、その点景。テロップ「昭和三十一年」

○ **売血所**

——に、居並ぶ男たち。抜かれる血。

○ **血液銀行全景**

部長「(OFF)「これはまだ新聞社にも流れていない極秘情報だが——」

× × ×

部長「龍賀製薬の会長、龍賀時貞翁が亡くなったそうだ」

！ と見る部員たち。

部長「龍賀製薬は我が東京血液銀行屈指の大手取引先である！ その会長が亡くなったとなれば大事件だ。他の誰よりも早く馳せ参じて、誠意を見せねばならん！」

すると、一人の青年、ガタと立ち上がる。

部長「……………」

部長「……………」

部長「……………」

部長「……………」

部長「……………」

部長「……………」

部長「……………」

部長「……………」

部長「……………」

部長「……………」

部長「……………」

水木「僕が行きましよう」

部長「水木くん……」

その青年は、水木で。

部長「そうか。君はいまの克典社長とも面識があったな」

水木「領き」このまますぐ向かいます。まだ最後の夜行に間に合うでしょう」

部長「頼むぞ。一族の次の当主も、遺言で指名される筈だしな。——君は誰と見る？」

水木「入り婿ではありませんが、やはり現社長の克典氏一択でしょうね」

部長「よし、こちらもその想定で動く。あとは……」

部長、耳を寄せ。

部長「龍賀といえば、例の『あれ』だ」

水木「無論、しっかり探ってみせますよ」

部長「背中叩き」よし！ 任せたぞ水木君。上手くいったら二階級特進だ！」

水木「は」

そして水木、振り向いた部長の背中に、皮肉な苦笑を向け——。

○ 山間部を走る汽車（夜中）

けっこう混んでおり、立っている人間もちらほら居る車内、水木は、先ほどと同じスーツ姿で四人掛けボックス席の窓際に着き、山並みを眺めている。

水木 M「龍賀製菓は、日清、日露で名を知ら

しめ、太平洋戦争で大きく業績を伸ばした死んだ龍賀時貞翁はその立役者である立志伝中の人——」

インサートで、二次大戦の担当中の衛生兵や、龍賀製菓の生産工場、本社の建物と看板などと、龍賀翁本人のモノクロカットや新聞記事的なカット。

水木 M「その原動力となるのは……『あれ』」

〔回想〕 × × ×

先ほどの部長と、小さな薄暗い部屋で。

銀のケースに入った小さなアンブル。

「M」だけが刻印されている。

水木「……………」

〔戻り〕 × × ×

水木 M「時貞自身も含め、龍賀一族には謎が多い。だが、だからこそ、その内側に食い込むことが出来れば……………」

と、煙草を吸う太陽族っぽい若者たちも

おり、傍若無人な笑い声。

水木「……………」

心の中で舌打ちしつつ、無意識にポケットを探る水木、煙草を取り出す——が、

水木と同じボックスに座っている、粗末な手作りの人形を抱えた少年が、煙を吸い込んで、咳き込み始める。

ジロウ「（コホコホ）」

母親「背中をさすり」あともうちよっとだから。我慢をし」

その様子を見て、水木、む、と取り出した煙草をポケットに仕舞うが、少年の咳は止まらず——。

青年 A「うるさいな」

母親「すみません、この子、ちよつと煙草の煙に弱くて……お許しください」

青年 B「おいおい、じゃあその咳は俺たちのせいだっていうのかい？」

青年 C「いまは自由の時代だよ。どこで煙草を吸おうが俺たちの勝手さ。なあ、坊主」

凄んで煙をわざと吹きかける青年。

ジロウ「（ますます咳き込む）」

青年 A「ん？ 僕らの煙草よりも、あんたの方がクサイぞ。何か酷い臭いが……」

青年 A、少年の抱えた垢じみて薄汚れた人形を、つまんで取り上げる。

ジロウ「あっ……………」

青年、その臭いを嗅いで。

青年 A「クサイ！ クサイぞすぐく！ なんだよこれは、俺等の煙草なんかより、こっちの方がよっぽど迷惑だな」

床に落とすと、そのまま踏みつけにする。

ジロウ「……………」

絶望とショックに見開かれるジロウの目

げらげらと笑う太陽族。

歯噛みする水木、膝の上に置かれた拳が、ぐつと震える。

——が、動かない。動けない。

しかしそのとき。

ふつと周囲の音が消え——。

(SE) りいりいん……

ハツと目を上げる水木。

——と、通路に、一人の男が立っているのに気付く。

ふうっ……と、突然、客車内の温度が下がったかのような、不思議な気配。

男は、白髪で片目を隠し、外套を羽織った着物姿で、覗くその瞳は、赤く——。カッ……と歩を進める。

(SE) りいりいん……

風鈴のような、仏具の鈴のような、あるいはそれらとも全く違う澄んだ音。魅入られるように見つめる水木。

まるで客車内に、水木とその男しかないような錯覚に囚われ——。

——と、男がカッ、と歩みを止めた瞬間、錯覚は失せ、喧噪と汽車の音が戻る。

水木「……………」

水木が啞然としてみると、青年は、捨てられた人形を抱き上げる。

鬼太郎父「おお、可哀想になあ。痛かったじゃろう……」

愛おしむように撫でると、人形が涙をほろりと流し——。

水木「——!？」

目を擦る水木、と、もちろん人形は泣いてなどいない。

青年A「おいキミ、勝手をしてくれるなア」鬼太郎父「勝手はお互い様じゃ。そりゃ煙草を吸うのはあんたらの勝手かもしれない。

なら、どんな人形を大事にしようが、それもこの子の勝手じゃろうて」

青年B「なんだと……!？」

凄む青年たち、立ち上がる。

鬼太郎父「もしや、僕に喧嘩売つとるかね？」青年A「売ってるのはそっちだろ。おれたちは拳闘部だぞ!」

ボクシングの構えをする青年A。

鬼太郎父「それがどうしたというんじゃ？」水木「……!」

なんかすごいのかこいつ!? 的に息を呑む水木だが——。

次の瞬間、青年のパンチが鬼太郎父の顔面にモロに決まる。

水木「へっ……!？」

青年B「口ほどにもない。やっちゃまえ!」そのまま、他の青年にも殴られたり蹴られたりするが、無抵抗で立ち尽くす鬼太郎父、だが、人形だけはけっして手放さ

ず、そのまま胸に抱いて庇っている。

——と、そこに。

車掌「どうしました。何か、採め事ですか!」ガタイのいい車掌が車両にやつてくる。

気付いた太陽族たち、ちつと舌打ちして、そのまま別車両に。

すると車掌、水木に眼をつけ。

車掌「喧嘩かね? なにがあつたか、事情を聞かせてもらえませんか?」

水木「それは直接この男に——」と、振り向くと。

水木「!？」

鬼太郎父の姿はない。車掌「おいどうしたんだね? 君?」

水木「……………」

キツネにつままれたような顔の水木。背後では、ジロウが嬉しそうにいつのまにか返してもらった人形を抱いている。

× × ×

——と、山の端から光が差しきて。夜明けと共に、汽笛が鳴り——。

○ 温泉街の駅

入線している汽車。

× × ×
昭和の観光地として大きくなり始めてい

る温泉街の点景、駅前に数台タクシー。

○ 哭倉村への道

——を、タクシーで行く水木。

水木 M「駅からさらに車で二時間……本当に山奥なんだな。龍賀本家のある哭倉村とやらは」

そんな水木を、チラと何うようにバックミラーで見るタクシー運転手。

だが水木は気付かず。

水木 M「龍賀一族、か……」

〔回想〕

× × ×
会社のデスク、夜に一人で残ってスクラップブックを開いている水木。

そこには、数年以内っぽい龍賀一族の記念写真らしきものが貼られている。

水木 M「(現在の水木の M です) 可能な限り調べたが、不自然なほど情報が少ない。心してかからねば」

写真の中の時貞や、また中学生くらいいの沙代、幼児の時弥などをアップに。

〔戻り〕

× × ×
すると、ドン、と車が悪路で跳ねて。

水木「走りにくそうな道だね」

運転手「なにせ哭倉村と行き来するだけの行き止まりの道ですからねえ」

水木「途中に村はないのかい？」

運転手「昔はいくつか——ほら、ちょうどあのあたり、見えますかい？」

車が通り過ぎるところに、朽ちた小さな村や田畑の跡地らしきものが。

水木「廃村かい？」

運転手「ええ。何年かまえ、ひと晩で村の住人がぜんぶ消えちまったんですよ」

水木「ひと晩でかい？」

運転手「昔つから、このあたりは、やれ天狗に攫われたとか鬼に喰われたとか——よく人間が消えるんでさあ。——特に、余所者はねえ……」

バックミラーから見る運転手の、少し脅すような目。

気づき、……！ となる水木。

運転手「時々、あんたみたいに、どう見ても村の人間じゃねえ客をのせるんですがね。不思議なことに、帰りに呼ばれたことあねえんですよ。——なぜでしょうねえ？」

水木「……っ、帰りは、村の人に送つてもらったんだろう」

運転手「——だといいですねえ」

○ 哭倉村の入り口(※岩はない)

——で、車が停まる。

運転手「ここが哭倉村でさあ。お客さん、引き返すんなら、今が最後ですよ」

その運転手の奇妙な迫力に、くっ……となるが、

水木「結構だ。降ろしてくれ」

× × ×
走り去るタクシー。

水木「……………」

歩いて少し進むと、追分の地藏堂。しっかり手入れされて供え物もある。

——のに、どこか禍々しい。

通り過ぎると、村が見渡せるようになる。青々とした田んぼと、いくつかの家。中にはけっこう大きな屋敷(村長・長田の家)もある。

と、そこで水木、？ と気付く。

ある家の窓から、こつちを覗いている人影があり、軽く会釈をしようとするが、人影はスッと隠れてしまふ。

水木 M「……………」

気を取り直し、進む水木。

× × ×

——と、道の先に大きな樹があり。

その木の下に、着物の女性が。

どうやら道端で、草履の鼻緒が切れて難渋している様子。

と、水木の脳裏にフラッシュする、一族の写真の少女の姿。

水木「……………」

○ 道端の大樹

——に手をかけ、片足を上げている着物の女性・沙代、取り上げた草履は、鼻緒が切れてぶらりとぶら下がっている。

水木「(OFF)「お困りですか?」

振り向くと、そこには爽やかな笑顔で挨拶をする水木がいて。

水木「ああ……鼻緒が切れてしまったんですね。これは大変だ!」

膝を折ってしゃがみ込む水木、

水木「貸して下さい。直しましょう」

戸惑い、赤面の沙代。

沙代「でもっ……」

と、水木、胸元から舶来らしいハンカチを取り出し、いきなり歯で裂く。

沙代「あっ……!」

水木「さあ。もし断られたら、このハンカチが無駄になってしまいます。どうぞ」

手を差し伸べる水木。

沙代「あ、あの……失礼ですけど……?」

水木「東京からきました。龍賀製薬とお取引させていたっている会社の者です」

沙代「東京から……!」

ごく僅かに興味が色が浮かび、沙代、緊張を吞み込むように、一息付いて。

沙代「本当に、よろしいのですか?」

水木「お任せ下さい。——では肩に手を。足も、構わず乗せてください」

立て膝になった太股の上を示す。

沙代、少し赤くなるが、思い切つて。

沙代「……失礼します」

水木の太股に足を乗せる。

そして、草履の鼻緒を直す水木。

恥ずかしげに眼を伏せる沙代。

一枚の絵のようなその光景。

爽やかな風が吹き——。

草履を履いてみる沙代。

水木「具合はいかがですか?」

沙代「大丈夫そうです」

水木「それはよかった」

交わされる笑顔——と、そこに。

時弥「さよねえ!」

? と見ると、そこには10歳くらいの少年——時弥が。

年——時弥が。

沙代「ときちゃん? やだもぅおどろいた。外に出て大丈夫なの?」

時弥「今日は少し調子いいし。それに寝ても

いられないよ。お祖父様が……」

沙代「……。そうね。そのことで、ときちゃん

んのところに行く途中だったの」

頷くと時弥、水木を見上げ。

時弥「おじちゃんがよそものの人だね?」

水木「よそもの……?」

時弥「村のみんなが言ってたよ! 知らないよそものが村に入ってるって!」

邪気なく言う時弥、少し怯む水木。

時弥「ねえ、おじちゃんどこからきたの?」

水木「あ……ああ。僕は水木という。東京から来たんだ」

時弥「東京!? すごいや! ねえ、じゃあ川

上の試合見たことある?」

水木「川上……? ああ、野球だね。たしか

二千本安打達成の試合をテレビで見たよ」

時弥「テレビで!? ほんとに!? うわあ……

ねえ、どんなだった? テレビでちゃんと

と見えるの? 川上ってやつぱり——」

と、そこで沙代が戒める。

沙代「ときちゃん。お客さんが驚いてしまっ

てでしょう。それにあんまり興奮すると、ま

た熱がでてしまいますよ」

時弥「え……大丈夫なのに……」

ちよつと可愛くむくれる時弥。

水木「僕はしばらくこの村に滞在するつもり

だから、また機会があったら話そう。ええ

と、沙代、さんでいいのかな?」

沙代「は、はい……」

水木「龍賀家のお屋敷へは、この道であつて

いますか?」

沙代「はい」

水木「ありがとうございます。——では沙代

さんも、機会があつたら、また」
沙代「……はい。水木さま」

言つと、会釈しながら去つて行く沙代、
ちいさくバイバイの時弥。

見送る水木の口元は、しめしめ、龍賀の
マゴたちらしき子たちと早速知り合えた
と、ニツと歪んで――。

○ 龍賀の屋敷

そびえる龍賀屋敷。

気圧されるように見つめる水木、と――。

長田（OFF）「何かご用でしょうか」

音も無く現れた下男らしき男性は、穏や
かながらも緊張感を纏っている。

水木「わ、わたしは東京血液銀行の水木と申
します。仕事で龍賀克典様にお世話になつ
ておりまして……お忙しいとは存じますが、
お取り次ぎいただけますでしょうか」

長田「……少々、お待ちいただけますか」

すると、背後に現れた他の下男（※キヤ
ラではなく、髪と陰で顔見えず。裏鬼道
の部下）に会釈で指示すると、その下男
がスツと踵を返して駆けて行く。

長田「……………」

水木「……………」

長田の眼光は鋭く、何か見透かされるよ
うな、試されるような居心地の悪さ。

すると、足音と共に玄関から声。

克典「水木くん？ おお、やはり水木君か！
はるばるよく来てくれたな！」

現れるのはスーツ姿の龍賀克典。

水木「ご無沙汰しております、社長。――こ
のたびは、誠にご愁傷さまです……！」

ふかぶか頭を下げつつ、水木。

水木「さる筋から時貞様の訃報に接し、これ
は一刻も早くかけつけてお手伝いせねばと、
馳せ参じました」

克典「さすがの早耳だな。立て込んではい
るが、まあ、ひとつ上がりたまえ」

水木「お邪魔いたします」

水木 M「先ほどの沙代さんは、この克典社長
の娘の筈だな……」

広い邸内を進む水木たち。

克典「ここまで来るのは大変だったろう」

水木「知らせを聞き夜行に飛び乗りました。

社長が龍賀一族の当主となられる場に、ぜ
ひ立ち会わねばと、その一心で……」

克典「はっはっは。気が早いなキミは。――
だが嫌いではないよ、その身軽さは」

――と、忙しそうに通りにかかる女中に。
克典「来客だ。この方を、あとで離れにお通
ししてくれ」

女中「へ、へえ……でも今夜は御籠りじゃ
あ」

克典「だから離れに通すんだ。用意を頼む
ぞ」

頷いて、そそくさと去る女中。

水木「御籠りというのは……？」

克典「龍賀の伝統的な仕来りでな。お清めの
ために、葬儀の前夜はみんな、部屋に閉じ
こもつて潔斎するそうだ」

水木「それは……また変わった仕来りです
ね」

克典「迷信がまだまだ幅を利かせている村だ
からな。――それにほら、見えるかな、す
ぐ隣にある神社」

示す先には、哭倉神社が。

克典「龍賀家の代々の当主はあそここの神職も
兼ねていてな。時貞翁……義父も長い間、
龍賀製菓の社長と宮司を兼任していたんだ
よ」

水木「へえ……由緒がありそうですね」

克典「どうだかな。土俗の神を祀つて奇妙な
儀式ばかりしているし、由乗も歴史も怪し
いものさ」

○ 応接の間

床の間（？）に、叙勲時の記念らしい大
きな龍賀翁の写真が飾られている。

水木「――」

その迫力に少ししたじろぐ水木。

室内には、龍賀の一族が座っており、上座の方には一臣や弁護士がいるおり、一同の視線が水木に集中する。

水木「……！」

——と、和服の女性が。

乙米「……どなたです？ あなた」

克典「ウチの大手取引先である、東京血液銀行の水木くんだ。龍賀の一大事と聞いて駆け付けてくれた」

乙米「（ジロリ）……そう。こちらの迷惑も考えずに乗り込んでくるあたり、確かにあなたのお仕事相手らしいですね」

水木M「克典社長の妻——つまり、この女性が時貞翁の長女、乙米……」

水木「不躰は重々承知しております。しかし、いてもたってもいられず……ご心痛、お察しいたします」

乙米「お察します？」

乙米、ギツ……と睨んで。

乙米「あなたにわかるというのですか!? お父様を亡くした私たちの悲しみが！」

一臣「落ち着け、乙米」

と、そこには神職の袴姿の一臣。

乙米「一臣兄さん……」

水木M「一臣……時貞翁の長男か。この格好は……さつきの神社の神職？」

と、一臣、見透かすようにジロと見て。

一臣「……面白い。良い眼だ」

水木「……？」

一臣「だがそれだけだな。——惜しい」

水木がキョトンとしていると。

丙江「ねーもーいーからさあ、早く始めてよお。いつまで待たせんの？」

崩れた感じの元美女、といった感じの女性が言う（態度や口調は、まるで何かに酔ってるかのよう）

克典「まあ待ちたまえ丙江さん。遺言の開封には、一族の全員が揃わねばならんのだ」

丙江「なによ、もう次の当主気取り？」

克典「（満更でもない）そんなつもりは……」

水木M「丙江……たしか次女の名前だ。だがだいぶ印象が違うな……」

一族の写真がフラッシュ、かなり印象が違う（※まだヤクも酒もやってない頃）

沙代「——遅くなりました」

と、そこで入ってくるのは、喪服に着替

えた沙代と、時弥の姿。

沙代「あ……！」

時弥「おじさん！」

沙代たちのリアクションで、また一同の注目に晒される水木。

乙米「早くお座りなさい、沙代」

沙代「はい、お母様」

促され、坐る沙代。

時弥「とうさん、かあさん」

庚子（背後に長田が控えている）に向かい、隣に座る時弥。

水木M「時弥はこの哭倉村の村長に嫁入りした龍賀翁の三女、庚子の息子の筈。つまり

こちらの女性が庚子で、この男は使用人ではなく、時弥の父、村長の長田か……」

克典「さて。これでようやく揃った。——先生、お願いします」

ワクワクするように言う克典。

弁護士「は。ではこれより、龍賀時貞様の遺言による、龍賀家を継ぐ新たな当主の指名を行わせていただきます」

弁護士、封筒を開いて。

弁護士「現当主、龍賀時貞として、以下のよう子孫たちに申し渡す。ひとつ。我が跡を継ぎ、新たな龍賀家当主には、長男、一臣を指名する」

！ となる克典、水木。

水木M「えっ……!?」

弁護士「ひとつ。一臣は、長田時弥を養子とし、時弥の成人後は、一臣に変わり時弥が当主の座に就くものとする」

乙米や一臣には既定路線だったらしく、淡々と聞いているが、長田と庚子は初耳だったらしく、！と驚いている。

時弥「ぼくが……？」

庚子「ほ、本当にお父様は、時弥を……？」
弁護士「間違ひありません」

庚子「時弥……」

庚子、時弥をぐっと抱きしめる。

弁護士「ひとつ。龍賀製菓の社長は克典のままとする。但し、妻・乙米を会長とし、社の方針に関する一切の最終決定権は、乙米が持つものとする。——以上です」

克典「馬鹿な……！ わ、わたしは龍賀家の発展のためにこれだけ尽くしてきたというのに……。こんな……！」

ワナワナと震える克典。

丙江「あはははは！ いい気味。ムコ養子のクセに出しゃばりすぎなのよ！」

と、青ざめた克典の傍ら、一臣が前に出て告げる。

一臣「——と様の遺言により、私が一族を統べる。異議はみとめぬ。よいな」

時貞の写真を背後に背負い、言う一臣。ぐ……と見る克典だが、何も言えない

一臣「では皆、明日の葬儀に備え、御籠りを始めてくれ」

解散ムードになる室内。

水木M「こいつはとんでもないことになったぞ……！」

——と、沙代が見ているのに気づき。

水木、こっそりと近寄り。

水木「克典社長の娘さんだったんですね。驚きました。——お父さん、残念なことになりましたね」

沙代「残念、というほどかは……」

水木「え？」

沙代「龍賀の血を持たない者には、絶対に当主は継げない。子供のころから、母と祖父に言い聞かせられてきましたから……」

などと話している別の一隅では一臣と乙米がなにやらヒソヒソと話している。

乙米「兄さん。お父様が指名した以上、あなたに従います。でもお父様の代わり、大丈夫なんでしょうね？」

一臣「と様の下で、何年修行を積んできたと思ってる？ 立派に務めてみせるさ」

と、乙米、水木と沙代が話しているのに気づき、少し眉根を顰め。

乙米「沙代。いらっしやい」

沙代「あ……はいお母様。——失礼します」

水木を見つめて会釈して離れる。

と、そのとき、水木の足許から声。

ねずみ小僧（OFF）「あんたが東京の客かい？」

？ と見ると、そこにはネズミのような顔をした、下男の小僧。

ねずみ小僧「案内しろつてさ。着いてきな」

部屋から出て行く水木。

——と、その背後、沙代が一臣と乙米と話しているのをちらりと入れて（※水木は気付かない）。

○ 龍賀村・全景

夕刻の龍賀村全景。

○ 離れ

窓からは、屋敷の裏の湖が見えている。水木「……………」

時刻は夕暮れから夜へ。

波一つない、鏡のような湖面に映り込む夕景は、美しい——とも言えるが、ゾツとするような光景でもある。

水木「凄いな……」

ねずみ小僧「どうかい？」

行灯に火を移すねずみ小僧。

ねずみ小僧「ま、せいぜい気イつけなよ、兄サン。この屋敷じゃ、いつつも妙なことが起こるからな！」

キシシ、と笑いながら言う小僧。

残された水木の、行灯に映し出された影が、壁に孤独に映る。

その壁の中にギョロリと無数の目が覗く。水木「——!？」

気配を感じてバツと振り向く水木。

だがそこには、何もなくて——。

水木「……………」

○ 時間経過あり

あたりはとつぷり日が暮れ、既に夜。
ウシガエルが啼いている。

× × ×
水木は、浴衣で布団に横たわり、眠っている——が、うなされており。

○ 水木の夢

ニューブリテン島の月。

木戸（OFF）「我々に、遂に玉碎命令が下った」

× × ×
!! となる、整列した水木と同僚たち。

木戸「ただいまより、祖国に決別の礼をする。

全員、半ば右向け右」

半ば右向け右をする水木たち。

水木M「ああ、ついに終わりか……」

現実感のないように、ぼうっ……と彼方の故郷をおもいやる水木。

木戸「第一分隊より出発ッ」

行軍開始の一同。

月が煌々とそんな水木たちを照らし——。

× × ×
爆煙と閃光、陣地からの砲火が交わされ。

木戸「では最後の突撃を取行する！ 各分隊、突撃始め——っ！」

× × ×
わし、と声を上げつつ、突撃してゆく水木たちと、そこに次々襲いかかってくる敵の砲火で、次々仲間が倒れて——。

水木「わあッ！」

× × ×
バツと飛び起きるように目覚める水木。

水木「荒い息 くそっ……」

布団から身体を起こし、枕元の盆の水差しからコップに水を注ぎ、飲み干す。

——と、そこで水木、ハッと気付く。
あれはどうなさかったウシガエルの声が、びたりと止んでいる。

水木「静かだ……。いや、静かすぎ——」

その瞬間——。

（SE）龍の哭声

何か地を轟かすような、低い鳴動があり。

次の瞬間、窓の障子越しに、強烈な白光が差し込む。

!? と立ち上がり、障子を開ける水木。
見ると、湖の上空を横に駆け抜けるように、稲妻のような、あるいは龍のような閃光が走り——（※結界の境界面）。

水木「……!?」

蚊帳を出て立ち上がり、湖を見つめる。
鏡面のようだった湖面に、細波が立って

いる——と。

水木、真ん中の島と屋敷の間くらいの湖面に、人影を認める。

幻のような女。白い着物。蓬髪。
水面に、船もなく立っている。

水木「なっ……!?」

思わず声が漏れた瞬間、女がハッと気付いた様子。

水木「!!」

と、次の瞬間、女の姿はかき消える。
水木「また見間違いか……?」

と思った瞬間、背後に気配を感じる水木。
そこには女の幽霊が——。

水木「ひっ！」

腰を抜かしつつとびささる水木。

部屋の本真の中に、佇む女幽霊。

見開かれる水木の目。

——と、女幽霊は、自分の下腹部を抱えるように——。

女の幽霊「……この子だけ……は……。……かなら……ず……!」

意志と共に呟き、面を上げる女幽霊。

その顔は、醜く崩れており——。

ぐわっと水木に迫ってくる。（※鬼太郎

母の幻影です。一臣の死のタイミン

で結界が弱まり出て来ました）

水木「うわあああッ！」

——と、頭を抱えるようにして、視線を切った瞬間、すべては現実に戻り——。

夏の世の、ウシガエルの声。

バツと振り向くと、湖面はやはり鏡のようであり。

水木、じっとりとした冷や汗を拭いつつ、しばし呆然とし——。

○夜明け

結局まんじりともせず寝不足らしく、目の下にクマがある水木。

水木「(眩し)——結局、あれは現実だったのか……? いや、認められるか! この科学万能の時代に……」

だが、そこで突如悲鳴が。

『さああああ——』

!? となる水木。

浴衣のまま、離れを出て渡り廊下に行く水木、すると、駆け回る女中がいて。

水木「今の悲鳴は? 何かあったのかね?」女中「たつ、大変なんです。一臣坊ちや……」

ご当主さまが、お社の中で、亡くなつてるんです!」

水木「!!」

○哭倉神社

——の、本殿。

独鈷杵に眼球を貫かれて、社殿内の太い柱に釘付けになっている一臣。

その足は床から浮いており、独鈷杵のみでぶら下がっている状態であり——。

水木「なっ……!」

喘ぐように見つめる水木。

水木 M「尋常の死に方じゃあない。なんだってこんな……?」

傍ら、ギリリと歯噛みするように見つめるのは、異常に青ざめた乙米。

乙米「……………」

そんな乙米を、? と見る水木。

と、いつのまにかねずみ小僧が。

ねずみ小僧「うっひゃあ、こいつあひでえ」

! とねずみに気付く水木。

ねずみ小僧「言つたら兄さん。この屋敷じゃ妙なことが起こるって。しかしこいつあ極めつくだ!」

と、そこにさらに声。

克典「な……いつたどうしたんだこれは!」

と、そこにやってくる克典、さらに丙江。丙江「ひいっ! 一臣兄(にい!) なんなのこれ……どうしてこんなっ!」

と、水木、隅で震えている女中に気づき。

水木「発見したのは君かい?」

菊「は、はい……」

〔回想〕

× × ×
山の端が白んでいる時間。

封をするように御札が貼られている、本殿の扉に呼びかけている女中、菊。

だが返事はなく、扉を叩くも変化がない。

菊 (OFF)「夜が明けたら呼びに来いと言いつけられてましたので。でも、いくら呼んでも答えがなくて……」

〔戻り〕

× × ×
すると長田が引き継いで。

長田「それを菊から報告された私は——」

〔回想〕

× × ×
長田 (OFF)「乙米さまに何いを立て、御籠りの御札を剥がして中に入りました」

乙米や菊の前で、戸を開ける長田。

すると柱に釘付けの一臣が——。

〔戻り〕

× × ×
水木「そうしたら、この有り様だったと?」

長田「はい」

と、丙江、突然克典につっかかり。

丙江「あんたね? ……あんたがやったんでしよう!」

克典「な……っ、何を馬鹿な!」

丙江「兄さんが死ねば、当主になれると思つたのよ。きつとそうよ!」

克典「言いがかりはやめてくれ! 私はこ

な——」

すると、そこに沙代が来て。

沙代「お父様、お母様？ 何事なのです？ この騒ぎは一体——」

と、克典、慌てて立ちはだかり。

克典「お前は来るな！ みちやいかんこんなもの！」

沙代「見るなって……」

丙江「二兄^{にい}兄が殺されたのよ」

沙代「……!?」

——と、そのとき声が。

鬼太郎父（OFF）「おい、放せ……放せと言うに！ 僕は屋敷を覗いておっただけじゃぞ!?」

村人A「黙れ怪しいやつめ！」

村人B「お屋敷の皆様、また怪しいよそもんがいたんで、ひつとらえて参りやした！」
そんな声と共に、村人たちに本殿前に引つ立てられてくるのは——。

（SE）りいん……

刹那、汽車の中と同じように、ふっと全てが止まったような空間の中。

その男の存在だけが際立って——。

水木「あいつは……！」
ねずみ小僧「ゲゲッ！」

それは汽車の中で見かけた白髪の男であり、見て思わず驚きの声を漏らしたねずみ小僧は、そそくさと姿を消す。

長田「いったい何事だ」

村人「へえ。この男が屋敷の周りをうろついて、覗こうとしておりまして。何してんだって聞いたら、いきなり逃げ出そうとしたんで、とっつかまえたんです！」
縄で縛られている鬼太郎父。

長田「……………。——!?」

しげしげと見つめる長田、かすかに何か興味を惹かれた様子だが面には出さず。
と、見ていた克典、ハツとなり。

克典「もしや……こいつか!?——お前が、一臣さんを殺したのか!?」
！ となる一同だが——。

鬼太郎父「ほー、誰か死んだかね。なるほどなるほど」

鬼太郎父、あくまでも人を食った様子で。
鬼太郎父「まあ仕方なかるうな。なにしろこの屋敷は『よくない』からのう」
すると乙米が進み出て。

乙米「お前は、何者です。何の用があつてこの村にきたのですか」

鬼太郎父、しかし質問には答えず。

鬼太郎父「しっかし、イヤな造りのお社じゃの。空っぽのくせに、余計なものばかり溜め込んでおるわい」

と、村人がいきなり鬼太郎父を蹴飛ばす。
村人「なにしてんだ。乙米さまがお尋ねだ。」

とつととお答えしろや」

鬼太郎父、蹴られても平然と。

鬼太郎父「やれやれ……手荒なことじゃ。僕はちよいと捜し物をしておっただけじゃよ。この村に来たのはたまたまじゃ」
村人B「ここはたまたまで、来るようなことじゃねーぞ！」

鬼太郎父「それでもたまたまなんじゃよ」

村人A「てめえつ……」

苛立つ村人たち、乙米らに。

村人B「どうしますか、こいつ。目障りでしたら、すぐにでも隠しちまいますか」
手にしているカマがガラリ。

水木「!?——隠すって……え？」

思わず水木が洩らした言葉に、克典。

克典（空咳）みつ……皆。東京からのお客が驚いている。慎重給え」
村人たち「……へえ、すんません」
だが村人たちの苛立つような視線は変わらず、水木、くつ……となり。

水木「ちよつといですか？ その男が怪しいのは確かですが、証拠もなくリンチはいけません。それに、いまはもつとやるべきことがあるのでは？」

一同の視線が集中する。

水木「警察ですよ！ 人が殺されてるんです。電話はあるでしょう？ その男のことも、

警察に任せるべきではありませんか？」

鬼太郎父「そうじゃそうじゃ！」

水木「お前は黙ってろ！これ以上ややこしくするな！」

そして水木、コホン、と空咳をして。

水木「いかがですか、克典社長？」

克典「う、うむ。たしかにその通りだな。では誰か警察に連絡を——」

乙米「無理です」

いきなりの断言に、？となる水木。

乙米「さきほど報告がありました。崖崩れで麓との道にかかる橋が崩れ、電話線も巻き込まれて不通になったそうです。そうです

ね？ 長田」

長田「——はい。奥様」

と、村人たち、互いに何かあるような視線を交わすが（※実は崩れてない？）。

村人「間違いいえです」

克典「本当かね、こんなときに……!?」

乙米「夕べの大きな龍哭のせいでしょう」

克典「なんてこった……!」

水木M「りゅうこく……?（ハッと）ゆうべのあれのことか……!?」

フラッシュする、夕べの鳴動と閃光。

水木M「やはり夢では……なかったか……」

水木、くつとなり。

水木「他に麓に下りる方法はないんですか？」

乙米「ええ」

水木「……! それでは、僕らはこの村に閉じ込められたということですか？ 一臣さんを殺した何者かといつしよに……!」

一同「……!」

○ 長田家（午後）

——に、来ている水木、鬼太郎父、長田

長田「——こちらに」

ギイイ……と重そうな戸が開くと、その奥には座敷があり、さらに奥の間が格子で仕切られた座敷牢になっている。

水木「座敷牢か……!」

長田、座敷牢の鍵を開ける。

長田「入れ」

鬼太郎父「……やれやれ。強引な連中じゃ」

しかし、大人しく座敷牢に入る鬼太郎父

長田「水木様には、以後この男の監視をお願いしたく存じます」

水木「!? 僕もこの部屋にいろと?」

長田、微笑を湛えたまま。

長田「水木様のお言葉でこの男の処遇が決まりましたので。目を離すと心配でしょう」

水木「いや、それは……」

だが長田はにつこりと頑固に。

長田「後ほど布団を運ばせます。——では」

水木「ちよつ、おいっ!……くそっ……」

ギリリの水木。

鬼太郎父「ふむ……なかなか良い牢じゃな」

くつ……と呑気な鬼太郎父を睨む。

水木「お前、どうして呑気でいられるんだ!? なぜ抵抗しなかった、悔しくないのか!」

鬼太郎父「僕は争い事が苦手なんじゃよ」

耳の穴を小指でほじりつつ。

鬼太郎父「それに——、僕が本気を出したら、相手が死にまうしの」

!? となる水木。

くつ……と、頭を搔くと、イライラと煙草とマツチを取り出し火を点ける。

深く吸って吐き——。

水木「——で、お前、名は?」

鬼太郎父「名乗るほどの名はないな。好きに呼んでくれてかまわんよ」

水木「……」

と、さきほどのねずみ小僧との『あいつは『ゲゲツ』』というやりとりが浮かぶ。

水木「名乗らないなら、お前のことはゲゲ郎と呼ぶぞ。嫌なら本当の名前を言え!」

鬼太郎父「ほう……ゲゲ郎か、面白い。うむ

これからはそう呼んでくれ」

水木、ちつ……と舌打ちをする。

と、鬼太郎父、水木の指先の煙草を見て。

鬼太郎父「美味そうじゃな。僕にも一本分けてくれんか?」

水木「嫌だね」

そして殊更美味そうに一服する。

鬼太郎父「くっくっ！ この人でなしめ！」

水木、フンと笑って、紫煙をくゆらせる。

○ 龍賀家・隠し通路入り口

突然、へんてつもない壁がぐるりと返り、その隙間から乙米が現れる（※窖への通路の隠し扉です）。

——と、そこには跪く長田が。

乙米「あの男と東京の客は？」

長田「家の牢に。東京の男にも見張りを付けております」

乙米「いいわ。——庚子も来ている？」

長田「はい」

○ 応接間

前出の応接間。

乙米「窖が騒がしくなっています。一臣兄さんが死んだせいでしょうね。考えてみれば、夕べの激しい龍賀は、兄さんが殺された、そのときのことと違いありません」

長田「おそらく、その通りかと。奥様」

乙米「一体誰が兄さんを……。このままでは一族の破滅よ」

ギリリと言う乙米。

乙米「長田。兄さんが死んで、あとどれくら

い持つと思う？」

長田「おそらくですが、持って七日……というところでしょうか」

乙米「庚子、時弥の具合は？ 今朝からまた

臥せっていると聞いたけど」

庚子「あ……は、はいお姉様。また熱を出してしまつて……。わ、わたしは一生懸命看病してるの。でもあの子、最近はずつとあんな調子で……」

乙米「わかりました。でも待てるのは七日まで。できるだけ早く、時弥に兄さまの跡を

継がせる必要があります」

庚子「……………」

乙米「これも龍賀の為。ひいてはこの日の本の未来の為です。いいですね？」

告げる乙米で——。

乙米「お父様……」

時貞の肖像写真を見つめる。

○ 長田家

水木「ふう……………」

湯上がりらしいが、ワイシャツとズボン姿で手ぬぐいを持っている水木。

長田の屋敷の中を進む——と。

自分たちがいる座敷牢の間を、のぞき込んでいる時弥の姿が。

水木「時弥くん？」

○ 座敷牢の間

ちよこん、と座る時弥。

傍らに湯上がり水木、そして牢の中には

鬼太郎父。

時弥「僕は、長田時弥です。えと……」

鬼太郎父「時々ちゃんか。よい名じゃの。僕は

ゲゲ郎と、その男には呼ばれておるよ」

時弥「ゲゲ郎さん……」

イヤミか、と苦虫を噛みつぶしたように鬼太郎父を見る水木。

時弥「夜遅くにごめんなさい。外の人って珍しくて、だから僕……」

水木「かまわないよ。少しは話をしたいと思っていたし。君はこの家の長田さんと、

龍賀の……庚子さん、二人の息子だったんだね。そんな君が、龍賀の未来の跡取りというから、少し驚いたよ」

時弥「それは僕も驚いている……けど。でも

ホントいうと、そんな先のこと言われても

困るなっと思っちゃった……」

鬼太郎父「なぜだね？」

時弥「だって僕——」

——と、そこで咳込む時弥。背中をさすってやる水木。

水木「大丈夫かい？……君は、あまり丈夫じゃないようだね」

時弥「うん。なんだか最近酷くて、ときどき起き上がることもできないんだ」

水木「お医者には？」

時弥、首を振る。

時弥「きつと無駄だよ。だってこれは、バチがあたつたから——」

鬼太郎父「罰じゃと……？」

時弥、寂しげに笑つて。

時弥「村のみんなが言つてるの聞いちゃったんだ。僕は、お父さんの本当の子供じゃない。お母さんの不義の子だからって……」

!! となる水木、む、と鬼太郎父。

時弥「そのバチで、僕はきつと長生きできないつて。……僕もそんな気がする。きつともうすぐ死んじゃうんだ……」

水木「何を言うんだい！ いまは科学の時代だよ？ 医学も日々進歩してる。——それこそ、君の家の龍賀製薬だつて、日本の医療をひっぱっている大会社じゃないか」

時弥、少し考えるように。

時弥「本に書いてあつたんだけど、これから日本はもっと豊かになつて、戦争もなくて病氣も何でも治せるようになって、みんなが幸せになれるんだつて。ホントかなあ？」

水木「ああそうだとも。だから死ぬなんて思つちゃだめだ」

時弥「ケゲ郎さんも、そう思う？」

ケゲ郎「さてのう。じゃが……時弥君たち、明日を背負う子供たちが本気で願うなら、そういう時代も来るかもしれんの」

時弥「僕らが……」

うむ、と頷く鬼太郎父。

鬼太郎父「じゃが変化を望まず、おそれて潰そうとする者もおる。そのせめぎ合いで、時代は紡がれてゆくのじゃよ……」

時弥「……………。ごめんなさい、よくわからないや……」

水木「そうだぞケゲ郎！ もつとその、子供には明るく、夢があることをだなあ！」

鬼太郎父「僕は子供にだからこそ、嘘をついてはならんと思う」

! となる水木。

時弥「…………うん。難しいつていうことだけはわかつたよ。でも、だつたらより頑張り甲斐があるつてことだよね？」

鬼太郎父「聡い子じゃ」

時弥「ありがとう。僕、はやく元氣になつて、いろんなことがんばつてみるよ！」

そして、タタタと部屋を出る時弥。

二人、見送りつつ。

水木「いい子だな」

鬼太郎父「うむ。人間にしてはの」

むうとなる水木、よし、と何か思いつくと、格子越し、鬼太郎父の反対側にどつかと座り。

煙草を一本取り出し、鬼太郎父からギリ届かない所にトンと置く。

水木「——いい加減、腹を割つて話そう」

鬼太郎父「…………む？」

水木「…………お前は本当に、一臣さんを殺してないんだな？」

鬼太郎父「やれやれ、その話か。よく考えろ、よく知りもしない、その一臣とやらを殺して、僕に何の特がある？」

水木「……………。捜し物をしていと言つているが、その捜し物とはなんだ？」

鬼太郎父「……………」

水木、ずいといと斬り込むように。

水木「まさか M 〃 か？」

鬼太郎父「えむ？ はて、なんじゃそれは」

水木「…………、違うならいい。——では何を探しているというんだ？」

鬼太郎父「探しているのは、僕の妻じゃよ」

水木「つまあ？ なんだお前、女房に逃げられたのか？」

鬼太郎父「違う！ ある事情があつての、生き別れになつてしまつたんじゃ！」

水木「(疑いの視線で) お前に妻？…………本当に？」

鬼太郎父「疑り深いやつじゃな! ほれ!」

懐から取り出すのは、鬼太郎父と妻らしい、モダンな女性が写った写真。

水木「は? この美人がお前の……? 本当に……?」

鬼太郎父「妻が行方知れずとなったのは、何年も前の話じゃ。以来、僕は探し続けておるのじゃよ」

水木「……でもなぜこの村に?」

鬼太郎父「……」

水木、煙草を取り上げヒラヒラさせる。鬼太郎父「旧い仲間から、このあたりで妻の気配を感じたという知らせがあつたんじゃ」

水木「気配って……そんなあやふやな」

すると鬼太郎父、何かの気配を感じ取ったかのように、鋭く声を潜め。

鬼太郎父「馬鹿にしたものでもないぞ。——目に見えるものばかりが、この世の全てではないからのう……」

水木、その妖しい雰囲気気圧される。鬼太郎父「たとえは——お前さんの後ろに!」

と、大声でおどかす鬼太郎父。

水木「ひいっ!」

ビクリと飛び退き、格子に背中を打ちつけるように身を引く水木。

すると、見せつけていたタバコを持った手が格子の近くに來て、鬼太郎父、ひょ

いとその煙草を奪い、ニツと笑う。

鬼太郎父「ほら、お前さんだって、目に見えぬものを信じておるから、驚くのじゃろが」

水木「貴様……っ!」

真つ赤になつて怒る水木。

鬼太郎父「さあ、色々喋つたぞ。火を貸せ」

水木「いやなこった!」

鬼太郎父「このけちんぼうめ」

水木「うるさい!」

怒鳴ると、水木、そのまま拗ねるように布団に潜り込む。

鬼太郎父「やれやれ」

そんな姿を見て、火の点いていない煙草をくわえ、笑う鬼太郎父で——。

○ 哭倉村・翌日

濃い霧が立ちこめる朝。

○ 長田家・座敷牢の間

眼を覚ます水木。

水木「ふあああ……妙によく寝てしまった」

そこでハッ……と気付く。

布団に寝てはいる——が、自分がいるのが座敷牢の内側であることに。

水木「なっ……!? おいゲゲ郎!? くそっ、どうやってこんな……!」

慌てる水木、立ち上がり、出入り口に手をかけると、それはあつさりと開く。

水木「……!」

ごつい和錠は見事に解錠されており。

水木「どうやったんだアイツ……」

牢から出て、頭を掻きつつとりあえず一服しようと、壁にかけてあつた自分のスーツの上着のポケットに手を突っ込む

——が、次々どこを探しても、欲しい煙草もマツチも出てこない。

水木「……(気付いて) やつめ……!!」

バツ、とスーツをひつつかみ。

× × ×

長田家の外に出て來ている。

水木M「逃げられたなんてバレたらまずいぞ……。くそっ、どこに——」

鬼太郎父（OFF）「確かにあの島にはぞつとするほど多くの靈氣が滲んでおるの。それに多くのものがひかれてきておるのか……」

川岸に、鬼太郎父の着物が畳まれて、さうに履いていた下駄も揃えられている。

河童の声「キキッ！」

鬼太郎父（OFF）「ん？ ああ……いや、気配を感じたというのは、知り合いの知り合いのさらに知り合い、みたいな話でな」

× × ×

薄らぐ霧の中、早足で来る水木、霧の向こうから聞こえる声に、！ となる。

鬼太郎父（OFF）「結局また空振りかもしれないが、まあ調べるだけは調べてみるさ」

水木「おいっ！ ゲゲ郎！」

溪谷に出る水木、そこには、川床から湧出する温泉を、岩で堰き止めた天然露天風呂に入っている鬼太郎父と——。

河童の姿が。

水木「えっ……!?」

——だが、驚く水木の表情を拾って鬼太郎父の方にカメラを戻すと、温泉に悠々と浸かっているのは鬼太郎父のみで。

水木、ゴシゴシと目をこするが、やはり河童の姿はなく——。

水木「い、いまここに、カッ……」

鬼太郎父「ほう、見えたか」

水木「何!？」

鬼太郎父「こつちの話じゃ。——お主も入らんか？ 遠慮はいらんぞ」

改めて見る水木、やはりそこには鬼太郎父が一人だけが野天に浸かっている。

水木「いいから早くそこから出る!」

鬼太郎父「やれやれ。いい湯じゃったのに」

ザバと包み隠さず立ち上がる鬼太郎父。自分の服に手を掛けたとき、しゅる……と紐が生き物のように腕に這い上り、巻き付く。

水木「う、動いた!？」

鬼太郎父「ん？ どうかしたか？」

そのまま着物を着る鬼太郎父。

水木「……っ。とにかく、牢に戻って貰うぞ」

鬼太郎父「それはできぬ相談じゃ。儂は妻を探さねばならぬ。——ただ、その目的が果たされるまでは逃げぬと約束するよ」

水木「……本当に逃げないのか？」

鬼太郎父「——儂の妻に誓って、な」

そこで鬼太郎父、ふつと笑つて。

鬼太郎父「それにどのみち村から出られぬのなら、儂が牢屋にいらなくても問題無いではないか。なにしろ今では、この村そのものが、巨大な牢屋と同じなのじゃから」

水木 M「……!」

言われて、ゾクリとする水木。

水木「……わかった。いまはお前を信じる。そもそも閉じ込めても無駄そうだしな」

鬼太郎父「中々わかつてきたではないか」

水木「但し条件がある。人前に出るときは俺も一緒で、縄も掛けさせてもらうからな」

鬼太郎父「仕方ないの」

水木「よし、じゃ俺はこれから龍賀の屋敷に顔を出して、事情を説明してくる。大人しく待つてろよ」

鬼太郎父「承知」

そしてせかせかと歩いて行く水木。

鬼太郎父「(呟き) せわしない男じゃ」

——だが水木、ポケットに手をつ突っ込んだところでハタと気付いて、さらに早足でカッカッ戻ってくる。

鬼太郎父「おや、聞こえたかの」

小声で言うが、水木は無視して掌をずっと差し出し。

水木「返せ!」

鬼太郎父「………。わかった」

袂から煙草とマッチを出す鬼太郎父。

水木、ひつたくるように奪い、再びカッカッ歩いて行く。

鬼太郎父「やれやれ。せわしない上にセコいな。そう思わんか」

傍らに視線をやる鬼太郎父。

——と、そこには、先ほどの河童がしれつといて、同意するように笑う。

そして鬼太郎父、振り向いて、湖の方を見つめる。

鬼太郎父「……では、行ってみるか」

○ 龍賀屋敷・裏手の湖畔

屋敷の裏手、離れから見えていた、湖の畔に來ている水木。

水木「ふう……」

紫煙をくゆらせつつ、見つめる湖面は黒々と澄みわたって——。

水木「……………」

脳裏にフラッシュする、一昨日の夜、湖上女の光景。

水木「……………」

振り払うように首を振り、屋敷に戻ろうとする——と。

屋敷の洋館部分（あれば）の、二階の窓から湖を見つめる人影。

水木 M「……？ 誰だ？ 昨日は居なかった。一族の写真にも、あんな人物は……」

まじまじと見つめていると——。

沙代（OFF）「叔父の孝三です」

背後からの声に、——と振り向く水木。

水木「沙代さん……！」

×

×

×

時間経過あり。

湖畔を歩く、水木と沙代。

水木「孝三さんですか。たしか、一臣さんの弟……時貞さんの次男ですね」

水木、記憶の中の写真の孝三と先ほどの人物をフラッシュさせ。

水木 M「面変わりしすぎて気付かなかった……」

水木「一昨日は、いらつしやらなかったようです」

沙代「……。叔父は、心を無くしてしまっているんです」

×

×

×

×

洋館の二階、車椅子に座り、ぼーっと、恍惚の表情のままの孝三。

水木（OFF）「心……？ もしや、戦争で？」

沙代（OFF）「叔父は招集されています。心をなくしたのは戦争直後の話だそうです」

肘掛けから、腕がおちる。

——が、引き上げもせず、ただだらりと垂らしたままで——。

×

×

×

沙代「十年ほど前、この村に伝わる、ある禁を犯したせいで……と聞いています」

水木「禁……？」

×

×

×

丙江「あらあら……」

そんな、二人の姿を見かける丙江、ニヤリとなり——。

×

×

×

立ち止まる沙代、湖の真ん中の島を示し。促され、水木も見る。

沙代「あの島——」

島のほとんどは樹々が生い茂り、小さな森のようにも見える。

沙代「あそこは、何人も立ち入ってはならない禁域とされているんです。でも伯父は、祖父たちの許し無く踏み込んで、戻ってきたときにはもう——」

水木「……………」

湖の中の島を見つめる。

水木「沙代さん。もしよければ、あの島についてもっと——」

と訊きだそうとしたところで。

克典（OFF）「なんだね、もう勝手に仲良くなっていたのか」

！ と見ると、そこには私服の克典が。

克典「君も隅に置けんなあ、水木くん」

水木「いえ、別にそういうことでは……！」

沙代「そうです！ お父様つたら！」

克典「すまんすまん。だが父親としては気になつてな。実際のところ、どうなんだ？」

沙代「知りませんっ！」

赤くなると、怒って行ってしまう沙代。

そんな沙代を見送ると、水木。

水木「社長。その、僕は決して——」

克典「笑って」いや、かまわんよ。——事と次第によっては、本当に沙代はくれてやる。私の後継者の立場と共にな」

！と、吊り下げられた餌に、思わず欲望が顔に出る水木。

克典、その顔を見て、満足げに笑うと。

克典「少しいいかね？」

○ 龍賀家・サンルーム

ガーデンテールで話す克典と水木。

克典「二臣義兄さんが死んだおかげで、一族の後継者は一旦、白紙だ。いずれ時弥が継ぐのかもしれないが、その間に地固めできれば、龍賀製薬だけでも切り離すことができるかもしれない」

水木「……………」

克典「そこで、だ。水木くん、私に力を貸してくれんか？」

すると克典、ポケットから小さなアンブルを取り出し、テーブル上にコトリ。

水木「それは……！」

克典「やはり知っていたか。——特定顧客にのみ卸され、いまや我が社の隠された主力

商品であり、龍賀の富の源泉でもある血液

製剤『M』——」

アンブルの『M』の刻印。

克典「製品にする工程はウチの工場で行っている。だが、精製前の原液はどうやらこの村で作られているらしい」

水木「……………」

克典、忌々しげに。

克典「そう。原液の製法や製造場所は、社長であるこの私にも秘密にされているのだ！ どれだけ会社の為に働いても、龍賀の血族ではないという理由で私は蔑ろにされてきたのだ！ そして今回もまた——！」

くっ……とアンブルを握り締める。

克典「しかし、義父と義兄が死んで混乱している今こそ好機。——私は、龍賀製薬を名実ともに、私のものとしたいのだよ。そしてそのためには、このMの秘密が必要だ」

水木「それを……僕に探れと？」

克典、ジツ……と企業人の目で。

克典「——『もはや戦後ではない』」

水木「……………」

克典「先の経済白書にあった通り、これからの日本を支えるのは地縁や血縁といった因習ではない。資本経済と我々企業人だ。違うかね？」

水木、ゴクリ、とツバを呑む。

水木「——承知、しました」

克典、ニヤリ。

克典「では君があちこち出入りできるようにしなければな。何か口実を……」

む、と考える克典、掌を打ち。

克典「そうだ。キミに探偵役をしてもらうというのはどうかね？」

水木「探偵……僕がですか!？」

克典「なに、形だけの話だ。だが周囲にそう徹底しておけば、君は屋敷に自由に出入りできるし、村の誰に話を聞いても不審に思われない。どうだね？」

……………となる水木だが。

水木「……………」わかりました。お引き受けします」

克典「決まりだ。では水木君、よろしく頼むぞ！」

克典、バン、と背中を叩く。

水木「……………」

○ 湖畔・ボートの桟橋付近

水木「くそ、都合よく人を使いやがって。だがいい、逆に利用してやれば——」

と、見ると、桟橋に人影。

ねずみ小僧「おや、東京のニイさん」

それは立ち小便しているねずみ小僧で。

水木「……………」やあ。大変なことになったね」

ねずみ小僧「言ったら、この屋敷じゃいつも妙なことが起こるって——」

と、そこでねずみ小僧、いきなりクンクンと鼻を利かせる。

ねずみ小僧「なあ、なんかニイさんから金儲けのニオイがするぜ。いい話にでもぶち当たったかい？」

水木「（ギクリ）そんなはずないだろう」

ねずみ小僧「ならいいんだけどね。下手に首突つ込むと、一臣ぼっちゃんみたいに——」
と、そこで二人、湖面を渡る一艘の櫓漕ぎの和船に気付く。

見れば、それは鬼太郎父で。

ねずみ小僧「あ——」

水木「あいっ……!?（叫んで）おい！何をやってるんだお前っ！」

だが、聞こえないのか、鬼太郎父はシレッとそのまま船を漕いで行く。

水木「禁域に足を踏み入れる気か……!?」

水木、あたりを見回し。

船着き場の、櫓漕ぎ和船に飛び乗るが。

水木「くそ、こんな船、いままで——」

ねずみ小僧「漕いでやろうか？」

やはり駆け寄ってきているねずみ小僧。

ねずみ小僧「ただし、おいらは高いぜ」

水木「っ……。いくらだ——」

ねずみ小僧「十円だッ！」

ふふん、と鼻息荒いねずみ小僧に、少し虚を突かれてキョトンな水木。

ねずみ小僧「どーだ驚いたか！びた一文まからねえからな——」

水木「……っ、わかった、頼む！」

そして船を漕ぎ出すねずみ小僧。

○ 中の島

岸边に着いている、鬼太郎父の船。もはや鬼太郎父の姿はなく——。

× × ×

樹々を分け入り、島の真ん中に来る。

——と、突然、視界が開けて——。

鬼太郎父「これは……!」

そこには、直径数十メートルはあろうかという、巨大な穴が開いている。

鬼太郎父「あなぐら……!?」

底の見えない巨大な穴。

のぞき込もうとするが、その時、ふと気付き立ち止まる鬼太郎父。

目を凝らすと、何か視えない壁のようなものが、蜃気楼のように揺らぐ。

鬼太郎父「……!」

立ち止まる鬼太郎父。

——すると、その甬のド真ん中の空中に、何か、骸骨のような不気味な影がふうっ

……と浮かぶ（※狂骨。ノーマル版。た

だしまだはつきりとは見せず）。

鬼太郎父「……っ!」

見た鬼太郎父、総毛立つようにゾクリとなり——。

だがそのとき、別位置から森を抜けてきたねずみ小僧と水木が。

ねずみ小僧「うっわー、すっげえ穴が開いてるぜ！見ろよニイさん!」

水木「これは……!」

そのとき、水木の鼻から鼻血が。

水木「っ! なんだ、いきなり……!」

——と、不用意に甬に近付く二人。

その障壁めいたゆらぎに触れてしまう。

鬼太郎父「いかん!」

揺らぎに接触する二人。

——と、同時に、ブウン……と、境界そのものが反応するように揺れ——。

水木／ねずみ小僧「!?」

（SE）おおおおお……

鬼太郎父の見ていた、甬に浮かぶ影が吠え——。

その哭き声の生んだ振動がビリビリと空間を揺らすと周囲を囲む森の木々の中、

いくつかの妖怪（未定）のシルエットの瞳が、ギン、と突如赤くなり——。

いきなり水木らに襲いかかってくる。

ねずみ小僧「ひやあッ!」

ねずみ小僧「ひやあッ!」

辛うじて避けるねずみ小僧。

水木「なっ……!?」

だが、異常事態に咄嗟に動けない水木に、その攻撃が届こうとしたそのとき――。

鬼太郎父「危ない!」

水木「……っ、ゲゲ郎!?」

水木を押し倒し、避けさせる鬼太郎父。

鬼太郎父「やれやれ。穩便に済ませようと思つておつたんじゃがの……」

と、さらに攻撃をかけてくる妖怪。

水木「来るぞ!」

だがその瞬間――。

鬼太郎父の袖の袂から、黒と黄色の組紐がシウルシウルと、まるで生き物のように伸び、空中に結界紋を描き、障壁を発生させ妖怪を弾く。

水木「!?」

鬼太郎父「いつもすみませんのう」

組紐に言うと、組紐、いやいや気にしてないよ、という感じで先端が振れる。

水木「なにやってんだ、また来るぞ!」

鬼太郎父「おっと」

と懷に手を入れる鬼太郎父、そこから取り出すのは、女物らしい少し小さな下駄。

鬼太郎父「――ッ!」

そして放たれる下駄は、水面の飛び石のように湖面で跳ねたかと思うと――。

ゲンと翔び上がつてその妖怪を攻撃する。水木たち「!?」

吹き飛ばされる妖怪たち。

そんな、弱いと思つていた鬼太郎父の戦い様を、啞然と見つめる水木。

水木「なんなんだこの光景は……。あれはあ

やかし……物の怪?」

ねずみ小僧「妖怪どもさ」

水木「妖怪……!? そんな……」

鬼太郎父、妖怪を互角に凌いでいる。

ねずみ小僧「へっ。トボけてるけど、なかなかやるよな。さすがは幽霊族だ」

――と、敵の妖怪が鬼太郎父の攻撃で、

少し怯むと――。

ねずみ小僧「やつちまえ、トドメだ!」

しかし鬼太郎父、こちらへ駆けてきて。

鬼太郎父「ここまでじゃ。――逃げるぞ」

と、鬼太郎父、有無を言わず水木を背

負うと、そのまま駆け出す。

水木「おいっ、なんで逃げる!?」

鬼太郎父「鼻血がでておろうが。ここの強い

靈氣に当てられたんじゃ。このままだとお

前さん、死ぬぞ」

水木「!」

鬼太郎父「それに言つたじゃろ、儂は争い事は苦手なんじゃよ!」

そして舟まで駆け戻り飛び乗ると、ピ

イツつ、と指笛を吹く。

すると、舟の周囲に、各種水辺の妖怪が多数現れ――。

水木「!?」

鬼太郎父「すまぬが、頼むぞ!」

すると、妖怪たちが一斉に舟を押し、かなりのスピードで中の島を離れ――。

そんな舟の上で、啞然の水木で。

○ 湖畔

中の島から、屋敷のある方の護岸に、戻つてきている二行。

水木「ゲゲ郎。お前……」

見れば、鬼太郎父は懷いた蛇のようでもある組紐を撫でてやつている。

水木「なんなんだそれは」

鬼太郎父「祖先の靈毛を編んだ組紐じゃよ」

やあ、と挨拶するかのような、妙にフレ

ンドリーな組紐に、水木、ハツとなり。

水木「牢屋を抜けたカラクリはそれか

……!」

鬼太郎父「まあな」

水木「さっきお前が出した下駄も……」

鬼太郎父「妻の下駄じゃよ。いまは儂に力を貸してくれておる」

水木「……くつと事実を呑み込もうと。」

水木「その小僧はお前のことを幽霊族とか

客に卸している、血液製剤「M」だ」

水木「……M……!? これがあの……!?」

部長「麗賀時貞翁が、今の政府に隠然たる力を振るう切っ掛けとなった秘薬——」

傍らには、書類と水木のスクラップにあった、一族の記念写真も。

部長「量産品になり効果は弱められてたようだが、摂取されたものは命令に従順になり、しかし膂力や体力は強化され、一月眠らずとも活動し続け多少の病気や傷などはものともしない——」

アップになる、写真の時貞翁。

部長「ヒロポンなどとは比べものにならない、権力者にとつての夢の薬だ」

水木「やはり……軍隊が主な顧客ですか?」

部長「いまは企業で働くサラリーマンも兵士のようなものだ。そういう意味では、需要は無限にある」

〔戻り〕

× × ×

鬼太郎父「つまりお主は、会社の命令でそのMとやらを探しているわけか」

一瞬、詰まる水木だが、それを押し隠し。水木「宮仕えは辛いんだ。——で。お前は何者なんだ、ゲゲ郎。幽霊族とはなんだ?」

それに……」

ぐっ、と無理矢理呑み込む様に。

水木「妖怪は……本当に居るのか」

鬼太郎父「——ああ。殆どの人間には見えぬが、確かにいる」

くっ……となる水木。

鬼太郎父「儂ら幽霊族もまあ……似たようなものじゃ」

× × ×

幽霊族語りの、バベルの塔などの定番イメージとかを挿入し。

鬼太郎父（OFF）「週れば、人間たちの歴史より古く、我らはこの世界にあつた。しかし長い時の中で人間が増えるにつれ、儂等の生活圏は奪われてゆき……、ついには人間たちに追われ、狩られるようになり、どんどん数を減らしていったのじゃ……」

× × ×

鬼太郎父「そして儂と妻が、幽霊族最後の生き残りだ」

水木「……!!」にわかには信じられんが……しかし信じるしかないのだろうな。この目で見てしまった以上」

鬼太郎父「ああ。もつともあなたのその目は、いささか常人より見えすぎるくらいがあるようじゃが」

水木「目?」

鬼太郎父「儂も同じじゃよ」

鬼太郎父、振り向き髪をかき上げ。

鬼太郎父「見えすぎるからほれ、こうして片

方隠しておる」

水木「!? 左目……あつたのか!?」

鬼太郎父「ふ。見えぬから存在しないというのは、それこそ思い込みじゃよ。たつたいま思い知つたじゃろ?」

水木「ち……」

そんな水木の脳裏に、ふっと思ひ浮かぶ、初日夜の女の幽霊。

水木M「そうか……。じゃああれも、やはり妖怪の類だったのか……」

そこで水木、くっと思ひし。

水木「ゲゲ郎、俺と手を組まないか?」

鬼太郎父「ほう?」

水木「……正直、妖怪やら幽霊族の話はまだ半信半疑だ。だがもはや信じるしかない。となれば、俺の手にはあまる」

鬼太郎父、ふむ……と考え。

鬼太郎父「よからう」

! となる水木。

鬼太郎父「——先ほどの害は、強い結果によつて護られておつた。僅かに漏れ出た方に当てられ、さきほどの妖怪たちはおかしくなつてしまつていたようじゃ」

水木「漏れ出た力……!?」

鬼太郎父「怨念じゃよ。非常に強力な」

! と思わず振り向く水木。

鬼太郎父も振り向いており、二人の視線

が重なる。

鬼太郎父「僕は、あの結界に封じられたものの正体を見極めたい。もしかすると、僕の妻も巻き込まれておるかもしれぬし」

水木、頷いて。

水木「交渉成立だ。——裏切るなよ」

鬼太郎父「お主こそ、な」

背中合わせのまま、ふ……と笑う二人。

鬼太郎父「で、まずはどうするね？」

水木「情報収集だな」

○ モンターージュで時間経過（二日程度）

村人や、妖怪に聞き込みをしている水木や鬼太郎父。

村人の出るときは、鬼太郎父はロープで縛られており、村人は胡散臭そうに二人を見ているが、いちおう話はしてくれる。また、妖怪相手にも話を聞いているが、水木はやはりまだおっかなびっくり。

時弥に会っている鬼太郎父。

そして二人でメシを喰ったり、涼んだり、温泉に入ったり、夜眠っていたりなどと、二人の時間経過を点描しつつ——、以下のセリフのやりとりをかぶれる。

水木（OFF）「出来事を整理すると、まず時貞翁が寿命で死に、葬儀の前の晩には一臣が何者かに殺された……。犯人がいると

すれば、まずこの中の誰かが怪しい——と俺は思っただが……」

鬼太郎父（OFF）「一臣が死んでいけばん

得するのは誰じゃ？」

水木（OFF）「克典氏だな。実際、丙江は

犯人呼ばわりしていた。だが、あの態度……。それに結果的にとはいえ、俺に犯人

捜しを依頼してきたのは克典氏だしな」

鬼太郎父（OFF）「そうやって、自分の犯

行を誤魔化しているのかもしれない」

水木（OFF）「それはそうだが……。そも

そも、一臣の死に様は異様だった。——大人の男を釘付けにして刺し殺すなんて、普通の力では無理だ」

点描のラストあたり、臥せて苦しそう

な時弥を見舞っている水木ら。

× × ×

ここからリアルタイムの会話で。

湖畔で中の島を見つつ。

鬼太郎父「確かに、普通では……」

！ となる水木。

水木「まさか……何か妖怪とか、そういうものが関与してると言いたいのか!？」

鬼太郎父「——先だつての戦いの最中、妖怪を狂わせていた怨念は『狂骨』と呼ばれる妖怪かもしれない」

鬼太郎父、窘と、そこに浮かんだ怨念を

思い返しつつ。

鬼太郎父「殺され、井戸にうち捨てられた死者の怨念から生まれる妖怪じゃ。あの害そのものを井戸に見立てると、しつくりくる

あの害の底では、信じられぬほど強烈な怨念が渦巻いておるに違いない」

水木「怨念……。あの害に……」

鬼太郎父、頷く。

鬼太郎父「もつとも、仮にそうだったとして、ヒトが狂骨を使役して殺させたのか、あるいは逆に、狂骨に憑かれたヒトが殺したのかはわからぬが……」

水木「Mの製法。あの害の秘密。それに殺人事件の犯人と、それに関わっているだろう

妖怪『狂骨』……謎ばかりが増えてゆく」

鬼太郎父「僕の妻のことも忘れるな」

水木「くそ、頭がこんがらがりそうだ……」

と、そのとき、ドンドンドン、と牢のあ

る部屋の戸がたたか

女中（OFF）「あのっ……水木さま!」

水木「なんだ?」

立ち上がり、戸を開ける。

女中「お屋敷からの使いの方が。至急、来て欲しいと……!」

水木「……? わかった」

○ 村はずれの三本杉

高くそびえた杉の木。

——の、天辺に、もずのはやにえのよう
に、串刺しになって死んでいる丙江。

水木「なっ……！」

鬼太郎父「はやにえじゃな、まるで」

現場に来ている水木、鬼太郎父（※体裁のため、鬼太郎父はロープで縛られ、その端を水木が持つている）。

樹の根本でおどましく見つめているのは、発見したらしい村の衆らと、克典も怖気を振るうようにみており。

乙米（OFF）「丙江！」

!? と見ると、長田をお供に、乙米が。

乙米「こんな……（くっ）何をしているのです！ 早くあの子を降ろして！」

村人たち「へ、へえ！」

ギリリ、と鬼女の如き乙米の表情。

○長田家

水木「あれもやはり狂骨とかいう妖怪の仕業か？」

鬼太郎父「わからぬ。狂骨は、何者の怨念から生まれたかで、かなり性質も変わるからの。簡単には断言できぬよ」

話し合う二人。

水木「もし人間なら、殺したのは一臣さんのときと同一犯なんだろうか……？」

鬼太郎父「わからんが、もしそうなら、犯人は道がついてしまったのかもしれないの……」

水木「道？」

鬼太郎父「人を殺めるとき、最初は激しくためらうもんじゃが、二度目になるとためらいが軽くなる。それを繰り返すと、やがて人を殺すことを躊躇しなくなってしまうう。

ましてや、妖怪が関わっているとすれば、タガはより簡単に外れてしまうじやろう」

水木「どうすればいい？」

鬼太郎父「鍵はあの簀じゃ。狂骨の核となる怨念の正体を見極めねばならん。さもなくば、たとえ犯人が捕らえられても、惨劇が止まらぬ可能性もある」

水木「……………」

考える水木、何か決意して。

水木「——よし」

鬼太郎父「？」

水木「——よし」

○湖畔のテラス

——で、湖の中の島を見つめている、洋装姿の沙代。

水木「沙代さん！」

駆け寄る水木。

水木「お呼び立てしてすみません。実はあな
たに詳しくお聞きしたいことがあって」

沙代「私に……？」

水木「——禁域だという、あの島にある害のことです」

沙代「……！ もしかして、水木さん……」

水木「はい。島に脚を踏み入れ、害を見ました。そこで怖ろしくなって引き返しましたが……。沙代さん、あの害のこと、何かご存じないですか？」

沙代の表情が強ばって行く。

沙代「……なぜ、そのようなことを？」

水木「それは……。一臣さんや丙江さんを殺した犯人を突き止めるために——」

沙代「それと害と……どんな関係があるというのですか？」

水木「……………」

答えられぬ水木を見て、沙代、悟り。

沙代「そう……だったのですね。あなたも、私たちの龍賀の秘密を探りに来た。——そうなのですね……」

水木「……っ。でも信じて下さい。あなたや時弥くんを危険に曝したくない。そのため、あの害のことを知る必要があるんです。

だから僕は——」

沙代、ただ寂しげに、言い訳する水木を見つめると——。

沙代「水木さん、私に一つ約束をしていただ
けませんか？ そうしたら、私が識ること

を全てお教えします。もし必要なら、調べ
もしましょう——」

水木「約束……ですか？」

沙代、意志のある瞳で。

ひとと、水木を見つめ——。

沙代「私を、ここから連れ出して下さい」

水木「連れてって……どうして……？」

沙代「ここには、自由がないのです」

水木「……!?」

× × ×
回想で、時貞が生きていたころ。

ジロリという視線一つで、人々に頭を下
げさせるその威圧感。

——を、物陰から、怯えて見ている沙代。

沙代（OFF）「祖父が生きていたころは、

私にはまったく自由がありませんでした」

× × ×

沙代「この先、私に用意されているのは、望

まぬ男と結婚し、その男に抱かれて望まぬ

子を成す——そんな、古い仕来りに縛られ

た生き方だけなのです。でもそれは嫌！

だから……!!」

水木「……っ……!」

生々しい告白に、言葉に詰まる水木。

水木「僕はただの勤め人です。財産もない、

地位もない。龍賀に逆らう力なんて——」

沙代「かまいません。私はあなたの気持ちを

伺っているのです。できるかどうか、では
なく、あなたが私と共に居たいと想って下
さるかどうか……。私には、それだけが問
題なのです」

悲しみに満ちた、歳に似合わないまめか
しさに、圧倒される水木。

水木、その視線に負け、思わず目を逸ら
してしまい——。

水木「……わかり、ました……。貴女が望む
なら、僕が外の世界にお連れします。ただ、

僕に出来るのはそこまでです。……それで
も、かまいませんか……？」

と——。

沙代の瞳から、ツウ……とこぼれる涙。

水木「…………!」

その表情は、涙を流しながらも、満面の、
恋する少女の極上の笑みであり——。

沙代「うれしい……」

そして、そつ……と水木に身を寄せる。

水木「……っ!」

逃げ場なく、テラスの柱とか壁とかに、
押しつけられる格好になる水木。

沙代「きつとですよ。水木さん。……ああ、

沙代は幸せ者です。やつと、運命の人に巡
り会えたのですから……」

水木「さよ……さん……」

眩惑されるような言葉と香り、そして肉

感にクラクラとしてしまう水木。

その表情は、怯えのようですらあり——。

沙代「ごめんなさい。少しはしたないです
ね」

イタズラな笑みで、身を離す沙代。

沙代「——あの筈について、お知りになりた
いということでしたね」

慌てて調子を戻す水木。

水木「は……はい。あの中に入る方法はある
のですか？ 孝三さんは、勝手に入って心

を失ったとのことでしたが、あれは——」

沙代「屋敷の地下の、筈に通じる鍾乳洞を通
じて立ち入ったようです」

水木「沙代さんも行ったことが……？」

沙代「いいえ。成人するまでは存在すら教え
てもらえませんでした……、そのあとも一族の

当主の許しなく、立ち入ることは禁じられ
ています」

水木「…………」

沙代「でも孝三叔父さんは、お祖父様の許し
無く筈に入りこみました。——そして、何

かを見、何かに遭ったそうです」

語る沙代。

沙代「二臣叔父さんや長田さんに連れ戻され
た直後はもう、ひどい怯えようで……。す

まない、僕のせいで——と誰かにずっと託
びていたそうです」

水木、むう、と考え。

水木「——孝三さんから、直接話を聞けないだろうか……？」

沙代「どうでしょう。今はほとんど会話もできませんが……」

水木「それでも構わない。それから、やはりどうしても、害に入ってみない」

沙代、少し悲しげに見つめると——。

沙代「それが、水木さんの望みなのですね」

水木「あ、ああ……」

そこで沙代、につこり微笑み。

沙代「でしたら、なんとかしてみます。——あなたも、私の望みを叶えてくださるのですから」

水木「……………」

○ 龍賀家

イライラと、庚子に詰め寄る乙米。

乙米「庚子。時弥はまだ起きられないの？」

庚子「……はい。お柿様」

乙米「一族が立て続けに殺され、害の結果ももう限界に近い。龍賀一族が始まって以来の危機です。もう猶予はありません、一刻も早く時弥に結界を継がせねば！」

と、庚子、怯えつつも——。

庚子「ためです。無理をさせたら死んでしまいますわ……」

乙米「……………」

少し雰囲気が変わり、強く出てくる庚子の態度に、ぐつと奇立ちを募らせる。

乙米「明日が限界よ。必ず連れて来なさい」

庚子「……………」

答えない庚子、表情は貼り付いた薄い笑みのままで——。

○ 湖の岸边（夕刻）夜

暮れてゆく村の光景。

× × ×

立ち昇る紫煙。

湖の湖畔（あるいは、村が一望できる小高い丘とか）に、ぼつねんという水木。

水木「……………」

脳裏に渦巻く、さまざまな人の言葉。

血液銀行部長の『二階級特進だ！』や、

克典の『龍賀の名と沙代はくれてやる』、

そして沙代自身の『私を連れ出して下さい……』と訴える様子。

水木「……………」

ああくそ、と、ボリボリと頭を掻く水木。

——と、そこに。

鬼太郎父「ここにおったか」

水木「……少し、一人で考えなくなつてな」

鬼太郎父「ふむ……よければ付き合わぬか？」

ぶら下げて持っていた、焼き物の酒壺を

示す鬼太郎父。

× × ×

さらに日が暮れ、夜。

月が照らす岸辺の草原に、二人並んで座り、酒盛りしている水木と鬼太郎父。

水木、ぐつと煽つて。

水木「く……！ 染みるなあ」

鬼太郎父「じゃろう。山向こうの烏天狗が仕込んだ逸品じゃ」

水木「ほう……」

——と、納得しかけてから、苦笑し。

水木「——まったく。ついこの前までの俺ら、ふざけるなど怒鳴つただらうに」

鬼太郎父「ふふ……」

鬼太郎父もぐい呑みを煽る。

水木「で、話はなんだ。何か言いたいことがあるんだろう？」

鬼太郎父「……。ならば話が早い」

鬼太郎父も少し真面目になり。

鬼太郎父「昼間の沙代嬢ちゃんへの、おぬしの態度のことじゃよ」

水木「聞いてたのか……」

やっぱりな、というふうの水木。

鬼太郎父「あの子は本気じゃぞ。どうするつもりじゃ？」

くつ……となる水木。

水木「どうもしない。できるはずもない。夢

見がちな少女のいつときの気の迷いさ、すぐに現実がわかる」

だがそこで鬼太郎父、いままでで一番シリアスに。

鬼太郎父「人の真剣な想いを弄ぶな」

水木「……！」

鬼太郎父「それだけはやっちゃいかん。お前さんは、本当に誰かを愛しいと思ったことはないのか？」

水木、くっ……と観念するように。
手にした小さなくい呑みを見つめ。

水木「俺に、そんな器はない」

鬼太郎父「………」

そして水木、踏ん切りをつけるようにぐい呑みを煽ると、口元を手で拭い——。

水木「南方で——俺は……俺と戦友たちは地獄を見たよ。お国のため、銃後の家族を守るためと来たはずなのに、ただ自分の都合や面子のただけに、理不尽に部下を打ち据える上官たちに、どう見ても意味のない戦いに駆り立てられて——」

断片がフラッシュする、南方の記憶。

水木「何人もの仲間が死んでいった。……なぜか、こいつはいいやつだ、生き残って欲しい……そう思う人間に限って、どんどん死んで行く。挙げ句、俺みたいなのだけが生き残って……」

並ぶ、横たえられた仲間の死体を、感情を失った顔で見つめる兵隊時代の水木。

水木「それでも、生き残ったことには意味があるんじゃないか。国を立て直すために頑張ろう、そう思ってた帰ってきたら——」

復員した水木の前で、泣き崩れる母。

水木「母は死んだ父の弟に騙されて、なぜなしの財産、土地家屋も全てを失っていた」
現在の水木、夜空を仰ぐように。

水木「俺は思ったよ。戦場も故郷も関係ない——ああ、弱い者は、いつも食い物にされて馬鹿を見るんだなって」
ぐっ、と力を込めるように。

水木「だから俺は、力が欲しい。誰にも踏みつけられない力を。そのためには、なんだってやってみせる……」

昏い決意の目を見せる水木を、
水木「他のことはどうでもいいし……同時に色恋にウツツを抜かせるほど、俺は器用じゃないんだ。——だから……」

言葉が途切れると——。

鬼太郎父「そうか……」

水木「ああ……」

すると、ひょっこりと、二人の前にカッパが現れる。
水木「……！」

鬼太郎父「ふふ。酒の匂いに惹かれて来たか。

——よからう」

鬼太郎父、ぐい呑みを渡してやる。

——と、嬉しそうに呑む河童。
見つめていると、水木の傍らにも何か別のおとなしめの妖怪が。

水木「……！」

その妖怪の目は酒杯に釘付けで。

水木「お……お前も呑む……か？」
怖々差し出すと、！と嬉しそうに、その杯を受け取って呑む妖怪。

ふ……とそんな様子を見つめる鬼太郎父。
鬼太郎父「かつて、俺も同じようなことを思っていたよ。——人間は、儂ら幽霊族を地下に追いやり、絶滅に追いやった……」

暗い目で。

鬼太郎父「だから儂は、ずっと人間が大嫌いじゃったよ。——いや、憎んでいたと言ってもいい」

水木「………」

鬼太郎父「じゃがな……妻は人間を愛しておった」

水木「愛……？ これはまた、大仰な言い草だな……」

鬼太郎父「妻が好んで使っておったのじゃよ。そして儂から見ても、なるほど、妻は愛に溢れた女じゃった。人間の弱さ、愚かさを憐れみ慈しみ……そして愛した。愛して信

じ、常に彼らと共に在ろうとしたのじゃ」
そして鬼太郎父、酔いがいい調子に回ってきたらしく。

鬼太郎父「僕の妻はの、それはもうほんつとーに、綺麗な女じゃった。しかも、腕っ節も氣も強くてなあ」

懷から写真を取り出し、見つめる。

〔回想〕

× × ×

鬼太郎父（OFF）「人里離れて暮らそうとしていた僕と違い、妻は人間の社会に混じり、仕事もしておったのじゃ」

編集部らしき場所で働く、シヨートの進歩的女性——といったふうの鬼太郎母。

鬼太郎父（OFF）「——いまでも思う。もし彼女と出会わなければ、僕はいまごろどうなっていたか——」

銀座でデートしている二人。

小さな和風の家屋、縁側で猫とじやれている妻と、鬼太郎父とが。

そんな幸せな光景。

〔戻り〕

× × ×

鬼太郎父「怒らせると怖くての。ときどき、妖怪がひどい悪さをしたときなど、容赦なく懲らしめておったよ……」

いつのまにか、周りには、沢山の妖怪たちが集まっている。

酒瓶が回し飲みされ、皆が良い調子に

なっており、小さく楽しい、奇妙な宴。
水木、そんな妖怪達の滑稽な仕草を見て、思わず微笑みつつ、煙草を探る。

——と、それは最後の一本であり、水木、啜えて大事そうに火を点ける。

鬼太郎父「よいか水木よ。おぬしにも、いつか必ず、自分より大事なものが現れる。そのとき、今まで自分には見えていなかったものが、また見えるようになるじゃろう」
水木「……そんな日が、俺にもくるのだろうか……」

しみじみと呟く水木に。

鬼太郎父「来るさ。誰しもいつかは、運命に巡り会ふのじゃ。——必ずな……」

水木「……………」

と、水木、いままで啜えていた最後の煙草を鬼太郎父に渡しつつ、言う。

水木「奥さん、見つかるといういな」

！と鬼太郎父、微かに驚いてから、微笑んで煙草をくわえ——。

鬼太郎父「——ああ」

ふうっ……と煙を吐き出す。

そして、夜は更けて行き——。

○ 曇天の哭倉村

重い雲が立ちこめている。

暗くドンヨリとした朝。

水木（OFF）「くそう、飲み過ぎた……」
と、手水の脇の石に、手紙が挟んである。
『水木さんへ』と書いてあり——。

○ 龍寶家・湖畔のテラス

鬼太郎父「仕事が早いのに、沙代嬢ちゃんは」
水木「ああ。早速、孝三さんに会う段取りをつけてくれたようだ」

——と、そのとき。

突如、地鳴りと共に、竜の哭声がかつてないほど大きく響き渡り——。

一同「……!!」

鬼太郎父「これは……………」

水木「いままでよりかなり大きいぞ！」

鳴動する山、揺れる湖面。波紋を越え小さな波となり湖畔によせる。

鬼太郎父「やはりじゃ。もう猶予が、なくなっておるな……」

水木「猶予？」

鬼太郎父「どうやら、禁域に張られた結果がこわれかかっておるようじゃ」

！となる水木。

水木「いや……でも、壊れれば好都合なんじゃないのか？ そうすれば、中に入れるようになるだろう？」

鬼太郎父「——いや。この結果は、外からのものを入れぬためというよりも、中の何

かを封じるためのものじゃ。——規模から考えても、それはとてももない、恐るべき怨念か何かじゃろう……」

水木「……！」

鬼太郎父「それが飛び出せば、どんな厄災が襲うかわからんぞ」

水木「そんな……！」

だがさらに続く龍哭。いつそう酷い。と、そのとき。

ガシャン、と車椅子の倒れる音。

!? と振り向くと、車椅子から

孝三「ひっ……ヒイイイイッ！」

孝三、ヨタヨタと、頭を抱えながら恐慌状態で走ってくる。

水木「……！」

孝三、背後を振り向きつつ。

孝三「くっ……来るな……！ 来ないでくれええっ！」

水木「っ、危ない！」

そのまま、テラスを飛び越え湖に飛び込むとする孝三を。

鬼太郎父「待てっ！」

なんとか押さえ込む鬼太郎父。

引っ張るようにして、二人、尻餅を着く。

鬼太郎父「ふっ、驚いた」

息を抜いたとき、鬼太郎父の懷から、妻の写真が落ちる。

水木「大丈夫ですか？ 孝三さん……」

と、孝三、その写真を見る。

途端——。

孝三「う……あ……」

見開かれる目、動悸が高鳴り、脂汗が一気に噴き出して——。

孝三「わああああああっ！」

!? と見つめる一同。

水木「孝三さん!?」

と、突如、その目に、涙が伝う。

孝三「……ごめん……なさい……」

呟くように言う孝三。

水木「……まさか、記憶が戻ったのか？」

だが完全ではないらしく、ただ、写真の

鬼太郎母を恐れるように見て。

孝三「ごめんなさい……僕の、せい……」

！と、そこで鬼太郎父、ぐつと孝三の

胸ぐらにつかみかかり。

鬼太郎父「あんた、会ったことがあるのか!?」

どこじゃ!? どこでその女と遭った!」

絞め殺しかねない勢いで激しく揺さぶる。

水木「おいゲゲ郎!」

思わず止めに入る水木。

孝三、喉元を押さえ、喘ぐように。

孝三「その人……は……あそこにいた……」

示すのは、中の島。

孝三「あの筈で……わたしは……囚われたあ

の美しい人に出会ったんだ……」

〔回想〕 × × × ×

真っ白な空間（※イメージ空間にして、背景などの詳細情報は省く方向で）。

舞い散る桜。

両手両脚を鎖でつながれている、鬼太郎母（美人のまま。まだ桜には埋め込まれていない。捕まてわりとすぐ）。

嘩然と見惚れる、十年前の孝三。

〔戻り〕 × × × ×

鬼太郎父「囚われて……!?」

ギッ、と齒噛みの鬼太郎父。

孝三「私……は……力が、ない。でも、父や兄の……、手伝いを、たまに……」

語る孝三。

孝三「——ある日のこと……だ。いつ、つれてこられたのか……。出会った私は、一目で、心をうばわれ……た……」

ジリジリと聞く鬼太郎父。

孝三「……自由にしてやりたい……と。彼女の笑顔を見たい……と、心から思った。だから私は……」

水木「逃がそうとした……?」

孝三「……」

〔回想〕 × × × ×

白い空間をひた走る孝三と鬼太郎母。

鬼太郎母の手には、切断された鎖がまだ

長めに残っている。

——と、そんな二人に、突然、ガイコツのような狂骨がおそいかり——。

孝三（OFF）「だが……『あれ』が襲ってきた。あの見るだけでも怖ろしい……。僕は、心も身体も凍りつき、動けなくなつて——」

その狂骨に触れられ、一歩も動けなくなつてしまふ孝三。

孝三（OFF）「逃げて……ぼくは、いいから……。そう言つた、なのに——」

戻ってくる鬼太郎母。

鎖を武器に、狂骨に挑みかかり——。

孝三（OFF）「戦う彼女は……美しかった……。けれど……」

——だが、その狂骨の背後には、鬼の面を被った術者装束の者達が（長田）。

孝三（OFF）「けれど……裏鬼道の術に敗れて……彼女はまた……」

〔戻り〕 × × ×

水木「裏鬼道……!?」

!! となる鬼太郎父。

逆立つ毛、赤く燃える目。

鬼太郎父「裏鬼道……! 奴らが絡んでおつたのか……!」

その激昂具合に、水木、驚きつつ。

水木「なんなんだ、その裏鬼道というのは?」

鬼太郎父「陰陽師というのを聞いたことがある。鬼道衆と呼ばれるものたちはその一派じゃ。しかし、そこから道理を無視した外法を操り、破門されたものたちがいる。それが裏鬼道——」

ギリリと。

鬼太郎父「そうか……裏鬼道を従え、その力で今まで儂等幽霊族を狩ってきたのか、龍賀の一族はッ!」

鬼太郎父、煌々と赤く燃える瞳で孝三に詰め寄る。

鬼太郎父「害の入り口はどこじゃ!? どうすれば入れる!? 言え、言うんじゃ!」

水木「おい! 少し落ち着け!」

引き剥がそうとするが。

鬼太郎父「落ち着いてなどいられるか! やつと……やつとじゃ! 妻の居所がわかつたというのに!」

長田（OFF）「そうですか。彼女は、あなたの妻だったのですね」

!? と見ると、そこには鬼面の術者装束の男と、手下たちがいて——。

水木達「……!」

——と、その鬼の面が外される。現れるのは、長田の顔で。

水木「長田さん……!?」

鬼太郎父「お主が……!」

ギツと戦闘態勢になる鬼太郎父。懷に手を入れ、下駄を出し。

鬼太郎父「行けッ!」

飛ばす鬼太郎父、下駄は部下の一人にあり、吹き飛ばす。

部下「くっ!」

別の部下は錫杖を槍のように鬼太郎父に向け放つ。

が、鬼太郎父は、霊毛組紐で応戦、相手の投擲を絡め取り——。

鬼太郎父「よくも儂の妻を……。はあッ!」

そのまま、組紐で投げ返す。

本気モードの鬼太郎父、紐と下駄で次々攻撃、部下を全て倒す——かと思われたそのとき、最後の一人に当たる直前、放たれた下駄が長田の錫杖で弾かれ、地面に突き刺さる。

長田「嬉しいですよ、貴方に会えて。幽霊族

はもう、狩り尽くしてしまつたものかと思つていましたのでね……!」

糸目が薄く開き、覗く酷薄な瞳。

そして長田、腰につけた幾重にも御札を張り付けた、籠のようなものの中から、何かを取り出し、片掌に捧げ持つ。

それは、額に呪文が刻まれた、小さなしやれこうべ。

禍々しいオーラを放つその骨、見つめ、
ジリとなる鬼太郎父。

鬼太郎父「なんと禍々しい……」

長田「オン！」

すると、その骨から、ブワツと、狂骨が
発生する。

それはノーマルの狂骨と違い、身体全体
に呪文のかかれた布が巻かれ、黒々とし
た呪術支配下の黒狂骨とも呼べるもの。

鬼太郎父「狂骨……!? お主等が操っておっ
たのか!？」

水木「じゃあ、一臣たちを殺したのも、こい
つらなのか……!？」

長田「馬鹿なことを。我らが主の一族を殺め
るなどあり得ぬこと。これは我らの術で束
縛し、使役する狂骨——」

その狂骨が鬼太郎父たちに迫ってくる。

長田「より強力な力を持つているのですよ!」
鬼太郎父「ッ、下がれ水木! 孝三はこの狂

骨に苛まれ、心と記憶を失ったのじゃ!」
組紐が円形になり、中に呪文が浮かび防
御結果発生。

しかし、狂骨に触れた途端、その結果は
呆気なく崩れる(※組紐は吹き飛ばされ
てどこかに)。

そして半透明の爪が、鬼太郎父の身体を
すり抜けるようにひっかいた瞬間——。

鬼太郎父「ぐわあッ!」

ビクリと金縛りに遭ったように動けなく
なってしまう鬼太郎父。

水木「ゲゲ郎!」

鬼太郎父「なんじゃこの狂骨は……ッ あり
えん……これほどに凄まじい怨念……」

ギリギリと歯を食いしばる。

が、やがてガクリと膝を着いてしまふ。
鬼太郎父「ただの狂骨では……ない……」

そのまま、動けなくなり——。

水木「……!」

長田、ニヤリと笑って——。

○ 龍賀家・哭倉神社前

社殿の前に、御札を貼った鎖で拘束され、
引立てられている鬼太郎父と、普通に
両手を縛られている水木。

乙米「よくやってくれましたね、長田」

社殿の前の階段上から睥睨する乙米。

鬼太郎父「……妻を、返してくれ」

俯き気味、髪の毛で顔に影が落ち、表情
の伺えない鬼太郎父。

鬼太郎父「僕はどうなってもかまわん。頼む。
妻を自由にしてくれ」

と、鬼太郎父、そのまぐつと、土下座
するように頭を地面にすりつけ。

鬼太郎父「このとおりじゃ……!」

水木「……!」

だが乙米は、そんな鬼太郎父を見て——。
乙米「ふ……はは……あははははははははは!
——自由? バケモノのくせに自由ですつ

て?……笑わせないで頂戴!」
嗜虐の表情で。

乙米「かつて地上から追いやられ、地下に
潜ってモグラ同然にしていた幽霊族に生き

る糧を与え、飼ってやったのは我ら龍賀一
族なのですよ!」

サデイストの表情が覗く。

乙米「時代と共に血の需要が増え、そのせいで
随分と数を減らし、最後の一人となった
あの女をなんとか永らえさせてきましたか
……、丁度良い。夫婦だというなら、つが
わせれば幽霊族が増えるというもの。慌て
ずともすぐに会わせてあげますよ。——二

度と目の目を見られぬ窘の底で!」

鬼太郎父「……そうか。やはり『えむ』とや
らの材料は我ら幽霊族の血だったか……」

水木「幽霊族の……血だ!?」
愕然の水木。

鬼太郎父「そうじゃ。不死の妙薬……まさか
とは思ったが……。——貴様ら、僕の妻か

らも血を奪ったのか」

乙米「ええ。いまこのときも、あの女は、
ずっと血を抜かれ続けていますよ。我ら龍

賀と、日本の未来のために！」
鬼太郎父「……。貴様アアッ！」

とうとうキレて、ダツと乙米に刃向かうとする鬼太郎父。
しかし——。

長田がなにか術を走らせると、ギョルと鬼太郎父の全身が鎖に締め付けられ、ドウと転倒する鬼太郎父。

乙米「思い知らせてやりなさい」
長田「は」

長田たち、錫杖を手に——。

鬼太郎父を容赦なく打ち据える。

だが鬼太郎父、うめき声ひとつ洩らさずに、その打撃に耐える。

皮膚がさけ、血が飛び散り、ボロ雑巾のようになつて——。

水木「や……やめてくれ！ 死んじまう！」

乙米「黙りなさい。これは、お父様の夢の為

なのです！ あの屈辱的な敗戦から立ち上がり、この日本を再び世界に君臨させる！

我が龍賀はその義務のある者なのです」

そして鬼太郎父を見てる

乙米「大義のための犠牲となれるなら、この男とて本望でしょう……」

言う乙米の酷薄な目に——。

かつての、南方での上官たちの、自分たちを人とも思わぬ目が重なる。

水木 M「……………」

すると、周囲の音が遠くなり——。

○ 水木の白昼夢

砲火が飛び交う戦場。

木戸「水木少尉、俺にかわつて指揮をとれ」

水木「はあ？」

木戸「指揮をとるのだ。玉碎の心が揺らいだか？」

水木「いえ……ですが参謀どのは我々と共に死んでくださるんじゃないかなかったですか」

木戸「わしは兵団長閣下に報告する義務のある者だ。君たちの玉碎をみとどける冷たい責任があるのだ！」

くっ……となる水木たちだが、その酷薄な目——乙米と同じ目に、沈黙し——。

そんな一同を、冷静に見つめているのは、スーツ姿の現在の水木。

今の水木「ああ……。そうだ。あのときおれは、強烈に思ったのだ……」

木戸「全員突撃せよ！」

そのかけ声で、戦火の中に駆け出してゆく水木たち。

今の水木「参謀どのが憎かった。理不尽な玉碎を命じる上が呪わしかった」

走る皆、次々撃たれ、倒れて逝く。
その光景を、まるで映画のように見てい

る現在の水木。

今の水木「もし生き延びたらそんな人間にだけはなるまいと。力を得ても、奪う側には回らまいと、そう思っていたのに……ッ」

仲間の屍が累々と転がる中。

水木「だと、いうのに……」

スーツ姿の水木、一人、その真ん中で崩れ落ち——。

○ 龍賀家・一臣の部屋の前

ねずみ「一臣ぼっちちゃんの日記？」

沙代「それを水木さんに。きつとてがかりになるはずよ」

すると、そこに声。

庚子「沙代さん……？」

!! となるねずみたち。

庚子「そこ一臣兄さんの部屋よね？ 何をしてるの？ それは？」

沙代「——行つて」

ねずみ小僧「あいよっ！」

そのまま駆けて行くねずみ小僧。

沙代「庚子おばさま。どうかこのことは、母には黙っていただいけませんか？」

庚子「だめよ」

薄暗い自信に満ちたその様子。

庚子「時弥が当主になったら、この家は私たちのものですよ。——それが貴方でも乙

米姉さんでも、勝手はゆるされないわ」
庚子、にいいいい、つと笑みを浮かべ。
沙代「……！」

——と、そのとき。
(SE) 龍哭の鳴動

○ 神社前

乙米「長田」「……!!」
水木「……………!!」

いままでも、一際大きな鳴動で。
乙米、く、と齒嚙みしつ。つ。

乙米「その幽霊族の男はとりあえず『工場』
に連れて行かない」

長田「は」

乙米「長田。もう本当に時間がありません。

庚子が何を言おうと、時弥を連れて来なさい。
い。あの子に当主を継がせます」

長田「承知しました、奥様」

乙米「それから……沙代も一緒に連れてきて。
あの子は時弥とめあわせ、今度こそ、次の
当主を生ませますから」

！と反応する水木。

乙米「本当に残念だわ。あの子がちゃんとお
父様の子を身にもつていれば、さぞ力の強
い跡継ぎが生まれたでしょうに……」

愕然となる水木、呑み込めない、呑み込
みたくない、というふうで——。

水木「あなたたち……なにを……言ってるん
だ……？」

乙米「そういえばお前に、克典がなにか言っ
ていたよね。忘れなさい、沙代は龍賀の
女。優れた霊力を持つ子孫を産むために、
これまでも、お祖父様にその身を捧げて来
たのです」

水木「身を捧げるって……まさか……自分の
祖父、と……」

乙米「(にいと笑う)」

瞬間、吐き気がこみ上げてくる水木。
そのまま、げえげえと吐いてしまう。

水木「そう……か……。だから俺なんか
絶つて——」

ギリリ、と齒嚙みする。

水木「最悪だ。——ここまで醜悪な一族に憧
れていたなんて、自分が腹立たしい……」

乙米を睨みつける水木。

水木「あなたたちは人間じゃない！」

その反抗的な目に、乙米、激昂し——。
乙米「長田」

言うが早いか、長田、水木を盛大にぶん
殴つて——。

そのまま、気絶する水木。

乙米「土蔵にでも放り込んでおきなさい」

暗転から——。

べちべちと自分の頬を叩く何か。

水木「う……」

その感触で、目を覚ます水木。

見れば、自分の頬を叩いていたのは、鬼
太郎父の持っていた霊毛組紐で——。

水木「お前は……！」

身を起こす水木(※拘束はされてない)、
するとその視界の隅に、妖怪がこっそり
物陰から自分を見ているのに気付く。

水木「お前達まで……。俺を心配してくれて
るのか？」

妖怪「……………」

と、水木、そこで思わず可笑しくなつて、
クツと笑つてしまう。

水木「普通に妖怪に話しかけてるなんてな。
まったく……」

克典の傲慢な顔。乙米の嗜虐の目。

欲望にギラギラしていた自分。

水木「俺は今まで何を見ていたんだ……。……い
や、何も、見ていなかったんだな……」

——と、そんなところで突然、ギギギと重
い音と共に、倉の戸が開き。

ねずみ小僧「ニイさん！」

一臣の日記を手になずみ小僧が現れ——。

○ 土蔵の前(あるは神社の前とか。適宜)

時間経過。

日記にザッと目を通している水木。

水木「……（読んでる）……」

ねずみ小僧「うえつ、なんだよこれ、思ってたよ全然ヤベエ……村ぐるみでイカれてやがるぜこいつら……！」

ギリリとなる水木、ねずみ小僧も、ゲツという顔。——と、そこに。

沙代「水木さん！」

慌てた様子で駆けてくる沙代。

が、水木、その姿を見た途端——。

水木「——!!」

水木の目が大きく見開かれる（※沙代の背後に何かを見ている。が、ここでは明かさない）。

沙代「水木さん……？」

水木「いや、どうしたんだ沙代さん？」

沙代「来て！ お屋敷が大変なの！」

水木「!?」

○屋敷の中・応接間

——は、血塗れで、引き裂かれたように死んでいる庚子の死体。

菊「ひっ……ひいひい……」

使用人（女性たち）は、廊下の隅に固まって震えている。

さらに、応接の時貞の肖像写真は斬り裂

かれて、返り血で真っ赤。

沙代「水木さん、もう限界です。早く逃げましょう。この屋敷は呪われているんです！」

水木「沙代さん……。だが道は……」

沙代「あれは母がついた嘘です。——あなたたちを外に出さないための——」

水木「なんだって……!?」

するとそのとき——。

（SE）龍哭

さらに激しい振動と鳴動が。

！ となる一同。

玄関から出て空を見ると——。

湖の中の島、窖の真上には黒雲が沸き立ち、結界の周囲に、まるで限界が来たかのように龍（稲光）が走り——。

水木「……」

沙代「水木さん！ もうおわかりでしょう？ この村は……龍賀の一族は異常なんです。

お願いだから、私をここから連れ出してください……！」

訴える沙代の瞳に、僅かな狂気の光。

水木、くっ……と、憐れむ様に見つめ。

水木「……。わかった。東京に行こう」

（SE）龍哭

空を龍の稲妻が駆け、再び鳴動し——。

○鍾乳洞・製剤M工場

パラバラと瓦礫が落ちる中、長田と手下に鍾乳洞を引つ立てられてくる、拘束されたままの鬼太郎父。

——と、突如空間が開け、整備された空間が現れる。

そこにずらりと並ぶベッド。

そのいくつかには、包帯でぐるぐる巻きにされ拘束された、人間サイズの繭とい

うか木乃伊のようなものがあり——（※幽霊族の血を輸血されて動く死人）。

その全てが、全身に管をつながれ血を出し入れされ、さらにベッドに、物理的及び呪術的に拘束されている。

しかし、時に蠢き、うなり声が。

鬼太郎父「……なるほど……な」

嘲るような口調で言う。

鬼太郎父「……なるほど……な」

嘲るような口調で言う。

鬼太郎父「儂等幽霊族の血を輸血された人間は、生きたままま屍になつてしまふ。ここに

おるのは、その屍人共か……」

乙米「ええ。そしてお父様は、その屍人から採った血を精製することで、血液製剤Mを

生み出されたのです……！」

笑う乙米。

乙米「世界の軍隊が、企業が欲しがる夢の薬……。本当に無念でなりません。もっとお

前達の血が沢山あれば、先の戦争にだって勝てたでしょうに……」

鬼太郎父「……………」

全く響かない鬼太郎父。

鬼太郎父「のう。この屍人たちは、どこから来たのじゃ……………」村の人間を生贄にしたのか……………」

乙米「いいえ。哭倉の者たちが近隣の村や、麓の街から攫ってきた人間ですよ」

鬼太郎父「……………」

乙米「この工場で屍人の世話をするのも村の者です。——彼らは数百年前から、私達龍駕に仕えてきた忠実な僕ですもの」

鬼太郎父「そうか……………」因果は廻る……………」この報いはいずれお前達に還るぞ。必ずじゃ——」

ギリリと告げる鬼太郎父。

だが馬耳東風の乙米。

乙米「そのベッドに固定しなさい。——この男は種だけとればいい。邪魔な手脚は落としてしまいなさい」

長田「は」

ベッドに固定される鬼太郎父。

鬼太郎父「ぐっ……………」やめろ……………」

抵抗するがどうにもならず、両手両脚がぐっ伸ばされ、固定される。

そしてどこからか取り出される斧（もしくは鉋）。

乙米「残念でしたね。誰もお前を助けない。誰もお前の味方をしない。——でも安心な

さい。お前達の長い寿命の間、ずっと……………」ずううううと、私たちの一族が飼つてあげるから……………」

振り上げられる斧、だがそのとき——。

水木（OFF）「やめろおおお——っ！」

その声と共に、ビュンと飛んで来る石が、部下の振り上げた斧を落下させる。

!? と見る一同。

そこには、水木の姿が——。

鬼太郎父「水木……………」

水木、ぐっ、と踏みとどまるように。

水木「——その男を放せ」

だが乙米、馬鹿にするように。

乙米「いきなり何を言うかと思えば。お前に交渉の余地があると思うのですか？」

水木「さもなくば——」

腕をひいて物陰から引き出すのは、沙代。

水木、後ろから羽交ひ締めして、その喉元に、この部屋にあったメスらしきものを突きつける。

乙米「沙代!?」

沙代「お母様……………」助けてください！」

ぎっ……………」と睨む乙米、長田。

——と、その背後で、霊毛組紐がベッドの合間を縫い、しゅるしゅると鬼太郎父のベッドに忍び寄っている。

水木「……………」

〔回想〕 × × ×

先ほどの続き。

水木「わかった。東京に行こう」

沙代「水木さん……………」

水木「だから君は先に逃げてくれ。僕はあとから追いかける」

沙代「!?」

水木、キリリと。

水木「俺は、やらなきゃいけないことがある」

沙代、悟つて。

沙代「あの人を……………」助けに行くの？」

水木「——ああ」

沙代、キッと見つめ返し。

沙代「なら私も行きます」

〔戻り〕 × × ×

冷や汗が滴る水木。

乙米「水木とかいいましたね。——無理はおやめなさい。お前に沙代が殺せるの？」

水木「殺せる! 俺は兵隊あがりだぞ!」

——と、そこで充分に接近した組紐が、いきなり長田や部下に絡みつく。

部下「うわっ!」

そこで部下が取り落とした斧を、組紐が奪い取り、ベッドに振り下ろす。

——と、折れるベッド、拘束の呪術が壊れて、自由になる鬼太郎父。

沙代「やったわ、水木さん！」

親しげに振り向き喜ぶ沙代を見て、狂言だと理解する乙米。

乙米「そういうこと……。狂言など、いったいどういうつもりです、沙代!？」

沙代「わたし、一臣叔父さんの日記を読みました。お母様……これが龍賀の秘密なのですか? 私はこんなもののために、いままであんな思いをしてきたのですか!」

——と、乙米、継いでやれやれと笑い。

乙米「仕方のない子。ゆっくり全てを伝えようと思っていたのに」

傍らの、蠢く包帯の塊を撫でる乙米。

乙米「諦めなさい、……あなたは龍賀の女。その宿命からは逃れられません。あなたは時弥の妻となり、次の当主を産むのです」

……っ、と見る沙代。

乙米「女であつたが故に、当主に据えることはできませんでしたが、あなたの力は二臣兄さますら凌駕するほど。時弥もそう。二人の子供はとても素晴らしい術者となり、この結果と、龍賀の繁栄を永遠に維持し続けるでしょう——」

沙代「嫌ッ! 私は水木さんと——」

そこにていっと笑う乙米。

乙米「あら。お前のような娘をあつた男が本気で好いてくれると思つてゐるのですか?」

おめでたいこと——。お前とお父様のこと、あの男はもう知つてゐるのですよ?」

!! となる乙米。

おそろおそろ水木を見る。

辛そうな水木の視線は、乙米の言葉を肯定しており——。

沙代「そんな……」

がつくりと膝からくずれおちる。

水木「沙代さんに……そんなことをさせたのはお前達だろうが!」

怒鳴る水木。

水木「だから沙代さんは妖怪に取り憑かれてしまつたんだ! そのせいで、何人もの人を——」

!? となる乙米、そして沙代。

鬼太郎父もくつと見る。

乙米「まさか……沙代、お前が!」

すると沙代、力なく笑い出す。

沙代「ふ……ふふ……あは……」

涙を流し、ぐしやぐしに崩れた顔で。

沙代「そつか……。それも知つてたんだ……」

水木さん……」

水木「……っ」

水木、ギリと。

水木「ここに来てから、いつしか俺は見えないよになつてしまつたんだ。——見えない筈のモノ、見えないはずの世界が……」

〔回想〕 × ×

先ほど、水木の所に沙代が来たシーン。

その沙代の背後には、うらめしげな一臣、さらに丙江と庚子の亡霊が——。

水木「……! (目を見開く)」

〔戻り〕 × × ×

水木「……彼らは、いまでも君の後ろにいるよ」

実際、沙代の背後にいる亡霊たち。

沙代、訥々と口を開く。

沙代(ON OFF)「一臣叔父さんは……当主になつた途端、私にお祖父様と同じことしようとした……」

フラッシュで、社殿の中、沙代に襲いかかるうとする一臣。

逃げる沙代、組み敷かれ、祭壇にぶつかり、祭具が落ちる。

シルエット、のしかかる影。

そのとき沙代の手元に、祭壇から転げ落ちた鉈が——。

次カット死んでゐる一臣。

放心牧態の沙代、背後に、ふうっ……と、

狂骨(白)が浮かび——。

沙代(OFF)「丙江伯母さんは、水木さんにお祖父様とのことを黙っていて欲しければ……と、私を脅してきました。だから……」

脅しにきている丙江、対する沙代の背後に、やはり狂骨。

次カット、既にはやにえ状態の丙江。

沙代「庚子伯母さんまで、私の幸せを邪魔をしようとした……」

沙代、寂しげに。

沙代「本当は、誰も私のことなんか見てなかったくせに……。見ていたのは龍賀の名前と血、ただそれだけ。——私は一族の道具じゃない！」

その激情の訴えに、くつとなる水木。

水木「俺も、君を利用しようとした。龍賀の孫と知り、君と結婚すれば一族に入れる。そんな餌をちらつかされ、断り切ることができなかった……。そういう意味では、龍賀の一族と同罪だ」

沙代「……………」

既に魂が抜けたかのような沙代。

水木「それはどんなことをしても償う。だからこんな村を出て東京に行こう。そこで君も罪を償うんだ。君の置かれた異常な境遇ならきつと情状酌量される。だから——」

だが沙代、ぼつり。

沙代「……嫌よ」

魂の消えたかのような虚ろな目。

そこからただ、滂沱の涙。

沙代「あなたならって思ったのに。私に自由

をくれるって。——でも失敗しちゃったのね、私……」

——その目に、昏い光が宿り——。

沙代「しかたないわ。ぜんぶ終わりにしましょう。この村も、龍賀も、……私も」

瞬間——。

ブワツと沙代から飛び出す白い狂骨（※沙代に取り憑いていたもの）。

一同「!?」

激しい鳴動、揺れる天井。

(SE) 龍震

——と、長田の腰にあった、狂骨の封印が爆ぜ——。

長田「っ!」

転がり出るしやれこうべ、地面に落ちると砕けてしまう。

と、同時に現れる狂骨、支配下の証だった拘束の呪布が消えている。

すると沙代の狂骨、その狂骨をも吸収し、大きくなる。

長田「我らの術が破れ、吸収された……!」

鬼太郎父「狂骨……ッ 操られているのではない——。もしや……嬢ちゃんが、狂骨を操っておるのか!」

するとその狂骨は、病院内を飛び回り、次々と屍人の身体を通り過ぎるようにして、支配下に置いて行く。

と、包帯がゆるみ、ちぎれ、中から現れるのは、異形の屍人たち。

乙米「屍人たちが……!」

鬼太郎父「いかん! 嬢ちゃん!」

だが沙代は聞かず——。

その昏い目は、ギツと、乙米を睨む。

乙米「やめなさい、沙代!」

だが聞かず、屍人たちはワラワラと大軍で、乙米たちに迫る。

乙米「長田! なんとかなさい!」

長田「いま……まいます!」

長田たち、屍人と戦闘。

殴打すると、簡単に穴があいたり手脚が折れたりする屍人の身体。

しかし、それでも屍人は止まらず——。

長田「くっ……!」

御札（鬼太郎父を拘束した鎖とかに貼り付いていたのと同デザイン）を取り出す

長田、何か術を掛けようとするが——。

バチ! と弾かれ、燃え尽きる御札。

長田「!?」

既に白目で自身が化け物のようになっていた沙代が、長田に向け手を伸ばしており、その力で弾いたらしい。

長田「沙代さま……ッ!」

乙米「きゃあああッ!」

悲鳴に——と長田が振り向くと、乙米は

既に屍人に取り囲まれている。

長田「奥様っ！」

乙米に氣を取られた瞬間——。

ガッ、と、背後から首筋に噛み付かれ、おそろく動脈をやられる長田。

長田「くっ……！」

長田の抉れた首元から、鮮血が奔る。

その間にも、引き倒される乙米。

乙米「いや……いやあああああつ！ 助けなさい長田！ 長田あああつ！」

長田「乙米さまああ——！」

長田、傍らにあった手術道具的なものとかパイプとかで、自分を噛んだ死骸を打ち払い、そして振り向くが、その瞬間。乙米は屍人の山に呑み込まれ、完全に見えなくなり——。

沙代「あは……あははは！ いい気味よ！」

そしてフツと正氣に戻るが、そこで、自分を見つめる水木と目が合う。

沙代「……！」

憐れむような、悼むような目に、しかしどうしても混じる嫌惡の光に——。

沙代「!!」

沙代が我に返ったその瞬間——。

ドッ……！ と、背中側から刺し貫かれた錫杖が、沙代の胸の真ん中に生える。

水木「!!」

それは、最後の気合いを振り絞った長田の仕業であり——。

ドウと倒れ、息絶える長田。

沙代は、胸の傷から血を流しつつ——。涙を浮かべ、声にならぬ声で。

沙代「(バクのみ) ごめんなさい……」

水木「……っ、沙代さん——!!」

沙代、そのまま膝から崩れ落ち——。

狂骨たちも、ここでフツと消える。

× × ×

少し時間を盗み、横たわる沙代を抱いている水木。

沙代は、既に息絶えている。

水木「沙代さん……」

——と、同時に、胸骨が消えたときと同じように、灰となつてサラサラと崩れ去つてゆき——、やがて、その灰すらも残らず、消えてしまい——。

水木「……」

ぐっと、涙をこらえるように、俯く水木。

實際、泣いているかはわからない。

しかし、その肩は怒りか悲しみか、細かく震えており——。

鬼太郎父「………」

かける言葉もなく、見つめる鬼太郎父、——と。

いままでで一番激しく、龍哭が轟き、そ

れが合図になったかのように、水木、キッ……と立ち上がり——。

水木「行こう。この忌まわしい呪いを終わらせるために——」

○ 哭倉村全景

天変地異はいよいよ激しく。

克典「な……なんなんだこれは……」

庚子たちの死体を前に、途方にくれて。

× × ×

村人たちも、怯えている。

× × ×

ねずみ小僧「くわばらくわばら」

逃げ出しているねずみ小僧。

○ 窖

——に、向かう水木と鬼太郎父。

鍾乳洞の先に、巨大な空間が見え——。

その空間——窖の巨大な縦坑に出る。

その底には地底湖があり、その湖に浸かるように、巨大な桜——血桜の大樹が、血のような満開の花を咲かせている。

水木「なんだここは……!?!」

怖ろしいまでの、その美しい光景。

しかし、禍々しい。

水木「こんなに美しいのに……重くて、苦し

くて……、気持ちが悪い……」

鼻血が吹き出て、動悸が激しくなる。

鬼太郎父「狂骨の元となる怨念じゃ……濃すぎてはや、お主の目も本能的に見ることを拒んでおるのじゃろう。無理して見れば、ここは完全な暗闇に見える筈じゃ……」

水木「……!」

イメーじ、真つ黒なドロドロした怨念が渦巻いている、灼のような空間。

そして桜を見上げる二人。

鬼太郎父「血桜か……」

そこで、ハツとなる鬼太郎父、いきなり血桜に向かって走り出す。

水木「!?」

鬼太郎父「そうか……! そういうカラクリだったんじゃない……」

水木「待てゲゲ郎! なんだ血桜って……!?」

鬼太郎父、必死で駆けて湖の縁へ。

鬼太郎父「その幹と根に人を取り込み血を吸う妖樹じゃ!……吸った血を花びらにまで行き渡らせて咲き誇り、幹を切れば血が噴き出すという……(ハツとなり)……」

その水面下を見て、愕然の鬼太郎父。

水木「どうした!?」

追いついた水木も水面下見ると——と、その根本には、無数の白骨が、根に絡みつかれるようにんでおり——。

水木「白骨……!? あれが全部……人の死骸だ……」

鬼太郎父「……違う」

!?となる水木。

鬼太郎父「あれはヒトの骸^{むくろ}ではない。——みな、僕の同胞たち……幽霊族の亡骸じゃ……!」

水木「……!?」

鬼太郎父「(ギリリと) なんと……なんということをして! この害に渦巻く怨念の正体は、人間に殺され、葉の原料にされた祖先たちの怨念だったのじゃ!!」

水木「!!」

ギリとなる鬼太郎父、そのまま血桜の根元に向かう。

鬼太郎父「それだけではない。不死の葉の材料とされたヒトの怨念も混じっておる。そのすべてが、この害に渦巻き、狂骨となったのじゃ……!」

そして、半身まで湖に浸かり、樹の正面——湖の中心側に回る。

水木「!? 何をするつもりだ!?」

鬼太郎父「血桜は、その霊力で樹に囚われたものをできるだけ永らえさせ、ありえぬほど長い間、血を吸い続ける。桜が散っておらぬということは、まだ生きているものがあるということじゃ!」

そこで水木、ハツとなり。

水木「……それはつまり——」

鬼太郎父「僕の妻じゃ!」

鬼太郎父、樹の正面に迫ろうとするが、瞬間、何かの呪力で阻まれる。

水木／鬼太郎父「——!?」

鬼太郎父「これは呪力……!? しかし龍賀の者はもう誰が残っておらぬ筈……!」

水木「じゃあいったい誰が!?」

時弥(時貞・OFF)「——僕じゃよ」

! と見る水木、するとそこにいるのは、長田も使っていた呪符を手にした時弥であり——。

鬼太郎父「!?」

水木「時弥くん!? なぜ……」

しかし水木の目には、老人の姿がダブって見える。——龍賀翁、時貞の姿が。

水木「時貞翁……!?」

水木、愕然と。

水木「だが一臣たちの怨念とは違う……まるで時弥くん自身が……時貞翁みたいに」

時弥「その通り。——僕は時弥ではない。もつとも、身体は時弥のものじゃがの」

そこで鬼太郎父、ハツとなり。

鬼太郎父「魂移しの外法か!」

時弥(時貞)「ほう、さすが幽霊族」

鬼太郎父「外道め! もともとの魂を追い出

して、身体を乗つ取ったのじやな!」

水木「……!? 乗つ取る……じや、じやあ時弥くんは……」

肯定のようにいいつつ、と笑う時貞。

時弥(時貞)「儂の子の中では一番素質に恵まれておったからのう」

そのおぞましい姿に、怖気を振るいつつ。

水木「馬鹿な……! 自分の孫を……殺した

……のか……!?」

時弥(時貞)「仕方なからう。傘寿を過ぎ力を衰えを感じつつ、日々儂は嘆いておった

のじや。——息子も娘も……いや、最近の若造共は誰も彼もが、あまりにも不甲斐な

く愚かじやと!」

本人は本気らしく、狂人の据わった目で

時弥(時貞)「じやから儂は決意したのじや

よ。一族を——いや、この日の本を導く為

に、儂はまだまだ死ぬ……生きて生き延

びて、皆を教へ導いてやらねばならぬと!」

嗚然と見つめる水木。

水木「いったい……いつからだ。いつからお

前は時弥くんを乗つ取った!」

時弥(時貞)「術は無論、儂が死ぬ前にか

ておいた。もっとも覚醒したのは、つい三

日ほど前の話じやよ」

水木「じやあ——」

フラッシュ、三日目くらいまでの時弥。

水木M「あれは……、時弥君、本人だったのか……」

鬼太郎父「もって回ったやり方じや。お主、

この外法を施したこと、誰にも言わずにお

いたな?」

水木「そうか……。乙米たちも、知ってい

ばあんなに必死には……!」

時弥(時貞)「——選別じやよ」

!? となる水木。

時弥(時貞)「龍賀が生まれてより三百年。

——靈力知力に優れし我が一族。しかし、

時代が下り血が混じり——」

時弥(時貞)「娘や孫に、儂の子を何人子供

を産ませても、マトモに育たず、希に育つ

てもカスばかり。いい機会じやから、全部

をふるいに掛けようと思つての」

……! となる水木。

時弥(時貞)「じやが全員だめじやつたよ。

残念なことじや。しかし、いまの儂にはこ

の若い身体がある。すべてをやり直すには、

よい機会じや」

しゃあしやあと言ふ時弥。

時弥(時貞)「おまけに、最後の一人だと

思つてた幽霊族のつがいまで見つかった。

これでどんどん繁殖させらせる。また沢山

の血桜を植え、どんどんMを作り、今度こ

そ儂は……いや龍賀は、世界を手に入れら

れるかもしれない!」

と、鬼太郎父、ついに切れて。

鬼太郎父「黙れえッ!」

ビリビリと響く声。

鬼太郎父「そんなことはさせぬ。——儂はお

前を倒し、妻を取り戻す」

時弥(時貞)「ほう……お主にできるか?

氣付いておるじやろ。この害は、呪詛返し

の結果じや……」

× × ×

血桜のある湖の底(地底湖と害の、ちよ

うどド真ん中)に、天辺に一個の頭蓋が

何かの杭か槍で釘付けにされた石柱を中

心としてストーンサークルがあり、その

石柱の周りにもまた、いくつもの頭蓋が

積まれている。

——が、周囲の頭蓋半ば壊れており、い

まもまた、一つ崩れ——。(全部壊れた

ら結果崩壊)。

× × ×

時弥(時貞)「この害に渦巻く怨念は、結果

を失えばいまここに在る儂等とて、一気に

溶かされてしまうほど濃密じや。そして儂

が死ねば、結果は破れ放たれた幽霊族の狂

骨どもは、見境なくこの国の人間に襲いか

かるじやろう。そうなれば人間のみならず、

妖怪でも無事ではおられぬじやろうな」

水木「……!」

ギツと見る鬼太郎父。

時弥(時貞)「あきらめて僕に飼われる。幽霊族最後の男」

——と、ざああ……と、血桜の枝がなぜか揺れて——。

時弥(時貞)「ほれ。貴様の恋女房にも会わせてやろう。——嬉しかろ?」

枝垂れの枝と花びらがかき分けられ、樹の根本に囚われた、白い着物に長い蓬髪

の女の姿が露わになり——。

しかしその顔は、醜く歪んでいて。

水木「……!? あれが——!」

フラッシュする、鬼太郎母の写真。

その美しい姿。

時弥(時貞)「捕えたときは中々の美人じゃったが、血桜に何もかも吸い取られてあの有り様じゃ」

しかし鬼太郎父は気にせず、滂沱の涙を流して——。

鬼太郎父「ああ……よく生きていてくれた

……! おまえ……!」

水木「間違いない……のか……」

水木M「でもあの女、どこかで——」

ハツとなる水木。

最初の夜。

龍哭の時に見た、幽霊の女。

水木「俺は……あのひとに、会ってる……」

呆然と呟く水木。

鬼太郎父「何!」

水木「最初の夜だ。お腹をこう……大事そう

に抱えて。——この子だけは、つて……」

鬼太郎父「子……じゃと!? まさか——」

そこで呵々大笑と笑う時弥。

時弥(時貞)「ほう……! そうか! 身こ

もつておったのか、これは傑作じゃ!——

手間も省けて有り難いことよ!」

水木「でも……もう何年も……」

時弥(時貞)「そうじゃの。じゃがこいつら

幽霊族は、身こもつても、時が来るまで産

むのを待つことができるって聞く。どこぞの

畜生と同じじゃな」

鬼太郎父「僕の子が……そうか……。——そ

う、じゃったのか……!」

ザッ……と立ち上がる鬼太郎父。

鬼太郎父「ならば——」

ギツ、と構えて。

鬼太郎父「二人を必ず連れて帰るッ!!」

時弥(時貞)「やれやれ」

呪符を使おうとするが——。

鬼太郎父「来いッ!」

その声と共に、どこからともなく飛んで

来る下駄(※最初の長田たちとの戦いの

ときから行方不明になってました)。

その下駄が、呪符を破る。

時弥(時貞)「しもった!」

鬼太郎父「もう術は使わせぬ!」

だが時弥、べろりと舌を出し。

時弥(時貞)「などと言おうと思ったか? こ

んな呪符程度では、この狂骨は操れぬよ」

そして胸元から何かを引っ張り出す。

掌の上に載せたそれは、長田が持ってい

たのと同じ小さなしやれこうべだが、よ

り沢山、複雑な呪文が刻まれている。

その小さな頭蓋が光ると、呪文が湧きだ

し、それは宙を舞っていた白狂骨たちに

巻き付き支配下に置く。

そして鬼太郎父に襲いかかってくる。

下駄を放つ鬼太郎父、下駄は狂骨の身体

を斬り裂くが、すぐに復活してしまう。

組紐もがんばるが、拘束した側から抜け

られてしまい——。

湖の縁に追いやられる鬼太郎父。

そこに狂骨の爪が迫り。

鬼太郎父「ぐっ!」

鬼太郎父の身体をひつかくように通過す

ると、ガクリと膝を突く鬼太郎父。

さらに攻撃しようとする狂骨。

水木「やめろおおッ!」

水木、たまらず割って入ろうと、駆け寄

ろうとするが。

時弥（時貞）「貴様如きが割って入るな！
青二才！」

何か術を発動、バチ！と見えない壁に
阻まれて、倒れる水木。

水木「ぐっ……！」

時弥、水木を睥睨すると。

時弥（時貞）「もう動けまい。大人しくそこ
で見ておれ」

そして鬼太郎父に近付いて行く。

時弥（時貞）「さて。少し遊びがすぎたの。
結界も、もはや限界じゃ」

見つめる鬼太郎父は、完全にボロボロ。
狂骨の爪に苛まれ、あちこちから出血、

立っているのが不思議なほど。

時弥（時貞）「もつとも、貴様もとつくに限
界を越えとるじやろ。——そろそろ、観念
せい。伏して乞うなら、貴様の子供も生か
してやってもよい」

鬼太郎父「……………」

鬼太郎父に迫る時弥、その周りは狂骨が
居並び、時弥を守っている。

時弥（時貞）「さあ、観念せい」

だがそのとき、！と見開かれる鬼太郎
父の目（時弥の背後に何か見た）。

鬼太郎父「——いやじゃね。僕は諦めが悪い
んじゃ……」

ギッ……と笑う鬼太郎父。

鬼太郎父「それは僕の相棒もな！」

時弥の背後には——。

噛みしめた唇から血を流し、立ち上がった
て鉋を振り上げている水木の姿が。

水木「——ッ！」

そのまま、時弥の持つしゃれこうべにむ
けて振り下ろし——。

バキン……と、軽く乾いた音と共に。

そのしゃれこうべは碎け散り——。

現れていた無数の狂骨が、一斉に止まる。
時弥（時貞）「馬鹿な……！ 僕の支配を離
れた狂骨が、一気に貴様らにおそいかかる
ぞ！」

構える鬼太郎父。

支配下を離れた無数の黒狂骨たちが、

狂ったように蠢き、鬼太郎父に襲いかか
ろうとするが——。

水木「ゲゲ郎！」

そのとき、血桜に囚われていた、鬼太郎
母の腹部が光り——。

水木／鬼太郎父「——!?」

その光に照らされた途端、黒狂骨は浄化
され、白い魂と化して行く。

鬼太郎父「これは……！」

水木「なんて優しい光だ……。狂骨の怨念が
……浄化……されてる……？」

——と、その狂骨だった魂たちは、一本

の光の繊維と化しており。

鬼太郎父「祖先たちよ……。僕と我が子を祝
福してくれるのか……」

と、鬼太郎父、組紐を持った手で、その
紐も絡めて印を組んで——。

鬼太郎父「古の祖先たちに乞い願う。解き放
たれし魂たちよ。僕に……僕たちに、力を
貸したまえ！」

と——、手にした組紐が、バツと散る。

鬼太郎父／水木「……………」

それは、一本ずつの繊維にほぐれ、それ
に呼応するように、湖に沈む白骨からは、
黒い繊維が溶け出すように出現し——。

水木「——!?」

フラッシュ。

鬼太郎父「祖先の霊毛を編んだ——」

水木「！」

それは、ほどけた組紐のところに集まり、
より合わさってゆき——。

大きな布状になると、そのままふわりと
鬼太郎父の身体に纏わり付いて。

ツートンの、ちゃんちゃんことなる。

水木「霊毛が……ちゃんちゃんこに……!?」
ちゃんちゃんこを纏った鬼太郎父。

ちゃんと立つその立ち姿。

時弥（時貞）「賢しい真似を——！」

時弥、割れて落ちたしゃれこうべのカケ

ヲを拾うと、それをボリボリとかみ砕いて嚙下する。

時弥（時貞）「何をしている……我が意に従え、狂骨ども！」

ギン、と時弥の全身呪文が浮かび。

駆られたように突撃してくる狂骨たち。

鬼太郎父「無駄じゃよ」

鬼太郎父「ちゃんちゃんこをほだけ——」

バツと振り払うと、狂骨は次々と消滅してゆく。

時弥（時貞）「なっ……！」

そしてついには、時弥（時貞）に従って

いた全ての狂骨を消滅させる。

鬼太郎父「諦めろ。お前は終わりじゃよ」

しかし時弥、諦めず。

時弥（時貞）「ハッ！ 僅かに浄化したよう

じゃが、ここにどれだけの怨念が渦巻いて

いると思っておる！ この程度で——」

鬼太郎父「そうじゃな。——まだまだ強い怨

念が渦巻いておるよ。そして先ほど、お主

の支配をはなれたほんの一瞬——」

静かに告げる鬼太郎父。

鬼太郎父「それらの念は、この害の中でも、

一番強い怨念を持つ狂骨と混じり合った」

時弥（時貞）「何?」

鬼太郎父「身体は弱くとも、強い霊力を持つ

ていたが故に、貴様自身の器にされた哀れで無垢な魂……。そしてその無垢さ故に、純粹に貴様を恨み、ひたすらに貴様を滅ぼそうとしている魂と！」

——と、ハッとする時弥。

その時弥の前には——、小さな狂骨。

その狂骨が振り向くと、その顔には——。

時弥（時貞）「とき……や……」

時弥本人の顔がダブリ——。

瞬間、ブワッ……と、地面全体が真っ黒

に染まり、時弥の狂骨の足許と繋がる。

——と、時貞の時弥の腕に、足に、湧き

出た狂骨の腕が、次々絡みつき——。

鬼太郎父「——お迎えじゃ。但し——、連れ

て行かれる先は地獄ですらない」

言うや、桜に向け走り出す二人。

時弥（時貞）「いや……じゃ……。僕は生き

るのじゃ！ 生きねは……日の本の……み

ら……うわあああああああああッ」

地下に引きずり込まれる時貞の断末魔を

背に、血桜の根元に走って行く。

そして鬼太郎父、手が傷付くのもおかま

いなしに樹の根を走り、また水木は、手

にしていた鉋でどんどん根を切り——。

ついに自由になる鬼太郎母。

鬼太郎父「ああ……。——ああ……っ！」

と、鬼太郎母、うつすらと目をあけ。

鬼太郎母「あな……た……?」

鬼太郎父「おまえ……」

ぐつと鬼太郎母を抱きしめる鬼太郎父。

鬼太郎父「遅くなつて本当にすまん！ よく

生きててくれた！ よく……耐えてくれた

……！」

ぼろぼろと涙がこぼれ——。

鬼太郎母「……ふふ……。あいかわらず、泣

き虫ね……。あなたは……」

そして意識を失い、瞳を閉じる鬼太郎母

そんな二人を見つめる水木。

祝福するような、羨むような。

——と、しかしそのとき。

ゴゴゴ……と揺れ、崩れ出す筈。

水木「水が……！」

急激に減って行っている。

血桜が浸かっていた地底湖の水が抜け、

その根元が露わになってゆき——。

——そして、地底湖の水底には、人骨で

できた環状列石の結界の核が見え。

水木「あれは……！」

結界の柱は、周囲の骸骨が全て崩れ、柱

に刺さったたった一つのみになっている。

——と、湖の底に降り積もった無数の白

骨から次々と狂骨が吹き出し、縦横無尽

に、かつ無数に飛び回り——。

一体が、こっちに迫ってくる。

と、それを立ち上がり、ちゃんちゃんこでバツ、と払う鬼太郎父。

水木「——!! 狂骨が……!」

見上げれば、窖から外に出て行っている鬼太郎父「……やはり、術者を失い崩壊したか。……しかたないの」

予期していたように言う鬼太郎父は、見れば、下駄を妻に履かせている。

水木「……?」

と、鬼太郎父、立ち上がり。

鬼太郎父「妻を頼む、水木」

水木「ゲゲ郎!? おまえまさか——」

鬼太郎父「うむ。——儂はあの結界を完全に破壊し、その後に全ての怨霊を封じる」

水木「……! そんなこと……できるのか!?」

鬼太郎父「さての。——じゃが、誰かがやらねばならぬなら、それは儂じゃろう。儂等の子の未来のためにも、まだこの世を終わりにするわけには行かぬからの……」

○ はじまる百鬼夜行。

窖の上には、稲妻が走り、龍哭が轟き、狂骨が次々飛びだしてくる。

妖怪達はその狂骨に追われ狂ったように逃げ出し、逃げ遅れた村の人間たちは狂骨に襲われ次々命を落としてゆく。

克典「ひいひいっ!」

克典も狂骨にがつり取り憑かれ——。

× × ×

ねずみ小僧「こりゃたまんねえや!」

一目散に、妖怪たちと共に逃げて行くねずみ小僧。

○ 窖

鬼太郎父「ほれ」

鬼太郎父、鬼太郎母を抱えて立つ水木にちゃんちゃんこを羽織らせる。

鬼太郎父「これを着ておれば、万一狂骨どもにやられても、心や記憶を無くしたりせんはずじゃ」

水木「受け取れるか。これはお前が着てろ!」

しかし鬼太郎父、クビを振り。

鬼太郎父「——妻と儂の子を頼む。お主にしか頼めぬ。水木」

水木「……!」

覚悟を決めた涼やかな目に、もはや何を言っても翻意はできない、と悟る水木。

水木「……約束しろ。絶対に生き延びて戻ってくる」と

鬼太郎父「ああ。また、会おう……!」

水木「必ずだぞ!」

走り出す水木、見送る鬼太郎父。

○ 鍾乳洞

——を、駆け抜けて行く水木。

しかし、その身体にちゃんちゃんこは纏っておらず、背に背負った鬼太郎母にちゃんちゃんこを着せている。

時折、狂骨に軽く颯られる水木。

水木「くっ……!」

削られて行く心と記憶。

しかし耐えて、必死に走り——。

○ 窖・干上がった湖の湖底

ドロドロと怨念が渦巻く窖の底。

(SE) 龍哭

一人立つ鬼太郎父。

鬼太郎父「……ッ! 凄まじい怨念の渦じゃ……! 幽霊族も人間もない……ただ、憎しみだけが……渦巻いておる……!」

と、途端、怨念の奔流が襲いかかる。

鬼太郎父「く……!」

着物がどんどんポロポロになってゆく。また、まるでその怨念が棘でもまとっているかのように、鬼太郎父の皮膚に次々傷を作って行く。

それでも鬼太郎父は止まらない。

鬼太郎父M「く……。凄まじい圧じゃ……!」

歩進むごとに、身体が軋む……!」

降りて行く鬼太郎父。

残っている一本の槍と貫かれた髑髏。

鬼太郎父M「いづれ産まれ来る我が子よ。

——この怨念はあまりにも強い。いま僕がこの命の全てを使っても、全てを鎮めることはできぬかもしれん。じゃがお前なら、きつと……！」

どんどん落けて行く鬼太郎父。

爛々と赤い目だけが、意志を示し——。

鬼太郎父M「——不思議じゃな。愉快でならぬよ。痛みも苦しみも、どこかへ行つてしまふ……」

そして、笑っている鬼太郎父。

柱に手をかけ、槍に貫かれていた髑髏を取り上げると——。

鬼太郎父M「お前とお前の母と……そしてあの馬鹿が生きる未来を残せると思うだけで、僕は……！」

一気に、核になっていた心柱が崩れ、世界の環状列石そのものが崩壊する。

ブワッ！ と、一気に全ての怨念が暴れだし、渦巻く。

鬼太郎父「さあ来い！ すべての恨みもつものたちよ！ 僕が新たな依代じゃ！」

その声に呼応するように、グワツと鬼太郎父を渦が取り囲み——。

鬼太郎父「ぐ……」

怨念に苛まれ、その肉体がドロドロに溶け落ちて行く。

その中でも、赤い瞳だけが煌々と意志をたたえ——。

鬼太郎父「やはり無理……か……。すまぬが、

後は頼むぞ。我が子よ……」

その姿は、怨念に包まれて見えなくなり

——、暗転から。

○「現代へ」現在・窖の底

山田「うわああああ——っ！」

鍾乳洞を走る山田。

その山田を追う、狂骨。

と、見えてくる縦坑に飛び込む山田。

山田「……！」

鬼太郎父たちの戦いから七十年。

血桜は枯れ果て、窖の底は苔むしている（とか。経年感はお任せします）。

山田「ここは……」

しかし見回す間もなく、グワツと迫ってくる白い影——狂骨。

山田「ひいいいっ！ くっつ、くるなっ！」

ついに取り憑かれそうになったその瞬間

——。

鬼太郎（OFF）「霊毛ちゃんちゃんこ！」

バツとちゃんちゃんこで打ち払うのは、窖の上から飛び降りてきた鬼太郎で。

山田「……！」

猫娘「邪魔よ。退がつてなさい」

鬼太郎と同時に現れた猫娘が、山田を庇うように立ちはだかる。

山田「あ、あれはいったい……」

目玉親父「狂骨じゃよ」

!? と見ると、猫娘の肩（あるいは掌）に、目玉親父が。

に、目玉親父が。

山田「……！ め、目玉が喋った!?」

目玉親父「僕は鬼太郎の父じゃ。あの狂骨というのは、無惨に殺された者の怨念から産まれる妖怪なんじゃ」

山田「……！」

と、対峙している鬼太郎。

ぐわつと襲いかかってくる狂骨。

横つ飛びに避ける鬼太郎。

目玉親父「いまから七十年前、僕が鎮めることが出来ず、この場に残った怨念たち……。その最後のひとかけらじゃ……」

——と、鬼太郎と戦う狂骨。

鬼太郎「まだ人を襲うのか……。父さん」

目玉親父「……仕方なからう」

消せ、消滅させろと言外に言う鬼太郎父。

鬼太郎「リモコン下駄！」

かつての母の下駄が、狂骨を苛む。

——と、そのとき。

鬼太郎父「……！」

その狂骨が、ふいに涙を流しているかのように見える。

目玉親父「あの狂骨は、もしや……」

——と、鬼太郎、ちゃんちゃんこでその狂骨をぐるぐる巻きに拘束し——。

目玉親父「待つんじゃ鬼太郎!」

!? となる鬼太郎、

そしてオヤジ、その狂骨に語りかける。

目玉親父「もしやおぬし……時ちゃんか?」
瞬間——。

狂骨の姿は、時弥の幽霊となり——。

……! と見る鬼太郎、ねこ娘。

山田も、物陰にかくれつつ覗いている。

目玉親父「そうか……。お主が最後まで残ってしまったか。——そうじゃな。それほどまでに恨みと悲しみ……痛みが深かったのじゃからな……」

鬼太郎の掌に立ち、言うオヤジ。

目玉親父「……すまなかったのう、時ちゃん。

——あの時、僕は君を救えなかった」

時弥「……………」

目玉親父「じゃが……君のお陰で僕は子を得ることができたのじゃ。鬼太郎という。僕が言うのもなんじゃが、よい息子に育った……」

鬼太郎「時弥君、ゲゲゲの鬼太郎だ。君のことは、父さんから聞いている」

時弥「……………」

時弥の霊、黙って鬼太郎を見る。

目玉親父「のう、時ちゃん。あれから、長い刻が経った。科学は進み、生活は豊かにはなったが……残念ながら、ヒトも妖怪も、未だに苦しみつけておる……」

鬼太郎を示し。

目玉親父「この鬼太郎は、ヒトと妖怪の狭間に立つものとなった。いつか、あの日君が思い描いた未来へと近付くための……」
鬼太郎「約束するよ、時弥くん。君の分も、僕は自分に出来るだけのことをする……」

そこで時弥、ふうつと泣きそうな目になり、俯いて——。

時弥「あり……がと……。きたろ……」

……! と見る鬼太郎。

目玉親父「時ちゃんや。何か望みはあるかの。もしあったら言ってくれんか?」
すると時弥、やがてポツリと——。

時弥「わすれ……ないで……」

顔を上げ、鬼太郎に訴える。

時弥「ぼく……、ここにいた……よ……」

鬼太郎「わかった。忘れないよ」

優しく微笑む鬼太郎。

目玉親父「うむ。僕は忘れぬよ。ここにかつて村があり、そこに君がいたことを。そ

してその村で起こった全ての悲劇を……」
すると時弥、笑顔になり。

瞬間——。

キラキラと、狂骨の呪縛が解け、輝いて浄化されるその姿。

鬼太郎たち「……!」

時弥「さよなら……鬼太郎……」

そして、天に昇って行く。

その先には、沙代の幻が——。

目玉親父「……………」

そして一瞬、見上げる目玉親父、往時の鬼太郎父の姿になり——。

鬼太郎父「水木よ、ついに終わったよ。すべてが……」

光が消えると、すべては元に戻り。

——と、そこに声。

山田「この村で……何があったんですか?」

! と見る鬼太郎たち。

山田「鬼太郎くん。ぼくは、ずっと君に聞きたいことがあったんだ。——なぜ、君は人間を助けてくれるんだ?」

鬼太郎「……………」

山田「その理由が、この村での出来事だというなら……。教えてください! 僕が書き残し、必ず語り伝えます! ですから——」

その真摯な瞳に——。
鬼太郎、目玉親父に、何うように。

鬼太郎「父さん？」

すると目玉親父、ふっと笑い。

目玉親父「この村には、七十年前とたった一つだけ変わらぬものがあるのじゃよ」

山田「……は、はあ……？」

目玉親父「河原の温泉じゃ。——ようやく全てが終わった目出度い日、とつぷり湯に浸かりながらという趣向はどうじゃ？……ただし、長い長い物語になるが……」

山田「かまいません！ そのために僕はここまで来たんです！」

目玉親父「では語ろうかの」

目玉親父、彼方に思いを馳せるように。

目玉親父「濃とあの男がいかに出会い——」

× × ×

外は既に雨が止み、雲間から差す朝日が、半ば自然に還った村を照らし——。

目玉親父（OFF）「そして、この村で起こった、全てのことを——」

× × ×

そして、その光景が、昭和三十一年の、事件直後の村にO・L、し——。

【再び昭和三十一年】

○ 温泉街からの道

——の、途中に倒れている水木。

声（OFF）「誰か——！ 誰かいますか——」

たつたひとりで、周囲に人影はない。

——と、その水木の姿を地元の消防団（？）が警備隊みたいな人たちが見つけ。

声「誰かいるぞ！ こっちだ！」

駆け寄ってくる人々。

団員「しつかり！ しつかりしてください！」

ハッ……と目をさます水木。

置きあがつて、当たりを見回す。

水木「！ あの人はどうなりました!? 無事なんですか!?」

団員「あの人って……、いや、あなたは発見されたとき一人でした。他に、同行者がいるんですか？」

水木「そうです！ 彼女は——」

そこでハッとなる。

水木「彼女……？ いや……。僕は誰かとい

たのか？ 本当に……？」

頭を抱える水木。

水木「そもそもここはどこだ？僕はどうしてこんなところにいる……!?」

くっ……と顔を響め。

水木「何も思い出せない……！ 何があつたんだ!? なにもわからない、のに……」

なぜか、ぼろぼろと涙が溢れてくる。

水木「僕は、どうして……。どうしてこんな

に……悲しいんだ……」

○ エンドロール

エンドロールの音楽に乗せて、点描でその後。

× × ×

記憶を失った水木のもとに、約束通り、死期が迫った鬼太郎父と母が水木の元を訪ねて来る。

——その様子を、所々、この映画に合わせて矛盾しない範囲の原作のコマをそのまま引き写すことで点描し——。

× × ×

朽ちて死んでいるミイラ男。そして死んでいる鬼太郎母。

怯える水木。

× × ×

鬼太郎母のみ、墓に埋めてやる水木。

（エンドロールここまで）

そして、赤ん坊の泣き声がINし——。

○ 墓場

激しくなる鳴き声。

恐れるように、見つめる、水木。

——と、母親を埋めた場所の地面が蠢き、やがてそこから、赤ん坊の手が現れる。

水木「……！」

雷鳴と同時に——。

墓場から誕生する鬼太郎。

水木「墓穴から……赤ん坊が生まれた!!」

オギャーオギャーと泣き、水木のスソに
縋り付く赤ん坊だが――。

水木「くっ……来るな、来ないでくれ!」

思わず逃げ出す水木。

――と、落雷と雷鳴。

同時に、ガラリと石が崩れる音。

赤ん坊「ぎゃっ!」

!? と振り向くと、崩れた墓石から転
がった石の傍ら、目のあたりから血を流
して、いっそう激しく泣き出す。

水木「……!」

慌てて駆け寄り持ち上げると、赤ん坊は
左目を失っており――。

水木「目が……!」

赤ん坊「泣き続ける」

くっ、と見て。

水木「いや、この子は化け物の子だ。この子
を生かしておいたら、どんな災いが起こる
か……。ならばいっそ――」

頭上に抱え上げ、墓石に向かって投げつ
けようとするが――。

水木「いっそ……」

鬼太郎父の声「我が子を頼む。相棒よ……」

ハッ……となる水木。

水木「……」

そして、ゆっくりと抱え上げた赤ん坊を
降ろしてゆく。

その様子を、墓石の影から見つめている、
目玉親父。

水木はやがて、鬼太郎をしっかりと大切
そうに抱きしめて――。

（了）

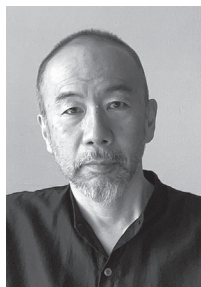
ほかげ

塚本晋也

〈脚本家略歴〉

塚本晋也（つかもと しんや）

1960年1月1日、東京生まれ。14歳で初めて8ミリカメラを手にする。87年『電柱小僧の冒険』でPFFグランプリ受賞。89年『鉄男』で劇場映画デビューと同時に、ローマ国際ファンタスティック映画祭グランプリ受賞。主な監督・脚本作品に、『東京フィスト』、『バレット・バレエ』、『双生児』、『六月の蛇』、『ヴァイタル』、『悪夢探偵』、『KOTOKO』、『野火』、『斬』など。製作、監督、脚本、撮影、照明、美術、編集などすべてに関与して作りあげる作品は、国内、海外で数多くの賞を受賞。俳優としても、監督作のほとんどに出演するほか、他監督の作品にも多く出演。『とらばいゆ』『クロエ』『溺れる人』『殺し屋1』で02年毎日映画コンクール男優助演賞を受賞。『野火』で15年、同コンクールで男優主演賞、『斬』で男優助演賞を受賞。その他に庵野秀明『シン・仮面ライダー』、『マイン・スコセッシ監督』、『沈黙』『サイレンス』など。他、ナレーターとしての仕事も多い。



監督…塚本晋也

製作…海獣シアター

配給…新日本映画社

〈スタッフ〉

製作・監督・撮影・編集

塚本晋也

助監督

照明

美術

MASAKO

音楽 石川忠

〈キャスト〉

女

テキ屋の男

戦争孤児

復員兵

中年

優しい男

趣里

森山未來

塚尾桜雅

河野宏紀

利重剛

大森立嗣

1 元居酒屋・中(朝)

数人しか座れないカウンター。ごく小さな店内。

奥が住居になっている。

全体が一度火に包まれ、焼け焦げた痕が広がっている。

奥の部屋に女が横になっている。

物音。

女、大義そうに目を覚まし、一瞥。

外から侵入して来た何かを見ているが、気だるくまた目をつむる。

外から足音が聞こえ、豪傑親父が飛び込んでくる。

親父、店内を見回す。荒い息。何かを探そうと動いて、家の中のものを手荒く扱った。

女と目が合う。

女の怒りの目。

豪傑親父、何かを言いたそうに女を見ているが、舌打ちして

と、出ていく。

女、重く起き上がる。

奥の部屋から出てくる。

見ると、カウンターの裏の隙間にひどく汚れた子供(さきほど確認した)が隠れて女を見上げている。

手に盗んできたらしい食べ物。(口をもぐもぐ)

子供、はつと我に帰って、外に飛び出していく。その時店のわずかな食べ物を盗んだ。

女 「舌打ち」

× × ×

(2)

夕方。
住居に女が寝転んでいると、人の良さそうな中年が入ってくる。

中年 「じゃあ、これね」
とカウンターの奥の棚に、焼酎のビンを置く。

女 「(体を起こしつつ) …いつもすいませ

ん」
中年 「こんなでもなかなか手に入らなくて

さ。へんなのきてないよね」
女 「(上り口に座り土間に足を下ろし) …」

中年 「いや、大丈夫そうなやつしか声かけてないけど、ほら、わからないから」

女、金を中年に渡す。

中年、それを受けとりざま、女をむさばるように抱きつく。

女、不快だが、抵抗しない。
中年、住居に入るのもどかしく、店内

で服のまま女と交わる。

女をカウンターの中に押しやり、汗を滲ませて動く。

中年、果てそうところで女から離れ、女をカウンターの陰にしゃがませ、自分の股間に女の頭を持ってゆき、果てる。

中年、荒い息で身繕いをする、そのま

ま出ていく。
カウンターの陰にいる女。少しして、カ

ウンターに手をのせてくる。
タイトル。「ほかけ」

× × ×

(3)

夜。
店の入り口が開いている。
ひとりの復員兵が来て中を見廻す。

ゆつくり入ってくる。
奥の住居にいる女を見てどきつとする。

女、復員兵を見ている。
復員兵、固唾を呑む。

女、気怠く起き、店内に来て、中年の男が置いていった焼酎を手にし、コップにつぐとカウンターに置く。

女は何も言わないが、復員兵、コップを手にして、どこで飲むのかわからず女を見る。

女は、復員兵の方を見ているのかさえわ

女 「じゃ、それ飲んだら上がってください」

と無愛想に奥の部屋に戻っていく。

復員兵、女の脚が目に入り、戸惑う。

復員兵、焼酎のコップをどうするか迷っ

て、カウンターに置き、奥の部屋に向く。

部屋の奥は闇。

ゆっくりと上り口に足をかける。軋む音。

(4)

部屋の暗闇に入ると、敷かれた布団の向こうに女が正座している。

復員兵、小さな明かりで浮かび上がる女の空ろな顔に見入ってしまう。

ゆっくり屈む。

女 「お金、先に頂戴します」

復員兵 「あ、はい、あの…お酒代は？」

女 「入ってます」

復員兵 「はい…」

と金を出す。渡す。

女 「じゃあ、脱いでください(布団を捲る)」

復員兵、ぼうっとしている。

女、服を脱ぎ始める

復員兵 「…あの、もうちょっとだけ、酒、いいですか？」

女 「…」

(5)

復員兵、店内で焼酎に少し口をつける。

震えるように。

(6)

奥の部屋。復員兵、戻ってくる。

正座する女の前に座るが、そのままどうすることもできない。

そのうち睡魔が襲ってくる。

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

復員兵、女をじっと見つめている。

女 「…」

復員兵 「…では…」

女 「朝ごはん、ありますよ」

復員兵 「え？」

女 「朝ごはん、ありますよ」

復員兵 「…お金、全部使い切っちゃったんで…」

女 「(カウンターに促す)」

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

(9)

女、復員兵、カウンター越しにそれぞれ

ごく質素な朝ごはん。

あたたかそうな湯気だけでご馳走に感ずる。

復員兵 「あの…」

女 「? (しかし何かに気づく)」

復員兵、振り向くと冒頭の子供が壁の隙

間から覗いている。

急いで逃げてゆく子供。

女 「野良犬…。全部仕舞つとかないとだめだな。え？」

復員兵 「…」

女 「…」

復員兵 「今日の夜も、来ていいですか」

女 「…? お金ないんでしょ」

復員兵 「作ってきます」

女「……」

復員兵「……(何か言おうとすると)」

女「どうぞ」

復員兵「……」

女「どうぞ」

復員兵、食事を平げ、立ち上がる。

復員兵「ごちそうさまでした」

と出てゆく。

× × ×

(10)

夕方。

女、居住空間でゆっくり服を着替えていると、子供が店の隙間から覗いて見ているのに気づく。

女「……」

追い払おうとすると、隙間から顔を離し、すぐに入り口から入ってきてカウンターに食材を置く。

女「……?」

子供「……」

女「……」

子供、復員兵が座った席に座る。

女「……」

子供「(食材を手)」お金より価値あるんだろ? やるよ。そしたら俺も客だろ」

女「……。(こはあんだのくるところじゃないんだよ。これ持って出ていきな)」

子供、席から動かない。

そこに復員兵、来る。

子供「(復員兵に気づくが席から動かない)」

復員兵「(子供を見る)」

子供「(復員兵の視線を感じるが、頑なに席から動かない)」

復員兵「(子供に)俺、今日ここにきていつて言われてんだよ」

子供「(席から動かない)」

復員兵「(子供の持ってきた食材を見る)」

子供、カウンターに置いた食材を抱き抱えるように守る。

復員兵「(女に) お金、作れませんでした。明日こそ今日の分と合わせて作ってきます。僕もいさせてください」

子供「(え)」

× × ×

(11)

夜。

暗い。

女は居住空間に。復員兵と子供は店内の思い思いの場所にいる。

じつとして動かない。

やがて、復員兵、荷物から飯、こうを取り出し、蓋を開け、工夫した材料で火を灯す。

灯りを子供の近くに持っていく、

復員兵「これ、もらうな」

子供の持ってきた食材を手にしてカウンターに。

復員兵「ちよつとお借りします」

女「……?」

復員兵、カウンター内に入り、子供の食材で調理を始める。

子供・女「……」

× × ×

(12)

復員兵が二人分の料理をカウンターに置く。

復員兵、子供に食べるよう促す。

復員兵「食べていいぞ」

子供、カウンターの料理にむしゃぶりつき、がつがつ食べる。

復員兵「(女に) ちよつと作らせてもらいました」

女、ゆっくり上がり口まで来る。

復員兵「どうぞ。食べてください」

女「(子供の食べているものを示し) それ、どこからかつぱらつて来た?」

子供、答えず、がつがつ食べ続ける。

女「(舌打ち)」

復員兵、子供の隣に座り、荷物から教科書を出す。

復員兵「(子供に) お前、何年生だい?」

子供、答えず、がつがつ食べ続ける。

女「(舌打ち)」

復員兵、子供の隣に座り、荷物から教科書を出す。

復員兵「(子供に) お前、何年生だい?」

子供、答えず、がつがつ食べ続ける。

女「(舌打ち)」

復員兵、子供の隣に座り、荷物から教科書を出す。

子供「……」

復員兵「(教科書を示し)これ、わかるかい?」

子供「そんなもん、ごめんこうむる、みたいなことを言っているのだから、口がいつばいでわからない」

女「……」

復員兵「(女に)出征前は教師をやっていたんですけど、これ持っていけば、生き残ってまた学校に戻る気がしてお守りにしたんです。(子供に)これ、わかるか?」

復員兵「ここには、9と0が入るんだよ」

子供、食事を邪魔するなとばかりにいやるが、やがて、

子供「なんで?」

復員兵、説明する。

復員兵「ここに4つの数字があるだろ。これはそれぞれ上の数字と下の数字、上の数字と下の数字を合わせたのが、ここに入る答えになるんだよ。だから、ここには1、ここには7が入るんだよ」

子供「なんで?」

女、関心ないふりをしているが、ふたりをじっと見てしまふ。

復員兵「たとえば、ここにりんごが一個あるとするだろ。これを合わせると、1個、2個になるんだよ」

子供「なんで?」

× × ×

(13) 土間で、子供の服を剥がし、濡れた布巾で子供の体をこしこし拭いていく女。

女「きつたないなあ。はい、後ろ向いて後ろ。はい、まだまだまだ。こっち、顔が汚い。上向いて。上。(舌打ち)きつたないなあ。取れないなあ。はい、よし」

子供「よし!」

子供、拭き終わるやいなや、居住空間の奥に駆け上がるようにする。

女「そっち行くな!」

子供、びくつと止まる。

居住空間の奥に焼け焦げた襖がある。まだ奥に部屋があるのだ。

三人、沈黙。

× × ×

(14) 夜。居住空間。

三人で布団に入る準備。

子供は下着姿。復員兵は軍服を脱いで。

女は普通の服のまま。

× × ×

(15) 夜中。

三人で川の字になって寝ている。子供が

真ん中に。

(子供、カバンを下げたまま寝ている) 皆、目がうつすら開いている。

× × ×

(16) 朝。

復員兵、子供、入り口に。

復員兵「今日は金作ってきます。昨夜の分とだから……」

女「?」

復員兵「また来させてください」

子供「(復員兵を見る)」

復員兵「お前も頼むか」

子供「(女を見る)」

女「(表情を表さない)」

復員兵、一礼して、急いで去る。

子供、女の顔を見ると、急いで走り出ていく。

女「……」

× × ×

(17) 昼。

女、奥の居住空間にだらしなく横になっている。

体を起こす。がまた横になってしまふ。

× × ×

(18)

午後。

女、もそつと起き上がる。

奥の部屋から降りてくる。

置かれた教科書を見て、微かに笑を浮かべる。

その笑みもすうつと消えていく。

× × ×

(19)

夜。

カウンターに、復員兵と子供。

子供は、がつがつ女の作ったものを食べている。

復員兵、うつ伏している。

子供「おかわりっ」

女「ないよ」

復員兵の前の食事、手つかず。

女「(復員兵に) 早く食べてください。片付かないから」

復員兵「(主に子供に) すいません、いただきます」

と遠慮がちに口に運ぶ。腹が空きすぎて

いて震える。

少し食べて子供に食事を差し出す。

復員兵「いいぞ」

子供、遠慮なくガツガツ食べる。

復員兵「(女を見て、姿勢を正し) いや、明日は…明日は絶対…(頭を下げる)」

×

(20)

夜。

三人、布団に入る。

子供、寝るときも、肩から下げているカバンを離さない。

女「ねえ、何が入ってるの? そんな」

子供「答えず、布団に潜る」

女「(ち)」

×

(21)

夜中。

三人、寝ている。

が、それぞれの苦悶がある。

女は、悪い夢を見ているのか寝苦しそう。

子供も寝汗をかいている。

復員兵は、目を開いたまま虚空を見ている。眠れないのだ。

そのうち子供がうなされ始める。

復員兵、子供を見る。

復員兵「おい、大丈夫か?」

子供があまりに苦しうなので、復員兵、子供を起こそうとする。

子供、目覚めない。唸り声を上げ始める。

女も気付く。

ふたりで子供を起こそうとする。

女「大丈夫?」

復員兵「大丈夫だぞ、怖くないぞ」

子供、目覚めるが唇を震わせている。

復員兵と女、子供をさする。

やがて、子供、また寝息を立てる。

復員兵「全部燃えちまつてたからな。よくこいつは生き残ったよ」

女「(復員兵を見る)」

復員兵「外地から帰ってきたら、俺んちも燃えてました…。親父もお袋も…みんななくなっちゃった…。どっかに逃げたんならいいんだけど…」

女「……」

復員兵「焼け野原をふらふらしていたら、優しそうな顔のおっさんが、ここにすれば優しくしてくれる人がいるって…。やさしいって、どういうやさしさかと思ったけど、いや、大体察しはついてたけど…。ここで、久しぶりに眠れました…ぐっすり…。もうほんとぐっすり…。ほんとに久しぶりで…。とてもぐっすり…」

女「……」

復員兵「ここはよく燃え残りましたね…。皆さんは…(と言おうとして黙る)」

女、悄然と床を見ている。

復員兵、喋るのをやめる。

× × ×

(22)

朝。店內。

子供は元の元氣を取り戻している。

復員兵「じゃあ、今日こそ。行つてきます
(とお辭儀する)」

子供「よしっ」

子供、我先に走り出す。

復員兵「あ」

女「私もぼちぼち働かないとね。あの子の
持つてくるものだけじゃあ…」

復員兵「……」

× × ×

(23)

女、ひとり。

夕方。

子供、勢いよく歸つてくる。収穫の食料
を持つて。

子供「ただいまっ」

女「お帰り(思わず答えてしまった)」

子供「よし食べようっ」

少しして、女、外を氣にして見る。

子供、それに氣づく。

子供「あのおじさん…」

女「え？」

子供「あの人、仕事探してないよ。出かけた
あと、あの人、見た。さっき歸りに通つた
ら同じところにじっとしてたよ。じーっと
しててぜんぜん動いてなかったよ」

女「……」

× × ×

(24)

夕方から夜に移ろつていく。

子供は店の端でひとり遊びをしている。

物音がする。復員兵が戻った。

女、食事を作る手を休めるが、やがて手
を動かす。

復員兵、じっと入り口に立つている。

× × ×

(25)

夜。奥の部屋。

復員兵「よし、今度みんなで遠足行こう」

女「……」

子供「どこ行くの？」

復員兵「どこがいいかな？　まず水筒にお茶
入れて、お弁当持つて、綺麗なところ行こ
う」

子供「どこ行く？」

復員兵「どこ行く？」

子供「動物園行きたい」

復員兵「動物園行か。行く？」

子供「うん」

復員兵「よし、動物園行こう」

子供「よし」

復員兵「じゃ、席ついでください」

子供「よし」

復員兵「発車しまーす」

ここで、復員兵が率先して遠足こつこを
やる。

復員兵「はい、到着しましたー。はい、じゃ、
ついて来てください。僕が先頭で。危ない
ので。1、2、1、2…あ、こつちは行き
止まりです。戻つてください。1、2…下
汚れるといけないからこれひいて。この上
で3人で乗つて」

子供「よし、じゃ、おにぎり作ろう。まだ
作つてないから」

復員兵「どこで作る？　3人で作る？」

子供「よし、3人で作ろう。おにぎり作ろう」

復員兵 子供「にぎにぎにぎ…」

子供「完成っ」

復員兵「完成っ」

子供「あれ、何入れたつけな。忘れちゃっ
た」

復員兵「食べましよう、みんなで」

子供「いただきます」

復員兵「いただきます」

子供「おいしい」

復員兵「おいしいね。(アグ)おいしい。あ
あ、食べたな」

おざなりにだが、形だけ参加するようにな
る女。架空のおにぎりを食べる仕草。
やがて、本当の家族のような、至福の時

間になる。

復員兵「じゃ、夜になったから、ほら、そこで焚き火」

子供「焚き火？」

復員兵「焚き火しよう、3人で」

復員兵 子供「到着」

復員兵「焚き火だ、焚き火。あつたかい」

外で、銃声のような鋭い音がする。

復員兵、びくつと大きく反応する。

音と、大きく反応した復員兵に驚く女と子供。

復員兵「びくくりした。大きな音出したらだめだよ」

復員兵の額に脂汗が浮いている。

外で喧嘩でも起きているのか、物が壊れる大きな音がする。

復員兵、身をすくめて、じっと耐えているように目をつぶっている。

女「ヤミの方がいろいろ物騒で、ときどきあんな音が聞こえてくるのよ……」

復員兵、汗を吹き出させている。

女・子供「……」

× × ×

(26)

夜中。

女、子供、それぞれの寝苦しさを、ふと目を覚ます。

と、復員兵、あぐらをかいて酒を飲んでいる。

一升瓶からコップに酒を注いで。

女「……」

復員兵、泥酔に入っている。

復員兵「僕に、こを教えてくれた人は、あれは誰ですか？ あんたも、外で体売ってたんですか？ それとも最初からここでやつてたんですか？ あのおっさんに言われて。あのおっさんともやつたんですか」

女「……明日。朝。起きたらすぐ出て行け。金は日数分作ってもってこい。そしたら二度と来るな」

と横になる。

復員兵、淀んだ目で虚空を見ている。

口から漏れる息が恐ろしい気な音を立てている。

女「……」

外から、また銃声のような音がして、怒号が飛び交う。

復員兵、突然、身を竦ませて、あたりをうかがう。

女「……？」

また外から大きな音。

ヤクザたちの怒号。

復員兵、体がきつく反射する。

しばらくじっとして居るが、体を動かし、

女に近づいてくる。

そして女を掴む。

女、すくむ。

復員兵「今やらせてくれ」

女「え？」

復員兵、女に抱きついていく。

女「ちよつと！ 子供が……」

復員兵、さらに抱きついていく。

女、抗うが、復員兵、組みついてゆき、格闘技のようになる。

すさまじい男と女の蠢き。

女「やめて」

女、服を引き剥がれそうになるが、全裸に至らず。

抵抗する。

二人の肉体が静かで凄まじい攻防を繰り返す。

汗が噴き出し、ふたり、溺れるように体を動かす。

復員兵、もどかしがつて、いきなり女を殴る。

女、驚いて復員兵を見ている。

復員兵、女を見て驚きの表情。

復員兵「あ？ 何で？ 何でこんなとこいんだよ？」

女「……」

女、震えて復員兵を見ている。鼻血が流

れている。

周囲から腐ったものの匂いが立ち込めているよう。

復員兵「何で、何で、こんなところにいるんだよ。うわあうわあああ！」

復員兵、腰の銃剣を探す仕草。ない。

女、それを見てぞっとする。

子供、目覚めている。

復員兵、子供に気づく。

復員兵「ぞっとしている」何だよ、その目は。え、何だよ、その目は！」

悲鳴を上げて子供の額を鷲掴む。

女「やめてっ……やめてっ」

復員兵、子供を鷲掴んだまま引きずり回し、さらに悲鳴を上げると、ぶん投げる。

子供、窓を破って、外に放り出され落下。

女「悲鳴」

復員兵、女を見る。

女、逃げる。がすぐに捕まる。体を激しく柱に打ち付けられる。

ぶん投げられて土間に落下。

地面に叩きつけられる。

復員兵、猛猛に飛び降りてくる。

刹那。入り口の戸が開き、子供の手にしたガラス瓶が復員兵の頭に叩きつけられ粉々に散る。

復員兵「痛っ……いててて……」

と転がり回る。

その後ろ頭に冷たい鉄の物が突きつけられる。

銃だ。

子供が銃を差し出しているのだ。子供は頭から血を流している。

ずっと肩から下げていた鞆がすぼんでいく。ここに入っていたのだ。

復員兵「動けない」

子供、気が遠くなりかけながら、そのまま復員兵を外に追いやっていく。

女、起き上がるうとして、意識が遠のく。

× × ×

(27)

朝。

女、目を覚ますと、子供もそばで倒れて気を失っている。

子供、傷だらけ。

女、もう一度横になろうとするが、怪我を負っている子供を見て、起き上がり、

子供を介抱してやる。

子供、目を覚ます。じつと女を見る。

女「あいつは？」

子供「ずっとあつちで……座り込んで動かなくなった」

女「……。これ、どこで手に入れた？」

と子供が離さない鞆を指す。

女「いつときも離さないと思ったら」

子供「何も話さない」

女「これは、奥にしまっとくよ。(ね)」

と鞆を取り上げようとす。

子供、鞆を掴む。

女、鞆から銃を出し、子供を睨みつけながら、カウンターの向こう側に行き、銃を棚に入れる。

ふたり、またゆっくり倒れゆく。

× × ×

(28)

夜。奥の部屋。

女、子供、寝ている。

それぞれの寝苦しき。

子供がおこりを起こしたように呻き、震えだす。

女、目覚めて、子供を介抱する。

女もぎりぎりのバランスでいる。

× × ×

(29)

女、緩慢な動きで、割れた窓に応急処置を施している。

子供は寝ている。

× × ×

(30)

店で、割れたビンの破片を集めている女。

戸が開く。

冒頭の人の良さそうな中年だ。

中年「ごめん、ごめん、忙しくなっちゃって全然声かけられなかった。大丈夫だ（った？）……」

中年、女の顔を見て黙る。

女「少し……休ませてください……」

中年「（女の様子に二の句が告げず）……ああ……じゃあ、これ……」

と焼酎を差し出す。

中年「また……来るね」と足早に去る。

× × ×

(31)

女、コップに水を汲んで、子供に持って行つてやる。

子供も起き上がるようになる。

× × ×

(32)

子供の傷がだいぶ落ち着いてくる。

朝、コップに水が注がれる。注いでいるのは子供だ。

それを、居住空間の隅にいる女に持っていく。

女、俯き加減に虚空の一点を見つめて寂しそうにしている。

子供「……」

女「（気づいて）あ、ありがとう」

と水を受け取り、

女「坊や、少しの間ここにいます？ 用心棒になってくれる？」

子供、笑顔が浮かび、棚から銃を取り出し、女に擦り寄る。

女、子供に手を回し、笑う。

子供、銃を持ったまま、顔や体を抱き寄せられ嬉しそう。

子供「銃をしっかりと握る」

女「（笑って）一緒にいてくれるだけでいいんだよ。稼ぐのはそれぞれでやろう。でも盗みはだめだよ。いい？ 店を手伝うんだよ、手が足りてないんだから。あとこれは簡単にさわるらないこと」

と銃を元の棚に戻す。

女「今日から私は昼働く。夜は私と坊やの時間だよ」

× × ×

(33)

昼。

女、カウンターを拭いている。

戸を開けて、子供が入ってくる。

女「何よ、どうしたの？ 働きに行つたんじゃないの？」

子供の後ろから、初老の男が入ってくる。

女「？」

初老の男「坊やが、ここのお店は美味しい」

て紹介してくれて……」

女「（事態を呑み込み）ああ、あの、ちょっと……」

女、子供を初老の男から離れたところに連れ、

女「（子供に小声で）ありがとう。でも、あなたは違う仕事をして。昼の間はお互い忘れよう。夜が家族だ。ね。いいかい？ 分かった？」

子供「（うなづく）」

女「あんた店の手伝いできてんの？」

子供「（うなづく）」

女「ほんとだね。よし、ならそうしよう」

× × ×

(34)

夜。

女、カウンターの中で晩飯の下準備をしている。が材料もなく、緩慢な動き。

子供、帰ってくる。

女「あ、お帰り。遅かったね。大丈夫？」

子供、黙っている。

女「で、ちゃんと働いてるの？」

子供「黙っている」

女「悪さはつかりしたから、どこも働かせてくれないでしょう」

女、心配のあまり泣きそうになってくる。すると子供、食べ物を出す。

女 「え、これ。働いたの？ 盗んだんじゃない

なくて……？ 本当？……すごいじゃん。ほんとうにちゃんとした仕事なんだね」

子供 「頷く」

女 「急に笑顔。そうか。ねえ」

子供 「…」

女 「ぼうやのお嫁さんに……してくれる？」

子供 「嬉しそうにはにかむ」

× × ×

(35)

夜。奥の部屋。

子供、復員兵が置いていった教科書で勉強をしている。

女も付き合っている。

子供 「9に8足したら、もともと9個あって、それから8個足すから、17になるの」

女 「復員兵が残した教科書に目を落としている」

女 「え、ああ、何で？ 教えて」

子供は屈託なく勉強している。

子供 「じゃあ……8に5足したら。9、10、11、

12、13。だから正解は、13（女に教える）」

女 「ああ、そうか。え？ なんで？」

勉強するふたり。

女 「坊や」

子供 「？」

女 「ずっと私と一緒にいてくれるの？」

子供 「頷く」

女 「ぼうや」

子供 「？」

女 「…」

子供 「…」

女 「子供の服を見て」 ボタン取れそう

女、立ち上がると、今まで開けたことのない、なかった襦を開けて、入っていく。

子供 「……」

女 「坊や、（裁縫箱を取り出し）こっちはなさない」

子供、襦の前に立つが入れない。

女 「ほら」

子供、遠慮がちに入る。

と、そこは、もう一つの小さな居間で、他の場所と違いほとんど焼け焦けていない。

元の壁の色で明るく見える。

女 「脱いで。ボタンつけるから」

子供、言われるまま、服を脱ぐ。

小机の上に軍服姿の男の写真。その前のお碗に少量の白飯。その横に小さなお碗と白飯。

× × ×

(36)

女と子供の日常の断片集。夜と朝に限られるが。

大体のことは居間で。もう一つの明るい部屋でも。

子供に新しい服を作っている女。（旦那の服を改造）

水道から垂れる水が容器に溜まるのを頬杖で待つ二人。

食事を一緒にする二人。

勉強をする二人。

子供の体を拭いてやる女。

寝る準備をする二人。女は初めて寝巻きを着る。

などなど。

子供の服が完成する。

× × ×

(37)

朝。

子供、新しい服を着て店内に飛び出す。

子供 「行ってきます」

女 「（奥の部屋から）はい、いってらっしゃい」

女の顔に明るい日差しがあたる。

× × ×

(38)

夜。

女、無然。

戸が開き、子供が帰ってくる。

女 「遅いよ！ 心配したじゃ……」

子供、顔から血を流している。

女 「どうしたのこの顔。あんたまだ盗み働いてるのね。え、どうなの？ そうなんだね!? ちゃんと働いてたらこんな傷作るわけないでしょう! この店でやった? 謝りに行くよ。え? この店?」

子供 「ちゃんと働いた」
女 「え?」

子供 「田舎で集めた物、列車で窓から放るんだよ。調べられるから。俺らは線路の下で待つて、列車が通ったとき窓から荷物が投げられて。それを急いで拾ってお店に運ぶんだよ。でもおっかないお兄さんたちに見つかつて取られたの。そのときぶたれた」

女 「…そんな危ないことを…。え、お店じゃ盗んではかりだったから、どこでも働かせてくれないんでしょう」

子供 「だから盗んだんじゃないや」

女 「……。じゃあこれからどうすんの?」

子供 「……」

女 「少し離れたところで、靴磨きとかする?」

子供 「…おじさんが声かけてくれた」

女 「え?」

子供 「いい仕事あるって」

女 「え? どんな? え? 誰がよ?」

子供 「…」

女 「え?」

子供 「わかんないけど、信用できるおじさんだった」

女 「どうしてわかるのよ、前からの知り合いなの?」

子供 「(首を横に振り) さっき会った。おっかないお兄さんたちを追っ払ってくれた」

女 「え? で、それ、どんな仕事なの?」

子供 「拳銃持つてると言ったら、それ持つてきなつて」

女 「! そんなのいい仕事のわけないでしょう! 何よ! 拳銃持つてこいつて! もしかしたら、拳銃取られて、撃たれて、はい、それでおしまい! かもしれないじゃないの!」

子供 「違うよ。そんな人じゃないよ」

女 「なんでわかるのよ! なんてそんなことが言えるのよ! (興奮を抑え) いい? 私はその仕事いやな予感がする。それはやつてもらいたくない。危ないことはやめて欲しい」

子供 「……」

女 「ずっと一緒にいてくれるっていったよね」

子供 「1週間くらい行っただけだよ。帰ってくるよ」

女 「1週間……! 1週間も。そんなに! いやだ。いやだよ。ばか! ばかばか!」

子供 「約束したから、行かないとその人困るよ」

女 「じゃあ今すぐ断つてきて。すぐに! すぐに断つて安心させて!」

子供、すぐそこ出ていく。

女、気持ちを抑えようと髪をかき上げると、ガラスに映った自分の顔を見て、

女 「?」

何かを自分の顔の中に見つける。

急いで奥の部屋に上がり、鏡を覗き込む。

女 「……!」

女の顔が蒼白になる。

冒頭のやさしそうな中年がくる。

いつもの場所に焼酎を置く。

中年「昼だけだと、やっぱりあんまり良さそうなの捕まんないねえ。じゃあ、いつものこれ、ここ置いとくから。(奥の部屋の女の異変に気づき) あれ?」

中年、女に近づいていく。

中年「どうした?」

女 「……」

中年、黙って背中を見せている女を振り向かせる。

しかし、まだ異変に気づかない。

中年、女の顔をよく見る。

すると顔色が変わる。

中年「え？ あんた…まさか…」

(女の家をカメラ徘徊。窓枠の木の表面のざらつきが、空襲で焼け落ちたミニチュアの廃墟に見える。連なる廃墟)

× × ×

(39)

同日。夜。

子供、帰ってくる。

入り口に止まったままなかなか中まで入ってこようとしないが、ゆつくり上がり口のところまで行く。

と居住空間のさらにもう一つの部屋の襖

が少し開き、中から鋭い女の声。

女の声「ほうや…？」

子供「……」

女の声「断ってきた？」

子供「…」

女の声「断ったの!？」

子供「…うん…」

女の声「…そう…それならよかった…」

子供、近づこうとする。

女の声「こないで!」

子供「……」

女の声「いい？ 坊やとはこれまでよ」

子供「(え?)」

女の声「いい？ すぐに出てって。荷物はそこに置いてあるから。それ持つてすぐに出てって」

子供、近づこうとする。

女の声「嫌いになったの! 坊やのこと、もう好きじゃないのよ。私の本当の子供は…いい子だったのよ。その子のお父さんも外国の戦争から帰ってこなかった。みんなとつてもやさしくて、頭がよくて落ち着いて、あんたみたいじゃなかったのよ!」

子供、後退り、袋に入れて置いてある少ない荷物を持つて去ろうとする。

気づいて、棚から拳銃を取り出す。鞆に袋と銃を入れ、出ていく。

40 闇

汽笛が鳴る。

41 田園 1

夕方。

駅近くの様子。

立ち小便をしている子供とテキ屋の男。

テキ屋の男、終え、向こうに腰を下ろしに行く。

子供はなかなか終わらない。

テキ屋の男「お前、終わんねえな。子供のくせにとこにそんなたまってんだ? え?」

子供、早く終わらせたいが終わらない。テキ屋の男「あれ持つてきたか?」

子供、小便をしながら、肩からかけている鞆を示す。

小便をしながら開けようとする。

テキ屋の男「いいよ。見つからないようにしまつとけ。それより早く小便すませろ」

42 田園 2

夜。

テキ屋の男、田んぼから果物を盗んでいる。

右腕が動かず、左手で。

テキ屋「最後の一本は、こりゃダメだな」

見張っている子供。

鞆を開け、銃があるのを確かめ、女が用意した袋の中も見る。

一緒に生活したときの少々のものと復員兵が置いていった教科書が入っている。

そうつと袋を閉じ、鞆も閉める。

43 田園 3

昼。

テキ屋の男、子供、歩いている。

テキ屋の男「いやあ、気持ちいいなあ、やっぱり空気が違うわ」

子供、暗い顔でついてゆく。

44 川

昼。

子供、川辺に。

半裸のテキ屋の男、川に手を突っ込んで魚を獲り奇声を上げる。

左手だけで、見事な手捌き。

テキ屋「(子供に投げ) しつかり取れよ。」

しつかり取れ取れ」

テキ屋の男「もう一匹いくからな」

子供「あのおお！」

テキ屋の男「なに？」

子供「拳銃使って……」

テキ屋の男「ばかやろう。しーしーしー」

子供「拳銃を使って強盗するんですか？

それを東京で売るんですか？」

テキ屋の男「あ？ 仕事の話か。あとあと」

と裸で魚と取っ組み合う。

× × ×

少し時間経過。

子供、食べ尽くした魚の骨を舐めている。

テキ屋の男「おい、いつまで骨しゃぶってんだ、いくぞ」

子供、慌てて立ち上がる。

焚き火の後。魚を焼いて食べたのだ。

子供「あ……」

テキ屋の男、聞こえてない。服を着てい

る。

子供「どこに行くんですか？」

テキ屋の男「あ？ (じっと子供の顔を見ながら準備の手を休めない)」

子供「……」

テキ屋の男「……」

子供「……」

45 何処か馬小屋のような場所

夜。

テキ屋の男、子供寝ている。

子供、震えだす。

うなされる子供。

見ているテキ屋の男。

46 田園 4

昼。

広い風景の中をいく、子供とテキ屋。

47 田園 5

昼。

テキ屋の男、行く。

後ろを、離れて子供がとぼとぼついてく

る。

テキ屋の男「振り返って」心配すんな。別に

お前を獲って食いやしねえからよ」

子供「……」

向こうで泣き喚いている子供がいる。

向こうの子供「痛いよ、痛いよ」

農家1の前で、二人の大人が、子供を間

に何か話し合っている。

向こうの子供「痛いよ、痛いよ」

テキ屋の男「あ？ 何やってんだろ？」

子供「……」

テキ屋の男「様子を見て」ああ、さらって

きたガキを売り捌いてんのか。農家でこき

使われてこれからたいへんだ、(子供に)

なあ」

え？ となる子供。

テキ屋の男「(笑う)」

と歩きだす。

子供、ついていくか迷い後ろを見る。

また顔を戻し、とりあえず遅れてついて

いく。

48 神社・裏

夜。

子供、テキ屋の男、寝ている。

子供、そうつと起き上がる。

テキ屋の男を覗き込み、いびきをかいて

いるのを確認すると、荷物を抱え、その

場から離れようとする。

と、ううう、という鳴咽が聞こえる。

子供、びくっと止まり、ゆっくり振り向

くと、テキ屋の男が寝ながら、夢を見ているのか嗚咽を漏らして震えている。じっと見る子供。

49 農家2の前

昼。

歩くテキ屋の男と子供。

農家1の庭前をテキ屋の男が通り過ぎる。子供も通り過ぎようとして庭に何かがいるのに気づく。

農家の離れに、掘建て小屋があり、その窓の隙間から若い男の顔が見える。明らかに隔離されているとわかる。

若い男は恐怖でひきつった顔をして虚空を見ている。

子供、ぞっとする。

母家から中年の女が出てくる。

座敷牢の男、引つ込む。

中年の女、窓のへりに食べ物を置き、足早に母家に戻ろうとすると、いきなり中から手首を掴まれる。

恐ろしい表情の座敷牢の男の顔が見える。中年の女「(悲鳴!)」

手を振り払おうとするが払い切れない。

座敷牢の男「お母さん、屋根の上見てくれませんでしたか? 子供たちがいるんです。たくさんいるんです」

中年の女「何言ってるんだ、お前」
座敷牢の男「走り回って。屋根がそのうちに落ちてきてしまいます」

中年の女、恐怖で陰惨な様子になるが、ようやく振り切り、母家に逃げ戻る。

子供、固唾を呑んで見ている。とテキ屋の男も戻って見ていた。

テキ屋の男、何を思ったか、庭にすかさずか入っていき、離れの小屋に近づいていく。

子供「…(息を飲む)」

テキ屋の男、小屋の窓を覗く。

座敷牢の男「誰だ、あんた」

座敷牢の男が凶暴な顔でテキ屋の男を睨んでいる。

テキ屋の男、窓にさらに顔を近づける。

何か座敷牢の男に話しかけている。

すると座敷牢の男の顔から凶暴さがみるみる溶けて消え、泣いているような顔になり、テキ屋の男を見る。

テキ屋の男、窓に左手を差込み、座敷牢の男の頬に手をやり、目をつむる。

座敷牢の男、項垂れる。

ひとしきりして、テキ屋の男、子供の元へ戻ってくる。

座敷牢の男「あんたっ、あんた!」

テキ屋の男、そのまま歩いていく。

子供、慌ててついてゆく。
子供「知ってる人?」
テキ屋の男「いや」

50 田園6

夜。(あるいは夕)

テキ屋の男、子供。

焚き火。獲った野菜を焼いている。

テキ屋の男、炎を見つめて黙っている。

テキ屋の男「さっきみたいなやつがたつさんいたんだよ、俺の周りに」

子供「……」

テキ屋の男「さっきのやつにはよ、俺がこれからやりにいくことを教えてやったんだ」

子供「……」

テキ屋の男「みんなおもしろいやつらばっかりだったなあ。ははははは。(思い出して)」

はははははははははは。ばっかじゃねえの。はははははははははは

子供、炎に照らされるテキ屋の男の顔を見ている。

51 川べり

昼。

テキ屋の男、子供、やってくる。

テキ屋「おい、チビ、銃出してしろ」

テキ屋の男「これ、どうやって手に入れたん

だ?」

子供「…落ちてた…」

テキ屋の男「道にか?」

子供「言い淀むが、テキ屋の男の目は嘘をつくことが許されない」人が倒れてて、その手にくっついてた。水溜りに倒れてた」

子供、鞆から銃を出す。銃の周りが川の反射で眩しい。

テキ屋の男「使ったことあるのか」

子供「首を振る」

テキ屋の男「……」

テキ屋の男、銃を貸せというふうに手を伸ばす。

子供、ゆっくり、差し出す。

テキ屋の男、銃を手にし、見続ける。

子供「……」

テキ屋の男「こんなので撃たれたら、痛えよなあ」

子供「……」

テキ屋の男、自分の額に銃を当てる。

子供、息を飲む。

テキ屋の男、銃をおろす。

子供「……。死んだら、何もなくなっちゃうんでしょ?」

テキ屋の男「……? ん? そうなのかな、やっぱし」

テキ屋の男、銃を子供に返す。

子供「銃で何すんですか?」

テキ屋、顔を上げる。

子供「どこまで行くんですか?」

テキ屋「……うん……。実はもう近くまで来てるんだよ。いっぱい歩いたと思ってるだろうけど、同じところをぐるぐる回ってたんだ。すまん。なかなか決心がつかなくてよ」

子供「……」

テキ屋「今日、やろう。夜になったら」

子供「……」

テキ屋「大丈夫。どっちにしたって人生お先

真っ暗だ」

子供「露骨にいやな顔をする」

テキ屋「もともと一人でやろうと思ってたんだけどよ、お前が銃を持ってるって聞いて、それでやるのが一番適切だと思ったんだ」

52 神社境内裏

午後。

テキ屋の男「弾…何発残ってる?」

と手を差し出す。

テキ屋の男「貸してみ」

子供鞆を開けない。

テキ屋の男「出せ(静かな凄みがある)」

子供、少し動けないが、恐る恐る鞆から銃を出し、テキ屋の男に差し出す。

が、テキ屋の男が取ろうとしても手を離

さない。

テキ屋の男、銃をもぎ取る。

銃の重さを確かめるようにすると、弾倉を見る。

四発。

テキ屋の表情が変わる。

テキ屋の男「(ぼそぼそ) 神の思し召しだ…」

と銃を拝むように額にあてがう。

53 農家2

午後遅く。

農家を囲む敷に入るテキ屋の男と子供。

子供、何が起るのか緊張して様子をうかがっている。

テキ屋の男、農家をじつと見ている。

× × ×

夕。

テキ屋の男、じつと見ていると表情が変わる。

農家の縁側のある部屋に、優しそうな男が座る。

卓上には食事が用意されている。

反対側に妻らしき女が座り、食事が始まる。

楽しそうふたり。

夫婦の姿は清く感じさせる。

その様子を凝視しているテキ屋の男。泣き笑いのようにも見える。

54 田園7

同・黄昏。

テキ屋の男、子供、くる。

テキ屋の男「じゃあ、いよいよ仕事だ」

子供、身が引き締まる。

テキ屋の男「さっきの部屋に男の人がいたな
あ、あの人を呼び出してきてくれ」

子供「…」

テキ屋の男「いや、俺が行くと、筋書きが変わっちゃうんだよ。だからお前が行って来てくれ。お前みたいなのが行ったら、心を許してくれるはずだ。で、俺の名前を言うんだ。秋元修二。な、いいか、他の人には言わずに、あの男の人だけに聞こえるように言うんだぞ」

子供「あきもとしゅうじ」

テキ屋の男「領く」

× × ×

夜。

待っているテキ屋の男。

向こうから子供と優しそうな男が来る。

テキ屋の男、立ち上がって姿勢を正す。

優しそうな男「おお、秋元、久しぶりだな」

テキ屋の男「は、ご無沙汰しております」

優しそうな男「どうした、驚いたぜ。こんな夜に」

テキ屋の男「近くまで参りましたもんで。夜分にすみませんです」

優しそうな男「腕は…残念だったな」

テキ屋の男「いえ、なんとか…。どうしてもこれまでお世話になったお礼とお詫びを申し上げたく」

優しそうな男「何だ、礼と詫びつて。世話になったのはお互い様だ」

テキ屋の男「……」

子供「……」

優しそうな男「(空を見て) おお、星がずいぶん出てるな。こっちにいるのに久しく空なんて見上げたことがなかったよ」

テキ屋の男「(空を見上げ) ああ、たくさん出てますね。向こうでもこのくらい出てました。ご覧になられたことはありますか」

優しそうな男「……」

テキ屋の男「私はどうしても自分のしてしまったことで許せないことがございます。そのことの償いをしに参りました」

優しそうな男「(テキ屋の男の気配を察し) 俺たちがいたのは戦地だ。自分を追い詰めるな」

テキ屋の男「いえ、貴兄の目の前で私がしてしまった、そのことを償いたく、ご覧いた

だきたく思います」
と子供を見る。

子供「? (えっ?)」

テキ屋「子供を見ている」

子供「(察して)」

鞆を押さえ、後ずさっていく。

テキ屋の男、表情を変えずに子供を追う。

テキ屋の男「(口ばくで、出せ、出せ、)」

子供「(恐れて、鞆をしつかり抱える)」

テキ屋の男「(口ばくでくつきり、出せ、と言う)」

テキ屋の男、子供が抱え込む鞆をもぎとり、左手で銃を取り出し、優しそうな男の方へ。

いきなり優しそうな男の太ももに発砲する。

優しそうな男、倒れる。

テキ屋の男「田中英雄の分です。あなたに命令されて、捕虜を突き殺したあと、鬼になり、さんざん人を殺した挙句最後は……」

優しそうな男、芋虫のようにぐるぐる回る。

テキ屋の男、優しそうな男のもう片足の太ももを撃つ。

優しそうな男、動きを止めて呻く。

テキ屋の男「新島忠信の分です。あなたに命令されて捕虜を突き殺したあと、戦地では

敵兵だけではなく、女子供にも暴行を加える……」

子供「……」

テキ屋の男、次に優しくそんな男の左腕に銃を向ける。

優しくそんな男「待て、秋元、あれは戦地でのことだ。(うめく)」

テキ屋の男「はい。そうですね。あなたも……被害者なのかもしれませんね」

と、左腕に発砲。

呻く優しくそんな男。

テキ屋の男「中田重樹の分です。捕虜を殺せず、あなたの命令で俺が射殺した、俺の一番の親友です」

優しくそんな男「(あえぐことしかできない)」

テキ屋の男「それでこれが、俺の分です。あなたから力をいただいて、何十人も殺しました。今でも毎日恐ろしい夢を見てもう気がへんになりそうです。それでもものうのと生きてます。ありがとうございます。俺と、銃剣で突き殺された捕虜たちの分です」

と優しくそんな男の額に銃をあてがう。

優しくそんな男、右手でその銃を抑える。

子供。緊張の極限。

ぐりぐりと優しい男のこめかみに押しつけられる銃。

鬼気迫るテキ屋の男。

汗が噴き出す優しくそんな男。

硬直する子供。

テキ屋の男、今にも引き金をひきそうなところで、銃を優しくそんな男から離し、自分のこめかみにあてる。広い空。

子供「……」

テキ屋の男、発砲せず、思い切り振り上げ、優しくそんな男を一発で殴り倒す。

呻く優しくそんな男。

テキ屋の男、子供に銃を返す。血だらけの銃。

子供、銃を掴む。

そのまま歩いて、優しくそんな男の頭を撃とうとする。

テキ屋の男「もうそいつには使うな」

子供、優しくそんな男を見る。

テキ屋の男「次、地獄で会ったら、今度は即ぶつ殺してやるからな。それまでずっと痛みを抱えて生きろ」

テキ屋の男、財布から金をつかみ、子供に差し出す。

子供、一歩あらずさる。

テキ屋の男「どうした、仕事の謝礼だ」

子供、もう一歩下がる。

テキ屋の男「(舌打ちして) じゃあ、帰りの汽車賃」

子供、受け取る。

テキ屋の男「これでお別れだ。感謝するぜ。

よし、じゃあ、こいつのうちに知らせてこい、この男がここにいることを知らせたら消えろ。知らない人に頼まれたつてすぐに消えるんだ。いいな。じゃ行け」

子供「……」

テキ屋の男「いけ！」

子供、走り出す。

走りながら振り返ると、テキ屋の男が空を見ている。

子供、思わず足を止めて見入ってしまう。

テキ屋の男、青白い夜空に左手を差し伸べている。

テキ屋の男「……終わった……。戦争が終わったんだ……」

と空に向かってさらに手を伸ばす。

子供、また走る。が止まってもう一度見る。

田園に青く照らす月の灯りが暗くなっていく。

テキ屋の影。

55 暗黒。

56 居酒屋

昼。

戸が開き、子供、入ってくる。

しんとしている。

奥の部屋の暗闇を見る。

声
「坊や?」

子供、どきっとして足を止めるが、うれしさがこみ上げる。

顔を覗かせない女。

女の声「近づかないで。近づかないでね。私、病気になるっちゃったのよ。感染したらたいへんよ……」

子供「……(ゆっくり近づこうとする)」

女の声「来ないでね。顔、見られたくないの」

闇の中に、女の気配がある。

子供「……」

女の声「こないだはごめんね。あなたのこと嫌いになったなんて言っちゃったけど、嘘だからね。嫌いになんかならないよ。兵隊さんは怖かったけど、神様が旦那と子供を戻してくれたのかと思ってたんだよ。短い時間だったけど、姉さんにとったら一生だよ。ありがとうね。ありがとう」

子供「(何か言おうとするがうまく言えない)戻ってこれなかった兵隊さんは……怖い人になれなかったんだよ」

女の声「……。そうね……そうね……坊や……そうね……」

子供「……」

女の声「さあ、もう行きなさい。私は大丈夫。助けてくれる人がいるから」

子供「……」

女の声「それから、あの危ないもの。あれは置いてきなさい。あれは持ち歩いちゃだめだめよ」

子供、言われたように、鞆から銃を出して、いつもの棚に入れる。

女の声「あなたはそんなものを持たないで生きていくの」

子供「……」

女の声「坊や、しっかり生きてね! 危険なことしないで、ちゃんと自分で働いて御飯を食べるのよ。約束よ!」

子供、意を決して出ていく。

57 闇市の一角

同、昼。

鉄道の脇に寄り添う闇市。

群がる人々。

豪傑親父「(残飯シチューを売っている) 10

円! 10円!」

客「もう一杯くれ」

豪傑親父「おう、ちょっと待ってくれよ」

子供、豪傑の親父の店を勝手に手伝い始める。

冒頭に子供を追いかけてきた親父だ。

豪傑親父「あ、この野郎! ついに出てきやがったな。帰れ! 馬鹿野郎」

と捕まえようとするが、かわして手伝い続ける子供。

豪傑親父「何勝手にやってんだ。けえれ!」と突き飛ばす。

子供、倒れるがささず起き上がり、店の皿洗いを始める。

豪傑親父「良いかげんにしろよ!」とまた突き飛ばす。

子供、立ち上がって手伝う。

豪傑親父「良いかげんにしろよ!」

また突き飛ばされる。

子供、顔をぶつけて、血を流すが、しがみつこうに手伝う。

豪傑親父「ちっ」

と勝手にさせる。

忙しい店。

子供、必死に手伝う。

× × ×

午後から夕方にかけて。

子供、必死に手伝い続ける。

親父、子供を無視しているが、子供の顔を見ないで、残飯シチューを一杯ついで

子供の前にどんと置く。

子供、雑炊を見る。

58

闇市の一角2

同夕方。

鉄道ガード下入り口。

傷痍軍人が物乞いをしている。しかし雑踏にいる焼夷軍人は生活能力のありそうな男たち。

子供、そこを通過してさらに奥に行く。

と、人も通らない闇の場所に、生活能力を完全に失った傷痍軍人たちが寝転がる一角。

子供、匂いが耐えられなく息を止める。

5体満足でも精神を著しく病んでいる者たちがいる。

さらに奥に行くと、冒頭の復員兵がいる。どこも見えていないような目でうずくまっ

そして親父を見る。親父、子供を見ずに働いている。

子供、恐る恐る残飯シチューを口にすると、息を吐きながらすすする。

湯気が顔を被う。

必死に食べる。

子供の見た目。湯気に向こうの空。闇市のバラックの向こうの、夏の空の夕方。

子供、その空を見ながら食べ続ける。

親父が子供の前の木箱にわずかな金を置く。

ている。

子供、少し近づこうとする。

鞆を開け、袋の中から教科書を取り出す。

それを握りしめ、思い切つて近づくと、

やはり近づけない。

復員兵が気がつかつかつかないからな

い場所に教科書を置く。

そしてその場を去る。

59 闇市の一角3

賑わう雑踏の中に、子供、いく。

食べ物、女物の衣類などを、荒い息を吐

きながら見ていく。

豪傑の男からもらった金を握りしめ。

子供「これ食べたら病気が治りますか？ 元氣になりますか？」

店の親父「お金、いくら持つてるんだい」

子供、金を見せる。

店の親父「それじゃ足りないよ。買えない」

子供、別の店へ。

子供「この服はいい服ですか。もともとは高

いやつですか？」

そこに一発の銃声。

道ゆく人が氣にとめるが、すぐに何事も

なかったように歩き出す。

子供「……」

しばらく立ちすくんでいるが、やがて歩

き出し、雑踏の中に消えていく。

映画『窓ぎわのトットちゃん』

八鍬新之介 鈴木洋介

《脚本家略歴》

八嶽新之介（やくわ しんのすけ）

1981年北海道出身。日本大学芸術学部放送学科卒業後、05年にシンエイ動画へ入社。TVシリーズ「ドラえもん」の制作進行から劇場版の演出助手を経て、14年の『映画ドラえもん 新・のび太の大魔境 〜ペコと5人の探検隊〜』で監督デビュー。監督作に『映画ドラえもん 新・のび太の日本誕生』（16）、『映画ドラえもん のび太の月面探査記』（19）がある。

鈴木洋介（すずき ようすけ）

東京都出身。明治学院大学卒業。幼少期より映画好きな父親の影響でハリウッド映画に親しむ。以来、漫画や小説、TVドラマなど媒体を問わず物語世界にどっぷり浸かった少年期を過ごし、いつしか自ら物語を紡ぎたいと思うようになる。大学卒業後に2年間カナダへ留学。帰国後はアニメ制作会社のシンエイ動画に入社し、制作スタッフとして勤務。自ら執筆した脚本が社内採用されたことが自信となり、本格的に脚本を勉強する決意。映画美学校に入学し、脚本家の村井さだゆき氏に師事して3年間学ぶ。2014年に脚本家

として独立、現在はアニメ作品を中心に活動中。

監督・八嶽新之介

原作・黒柳徹子（『講談社刊』）

製作・黒柳徹子／2023映画

「窓ぎわのトットちゃん」製

作委員会

アニメーション制作・シンエイ動

画

配給・東宝

《スタッフ》

キャラクターデザイン・

総作画監督

金子志津枝

イメージボード

大杉宜弘

車輛設定

和田たくや

美術設定

串田達也

色彩設計

松谷早苗

撮影監督

峰岸健太郎

編集

小島俊彦

音響監督

清水洋史

音響効果

倉橋静男

音楽

西佐知子

主題歌

野見祐二

あいみょん「あのね」

《キャスト（声の出演）》

トットちゃん 大野りりあな

トットちゃんのパパ 小栗旬

トットちゃんのママ 杏

大石先生 滝沢カレン

小林先生 役所広司

テロップ（黒ベタに白文字）

徹子さん（NA）「これは、第二次世界大戦が終わるちょっと前まで、実際に東京にあった小学校と、そこに、ほんとうに通っていた女の子のお話です。」

テロップ昭和15年6月

東京市目黒区・東京横浜電鉄

自由ヶ丘駅改札口（午前8時半）

駅員に切符を渡して通過していく人々。その波が途切れたと思ったら、突然下から切符を握った小さな手が現れる。

駅員「!?」

トット「この切符、もらっちゃいけない?」

駅員「ダメだよ」

切符を回収される手。切符のたくさん入った回収箱を差して、

トット「これ全部おじさんの?」

駅員「違うよ。駅のだから」

未練がましく箱を覗く手の主。（帽子が見える）

トット「わたし、大人になったら切符を売る人になろうと思うわ」

駅員「うちの坊主も駅で働きたいって言うてるから、一緒にやるといいよ」

少し表情が和らいだ駅員を観察しながら、腰に手を当てるトットちゃん。（ここで

初めて顔が見える）

トット「考えとくわ。わたし、これから新しい学校に行くので忙しいの」

勝手にお願いする立場にされて、調子が狂う駅員。

ママ「トットちゃん」

声をかけたのはトットちゃんのママ。小さな花飾りの付いたフェルトの帽子を被っている。ママのところに駆けて行くトットちゃん。ママに手を取られて歩き出す。

トット「決めた。大人になったら切符屋さんになる!」

ママ「スパイになるのはどうするの?」

トットちゃん、少し考えてから、

トット「本当はスパイなんだけど、切符屋さんなのは?」

ママ「……」

問いかけには答えずに歩き続けるママ。

威勢の良い露天商や、活気のある商店街（看板建築）とは裏腹に、不安気な様子。

5月 尋常小学校・外観（ママの回想）

尋常小学校・応接室（ママの回想）

担任「おたくのお嬢さんがいると、学級の迷惑になります!」

ママ「迷惑?」

担任「お願いですから、よその学校にお連れください。本当に困ってるんです!」

ママ「よその学校!」

尋常小学校・教室（担任の先生の回想）

国語の時間。担任が黒板に「サイタ イタ サクラガ サイタ」と白墨で板書して行く。突然「パタン!」と大きな物音が。担任が驚いて振り返ると、トットちゃんが机のフタを何度も開け閉めしている。

担任「黒柳さん、何をしていますの?」

トット「この机すごいわ! ゴミ箱のフタみたい!」

おかしいコメントに笑いが起きる。

担任「静かに。用事がないのに、開け閉めしてはいけません。いいですね?」

トットちゃん、少し考えてから元気に返事をする。

トット「はい!」

板書を再開する担任。しかし、すぐにまた「パタン!」と音がする。

担任「黒柳さん! 用事が無い時は……」

机から筆記帳を出すトットちゃん。

担任「用事が……」

机から教科書を出すトットちゃん。

担任「むぐぐ…」

一応の理屈に閉口してしまふ担任。

尋常小学校・応接室（ママの回想）

ママ「よく注意しますから…」

担任「それだけならよろしいんですけど！」

高まる声に、思わず身を縮めるママ。

尋常小学校・教室（担任の先生の回想）

黒板に向かってしている担任。また物音がしないかと、少し神経質になっている。しかし、今度は静かな様子。安心して振り返ると、トットちゃんが席にいない。

担任「黒柳さん？」

担任が見回すと、トットちゃんが窓ぎわに立って外を見ている。

トット「チンドン屋さん！」

トットちゃんの大声に驚いて白墨を折ってしまふ担任。

トット「みんなー！、チンドン屋さんが来たわよー！」

ガヤガヤと窓ぎわに集まる生徒たち。生垣の向こうに三人組のチンドン屋（和楽器。押すな押すなの大騒ぎに）。

担任「ちよっと！ 授業中ですよ！」

席に戻るように注意するが、みんなチンドン屋に夢中で聞いていない。窓の下ま

でやってくるチンドン屋。

チンドン屋「お嬢ちゃんかい、呼んだのは？」

トット「はい！ わたしですー！ ねえ、

ちよっとだけ何か演ってみて」

チンドン屋「お嬢ちゃんの頼みとあっちゃあ断れねえなあ。おい、一つ景気のいいやつを演ろうじゃねえか」

トット「わーい！」

他の生徒たちも大喜び。收拾のつかない事態に、担任はクラクラ卒倒。

担任「ひい、ふう（荒い呼吸）」

チンドン屋「みい、よお！」

チンドン屋が演奏の合図を出し、トットちゃんのワクワクが最高潮に達したところでタイトルバックへ。

タイトルバック

『窓ぎわのトットちゃん』

自由ヶ丘・商店街

担任（回想）「これじゃあ授業にならないといふことがお分かりでしょう？」

深いため息をつくママ。飛び跳ねながら早口で何か喋っているトットちゃんをチラリと見る。ママと目が合い、ニッコリ笑うトットちゃん。

トット「ねえ、新しい学校にもチンドン屋さん来るかな？」

とどめの一言に絶望的な気分になる。

トット「あつ、キャラメル！」

喫茶店の前に置かれているキャラメルの販売機に駆け寄るトットちゃん。

ママ「ダメよ。約束の時間に遅れるわ」

トット「キャラメル！」

後ろ髪を引かれつつ、その場を後に。

トモエ学園・校門前

地面から生えた二本の木から成る門柱。（門扉は閉じているため、中の様子はわからない）その前にトットちゃんがやってくる。

トット「わあ、地面から生えてる！」

トット、顔を斜めに傾ける。（学校の表札が斜めになっているから）

トット「ト、モ、エ…」

ママ「トモエ学園。ここが新しい学校よ」トット「トモエってなあに？」

ママの方に振り向いた瞬間、視界の隅に何かを捉えるトットちゃん。すばやく身をかがめて門柱と植え込み（紫陽花）の隙間に頭を突つ込む。目に飛び込んで来たのは木造の茶色い電車。その窓が、朝の光を浴びてキラキラと光っている。

トット「あれ！ 本当の電車!？」

ママ「そうよ。あれは…」

トット「わーい！」

ママの返事を待たずに、隙間から学校の
中へ入っていくトットちゃん。

ママ「トットちゃん！」

全速力で電車へ駆けていくトットちゃん。
校庭で昼寝をしていた野良猫があわてて
逃げ出す。

トット「乗りたい乗りたい！ あれ乗りたい！」

トットちゃんの暴走を止めなくてはと、
ママも全速力で追う。

ママ「待ちなさい！」

走って来た勢いに任せて、ベタッと電車の
窓に張り付くトットちゃん。窓ぎわで
勉強していた泰明ちゃんが驚く。

泰明「!？」

追いかけて来たママがトットちゃんのス
カートを掴んで引つ張っていく。その様
子を呆気にとられて見つめる泰明ちゃん。
(ここでは小児まじであることを伏せる)
ママ「あれはこの学校の教室なの。勝手に乗
れないわ」

トット「どうしたら乗れるの?」

ママ「それならこの生徒にならないと」

トット「なる！ 絶対なる！」

ママ「じゃあ、まずは校長先生ときちんとお
話してちょうだい」

トット「はい」

講堂の屋根に可愛らしい少女の胸像。

トモ工学園・校長室(午前9時)

ドアをノックする音。

ママ「黒柳です」

小林「どうぞ」

ママ「失礼します」

トットちゃんとママが入ると、椅子
に座っていた男の人(小林校長先生)が
立ち上がる。ヨレヨレの黒の三つ揃いを
きちんと着ている。

ママ「おはようございます」

小林「おはようございます」

トットちゃんに挨拶するように促すママ。

ママ「ほら」

トット「校長先生か、駅の人か、どっち?」

小林「?」

ママ「こらっ! (先生に向いて) あ、あの、

この子が申しておりますのは…」

ママがあわてて説明しようとする、急

に小林先生が笑い出す。

小林「ハッハッハッハ。校長先生だよ。小林

校長先生。君は?」

トット「トットちゃんよ。本当はデッコだけ

ど、パパがトット助って呼ぶからトット
ちゃんなの」

小林「ふーん、そうかい。よろしく、トット
ちゃん」

トット「わたし、この学校に入りたいの。そ
うすれば、お外の電車に乗れるんでしょ?」

ママ「トットちゃん」

小林「ハッハッハッハ、乗れるとも。でもそ
の前に、先生と少しお話しようじゃない
か。お話嫌いかい?」

トット「大好き!」

トットちゃんの椅子を用意してあげる小
林先生。飛び乗る様に座るトットちゃん。
小林「じゃあ僕は、これからトットちゃんと
話がありますから、お母様はお帰りいた
いて結構です」

ママ「え? でも…」

小林「ご心配なく」

ママ「そうですか…。では、宜しくお願い致
します」

ママ、トットちゃんに近づいて。

ママ「キャラメルがあった喫茶店で待つて
わ。失礼のないようにね?」

トット「はい」

部屋を出てドアを閉めるママ。やはり
トットちゃん一人を残すのは心配。自分
の椅子をトットちゃんの前に引つ張って

来て、向かい合わせに腰掛ける小林先生。

小林「さあ、何でも話してごらん。話したいこと全部！」

トット「全部!」

嬉しくて顔を輝かせるトットちゃん。

トット「あのね、すっごく速かったの! ビューンって、景色が後ろに飛んでいくのよ! 切符がこーんなにたくさんあつて、ちようだいって言ったんだけど、くれなかつたの!」

小林「大井町線で来たのかい?」

トット「うん! 前の学校の先生はお顔が綺麗だから大好きだし、屋根の下にはツバメの巣があるのよ。『こんにちはツバメさん、元気ですか?』『ピーピー、元気ですよ!』ってお返事したの!」

小林「すごいじゃないか!」

トット「ロッキーは『お手』と『ごめんくださいませ』と『満足満足』ができるんだ! お耳の中が臭いけど、いい匂いなの。あと、幼稚園の時に、お口の中でハサミをチョコキチョコキってやると『舌を切りますよ!』って怒られるんだけど、何回もやっちゃったわ。鼻水が出た時は、ズルズルやつてるとママに叱られるから、なるべく早くかむ方がいいのよ!」

小林「それから?」

キヤラメルの販売機のある喫茶店

トットちゃんを心配するママ。テーブルにはコーヒ。時計は午前9時半。

トモ工学園・校長室(午前10時半)

トット「ママは洋服を作るのが得意なの! トットちゃんに紙を被せてスィスィスイって魔法みたいによ!」

小林「その洋服もママが作ったのかい?」

トット「違って、これは買ったやつ。本当はママが作ったの着るはずだったんだけど、ビリビリだったから今日は買ったやつなの。この襟の刺繍、ママ嫌いなんだって!」窓の外を野良猫がゆっくり通り過ぎていく。

キヤラメルの販売機のある喫茶店

時計は午前11時半。あまりにトットちゃんの帰りが遅いので、そわそわしてくるママ。机の上にはコーヒと紅茶のカップ。辛抱たまらず立ち上がるママ。(周りのお客さんや店員がびくりする)ママ「遅い!」

トモ工学園・校長室(正午)

トット「それでさ、あのさ、えっとさ……」

小林「もうないかい?」

トット「……どうしてみんなわたしのことを困った子って言うの? わたしはトットちゃんなのに!」

椅子から立ち上がって屈んで、トットちゃんの頭に手をのせる小林先生。

小林「君は、ほんとうは、いい子なんだよ!」言葉の意味がはつきりとわからず、キョトンとするトットちゃん。

トモ工学園・校門前

不安そうに待っているママ。ついに講堂からトットちゃんが出て来て、階段を駆け下りて来る。面接の結果が気になり、ドキドキするママ。トットちゃんがママの前までやって来る。

ママ「それで? どうだった?」

息が整うのを待っているトットちゃん。

そして、

トット「今日からこの学校の生徒だつてさ!」

一瞬、言葉に詰まるママ。しかし、安堵

と喜びが込み上げて、

ママ「そう。そうなの。良かったわね!」

トット「うん! わたし、この学校気に入ったわ! 校長先生も!」

ママ「ママも。はい!」

トットちゃんにキヤラメルの箱を手渡す

ママ。

トット「キャラメル! わーい!」

箱から一粒取り出して口の中に放り込み、

ママと手を繋いで歩き出す。

ママ「校長先生と何をお話したの?」

トット「全部!」

ママ「全部? それじゃあ長いはずね」

校門を出て行く二人の後姿を、電車の

教室の窓から見つめる泰明ちゃん。

東京市大森区・黒柳家・外観(午後9時)

大きな庭とベランダのある黒柳家(赤茶の屋根に白い壁の西洋建築)。ヴァイオリンケースを持ったパパが帰宅する。

リンケースを持ったパパが帰宅する。

パパ「ただいま」

黒柳家・居間

居間に入ると、ママがセルロイドの定期入れに毛糸の紐を通して。衣紋掛けに帽子を掛けて背広を脱ぐパパ。

パパ「トモエの方はどうだった?」

立ち上がってパパに抱きつくママ。

ママ「明日から通って構わないんですって」

パパ「そうか。まずは「安心だな」

ママ「今度は馴染めるといいけど……」

しばし黙る二人。

パパ「トット助は?」

ママ「ずいぶん早く寝たわ。疲れたのね」

パパ「そうか。どれ」

二階へ上がって行くパパ。(ママは背広をたたむ)

黒柳家・トットちゃんの部屋

窓は開け放たれ、蚊帳が吊られている。

ベッドの上で眠っているトットちゃん。

その寝顔を愛おしく見つめながら、うち

わで扇いであげるパパ。トットちゃんの

髪の毛を優しく撫でる。クマやウサギの

ぬいぐるみに紛れていた飼犬のロッキ

キーを連れて、部屋を出ていくパパ。

黒柳家・外観(午前5時) 日替わり

『洗足パン』のおじさんが自転車でパンを配達している。

黒柳家・両親の寢室

ベッドで起きるママ(バジャマ)。パパ

が隣で眠っている。

黒柳家・居間

階段を降りてくるママ。誰もいないかと

思いきや、暗がりの中にランドセルを背

負い、ソックスまで履いたトットちゃん

が直立不動で立っている。

ママ「ギャー!」

びつくりして階段を踏み外すママ。床に

尻餅をつく。

ママ「トットちゃん:」

トット「おはようございます!」

黒柳家・台所(午前6時半)

トットちゃんのお弁当を作っているママ

(エプロン)。氷式冷蔵庫から卵を取り出

す(水が溶けて小さくなっている)。ガス

七輪の元栓を開けて、マッチで火をつ

けると卵を割って平鍋で炒る。(塩と砂糖

をふりかけるところを見せておく) 隣

のガスかまどではお米が炊かれている

(お弁当用)。

黒柳家・居間

寝癖だらけのモシヤモシヤ頭のパパが

コーヒーマルで豆を挽いている。

パパ「トット助、天気を教えてくれ」

トット「はい」

ラジオのスピーカーに耳を当てるトット

ちゃん。

ラジオ「今日は全国的に快晴となるでし

う」

トット「わーい、晴れだって!」

喜んで踊り出すトットちゃんを見て、微

笑むパパ。

黒柳家・食卓（午前7時）

食卓を囲むパパ、ママ、トットちゃん（ロッキーもペランダで餌を食べている）。朝食はコーヒ、牛乳、パン、バナナ、サラダ、卵焼き。（パンはガス式のパン焼き機で温められている）ラジオからクラシックが流れている。ランドセルを背負ったまま、急いで食べるトットちゃんママ「学校は逃げないんだから。ランドセル下ろして、ゆっくり食べなさい」

トット「はい（口に食べ物）」

トットちゃん、牛乳で口の中の物を一気に流し込む。

黒柳家・玄関前

定期入れの紐をトットちゃんの首にかけてあげるママ。ついでに崩れた前髪も直してあげる。

ママ「絶対に無くしちゃダメよ」

トット「はい！ 行つてまいります！」

元気良く出かけて行くトットちゃん。その後をロッキーが追う。思わず涙ぐむママ。パパがママを抱きしめる。その時、塀の向こうからトットちゃんの声が。

トット「この定期はロッキーに合わないのよ」

黒柳家前・路上

何かと通りまで出て確かめるパパとママ。何かを見てギョツとする。そこにはロッキーの首に定期入れの紐をかけているトットちゃんがいた。

トット「これはわたしの定期だから、ロッキーは電車に乗れないの」

キョトンと首をかしげるロッキー。パパとママも目を合わせて首を傾げる。

トット「ロッキーの定期も作つてもらえるように、今度頼んであげるわね」

定期を自分の首に掛け直すトットちゃん。ロッキーを連れて走り出す。

トット「行くわよ！」

ロッキー「ワンワン！」

やれやれと苦笑いのパパとママ。

黒柳家・食卓

ラジオから流れるクラシックが終わり、代わりに仰々しい声が聞こえる。

ラジオ「大本営陸軍部発表……」

北千束駅

定期券を見せながら改札をくぐるトットちゃん。

トット「ロッキーはここまで。また後でね！」

駅の階段を登っていくトットちゃんを不思議そうに見送るロッキー。

大井町線の電車内（北千束→自由ヶ丘）

運転席の横の窓から、外の景色を眺めるトットちゃん。カーブに差し掛かると遠くに山が見えてくる。

トット「うわあ、富士山！」

自由ヶ丘駅改札

切符を回収している駅員。そこへトットちゃんが走つて来る。

トット「ママがこれ（定期券）を作ってくれたから、切符はもういらないの。でも無くしたら大変だから、いつも首からかけときなさいって。ちよつぱり窮屈なのよね。じゃ、ごきげんよう！」

早口にまくし立て風のように去っていくトットちゃん。呆氣にとられる駅員。

駅員「ごきげんよう？」

トモ工学園・校庭（午前8時）

校門をくぐり、一直線に電車の教室へ駆けて行くトットちゃん。

トモ工学園・電車の教室

取手を引いて扉を開けるトットちゃん。

トット「うわあー!」

運転席の代わりに黒板。腰掛けの代わりに勉強机と椅子。吊革はない。それ以外は本物の電車と一緒に。網棚も窓も床も天井も元のまま。靴を脱いで中に入るトットちゃん。嬉しくなつて歌つたり踊つたり。

トット「うれしうれしとてもうれし」

窓ぎわの席に座つてみると、とても心地が良い。窓から外を見ると、頭の中でイメージが膨らみ、止まつているはずの景色が動き出す。電車の教室はいつの間にか、お花畑やジャングルの中を走っている。その時、教室の扉が開く。我に返るトットちゃん。女の子（サッコちゃん）が草履袋に靴をしまつて中に入ってくる。

サッコ「おはよう」

トット「おはよう」

筆記帳と筆箱を出すと、背伸びしてランドセルを網棚に載せる。続いて男の子（右田くん）が入ってくる。ランドセルをバスケットボールのように網棚へシュートするが、大きくバウンドして床に落ちる。

右田「失敗!」

ランドセルを拾つて入口まで戻り、もう一度シュートする右田くん。今度はうま

く網棚に載る。

右田「成功」

トット「すごい!」

拍手するトットちゃんに照れる右田くん。しかし、急に顔色が変わつて、

右田「失敗!」

机の上に立つて網棚によじ登り、ランドセルの中から筆箱と筆記帳を出す。可笑しくなつてクスクス笑うトットちゃん。

× × ×

一年生全員が揃っている。（トットちゃん、サッコちゃん、ミヨちゃん、税所さん、天寺くん、泰明ちゃん、泰ちゃん、大栄くん、右田くん、高橋くん、青木さん）小林先生と担任の大石先生が、トットちゃんをみんなに紹介する。

小林「みなさん、今日からトモエに新しい仲間が増えます」

転校生の存在に、ガヤガヤとザワつく生徒たち。

大石「自己紹介できるかな?」

トット「はい。黒柳徹子。テツコだけど、トットちゃんよ」

変わった響きの名前に、またしてもザワつく生徒たち。

小林「好きなところに座っていいんだよ」トット「わたし、窓ぎわ!」

ちょうど窓ぎわの席が一つ空いていたので、そこに腰掛けるトットちゃん。後ろの席には泰明ちゃん。

小林「みんな一緒だよ。なんでも一緒にやるんだよ」

生徒たち「はい!」

トモ工学園・講堂前

小使いのおじさんが、木槌で授業開始の鐘を鳴らす。

トモ工学園・電車の教室

大石先生が運転席の方にある黒板に、その日の授業科目の問題をすべて書き上げる。

大石「はい。どれでも好きなことから始めてください」

それを合図に生徒たちがでんでバラバラに勉強を始める。ミヨちゃんは音楽で歌の練習。高橋くんはそろばんで算数。サッコちゃんは英単語の練習。泰ちゃんは理科の実験。税所さんはお習字。右田くんはクレヨンで図画。青木さんは綴り方。大栄くんは校庭を走つて体育。天寺くんは野良猫を捕まえてきて肉球の観察。尋常小学校とのあまりの違いに、呆気にとられるトットちゃん。好奇心いっぱい

にキョロキョロ見回していると、後ろの席の泰明ちゃんが立ち上がり、不思議な歩き方をして、トットちゃんの横を通り過ぎていく。

トット「？」

右足の甲を床に引きずるようにして、体を大きく揺らしながら黒板の前にいる大石先生に質問しに行く泰明ちゃん。夏なのに長ズボンを穿いている。

トット「……」

頬杖をついてじっと見つめていたトットちゃんにも、それがわざとではないことがわかった。質問が終わり、席に戻る泰明ちゃん。途中、トットちゃんと目が合うと、ニコリと笑う。

トットちゃんもあわてて笑顔を返す。後ろの席に座る泰明ちゃん。トットちゃん、クルリと後ろを向いて、

トット「どうしてそんな風に歩くの？」

泰明「ほく、小児マヒなんだ」

トット「しょうにまひ？」

泰明「足だけじゃないよ。手だって」

右手で左手を掴んで持ち上げる泰明ちゃん。長く細い指同士がダラリとくつき合つて曲がつている。トットちゃん、その手に自分の手を重ねる。

トット「冷たい……」

少し照れる泰明ちゃん。

トット「治らないの？」

泰明「……」

悪いことを聞いたと思い、悲しくなるトットちゃん。

泰明「僕は山本泰明。君は黒柳……」

泰明ちゃんの明るい声に笑顔を取り戻すトットちゃん。大きな声で答える。

トット「トットちゃんよ！」

大汗をかいた大栄くんが窓を開ける。

大栄「あちい！」

初夏の爽やかな風が電車に吹き込み、子どもたちの髪の毛を揺らす。

トモ工学園・講堂（正午）

壁に子ども達の絵や、バレリーナの群舞の写真が貼られている。机とイスをコの字型に並べる生徒たち（50人位。先生たちも7、8人いる）

右田「昼だー昼だー昼飯だー」

小林先生の上着を引張るトットちゃん。

トット「他の子はどこにいるの？」

小林「これで全員だよ」

トット「全員？」

人数を数え始めるトットちゃん。

トット「1、2、3、4……、少ないよ！」

小林「そっだよ」

皆が着席し、準備が整つ。

小林「みんな。海のもの、山のもの、持ってきたかい？」

生徒たち「はい」

一同、お弁当箱のフタを開ける。

小林「どれどれ」

生徒達の肩越しに、お弁当の中身を確認して回る小林先生。両手に鍋を一つずつ持った小林先生の奥さんが後に続く。

税所「海のははきで、山のははきんぴらごほうです」

小林「美味しそうだ」

右田「お肉が山で、コンニャクが……海です」

小林「コンニャクは水の中を泳げるかい？」

右田「あれ？ 泳げない？」

小林「そう。コンニャク芋は畑で育つから山のものだよ。おい、海！」

小林先生の呼びかけに応じて、奥さんが

片方の鍋からちくわを二本掬い、右田くんのお弁当にのせる。

右田「ゴックン」

次々にみんなのお弁当を見て回る小林先生。いよいよトットちゃんの番。トットちゃん、少し不安そうにお弁当のフタを開ける。中には黄色の炒り卵、グリーンピース、ピンク色のたらこをパラパラに炒つたの、そして茶色のデンプが並んで

いる。

小林「きれいだね。お花畑みたいだ」

お弁当を褒められて、とても嬉しいトットちゃん。

トット「ママはとってもおかずが上手なの」

小林「そうか。デンブは海かい？ 山かい？」

トット「ええと…、デンブは茶色だから…山

みたいだけど…、わかりません」

小林「みんな。デンブは海と山どっちだい？」

口々に「海！」とか「山！」とか叫ぶ子ども達。結局答えは決まらない。

小林「答えは、海だよ」

海と答えた子が一斉にはしゃぐ。

小林「なんで海かわかるかい？」

途端にしんとする子ども達。その輪の真ん中に立つ小林先生。

小林「デンブは魚の身をほぐして、細かくして、炒って作ったものだからさ」

小林先生の説明に感心する子ども達。泰

ちゃんが手を上げる。

泰「先生、見てもいいですか？」

小林「いいよ」

全員がゾロゾロと席を立てトットちゃん

なトットちゃん。

× × ×

ステージのグランドピアノの椅子に座り、知らない曲を弾き始める小林先生。

小林「それじゃあいくよ！ いつもみたいに

元気な声で歌おう！」

ワクワクして様子を窺うトットちゃん。

生徒（歌）「ようーくーかーめよー

たーべもーのをー

かめよかめよかめよかめよ

たーべもーのをー
いただきますーすー！」

いっせいにお弁当を食べ始める子ども達。（天寺くんは窓から猫に餌をあげて

いる。泰明ちゃんも、片手で器用に食べている）全てが新鮮なトットちゃん。笑

顔でお弁当を食べ始める。

トット「いただきます！」

九品仏への散歩道（午後1時）

川沿いの桜並木。手を繋いで散歩する子

どもたちと大石先生。

子ども達（歌）「ちようちょ とまれ なのはなに」

お百姓さん（畑の先生）が手を振り、子

ども達もそれに応える。

トット「午後のお勉強は？」

サッコ「早く終わった時はお散歩に行くのよ」

大石先生が菜の花の説明をする。

大石「真ん中にあるのが雌しべ、その周りに

あるのが雄しべよ」

大栄「あ、モンシロチョウ！」

青木「モンキチョウも！」

大石「綺麗ね。蝶々さんも雄しべで作られた

花粉を運ぶのを手伝っているの」

生き物の神秘に感心する子ども達。

高橋「雄しべと雌しべは、アカンベの兄弟

じゃないの？」

大石「あら高橋くん。それじゃあ、お鍋は従

兄弟かしら？」

おかしなやりとりには笑う子ども達。

九品仏（境内）

お堂の中の仏様、閻魔様や仁王像、仏足

跡の石、好きな所で自由に遊ぶ子ども達。

釣瓶式の井戸の蓋を開け、中を覗くトッ

トちゃん

サッコ「ここに流れ星が落ちたんだって」

トット「流れ星？」

よく目をこらすトットちゃん。

サッコ「見える？」

トット「見えない。お星さま、寝てるんじゃない？」

サッコ「お星さまって寝るの?」

顔を上げる二人。その場を後にする。

トット「そういえば、泰明ちゃんいないね」

サッコ「教室で本読んだって」

トット「ふーん」

トモ工学園・電車の教室(午後2時)

静かに本を読んでいる泰明ちゃん(決してつまらなそうではなく、読書を楽しんでいる)。そこへ小林先生がやってくる。

小林「泰明ちゃんは、お散歩に行かないのかい?」

泰明「歩くの遅いから…」

小林「みんな一緒に歩いてくれると思うけど」

なあ」

泰明「……」

泰明ちゃんが黙り込んでしまったので、

小林先生もそれ以上は追及しない。

泰明「『本読むの好きだ!』」

小林「教室の本は全部読んじゃっただろう?」

泰明「お家にある本を持って来ます」

健気に笑ってみせる泰明ちゃん。手元の本を本棚に戻しに行く。どうしたものかと考える小林先生。

黒柳家・お風呂(午後6時)

木製(楕円形)の薪風呂。トットちゃん

の背中を手拭いでこするパパ。

トット「でね、サッコちゃんと井戸を覗いたんだけど、真っ暗で何にも見えなかったの」

パパ「それは残念だなあ」

トット「だから、お星様は昼間寝てて、夜起きるんじゃない?」って言ったの」

パパ「そうかもしれないな」

トット「きつとそうだな」

風呂釜に薪をくべつつ、二人の会話を聞いているママ。トットちゃんが新しい学校に馴染めたことを心から喜んでいる。ママの顔を炎が明るく照らす。

黒柳家・外観

パパ「トット助、十数えたら上がるぞ」

トット「いちじく、にんじん、さんしょに、しいたけ…」

煙突から昇る煙。大井町線がガタゴトと音を立てて走っていく。空に月。

イメー
暗闇を落下するトットちゃんの財布(赤とピンク)。ポチャンと音がして。

トモ工学園・便所(午前8時半・日替わり)

トット「ああ〜!!」

用を足した格好のままで絶望的な声をあげるトットちゃん。

トモ工学園・便所前

トット「ああ〜!!」

便所の扉を開けて飛び出す。

トモ工学園・学校裏

トット「ああ〜!!」

柄杓を持って学校の裏側に回るトットちゃん。トイレの外側の壁のあたりで汲み取り口を探す。ふと下を見ると、足の下に丸いコンクリートのフタが。それを開けて、穴の中に頭を突っ込むトットちゃん。

トット「お池みたい…」

柄杓を使って便槽から汚水を汲み出し始める。汲んだものを穴の周りに積み上げて行く。授業を告げる鐘が鳴り、一瞬中断するか迷うが、結局作業を続けるトットちゃん。そこへ小林先生が通りかかる。(一度通り過ぎてから戻ってくる)

小林「何してるんだい?」

トット「お便所にお財布落としたの」

小林「そうかい」

後ろ手を組んで去って行く小林先生。

× × ×

汗びっしょりで作業を続けるトットちゃん。積み上げた山が大きくなっている。再び戻ってくる小林先生。

小林「あったかい?」

トット「ない」

トットちゃんに顔を近づける小林先生。

小林「終わったら、みんな戻しとけよ」

トット「うん」

また去って行く小林先生。しばらくして手を止めるトットちゃん。積み上げた山を見て、

トット「みんな戻す…」

トモエ学園・校庭（午後3時半）

小使いのおじさんが下校の鐘を鳴らし、子ども達が帰って行く。

トモエ学園・校長室（午後4時）

ノックの音。

小林「どうぞ」

トットちゃんが入ってくる。服に汚れ。

小林「見つかったかい?」

首を横に振るトットちゃん。

トット「でもいいの。たくさん探したから」

満足そうに笑って校長室を出ていくトットちゃん。席を立ち、窓から学校裏を見る小林先生。綺麗に片付いている汲み取

り口。フタもきちんと閉まっている。迎りの湿った土も丁寧に削られて戻されていた。ニッコリと笑って席に戻る小林先生。

北千束駅（午後5時）

トットちゃんの帰りが遅いのを心配して、迎えに来ているママとロッキー。トットちゃんが階段を降りてくる。

ロッキー「ワンワン!」

ママ「トットちゃん!」

北千束駅へ黒柳家

トット「校長先生がね、みんな戻しとけよって言ったの」

ママ「他には? 叱られなかった?」

トット「ううん、何にも」

ママ「そう…」

安堵するママ。トットちゃんを信頼してくれた小林先生に感謝と尊敬の念が湧く。夕日に伸びる三人の長い影。

トモエ学園・校庭（午後0時半）日替わり

校庭で遊ぶ子どもたち。それぞれがお気に入りの木に登って遊んでいる。トットちゃんもスバイ気取りで、枝に逆さまになってしがみつく。逆さまの視界の中で、

一人で本（アンクルトムの小屋）を手に座っている泰明ちゃんと目が合う。すぐに目を逸らす泰明ちゃん。地面に降りるトットちゃん。

トット「泰明ちゃん。トットちゃんの木にご招待してあげる!」

泰明「ありがとう。だけどボク、木に登れないんだ…」

トット「!!」

彼の捻れた右足を見て、しまったと思うトットちゃん。しかし、気を取り直して、泰明ちゃんの左手を取る。

トット「やつてみなくちゃわからないわよ」

泰明「無理だよ」

泰明ちゃんの左腕（患手）がトットちゃんの手から離れ、だらりと垂れる。

トット「……」

そこへミヨちゃんがやつて来る。

ミヨ「大変! 大変!」

ミヨちゃんの周りに、みんながガヤガヤと集まってくる。

ミヨ「今晚、学校に新しい電車が来るんだって!」

一同「ええ!?!」

サッコ「どうやってこまで来るのかなあ?」
泰「大井町線を走ってきて、踏切から外れて来るんじゃない?」

大栄「それじゃあ脱線だよ！」

青木「ウフフフ」

右田「リヤカーで運ぶんだよ！」

税所「運べないわよ。大きいんだから」

天寺「象なら引つ張れるかも」

高橋「象はどこから来るの？」

一同「うーん（悩み）」

トット「わかった！」

一同、トットちゃんに注目。

トット「線路をさ、ずーっと学校まで敷くん

じゃないの？」

泰「どこから？」

トット「どこからって……、どこから？」

一同「はあー（ため息）」

大栄「だったらよ！ 家に帰らないで、電車

が来るところを見てみようぜ！」

大栄くんの案に賛成する一同。

ミヨ「わたし、お父さんに聞いてみる」

トモ工学園・校長室の窓下

ミヨちゃんが小林先生と話しているのを、

窓から校長室を覗く子ども達。

大栄「押すなよ」

トット「押してないわよ」

泰「シッ、静かに！」

トット「はい」

二人の表情からは許可してもらえるか読

み取れない。

トモ工学園・講堂前

講堂から出て来るミヨちゃんに駆け寄る

一同。

大栄「どうだった？」

ミヨ「電車が来るの、夜うんと遅いんだって

……」

それを聞いて、がっかりする一同。

ミヨ「だから、どうしても見たい人は……」

一同「!?」

ミヨ「一回家に帰って、ご両親に『いい

よ』って言われたら、夏掛けとパジャマを

持って、学校にいらっしゃって！」

歓声を上げる子ども達。一人寂しそうに、

その場を離れる泰明ちゃん。

大森区田園調布・山本家・玄関

日本庭園のある立派な屋敷。帰宅する泰

明ちゃんを婆やが出迎える。

山本家・脱衣所・浴室（午後4時）

泰明ちゃんのお母さん（和服）が着替え

を持って入ってくる。

泰明母「泰明さん、お着替え置いておきます

からね」

泰明「はい」

浴室から泰明ちゃんの返事が聞こえる。

着替えと入れ替えに、脱衣を回収するお

母さん。汚れ一つない服を見て、複雑な

表情を浮かべる。

山本家・泰明ちゃんの部屋（洋室）

ベッドの上でうつ伏せになり、右足を

摩つてもらう泰明ちゃん（浴衣）。

泰明「お母様……」

泰明母「？」

泰明「今日の夜……」

泰明母「なあに？」

手を止めるお母さん。

泰明「……ううん、何でもない」

泰明母「……そう」

泰明ちゃんが悩みを打ち明けてくれない

ことを残念に思うお母さん。再び手を動

かし始める。

トモ工学園・講堂（夜）

はしゃいでいる子ども達。何人かのグ

ループに別れて、緑色のテントを立てて

いる。みんなが骨組みを組んでいる間、

トットちゃんはテントカバーにくるまっ

てお化けの真似。

トット「お化けだぞ」

作業中の泰ちゃんとぶつかり、せつかく

組んだ骨組みがバラバラになる。

トット「ごめん、泰ちゃん」

泰「トットちゃんも、遊んでばかりいないで手伝ってよ」

トット「はい」

× × ×

完成した各々のテントを訪問して、ふざけ合う子ども達（バジャマ姿）。

大栄「トントントン」

天寺「開けておくれ」

サッコ「はい」

トット「ダメ！ 狼よ！」

大栄「おまんじゅうもあるよ」

右田「おまんじゅう？」

おまんじゅうにつられて、テントの入り口を開けてしまう右田くん。

大栄・天寺「ガオー!!」

サッコ・トット「キヤー！」

右田「うわあ!!」

別のテント。

税所「ごめんください」

高橋「どちらさんですか？」

泰「酒屋です」

ミヨ「ツケを払ってください」

高橋「やっぱり留守です」

青木「ウフフフ」

× × ×

テントの中で夏掛けにくるまる子ども達。しばらくは笑い声やヒソヒソ声が聞こえていたが、やがて静まる。

同・（午前5時）

小林「電車が来たぞー」

目を覚ますトットちゃん。テントから顔を出してみると、既に他の子どもたちが校庭に向かって走っているところ。トットちゃんも急いでテントから這い出す。

トモ工学園・校門前

通りにかけて出る子ども達。小林先生もいる。朝霧の中からトラクターに牽引された電車が姿を現す。幻想的な光景に息を飲む子ども達。

トモ工学園・校庭

丸太を電車の下に敷いて校庭の隅へと移動させる。

泰「先生、あれは何ですか？」

小林「コロと言って、丸太を転がす力を応用して電車を動かすんだよ」

トット「何年生の教室になるの？」

質問には答えずに、思わせぶりに微笑む

小林先生。

作業員たち「よいしょ！ よいしょ！」

朝日が昇り、新しい電車を照らす。子どもたちは小林先生の体にしがみついて、嬉しそうに笑った。

田園調布駅前（午前8時）

婆やに手を引かれ、銀杏並木を歩いていく泰明ちゃん。（ランドセルは婆やが持っている）

田園調布駅・歩廊

同じ年ぐらいの女の子の存在に気がついて、急に恥ずかしくなる泰明ちゃん。

泰明「婆や、手を離して……」

婆や「いけません。泰明様が線路に落っこちたら大変でございます」

泰明「……」

トモ工学園・校門前

「トットちゃんの木」の枝にぶら下がり、逆さまになって遠くを見つめるトットちゃん。

トット「!!」

何かを見つけて木から飛び降りる。

トット「泰明ちゃん！」

泰明「？」

婆やと歩く泰明ちゃんの手を、有無を言わせずつかんで引く張って行くトット

ちゃん。

婆や「ああ、これを……」

トット「任せて！」

婆やからランドセルを受け取り、泰明ちゃんの方へ戻る。

トモ工学園・電車の図書室

ずらりと並ぶ本に驚く泰明ちゃん。

トット「電車の教室じゃなくて、図書室だったの！」

既に他の子どもたちが読書を始めている。立ったまま読んでいる子もいて、まるで

満員電車。嬉しそうに本の背表紙に触れる泰明ちゃん。小林先生が隣に来てウインクする。笑顔になる泰明ちゃん。

小林「みんな、ちよつといいかい？ 暑くなつたから、プールに水を入れようと思うんだ！」

子ども達「わーい！」

嬉しくて大はしゃぎの子どもたち。

トット「でも、水着を持って来ないわ……」

小林「心配いらないよ。お昼になつたら講堂に行つてごらん」

訳が分からず、顔を見合わせるトットちゃんと泰明ちゃん。

トモ工学園・講堂（午後1時）

我先にと服を脱いでいる子どもたち。それを入り口から見て、呆気にとられているトットちゃんと泰明ちゃん。

大栄「おっ先ー！」

スッポンポンになつた子どもが講堂の階段を駆け下り、プールに飛び込む。

高橋「僕たちも行こうよ！」

みんなが服を脱ぎ始める中、泰明ちゃんだけがためらっている。

トット「泰明ちゃんは泳がないの？」

泰明「いいよ。本読んでるから」

一人講堂を去ろうとする泰明ちゃん。その時、トットちゃんが泰明ちゃんにつかつかと歩み寄る。

トット「恥ずかしいわよ！ ほら！」

泰明「!!」

泰明ちゃんの目の前で上着を脱ぎ、裸ん坊になるトットちゃん。

トット「みんな一緒でしょ？」

泰明ちゃんに手を差し伸べる。

泰明「……」

泰明ちゃん、トットちゃんの手を取り、講堂の中へ戻つて行く。

トモ工学園・プール

最後に手を繋いで講堂から出て来るトットちゃんと泰明ちゃん。白く痩せた泰明

ちゃんの左腕と右足。プールでは子ども

達が水を掛け合つたり、水しぶきを上げて走つたり、潜つたり、大騒ぎしている。

トットちゃんと泰明ちゃんも、おっかなびっくりプールに入る。

トット「!!」

つま先から、ひんやりとした水の感覚が伝わってくる。思い切つて肩まで一気に入るトットちゃん。

トット「気持ちいい！」

泰明ちゃんも覚悟を決めて水の中へ。濡れまいと必死に手足を動かすが、意外なことに水上にいる時よりも、体が軽くて自由に動ける。

泰明「体が、軽い……」

笑顔を見せる泰明ちゃん。次の瞬間、その顔にバシヤツと水が掛けられる。犯人はトットちゃん。

トット「ヒヒヒヒ」

泰明ちゃんもお返しして、水の掛け合いが始まる。（この辺りからミュージックシーンへ。水をイメージした透明感のある曲に乗せて、子ども達を人魚のように美しく見せる。他のシーンと絵のタッチを変えて芸術的に）

8月 黒柳家・居間（午前10時）

電話で誰かと連絡を取るトットちゃん。
トット「それじゃあ計画通りに」

黒柳家・玄関

誰にも見つからないように、こっそりと扉を開けるトットちゃん。しかし、そこにロッキーが現れる。

トット「!!」

黒柳家・勝手口

コンクリートの洗い場で、洗濯板を使って服を洗うママ。玄関の方からロッキーの声がして、

ママ「？」

黒柳家・玄関

ママが玄関の方に回ると、トットちゃんが必要にロッキーを抑えて静かにさせようとしている。

トット「シート! 吠えちゃダメ!」

ママ「どこ行くの? 今日から夏休みよ」

ギクッと固まるトットちゃん。

トット「で、田園調布の泰明ちゃんのお家」

嘘が悟られないように、靴紐を見つめたまま答える。トットちゃんの持っている巾着袋に気がつくママ。

ママ「？」

トット「!!」

あわてて巾着袋を隠すトットちゃん。計画がバレたと思い、ギョッと目を瞑る。

ママ「晩御飯までには帰るのよ」

外出許可が出て拍子抜けするトットちゃん。すぐに笑顔になつて、

トット「行つてまいります!」

門から出ていくトットちゃんを優しく見つめるママ。

大井町線の電車内(北千束〜自由ヶ丘)

ワクワクするトットちゃん。

トモ工学園・校庭

息を切らして校門をくぐるトットちゃん。誰もいない校庭の花壇の前に、泰明ちゃんがボツンと立っている。

トット「ヒヒヒヒ」

泰明「ヒヒヒヒ」

× × ×

物置から借りてきた梯子を、トットちゃんの本に立てかける。先に乗って登るトットちゃん。巾着袋を枝にかけてから梯子を押さえて、

トット「いいわよ、登ってみて!」

しかし、泰明ちゃんは左腕と右足がマヒしているので一段も登れない。素早く下

に降りるトットちゃん。泰明ちゃんのお尻を後ろから押して手伝うが、グラグラ揺れて、梯子ごと倒れてしまう。膝を擦りむき、悲しそうに俯く泰明ちゃん。想像以上の難しさに、トットちゃんも弱気になるが、気を取り直す。泰明ちゃんの正面に回ると、ほつたを膨らませて面白い顔をする。

トット「待ってて。いい考えがあるの!」

物置の方へ走っていくトットちゃん。

トモ工学園・物置

物置の扉を開けるトットちゃん。奥の方に脚立を見つける。(この時、三輪自転車も見せておく) 脚立を引きずって運ぶトットちゃん。

トモ工学園・校庭

トット「いい? 怖くないのよ。もうグラグラしないんだから」

怯えた目で脚立を見る泰明ちゃん。それから、汗びつしよりのトットちゃんを見る。泰明ちゃんも汗びつしよ。じつと木を見上げてから、覚悟を決めて一段目に左足(健足)をかける。強くなる陽射し。泰明ちゃんのお尻を後ろから持ち上げて、頭で支えるトットちゃん。二人と

も滝のような汗を流しながら、一段一段登っていく。何も考えず、ただひたすら上を目指して。

トット「ばんざい！」

とうとう脚立のてっぺんまで登る二人。息を切らしながら笑顔を見せて喜ぶ。しかし、脚立から木の上にはとても移れそうにない。ほんの少ししか離れていないのに。手を伸ばせば届きそうなのに。見つめ合う二人。急に泣きそうになるトットちゃん。必死に涙をこらえる。

トット「寝る格好になってみて。引つ張ってみる」

泰明「うん」

トットちゃんが先に木に飛び移り、泰明ちゃんが脚立の上で腹這いになる。木の上から泰明ちゃんの右腕（健手）を掴み、全力で引つ張るトットちゃん。一層脚立が傾き、不安定になる。渾身の力で引つ張り上げるトットちゃん。泰明ちゃんも、あらん限りの力で手を握り返す。入道雲が日差しを遮り、脚立の傾きが限界に達する。目を閉じて微笑み、命を預ける泰明ちゃん。トットちゃんも自分の全生命をかけて引つ張り上げる。次の瞬間、脚立が倒れ、木の幹に止まっていた蟬が飛び立つ。

蟬

「ジツ!!」

木の上で向かい合う二人の姿。汗でびちゃびちゃの前髪を撫で付けるトットちゃん。

トット「いらつしやいませ…」

泰明ちゃんも恥ずかしそうに笑う。

泰明「おじゃまします…」

木の上から周りを見回して、

泰明「木に登るって、こういうことか…」

二人とも息を切らしながら満足そうに笑う。

× × ×

仲良くおにぎり（大きくていびつな形）を食べる二人。

トット「先生？」

泰明「うん。ボクみたいに、体の悪い子が通える学校を作るんだ」

トット「へえ。泰明ちゃんなら、きつとなれるわね」

少し照れる泰明ちゃん。

泰明「テレビジョンって知ってる？」

トット「テレビジョン？」

泰明「米国に留学しているお姉ちゃまから聞いたんだけど、世界を平和にする魔法の箱なんだって」

トット「魔法の箱？」

泰明「それが日本にくれば、家にいて国技館

のお相撲が見られるんだって」

トット「箱に…、お相撲さんが入るの？」

泰明「トットちゃんも、テレビに出られるかもね」

トット「わたし、箱に入るの嫌」

泰明「そうかなあ。面白いと思うんだけど

なあ……」

爽やかな風が吹き、木の梢と二人の髪の毛を揺らす。満足そうに笑う二人。蟬が方々で鳴いている。

山本家・玄関（午後4時）

帰宅する泰明ちゃん。

泰明「ただいま帰りました」

山本家・脱衣所

着替えを持ってきたお母さん。泰明ちゃんの脱衣を回収しようとして動きが止まる。たたまれてあった脱衣を広げると、木登りの時に付いた汚れが。泰明ちゃんも他の子どもたちと同じように服を汚して遊んだことを、心の底から嬉しく思うお母さん。

泰明「お母様ごめんなさい。お洋服汚しちゃった」
浴室から謝る泰明ちゃん。お母さん、嬉し涙をこらえながら、

泰明母「あらあら本当、こんなに汚して。お

洗濯するのが大変なこと」

泰明「お母様」

泰明母「なあに？」

泰明「僕…、一人で学校に行けるよ。靴も一

人で持てるよ」

泰明母「そうね。泰明さん、大きくなったものね。本当に…大きく…」

脱衣に顔を押し付け、声を殺して泣くお母さん。

洗足池(午後7時) 日替わり

縁日。にぎやかな太鼓やお囃子の音。パパとママと手を繋いで小島にかかる橋を渡るトットちゃん(浴衣)。多くの出店が並んでいる。色とりどりの水中花。型抜きにハッカパイプに綿あめ、べっこう飴。山吹鉄砲や金の輪に日光写真。

パパ「トット助、好きなものを買ってあげるよ」

トット「いいの？」

ママ「今日だけ特別よ」

トット「わーい！」

興奮したトットちゃんは一つ一つのお店に頭を突っ込んでいく。そして、フワフワの黄色いヒヨコを売る店の前で足を止める。小さい尻尾を震わせて、大きな声

で鳴くヒヨコ。

ヒヨコ「ピイピイ」

トット「うわあー」

パパとママの方を見るトットちゃん。

トット「わたしヒヨコにする！」

しかし、パパとママは困った顔をしてから、トットちゃんの手を引っ張り、その場を去ろうとする。

ママ「さ、行くわよ」

パパ「あっちに面白いのがあるぞ」

トット「どうして？ 何でも買ってくれるって言っただじゃないの。わたし、ヒヨコが欲しい！」

パパとママの服の裾を掴んで、ヒヨコの方に引っ張るトットちゃん。

ママ「縁日のヒヨコは体が弱いから止しなさい」

トット「大丈夫よ！ トットちゃんが面倒みるから！」

パパ「パパ達は、トット助が泣くことになるから言ってるんだよ」

トット「嫌だ嫌だ！ ヒヨコがいいの！」

ママ「ダメなものダメ！ 言うこと聞けないなら、おうちに帰るわよ」

パパとママの服から手を離し、メソメソ泣き出すトットちゃん。諦めたかに見えるが、弁天様の前まで来ると、もう一度

しゃくりあげながら言った。

トット「お願いします。一生のお願い。死ぬまで何か買ってって言いません。あのヒヨコ買ってください」

あまりの頑固さに、とうとう根負けしてしまふパパとママ。

9月 黒柳家・庭(午前7時)

棧つきの特別製の箱の中で嬉しそうに鳴くヒヨコ。寒くないように電球で温められている。それを不思議そうに見ているロッキー。

トット「ロッキー、食べちゃいけませんよ」
ママ「今日から学校でしょう？ 早く準備なさい」

トット「はい」

ベランダから家に入るトットちゃん。

トモ工学園・校門前(午前8時半)

ランドセルを背負って一人で登校する泰明ちゃん。(足取りは重いが表情は晴れやか) トットちゃんがやってくる。

泰明「トットちゃん！」

トット「泰明ちゃん！」

大冒険の時のように照れ笑いする二人。

トット「行こう！」
泰明「うん！」

手を繋いで校門をくぐる。

トモ工学園・電車の教室（午前9時）

夏休み明けでザワツついている子ども達。
そこに小林先生が入ってくる。

小林「おはようございます」

子ども達「おはようございます！」

小林「夏休み、楽しかったかい？」

好き好きに返事をする子ども達。

小林「そうかいそうかい。今日から新学期。
新しいことに挑戦するよ」

トモ工学園・講堂（午前9時半）

子ども達「リトミツク？」

小林「そう。リトミツク」

おもむろに靴と靴下を脱いで裸足になる

小林先生。

小林「まずは裸足になってごらん」

トット「どうして？」

小林「これから自分の体を使って、ピアノみたいにリズムを表現するんだよ。ピアノを弾くときに手袋をはめたりしないだろう？」

納得して靴下を脱ぎ始める子どもたち。

× × ×

小林（歌）「こま こま こま こま まわれ

まわれ まわれ こま こま まわれ」

曲に合わせて足で拍子を取りながら、こ

マのようにくるくる回る子ども達。手を水平にのばす子もいれば、上にのばす子もいる。バランスを崩して転んでしまう子も。（まだ歌わない）

小林「二人一組！」

あわてて近くにいる者同士、右手と右手をつなぐ子ども達。二人一組で回りながら歌い出す。

子ども達（歌）「こま こま こま こま まわれ まわれ まわれ まわれ こま こま まわれ まわれ」

小林「みんなで大きなコマになろう！」

全員で手をつなぎ、一つの輪になる子どもたち。大はしやぎで元気に歌う。

子ども達（歌）「こま こま こま こま まわれ まわれ まわれ まわれ こま こま まわれ まわれ」

× × ×

ピアノの音を、白墨で講堂の床に書き起こす子どもたち。トットちゃんもスラスラと音符を記していく。床一面に書かれた音符が、まるで一つの絵画のようにも見える。

小林（モノ）「はじめにリズムありき。リズム

ミカルな心と体は美しく自然の法則に従います。池の中に飛び込む蛙を見た者は、芭蕉一人ではなかったらうに。世に恐るべき

ものは目あれど美を知らず、耳あれど楽を聴かず、感激せざれば燃えもせずの類である」

黒柳家・外観（午後3時半）

トット（歌）「こけこっこ にわとりが こけこっこ ないてるよ」

家の中に入らず、まっすぐ庭へ向かう。

黒柳家・庭

トットちゃんの手の平の上、動かなくなっているヒヨコ。

トット「どうして？」

突然の死を受け入れられない様子。

ママ「トットちゃんのせいじゃないのよ。ヒヨコさんも頑張ったんだけど……」

どれだけ見つめても、ヒヨコは目を閉じたまま。トットちゃんの目に涙が溢れる。

ママ「お墓、作ってあげましょうね」

シャベルで池の横に穴を掘り、両手でそつと埋葬する。小さな花を供えて手を合わせるトットちゃん。その涙をロッキーが舐めて慰める。ロッキーの首に抱きつき、声をあげて泣くトットちゃん。

空っぽの箱にヒヨコの黄色い羽。

トモ工学園・校庭（午後2時半） 日替わり

トットちゃんの木の下。泰明ちゃんとトットちゃんが座っている。

トット「すぐに死んじゃって、ヒヨコさんかわいそう…」

どう励ませばいいのかわからない泰明ちゃん。じつくり考えてから、

泰明「ヒヨコさんは楽しかったと思うよ」

意外な言葉に顔を上げるトットちゃん。

泰明「トットちゃんに会えたし、頑張って生きたんだから。きつと天国に行つたんじゃないかな…」

遠くを見つめながら呟く泰明ちゃん。

トット「天国ってどこなの？」

泰明「すごくいいところだよ。天国ではみんな天使になれるんだって、本に書いてあった。ヒヨコさんも、自由に空を飛んでいるんじゃないかな」

それを聞いて安心するトットちゃん、笑顔を取り戻す。それからふと思いついて立ち上がる。

トット「ねえ、今からパパの練習所に行つてみない？」

泰明「いいの？」

トット「大丈夫。わたしに任せて！」

トモ工学園・物置前

小使いのおじさんが竹箒をしまいに来て、

物置に貼られた手紙に気がつく。手紙には『じてんしゃかります。トット』と書かれている。

トモ工学園（自由ヶ丘）練習所（荏原町）

三輪自転車のペダルをこぐトットちゃん。大人用なので立ち漕ぎ。後部の荷台には泰明ちゃんが座っている。

泰明「勝手に借りて怒られない？」

トット「大丈夫よ。お手紙書いて来たから！」
急な上り坂。トットちゃんの額に汗。

泰明「大丈夫？」

トット「大、丈、夫！」

坂を上り切ると、長い下り坂に出る。坂

の終わりに、西洋館風の少し傾いた新交響楽団の練習所が見えてくる。

トット「行くわよ！つかまって！」

泰明「うん！」

風を切つて坂を下る三輪自転車。通りの店先に飾られた風車が一齐に回る。

トット「キヤー！」

泰明「ワァー！」

二人の心も風のように解放されていく。

東京市・荏原区・新交響楽団の練習所

練習室の窓の下までやって来るトットちゃんと泰明ちゃん。新交響楽団が

ヨハン・シュトラウス作曲の『皇紀2600年奉祝曲』を練習している。

トット「日本のお誕生日をお祝いする曲ですって」

泰明「皇紀2600年のこと？」

トット「そうその何とかつての。ローゼンシュトゥックさんっていう、とっても優しいおじさんが指揮者なのよ」

泰明「へえ」

次の瞬間、烈火のごとく怒り出すローゼンシュトゥック。コンサートマスターのトットちゃんのパパと、演奏について口論になる（ドイツ語が堪能な斎藤さんを介して）。

泰明「本当に優しいの？」

トット「ちよつと怒りっぱいけどね」

苦笑いするトットちゃん。

トット「グーテンターク！」

トットちゃんに気づいて、ついつい表情が緩むローゼンシュトゥック。

ローゼ「コニチワ、トットさん」

窓ぎわまでやってきてトットちゃんを抱き上げる。

ローゼ「オオキクナリマシタネ」

トット「ローゼンシュトゥックさんこそ、日本語が上手になったわ」

パパ「君は？」

泰明「こんにちは。山本泰明です」
パパ「やあ、よく来たね」

そこへ新聞の夕刊を手に楽団の関係者が
駆け込んでくる。

楽団員A「吉報！ 吉報！」

トット「きつぽうつてなあに？」

泰明「いい知らせつてことだよ」

集まって夕刊を広げる一同。紙面には日
独伊の三国同盟が報じられている。

楽団員B「独国がいれば百人力だ」

楽団員C「これで米国も、少しはおとなし
くなるだろう」

活気付く楽団員たち。

パパ「おい！」

強い語気で楽団員たちを諫める。ハッと
して、ローゼンシュトゥックに注目する楽
団員たち。トットちゃんを床に下ろす
ローゼンシュトゥック。

ローゼ「気にすることはありません。政治が
どうあるうと、私はタクトを振り続けるだ
けです。音楽に国境はないのですから（独
語）」

ローゼンシュトゥックの毅然とした態度に、
音楽家の崇高な魂を見るパパ。

ローゼ「さあ、練習を再開しましょう。可愛
いお客様がお待ちかねですよ（独語）」
窓ぎわのトットちゃんと泰明ちゃんを見

て、うなずくパパと楽団員たち。タクト
を握って合図をだすローゼンシュトゥック。
美しいハーモニ―が練習所を包む。感動
するトットちゃんと泰明ちゃん。新聞に
写る日の丸と鉤十字とイタリヤ王国の旗。

10月 トモ工学園・校庭（午後2時半）

サッコ「もういいかい？」

子どもたち「もういいよ！」

トモ工学園・小林先生の自宅と幼稚園の裏手
サッコ「トットちゃん見つけ！」

建物と建物のわずかな隙間にビタリとは
まって、抜け出せなくなっているトット
ちゃん。

トット「たひゅけて（助けて）」

一列になってトットちゃんの手を引く張
る子ども達（サッコ、ミヨ、税所、青木）。

女の子達「よいしょ！ よいしょ！」

サッコ「ダメだわ」

ミヨ「応援を呼んできて！」

領いて校庭の方へ走っていく青木さん。

× × ×

一同「うんとこしょ！ どっこいしょ！」

大栄くん、右田くん、泰ちゃん、天寺く
ん、泰明ちゃんも加わり、『おおきなか
ぶ』のようにトットちゃんを引っ張る。

その度にコミカルに歪むトットちゃんの
顔。スポン！ と隙間から勢いよく抜け、
全員地面に倒れこむ。

大栄「ここに隠れるの…、禁止にしようぜ」

右田「引つ張りすぎて腹減っちゃったよ…」

そこへ小林先生の大きな声が聞こえる。

小林「だからそれがいけないんです！」

ビクツと顔を見合わせる子ども達。

トモ工学園・小林先生の家・勝手口

勝手口に身を近づけて、中の様子を窺う
子ども達。

小林「どうしてあなたは高橋くんに『しっぱ
いがある』なんて言ったのですか！」

トモ工学園・小林先生の家・台所

大石「そんなに深い意味ではなく、高橋くん
が目に入って、可愛いと思ったので…」

小林「あなたにとっては些細なことでも、高
橋くんにとっては深い意味を持つのです！

僕たちが彼に対して、どんなに気を配って
いるか、あなたにはわからないのですか！」

トモ工学園・小林先生の家・勝手口

この会話を聞いて、昼間のことを思い出
すトットちゃん。

トモ工学園・電車の教室（回想）

進化論の授業。

大石「だから今でも、尾氈骨というのが残っているんです。つまり、人間にも昔はしっぽがあった」

子ども達「ええー!？」

お互いの尾氈骨を確かめて大騒ぎになる子どもたち。

大石「まだしっぽの残っている人もいるかな？ 高橋くんはあるんじゃないの？」

真剣な顔で立ち上がり、小さい手を必死に振って否定する高橋くん。

高橋「ありません！」

子ども達「アハハハハハハハ」

悪意なく笑う子ども達。大石先生も子ども達にうけて嬉しそう。教室の後ろで見学していた小林先生だけが顔をしかめている。

トモ工学園・小林先生の家・台所

小林「しっぽがあると言われて、高橋くんがどんな気持ちになるか、あなたは一度でも考えたことがありますか？」

大石「私が、本当に間違っていました。高橋くんは何と謝ったらいんでしょう（涙声）」

質問には答えずにじっと何かを考えてい

る小林先生。

トモ工学園・小林先生の家・勝手口

勝手口から身を離す子ども達。高橋くんに想いを馳せるトットちゃん。

11月 トモ工学園・校庭（午前10時）

運動会の開始を告げる花火が上がる。万国旗や子どもたちが作った紙の鎖が空を飾り、レコードから流れるマーチが運動会を盛り上げる。校庭をぐるりと行進する子ども達。トットちゃんは白のブラウスと紺のショートパンツ姿。応援席にはトットちゃんのパパとママ。隣には泰明ちゃんのお母さんと婆やもいる。互いに会釈を交わして。

× × ×

紅白に分かれて競技が始まる。（トットちゃんは紅組）最初は二人三脚。トットちゃんと泰明ちゃんが一緒に走る。泰明ちゃんの左足（健足）と、トットちゃんの右足を結ぶ。

小林「位置について、ヨイ、ドン！」

他の組よりは遅いけど、トットちゃんの力を得て、いつもより早く走ることができ泰明ちゃん。子ども達の懸命な走り

ママ・泰明母「頑張れー!」

声が重なり、恥ずかしそうに会釈を交わすお互いの母親。二人がゴールすると、泰明ちゃんのお母さんは感動のあまり泣いてしまう。その肩に手をかけるママ。（もらい泣きしている）

ママ「泰明ちゃん、立派ですわね」

泰明母「ええ、徹子さんのおかげですわ」

× × ×

最後は鯉のぼり競争。高橋くんの組がスタートする。校庭の真ん中に寝かされている鯉のぼりの口から中に入る子ども達。ゴソゴソと胴の中を行ったり来たりすると、鯉のぼりがまるで生きているようにうごめく。一番先に尻尾から飛び出したのは高橋くん。予想外の展開にどよめく応援席。他の子どもがようやく鯉のぼりから顔を出した頃、高橋くんが一着でゴール。

トット「うわあー!」

泰明「すごい!」

大石先生が高橋くんに一等の景品（畑でとれた野菜）を渡す。

大石「高橋くん、おめでとう!」

野菜を手にも、満足そうに笑う高橋くん。

小林「鯉のぼり競争は大石先生が考えたんだぞ」

高橋「すごい面白かった！」

大石「うん。またやろうね（涙声）」

二人のやりとりを微笑みながら見つめる小林先生。

12月 トモ工学園・電車の教室（午後1時）

だるまストーブが教室を温めている。

トットちゃんが肥後守で泰ちゃんの鉛筆を削っている。

トット「わたし、泰ちゃんのお嫁さんになってあげるね」

泰「スパイになるんじゃないかったっけ？」

トット「お嫁さんでスパイなの」

泰「おしゃべりな子は、スパイになれないんじゃないかなあ」

トット「!!」

二人の様子を、憧れとも嫉妬ともつかない複雑な表情で見つめる泰明ちゃん。ふと窓の外を見ると、チラチラと白いものが、曇りガラスを袖で拭いてよく見るとそれは雪。外を走っていた大栄くんが教室に入ってくる。

大栄「雪だ！ 雪！」

窓ぎわに押し寄せる子ども達。空から降る雪を見て笑顔になる。我先にと教室を出て、雪を手で受け止めようとしたり、口を開けて食べようとする。元気に走り

回る子ども達。

昭和16年4月

自由ヶ丘駅改札（午前8時）

駅前で行われている出征式を不安そうに見つめる駅員のおじさん。そこへトットちゃんがやって来る。

トット「おじさん、今日からわたし二年生よ！」

駅員「おめでとう。トットちゃんもすつかりお姉さんだね」

トット「そう！ わたしお姉さんなの！」

元気に走っていくトットちゃんの後ろ姿を見ながら、一句ひねる駅員。

駅員「改札を、トットと駆ける、春一番」

トモ工学園・電車の教室（午後1時）

腕相撲大会を開いている子どもたち。

トットちゃんと大栄くんが勝負している。

細いトットちゃんの腕が、太い大栄くんの腕をねじ伏せる。

一同「おお！」

大栄「痛つてえ！」

手首を押さえながら席を立つ大栄くん。ミヨ「これで4連勝！ 右田くんも挑戦しなよ」

右田「無理無理。大栄が勝てないなら、誰も

勝つてこないよ」

その時、泰明ちゃんが黙って挑戦者の席に座る。

トット「？」

泰明「僕もやってみたい」

小兒マヒの泰明ちゃんが腕相撲をすることに、「本気か？」「大丈夫？」など、不安の声をあげる子ども達。しかし、トットちゃんは少し考えてから、

トット「いいわ」

と、挑戦を受ける。

右田「じゃあ、俺審判ね」

しっかりと組まれる二人の右手。

右田「はっけよい！」

緊張する両者。

右田「のこった！」

泰明ちゃんが右腕に全身の力を込める。

真剣な表情。しかし、左腕と右足がマヒしているため、踏ん張りが効かない。苦

戦しているフリをするトットちゃん。一

気に力を抜いて、わざと負けてあげる。誰の目から見ても、わざと負けたのは明らか。

トット「参ったあ……」

右田「えっと、山本山の勝……」

右田くんが戸惑いながら軍配を上げようとしたその時、泰明ちゃんが立ち上がる。

泰明「ずるしないでよ！」

顔を紅潮させ、全身が小刻みに震えている。静まり返る教室。呆気に取られていたトットちゃん。せつかく負けてあげたのに怒鳴られて、何だか腹が立つてくる。

トット「ずるなんかしてないわよ！」

言い返した瞬間、泰明ちゃんの目に滲む涙に気がつき、言葉を失う。足を引きずりながら電車の教室を後にする泰明ちゃん。啞然と見つめる子ども達。

黒柳家・ベランダ（午後4時半）

桃色から濃紺へ変化していく空をぼんやりと眺めているトットちゃん。か細い声で歌っている。

トット（歌）「ひがくれた はよかえろ
しがでた はよかえろ」

ロッキーがボールをくわえて遊んで欲しい。尻尾を振るが、気づいてもらえない。居間で洗濯物をたたみながら見ていたママ。何か悩み事があるのは察したが、あえて声はかけない。

5月 九品仏への散歩道（午前11時）

手をつないで歩く小林先生と大石先生と子どもたち。みんな泰明ちゃんや高橋くんの歩くペースに合わせてゆつくり歩い

ている。

子ども達（歌）「さいた さいた さくらが
さいた きれいだな」

歌いながら泰明ちゃんをチラチラ見るトットちゃん。まだ怒っているのか気になるが、表情からは読み取れない。

サッコ「知った？」

トット「え？」

サッコ「畑の先生に会いに行くんだった」

トット「新しい先生かしら？」

九品仏の池のほとり・トモ工学園の畑

小さな畑の真ん中に電車の物置が置かれている（一輛の半分の大きさ）。

小林「この人が畑の先生だよ」

紹介されたのは見覚えのあるおじさん。（綿の半纏にメリヤスのシャツ。首には手拭い。紺の木綿のパッチ風の細いズボンに地下足袋。腰帯にはキセルがぶら下げた。頭には少し破れた麦わら帽子。日焼けした黒い顔）トットちゃん正体に気づいて、

トット「ねえ！ 先生って、いつも川のそばにいるお百姓さんじゃないの？」

畑の先生「そうだよ。菜の花が咲いてるあすこの畑。あれがうちのだから」

トット「わあ！ おじさんが畑の先生なの

ね！」

知っている人が先生で喜ぶ子ども達。

畑の先生「先生なんてやめてくれ。こそばゆくつてしょうがねえ」

小林「いや、これから畑の作り方をあなたに教えてもらうのだから。畑のことについては、あなたが先生です」

畑の先生「そうかい？ じゃまあ、始めつかな」

× × ×

腰を屈めて草を抜く手本を見せる畑の先生。見よう見まねで雑草を抜く子ども達。しぶとい根っこに悪戦苦闘。しかし、土の感触が気持ちいいのか、みんな楽しそう。ミミズを見つけた天寺くん。それを見て逃げ出す税所さん。トットちゃんも頑張つて大きい草を抜く。ふと見ると、泰明ちゃんがうまく抜けなくて苦労している。手伝おうか迷っていると、泰明ちゃんと目が合う。お互いすぐに目を逸らして、作業を続ける。

6月 トモ工学園・校庭（午後3時）

鉄棒に両手でぶら下がり、元気のないトットちゃん。図書室の電車の前で本を読んでいる泰明ちゃんと仲直りする機会を窺っている。その時、校門の前に国民

学校の悪ガキたちが現れ、「はやし歌」を歌い始める。

悪ガキたち「トモエ学園ボロ学校！ 入ってみても、ボロ学校！」
トット「!!」

歌い終わると、通りの方へ逃げて行く悪ガキたち。

トモエ学園・校門前

トモエの子ども達が通りに出てみると、少し離れたところに悪ガキ5人が立っている。

悪ガキたち「トモエ学園ボロ学校！ 入ってみても、ボロ学校！」

学校の悪口を言われて、ムツとするトモエの子ども達。怖がる子もいる。

トット「文句があるなら、こっちまで来て言いなさいよ！」

サッコ「先生たちに言いつけるわよ！」

注意するが、悪ガキたちはヘラヘラ笑って挑発するばかり。その内の一人が泰明

ちゃんや高橋くんの障害に気がつく。

悪ガキA「見ろ！ やっぱりトモエは変な学校」

悪ガキB「そんな体でどうやって戦う？」

悪ガキC「兵隊になれない穀潰し！」

心無い言葉に怯える泰明ちゃん。トット

ちゃんが守るように前へ出る。

トット「兵隊さんになれなくなつて、泰明ちゃんは学校の先生になれるわ！」

悪ガキD「女は黙つてろ！」

悪ガキDが石を投げる。咄嗟に泰明ちゃんがトットちゃんの体を引いて、地面に伏せさせる。校門の木にぶつかり、転が

る石。

大栄「あいつら……」
拳を握り前に出る大栄くんを、他のみんなが止める。

ミヨ「喧嘩はダメ」

税所「校長先生が言つてたでしょ」

大栄「でも……」

ますます調子にのる悪ガキたち。再びはやし歌を歌い始める。

悪ガキたち「トモエ学園ボロ学校！ 入ってみても、ボロ学校！」

悔しがるトモエの子ども達。その時、

トットちゃんがパツと閃いて、大声で歌い始める。

トット「トモエ学園いい学校！ 入ってみても、いい学校！」

あまりの声の大きさと意外な反響に、言葉を失う悪ガキたち。

トット「トモエ学園いい学校！ 入ってみても、いい学校！」

嘩然と見ていた泰明ちゃんも、トットちゃんと一緒に歌い始める。

トット・泰明「トモエ学園いい学校！ 入ってみても、いい学校！」

やがて他のクラスメイトたちも加わり大合唱が始まる。

子ども達「トモエ学園いい学校！ 入ってみても、いい学校！」

肩を組み、歌いながら悪ガキたちに迫るトットちゃんたち。通りにいる大人たちも何事かと注目する。

悪ガキE「くそつ。行くぞ！」

悪ガキたち、怯んで逃げて行く。その後も歌い続けるトットちゃんたち。

子ども達「トモエ学園いい学校！ 入ってみても、いい学校！」

悪ガキたちのことはどうでも良くなり、歌うこと自体が楽しい様子。

トモエ学園・講堂前

小使のおじさんが「追い出しの鐘」を

鳴らそうと木槌を振り上げるのを、小林

先生が止める。そして子ども達の歌に耳を傾け、本当に嬉しそうに微笑む。青い

空に子どもたちの歌が吸い込まれて行く。

子ども達「トモエ学園いい学校！ 入ってみても、いい学校！」

8月 京橋区・銀座・街角（午前11時）

街灯には日の丸や日章旗が掲げられ、大勢の人で賑わっている。

銀座・おもちゃのキンタロウ（午後13時）

のぞきカラクリの穴から中を覗くトットちゃん。蛇腹を広げると、雷門から浅草寺へ続く仲見世通りが立体的に広がっていく。

トット「わーお」

銀座・街角（午後14時）

買ってもらったのぞきカラクリを手に、スキップしているトットちゃん。後ろを歩くパパとママが微笑ましく見つめる。通りの向こうから、男がママを睨みつけている。吸つていたタバコ『金鶏』を路上に投げ捨て、足で踏み潰す。

警官「ご婦人、待ちなさい」

ママ「!?」

突然、背後から呼び止められるママ。見ると、白い制服の警官が立っている。

警官「この非常時に電髪とは何事か。質素儉約が銃後の務め。華美な服装も自粛してもらわなければ困る」

困惑して迎いを見回すママ。ほとんどの

女性が銃後髪にモンペ姿の装い。トットちゃんも、ただならぬ空気に怯えている。

ママ、警官に頭を下げて、
ママ「申し訳ありません。以後気をつけます」

そこへパパが割って入る。

パパ「謝る必要などない」

警官「何!？」

ママ「あなた」

パパ「電髪や洋服を禁止する方針はあっても、法令はないはずだが」

警官「なんだ貴様は?」

パパ「夫だ」

臆することなく答えるパパ。

パパ「さあ、行こう」

ママを連れてその場を去ろうとする。

警官「待て!」

警官がパパの肩を掴み、一触即発の状態に。その時、トットちゃんの声が、
トット「わあー! すこい!」

のぞきカラクリを覗いているトットちゃんに注目する一同。

トット「お巡りさんも見えて見て!」

のぞきカラクリを強引に渡される警官。

警官「なんだあ?」

ついつい言われるままにカラクリの穴を覗いてしまう警官。

警官「おおー! これは見事!」

ハッと気づいた時にはもう遅い。パパもママもトットちゃんも、その場からいなくなっている。滑稽な姿を通行人に笑われて赤面する警官。

銀座・竜田タクシー車内

ほとと一息ついているパパ、ママ、トットちゃん。

ママ「あなた、お願いだから無理しないでちょうだい」

パパ「ごめんな、トット助。また今度買つてあげるからね」

トット「うん!」

タクシーが交差点で停車する。割烹着を着てタスキをかけた国防婦人会の女性達が、日の丸の小旗を振りながら大通りを行進していく。不穏な空気を遮るように、タクシ一の窓を閉めるパパ（ハンドル式）。

10月 トモ工学園・講堂（正午）

お弁当箱を開けるトットちゃん。おかずは海苔と梅干しだけ。ご飯も少ない。

トット「海苔は海のもので、梅干しは山のものだけ!」

他の子どもも同様に質素なお弁当。

大栄「これじゃ足りないよな」

税所「わがままよ。私たちが我慢すれば、その分兵隊さんたちが美味しいものを食べられるのよ」

右田「それならボク兵隊さんになろう！」

おどける右田くんをはやし立てる一同。

そのやりとりを複雑な気持ちで見つめる

小林先生。

小林「みんな、今からご馳走を取りに行こう！」

トット「ごちそう!？」

大栄「嘘だあ」

右田「そんなのないよ」

小林「あるとも。君たちが自分で作ったご馳走だぞ?」

このヒントに子ども達もピンと来る。

九品仏の池のほとり・トモ工学園の畑

見事に実をつけているかぼちゃ、さつま芋も、大根。

子ども達「うわあー」

素手で土を掘り返して収穫する子ども達。引っこ抜いた拍子に尻餅をついたり、汚れた手で顔を拭いて、顔に土がついたり。嬉しそうに歓声をあげる。

九品仏への散歩道

カゴいっぱい収穫した野菜をお神輿のように担いで持ち帰る子どもたち。

子ども達「わっしょい! わっしょい!」

トモ工学園・校庭(午後3時)

落ち葉を使った焚き火。灰の中から新聞紙に包まれた焼き芋を取り出す小林先生(軍手)。

芋を割ると、湯気と共に黄金色

の実が。唾を飲み込む子ども達。熱い芋

をお手玉しながら、ふうふうと冷まして

皮を剥く子ども達。皮剥きに手こずる泰

明ちゃん。

トット「貸して」

泰明ちゃんの代わりに皮を剥いてあげる

トットちゃん。

トット「熱いよ」

泰明「ありがとう」

一人だけ芋に手をつけない天寺くん。

ミヨ「食べないの?」

天寺「後で猫にあげるんだ。お腹を空かせて

だから…」

ミヨ「そんなこと言ってる場合じゃないで

しょ。ダメよ、自分で食べなきゃ」

天寺「うーん…」

ため息をつくミヨちゃん。

ミヨ「はい。ミヨの分けてあげる」

天寺「ありがとう」

すると、それを見ていた他の子ども達も、天寺くんに自分の芋を分けてあげる。右

田くんも、葛藤の末ほんの少し。

ミヨ「みんなと一緒に食べよう」

天寺「うん」

笑顔を取り戻して芋を食べる天寺くん。

子ども達の優しい心に感動している小林先生。

12月8日 ハワイ真珠湾沖(午前3時半)

真珠湾上空に戦闘機影。翼に日の丸。

黒柳家・台所(午前6時半)

朝食の準備をするママ。(金属回収令により、ガス七輪が陶製になっている)い

つものように平鍋で炒る卵に味付けしよ

うとするが、砂糖が切れている。仕方な

く塩だけで味付けをする。

黒柳家・居間

ラジオで朝のニュースを聴きながら、

コーヒーミルで豆を挽くパパ。(ガスス

トープも無くなっている)

パパ「トット助、今日の天気は?」

トット「はい」

ラジオのスピーカーに耳をあてるトットちゃん。だが、なぜか音楽が流れる。

トット「パパ、天気予報流れないよ」
パパ「そうか？」

黒柳家・食卓（午前7時）

朝食を食べるトットちゃんとママとパパ。
（パン焼き機もない）ラジオから聴きえないチャイムが流れて箸を止める。
ラジオ「臨時ニュースを申し上げます。臨時ニュースを申し上げます」

只事ではないと感じたパパが立ち上がり、ラジオの音量を最大にする。

ラジオ「大本営陸海軍部、十二月八日午前六時発表。帝国陸海軍部隊は本八日未明、西太平洋においてアメリカ、イギリスと戦闘状態に入れり」

パパの顔が瞬時に青ざめる。

ママ「米英と戦争するんですか？」

パパ「ああ……」

コーヒーを一口飲むパパ。カップを持つ手が震えている。トットちゃんにもただならぬ空気が伝わる。

パパ「いいかいトット助。今日からパパとママのことをお父様、お母様と呼びなさい」
トット「どうして？」

ママ「ババママは米国の言葉でしょ？ トットちゃんがスパイだと思われたら大変ですからね」

トット「スパイ!?」
ママ「わかりましたか？」

ママに強く念押しされて、おふざけじゃないことに気がつくトットちゃん。

トット「はい、お母さま」

返事を聞いてママの表情が少し和らぐ。
ママ「どうせなら楽しまなくちゃ」

出窓に置いてあった貯金箱を食卓の真ん中に置く。

ママ「間違っと呼んだ人は、ここに一銭入れること」

貯金箱に一銭硬貨を入れるママ。

2月 九品仏・東門付近（午前10時）

散歩しているトモエの子ども達と大石先生。門の前に軍人の見張りが立っていることに気がつく。（境内では軍人達が荷物や宿泊施設に運んでいる）

大石「ちよつと待つて」

子ども達を残して事情を聞きに行く大石先生。境内に入れるか確認するが、軍人は首を横に振るのみ。その様子を不安そうに見ている子ども達。

キャラメルのある喫茶店（午後3時）

販売機に五錢玉を入れるトットちゃん。

しかし、キャラメルは出てこず、五錢玉も戻ってきてしまう。もう一度試してみることが結果は同じ。

トット「あれ？」

自由ヶ丘駅改札

改札にはいつもの駅員のおじさんではなく、駅員のおばさんが立っている。

トット「？」

駅員のおばさん「定期券ね。通つていいわよ」

言われるままに改札をくぐったものの、立ち止まって振り返るトットちゃん。不思議そうに駅員のおばさんを見つめる。

3月 黒柳家・玄関（午前7時半）

靴を履いているトットちゃん。居間からヴァイオリンの音が聞こえてくる。

トット「パパは今日もお休み？」

ママ「そうよ。はい」

ママから封筒を渡されるトットちゃん。

中を覗くと大豆が15粒入っている。

ママ「これが今日一日分のご飯なの」

トット「!?」

ママ「いっぺんに食べちゃダメよ。少しずつ良く噛んで食べなさい。それからお水を飲むのよ。お腹の中で膨らむから」

黒柳家・居間

二人のやりとりを、やるせない表情で聞いているババ。

トモ工學園・図書室（午後4時）

シトシトと雨が降っている。図書室にはトットちゃんと泰明ちゃんの二人。

トット「クスクスクス」

『屁ひり女房』の本を読んで笑っているトットちゃん。封筒の豆に手を伸ばすが既に空っぽ。封筒を逆さまにして振ってみるが結果は同じ。悴んだ手を、吐く息で温めながら泰明ちゃんに近づいて、本の題名を読み上げる。

泰明「ア、ン、ク、ル、ト、ム？」

泰明「米国の黒人奴隷のお話だよ」

トット「くくじんどれい？」

泰明「アフリカから連れてこられた、肌の黒い人たちのことだよ。白人のために無理やり働かされてるんだ」

トット「そうなの。かわいそうね」

泰明「だけど、トムは強いんだ。どんなひどい差別を受けても、決して負けない。彼の魂を鎖で繋ぐことはできない」

トット「ふーん」

泰明「トットちゃんは何を読んだの？」

慌てて『屁ひり女房』を隠すトットちゃん。

トット「は、花嫁さんのお話」

と言って、窓ぎわに逃げる。外を見ると雨が本降りになっている。

トット「……」

傘が無いのでどうしたものかと考えていると、泰明ちゃんが自分の傘を差し出して、

泰明「駅まで一緒に行こう」

トモ工學園・自由ヶ丘駅

相合傘でゆつくり歩く二人。（正面から見て、左が泰明ちゃん、右がトットちゃん。傘はトットちゃんが持っている）

トット「天気予報がないからいけないのよ」

泰明「畑の先生なら教えてくれるのにね」

空腹でお腹が鳴るトットちゃん。つられて泰明ちゃんのお腹も鳴る。

トット「お腹減ったね」

泰明「うん」

トットちゃん、元氣を出して歌う。

トット「よーくーかーめよー、たーべもーのをー、かめよかめよかめよかめよ、たーべもーのをー」

それを見て泰明ちゃんも一緒に歌う。

トット・泰明「よーくーかーめよー、たーべ

もーのをー、かめよかめよかめよかめよ、たーべもーのをー」

さらに元氣よく歌う二人。

トット・泰明「よーくーかーめよー、たーべもーのをー、かめよかめよかめよ……」

国民服「こら」

突然怒鳴られて、びつくりする二人。

トットちゃんの手から傘が落ちる。

国民服「兵隊さんが命がけで戦っているのに、食い物の歌を歌っとる場合か！」

一方的に言い捨てて去っていく男。叱られてしゅんとなる二人。

トット「だつて……だつて……、お腹が空いたんだもん……。うえーん！」

我慢できなくなつて泣き出すトットちゃん。

どうしていいかわからない泰明ちゃん。

傘を拾うとするが、膝を曲げられず、拾うことができない。

トット「えーん、えーん」

泣き続けるトットちゃんの耳に、突然

チャポン！と水の音が聞こえる。

トット「!!」

見ると、泰明ちゃんが水たまりに足を突っ込んで立っている。片足でケンケンしながら、水音でリズムを刻む泰明ちゃん。

ん。

水音「チャップチャップチャップチャップ、

チャップチャップチャップ、チャチャチャ
チャップ、チャチャチャチャップ、チャッ
プチャップチャップ」

トット「？」

意味を理解していない様子のトットちゃんを見て、もう一度同じリズムを繰り返す泰明ちゃん。すると、水音と共に、よくかめよの歌が聞こえてくる。

水音「チャップ（よー）チャップ（くー）
チャップチャップ（かーめよー）、チャッ
プ（たーべ）チャップ（もーの）チャッ
プ（をー）、チャチャチャップ（かめよか
めよかめよかめよ）、チャチャチャッ
プ（かめよかめよかめよかめよ）チャッ
プ（たーべ）チャップ（もーの）チャッ
プ（をー）」

トット「……」

泰明ちゃんの行動の意味を理解して笑顔になるトットちゃん。一緒になって水たまりの中で飛び跳ねる。

水音「チャップ（よー）チャップ（くー）
チャップチャップ（かーめよー）、チャッ
プ（たーべ）チャップ（もーの）チャッ
プ（をー）、チャチャチャップ（かめよか
めよかめよかめよ）、チャチャチャッ
プ（かめよかめよかめよかめよ）チャッ
プ（たーべ）チャップ（もーの）チャッ
プ（をー）」

（をー）」

水たまりから水たまりへ移動しながら、歌のない音楽会を続ける二人。（ここからトットちゃんの手に傘。雨に打たれることが、むしろ気持ちいい様子）

水音「チャップ（よー）チャップ（くー）
チャップチャップ（かーめよー）、チャッ
プ（たーべ）チャップ（もーの）チャッ
プ（をー）、チャチャチャップ（かめよか
めよかめよかめよ）、チャチャチャッ
プ（かめよかめよかめよかめよ）チャッ
プ（たーべ）チャップ（もーの）チャッ
プ（をー）」

ずぶ濡れになっても気にしない。二人だけの美しい瞬間。

自由ヶ丘駅改札

泰明「これ読めば？」

別れ際にアンクルトムの本を差し出す泰明ちゃん。（傘は泰明ちゃんの手に）

泰明「ちよつと長いけど、トットちゃんならきつと氣に思うと思うよ」

本を受け取るトットちゃん。

トット「ありがとう。学校が始まったら返すわね」

一瞬、真顔で沈黙する泰明ちゃん。
トット「ちゃんと読むってば」

泰明ちゃん、元の笑顔に戻って、

泰明「うん。約束」
トット「約束」

指切りげんまんをして、改札をくぐって行くトットちゃん。その後ろ姿をじっと見つめる泰明ちゃん。（何か口を動かしているが、言葉は雨音にかき消され聞き取れない）やがて東横線に続くスロープを、壁づたいに登っていく。

黒柳家・玄関（午後5時）

トットちゃんと入れ違いに、国民服を着た知らない人（工場長）が出てくる。

工場長「では、失礼いたします」

ママ「お氣をつけて」

トットちゃんに氣がつく工場長。

ママ「娘の徹子です」

工場長「ほう、お嬢さんですか。こんにちは」

トット「こんにちは：」

工場長「キラメルや羊羹の『おみや』もありますし、お嬢さんにとつても良い話だと思いますよ。それでは」

立ち去る工場長。

トット「キラメル!？」

ママ「軍需工場の方がね、お父様にヴァイオリンを弾いて欲しいって頼みにいらしたの

よ。それよりなあに？　ずぶ濡れじゃないの」

トットちゃんの服を脱がしながら、説明するママ。

ママ「演奏すれば、お札に食べ物をいただけるとですって」

トット「キヤラメルも？」

ママ「どうかしら。お父様に聞かなくちゃ」

家の中に入って行く二人。

黒柳家・居間

窓の前に立ち、じっと外を見ているパパ。

（ガラスに写り込んだ自分自身を見ているようでもある）着替えたトットちゃんとママがやってきて、

ママ「どうする？　行ってみる？」

トットちゃんも固唾を呑んで待つ。ピアノの横に立てかけられたヴァイオリンケースをじっと見つめるパパ。それから自嘲的な微笑みを浮かべながら振り向いて、

パパ「…そうだな」

トット「わーい！　キヤラメルキヤラメル！」

喜びはしゃぐトットちゃんを、複雑な表情で見つめるパパ。

黒柳家・トットちゃんの部屋（午後9時）

『アンクルトムの小屋』の一節をトットちゃんに読み聞かせているパパ。（傍らにはロッキー）

パパ「ちがいます。わたしの魂はあなたのものではありません。わたしは魂を買うことはできません」

読むのを止め、言葉の意味を深く考えるパパ。独り言のように呟く。

パパ「魂は買うことができない…」

気がつくのと、トットちゃんは眠りに落ちていく。明かりを消し、ロッキーを連れて部屋を出て行くパパ。

トットちゃんの夢

綿花畑。遠くの方からブランテーションソングが聞こえる。息を切らして走るトットちゃんと泰明ちゃん。二人とも奴隸のようにボロボロの格好をしている。

泰明ちゃんも健常者のように走っているが、二人ともスローモーションのように早く走れない。途中、綿花を積む奴隸たちとすれ違ふ。皆一様に深い悲しみの目をしている。後ろから馬の足音が聞こえてくる。奴隸商人たちがすぐそこまで迫っている。綿花畑を抜けると大きな川に出る。二人が川を渡ろうとした瞬間、突然猛烈な吹雪になり、季節が夏から冬

へ変化する。さっきまで穏やかに流れていた川が、浮氷漂う死の川になってしま

う。二人が川岸で躊躇しているとき、背後から馬の嘶きが聞こえる。馬の上に乗っているのは奴隸商人ではなく、銀座にいた警官（帽子の陰で目元が見えない）。刀を抜いて一気に距離を詰めてくる。

トット「泰明ちゃん、飛んで！」

二人は、浮氷から浮氷へ飛び移りながら川を横断していく。警官と馬は川岸で立ち往生している。先に対岸にたどり着くトットちゃん。

トット「やったわ！」

後ろを振り返ると、浮氷の上で泰明ちゃんが座り込んでいる。いつの間にか、脚が現実と同じようにマヒして動けなくなっている。

泰明「トットちゃん」

いつもと同じようにニコリと笑う泰明ちゃん。その足元で浮氷にヒビが入っていく。「泰明ちゃん！」と叫ぶが、なぜか声が出ないトットちゃん。次の瞬間、浮氷が粉々に割れて泰明ちゃんが冷たい水の中に落っこちる。（他のシーンとタッチを変えて、夢であることを強調する）

黒柳家・トットちゃんの部屋（日替わり）

夢から覚めるトットちゃん。悪夢を見たことは覚えているが、内容はすでに忘れてしまっている。

ロッキー「クウーン」

ベッド脇で心配そうに鼻を鳴らすロッキーを、強く抱きしめるトットちゃん。窓を開けると、眩しい朝の光が差し込む。草花に残された雨粒が光に照らされ、庭全体がキラキラと輝く。

トット「うわあ」

その時、階下からヴァイオリンの音が聞こえてくる。

黒柳家・居間

ヴァイオリンの音に誘われるように、階段を降りて行くトットちゃん。階段の終わりにママが腰掛けている。その横にトットちゃんも腰掛ける。ママの視線の先に一人でヴァイオリンを弾くパパの姿（G線上のアリア）。迷いが吹っ切れたのか、ヴァイオリンの音色が晴れ晴れとしている。弓を下ろし、パパが振り向く。パパ「僕のヴァイオリンで…、軍歌は弾きたくない」

静かに燃える眼差しに、芸術家としての気高さを感じるトットちゃん。

ママ「そうね。やめれば？ 食べ物だってなんとかなるわよ」

パパ「ごめんね、トット助」

トット「ううん、平気！ わたし、お父さまのヴァイオリン大好きだよ！」

ロッキー「ワン！ ワン！」

パパに駆け寄り、思い切り抱きつくトットちゃん。笑顔に包まれる一同。

4月 トモ工学園・校庭（午前8時半）

久しぶりの登校ではしゃいでいる子ども達。前日までの雨がたまり、校門のあたりに水玉模様ができている。『アンクルトムの小屋』を抱えながら泰明ちゃんを探すトットちゃん。しかし、姿が見当たらない。小林先生がみんなの前に立ち、ポケットに手を入れる。じつと動かない小林先生を見て静かになる子どもたち。

小林「……泰明ちゃんが死んだよ」

トット「!!」

トットちゃんの脳裏に、ヒヨコの亡骸をお墓に入れる場面が浮かぶ。呆然とする子ども達。

小林「泰明ちゃんはみんなの友達だったね。とても残念だよ。先生も、悲しい気持ちでいっぱいだよ。今日、みんなでお葬式に行こう」

涙を流す小林先生。茫然と立ち尽くすトットちゃん。泰明ちゃんが座っていた窓ぎわの席に落ちる陽だまり。

大森区田園調布田園コロシウム側

テニスコート前（午前10時）

小林先生と移動する子どもたち。黙って下を見ながら歩くトットちゃん。

日本基督教団田園調布教会前

入り口の外に泰明ちゃんの家族（父・母・姉二人）。黒い喪章を腕につけた男の人が、参列者に一本ずつ白い花を渡している。子ども達の姿を見て、泰明ちゃんのお母さんが一層激しく泣く。トットちゃんも花を受け取り、教会の中へ。

日本基督教団田園調布教会内

窓から陽が射し込み、たくさん白い百合の花がお供えされている。オルガンが静かに賛美歌（主よ、みもとに近づくか）を歌っている。棺の前に立つトットちゃん。泰明ちゃんとはくさんの花に囲まれている。トットちゃんは膝をつき泰明ちゃんの白く長い指の上に花を置いた。

トット（小声）「いつか、うんと大きくなっ

たら、またどつかで会えるんでしょう？
その時、小児マヒ治つてるといいけど」

立ち上がり、もう一度泰明ちゃんを見る
トットちゃん。『アンクルトムの小屋』
をギユッと抱きしめ、お棺に背を向け歩
き始める。出口に差し掛かったその時、
後ろから泰明ちゃんの声が。

泰明「トットちゃん！ いろんなこと、楽
しかったね。君のこと忘れないよ」
振り返るトットちゃん。目に大粒の涙が
溢れる（ここでは流さない）。

日本基督教団田園調布教会前

階段を駆け下りるトットちゃん。途中、
小林先生とぶつかり本を落とす。

田園調布自由ヶ丘

町の中を駆け抜けるトットちゃん。途中、
華々しい出征兵士見送りの行列とすれ違
う。

見送りの人々「バンザーイ！ バンザーイ！」
笑顔で出征を見送る人々の中、悲壮な表
情で走るトットちゃん。泰明ちゃんとの
思い出が次々に蘇る。電車の窓越しに、
初めて会った日のこと。大きく体を揺
すって、足を引きすりながら歩く後ろ姿。
細く長く、曲がってしまった指。自己紹

介した時のこと。裸になって一緒にプー
ルに入った時のこと。花壇の前で「ヒヒ
ヒヒ」と、はにかんだ顔を。命がけで木
の上に引つ張り上げた大冒険を。天国の
話をしてくれたこと。肩を組んで歌った
はやし歌を。雨の中で踊ったことを。行
進を避けて裏通りに入ると、悲しみをこ
らえる出征兵士の家族や恋人の姿が。兵
隊ごっこで駆け回る子どもたち。空腹で
動けなくなってしまった人。片足を失く
した帰還兵。トットちゃんの住む世界に
も、悲しみや暴力や理不尽さが転がって
いたのだ。しかし、トットちゃんは全力
で走る。走ることでできなかった泰明
ちゃんのために。

（このシーンの曲は『主よ、みもとに近
づかん』のオーケストラ版）

トモ工学園・校門前（午前11時）

息も切れ、脇腹が痛むのも構わず、トッ
トちゃんは走り続ける。勢いに任せて、
転々と広がる水たまりをジャンプして飛
び越える。地面から地面へとジャンプを
繰り返す。（夢の中で浮水から浮水へと
飛び移ったように）しかし、最後の大き
な水たまりを飛び越えられずに、バシヤ
ン！と両足が水に浸かってしまう。地面

に突っ伏したまま、涙を流すトットちゃ
ん。その時、一陣の強い風が吹き水たま
りに波紋を作る。そのまま上方へ吹き上
がり、トットちゃんの木の手を揺らす。
風の中に泰明ちゃんの存在を感じるトッ
トちゃん。

トット「……」

気がつく、小林先生がそばに立ってい
る。『アンクルトムの小屋』を差し出し
て、

小林「大事なものなんだろう？」

トットちゃんは黙って小林先生に抱きつ
き、もう一度泣いた。

昭和19年9月

黒柳家（午前8時）

ロッキーのいない空っぽの犬小屋。居間
に飾られている、出征前のパパの写真
（国民服）。あわてた様子で居間から顔を
出すママ（モンペ姿）。

ママ「徹子さん」

トット「ちゃんと持ったわよ」

ママの言葉を先回りして、首からかけた
定期入れを掲げるトットちゃん。五年生
になり、顔つきが大人っぽくなっている。
（モンペ姿、髪型はおさげ）

ママ「そっ……」

トット「お母様、ちょっと」
ママ「？」

ママのはつれた髪の毛を、耳にかけてあげるトットちゃん。

トット「いいわ。じゃあ、行つて参ります！」
扉を開けて出て行くトットちゃん。ママもそれを追つて玄関の前まで出る。
ママ「行つてらっしゃい！」

駆けて行くトットちゃんの後ろ姿に、成長と月日の経つ早さを感じるママ。

トモ工学園・校庭（午前9時）

講堂の屋根の少女の胸像が二宮金次郎の像に変わり、校庭の一部が畑になっている。大きく成長している子ども達。（男子は丸刈に国民服。女子はモンペ）
小林「明日から、東京に残る皆さんとはしばらくお別れです。しかし、戦争が終わったら、必ずこの場所でトモ工学園を再開することを約束します」

トモ工学園・電車の教室（午前10時）

一人ずつ順番に前に出て、お別れの挨拶をする子どもたち。
右田「今度田舎から、葬式まんじゅう持ってきてあげます」

珍妙な発言に笑つたり、ツッコミを入れる

る子ども達。

税所「大石先生。転んだ時、包帯してくださいませんか。忘れません」

静かに微笑む大石先生。

大栄「俺は、日本一の園芸家になる」

天寺「怪我した犬や猫がいたら、僕のところへ持ってきてね。治してあげるから」
サッコ「本当は英語でさよならしたいけど、戦争が終わるまで我慢するわ」

泰「僕は物理を学んで、立派な博士になりたいです」

高橋「ありがとう。いろんなこと全部！」

ミヨ「みんな、手紙書いてね。きつとよ」

青木「ウフフフ…、ウフフフ…、ぶづぶづ…」

（泣）

笑つていたはずの青木さんが、突然泣きそうになる。胸に押し込めていた不安や寂しさがこみ上げる子ども達。その時、トットちゃんが前に出て、

トット「恵子ちゃん家のニワトリ、空を飛ぶんです！ コケーコッココッココ！」

ニワトリを真似ておどけるトットちゃんに、教室の雰囲気明るくなる。

トット「どんなに遠くまで飛んで行つても、必ず戻ってくるのよね？」
青木「……うん。ウフフフ」

青木さんも笑顔を取り戻す。小林先生だ

けが、トットちゃんが青木さんを庇ったことに気がついて、その成長に目を細める。

小林「……」

トモ工学園・講堂（午後4時）

静まり返っている講堂。夕日が窓から差し込んでいる。壁に貼られた米軍艦が撃沈される写真の前に立つ小林先生。沈黙の後、いきなり写真を引き剥がす。ぎゅつと握られた拳の中でクシヤクシヤになる写真。

トット「校長先生！」

振り向くと講堂の真ん中にトットちゃんが入っている。

トット「話、話」

小林「なんだい、話つて？」

トットちゃんの前で、あぐらをかく小林先生。トットちゃんも正座して、真剣な顔をする。

トット「わたしが大きくなったら、この学校の先生になってあげる！」

小林「!!」

トット「みんなのために、たくさん本を読んでもあげるんだ！」

笑わずに、真顔で質問する小林先生。
小林「約束するかい？」

トット「約束!」

欠けている前歯を気にせず、ニッコリ笑う小林先生。トットちゃんが小指を突き出す。その指を、小林先生の太く短い小指がしっかりと握る。

トット・小林「指切りゲンマン、嘘ついたら針千本飲ーます。指切った!」

心の底から嬉しそうに笑う小林先生。

小林「君は本当にいい子だな!」

つられて笑うトットちゃんを強く抱きしめる小林先生。

小林「元気でいろよ」

昭和20年3月 上野駅・歩廊(夕方)

疎開列車(汽車)に乗る人々でこった返す歩廊。風呂敷を背負うママと、ランドセルを背負い、ヴァイオリンケースを抱えるトットちゃん(二人ともモンペ)。しっかりと手を繋いで、必死に汽車に乗り込む。ゆっくりと回り始める車輪。汽笛を鳴らし、黒煙を上げて汽車が走り出す。

徹子さん(NA)「父が出征し、私たちも青森へ疎開することになった」

黒柳家(午前11時)

近所の人々によって解体される黒柳家。

徹子さん(NA)「線路沿いにあった赤い屋根のお家も、建物疎開で取り壊されてしまった」

4月15日 目黒・上空(夜)

焼夷弾を投下するB29。

(NA)「そして、トモエ学園も!」

トモエ学園・講堂

講堂の屋根に焼夷弾が落下・貫通する。床に突き刺さって燃焼する焼夷弾。あつという間に木造の校舎に燃え広がる。壁に貼られたバレリーナの写真が溶けていく。ステージ上のピアノにも、メラメラと火が這い広がる。

トモエ学園・電車の教室・図書室

講堂の火が飛沫して、教室も燃え始める。本棚に並ぶ本が燃えていく。

トモエ学園・校庭

炎に包まれたトモエ学園。窓ガラスが割れ、炎が吹き出す。根っこが生えた校門も、泰明ちゃんと登ったトットちゃんの木も燃えている。その様子を通りから見つめる小林先生。火の粉が飛び交うのも構わず、ヨレヨレの三つ揃いのポケット

に手を突っ込んで立っている。(熱風に煽られ、髪の毛や服がなびいている)

徹子さん(NA)「焼け落ちていく学校を見ながら、小林先生は言った!」

小林先生振り返って、

小林「おい、今度はどんな学校を作ろうか?」

徹子さん(NA)「先生の子どもに対する愛情は、学校を包む炎よりも大きかった!」

3月 青森付近・鈍行列車内(明け方)

分厚い雲間から日脚が差し込み、窓ガラスに座るトットちゃんが目を覚ます。(手元に『アンクルトムの小屋』の本)

トット「……」

ママや他の人たちは疲れ果てて眠っている。唯一起きているのは、向かいの女性の腕に抱かれた赤ん坊だけ。小さく手を振るトットちゃん。赤ん坊がぐずり始める。

赤ん坊「おぎゃあ、おぎゃあ」

トット「!!」

鳴き声でみんなを起こさないように、赤ん坊を連れて電車後部へ移動する。

鈍行列車・後部

扉を開けて連結部に出るトットちゃん。赤ん坊「おぎゃあ、おぎゃあ」

トット「よし、よし、泣かないの」

その時、視界の隅に何かが入る。

トット「!?」

それはいつかのチンドン屋。田んぼのあぜ道を演奏しながら歩いている。嬉しくて思わず叫びそうになるトットちゃん。

しかし、大声を出すのを思いとどまって赤ん坊を見る。(ウトウトとまどろみ始めている)その無垢な姿に微笑むトットちゃん。赤ん坊を起こさないように、とても小さな声で呟く。

トット「いい子ね。あなたは本当にいい子……」

そっと扉を開けて、客車の中に戻って行くトットちゃんと赤ん坊。田園地帯を、鈍行列車が音を立てて走って行く。

(ゆっくりとF・O)

解説

『23年鑑代表シナリオ集』出版委員会を終えて

(委員) 荒井晴彦 いながききよたか 印東由紀子 里島美和 篠崎絵里子 長谷川隆 松下隆一 吉村元希

向井康介 (長)

今年の年鑑代表シナリオも、去年に引き続き11作品が選ばれることになりました。

候補作となったのは19作品。『福田村事件』『花腐し』

『市子』『二人静か』『さよならほやまん』『Winnny』

『ほつれる』『正欲』『渇水』『怪物』『せかいのおきく』

『雑魚どもよ、大志を抱け!』『ほかげ』『ゴジラー1.0』

『ロストケア』『鬼太郎誕生 ゲゲゲの謎』『湯道』『生き

ててごめんなさい』映画『窓ぎわのトットちゃん』

他にもう1作品『君たちはどう生きるか』が候補として上がりましたが、取り寄せて確認した所、カット表に

近い完成台本だったため脚本とはみなされず、あらかじめ選考対象から外しました。

まずは選定から外れた8作品の批評から始めます(順不同)。

『市子』

市子と名乗る女が、恋人の前から突然姿を消す事件から始まるこの物語。過酷な家庭環境で育った一人の女性の半生を、彼女と関わりを持った者たちの視点から多角

的に描こうとしているが、

「時系列をあちこちに散りばめて多面的に人間を見せようとする手法は、すこぶる恣意的。全編を通して緊張感を保たせることに成功しているだけに、残念」（いながき）

との意見に大方も同意。その構成はあまり成功しているとは思えなかった。

また、市子 realism は無戸籍だったことが大きな鍵となるが、同様のテーマを扱った企画で無戸籍について取材した経験のある長谷川委員は、物語の前提に疑問を持つ。

「捨て子で親がわからない、日本人であると証明できない、そうした場合に戸籍取得は困難になる。市子には日本人の母親がちゃんというから、戸籍はむしろ取得しやすいはず」（長谷川）

加えて、他の委員からは障害のある妹の扱いにも言及があり、

「妹が殺される場面。殺される障害者が嬉しそうだったという描写がどうしても引くかかる。『ロストケア』もそうだけど、『殺人』を『救済』だというのは疑問。死にたくないと言う障害者はいないのか？」（荒井）

作り手の作為や疑惑が、自分勝手に映った印象。掲載を見送ることとなった。

一方で、

「DVの元夫から逃れるために届け出できずにいた母により無戸籍となった市子。しかし母を恨まずに境遇を受け止め、必死に生きる市子の様に魅了された。描いて然るべき題材」（里島）

と一定の評価があったことは記しておく。

『二人静か』

5年前に娘を亡くした夫婦の元に、ある日若い妊婦が現れる。喪失感と再生、そして罪悪感。それぞれのトラウマを抱え、もがきながらも希望を見出そうとする人々の姿を描く。

「無駄のない展開。トップシーンから夫婦のピラ配り、妊婦との出会いと進むことでたつぷりと人物を描いている」（里島）

説明を抑え、省略をうまく使った構成とセリフの技術は一定の水準を超えているが、娘が失踪した夫婦と、長年監禁された経験を持つ女が、その狭い世界で出会うというご都合を受け入れることができるかどうか。

「一見現実的に見えて、ものすごくファンタジーである。作り手の幻想、願望をリアリズムで描いているように映る」（いながき）

「失踪した子供がすでに死んでいるかのように物語は進む。初めから諦めるための道のりに見える」(篠崎)

「ラストがよくわからない。再生なのか赦しなのか、着地点を明らかにして欲しかった」(長谷川)

「夫婦の再生の前に、子どもの失踪という事件の方が大きすぎて、すべての葛藤が霞んで見えてしまう」(松下)

物語を最後まで捌ききれていないとの指摘。また、別の角度からの批評として、

「夫婦の再生がテーマのように見えるけれども、どちらかといえばヒロインの妻としての生き方。妻は妻という役割として夫との生活の中に監禁されている。そういうメタファーとも繋げて見てみたかった」(吉村)

との指摘もあった。

『怪物』

小学5年生の息子と暮らすシングルマザー。ある日、息子の身に起きた異変から、学校や社会との対立が深まっていく。それぞれの視点から語られる真実が交錯し、思わぬ結末へと向かう。

映画と脚本を比べてみると、少年二人の同性愛に関するくだりなどが本編では大幅に削られていることに気がつく。

「本編を見て、足りないんじゃないかと思ったところがシナリオにある」(吉村)

「僕は逆で、シナリオでは冗長だと思ったところがすっきりと切られている印象」(向井)

と印象が委員の間で割れたことがおもしろい。

しかし、同性愛を秘密の道具として扱った後出しの構成にはほとんどの委員が否定的。

「モンスターベアレント、暴力教師という『嘘』で構成していく狙いがわからない。『CLOSE/クロース』のように、なぜストレートに同性を好きになった小学生の戸惑いと悩みを描かなかったのか」(荒井)

「それぞれの視点から一つの事件を眺める複雑な構成が、技術的にも高度であることは間違いないが、脚本の都合で事実を隠しているように見えるのは残念。結果的に主題が映画から遠ざかったのではないか」(長谷川)

「作劇に騙されている感じ。仕掛けはあるのに、芝居がない」(松下)

一方で、

「子供の遊び『怪物だーれだ?』を繰り返して視点を変え、構成は興味深い」(里島)

「構成については、登場人物の視点によって『何が一番の解決法だったのだろう』と考えさせる一定の効果は

あつたと思う」(印東)

といった肯定的な発言もあつたが、やはり構成に問題ありという意見を覆すことはできず、掲載不可となった。「加害者の物語にしたい、とは言いが、そのために被害者を矮小化するのは問題だろう。だからこそ形式、構成も非常に気になった」

と言いがき委員の言葉に僕も首肯。

『雑魚どもよ、大志を抱け!』

昭和時代の地方の町。小学6年生の瞬は、仲間たちと楽しく毎日を過ごしていた。しかし、親友がイジメに遭う現場を見て見ぬふりをしてしまい、罪悪感に苛まれる。母親の病氣、中学受験、少年たちの友情と葛藤。誰もが経験する苦い青春を、ノスタルジックかつユーモラスに描いた物語。

「構成、キャラクターの配置など、教科書のような脚本」(向井)

「キャラクターが多い方だと思うが、それらをうまくまとめているという印象」(いながき)

と一定の評価もありながら、本編にして145分という長尺に対する意見と、ややステレオタイプにも見えるキャラクター造形への批評も。

「映画を見て長いなと思い、脚本を読んでやはり長いなと。王道の青春映画として間違いなく面白いが、もう少し整理できたんじゃないか」(長谷川)

「親のくだりをもっと削っても良かった。シンプルに子供たちの映画にしたほうがよかったのではないか。ラストは女の子との別れの方が好み」(荒井)

「冗長すぎるし、ステレオタイプなキャラクター造形にも深みがない」(吉村)

「ヤクザの使い方がやや安直」(松下)

全体として冗漫な展開が嫌気されて掲載を見送ることとなった。

しかし、足立紳さんの色が確実に出ている脚本には間違いない、

「足立ワールドに乗れるか乗れないかだと思う。私自身は、最後の別れでまんまと泣かされた」(篠崎)

という評価もあつた。

『ゴジラ10』

敗戦後間もない日本。復興を目指す人々の前に、さらなる絶望をもたらす巨大生物ゴジラが現れる。絶望的な状況下で、それでも希望を捨てずに立ち向かう人々の姿を描く。

第96回アカデミー賞で邦画、アジア映画史上初の視覚効果賞を受賞した本作。映像技術として受けたのは理解できるが、脚本としてはまったく評価できない、というのが委員の意見。

「怪獣映画とはいえ、人物の造形があまりにも浅い。G H Q 主導の軍事行動がソ連を刺激するなんて雑すぎる。敷島にしても軍人らしくない」(松下)

「歴史を無視し過ぎ。特攻で死にたくなくて、故障もしないなら日本軍の基地がない島に降りればいい。マッカーサーも天皇も出てこない占領下の日本なんて考えられない。G H Q の第一生命ビルや宮城(皇居)を踏み潰さないゴジラは何しに東京に來たのか?」(荒井)

「浜辺美波のキャラクターがブレすぎ。説明過多で先が読める。『シン・ゴジラ』には庵野秀明という強烈な個性と独自性があったが、今作は瑕疵ばかり目立つ」(長谷川)

全員一致で掲載見送りとなった。

『ロストケア』

介護士でありながら42人を殺めた連続殺人犯と、彼を弁護する弁護士。事件の真相を追う中で、介護問題や高齢化社会の闇が浮き彫りになる社会派サスペンス。

「説明ゼリフの多さは気になったが、殺人が救いであると考ええる介護者の思考とゼリフは外していない」(里島)
「原作では男だった検事を女にしたことで、犯人との対立軸に奥行きが出ている。同じテーマの『月』と違い、フィクションの可能性に賭けていることを買う」(長谷川)

と好意的な意見も出たが、介護老人を殺すことは『殺人』ではなく『救い』だとする主人公の行動原理に批判が集中する。

「介護老人や障害者が『殺してもらいたがっている』という前提でお話を作っているところが根本的に問題」(荒井)

「この手の問題はどうしてもヒューマニズムに着地させるしか術がない難しいところで、今回もやはりその域から出ていない」(向井)

「結局、作り手がどっちに結論を持っているのかを明確にして書いていかなければならないテーマのものが、その作り手の結論というのが最後まで見えなかった」(篠崎)

作り手、書き手の覚悟があまり感じられなかったという総意で、掲載見送りとなった。

『湯道』

実家の銭湯「まるきん温泉」を継ぐことになった建築家の三浦史朗。弟の悟朗との確執、常連客との交流を通して、銭湯の温かさや人との繋がりの大切さを再発見してゆく。風呂でつながる家族の物語。

「大衆浴場施設の進出や銭湯の後継者問題など、銭湯の廃業増加を興味深く見せているとは思う」（印東）

「お客さん目線というところがちゃんとエンターテインメントになっているし、ほっこり泣かせてくれる」（里島）

しかし、肝心の「湯道」が薄すぎてただの銭湯の話になってしまっているとも里島委員は指摘。「湯道」という創作思想をうまく定義づけられていない批判は他にも多く、

「肝心の『湯道』がさっぱりわからない。評論家を一方的な悪役にして、銭湯の人たちがよってたかってやつつけるというのも、排他的で閉鎖的に感じた」（長谷川）

「湯道の何を面白いとして読めばいいのかもわからず、群像劇としてもうまくいっていない」（いながき）

「映画というよりコントかドラマ。誰の視点で見ているかわからない。湯道という「道」を言うなら、もっと深いところまで潜っていったほうがいい」（松下）

と大方が評価せず、掲載不可となった。伊丹十三監督

の『タンポポ』のような群像劇を、あっちは食で、こっちは湯でやろうとしてみたのかと邪推するが、それも失敗に終わっていると思う。

『生きててごめんなさい』

出版社で働く園田修一は、小説家になる夢を抱きながらも、厳しい現実と直面し、同棲中の恋人・清川莉奈との関係にも溝が生まれていく。莉奈はインフルエンサーとして成功を収め、華やかな世界へと羽ばたいていく一方で、修一は焦燥感と劣等感に苛まれる。二人の生き方の違いが浮き彫りになる中で、それでも「生きていくこと」の意味を問い続ける若者たちの姿を追う。

なかなか意見の分かれた作品。

「ヒロインの女の子は心の病気か、病気じゃないのか、その半端な感じを描きたいなら、せめて自分で精神科に行こうとするような能動的な動きがあっても良かったんじゃないか。単なる「変な人」ってだけでずっと通すのは、それこそ中途半端」（荒井）

「共依存か、愛情の依存なのか、ちよつとよくわからなくなっている二人。この曖昧さも今なのかとも思うが、それをやるにしてももう少し展開が欲しかった」（篠崎）
ヒロインの心の置き所がどこなのかが見えにくいとい

う指摘を受け、その曖昧さを認めつつも、いながき委員は言う。

「二人のキャラクターの関係性が最近読んだことのない風味で、かなりおもしろかった。現代的っていうと癪なんだけど、こういった作品を面白がるのも、もしかしたら一つのアップデートという形なんじゃないかなと」

「非常に現代的なキャラクター。ああいう不器用な女の子がバズっちゃうっていうのもよく分かる」と吉村委員も賛同。

物語を書きたくてなかなか思うようにかけない男。SNSで自分の思う生きづらさを吐露していたら図らずもバズって書籍にまでなってしまう女。生きづらさを認めてほしいという立ち位置から語られている脚本で、そう読むと主人公たちの都合で周りのキャラクターがいるような気もしてくる。それを心地よいと感じるか、ご都合と思うかでこの物語の感じ方が変わってくるだろう。また、後述する掲載可となった『ほつれる』と比べると、やはりこちらの方が欠点が目立ってしまう。最後まで候補には残りつつ、掲載は見送りとなった。

次に、選出された十一作品の選評です。

『福田村事件』

関東大震災後の千葉県福田村で起こった実際の虐殺事件を題材にした映画。行商団一行が流言飛語によって村人たちに襲撃され、無残な死を遂げる。事件の背景には、震災後の混乱と社会不安、そして根深い差別意識があった。

佐伯俊道、荒井晴彦、井上淳一らベテラン脚本家による隙のない堅牢な仕事。

「教育映画、啓蒙映画という側面から見ても、やっとここまで来たかという気持ち。水平社などのモチーフをちゃんと物語の中に昇華させている」（松下）

「事件が起きるまでの前半パートで、排他的な集団心理の流れが群像劇の中でうまく書かれている」（印東）

「なぜここまで朝鮮人に拘り、なぜここまで残虐になったのか。震災の混沌が続く中、閉鎖的な地に押し寄せた避難民、彼らが呪いのように吐き出した言葉が一人歩きする。殺戮場面の描写もリアル」（里島）

「朝鮮人差別を、日本人同士が猜疑心に支配されて殺し合ったという事件で捉えている構造の上手さ」（篠崎）

史実に基づきながらも独自の視点で事件の真相に迫ったオリジナリティを多くの委員が評価。満場一致で掲載となったが、

「主要キャラクターの一人である新聞記者の思想と行動、そしてセリフが少しステレオタイプすぎる。メディア側の責任や表裏も描けたはずなのに、一面的でもっとなことしか言っていないところは残念」（向井）

といった批判もあった。それに対しては選考委員として参加していた作者の荒井氏本人も同意しながら、

「権力の作ったデマ、それをそのまま書く新聞、そして加害者、被害者の4つを書くとした。そうすると、権力が悪いだけに偏ってしまう。だから権力は落とし、新聞記者も正義だけなので落とし、加害者と被害者だけにしようかという案もあった。しかし、新聞記者を切る、と、亀戸事件がやれないので残すことを選択したんです」

選考会后、そのように意図を語った。

『花腐し』

ピンク映画界の斜陽期、監督の棚谷は5年も新作を撮れずにいた。大家から立ち退きを迫られた男・伊関は、かつて脚本家を目指していた。映画を夢見た二人の男の人生は、ある女優との出会いをきっかけに交錯していく。愛と挫折、再生を描いた人間ドラマ。

今年度の選考会の中でもっとも異論のなかった掲載。

「原作の解釈といいアレンジといい、これが作家性だと思う。表現も的確で、いい意味で教科書的」（松下）

「省略の作法、回想の使い方が理想的な塩梅」（向井）

「原作はストーリーも曖昧で隙間が多く、どう映画にするのか想像もつかなかったが、大胆な脚色が見事に映画を立ち上げた。何より驚いたのは、原作を読んだときとまったく同じ読後感が残ること。その意味で、原作にあくまで忠実な脚色」（長谷川）

「久しぶりにシナリオを味わって読んだ気がした」（里島）

松浦寿輝の芥川賞受賞作を大胆に脚色した手法が高く評価された。

また、「アナルセックスの意味がよくわからない」（向井）との指摘に関して、選考会後の会話で、選考委員で作者の荒井氏と、

「韓国と中国の留学生のシーン、伊関がアナルスティックを突つ込まれるのは、男が女にしてきたこと、日本が中国や朝鮮でしてきたことを今されている。復讐というより、日本のおじさんが遊ばれているという意図」
そんなやりとりがあったことも記しておく。

『さよならほやマン』

震災で行方不明となった両親が残した借金を抱え、宮城県石巻市の美しい島で暮らす兄弟。兄のアキラはホヤ漁師を目指し、弟のシゲルは障害を持ちながらも懸命に生きる。そんな彼らの前に、都会から訳ありの女性漫画家・美晴が現れ、奇妙な共同生活が始まる。ぶつかり合いながらも、互いの傷を癒し、再生へと向かう姿を描いた物語。

「登場人物の全員に可愛さがあってどれも立っている。ただ、その人物たちの絡み方が物足りない。都会からやってきた女性漫画家は、何を考えどう生きていたのか」(長谷川)

「漫画家はなぜ二人の元へ来たのか。漫画家自身も心に傷を負っていることはわかったが、伝わりきれず消化不良。春子もタツオも心情を吐露するものの、あと一押し深みがあると良かったと思う」(里島)

といった、やや安直な人物設定に批判もあったが、多くは肯定的な見方。

「震災を描いた作品として、今までにない切り口で好感が持てる。登場人物が本当に被災者として生きているんだなという実感がちゃんとある」(吉村)

「12年も海のを食べられないでいる、その葛藤を兄弟の成長としてうまく扱っている」(印東)

「独特の明るさを買う。バックストーリーもちゃんと組まれていて、読んでいて安心感がある」(松下)
ジャンルとしての震災映画の、新しい切り口が高く評価され、掲載となった。

『Winnie』

2002年、開発者・金子勇は、革新的なファイル共有ソフト「Winnie」を開発し、「2ちゃんねる」に公開する。しかし、Winnieは著作権侵害に利用されるようになり、金子は著作権法違反幫助の容疑で逮捕されてしまう。弁護士・壇俊光は、金子の弁護を引き受け、技術の進歩と法制度の狭間で揺れる社会問題に切り込んでいく。

金子さんと弁護士団との友情、日本で経済成長が生まれない原因、既得権益、裁判制度の矛盾など、本作には様々なテーマが隠されており、それ故意見も様々。

「題材は旬を逃した感もあったが、開発者の人間性に魅了され、弁護士とのやりとりを引き込まれた。建設的な作り」(里島)

「構成があまりにも直線的に感じた。もう少し工夫しても良かったのでは。金子氏のキャラクターもやや綺麗事に描きすぎている気がする」(松下)

「金子勇さんという人間を、ある種の悲劇のヒーローというアングル一つで切り取っているのかという疑問は残る」(いながき)

しかしながら、金子勇さんを巡る一連の事件をつぶさに取材したに違いないその労力と、この物語をエンターテイメントとして成立させたその技術を買いたい。

また、僕個人としては、長谷川、篠崎、両委員の、

「余計なものを付け足さず、実際のエピソードで劇を構成した、誠実な取材がものを言った立派な仕事。金子勇という人物を失ったことが、日本のデジタルの世界にどれほどの損失を与えたかをよく伝えている」(長谷川)

「悲劇のヒーローの前に、根底に流れている、一人の人間のたつた一度の人生の数年間を司法が奪うことの取り返しのつかなさ、その重さを突きつけている」(篠崎)

といった、簡単に人権を奪える司法の残酷さを描いていると評価したことに、大きく頷いた。

『ぼつれる』

夫との関係が冷め切った綿子は、友人の紹介で出会った木村と親密な関係になっていく。しかし、木村が綿子の目の前で事故に遭い帰らぬ人となってしまふ。心の支えを失い、深い喪失感に苛まれる綿子は、それでも変わ

らぬ日常を送りながら、木村との思い出の地を辿る。過去を振り返る中で、彼女は夫や周囲の人々、そして自分自身と向き合い、夫婦関係の綻びや自らの心の奥底に隠された感情と向き合っていくことになる。

劇作家らしい生々しさに満ちた会話の言葉選びや省略に、

「脚本から匂う自己愛が強すぎて読み進められない」(いながき)

といった忌避感を抱く者もありながら、トップシーンの展開を評価する声も。

「不倫相手が目の前で事故に合ってしまう。不倫という立場上近づけないで去ってしまった。さてこの後どうなる? という入口はヒッチコック映画の展開のよう度高揚するが、進んでゆくにつれ単調になってゆく」(向井)

しかし、この作品の肝は、不倫と言っているのかよくわからない曖昧な関係性だろう。

「不倫をしているような描写がまったくない。つまり不倫に見えない。でも同じ指輪をしている。肉体関係のない不倫関係と考えるとおもしろく読めるが、その確証もない。とすると、どう読めばいいのかわからなくなる。

肉体関係のない不倫だと描きがいがあるのだが」(荒井)
「映画では説明を排した台詞がナチュラルで、内容を追

うより先に流れてゆく感じ。それを脚本で読むと本当にそのとおりに書いてあって、アドリブじゃないんだと驚くが、最終的には説明なしで辻褄が合ってくる。ただナチュラルなだけじゃなくて計算が働いているわけで、これはかなり繊細な仕事だなと」(長谷川)

映画・ドラマ畑の脚本家には書けない何かがそこにはたしかにある。

綿子と木村。現象だけを見て不倫じゃないかと言われたら返す言葉もないが、この二人にしかわからない価値観で照らし合わせるとたしかに特別な関係として成立している。そんな新しい恋愛感情を見せてくれた作品として評価。掲載に至った。

『正欲』

孤独を抱え、異なる形の「欲」を募らせる人々。都会の一隅で生きる彼らの視線が交差し、欲望が絡み合う時、それぞれの「正しさ」がぶつかり合う。やがてある事件をきっかけに、登場人物たちの人生が大きく狂い始める。

今年度の選考会で、最も議論の長引いた作品。『水』に性的嗜好を感じるキャラクターを通じて様々な生き方を肯定しようとする本作のテーマのひとつが最大の問題点。

「三十代の男と女が『セックスってどうやるの?』と言って擬似的に体勢になってみるとか、リアリティに欠けることや、フェチという観念を越えても、なぜ『水』というモチーフでなければいけなかったのかという疑問がずっと抜けないで読み終わってしまう」(印東)

「多様性の問題で水を持つてくるのはずるい。幼児性愛者と水に性欲を感じる者を並べることがそもそも矛盾している」(荒井)

「ペドフィリアの話に一步踏み込んで加害性や被害性を考えるなら描くものがあるのかもしれないけど……」(いながき)

「ペドフィリアと水は意味合いが違う。対人間と対物質で比較するのは、ずるいといえざるい」(吉村)

つまりは綺麗事でごまかしてはいないか? ということだ。

「『あつちやいけない感情なんてないんだよ』というのがテーマのひとつだと思うが、そう言っている映画がそれを赦していないじゃないか。『水』だから映画的に許されて美しくも描けるが、小児性愛者の苦しみも同じように美しく描いていいのか? という大きな問題を孕んでいる」(篠崎)

また、実はそこが狙いで、許される多様性と許されな

い多様性をあえて突きつけている、という見方もできなくもない。

「幼児性愛は認めないが、そのような欲望が人間の中にはあるということは認識しなければならない、という帰結」(向井)

いずれにしても、このテーマの精神性は原作に内包されているもので、すべては原作の批判に当たり、脚本の批判ではない。

「社会の当たり前が、実はそうではなく、本来の生き方はもっと自由であるべきで、それが水と戯れ、癒され、同化する行為に象徴されている。この物語を水フェチとか社会不適合者の話と捉えてしまえば後味の悪いものになる。だから評価も分かれるのではないか？」(里島)

「多彩な人物の配置といい、その感情を追う正確さといい、脚本としての完成度は間違いなく高い」(長谷川)

「ここで終わってほしいという絶妙なタイミングのラスト。最後の台詞はいろいろな疑問を持ったままでもぐっとくる」(向井)

港岳彦さんの脚本技術に落ち度はまったくなく、パランスのいい群像劇に仕立て上げている。

最後に、様々な生き方、ライフスタイルを認めようとするテーマを持った表現物が、まさに「流行」と言っ

いい形で多く作られている今日の状況を振り返った、いながき委員のもっとも印象的だった発言を記しておく。

「生き方の多様性を描きたがる昨今のトレンドのベンチマークになる作品ではあると思ったが、映画を作るうえで、ある種の承認調達みたいなことの後押しをここまですなければいけないのかという暗い気持ちにもなる」(いながき)

『渇水』

記録的な渇水に見舞われた街で、水道局員として働く岩切は、水道を止められた家庭の幼い姉妹と出会う。日々の業務と困窮する人々の現実の間で葛藤する岩切は、姉妹との交流を通して、自らの仕事の意味、そして守るべきものに気づき始める。

「水道局員が遭遇する困窮した姉妹。普通なら児童養護施設などに連絡するだろうという違和感や、ラストの姉妹がどうなったのかがはつきりと描かれていない消化不良感はある」(印東)

「主人公が姉妹を救済しようと動くまでの気持ちの積み立てがうまくいっていない。事情を作者が意図的に作りすぎているのか？」(松下)

といった批判もあったが、

「原作は1990年に発表されているが、2024年現在の物語に違和感なく脚色されている」(吉村)

「原作のラストでは死んでしまう姉妹を、脚本では直接的に描かず、プールではしゃいでる二人を見せることで死を匂わせている。その脚色には好感を持つ」(荒井)

「水」というモチーフで貧困の問題を語ったことが手柄。空気や太陽と同じ、水だってタダでいいじゃないかという主人公のセリフが真に迫る。姉妹を殺さないためにはどうすればいいか、その一点に向けて想像力を働かせた脚本として読んだ」(長谷川)

「水道局の給水停止を担う者から見たネグレクトを描くことで、児童虐待当事者から遠く、手を差し伸べる術を知らない一般の人にもわかりやすい作りになっている」

(里島)

作劇に誠実に向き合っている作りが概ね好評。掲載となった。

『せかいのおきく』

江戸末期の貧しい長屋で寺子屋の先生をしているおきくは、ある日、声を失ってしまう。それでも前向きに生きる彼女は、下肥買いの青年・矢亮や紙くず拾いの中次と心を通わせ、共に困難を乗り越えようとする。

「俺たちがいなきゃ江戸なんて糞まみれじゃないか、というセリフが、阪本監督が江戸に馳せた思いを伝えてくる」(長谷川)

と本作は長谷川委員が高く評価。

「父親が殺される背景や、おきくが声を失う怪我をなぜ裏にして描かないのか。あとから付け足していた章立て構成は苦しい」(荒井)

という荒井委員の批判にも、

「裏で描いたのは、事件性を排除する意図。短編から出発した脚本で、エピソードを繋いだ印象はあるけれど、キャラクターが魅力いっぱい、それだけで読める『せかい』という言葉の使い方もロマンチックでオリジナリティがある」(長谷川)

と擁護。

「時代劇としてみるとやや平坦ではあるが、題材をうまく使って阪本監督らしいユーモア満載にしている」(松下)

「着眼点はおもしろく、章で区切る運びもわかりやすい」(里島)

など、手堅い作りが好評。掲載可となった。

『ほかげ』

終戦直後の闇市。焼け残った居酒屋で体売って生きる女の前に、盗みに入った戦争孤児が現れる。孤独を抱える二人は心を通わせるが、闇市で生きる人々の絶望や怒り、戦争が残した傷跡は深く、彼らの関係も儚く危うい。それでも、生きる希望を捨てない人々の姿が、戦争の悲惨さと共に、人間の強さ、優しさを浮かび上がらせる。

「やはり塚本監督の強烈な作家性につきる」（松下）

松下委員の言葉に多くの委員が首肯。無駄のない展開、無駄のないセリフ。寡黙なのに饒舌な味わいを持った脚本。

「もちろん十分に面白く読んだが、前半と後半で二つの話に分かれている。子供の視点で押していれば、この分断は解消できたのではないか」（長谷川）

長谷川委員の指摘に荒井委員も相槌は打つも、

「体売る女と上官を狙う復員兵、そして戦災孤児とピストルの話にすればよかった。若い復員兵は要らない。

それでも日本の戦争、戦後、戦争責任の描き方は『ゴジラ-10』や『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら』に比べれば圧倒的に正しい」（荒井）

小さな人間関係の中で大きな戦争の傷跡を描くことに成功していると評価し、掲載に至った。

一方で、題材はいいとしながらも、

「書式はシナリオだが小説に近く、脚本家が監督自身であるから成立している」（里島）

と指摘があったことも記しておく。

『鬼太郎誕生 ゲゲゲの謎』

昭和31年、鬼太郎の父は失踪した妻を探し、血液銀行に勤める水木は隠された使命を胸に、共に龍賀一族が支配する村を訪れる。一族内で繰り広げられる跡継ぎ争い、そして次々と起こる怪奇現象。やがて物語は鬼太郎誕生の秘密と、目玉おやじの過去を明らかにする。

やや賛否の分かれた作品。

「記憶をなくした水木は会社の密命が果たせず、人として成長ができたこともなく、なんのドラマも描いていないと感じた」（印東）

「物語が散漫で、展開が遅い。もつと畳みかけてほしかった」（松下）

たしかに映画と脚本を比べると、本編は脚本の余分なところをうまく削ぎ落としている。重要視されたのはテーマ性。

「戦争と戦後に対するこだわり方に驚いた。『ゴジラ-10』に爪の垢を飲ませたい。731部隊を想起させ

るモチーフをエンターテイメントとしてうまく昇華させている。鬼太郎というフォーマットの上でよくこれをやったなと」(荒井)

「鬼太郎の世界と横溝正史の世界を足して二で割ったような二次創作の側面があり、一見ただのアニメ映画に見えるが、テーマ性はかなり勝負している。素直におもしろい」(いなぎ)

また、戦後を扱いながらも、「バディものの友情が現在の雰囲気フィットしている」(篠崎)

と2024年の映画になっていることも好感され、掲載に至った。

映画『窓ぎわのトットちゃん』

落ち着きがないため小学校を退学になったトットちゃんは、新しい学校「トモエ学園」で個性的な校長先生やユニークなクラスメイトたちと出会う。時は第二次世界大戦下。戦時下の不安定な状況でも、子供たちはのびのびと学び、遊び、友情を育む。トットちゃんは、戦争の影響を感じながらも様々な体験を通して成長していく。黒柳徹子が自身の幼少期を描いた自伝的小説が原作。

「昔から幾度となく描かれてきたトットちゃんというメ

ルヘンを守り通すことを徹底しながら作っている。これはこれでひとつのジャンルだなと」(篠崎)

「置いてあるエピソードも面白く、キャラクターも魅力的。しかしエッセイが原作だからか、大きな筋が一本通っていない」(長谷川)

「子供たちが生き生きしているという基本的なところは評価するが、後半部分がごまかされて進んでいくような気がしてもったいなかった」(里島)

と、原作からの脚色に関しては意見がやや割れたが、評価されたのは戦争の扱い。

「戦争を、作家の視点でも大人の視点でもなく、子どもの視点で、そして子どもの世界で描けているという意味では成功している」(松下)

「平和で平穏な暮らしの中にひたひたと戦争の空気が入ってくるという現象を、今の人々に伝えたかったという思いは強く伝わる」(吉村)

全体を通して歴史を真摯に扱い、上品な作品に仕上がっていることを評価。掲載に至った。

今回、アニメーション映画作品が2本掲載されることになりました。僕が委員長になってからは初めてのことです。

映画が映画館だけのものではなくなり、フィルムからデジタルへ、スクリーンからタブレットへと移り変わり、フォーマットが淘汰されてゆく中で、我々脚本家の仕事も様々な方向に広がっています。

「実写じゃなければ映画じゃない」

「映画館でかかったものだけが映画だ」

そんな風にこだわってもみたいけど、残念ながら世の中の変化は止まりません。映画という表現が、テクノロジーがなければ存在できない代物である以上、拘泥は停滞を意味するのです。映画や漫画、ゲームなど、表現の線引きはどんどん曖昧になっています。今や実写とアニメの違いなんて、脚本家にとっては些細なことでしょう。ここ一年で急速に台頭してきた生成AIとどう向き合っていくかという喫緊の問題の前ではなおさらです。

生成AIはどのように僕たちの仕事に影響してくるのでしょうか。それは脅威なのか、恩恵なのか。個人的な意見で言うと、僕は生成AIを活用することに肯定的です。というか、好むと好まざるとにかかわらず、我々はもう生成AIに関わらないでは物を作れなくなる時代になるだろうと思っています。ネット検索を一度も使わずに脚本を書く人なんて、もう誰もいない。一年前、馬鹿にするつもりで使ってみたChatGPTも、その成長の

速度に慄いています。今でもまだ未知な部分も多く、実験的な活用にとどまっていますが、近い将来、十分な相談相手としてAIは我々の前に存在しているはずです。差し当たっては、プロ棋士がAI将棋と対局して飛躍的にレベルを上げていったような状況が、表現の世界にも来るのだろうと想像しています。5年後、10年後の映画産業はどうなっているのか、畏怖と高揚感を抱きながら想像しつつ、2024年現在の日本映画と向き合いたいと思っています。

二〇一三年 日本映画封切作品一覧

() 内は配給会社

〈1月〉

『ファミリア』(キノフィルムズ) 脚本・いながききよたか 監督・成島出 出演・役所広司 吉沢亮

『とべない風船』(マジックアワー) 脚本・監督・宮川博至 出演・東出昌大 三浦透子
『恋のいばら』(バルコ) 脚本・澤井香織 城定秀夫 監督・城定秀夫 出演・松本穂香 玉城ティナ

『嘘八百 なにわ夢の陣』(ギャガ) 脚本・今井雅子 足立紳 監督・武正晴 出演・中井貴一 佐々木蔵之介

『名探偵コナン 灰原哀物語 黒鉄のミステリートレイン』※アニメ(東宝) 脚本・構成・宮下隼一 原作・青山剛昌

『火面 嘉吉の箭弓一揆』(カエルカフェ) 脚本・落合雪江 監督・秋原北胤 出演・和泉元彌 坂元健児

『Ippo』(ブライイトホース・フィルム) 脚本・加藤一浩 柄本佑 監督・柄本佑 出演・加瀬亮 宇野祥平

『編集霊 deleted』(ノースシーケーワイ) 脚本・原作・監督・千葉誠治 出演・正木郁 佐藤日向

『世界は僕らに気づかない』(Atemo) 脚本・監督・飯塚花笑 出演・堀家一希 ガウ

『妖怪ウォッチ』ジバニャンvsコマさんもんげー大決戦だニヤン』※アニメ(イオンエンターテイメント) 脚本・加藤陽一 原作・レベルファイブ 監督・泉保良輔

『ひみつのなっちゃん。』(ラビットハウス、丸壺動画) 脚本・監督・田中和次朗 出演・滝藤賢一 渡部秀

『マリッジカウンセラー』(スタジオレヴォ) 脚本・松井香奈 監督・前田直樹 出演・渡辺いっけい 松本若菜

『そして僕は途方に暮れる』(ハビネットファントム・スタジオ) 脚本・原作・監督・三浦大輔 出演・藤ヶ谷太輔 前田敦子

『映画 イチケイのカラス』(東宝) 脚本・浜田秀哉 原作・浅見理都 監督・田中亮 出演・竹野内豊 黒木華

『白獣』脚本・監督・高橋佑輔 出演・嶺俊郎 堀正幸

『蒼穹のファスナー BEHIND THE LINE』※アニメ 脚本・沖方丁 原作・XEBEC 監督・能戸隆

『まくをおろすな!』(ショウゲート) 脚本・竹内清人 監督・清水順二 出演・越岡裕貴 工藤美桜

『グッドバイ、バッドマガジンス』(日活) 脚本・横山翔一 山本健介 宮嶋信光 監督・横山翔一 出演・杏花 ヤマダユウスケ

『アイカツ! 10th STORY 未来へのSTARWAY』※アニメ(バンダイナムコピクチャーズ) 脚本・加藤陽一 監督・木村隆一

『AFTERGLOWS』(MYG Pictures) 脚本・キム・ヤスヒロ 浅野良輔 監督・木村太一 出演・朝香賢徹 MEGUMI

『BAD CITY』(渋谷プロダクション) 脚本…
OZAWA 監督…園村健介 出演…小沢仁
志 坂ノ上茜

『コインフレイク』(モクカ) 脚本…磯部鉄平
永井和男 監督…磯部鉄平 出演…GON
高田怜子

『レジェンド&バタフライ』(東映) 脚本…古
沢良太 監督…大友啓史 出演…木村拓哉
綾瀬はるか

『あつい胸さわぎ』(イオンエンターテイメン
ト、S・D・P) 脚本…高橋泉 原作…横山
拓也 監督…まつむらしんご 出演…吉田美
月喜 常盤貴子

『金の国 水の国』※アニメ(ワーナー・ブラ
ザース映画) 脚本…坪田文 原作…岩本ナオ
監督…渡邊こと乃

『ルパン三世VSキャッツ・アイ』※アニメ
(Amazon Prime Video) 脚本…葛原秀治 原
作…モンキー・パンチ 北条司 監督…静野

孔文 瀬下寛之
『コインランドリーカタルシス』(アエロ) 脚
本…監督…長谷川康 原作…えのもとぐりむ

出演…木戸邑弥 北原里英

〈2月〉

『仕掛人・藤枝梅安』(イオンエンターテイメ
ント) 脚本…大森寿美男 監督…河毛俊作
出演…豊川悦司 片岡愛之助

『生きててごめんさい』(渋谷プロダクショ
ン) 脚本…山口健人 山科重於良 監督…山
口健人 出演…黒羽麻璃央 穂志もえか

『スクロール』(ショウゲート) 脚本…清水康
彦 金沢知樹 木乃江祐希 原作…橋爪駿輝
監督…清水康彦 出演…北村匠海 中川大志

『鬼滅の刃』上弦終結、そして刀鍛冶の里
へ』※アニメ(東宝 アニプレックス) 脚本
制作…ufotable 原作…吾峠呼世晴 監督…
外崎春雄

『浮かぶ』(MOEWE) 脚本…監督…吉田奈津
美 出演…田中なつ 芋生悠

『茶飲友達』(イチタイム) 脚本…監督…外
山文治 出演…岡本玲 磯西真喜

『ぬける、メビウス!!』(deep water &
moonlight) 脚本…村上かおん 監督…加藤
慶吾 出演…坂ノ上茜 藤田朋子

『突撃!隣のUFO』(エクストリーム) 脚
本…はりのぶゆき 河崎実 監督…河崎実
出演…ヨネスケ 濱田龍臣

『みんな生きている ニつ目の誕生日』(ギグ
リーボックス) 脚本…監督…両沢和幸 原案…
樋口大悟 出演…樋口大悟 松本若菜

『君に幸あれよ』(ムービー・アクト・プロ
ジエクト) 脚本…監督…櫻井圭佑 出演…小
橋川建 高橋雄祐

『彼岸のふたり』※日本、アメリカ(新日本
映画社) 脚本…北口ユースケ 前田有貴 監
督…北口ユースケ 出演…朝比奈めいり 並
木愛枝

『Sin Clock』(アスミック・エース) 脚本…
監督…牧賢治 出演…窪塚洋介 坂口涼太郎

『#マンホール』(ギャガ) 脚本…原案…岡田
道尚 監督…熊切和嘉 出演…中島裕翔 奈
緒

『リバイスForward 仮面ライダーライブ&
エビル&デモンズ』(東映ビデオ) 脚本…毛利
亘宏 原作…石ノ森章太郎 監督…坂本浩一

出演…日向亘 小松準弥
『銀平町シネマブルース』(SPOTTED
PRODUCTIONS) 脚本…いまおかしんじ

監督…城定秀夫 出演…小出恵介 吹越満
『エゴイスト』(東京テアトル) 脚本…松永大
司 狗飼基子 監督…松永大司 出演…鈴木

亮平 宮沢氷魚
『映画 佐々木と宮野 卒業編』※アニメ(角
川 ANIMATION) 脚本…中村能子 原
作…春園シヨウ 監督…石平信司

『BLUE GIANT』※アニメ(東宝映像事業

部) 脚本: NUMBERS 原作: 石塚真一 監督: 立川譲

『シャイロックの子供たち』(松竹) 脚本: ツバキミチオ 原作: 池井戸潤 監督: 本木克英 出演: 阿部サダヲ 上戸彩

『TOCCA タスカ』(鎌田フィルム) 脚本: 加瀬仁美 鎌田義孝 脚本協力: 中野太 監督: 鎌田義孝 出演: 金子清文 菜葉菜

『湯道』(東宝) 脚本: 小山薫堂 監督: 鈴木雅之 出演: 生田斗真 濱田岳

『ちひろさん』(アスミック・エース) 脚本: 澤井香織 今泉力哉 原作: 安田弘之 監督: 今泉力哉 出演: 有村架純 豊嶋花

『少女は卒業しない』(クロックワークス) 脚本: 監督: 中川駿 原作: 朝井リョウ 出演: 河合優美 小野莉奈

『レッドシユーズ』(S・D・P) 脚本: 保木本真也 上杉京子 監督: 雑賀俊朗 出演: 朝比奈彩 市原隼人

『いちばん逢いたいひと』(渋谷プロダクション) 脚本: 監督: 丈 原作: 近藤牧人 出演: 倉野尾成美 三浦浩一

〈3月〉

『なのに、千輝くんが甘すぎる。』(松竹) 脚

本: 大北はるか 原作: 亜南くじら 監督: 新城毅彦 出演: 高橋恭平 畑芽育

『映画ドラえもん のび太と空の理想郷(ユートピア)』※アニメ(東宝) 脚本: 古沢良太 原作: 藤子・F・不二雄 監督: 堂山卓見

『息ができない』 脚本: 窪田信介 監督: 富樫森 出演: 白木孝宜 丸林孝太郎

『有り、触れた、未来』(Alamo) 脚本: 監督: 山本透 原案: 齋藤幸男 出演: 桜庭ななみ 碧山さえ

『Winny』(KDDI、ナカチカ) 脚本: 松本優作 岸建太郎 原案: 渡辺淳基 監督: 松本優作 出演: 東出昌大 三浦貴大

『劇場総集編 SSSS.DYNAZENON』※アニメ(東宝映像事業部) 脚本: 長谷川圭一 原案: グリッドマン 監督: 宮島善博 総監督: 雨宮哲

『ひとりぼっちじゃない』(パルコ) 脚本: 原作: 監督: 伊藤ちひろ 出演: 井口理 馬場ふみか

『REVOLUTION+1』(太秦) 脚本: 井上淳一 足立正生 監督: 足立正生 出演: タモト清嵐 岩崎聡子

『シン・仮面ライダー』(東映) 脚本: 監督: 庵野秀明 原作: 石ノ森章太郎 出演: 池松

壮亮 浜辺美波

『バトルキング We'll rise again』(S・D・P) 脚本: 福谷圭祐 監督: 瀧川元氣 出演: 山下永玖 高尾颯斗

『あのこを忘れた』(Hero.No.1Film) キネマトワーズ 脚本: 監督: 谷口雄一郎 出演: 保坂直希 相馬有紀実

『推しの子 Mother and children』※アニメ(角川ANIMATION) 脚本: 田中仁 原作: 赤坂アカ 横槍メンゴ 監督: 平牧大輔

『わたしの幸せな結婚』(東宝) 脚本: 菅野友恵 原作: 顎木あくみ 監督: 塚原あゆ子 出演: 目黒蓮 今田美桜

『零落』(日活、ハピネットファントム・スタジオ) 脚本: 倉持裕 原作: 浅野いにお 監督: 竹中直人 出演: 斎藤工 趣里

『死体の人』(ラビットハウス) 脚本: 草薅勲 渋谷悠 監督: 草薅勲 出演: 奥野瑛太 唐田えりか

『宮古島物語ふたたのヴィラ』(DANTS) 脚本: 監督: 上西雄大 出演: 柴山勝也 古川

『グリッドマン ユニバース』※アニメ(東宝映像事業部) 脚本: 長谷川圭一 原作: グリッドマン 監督: 雨宮哲

『犬、回転して、逃げる』(アイエス・フィ
ルド) 脚本・監督…西垣匡基 出演…長妻伶
央 宮澤佐江

『クモとサルの家族』(リアルプロダクツ) 脚
本・監督…長澤佳也 出演…宇野祥平 徳永
えり

『Sing8』(マジックアワー) 脚本・監督…
小中和哉 出演…上村侑 高石あかり

『劇場版アルゴナビスAXIA』※アニメ(プ
シロードムーブ) 脚本…毛利亘宏 監督…森
川滋

『ミュージスは溺れない』(カプフィルム) 脚
本・監督…浅雄望 出演…上原実矩 若杉風
『赦し』(彩プロ) 脚本…ランド・コルター 監
督…アンシユル・チョウハン 出演…尚玄
MEGUMI

『雑魚どもよ、大志を抱け!』(東映ビデオ)
脚本…松本稔 足立紳 原作・監督…足立紳
出演…池川侑希弥 田代輝

『ロストケア』(東京テアトル、日活) 脚本…龍
居由佳里 前田哲 原作…葉真中顕 監督…
前田哲 出演…松山ケンイチ 長澤まさみ

『ペイビーわるきゅーれ2ペイビー』(渋谷ブ
ロダクション) 脚本・監督…阪元裕吾 出演…
高石あかり 伊澤彩織

『18歳、つむぎます』 脚本…高石明彦 監督…

北川瞳 出演…伊礼姫奈 高橋璃央

『仁義なき幕末 龍馬死闘篇』(東映ビデオ)
脚本…毛利亘宏 監督…橋本一 出演…松田
凌 和田琢磨

『演者』(うずめき) 脚本・監督…小野寺隆一
出演…藤井菜魚子 河原幸子

『わたしの見ている世界が全て』(Tokyo
New Cinema) 脚本…末木はるみ 左近圭太
郎 監督…左近圭太郎 出演…森田想 中村
映里子

『GOLDFISH』(太秦) 脚本…港岳彦 朝倉
陽子 監督…藤沼伸一 出演…永瀬正敏 北
村有起哉

『らくだい魔女 フウカと闇の魔女』※アニ
メ(ポニーキャニオン) 脚本…吉村清子 原
作…成田サトコ 千野えなが 監督…浜名孝
行

『映画刀剣乱舞 黎明』(東宝) 脚本…小橋秀
之 鋼屋ジン 原案…『刀剣乱舞ONLINE』
より (DMM GAMES/NITRO PLUS) 監

督…耶雲哉治 出演…鈴木拡樹 荒牧慶彦
『消せない記憶』(CINEAST) 脚本・監督…
園田新 出演…兵頭功海 桃果

『映画ネメシス 黄金螺旋の謎』(ワーナー・
ブラザース映画) 脚本…秦建日子 監督…入
江悠 出演…広瀬すず 櫻井翔

〈4月〉

『仕掛人・藤枝梅安2』(イオンエンターテイ
メント) 脚本…大森寿美男 監督…河毛俊作
出演…豊川悦司 片岡愛之助

『プリンセス・プリンシバル Crown
Tandler 第3章』※アニメ(ショウゲッ
ト) 脚本…シリーズ構成…木村暢 監督…橘
正紀

『美しう彼eternal』(カルチュア・パブリッ
シャーズ) 脚本…坪田文 原作…風良ゆう
監督…酒井麻衣 出演…萩原利久 八木勇征
『世界の終わりに』(ナカチカ) 脚本・原作・
監督…紀里谷和明 出演…伊東蒼 毎熊克哉

『ヌーのロインロッカーは使用禁止』
(10ANTS) 脚本・監督…上西雄大 出演…古
川藍 上西雄大

『2の小さな手』(フルモテルモ) 脚本…守口
悠介 原作…郷田マモラ 吉田浩 監督…中
田博之 出演…武田航平 佐藤恋和

『名探偵コナン 黒鉄の魚影』※ア
ニメ(東宝) 脚本…櫻井武晴 原作…青山剛
昌 監督…立川謙

『幼獣奇譚 ニンジャVSシャーク』(エクスト
リーム) 脚本…足木淳一郎 監督…坂本浩一

出演…平野宏周 西銘駿

『サイドバイサイド 隣にいろ人』(ハピ

ネットファントム・スタジオ) 脚本・原案・

監督…伊藤ちひろ 出演…坂口健太郎 齋藤

飛鳥

『ぬいぐるみとしゃべる人はやさしい』(イハ

フィルムズ) 脚本…金子鈴幸 金子由里奈

原作…大前栗生 監督…金子由里奈 出演…

細田佳央太 駒井蓮

『ヘルメットワルツ』 脚本…丸山智巳 佐々木

和也 監督…西村洋介 出演…佐々木和也

和田光沙

『ラブラフダイ』(シネマ健康会) 脚本・監督…

松本卓也 出演…むかい誠一 イグロヒデア

キ

『ヴァレッジ』(KADOKAWA、スターサ

ンズ) 脚本・監督…藤井道人 出演…横浜流

星 黒木華

『ゲネプロ★7』(ギャガ) 脚本…川尻恵太

監督…堤幸彦 出演…三浦海里 和田雅成

『ピットマン・ロイヤー』(クロックワーク

ス) 脚本…大野大輔 久保和明 監督…大野

大輔 出演…荒木宏文 陣内将

『東京リベンジャーズ2 血のハロウィン編

運命』(ワーナー・ブラザース映画) 脚本…高

橋泉 原作…和久井健 監督…英勉 出演…

北村匠海 山田裕貴

『風の憂鬱』(モクカ) 脚本…磯部鉄平 谷口

慈彦 永井和男 監督…磯部鉄平 出演…辻

風子 根矢涼香

『大阪古着日和』(ラビットハウス) 脚本…谷

山武士 廣川祐樹 監督…谷山武士 出演…

森田哲矢 光石研

『JOES31』(太秦) 脚本・監督…河野宏紀

出演…野村一瑛 河野宏紀

『ゼロの音』(Hulu) 脚本・監督…老山綾乃

出演…川谷絵音 萩原みのり

『劇場版TOKYO MER 走る緊急救命室』

(東宝) 脚本…黒岩勉 監督…松本彩 出演…

鈴木亮平 賀来賢人

『聖闘士星矢 The Beginning』(東映)

脚本…ジョシユ・キャンベル マット・ス

トゥーケン キール・マレーイ 原作…車

田正美 監督…トメック・バギンスキー 出

演…新田真劍佑 ファムケ・ヤンセン

『せかいのおきく』(東京テアトル、U-NEXT、

リトルモア) 脚本・監督…阪本順治 出演…

黒木華 寛一郎

『エスパーX探偵社 さよならのさがしも

の』(イナズマ社) 脚本・監督…木場明義 出

演…末原拓馬 佐伯大地

『放課後アングラライフ』(マーメイドフィ

ルム) 脚本・監督…城定秀夫 原作…井上か

える 出演…十味 まるび

『古いゲーム』 脚本・監督…寺西一浩 出演…

寺西優真 太田奈緒

〈5月〉

『暴太郎戦隊ドンブラザーズVSゼンカイ

ジャー』(東映ビデオ) 脚本…井上敏樹 香村

純子 原作…八手三郎 監督…渡辺勝也 出

演…樋口幸平 別府由來

『Be Here Now』(ポルトレ) 脚本…西本

達哉 牛島礼音 監督…西本達哉 出演…北

垣優和 川野美怜

『銀河鉄道の父』(キノフィルムズ) 脚本…坂

口理子 原作…門井慶喜 監督…成島出 出

演…役所広司 菅田将暉

『やいはて』(キングレコード) 脚本・監督…

越川道夫 出演…北澤響 中島歩

『劇場版 PSYCHO-PASS サイロパス

PROVIDENCE』※アニメ(東宝映像事業

部) 脚本…深見真 冲方丁 構成…冲方丁

監督…塩谷直義

『それいけ!ゲートボールさくら組』(東京テ

アトル) 脚本・監督…野田孝則 出演…藤竜

也 石倉三郎

『劇場版 推しが武道館いってくれたら死ぬ』(ポニーキャニオン) 脚本…本山久美子

原作…平尾アウリ 監督…大谷健太郎 出演…松村沙友理 中村里帆

『なぎさ』(アークエンタテインメント) 脚本…監督…古川原壮志 出演…青木柚 山崎七海

『おとななじみ』(東映) 脚本…吉田恵里香 原作…中原アヤ 監督…高橋洋人 出演…井上瑞稀 久間田琳加

『静かなるドン 前編』(ティ・ジョイ) 脚本…山口健人 吉崎崇一 原作…新田たつお 監督…山口健人 出演…伊藤健太郎 寛美和子

『いずれあなたが知る話』脚本…小原徳子 監督…古澤健 出演…大山大 小原徳子

『嘘の起源』脚本…杉岡知哉 谷口雄哉 森七聖 監督…杉岡知哉 谷口雄哉 出演…後藤大 岡野海斗 瑚々 田口愛佳

『静かなるドン 後編』(ティ・ジョイ) 脚本…山口健人 吉崎崇一 原作…新田たつお 監督…山口健人 出演…伊藤健太郎 寛美和子

『路边花草』(キングレコード) 脚本…監督…越川道夫 出演…佐久間麻由 遊屋慎太郎

『宇宙人のあいつ』(ハビネットファントム・スタジオ) 脚本…監督…飯塚健 出演…中村倫也 伊藤沙莉

『最後まで行く』(東宝) 脚本…平田研也 藤井道人 オリジナル脚本…キム・ソンファン

監督…藤井道人 出演…岡田准一 綾野剛

『老ナルキソス』(オンリー・ハーツ) 脚本…監督…東海林毅 出演…田村泰二郎 水石亜飛夢

『ある日、ある女。』脚本…監督…光平哲也 出演…金子みひろ アライジン

『あの子の夢を水に流して』(ベンチ) 脚本…監督…遠山昇司 出演…内田慈 玉置玲央

『はざまに生きる、春』(ラビットハウス) 脚本…監督…葛里華 出演…宮沢氷魚 小西桜子

『26時13分』(テンドープロ) 脚本…平松豊司 山口通平 監督…山口通平 出演…岡田結実 木村祐一

『波紋』(ショウゲート) 脚本…監督…荻上直子 出演…筒井真理子 光石研

『岸辺露伴 ルーヴルへ行く』(アスミック・エース) 脚本…小林靖子 原作…荒木飛呂彦 監督…渡辺一貴 出演…高橋一生 飯豊まりえ

『いわれること いきること』(アイ・エム・ティ) 脚本…監督…北沢幸雄 出演…吉田伶香 藤田朋子

『僕の町はお風呂が熱くて埋蔵金が出てライ

メンが美味い。』(アークエンタテインメント) 脚本…西永貴文 監督…本多繁勝 出演…酒井大地 原愛音

『タクミくんシリーズ 長い長い物語の始まりの朝』(カルチュア・エンタテインメント) 脚本…金杉弘子 原作…ごとうしのぶ 監督…横井健司 出演…森下紫温 加藤大悟

『6月』

『アキはハルとごはんを食べたい』(クロックワークス) 脚本…川崎龍太 原作…たじまこと 監督…川野浩司 出演…赤澤遼太郎 高橋健介

『怪物』(東宝、ギャガ) 脚本…坂元裕二 監督…是枝裕和 出演…安藤サクラ 永山瑛太

『美男ベコパンと悪魔』(アイエス・フィード) 脚本…監督…松田圭太 原作…ビクトルII マリー・ユエーゴ 原作翻訳…井上裕子 出演…阿久津仁愛 下尾みう

『スパイスより愛を込めて。』(プロロードメディア) 脚本…アラン・スミシー 監督…瀬木直貴 出演…中川翼 茅島みずき

『濁水』(KADOKAWA) 脚本…及川章太郎 原作…河林満 監督…高橋正弥 出演…生田斗真 門脇麦

『TWAYS』(TEAM KAMU) 脚本・監督：神威杏次 出演：中川ミコ 坂本三成

『忪むモンスター』脚本：アーサー・ナンス 北田直俊 大春ハルオ 監督・原案：北田直俊 出演：柳内佑介 AIRI

『劇場版 美少女戦士セーラームーン Cosmos 前編』※アニメ(東映)脚本：筆安一幸 原作：武内直子 監督：高橋知也

『映画めんたいびりり バンジーの花』(クックワークス) 脚本：東憲司 江口カン 監督：江口カン 出演：博多華丸 富田靖子

『逃げぎれた夢』(キノフィルムズ) 脚本・監督：二ノ宮隆太郎 出演：光石研 吉本実愛

『水は海に向かって流れる』(ハピネットファントム・スタジオ) 脚本：大島里美 原作：田島列島 監督：前田哲 出演：広瀬すず 大西利空

『永久少年 Eternal Boys NEXT STAGE』※アニメ(イオンエンターテイメント) シリーズ構成：うえのきみこ 原作：満福芸能プロダクション 監督：nigami

『レンタル×ファミリー』(Atomo) 脚本：阪本武仁 土屋和彦 宮沢厚希 ナカムラユウキ 原作：石井裕一 監督：阪本武仁 出演：塩谷瞬 川上なな美

『ブラッククローバー 魔法帝の剣』※アニメ

メ(松竹ODS事業室) 脚本：ジョニー音田 折井愛 原作：田畠裕基 監督：種村綾隆

『忌怪島 きかいじま』(東映) 脚本：いながさきよたか 清水崇 監督：清水崇 出演：西畑大吾 生駒里奈

『忍風戦隊ハリケンジャーどいやる! シュンツウ20th anniversary』(東映ビデオ) 脚本：谷慶子 原作：八手三郎 監督：渡辺勝也 出演：塩谷瞬 長澤奈央

『魔女の香水』(アークエンタテインメント) 脚本・監督：宮武由衣 出演：黒木瞳 桜井日奈子

『リトルライターの撃ち方』(Cinemago) 脚本・監督：眞田康平 出演：奥津裕也 村有

『いつちやうい』(夢何生) 脚本・監督：片山享 出演：松林慎司 太田美恵

『インフィニア・サークル』(MARCOT) 脚本：光伸春 原案：大勝ミサ 監督：旭正嗣 出演：玉城裕規 川上將大

『君は放課後インソムニア』(ポニーキャニオン) 脚本：高橋泉 池田千尋 原作：オジロマコト 監督：池田千尋 出演：森七菜 奥平大兼

『よくす、おまたせ、じゃあまたね。』(SPOTTED PRODUCTIONS) 脚本：鳥皮さ

さみ 監督：猪股和磨 出演：橋本淳 稲葉友

『無情の世界』※オムニバス(G-STARPRO) 脚本：佐向大 小村昌士 監督：佐向大 山岸謙太郎 小村昌士 出演：唐田えりか 渡部龍平 白石優愛

『アトのセカイ』(グランビクス) 脚本：天野裕充 三田法子 監督：天野裕充 出演：土田卓弥 石崎なつみ

『愛のこむらがえり』(プラントフィルムズエントテインメント) 脚本：加藤正人 安倍照雄 三嶋龍朗 原作：加藤正人 安倍照雄 監督：高橋正弥 出演：磯山さやか 吉橋航也

『青春ブタ野郎はおでかけシスターの夢を見ない』※アニメ(アニプレックス) 脚本：構成：横谷昌宏 原作：鴨志田一 監督：増井壮一

『リバー、流れないでよ』(トリウッド) 脚本：原案：上田誠 監督：山口淳太 出演：藤谷理子 鳥越裕貴

『大名倒産』(松竹) 脚本：丑尾健太郎 稲葉一広 原作：浅田次郎 監督：前田哲 出演：神木隆之介 杉咲花

『MOON and GOLDFISH』(ガチンコ・フィルム) 脚本：四海兄弟 監督：飯塚冬酒

出演…平井亜門 峰平朝良

『縁の下のイミグレ』(トリプルアップ) 脚

本・監督…なるせゆうせい 原作…近藤秀将

出演…ナターシャ 堀家一希

『断捨離バラダイス』(クロックワークス) 脚

本・監督…萱野孝幸 出演…篠田諒 北山雅

康

『GONZA』(ベストブレーション) 脚本・監督…

千村利光 原案…佐藤マコト 出演…上村侑

坂巻有紗

『東京リベンジャーズ2 血のハロウィン編

決戦』(ワーナー・ブラザース映画) 脚本…高

橋泉 原作…和久井健 監督…英勉 出演…

北村匠海 山田裕貴

『山女』※日本、アメリカ(アニメプロデュ

ス) 脚本…福永壮志 長田育恵 監督…福永

壮志 出演…山田杏奈 森山未來

『札束と温泉』(渋谷プロダクション) 脚本・

監督…川上亮 出演…沢口愛華 小浜桃奈

『日光物語』(新日本映画社) 脚本・監督…五

藤利弘 出演…武藤十夢 スネオヘアー

『講話のおそ松さん』※アニメ(イオンエン

タータイムメント) 脚本…鈴森ゆみ 原作…赤

塚不二夫 演出…2nd Function

『探偵マリコの生涯で一番悲惨な日』(東映ビ

デオ) 脚本…山田能龍 内田英治 片山慎三

監督…内田英治 片山慎三 出演…伊藤沙莉

北村有起哉

『それいけ!アンパンマン ロボリイとぼか

ほかプレゼント』※アニメ(東京テアトル)

脚本…米村正二 原作…やなせたかし 監

督…橋本敏一

『劇場版 美少女戦士セーラームーン

Cosmos 後編』※アニメ(東映) 脚本…筆

安一幸 原作…武内直子 監督…高橋知也

『オレンジ・ランフ』(ギャガ) 脚本…金杉弘

子 山国秀幸 原作…山国秀幸 監督…三原

三尋 出演…貫地谷しほり 和田正人

〈7月〉

『モダンかアナキー』(『モダンかアナ

キー』同盟) 脚本・監督…杉本大地 出演…

金子大地 河合優実

『SEE HEAR LOVE 見えなくても聞こえ

なくても愛してる ディレクターズカット

版』(ティ・ジョイ) 脚本・監督…イ・ジェ

ハン 原作…NASTYCAT 出演…山下智久

新本優子

『赫くなれば其れ』(猫目はち) 脚本・監督…

猫目はち 出演…門田宗大 田中爽一郎

『散歩屋ケンちゃん』(たきびファクトリー)

脚本…ビッグ錠 前田郁 寺井広樹 監督…

原案…寺井広樹 出演…いしだ壱成 石田純

一

『遠いところ』(ラビットハウス) 脚本…工藤

将亮 鈴木菜美 監督…工藤将亮 出演…花

瀬琴音 石田夢実

『ピッチハイク』(アルバトロス・フィルム)

脚本…宮本武史 監督…山田雅史 出演…大

倉空人 中村守里

『命の満ち欠け』(ユーステール、K-zone)

脚本…小関翔太 監督…小関翔太 岸建太朗

出演…小関翔太 上原剛史

『一秒先の彼』(ビターズ・エンド) 脚本…宮藤

官九郎 原作…チェン・ユージン 監督…

山下敦弘 出演…岡田将生 清原果耶

『先生!口裂け女です!』(エクストリーム)

脚本・監督…ナカモトユウ 出演…木戸大聖

黒崎レイナ

『交換ウソ日記』(松竹) 脚本…吉川菜美 原

作…櫻いいよ 監督…竹村謙太郎 出演…高

橋文哉 桜田ひより

『バイオハザード デスアイランド』※CG

(角川ANIMATION) 脚本…深見真 原

作…カブコン 監督…羽住英一郎

『釜石ラーメン物語』(ムービー・アクト・プ

ロジェクト) 脚本…今関あきよし いしか

わ彰 監督：今関あきよし 出演：井桁弘恵
池田朱那

『テクノブラザーズ』() 脚本・監督：渡辺
紘文 出演：柳明日菜 井野勝美

『青春墓場』(イハフィルムズ) 脚本・監督：
奥田庸介 出演：奥原崇志 奥田庸介

『JUROTAJI』(BRUNTON FILMS) 脚本・
監督・原作：北和気 出演：朝田淳弥 宮野
陽名

『アイスクリームフィーバー』(バルコ) 脚
本：清水匡 原案：川上未映子 監督：千原
徹也 出演：吉岡里帆 モトーラ世理奈

『君たちはどう生きるか』※アニメ(東宝) 脚
本・原作・監督：宮崎駿

『ウルフハンターが行く！ 人狼三国志編』
(ユナイテッドエンタテインメント) 脚本：長
田安正 江面貴亮 演出：笹木彰人 映像監
督：曾根剛 出演：小野塚勇人 井澤勇貴

『THEATERS』※オムニバス(リアリーラ
イクフィルムズ) 脚本：清水匡 中村公彦
鈴木太一 沖正人 監督：山口雄也 中村公
彦 鈴木太一 沖正人 出演：矢作穂香 雑
賀克郎 今野浩喜 草野崇徳

『五等分の花嫁s』※アニメ(ポニーキャニオ
ン) シリーズ構成：大知慶一郎 原作：春場
ねぎ 監督：宮本幸裕

『たまつきの夢』(映日果人) 脚本・監督：田
口敬太 出演：辻千恵 金井浩人

『PARALLEL パラレル』脚本・監督：田
中大貴 出演：植葉ももな 芳村宗治郎

『PLASTIC』(bold) ロビアボア・フィルム
脚本・監督：宮崎大祐 出演：小川あん 藤
江琢磨

『パラダイス 半島』(トリプルアップ) 脚
本・監督：稲葉雄介 出演：染谷俊之 吉田
美月喜

『おそ松さん 魂のたて焼きパーティーと伝
説のお泊り会』※アニメ(エイベックス・ピ
クチャーズ) 脚本：松原秀 原作：赤塚不二
夫 監督：山口ひかる

『12ヶ月のカイ』脚本・監督：亀山睦木 出
演：中垣内彩加 工藤孝生

『セフレの品格(フライド) 初恋』(日活) 脚
本・監督：城定秀夫 原作：湊よりこ 出演：
行平あい佳 青柳翔

『神回』(東映ビデオ) 脚本・監督：中村貴一
朗 出演：青木柚 坂ノ上茜

『ランサム』(エクストリーム) 脚本：西澤悟
奥西隼也 室賀厚 監督：室賀厚 出演：ユ
ン・ソンモ 小沢仁志

『658km、陽子の旅』(カルチュア・パプ
リッシュヤーズ) 脚本：室井孝介 浪子想 原

案：室井孝介 監督：熊切和嘉 出演：菊地
凜子 竹原ピストル

『パンフナイト』(KYS STUDIO TOKYO)
脚本・監督：開沼豊 出演：小澤雄太 寺坂
頼我

『映画 仮面ライダーギーツ4人のエースと
黒狐』※アニメ(東映) 脚本：高橋悠也 原
作：石ノ森章太郎 監督：中澤祥次郎

『キングダム 運命の炎』(東宝、ソニー・ピ
クチャーズエンタテインメント) 脚本：黒岩
勉 原泰久 原作：原泰久 監督：佐藤信介
出演：山崎賢人 吉沢亮

『BLUE BOY LOVER』脚本：哲太郎 風
間英春 監督：哲太郎 出演：哲太郎 阪本
健大

『叢雲 ゴースト・エージェンシー』(ギグ
リーボックス) 脚本・監督：原田光規 出演：
浅井星光 虎牙光揮

『邯鄲の夢 三重芝居と四人の役者』(ギグ
リーボックス) 脚本・監督：三屋多嘉雄
出演：三屋多嘉雄 須賀貴匡

〈8月〉

『ゾン100ゾンビになるまでにしたい
100人のメロ』(Netflix) 脚本：三嶋龍朗 原

作・麻生羽呂 高田康太郎 監督・石田雄介
出演・赤楚衛二 白石麻衣

『炎上する君』(レプロエンタテインメント)

脚本・監督・ふくだももこ 原作・西加奈子

出演・うらじぬの ファーストサマーウイカ

『カタオモイ』(ムービー・アクト・プロジェクト)

脚本・宍戸英紀 監督・いまおかしん

出演・丸純子 細田善彦

『17歳は止まらない』(東映ビデオ) 脚本・監督・北村美幸

出演・池田朱那 片田陽依

『海の夜明けから真昼まで』(『海の夜明けから真昼まで』製作チーム・ARARAT) 脚本・監督・林隆行

原作・うめざわしゅん 出演・吉村界人 羽音

『しん次元!クレヨンしんちゃんTHE MOVIE 超能力大決戦 とべとべ手巻ぎ寿司』

※アニメ(東宝) 脚本・監督・大根仁 原作・白井儀人

『特別編 響け!ユーフォニアム アンサンブルコンテスト』※アニメ(松竹ODS事業

室) 脚本・花田十輝 原作・武田綾乃 監督・石原立也

『はつぐね』(空架soraca film) 脚本・監督・大西諒

出演・木村知貴 高見こころ

『セフレの品格 ライド 決意』(日活) 脚本・監督・城定秀夫

原作・湊よりこ 出演・行

平あい佳 青柳翔

『瞬きまで』(ルネシネマ) 脚本・監督・長谷川朋史

出演・舞木ひと美 池田良

『風のゆくえ』(ムービー・アクト・プロジェクト) 脚本・監督・石井慎吾

出演・嶺豪一 斎藤千晃

『七つの大罪 怨嗟のエジンバラ 後編』※アニメ(Nelflix)

脚本・池田臨太郎 原作・鈴木央

総監督・阿部記之 監督・ボブ白旗

『ミンナのウタ』(松竹) 脚本・角田ルミ 清水崇

監督・清水崇 出演・白濱亜嵐 片寄涼太

『リボルバー・リリー』(東映) 脚本・小林達夫

行定勲 原作・長浦京 監督・行定勲

出演・綾瀬はるか 長谷川博己

『やよならエリュマントス』(SPOTTED PRODUCTIONS) 脚本・監督・大野大輔

出演・珉々 咲田ゆな

『30S』(STUDIO CARNET) 脚本・監督・佐藤克則

原案・真田佑馬 出演・小野匠 財田ありさ

『ウソトホント』(灯台守・柴口組) 脚本・監督・柴口勲

出演・行天優華 塚本莉央

『オジさん、劇団始めました。』(ユナイテッド エンタテインメント)

脚本・監督・山本浩貴 出演・渡辺いつけい やべきようすけ

『高野豆腐店の春』(東京テアトル) 脚本・監督・三原光尋

出演・藤竜也 麻生久美子

『明ける夜に』 脚本・監督・堀内友貴 出演・五十嵐諒

花純あやの

『SAND LAND』※アニメ(東宝) 脚本・森ハヤシ

原作・鳥山明 監督・横嶋俊久

『尾かしら付き。』(ムービーウォーカー) 脚本・おかざきさとこと

原作・佐原ミズ 監督・真田幹也

出演・小西詠斗 大平采佳

『きみとまた』 脚本・監督・葉名恒星 出演・平井亜門

伊藤早紀

『野球どアホウ未〓人』(カブ研究会) 脚本・堀雄斗

監督・小野峻志 出演・森山みつき 井筒しま

『Love Will Tear Us Apart』(Vandalism) 脚本・宇賀那健一

渡辺紘文 監督・宇賀那健一

出演・久保田紗友 青木柚

『GXN』(東映) 脚本・加藤正人 丸尾九一郎

原作・小沢としお 監督・瑠東東一郎 出演・岸優太

竜星涼

『春に散る』(ギャガ) 脚本・瀬々敬久 星航

原作・沢木耕太郎 監督・瀬々敬久 出演・佐藤浩市

横濱流星

『海辺の恋人』(ムービー・アクト・プロジェクト) 脚本・宍戸英紀

監督・いまおかしん 出演・フミカ 小林優斗

『かかってこいよ世界』（ライツキューブ）脚本・畠中沙紀 監督・内田佑季 出演・佐藤玲 飛葉大樹

『#ミトヤマネ』（エレファントハウス）脚本・監督・宮崎大祐 出演・玉城ティナ 湯川ひな

『天国か、ここ？』（国映映画研究部）脚本・佐藤稔 中野太 監督・いまおかしんじ 出演・河屋秀俊 武田曉

〈9月〉

『MAD CATS』（ノアド）脚本・監督・津野励木 出演・ミネオショウ 松浦祐也

『緑のざわめき』（S・D・P）脚本・監督・夏都愛未 出演・松井玲奈 岡崎紗絵

『福田村事件』（太秦）脚本・佐伯俊道 井上淳一 荒井晴彦 監督・森達也 出演・井浦新 田中麗奈

『バカ塗りの娘』（ハピネットフアントム・スタジオ）脚本・鶴岡慧子 小嶋健作 原作・高森美由紀 監督・鶴岡慧子 出演・堀田真由 坂東龍汰

『ごんには、母さん』（松竹）脚本・山田洋次 朝原雄三 原作・永井愛 監督・山田洋次 出演・吉永小百合 大泉洋

『スイート・マイホーム』（日活、東京テアトル）脚本・倉持裕 原作・神津凜子 監督・齊藤工 出演・窪田正孝 蓮佛美沙子

『夜が明けたら、いちばんに君に会いたい』（アスミック・エース）脚本・イ・ナウオン 酒井麻衣 原作・汐見夏衛 監督・酒井麻衣 出演・白岩瑠姫 久間田琳加

『爆電戦隊アバレンジャー20th 許されざるアバレ』（東映ビデオ）脚本・荒川稔久 原作・八手三郎 監督・木村ひさし 出演・西興一朗 富田翔

『ブルーボール』（レフトハイ）脚本・監督・川崎五郎 出演・樺カレン 森沢かな

『メントウな人々』（映画24区）脚本・監督・安田真奈 出演・片岡千之助 藤嶋花音

『ぼつれる』（ビターズ・エンド）脚本・監督・加藤拓也 出演・門脇麦 田村健太郎

『アイドルマスター ミリオンライブ! 第2幕』※アニメ（松竹ODS事業室）脚本・シリーズ構成・加藤陽一 原作・バンダイナムコエンターテインメント 監督・綿田慎也

『戦慄怪奇ワールド 「ワズギ」』（アルバトロス・フィルム）脚本・監督・白石晃士 出演・大迫茂生 久保山智夏

『イエローマーマーガリン』（脚本・監督・朱池亮人 出演・榎津求仁生 瑠美子

『禁じられた遊び』（東映）脚本・杉原恵明 原作・清水カルマ 監督・中田秀夫 出演・橋本環奈 重岡大毅

『劇場版シティーハンター 天使の涙（エンジェルダスト）』※アニメ（アニプレックス）脚本・むとうやすゆき 原作・北条司 監督・竹内一義 総監督・こだま兼嗣

『映画 政見放送』（セブンフィルム、トキメディアワークス）脚本・多和田久美 監督・谷健二 出演・馬場良場 瀬戸利樹

『正』脚本・小谷香織 原作・谷崎潤一郎 監督・井土紀州 出演・新藤まなみ 小原徳子

『赤ずきん、旅の途中で死体と出会う。』（Netflix）脚本・鎌田哲生 福田雄一 原作・青柳碧人 監督・福田雄一 出演・橋本環奈 新木優子

『アリスとテレスのまぼろし工場』※アニメ（ワーナー・ブラザース映画、MAPPA）脚本・原作・監督・岡田麿里

『Threads of Blue』（シネメディア）脚本・監督・宗野賢一 出演・佐藤玲 筒井真理子

『ABYSS アビス』（FOL）脚本・須藤蓮 渡辺あや 監督・須藤蓮 出演・須藤蓮 佐々木ありさ

『ミステリと言う勿れ』（東宝）脚本・相沢友

子 原作：田村由美 監督：松山博昭 出演：菅田将暉 松下洸平

『映画ブリキユアオールスターズF』※アニメ（東映）脚本：田中仁 原作：東堂いづみ 監督：田中裕太

『CARモディファイズ』脚本：監督：出馬康成 原案：羽入田行夫 出演：松本大志 大葉律

『GREEN GRASS 生れがわるい』※日本、チリ（ベストブレーション）脚本：監督：イグナシオ・ルイス 出演：イシザキマサタカ 小澤征悦

『夏空ダンス』（イオンエンターテイメント）脚本：監督：内村光良 出演：島雄ことなつ 倉島颯良

『女囚』（ライツキューブ）脚本：深井戸睡眠 原作：加藤山羊 矢樹純 監督：鳴瀬聖人 出演：夏子 和田光沙

『劇場版 天元突破グレンラガン 螺旋篇』※アニメ（KADOKAWA）脚本：中島かずき 原作：GAINAX 監督：今石洋之

『フライガール』（夢何生）脚本：福岡賢治 上田真之 監督：福岡賢治 出演：岡田苑子 小澤つひ

『女家族』（film_puzzle）脚本：生見司織 監督：中泉裕矢 出演：生見司織 小島彩乃

『まなみ100%』（SPOTTED PRODUCTIONS）脚本：いまおかしんじ 監督：原案：川北ゆめき 出演：青木柚 中村守里

『沈黙の艦隊』（東宝）脚本：高井光 原作：かわぐちかいじ 監督：吉野耕平 出演：大沢たかお 玉木宏

『らんらん』（BLUEMOUNTAIN）脚本：藤井香織 監督：横尾初喜 出演：遠藤健慎 塩田みう

『BAD LANDS バッド・ランズ』（東映、ソニー・ピクチャーズエンタテインメント）脚本：監督：原田真人 原作：黒川博行 出演：安藤サクラ 山田涼介

『almost people』（コギトワークス）脚本：いながきよたか 加藤拓人 守屋文雄 監督：横浜聡子 石井岳龍 加藤拓人 守屋文雄 出演：嶺豪一 柳英里紗

『10月』

『その恋、自販機で買えますか？』脚本：多和田久美 原作：吉井ハルアキ 監督：谷健二 出演：松田 田鶴翔吾

『アンダーカレント』（KADOKAWA）脚本：澤井香織 今泉力哉 原作：豊田徹也 監督：今泉力哉 出演：真木よう子 井浦新

『アナログ』（アスミック・エース、東宝）脚本：港岳彦 原作：ビートたけし 監督：タカハタ秀太 出演：二宮和也 波瑠

『アーバンクロウ』（ツチプロ）脚本：舟崎泉美 原作：鐘下辰男 監督：橋本一郎 出演：橋本一郎 咲貴

『すずらんモントーン』（らんくう）脚本：神村友征 松尾栄佑 原案：松尾栄佑 監督：神村友征 出演：中田圭祐 大原優乃

『白鍵と黒鍵の間』（東京テアトル）脚本：富永昌敬 高橋知由 原作：南博 監督：富永昌敬 出演：池松壮亮 仲里依紗

『親のお金は誰のもの 法定相続人』（イオンエンターテイメント、ギグリーボックス）脚本：小松江里子 監督：田中光敏 出演：比嘉愛未 三浦翔平

『ガールズ&パンツァー 最終章 第4話』※アニメ（ショウゲート）脚本：吉田玲子 監督：水島努

『寛太と、じいちゃんの世直しチャンネル』脚本：監督：芦原健介 出演：外波山文明 番家一路

『まだ君を知らない』（イハフィルムズ）脚本：福岡佐和子 監督：福岡佐和子 はまださつき 出演：はまださつき 高田歩

『たいせつなひと（仮）』脚本：監督：中村公

彦 出演：吉原麻貴 森田このみ

『いまダンスをするのは誰だ?』(アークエンタテインメント) 脚本・原作・監督：古新舜 出演：樋口了一 小島のぞみ

『LONESOME VACATION』(ムービー・アクト・プロジェクト) 脚本：下社敦郎 中野太 監督：下社敦郎 出演：藤江琢磨 水上京香

『過去食う者』(BIG RIVER FILMS) 脚本・監督：船橋淳 出演：辻井拓 久保寺淳

『白石晃士の決して送らないでよ』(ユナイテッドエンタテインメント) 脚本・監督：白石晃士 出演：有川舞衣子 かいばしら

『大雲海のカイナ ほしのけんじや』※アニメ(ソニー・ピクチャーズエンタテインメント) 脚本：村井さだゆき 山田哲弥 シリィズ構成：村井さだゆき 原作：式瓶勉 監督：安藤裕章

『ロストサマー』(889FILM) 脚本・監督：麻美 出演：林裕太 小林勝也

『女子大小路の名探偵』(ラビットハウス) 脚本・原作：秦建日子 監督：松岡達矢 出演：剛力彩芽 醍醐虎汰朗

『SOMEDAYS』(ベストブレーション、刈谷日劇) 脚本：森田剛行 監督：曽根剛 出演：

西尾まう 勇翔

『鯨の骨』(カルチュア・パブリッシャーズ) 脚本：大江崇允 菊池開人 監督：大江崇允 出演：落合モトキ あの

『うかつかと終焉』(マジックアワー) 脚本・監督：大田雄史 出演：西岡星汰 渡辺佑太朗

『キリエのうた』(東映) 脚本・原作・監督：岩井俊二 出演：アイナ・ジ・エンド 松村北斗

『次元大介』(Amazon Prime Video) 脚本：赤松義正 原作：モンキー・パンチ 原作協力：加藤州平 監督：橋本一 出演：玉山鉄二 真木よう子

『ゆとりですがなにか インターナショナル』(東宝) 脚本：宮藤官九郎 監督：水田伸生 出演：岡田将生 松坂桃李

『月』(スターサンズ) 脚本・監督：石井裕也 原作：辺見庸 出演：宮沢りえ 磯村勇斗

『春画先生』(ハビネットファントム・スタジオ) 脚本・原作・監督：塩田明彦 出演：内野聖陽 北香那

『女の仕事』脚本：野火明 木島悠翔 監督：野火明 出演：品田誠 長谷川千紗

『静かに燃えて』(オフィス101) 脚本・監督：小林豊規 出演：とみやまあゆみ 笹木

陽子

『サーチライト 遊星散歩』(SPOTTED PRODUCTIONS) 脚本：小野周子 監督：平波亘 出演：中井友望 山脇辰哉

『シエアの法則』(ガチンコ・フィルム) 脚本：岩瀬顕子 監督：久方真路 出演：小野武彦 貫地谷しほり

『ふまじめ通信』(シネメディア) 脚本・監督：まつむらしんご 出演：宇乃うめの 植田紗々

『Love song』脚本：村川康敏 穴戸英紀 監督：児玉宜久 出演：増田有華 木口健太

『北極百貨店のコンシェルジュさん』※アニメ(アニプレックス) 脚本：大島里美 原作：西村ツチカ 監督：板津匡覧

『おまえの罪を告白しろ』(松竹) 脚本：久松真一 原作：真保裕一 監督：水田伸生 出演：中島健人 堤真一

『愚鈍の微笑み』(春巻号) 脚本・監督：宇賀那健一 出演：田辺桃子 小出薫

『退屈なエンドロール』(OZ) 脚本・監督：井上テテ 出演：奥山かずさ 中里萌

『リゾートバイト』(イオンエンターテイメント) 脚本：宮本武史 原作：日向麦 監督：永江二朗 出演：伊原六花 藤原大祐

『HOSHIS ホシクス』(スリーワイ) 脚

本・監督…横川寛人 脚本協力…酒井健作
共同監督…米山冬馬 佐藤大介 出演…小高
恵美 いしのように

『消えない灯り』(ミカタ・エンタテインメン
ト) 脚本・監督…井上博貴 出演…織田美織
金澤美穂

『JOURNEY』(Cinernago) 脚本・監督…
霧生笙吾 出演…宮崎良太 伊藤梢

『道で拾った女』(ムービー・アクト・プロ
ジェクト) 脚本・監督…いまおかしんじ 出
演…浜田学 佐々木心音

『自宅でありがとつ。さようなら』(グラウ
コープス) 脚本・監督…松岡孝典 原作…高
井義行 出演…津田寛治 星ようこ

『アイドルマスター シャイニーカラス
第1章』※アニメ(松竹ODS事業室) 脚本…
シリーズ構成…加藤陽一 原作…バンダイナ
ムコエンターテインメント 監督…まんきゅ
う

『デジモンアドベンチャーON THE
BEGINNING』※アニメ 脚本…大和屋暁
原案…本郷あきよし 監督…田口智久

『唄う六人の女』(ナカチカピクチャーズ、パ
ルコ) 脚本…石橋義正 大谷洋介 監督…石
橋義正 出演…竹野内豊 山田孝之

『SPEEL 第一章 呪われたら、終わり』

脚本・監督…寺西一浩 出演…寺西優真 大
村寛

『ラスト17デー』 脚本…浅田佳子 監督…片山
拓 出演…高梨優佳 木村魁希

『僕らの千年と君が死ぬまでの30日間』(東映
ビデオ) 脚本…保坂大輔 監督…菊地健雄
出演…辰巳雄大 浜中文一

『こいびとのみつかけかた』(ジョーカーフィ
ムズ) 脚本…高田亮 監督…前田弘二 出演…
倉悠貴 芋生悠

『愛にイナズマ』(東京テアトル) 脚本・監督…
石井裕也 出演…松岡茉優 窪田正孝

『海鳴りがきこえる』(ブライトホース・フイ
ルム) 脚本・監督…岩崎孝正 出演…中村守
里 内村遥

『近くて遠い親子』(エムエフピクチャーズ)
脚本・監督…田中慎太郎 出演…ジョニー門
倉 立仙愛理

『オカルト地蔵』※オムニバス(カッシー)
脚本…中沢健 監督…夏目大一期 杉本末男
唐澤一路 出演…中沢健 唐澤一路

〔11月〕

『ナックルガール』※日本、韓国 (Amazon
Prime Video) 脚本…ユ・ガビヨル チョン・

ビョンシク 小島聡一郎 原作…Jostreet
Daywalker (Sang Jin Yoo) 監督…チャン 出
演…三吉彩花 前田公輝

『ジ・ラ・1.0』(東宝) 脚本・監督…山崎貴
出演…神木隆之介 浜辺美波

『映画 すみっコぐらし ツギハギ工場のふ
しぎなコ』※アニメ(アスミックエース) 脚
本…角田貴志 原作…サンエックス 監督…
作田ハズム

『おしよりん』(KADOKAWA) 脚本…関
えり香 児玉宜久 原作…藤岡陽子 監督…
児玉宜久 出演…北乃きい 森崎ウィン

『人生に詰んだ元アイドルは、赤の他人の
おっさんと住む選択をした』(日活、KDD
I) 脚本…坪田文 原作…大木亜希子 監督…
穂山茉由 出演…深川麻衣 松浦りょう

『さよなら ぼやマン』(シグロ、ロングライ
ド) 脚本・監督…庄司輝秋 出演…アフロ 呉
城久美

『火の鳥 エデンの花』※アニメ(ハピネット
ファントム・スタジオ) 脚本…真野勝成 木
ノ花咲 原作…手塚治虫 監督…西見祥示郎

『夜風に吹かれて もつひとつの日光物語』
(ワンシーン) 脚本・監督…五藤利弘 出演…
スネオヘアー 万登香

『ダウンタウン・ユートピア』(ウッディ) 脚

本・監督…大塚祐吉 出演…吉本実愛 木村圭作

『恐解釈 花咲か爺さん』(OSOREZONE、エクストリーム) 脚本…浦崎恭平 川崎一真

監督…浦崎恭平 出演…森みはる 西川風花

『かぞく』(アニプレックス) 脚本・監督…澤寛 原作…土田世紀 出演…吉沢亮 永瀬正敏 小栗旬

『あっちこっちじゃあにー』(シネマ健康会) 脚本・監督…松本卓也 出演…松本卓也 ゆず

『二人静か』(インターフィルム) 脚本…中野太 監督…坂本礼 出演…西山真来 水澤伸吾

『あずきと雨』(BOTA) 脚本…久保寺晃一 監督…隈元博樹 出演…加藤紗希 秋枝一愛

『青すぎる、青』(アイエス・フィールド) 脚本…小林弘利 監督…原案…今関あきよし 出演…上大迫祐希 原愛音

『生きない』(ベストブレイン) 脚本…長棟航平 堤健介 監督…蓮田キト 出演…高木勝也 久獅

『ブルー・ウインド・ブローズ』(テツヤトミナフィルム) 脚本・監督…富名哲也 出演…内田也哉子 田中日月

『法廷遊戯』(東映) 脚本…松田沙也 原作…五十嵐律人 監督…深川栄洋 出演…永瀬廉 杉咲花

『MOON CHILD』(松竹) 脚本…GACKT 出演…敬久 井土紀州 監督…瀬々敬久 出演…HYDE GACKT

『正欲』(ビターズ・エンド) 脚本…港岳彦 原作…朝井リョウ 監督…岸善幸 出演…稲垣吾郎 新垣結衣

『ガールズドライブ』(キグー) 脚本…井上テテ 監督…宮岡太郎 出演…小栗有以 山内瑞葵

『ハミシンシンキング』(チーム谷四) 脚本…西岡真博 益山貴司 原作…益山貴司 監督…西岡真博 出演…松本真依 寺井竜哉

『SPELL 第二章 呪いは、終わらない』 脚本・監督…寺西一浩 出演…寺西優真 大村崑

『銀魂オンシアター2D バラガキ篇』※アニメ(バンダイナムコピクチャーズ) 脚本…大和屋暁 横手美智子 下山健人 原作…空知英秋 監督…藤田陽一

『TOKYO LOVE YOU』(ナカチカピクチャーズ) 脚本・監督…中島央 出演…山下幸輝 松村龍之介

『4日間 FOUR DAYS TOKIO』(ミッドルウエスト) 脚本・監督…中西健二 出演…尾碕真花 池田航

『駒田蒸留所へようこそ』※アニメ(ギャガ) 脚本…木澤行人 中本宗応 原作…KOMI復活を願う会 監督…吉原正行

『花腐し』(東映ビデオ) 脚本…荒井晴彦 中野太 原作…松浦寿輝 監督…荒井晴彦 出演…綾野剛 柄本佑

『Me? Xavier! (ミー?ザビエル)』※ミュージカル(カエルカフェ) 脚本…落合雪恵 監督…秋原北胤 出演…真島茂樹 坂元健児

『ゆりに首ったけ』(リアルメーカーズ) 脚本…宮本剛徳 監督…中泉裕矢 出演…吉川流光 山下徳久

『映画(窒息)』(トラヴィス) 脚本・監督…長尾元 出演…和田光沙 飛葉大樹

『きのう生まれたわけじゃない』(フライトホース・フィルム) 脚本…原案・監督…福岡健二 出演…くるみ 福岡健二

『クレイジークルーズ』(Netflix) 脚本…坂元裕二 監督…瀧悠輔 出演…吉沢亮 宮崎あおい

『鬼太郎誕生 ゲゲゲの謎』※アニメ(東映) 脚本…吉野弘幸 原作…水木しげる 監督…古賀豪

『OUT』(KADOKAWA) 脚本・監督…

品川ヒロシ 原作・井口達也 みずたまこと
出演・倉悠貴 醍醐虎汰朗

『ファンファーレ』(Atemo) 脚本・吉野竜平
戸梶美雪 監督・吉野竜平 出演・水上京香
野元空

『コーボ・ア・コーボ』(ギグリーボックス)
脚本・近藤一彦 原作・岩浪れんじ 監督・
仁同正明 出演・馬場ふみか 東出昌大

『車軸』(CHIPANGU) エレファントハウス)
脚本・監督・松本准平 原作・小佐野弾 出
演・矢野聖人 錫木うり

『ぬくもりの内側』脚本・原案・監督・田中恵
征 出演・白石美帆 三田佳子

『曖昧な樂園』(曖昧な樂園製作委員会) 脚
本・監督・小辻陽平 出演・奥津裕也 リー
正敏

『東京遭難』(GOLD FISH FILMS.
LIVEUP) 脚本・監督・加藤綾佳 出演・木
原勝利 秋谷百音

『シンデレラガール』(ミカタ・エンタテイメ
ント) 脚本・脇坂豊 緒方貴臣 監督・緒方
貴臣 出演・伊礼姫奈 辻千恵

『クオリア』(D-film) 脚本・賀々賢三 原
作・越智良知 監督・牛丸亮 出演・佐々木
心音 石川瑠華

『演者』(うずめき) 脚本・監督・小野寺隆一

出演・藤井菜魚子 河原幸子

『翔んで埼玉 琵琶湖より愛をこめて』(東
映) 脚本・徳永友一 原作・魔夜峰央 監督・
武内英樹 出演・GACKT 二階堂ふみ

『攻殻機動隊 SAC 2045 最後の人間』※ア
ニメ(バンダイナムコフィルムワークス) 脚
本・神山健治 檜垣亮 砂山藏澄 土城温美
佐藤大 大東大介 原作・士郎正宗 監督・
藤井道人

『劇場版 シルバニアファミリー フレアか
らのおくりもの』※アニメ(イオンエンター
テイメント) 脚本・小林弘利 原案・エポッ
ク社 監督・小中和哉

『首』(東宝、KADOKAWA) 脚本・原作・
監督・北野武 出演・ビートたけし 西島秀
俊

『劇場版 ボールプリンセス!!』※アニメ 脚
本・待田堂子 原作・エイベックス・ピク
チャーズ タツノコプロ 監督・江副仁美

『マイマザーズアイズ』(ギグリーボックス)
脚本・監督・串田壮史 出演・小野あかね
設楽もね

『水いらずの星』(フルモテルMhr HERZ)
脚本・監督・越川道夫 原作・松田正隆 出
演・梅田誠弘 河野知美

『イルカはフラダンスを踊るらしい』

(POPBORN) 脚本・吉岡純平 監督・森田亜
紀 出演・片田陽依 福井裕子

『めためた』(マーブルダンス) 脚本・新井秀
幸 監督・鈴木宏侖 出演・新井秀幸 和座
彩

『ほかげ』(新日本映画社) 脚本・監督・塚本
晋也 出演・趣里 森山未來

〈12月〉

『青春ブタ野郎はランドセルガールの夢を見
ない』※アニメ(アニプレックス) 脚本・構
成・横谷昌宏 原作・鴨志田一 監督・増井
壮一

『怪物の木こり』(ワーナー・ブラザース映
画) 脚本・小岩井宏悦 原作・倉井眉介 監
督・三池崇史 出演・亀梨和也 菜々緒

『在りのままで進め』脚本・桑江良佳 原案・
水村美咲 監督・松本勲 出演・水村美咲
八木橋聡美

『右へいってしまっただ人』(REGENTS) 脚
本・監督・堂野アキノリ 出演・平松賢人
高田夏帆

『MYKNIGHT マイ・ナイト』(松竹) 脚
本・監督・中川龍太郎 出演・川村壱馬 R
IKU

『光る校庭』 脚本・監督…比嘉一志 出演…梅垣然太 笹木祐良

『朝がくるとむなしくなる』(イチタイム) 脚本・監督…石橋タ帆 出演…唐田えりか 芋生悠

『女優は泣かない』(マグネタイズ) 脚本・監督…有働佳史 出演…蓮佛美沙子 伊藤万理華

『隣人X疑惑の彼女』(ハピネットファントム・スタジオ) 脚本・監督…熊澤尚人 原作…パリュスあや子 出演…上野樹里 林遣都

『4つの出鱈目と幽霊について』(GBG Productions) 脚本…三宅一平 山科圭太 監督…山科圭太 出演…小川あん 斉藤陽一郎

『ホゾを咬む』(second cocoon) 脚本・監督…高橋栄一 出演…ミネオショウ 小沢まゆ

『ふたりの傷跡』 脚本・監督…野田英季 出演…八木みなみ 佐久間遼

『他人と一緒に住むという事』(群像) 脚本・監督…八木橋努 出演…森田コウ 芦那すみれ

『18歳のおとなたち』(レイワジャパン) 脚本…磐木大 監督…佐藤周 出演…兵頭功海 三原羽衣

『恐解釈 桃太郎』(OSOREZONE) エクストリーム 脚本・監督…鳴瀬聖人 出演…早河

ルカ 仁科貴

『マリの話』(ドゥヴィネット) 脚本…高野徹丸山昇平 監督…高野徹 出演…成田結美 ビエール瀧

『彼方の閃光』(ギグリーボックス) 脚本…半野喜弘 島尾ナツヲ 岡田亨 原案・監督…半野喜弘 出演…眞栄田郷敦 池内博之

映画『怒ぎわのトットちゃん』※アニメ(東宝) 脚本…八锹新之介 鈴木洋介 原作…黒柳徹子 監督…八锹新之介

『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』(松竹) 脚本…山浦雅大 成田洋一 原作…汐見夏衛 監督…成田洋一 出演…福原遥 水上恒司

『市子』(ハピネットファントム・スタジオ) 脚本…上村奈帆 戸田彬弘 監督・原作…戸田彬弘 出演…杉咲花 若葉竜也

『光る鯨』(studio solars) 脚本・監督…森田博之 出演…関口蒼 佐野日菜汰

『劇場版 乙女ゲームの破滅フラグしかない悪役令嬢に転生してしまった…』※アニメ(アスミック・エース) 脚本…清水恵 笹野恵 原作…山口悟 構成…清水恵 監督…井上圭介

『物体 妻が哲学ゾンビになった』(Cinemago) 脚本・原作・監督…伊刀嘉紘

出演…菅勇毅 門田麻衣子

『王国(あるいはその家について)』(コギトワークス) 脚本…高橋知由 監督…草野なつか 出演…澁谷麻美 笠島智

『ブルーを笑えるその日まで』(映日果人) 脚本・監督…武田かりん 出演…渡邊心結 角心菜

『Stating Over』(ストレイドックピクチャーズ) 原作・脚本…佐藤史久 監督…森川圭 出演…勇翔 山下リオ

『屋根裏のラジャー』※アニメ(東宝) 原作…A・F・ハロルド 監督…百瀬義行

『Polar Night』(フルモテルモ・The HERZ) 脚本…磯谷渚 高橋洋 監督…磯谷渚 出演…河野知美 峰平朔良

『DAUGHTER』(SAIGATE) 脚本…宇咲海里 監督…菅野祐悟 出演…竹中直人 関川ゆか

『未帰還の友に』(トラヴィス) 脚本…大隅充福問雄三 原作…太宰治 監督…福問雄三 出演…窪塚俊介 土師野隆之介

『6%、いつも曇り』(35 Films Parks) 脚本・監督…瑚海みどり 出演…瑚海みどり 二階堂智

『The Night Before』(nulavayn) 脚本…常問地裕 監督・原作…堀井綾香 出演…福地

桃子 青木柚

『あみはおぼけ』(バル企画) 脚本・原作・監

督…今野基成 出演…小橋めぐみ 浅田芭路

『心のありか』(ACRAFT) 恋のや) 脚本 監

督…上原三由樹 出演…及川奈央 鳥谷宏之

『Good Luck My Road』(プロダクシオン

ガレージ) 脚本…長崎邦彦 監督…中村英児

出演…安藤勇雅 井筒しま

『エターナルラブが蔓延した日』 脚本・監督…

長谷川千紗 出演…長谷川千紗 後藤龍馬

『阿彦哲郎物語 戦争の囚われ人』※カザフ

スタン、日本 (Studio-D japan) 脚本…佐野

伸寿 監督…佐野伸寿 エルダル・カバロー

フ アリヤ・ウバリジヤノバ 出演…小笠原

瑛作 スルム・カシユカバエフ

『死が美しいなんて誰が言った』※アニメ(ト

リプルアップ) 脚本…都築隆広 本庄麗子

原案…廣津里香 監督…中島良

『劇場版 SPY×FAMILY CODE :

White』※アニメ(東宝) 脚本…大河内一樓

原作…遠藤達哉 監督…片桐崇

『PERFECT DAYS』(ピターズ・エンド)

脚本…ビム・ペンダース 高崎卓馬 監督…

ビム・ペンダース 出演…役所広司 柄本時

生

『なんでかねゝ鶴見 ガーエーにはまだ早

い』(リバーストーン) 脚本・監督…渡辺熱

出演…比嘉秀海 かーなー

『火たるま槐多よ』(渋谷プロダクシオン) 脚

本…夢野史郎 監督…佐藤寿保 出演…遊屋

慎太郎 佐藤里穂

※掲載は主な劇場公開作品。一部、配信作品含む

日本シナリオ作家協会
「'23年鑑代表シナリオ集」出版委員会

向井康介 (長)
荒井晴彦
いながききよたか
印東由紀子
里島美和
篠崎絵里
長谷川隆
松下隆一
吉村元希

ねんかんだいひょう しゅう
'23年鑑代表シナリオ集

2024年7月31日 初版発行

編 者 日本シナリオ作家協会
「'23年鑑代表シナリオ集」出版委員会

発行所 日本シナリオ作家協会
〒103-0013
東京都中央区日本橋人形町 2-34-5
TEL 03(6810) 9550
©2024 Printed in Japan
ISBN 978-4-907881-14-6

落丁・乱丁本はお取り替えます。

